

# 黒死の刃

みくりあ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦国時代から鬼になるまで何してたんやろって思ったんで描きました。

祝 人道編 完結

← 煉獄薫

← 注・ネタバレ

人道編エピソード後・薫

ご利用させて頂いたサイト。

「テイク式女キヤラメーカー」

<https://picrew.me/image-maker/407340>

# 目次

## 人道編

プロローグ | 1

壱話 継国縁壱 | 8

弐話 弟という存在 | 16

参話 与えてくれた形（縁壱視点）

29

肆話 虧月と静寂 | 39

伍話 自覚 | 56

陸話 呼吸そして野営 | 67

漆話 鬼殺隊 | 81

人物紹介 | 95

捌話 安息を遮る怪鳥 | 99

玖話 鬼殺の里 | 117

拾話 柱の実力 | 132

拾壱話 今更すぎる最終選別 | 149

拾弐話 継国巖勝という男と煉獄薫と

いう女 | 169

拾参話 縁壱のその頃 | 192

拾肆話 再会 | 201

拾伍話 秀才が天才に届くために

214

拾陸話 真剣勝負 | 229

拾漆話 戦国初期の刀鍛冶の里

247

拾捌話 輝きは赫月・あかつき・が如

拾玖話	邂逅	290	廿玖話	絶対的正義・下	449
廿話	兄弟で共闘	302	廿話	誰がために振るう刃	479
廿壹話	日柱の道場	318	廿壹話	鬼子母神	509
廿弍話	水面下（ヒロイン＋縁壹視 点）	334	廿弍話	太陽の具現と鬼の始祖	526
廿参話	月を照らす日輪	350	廿参話	決別の時	546
廿肆話	月下の語らい	365	エピローグ		572
廿伍話	四年後	379	間章		
廿陸話	竈門家	392	話	めでたしめでたし	593
廿漆話	ひとたびの別れと凶報		狂愛		626
407			鬼の娘	序	665
廿捌話	絶対的正義・上（房綱視点）		鬼の娘	破	688

	鬼の娘 急	711	漆話 荒ぶる罪の拳	888
	上弦集結編		捌話 永遠を誓う	908
	猗窩座の章 プロローグ	729	猗窩座の章 エピローグ	933
	壹話 春夏終冬	779	童磨の章 プロローグ	948
	弐話 招かれざる客	797	第壹話 自己嫌悪（童磨視点）	
	参話 素流道場の日常・上（狛治視点）	816	957	
	肆話 素流道場の日常・下（狛治視点）	831	第弐話 邂逅	968
	伍話 我儘（恋雪視点）		第参話 萌芽	980
872	陸話 横顔照らすは夜の華		第肆話 子供達	997
855				

# 人道編

## プロローグ

—— 何だ

身体に……力が有り余る……これは……？

---



「お疲れ様でしたあ……」

「……お疲れ様」

結城陸斗は疲れきって顔色の悪い部下を横目に溜まった仕事をこなす。たった今帰った部下を恨めしそうに見た。世渡り上手でどこか憎めない男だった。

「……」

残業で彩られた夜景が窓の外に映る。夜の太陽のような輝きは深夜だと言うのに収

まる気配を見せない。

陸斗はブルーライトを放つパソコンを凝視しながらやれと言われた仕事を機械のようになんたただやり続けていた。今日で七連勤。当然の如くまとまった休みはとれない。とらせてもらえない。荒んだカッターシャツは帰っても洗濯する時間はないのでフア○リーズで服の洗浄は済ませている証拠。欲は人並みだと自負しているが彼女もおらず、風俗で発散させる暇もない。旅行に行ったのは何年前だったか。と言っても予算の大半を彼のクソ上司への土産に消費して、陸斗自身は低予算で楽しむしか無かった。土産を買って媚びを売っておけば、どこかで得するのは経験から知っていた。かと言って退屈かと言えばアニメや漫画があるのでそうとも言いきれない。

至って普通の人生。

「頑張れ俺、お前は出来るやつだ」

ベチンと、頬を両手で叩いて眠気を吹き飛ばす。陸斗は最近「鬼滅の刃」を読破し、アニメも全部見て絶賛どハマリしている。そのためこうしてたまにセリフが口から出てしまう。今も尚彼の頭の中では主題歌がBGMとして鳴り響いている。仕事人間の彼からすれば数少ない娯楽であり、抛り所とすることで過酷な仕事ですら頑張れる。

陸斗がふと目を画面から逸らすと、パソコンの縁に見知らぬメモ書きが貼つてあるのを発見した。発見してしまった。



「信じられぬものを見た……」

上司からの覚えにないタスク。残業確定。

クソ課長当たりが自分の仕事を押し付けて来たのだろう。無視すれば怒られるのは自分である。しかし慣れたものである。実際彼の仕事量と質は平社員のそれではない。これで今夜も徹夜が確定する。

「だがっ！ 残業した程度では、赤子でも死なぬう！」

時刻は既に深夜2時過ぎ。故に陸斗の奇行を目撃するものはいない。

陸斗のデスクだけに灯りが点いており、会社は闇に包まれて不気味だが陸斗にとつては見慣れた暗闇であった。何処かに監視カメラがついているわけもないので、彼が狂ったように一番好きなキャラのセリフを話しても大丈夫なのだ。目撃者は誰一人いない。陸斗の推しは上弦の壺・黒死牟であった。

「やっぱり黒死牟様が一番カッコイイよなあ……！ 縁壺さんもかつこいいけど、こう闇堕ちして強くなつたっていう感じがもう……サイコーだよなあ……！ 原作でもう少し掘り下げてくれてもよかつたのに……」

上弦の壺・黒死牟

六つある目、弟よりも広範囲に渡る痣。鬼滅の刃に出てくる鬼は『血鬼術』と呼ばれ

る物理法則などを完全に無視した攻撃や毒や麻痺などを使用してくる。しかしながらほぼ唯一物理攻撃のみを使用し、原作に出てくる鬼の中でも一二を争う強さを持ち、しかも人間だった頃は主人公達と同じ鬼殺隊の一員で闇落ちして鬼になったという重い過去も持つ人間味のある設定。ネット上では『なんで勝てたか分からない』『もうお前がラスボスでいいよ』等と言われる鬼。

それが陸斗が今熱を上げているキャラ、黒死牟である。



「帰る………つてなんだ?」

陸斗は深夜テンション且つ語彙力と理性が欠如した頭で帰り支度をしている。残業へ漫画は彼の信条であり、残業を無視する方向に決めた。あとはもう帰るだけなので、頭を空っぽにして妄想の続きに耽つてもいいのだ。

これで頭もそんなに悪くないのだから、変人は賢いという仮説はあながち間違つてないのかもしれない。

「さあ………家に帰ったら新しい漫画にも手を出してみるかあ………う………あれ………?」

帰宅しようとした陸斗を強い眠気が襲う。抗えない脱力感に脚を折った。心が浮き立つような心地が身体中を包み込んだ。

(なんだ……？ もしかして……身体が逝っちゃまったのか？  
それにしても苦し……くはない。というよりむしろ……)

瞬間——彼はその場から消失した。

---

視界が開ける。目の前に屋敷がある。太陽が煌々と輝いている。晴れだ。服が少し重い、着物を着ている。腰に差してあるのは本物の刀。雨上がりのようだ。体が徹夜続きなのに怠くない。

次々と頭の中に入ってくる情報。遠くの景色が鮮明に見え、葉先から滴り落ちる雫が水たまりに落ちる音が聞こえた。どうやら五感も眠る前より鮮明になっているようだった。

(ど、どういうことだ!? 一体何が起こっている!?)

陸斗だったものは混乱の真っ只中でありながら、眠る前の疲れきった体から抜け出した開放感に高揚していた。まるで柔らかい布団で快眠できたかのようなだった。

とりあえず、水溜まりをのぞき込んだ。

「え?」

そこに居たのは陸斗ではなかった。

男子にしては長い髪を無造作に後ろで括り、ぶっきらぼうな目付きではあるものの前の人生よりは精悍で整った容姿であると断言できる顔。成長すれば美丈夫になること

間違いないだろう。そして誰なのかわかりやすい顔であった。

それは寸分違わずつい先程まで妄想の中にいた存在。

彼は黒死牟……いや、鬼になる前の継国巖勝であろう人物になっていた。

# 壺話 継国縁壺

「よっしやあああああ!!!」

眩いほどの晴天に、年齢<sup>!</sup>にしては少し低い叫び声が響き渡る。声色は喜色に満ち満ちていた。

転生してから少しして頭の混乱が落ち着いた頃、状況を把握した陸斗は叫んだ。それはもう声の続く限り。何せ大好きな漫画の大好きなキャラに転生したのである。オタクなら誰しも夢見るシチュエーション。これが喜ばずにいられるか。

「……はあ……はあ…………ふうふう……まずは落ち着いて整理しよう」

時間を忘れるほどさげんで尚、陸斗……いや巖勝は冷静だった。これが前世で転生小説を読んでいた恩恵なのか、はたまたこの体に本来から備わっている精神力なのか。

巖勝は前者だと推測した。とりあえず落ち着いて原作の流れを確認する。不思議なことに記憶は混ざりあつて安定しており、混乱は少なかった。

「……今は戦国時代初期、これから戦乱の世が始まる。この程度で焦っているようじゃ私のようなぬるま湯に浸かった現代人は生き残れないだろう、原作通りならば元々の肉体は弟の才能に嫉妬していた……どうやら色々コンプレックスを抱え込んでいるよう

だ……」

——その人間らしさも魅力の一つだが

「……思考が逸れた、とりあえず今わかることを整理しよう

私の名前は継国巖勝。年齢は十くらい……。公式チートの弟を持つまあまあ位の高い武家の子である。剣の才が開花した弟に加え跡継ぎ問題や母上の病気が精神を蝕みながらも暮らし、弟が家を出て行ったが、何年か経って、弟と再会した後2人で鬼狩りとして生きる。……そして鬼となり、弟が無惨と対決してる間に当代の産屋敷を殺し、十二鬼月の上弦の壺として400年間君臨し、大正時代あたりで原作が始まり、最期は風柱と岩柱達によつて殺される……

……なんとまあ……」

巖勝は空を仰いだ。これから我が身に降りかかる災難を鑑みるとどうしようもないと思つてしまう。命が紙よりも軽く争いの絶えない世の中。街道から逸れれば、野盗に襲われる確率が格段に上昇する。そんなことせずとも武家である継国家の跡取りなのだから戦場に駆り出されるだろう。さらに、鬼とも戦わなければならぬのだ。鬼の力

の前に人は無力である。人を超える身体能力はもちろんのこと、人が一番無防備な夜間に活動し、戦ったところで普通の刃では太刀打ち出来ない。

死亡フラグが乱立している今。巖勝の人生はかなりハードモードである。

「しかし、どの道強くならねば生きられない世の中。強くなるのだ。話し合いで解決できる時代ではない。強くなる為には……」

「兄上……?」

巖勝はハツとした。



「継国巖勝」を兄上と呼ぶ人物なぞ一人しかいない。まだあどけなさの残る顔と声で物陰から兄の顔色を伺う巖勝の実の弟。継国縁壱である。

気の弱そうな見た目とは裏腹に中身は剣の道において天賦の才能を持つ化け物であり、生まれつきながら、選ばれたものしか発現出来ない痣をその身に宿す。始まりの呼吸「日の呼吸」と赫刀を用いて、無惨を単騎で瀕死に追い詰めることの出来る唯一無二の存在。

原作「鬼滅の刃」において、紛うことなき最強キャラ。それが巖勝の弟、継国縁壱だ。そして巖勝が鬼になる理由でもある。

「……縁壱か、ここで何をしている、父上に見つかれば叱られるだけでは済まないぞ」「申し訳ありません。……しかしそれは承知の上。心に絶望を滲ませながら空を見上げる兄上の姿を見かけたので、何か気になることでもあったのではないかと思ったのです」

凶星。原作で巖勝が気持ち悪かったのも納得。気配もないのに気づけばそこにいる。当たり前のように心を読んでくる。

「……しかしだな……」

縁壱の額には炎のような赤い跡。痣者の証である。肉体の記憶からすると原作通り、親に虐待紛いのことをされているようだ。縁壱は至極当然の事として受け入れている

からさらに気味が悪い。そして明らかに呼吸の音も違う。

……ブラコンオーラを隠しきれていないどころか余すところなく漏れだしているのも原作通りである。

(……………ん？ ……待てよ……………強くなれる簡単な方法がある……………！ 縁壺に教えてもらえば良い！ 幸いなことに精神は前世に引つ張られてるからプライドなんてないよ  
うなものだ。縁壺に呼吸法や赫刀のやり方を教えて貰って！

……………そうすれば……………鬼にならなくても……………！ ならなくても——)

巖勝はそこで単純な思考を止める。冒頭からわかる通り、彼の好きなキャラは「黒死牟」であり、もちろんそうなるためには継国巖勝である自分が鬼にならなくてはならない。鬼になるにはラスボスである鬼舞辻無惨から血を貰わなければならない。もちろん鬼になれば主人公達の所属する鬼殺隊から目の敵にされること間違いないだろう。

また鬼にならなければ痣者であるがために二十五を迎える前に死亡してしまう。痣は寿命の前借りなのだ。これは第二の生を得た巖勝にとってかなりの痛手であった。易々と生を諦めることは出来なかった。

(そして、月の呼吸の漆の型までしか振れなくなる……………)

月の呼吸は作中で最も型の多い呼吸法である。黒死牟のみが使える呼吸であり、巖勝が独自に生み出したものである。人間であった時も使用していた。

壺ノ型 闇月・宵の宮

貳ノ型 朱華ノ弄月

参ノ型 厭忌月・鎖り

肆ノ型 (原作にないから分からない)

伍ノ型 月魄災禍

陸ノ型 常世孤月・無間

漆ノ型 厄鏡・月映え

原作通りならば自らの血と肉でできた三又に枝分かれした刀「虚哭神去」がなければ捌の型以降は出せないかもしれないのだ。しかも原作で描写すらされてない型もある。そこは自分で考えなければならぬ。

捌ノ型 月龍輪尾

玖ノ型 降り月・連面

拾ノ型 穿面斬・羅月

拾肆ノ型 兇変・天満織月

拾陸ノ型 月虹・片割れ月

血鬼術と月の呼吸を合わせた拾陸までの型すべてを使いたいのならば、鬼になるのが最低条件となってしまう。せつかくの転生、鬼化を拒否してあと十年程度で死ぬのは御免であった。

（——決めた。私は鬼になる。そして生き延びる。そのためには……）

巖勝は縁壺を見つめた。縁壺は表情一つ変えない。だが巖勝には分かる。目の前の弟は今巖勝が感じているもの以上の情報を得ている。人離れした感覚とはそういうものだ。

生き残るために巖勝にはその感覚が必要だった。

「……兄上……？ ……どうなさいましたか？ ……私はなにか兄上の気に障ることでもっ？」

「いや気にするな。……時に縁壺、お前には私を凌ぐほどの剣の才がある……と思う。そしてその特異な呼吸法。これらを私に教えて欲しい」

巖勝は縁壺に問いかける。少し言い方が丁寧なのは前世のサラリーマンの自分に引つ張られているからであろうか。

縁壺は狼狽えた。

「……そんな！ 兄上より才能があるなどと……！」

「……紛うことなき事実だ。私も受け入れている。侍として常に鍛錬は欠かせぬ。……故にお前の助けを借りたいのだ」

「！ 兄上が……私の……助けを！」

「……ああ構わないか？」

「もちろん！ もちろんです！ 兄上！」

（ちよろい。いや、純情といえはいいのか）

縁壺の瞳には欠片も傲慢や優越感を感じられず、ただ兄の役にたてるという幸福に輝いていた。善意百パーセントである。不安だったが無事に了承してもらい、巖勝は全力で喜びたい衝動を抑えて問いかける。

「早速だが、お前のこきゆ……」

「縁壺、何をしている!?」

（………なんだ、今私は死亡フラグ回避に忙しいというのに）

響く怒鳴り声が青空に嫌という程ひびきわたる。なまじ武士の当主であるだけに、威厳の籠った声だった。縁壺に対する嫌悪感に染め上がっている。

継国巖勝と継国縁壺の父である。

## 弑話 弟という存在

早朝。

巖勝は曇天の下を歩いていった。仄暗い朝日が気持ち悪い輝きを放つ。湿った空気が着物をべたつかせ、不快感に眉をひそめた。とは言つても巖勝が不快なのは天気だけのせいでは無い。

(そうだよな。この家庭において疎まれてる弟と次期当主の兄が会っていたらこういうことくらいわかっていたさ)

父親に連れられて元の廃屋に閉じ込められた縁壺。抵抗はせずとも最後まで申し訳なさそうに巖勝を見つめていた。母親は既に世を去っており、記憶からすると巖勝は既に双六や凧揚げを教えていたらしい、無論哀れみからであるが。幼い子供に対してやりすぎではないかと現代の記憶が判断しようとするが、戦国の世だと至極当たり前では無いかと思つた。だが不快感は拭えない。

巖勝が縁壺を呼び出したら十中八九父親に連れ戻されてしまうため、今度は巖勝自身から赴くことにしたのである。

(まあいい、人が嫌って近寄らないのは好都合。……しかし稽古してもらおうついでに原

作通りに笛を作ってみたはいいものの……どうなのだろうか)

縁壺が隔離されているのはいかにもな廃屋である。閉じ込めるためにあるので勝手に出ていくのは困難な筈のだが、やはりここは公式チート。先程はどうにか抜け出したようだ。巖勝は作った笛を片手でくるくると回しながら、呼吸を教えて貰いに弟の待つ廃屋へと向かっていた。

ちなみに巖勝は前世の才能も相まって手際がいい。原作とは違ってしつかりと音のなる笛を作ることに成功していた。

(何せ教えてもらうのだからな、これくらいの手間は許容範囲だ。

……なんならまた双六や凧も持って行ってやろうか、一緒に遊んでやればさぞ喜ぶだろう)

巖勝はまだこの時代にはないランプや、人生ゲームでも作ってやろうかと思いつながら歩みを進めた。何せ遊び相手がいないし、毎日稽古ばかりでは効率が悪い。息抜きが必須なのだ。そうしているうちに廃屋についた。

「……廃屋というよりは、小屋だな」

人がひとり住むにはあまりに粗末、所々壊れかかっているのは手入れが行き届いていないからである。……そもそも手入れする人のかすらも定かではないのだ。縁壺の扱いはその程度のもの。巖勝はより不快感を顕にした。

外からしか開かない扉を開けて中に入る。不気味なくらいに静かな中、既に正座で縁壺が待ち構えていた。目が合った。巖勝は恐怖を感じる。確実に巖勝が近づいてくる気配を察知して準備していたのだ。

「……縁壺。参つたぞ……」

立場は巖勝の方が上。縁壺もそれを受け入れている。

「兄上！ 態々御足労頂きありがとうございます！ 稽古の件。この縁壺に全てお任せ下さい！！」

縁壺は目を輝かせ、兄の役に立てることを心の底から喜んでいた。兄のことになると少しは感情が浮かび上がる。巖勝には縁壺の背後に見えないはずの尻尾が勢いよく振られているのを幻視した。

「そ、そうか。……ならば早速始めよう。……まずはその独特な呼吸法を教えてください」

巖勝は逸る気持ちを感じていた。今日はなんの予定もない。父親は急用のために城に出かけた。これで邪魔が入ることなく稽古に集中できるのだ。縁壺の呼吸を学ぶことによつて回復力の促進や、身体能力の活性化が可能になり、尋常ではない力を振るえるようになる。縁壺のようににはならずとも、あの黒死牟のような剣技を使うことができる。それが巖勝には楽しみで堪らなかった。

（よし、やっと鬼滅の醍醐味にありつける！）



意気揚揚としている巖勝を他所に、縁壺は外へと出ていく。巖勝は口頭伝授では無いのかと困惑しながらもついて行く。

「兄上。まずは……走りましょう！」

「……………走る？」

「はい！　まずは肺を大きく力強く力強くするのです！　見たところ、私の肺と兄上の上では大きく違っているのです！」

簡単に言えば巖勝の肺は弱すぎるというのだ。勿論方に一つも縁壺に悪気はないし、そんなことは巖勝もわかっているのですんなりと受け入れる。

「わかった。しかし家の者に見つかっては面倒だ。……裏山を走るぞ」

巖勝はシンプルな方法に戸惑いはしたものの納得した。

鬼滅の刃での呼吸とは肺を大きくして、空気を取り込み、酸素を身体中に送ることで爆発的な力を得る方法であった。その状態で刀を振るうことで鬼すら殺す一撃となる

のだ。とりあえず走って肺を大きくするのは理にかなっている。

そしてもうひとつ、すんなりと受け入れた理由があつた。

(この身体の限界も知っておきたいしな)



「……………はあ……………はあ……………思ったよりも体のスペックは高そうだ」

「……………兄上？ ……その……………すべつく？ とはなんででしょうか」

「……………あー……………性能の事だ。あまり気にするな」

「成程、勉強になります」

空気の薄い裏山の山頂。山を走るのは主人公の修行を彷彿とさせた。

巖勝は自分の体の壮健さに驚いていた。早朝に走り始め、現在の時刻は正午過ぎ。ゆうに六時間半近く走り続けていたことになる。それも休み無しで。肉体は子供に変わらないが、公式チートキャラの兄。身体能力は伊達ではなかった。加えて巖勝は鬼にすらなっていない体で斬撃を飛ばせるようになる剣士。

彼もまた天賦の才能を持っていると言っても過言どころか、縁壺ほどではないにしろ化け物クラスであった。もちろん縁壺は息一つ切らしていない。

(もしかして縁壺並にチートキャラなのでは?)

ふと湧いた疑問をかき消す。今はそんなことを考えるほどの余裕がない。汗が体からとめどなく溢れてくる。体の底から熱が絶えず放たれている。シャワーならぬ、水浴びでもしたいところだった。

「兄上。……休みましょうか? 見たところ肺への負荷が深刻です」

「……いや、続けろ。……はあ……ふう……肺は痛いのがのうち回るほどでは無い。だが、暫し待て」

(肺への負荷か……恐らくだが、透き通る世界で見られているのだらう、しかし肺が痛すぎる。……口でああは言ったが今にもものたうち回りそうだ……つらい)

『透き通る世界』

呼吸を極め、自らの血管一本一本を認識し、明鏡止水。所謂心を無にすることで見え

る世界。呼吸を極めた強者の中でもごく限られた一部しか会得できない視界である。巖勝は今の体の限界を探るためにはこれを試してみるしかないと判断した。

(ならば身体中の血管が疼いている今がチャンス、それっぽくやってみるか)

原作において、時系列的に巖勝の透き通る世界は成人を迎えた後に縁壺から教えられたものではあるのだが、その常識は転生者であり前世の記憶がある巖勝には通用しない。体のセンスのおかげか、大きく深呼吸をすることで身体中の血管が膨らむの感覚で掴み取ることが出来た。脈動する身体中の血管に注視して刀を振る動作をし、要る血管、いらぬ血管を意図的に選別し要らぬ血管を休ませた分、いる血管に血液を送る。

「……………それでは兄上、次にして頂くことは……………えっ? ……兄上……………! その体は……………」

縁壺の目には巖勝の体が自分と同じそれへと変化していくのがありありと分かった。縁壺自身の推測よりも遥かに速い変化。集中仕切っている巖勝には縁壺の心配そうな声は聞こえなかった。

(視界が明暗し、斟酌する。縁壺が何か言っている。自分の心臓の鼓動で聞こえない。……………しかし気分は晴れている。……………不思議な感覚だ)

巖勝の気がどんどん遠くなる。

暗くなる世界の中、巖勝は何かを掴む。

自分の限界のその先。生死の狭間すら見極める。

——これが……

「……………！ 兄上！ 体に空気が足りていません！ すぐにお止めなさってください！」  
「……………！ がはっ……………！ ……はあ……………はあ……………」

巖勝は体が一気に冷える感覚がした。弟の悲痛な叫び声が巖勝の心呼び戻したの

である。

(……危なかった。身体中の血管がちぎれるかもしれない所だった……しかし掴めた。掴めたぞ……！　これを繰り返せば透き通る世界も、全集中の呼吸も会得できる……！)

巖勝は笑みを浮かべた。巖勝は巖勝でタガが外れていたのだ。体と精神の限界を掴めたどころか、生死の狭間すら見極めたのだ。人間の理から外れるための修練をする上でこの上ない成果であった。なんとまだ稽古が始まった初日である。

「……すまん、助かったぞ……縁壺……」

「滅相もございませぬ……縁壺は……兄上の邪魔を……」

「……皆まで言うな、お前は私が酸欠になるのを止めてくれた。もしかすると命を落とすかもしれないかったのだ……はあ……私の身を案じてのことだと理解している。それを感じこそすれど叱ることはしない。縁壺、私の感謝を受け取ってくれ」

「……！　ありがとうございます！　私は幸せものです！」

「……………」

当然のように数十秒で回復した巖勝。彼の表情は生き生きとしていた。一度感覚を掴んでしまえば、あとは近道である。体力の回復速度も、格段に上昇していた。

（縁壺は自己評価が低いきらいがある。それに起因して家を出ていくのだろうか、私は家の事があるためそれに付いては行けない。私の修練が終わるまでは少しでも自信をつけてこの家に残っていて欲しいものだ）

「兄上、先程のあれはどうなさったのでしょうか！　まるで……まるで私と同じでした！」

縁壺が目を輝かせて巖勝に迫ってくる。一分の曇すらない眼。ここまで来ると可愛いものである。それにどう対応したものかと思案を巡らせるが、まさかやり方を知っているとは言えなかった。開いた口は苦し紛れであった。

「……………見よう見まねだ」

「何と！　やはり兄上は選ばれしお方！　初見で見切るとは……紛うことなき天才です！」

（縁壺のさらなる尊敬も勝ち取れた事だし、いいとしよう。だが……しかし）

巖勝は縁壺に愛着が湧いてきた。同時に原作において縁壺が巖勝に嫌悪されている理由が巖勝には分かった気がした。縁壺は良くも悪くも純粋なのだ。自分の天賦を才とすら思っていない。謙虚といえよそれまでだが努力しているものにとっては嫌味でしかない。人が血反吐を吐いて、数十年自分の無力さと向き合い、幾多のも死線を潜り抜けて身につけた経験や技。縁壺はそれを生まれた時から当たり前のように身につけ、

それを誇らしいとも思っていない。むしろそんなものいらないと、一言で片付ける。  
(当然だ。天才に才能を褒められたら誰だつて嫉妬や嫌味くらいする。)

だが、前世でそんなやつはいくらでも見てきた

巖勝は兄として、弟の安楽を願つた。願わくばこれから先、縁壺が無意識に傷つける人が減るように。縁壺が人を傷つけることのないように。あのような最期を迎えさせないために。

「縁壺……」

「……？　なんでしよう兄上」

「前にも言ったがお前には才がある。それを控えめに言うのは謙虚な事だ。しかし忘れてはならない。その才は謙虚で補うには有り余る。自分を落とすだけでなく自覚するのが、自らの可能性も」

「自らの……可能性を自覚？」

「そうだ。何も自分の才を誇張しろと言つておるのではない。お前は自分のことをまだこの家の周りしか知らない云わば大海の蛙だと思つているだろうが、

何れ飛び出す世界においてお前よりも才のある剣士はいない。それは兄である私が認める。つまりだ。お前よりも才の無いものがほとんどだということを心に留めて置いてほしい」



（縁壺は才能に任せて威張ったりするようなことは絶対にしないことは分かっている。だが、何せ人は妬み憎む生き物。いくら善性があろうがこれは避けられぬ）

「しかし……兄上……父上は私の事を忌み子で継国家に災いをもたらすと……」

「育てられてすらいらない人間の言うことなど無視すれば良い。お前は災いなどではない、少なくとも私にとっては可愛い弟だ」

（続きを言うのは気恥しいからやめておこう。まだ私が転生して2日目、原作通りならば母が世を去った時点で既に縁壺の剣の才は父上にも知られていると見ていい。）

既に原作は少し狂っている。1年だ、1年経ったら笛を渡して縁壺が家出するフラグを立てる。それまでには縁壺の技を全て身につける）

「……兄上え……あり……がとう……ごいませすつ……」

縁壺は泣き出してしまった。巖勝はどうしていいかわからず狼狽えてしまう。ふと、巖勝の目には縁壺が迷子の子供のように見えた。いくら天賦の才を持ったところで母親は死に、父親からは忌避されている一人の子供なのだ。優しさをむけられたこと自体少ないに違いない。

巖勝は縁壺を抱きしめる。

「大丈夫だ縁壺。お前はできる弟だ、同時にその弱さを私は知っている。何も気に病む

ことは無い。人生は長い。お前の才はこれから何人もの人を助けるだろう。そして助けられなかった人も何人も思い出すだろう。私はその孤独を、痛みを知っている。私がいる。だから大丈夫だ。胸を張れ」

その言葉は原作で縁壺が全てを失った後に、救われた言葉だった。

（我儘だが数年後に炭吉が教えてくれる前に私が教えてやりたかったからな、これぐらの寄り道はいいだろう）

煌々と輝く太陽が二人を照らしていた。



——そして1年経って麗かな春の日に特別頑丈に作った笛を渡した翌日、

縁壺は寺に行つたつきり終ぞ帰ってくることは無かった。

## 参話 与えてくれた形（縁壺視点）

兄上は変わったと思う。本当に突然だった。話しかけても笑顔を向けてくれたのは。今までは慈愛よりかは憐憫であつたし、笑つてくださるなんてほぼなかった。でも、

「……私がいる。だから大丈夫だ」

この言葉にどれほど自分が救われたのか、兄上は知らないだろう。無駄に鮮明に見える視界が晴れ始めるのをあの時確かに感じた。



「縁壺」

自分と呼ぶ声。自分の小さい葛藤なんて吹き飛ばしてくれる声。

「なんででしょう！ 兄上！」

嬉しい。

兄上はつい最近自分と同じ場所に痣が現れ、首元からもう1箇所見える。少し自分とは違った現れ方は不本意ではあるが、額の部分だけは同じ形なのでとても嬉しかった。

「見ているがいい」

兄上は刀を振るう。ここは裏山。自分と兄上しか知らない。秘密の場所。自分がこの世で一番大好きな場所。

「……ふっ！」

抜刀一閃。

山に斬撃音が何度も木霊する。兄上の刀は五尺先の木を狙った。見ればわかるように、兄上の斬撃は飛ぶのだ。自分にも何故か分からない。ただ兄上は平然とやってのける。その上、一閃に対し無数の斬撃が付随してくる。それはまるで三日月を幻視させた。兄上は、「私には縁壺ほど才能がない」と仰っていたが、本当にそれは正しいのだろうか。私には斬撃を飛ばすなど不可能だ。対象となった木は無惨に刻まれ続け、倒れた。

「……どうだ縁壺。私の型は」

「……え？ ……あ！ はい！ お見事でした！ 強いていえば、関節を意識するともつと良くなると思います！」

嘘だ。既に形は惚れ惚れするほど美しいし、関節にまで意識を向けるのはまだ私にも

できない。精進しなければ、兄上に沢山教えられるように。

「そうか。やってみよう」

兄上が集中している。まだだ。自分がいては兄上の次期当主の座が揺るぎ、兄上が疎まれるのはわかっている。自分の存在が兄上に迷惑がかかるとしても、まだ兄上と離れたくはない。兄上は父上に実力を隠している。この反則じみた剣技が世間で言う鬼の使う術のように不可解であり、見せびらかしても恐怖の目で見られるからであると兄上は言っていた。もはやその実力は武家の次期当主という肩書きでは収まらないのだから。

二ヶ月前に稽古をつけて欲しいと言われた。それから自分は兄上と鍛錬に明け暮れた。自分は自分の呼吸法と組み合わせた十二の型を生み出した。兄上にその型を全て見せると《日の呼吸》と名付けてくれた。兄上は私の型を見て自分の型を調整していた。《月の呼吸》というらしい。日と月は対の存在。なんだかとても嬉しかった。型にも名付けてくれた。

壺ノ型 円舞

式ノ型 碧羅の天

参ノ型 烈日紅鏡

肆ノ型 灼骨炎陽

伍ノ型 陽華突

陸ノ型 日雲の龍・頭舞い

漆ノ型 斜陽転身

捌ノ型 飛輪陽炎

玖ノ型 輝輝恩光

拾ノ型 火車

拾壹ノ型 幻日虹

拾貳ノ型 炎舞

最初と最後の名前が同じである訳は兄上曰く、繋げるためだと言う。確かに繋げることは可能だ。しかし、常人では一周だけでも辛いのではないか。兄上の事だ、きつとなにか訳があるのだろうか。

「兄上」

「なんだ改まって」

「……一度稽古をしてみましよう」

「……ふははっ……ちようど良い私もそう思っていた所だ」

兄上は嬉しそうだ。兄上が嬉しそうだと私も嬉しい。兄上も同じ気持ちだろうか？

「……では、やろうか」

両者睨み合い、構える。兄上は木刀を抜刀の形に構える。本物の刀ではないので斬撃の飛距離と威力は格段に落ちるが、それでも打ち身程度では済まないだろう。半端な気持ちで向かっていけば必ずどちらかが大怪我をする。だからこそ私も本気で向かっていかなければならない。

戦法としてはまず近づいて、日の呼吸で切り続ける。それが格上に対して有効であることは既に知っている。兄上に通用したのだから。呼吸を整える。自分の口から燃えさかる炎のような音が聞こえる。兄上の口からは聴く者を恐怖させるような呼吸音。

- ・ 日の呼吸 漆ノ型 斜陽轉身
- ・ 月の呼吸 壺ノ型 闇月・宵の宮

突進しながら、兄上の刀の間合いのわずか外で飛んで体をひねり宙で反転する。真っ直ぐ首を狙う。兄上が抜刀するがただの抜刀の範囲ではない。それから放たれる無数の斬撃。先程まで自分が居た辺の木々をなぎ倒す音が聞こえる。

しかし自分には当たらない。軌道をそのまま首を狙うがギリギリのところまで刀を滑り込まされ、受け流される。兄上は私に避けられる前提で刀を振ったのだ。小手調べに

違いない。

「初見殺しだな。いい動きだ」

「ありがとうございます」

再び構える。恐らくさつきのは首を狙うと予想され、あえて空振り、余裕を持つて自分の剣を受けたのだ。恐ろしい。刀を扱う者にとつて斬撃が飛ぶなんて恐怖でしかないのに。

・月の呼吸 陸ノ型 常世孤月・無間・

「……………」

(まずい……………兄上に先手を取られた)

無数の斬撃が全方面に放たれる。たかが刀の一振、されど一振。斬撃が地を砕き、天を覆う。兄上が最近完成させた。最新の型……………速攻で決めるおつもりだ。此方も負けてはいられない。

・日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽・



刀を両腕で握り、広範囲を薙ぎ払って斬撃の雨を受ける。完全に受けきらずともいい。そのまま突貫し、間合いを詰める。向かってくる斬撃だけ逸らせばいい。

・日の呼吸 式ノ型 碧羅の天・

「……………」

体格差を腰を重心とした上からの斬撃で覆し、鏝迫り合いを拮抗させる。このまま型を繰り返し続けば……

・月の呼吸 伍ノ型 月魄災禍・

「ぐっ……………」

兄上の筋肉と血管が急激に膨張する。痛覚が悲鳴をあげる。まともに受けた。何を受けた。刀を持ってない。

「この使い方は初めて見せたな。この型は刀を振るわずとも斬撃を放てるのだ」  
呼吸を整え……ようとするが駄目だ。この身体では刀の軌道が鈍る。

「……参りました」

「私はお前の型を見たことがある。対してお前は私の型で見せていない面もある。仕方ないといえばそれまでだが、そう言われるのは嫌いだらう。ならば修練に今後も励め」  
「ありがとうございます」

やはり悔しい。体格差でしようがないにしても腑に落ちない。それと同時に世界を見てみたいと思った。自分は兄上しか知らない。本当に頂点は自分なのか、知りたい。知るには外に出なければならぬ。鍛錬を初めて二ヶ月、ちょうど良い……十ヶ月だ。あと十ヶ月で家を出て世界を見に行こう。

★

——これを渡しておこう

「兄上……？ これは」

「見ての通り、笛だ。修練を頼んでからちようど1年。感謝の意も込めてな」

「ですが、兄上。自分はこれから……」

「家を出るのだろうか？ 持っていていけ、退屈しの手にはなるだろう。私が作った。頑丈だ。きつとお前を守ってくれるだろう」

「……自分のために……兄上が」

涙が零れる自分を兄上は微笑んで見つめている。兄上の瞳に私が映る。私は酷く不細工な顔をしていた。駄目だ。兄上の前で醜態を晒しては駄目なのに。どうにも感情が制御できない。

「不満か？」

「いえっ……自分は……ぐすっ……縁壺はっ……果報者です……いただいたこの笛を……兄上だと……思い……う……どれだけ離れていても挫けず……日々精進致します……」

「ああ、励むといい」

涙を拭う。最後まで屈託のない顔を見せなければ。

「私は明日出ます。兄上もお元気で」

「お前もな、気にする事はない。また会える、生きていれさえすれば」

「はいー！」

持っていくものなど少なくていい。大事なものは兄上に全部もらった。笛だけは大切に袋にしまい。家の門をくぐる。振り返らない。兄上がまた会えると言っているのなら、必ず会えるだろう。

初めて見る世界を心を踊らせながら、私は走り続けた。

## 肆話 虧月と静寂

縁壹が出ていった。それを払拭するかのように巖勝はいつも通り裏山で刀を振るう。数えるのも億劫になるほどの数をこなす。

「……この場所はこんなにも広かったのだな」

ふと溢れた言葉は孤独を孕んでいた。



時は戦国時代初期、室町幕府の將軍が代替わりを続け、年表で言うところと四年もしないうちに嘉吉の変が起こり、幕府の権威は地に落ちる。全国の守護大名達は幕府に頼るのではなく、自らが力を蓄えることを念頭に置き、力をつけていた。武士の名門である継国家も例外では無い。

巖勝が家に帰ってくると、早速父親に呼び出された。渋々呼び出された部屋に入ると父親が顔を顰めながら座るように言ってくる。

「聞け。巖勝、継国家当主として命じる。將軍義教様と共に関東へ赴き、幕府に齒向かう

足利持氏の首を取つて参れ」

「御意」

齒向かうことは許されない。親が上で子は下。子を死地に赴かせるのは「名譽」の一言で説明がつく、ついてしまう。そんな世の中。誰もがそれを普通だと思えば当たり前のように逆らうものは淘汰される。

（永享の乱か、このまま継国家は没落していくのだったな、時透無一郎は私の子孫であるから、このまま行けば私は妻を持ち子を授かるのだろうが、親に決められた結婚など、御免蒙る）

「では早速向かえ。継国家ここにありと示すのだ」

「わかりました」

機械のように武士らしい言葉をつらつらと並べる親。倫理観の違いは仕方ないと思つていても納得できなかつた。彼の父親は縁壺が出ていったことについては何も触れなかつた。追つ手を出さないだけマシだとは思つたが、それにしても巖勝は腹立たしかつた。自らの息子にあれほどの仕打ちをできる神経が理解できなかつた。

「必ずや勝利してまいります。吉報をお待ちください」

「うむ」

込められた感情はない。ならば巖勝も感情は込めない。そそくさと退室し、巖勝は戦

支度をする。残す物も持っていく物も殆どない。父親の周り以外はやけに静かな家。提げた風呂敷に入っているのは山の中で捉えた動物の干し肉や、米が少々。巖勝の体はこれだけで数日持つ。

(まあ永享の乱に行くついでに家に帰らずに足輕生活か。縁壺や母上がいなくなった今、この家にはなんの未練もない)

それでも巖勝は仏壇へと向かい、母の遺影に手を合わせる。魂に面識はなかったものの弟が世話になったのだ。耳飾りも作ってくれた恩があつた。今の縁壺があるのは母親の存在が大きい。双子は跡継ぎ争いの芽となるので、生まれながらに気持ちの悪い痣を持つ縁壺を殺そうとした父親を母親が鬼のような剣幕で止めたのだ。

(俺も縁壺も自由に生きます。母上)

見送りは誰一人として来なかった。門を出ると一気に世界が広がって見えた。縁壺はきつともつと感動したに違いない。目を輝かせる弟を想像すると、巖勝は笑いをこらえきれなかった。

「とりあえずは……東だな」

巖勝は関東に向かう道を走り始める。馬と鎧はない。馬を戦に使うほど裕福ではな

いし、何より遅いのだ。自ら走った方が速いし餌代も浮く。もたせる荷物もない。家宝の鎧は暑いから置いてきた。ゆるりと一人旅である。澄み渡った青空ごと太陽が照らし渡す。鳥の囀りが聞こえてくる。和な脇道を東へと進む。

それでも、ただ一つ巖勝には懸念があった。

「久々の遠出だが、問題は鬼だな」

原作と変わらず、鬼が跳梁跋扈する時代。普通の刀では再生される。首を日輪刀で切るか、朝日が昇るまで粘るかでしか、鬼は殺しきれない。巖勝は有象無象の鬼に後れを取るつもりなどそうそうなかったが、不死身は厄介だった。一晚続く全自動首切断機などあるはずもない。

原作の伊之助みたいに隊士っぽい人間をひとつとらえて日輪刀を奪うことも考えたが、鬼殺隊に入隊する可能性がある以上、鬼殺隊との確執は避けたかった。というかあの軍服みたいな隊服がまだ普及していない為、刀を差しているも隊士かどうか分からないのだ。

「刀奪つてすいません違う刀でしたとか……嫌だな。刀鍛冶の里みたいなのところにも行ってみたいが隠されているのでは分からないしな」



考えても仕方なかったので、不安を払拭するように走る速さをあげた。勿論息一つ切れないので不安は蟠りとなってただそこにあつた。

★

二、三日寝ては走り、寝ては走りを繰り返していると遠くに民家があるのが見えた。しかしどうやら騒がしい。目に血を送り、一時的に視力を強化する。血の赤と怯えた農民と小汚いが武装した兵。どうやら村が野盗に襲われているようだ。

「さすが戦国初期、世も末だな」

達観しつつも、走り出す。踏みしめた一歩で最高速度に到達する。景色が飛ぶように流れ、距離を数分で縮める。放置は寝覚めが悪かった。

「……ふん」

「ぐはっ……」

到着と同時に手頃な野盗を切り捨てる。呼吸を使う迄もない。巖勝にとって骨を断ち、肉を斬る感覚はやはり不快なものであつた。感情が鎌首を持ちあげようとするが、押し殺す。巖勝にとって初めての殺人であつた。人の命を奪つたとしても心は風いであつた。生まれつきの武人氣質であるらしい。

野盜達は突然現れた子供が仲間を斬り捨てたことを理解できなかった。

「な、なんだ!? 誰だお前は!? 名乗れ!! 今すぐいだ!!」

「二、三、……今殺したのも含め、全部でちょうど五人か……我が名は継国巖勝!! 野盜征伐に参つた! 外道共! 覚悟しろ!」

「て、敵は一人だ! お前らやってしまえ!」

巖勝はテンプレじみたセリフを言う。リーダー格らしき野盜が吠える。目は恐怖に怯えていた。野盜の目には巖勝が得体の知れない化け物に見えた。大人の侍だったらまだ理解出来た。しかし無表情で刀に着いた血を落としているのは紛れもなく子供である。

(見たところ有象無象の集まりだ。刀を持っている辺り、武者崩れか。ここで斬撃を飛ばしてもすれば村人が怯えてしまうな)

そう思つた巖勝は刀を納め、自然体で構える。途端に野盜らが活気づく。巖勝が人数差を理解して降伏するののかと思つたのだ。

「はっはっは!! 怖気付いたか!? お侍さんよお!」

そう言いながら斬りかかってくる野盜の刀を踏み込みながら半身で避け、手首をつか

み、宙で一回転させ、地面に落とす。一連の動きは流麗で無駄がなかった。透き通る世界により想像通りに体が動かせるため、うろ覚えな前世で見たアニメの体術も模倣できる。そして何より、弱点が看破できる。

「かはっ……ぐ……」

最後に肺を踏みつけ昏倒させる。今の巖勝ならば肺どころか踏みつけて肋を砕き、心臓を破裂させることなど造作もないだろう。

「どうした。怖気付いたのは貴様らの方だったようだな」

「!? ぬかせええ!!」

安い挑発だが効果は覲面だった。巖勝は冷静に動きを見極める。

二人目 白刃取りからの後ろ回し蹴りで処理。

三人目 呼吸で強化した腕で右ストレート、相手は死ぬ。(昏倒)

四人目 足を払って、頭から地面に倒れた所に踵落して眠らせる。

(最後の一人は……)

「おい！　へへっ！　こつちを見やがれ!!」

巖勝は野盗が何をしているかは知っていた。波々目を向けると案の定リーダー格が片腕に村の老婆の襟をつかみ、勝ち誇った顔でこちらを見ている。

「このババアを助けて欲しけりや、その刀を置いて地に伏せろ!!　村人共に縄で縛らせる！」

（人質とは……全く救いようがないな）

「仕方ないか」

姿勢を整える。呼吸を整える。手本はいくらでも見た。今ならできるといふ確信が巖勝にはあつた。何回も練習した。本物の戦闘で使うのは勿論初めて。

・月の呼吸……・

野盗が勢いづく。

「おい！　早くしろ！　さもないと……こうだ!!」

雰囲気が変わった巖勝に野盜はたじろぐ。結果。焦燥に駆られて、老婆の肩を突こうとする。村人が声にならない悲鳴をあげ、諦めの表情を浮かべる。既に彼らの脳裏には血飛沫を上げて絶命する老婆が想像出来ているのだろう。

(致命傷では無いにしろあの筋肉の使い方だと容易く肩を貫通してしまうだろう。)

……それは許さん)

瞬間、抜刀。それは原作にない型。

「なっ」

・肆の型……・

巖勝の抜刀に驚愕し、野盜の動きが少し鈍り僅かな隙ができる。

(十分だ)

—  
・ 虧月突 ・

それは、刀の投擲。構えない。溜めも不要。日の呼吸の陽華突を原型として、踏み込みながら切っ先を敵に向け、左手で柄を掴み調節し、柄頭を右手で押し飛ばす。巖勝が何れ鬼になり、刀を自らの血肉で無数に作れるようになった時の為の型。今は得物を失う欠点があるものの、投擲せず、突きとしても使用可能。壺ノ型の次に速く出せるが一点集中なことと、薙ぎ払わないことで威力と速さは数段こちらが上。

野盗の満ちていた《生》が欠けることすら許さず、真つ黒な《死》に変わり……

「……」

断末魔すらあげることが許されない。一筋の月光は野盜の頭部を破裂させて尚勢いが止まらず、貫通して後方10メートルの家に突きたつていた。老婆が卒倒した。

★

「助かりました！ お侍さま！」

「お侍様がいなければ、今頃どうなっていたことか」

「かつこよかつた!!」

巖勝は口々に褒め称えられる。悪い気はしないがやはり気恥しいものがあつた。

「けが人を手当してやれ、力仕事が必要であれば呼ぶがいい」

巖勝は逃げるようにこの場を後にした。人を殺して感謝されるのは何処か気持ち悪かつたのだ。比較的大きな家へと歩みを進める。そして家の持ち主であろう人へと話しかけた。

「日も暮れてきた。すまないが、今晚は泊めていただけないだろうか」

「もちろんでございますとも！ 夕餉の準備を致しますので少々お待ちください」

「では、私は野盗の様子を見てこよう」

「……お気をつけて」

「うむ」

★

巖勝は村外れの廃屋に移動する。ほんの数日前なのに何処か懐かしい雰囲気を感じる。廃屋という雰囲気が縁壺のそれとにしていたのだ。縛られた野盗がひとかたまりにされていた。すぐに野盗は入ってきた巖勝に気づいた。ちなみにリーダー格は埋葬した。死ねば仏と言葉通り。

「さて、どうしてくれようか」

「ヒイツ!」

野盗は怯えている。この者達のせいで何人か村人が犠牲になった。易々とは逃がせない。性根がこうであるならば、逃がせばまた同じことを繰り返す。

「頼む、助けてくれえ」

巖勝は赦しを乞う野盗を睥睨する。いつそ全員村人に引渡し、村人に委ねるか考える。十中八九死刑だろうが。役人が機能しているかも怪しい。

(ん?)



その時巖勝は背後に気配を感じた。  
振り返ると――

「ゲへへへ、なぜ縛られているかわからんが飯の時間だア！ ……あ？ ……なんだお前」  
「「「ギヤアアアアアア!!」」」

鬼がいた。

血走った目は爛々と光り、髪は無造作に流している。口元から伸びる犬歯は黄色く、尖っていた。肌の色は薄緑に近い。爪は鋭く伸びて、凶器として人を殺すのに十分だろう。体格は1・6メートル程。ボロ布を身にまとっているようだが、何故か所々切り傷があり、再生中であつた。

鬼が巖勝の存在に気付くのに遅れていたのは透き通る世界の効果だ。闘気や殺気が抑えられ、植物のような気配だったのだ。野盗が情けない叫び声をあげる。

「……なんだとは失礼だな」

（この能力を使って忍びとして生計を立てるのも悪くはなさそうだな）

巖勝は一人落ち着いていた。然れど直ぐに刀に手をかける。

「なっ……！　くそっ……また鬼狩りかよ！　ついてねえ、だがせつかくのご馳走。逃してたまるか！」

鬼が飛びかかってくる。単調な動きのため、見切るのは容易かった。瞬時に抜刀。

・月の呼吸　壱ノ型　闇月・宵の宮・

刀を薙いで首を飛ばす。さらに付随した斬撃が鬼の体を抉り、首元だけでなく、肩まですを細切れに引き裂く。断面は切れ味の悪い刃物で何回も削ったようだった。

「ぐぼはっ……!!」

その衝撃に鬼が廃屋の外へと体が吹っ飛ぶ。遅れて宙に舞っていた首が落ちてくる。だが巖勝は油断しない。なぜなら……

「……ぐへへっ……そうか！　お前のその刀、鬼を殺すやつじゃないな!!　ぐふふ……ならば俺様は無敵っ……」

斬。

「ヒエツ……!」

「耳障りだ」

巖勝は鬼の頭を塵にした。目に見えて野盗が鬼に会った時よりも怯えた。野盗は、月

光の下で刀を納める巖勝に、鬼よりも遥かに恐ろしい何かを鮮明に感じとった。少しして、本体の肩の再生が完了する。そして本体から首の再生が始まる。いくら斬ろうが日輪刀がない為、堂々巡りであった。

巖勝は刀を納め、思案に耽る。

「……………どうしたものか……………」

考えていると、廃屋の近くにある木に人の気配を感じる。鬼では無い。

「誰だ……………そこにいるのは」

「ひゃあっ!?!」

(あ、落ちた)

巖勝は刀の柄に手をかけ、いつでも抜刀できるようにし、声のした方を凝視する。聞こえた声は素っ頓狂とはいえ新手の鬼の可能性があつたのだ。夜闇ではつきりとは見えないが木の影に何かがある。体の造りは人間のそれであるが、油断はできない。

「いえっ!! 違います!! ただ私はその鬼を追っていて……に、任務なんですっ! だからそんなに構えないでください!」

(なんで!?! 私と歳変わらないでしょ!?! なんでこんなに……貫禄? 威厳? 対峙すればわかる……! 父様みたいに道を極めた人だ)

(……女か。なんだか気が抜ける。任務という言葉からして、鬼殺隊だろう)

巖勝は構えを解いて敵意がないことを示す。現れた鬼殺隊はこの鬼を追っていたと言っている。巖勝にとってもちやうど良かった。

「鬼殺隊か、ならばその刀でこいつを切ってもらおう」

「は、はいっ」

(え? 鬼殺隊じゃないのに型を使ったの? しかも威力なんて、父様のより桁違いだった……本当に何者? でもなんだか、月を見ているみたい。こつちまで落ち着いてくる雰囲気の人だなあ)

鬼殺隊という女の全貌が見える。薄桃の着物と臙脂色の袴。白を基調として、裾には彼岸花のような刺繍のある羽織を羽織っている。体は女性らしい丸みを帯び、出るころは出て、引つ込むところは引つ込んでいる。顔はまだ幼さが残っていたものの、かなり整っている。髪は炎を彷彿とさせる黄色と赤色。髪型はボブカットと言ったところか。

「も、申し遅れました！ 私は煉獄薫！ よろしくお願ひしますね！」

## 伍話 自覚

「せいっ!」

「ギヤアアアア……」

「ふう……」

薫の振るう刀が鬼の首を切った。薫は刀を鞘に納め、かいてもいない汗を拭う。彼女なりの達成感を示す動作なのだろう。何はともあれこれで一件落着である。廃屋の野盗達は恐怖心からなのか、はたまた豪胆なのか気絶したように眠っていた。

巖勝は確信した。薫はほぼ確実に煉獄杏寿郎の先祖だろう。煉獄姓なんてそうそうあるものでもないし、鷹のような目はなくとも髪の色が杏寿郎のそれに酷似していた。とりあえず巖勝は頭を下げて感謝を伝える。薫が来なければ一晩中鬼を見張っていたければならない所であつたのだ。それか塵になるまで切り刻んでいた。

「本当に助かった。煉獄殿」

「えっ!? あ、はい! わ、わたしの事は……薫とお呼びください。……それより! あなたには聞きたいことがたくさんあるのですが……」

「後にしよう、こちらは村の者を待たせている身でな……もうすぐ宵闇だ。良ければ薫殿も泊まっていくといい。村の者には私が言っておこう」

「そうですか……わたしも野宿は嫌なので、お言葉に甘えさせてもらいますー！」

薫は嬉しそうに含羞んだ。巖勝は少しその笑顔に見蕩れてしまった。しかし、目の奥には迷いがあつた。何が彼女を迷わせているのか分からなかったが、踏み入るべきではないと判断した。巖勝は着いてくるように言ったあと、宿へと向かう。向かおうとしたところ、袖の先を掴まれた。

「あのっ！もしよろしければ、名を教えては……頂けませんでしょうか？」

「……」

巖勝は名乗り遅れたことを恥じる。衝撃が重なってすっかり忘れていたのだ。先程から自分に対して薫が敬語を使っていることを疑問に思ったが、今聞くことでは無いと思いやめておいた。

「……すまない申し遅れた。継国巖勝だ」

「巖勝様……わかりました。お世話になります」

「とは言っても私も村の者に世話になる立場だからな。偉そうなことは言えないが」

「そういえばそうでしたね」

二人して笑みが零れる。今宵は三日月。巖勝は弟以外の他人とここまで話すのは初

めてのことであつた。

結局野盜は税の徴収に來た役人に渡すことになつた。

★

夜が明けた早朝。巖勝は転生してからというものの、早朝になると山に昇つて朝日を見るようにしていた。近くの山に登り、朝日の眩しさに目を細める。光量が増していき、山の端を染め上げていく。夜の闇が塗り替えられ、満遍なく大地を照らす。鬼が姿を隠し、人の営みが始まる。

巖勝が鬼になれば、二度と見れなくなるのだろう。それどころが自分の体への致命傷となり、意図して避けるようになるのだ。巖勝は少しもの寂しさを感じる。それほどまでに朝日は美しかった。巖勝が鬼になるということは、無惨が死んだ時、自分も死ぬということであるが、それは御免であつた。

「無惨が弱つたら原作の珠世のように支配を逃れられる可能性が出てくる。鬼になつた後は縁壹と無惨の戦いの近くかつ、無惨が弱れば支配を逃れるように抗う。

……ならば事前の無惨からの勧誘を受けて、縁壹との戦いまで隠れていよう。無惨に目的がバレないないように。うまくいけばあとは主人公が出てくるまで青い彼岸花探



しでもして従っておこう」

今後の方針を確認する。しかし巖勝はイレギュラー。原作通りにはいかないかもしれないと、何となく予想が着く。原作の知識を持っている以上、一瞬たりとも思考を讀まれてはいけなかった。もし読まれた暁には、無惨は文字通り全てを恣にできる。

(どうしたものか……………む)

巖勝はふと、足音が近づいてくるのを感じた。気配ではなく、音で気がついたのだ。それほど集中していたことを自覚した。強い鬼であれば遅れをとっていたかもしれない。

(私もまだまだだな)

反省しながら顔を向けると、そこには薫がいた。

「あれ? 巖勝様ではありませんか。き、奇遇ですね。巖勝様も朝日を見にいらしたんですか?」

「……………ああ薫殿か。そうだな、私は朝日が好きでな、毎朝見るのを欠かさないようになっている」

(なんだか焦っているようだ。心拍数が上がっているな)

薫は嘘をついていた。昨日、流石に年頃の男女が同じ宿に泊まるのは、と、宿は別々

にして休んだ。その翌朝、巖勝が宿から出ていくのを偶然見かけた薫は気がつけば後を追っていた。巖勝に察知されて始めて、自分がなんの目的もなく着いてきたことに気がつき、焦る。これではただの変人だ。

「へえー……わ、わたしも好き……ですよ、あ、朝日」

（好きって言っちゃった……！　って何ドキドキしてるのわたし……！　まだ会って一日も経っていないのに!?）

薫は両頬に手を当て、蹲る。薫はその感情を知らなかった。柱である父に向ける憧れでもなく、次期当主の兄に向ける親愛でもない。恥ずかしくて今すぐにも逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。かと言って離れたくもなかった。薫は女でありながら鬼殺隊を目指したのだ。そんな中で感情を押し殺さなければいけないことなど数え切れないほど経験した。そうやって培われた鉄仮面が………欠片も機能しなかった。

巖勝は何故か心拍数が上がっている薫を訝しげに思っていた。  
（……なにか掴みどころのない娘だ）

「……はっ！　……そういえば！　巖勝様は今おいくつなんですか？」

薫は勇気を振り絞って問いかける。話を続けようとしたのだ。

「年か？　……十だが、それがどうした」

「え？ …………… いやあ……………またまたあ……………年を偽らなくてもいいんですよ？ ……」

「……………」

「……………冗談……………ですよね……………？」

「……………嘘は言つてないが」

「……………え？ ……………ええええええつ!!？」

「いやいや、まさかの年下!!? 背丈はわたしより高いのに!!? わたしより三つも!!? 年上だと思つてた!」

「……………そんなに驚くことでもないだろう」

「その言い回し! ……つて言うか……………十歳はそんなに堂々としていないと思います!」

薫は無意識に顔を近づける。巖勝の視界に整った顔が視界に広がり、柄にもなく狼狽える。薫の驚き様からして巖勝は目の前の女性は自分より年上であると判断した。ここで自分も年齢を問いかけるという愚行は起こさない。結果など目に見えている。

「あ、ああ……………そうだろうな」

「……………はあ……………ふう……………なんか疲れました。……………突然ですが巖勝君、恥を忍んで頼みたいことがあります」

（落ち着けわたし! 相手は年下。ここは年上の貫禄つてものを示さない!）

(君呼びに変わった。私を年下として扱う気か)

薫は何とか冷静で貫こうとしたが、尋常ではない心拍数と真つ赤に熟した果実のような頬は隠しきれしていない。第一、透き通る世界を持つ巖勝にとつては幾ら無表情や無感情で冷静さを装おうが、全くの無駄であつた。

巖勝は気づかない振りをする。

「……………うむ」

「……………わたしに稽古を付けては頂けないでしょうか」

普段彼女は格下、格上のどちらでも堂々と接してきた。それが鬼殺隊の頂点。炎柱を受け継ぐ煉獄家の長女、寡黙で凛々しい『煉獄薫』という人物である。たとえ相手が誰であつても敬語を使う。そうすればやつかみも幾分か抑えることが出来たのだ。

薫は人目見た時から巖勝は自分よりも数段上と確信していた。故に誇示や実力を示すのでは無く、本気で稽古してもらおうと思つていたのだ。それは巖勝にとつても初めてとなる、縁壺以外の剣士との斬り合い。断る謂れはない。

「承諾した」

「本当に！……………んっ……………ほん……………よろしいのですか？」

「ああ」

「……………今からでもよろしいですか？」

「もちろんだ。始めよう」

「ありがとうございます。……では胸をお借りします」

薫がある程度の間合いを取るために離れていく。そのうちに巖勝が手頃な枝を拾う。振り返った薫はそれを見ても文句を言わない。実力差など初めから明らかなのだ。

薫が抜刀し、構えると同時に、巖勝もまた構える。

「……………」

「っ……………」

巖勝の纏う空気が変わる。彼の纏う重厚な剣気は今までの和やかな雰囲気を一瞬で吹き飛ばし、先程まで鳴いていた森の小鳥たちの囁りが止まる。巖勝を中心として凍てつく刃が撒き散らされたかのように錯覚する。それほど肌を刺すような殺気は薫を怖気付かせるのに十分だった。薫は顔を強ばらせた。

（分かつてはいたけど、やばい……………！ 剣士としての格が違う……………それでもっ！）

「……………はあっ！」

薫が切りかかる。裂破の気合いで袈裟斬りを仕掛けるが、巖勝はそれを最小限の動きで受け流す。薫は呼吸を使わない。本来なら縁壺が鬼殺隊に呼吸を教えるのは後九年先、薫が鎌倉まで付いてきてくれるのならばやり方くらいは教えられそうである。

「……ハッ！」

「……」

胸を狙った回転斬りを跳んで躲す。続けざまに放たれた、薫の切り上げからの振り下ろしを半身で避け、隙をついて枝で切り上げる。

「……！ ……うぐっ」

薫はその切り上げを上半身を逸らして避けた。薫の顎の先を確かに殺気の籠もった一撃が掠める。

だがそれで終わりではない。

(胸がから空きだな)

(危なかつた……ッ！ 嘘!?)

巖勝は振り抜いた枝を今度は逆手に持ち替え、喉笛目掛けて鎌のように振り下ろす。薫は足にありつたけの力を込めて後方に飛ぶ。否、飛ぼうとした。

(当たつたら死ぬ！ 当たつたら死ぬ！)

薫は後ろに跳んで間合いをとろうとする。

しかし、巖勝は相手が間合いをとるために後ろに跳ぼうとしているのを・見て・、振り下ろそうとした構えを解きながら一歩踏み込む。

終わりに空いた左手で拳を作り、掌底を放つ。薫が後退した分、巖勝が前進し、間合いは変わらない。しかも薫は目論見が破られて思考に隙ができ、体幹が崩れる。

(このままでは背中から倒れてしまう)

そう思った巖勝は薫に肉薄する。

巖勝が肉薄したので、拳が自分の腹に突き刺さるのを幻視して薫は目を瞑ってしまふ。後ろに倒れるよりも瞬速の勢いで迫ってくる拳の方が脅威だったのだ。きつと想像を絶する痛みが来るのだと。

だが巖勝は倒れかけている薫の腰を右手で掴んで引き寄せ、申し訳程度に左手に持った杖の先を逆手のまま喉元に突きつける。薫は衝撃が来ないことを訝しげに思った。目をゆつくりと開け、そして見開く。文字通り目と鼻の先に巖勝の顔があった。至近距離で見つめ合う。

昇り始めた太陽が二人を照らし、互いの顔が鮮明に見える。

「勝負あつたな」

「……………」

初めて縁壹以外の剣士と刀を打ち合えた高揚感が巖勝を自然と微笑ませ、年相応の笑みを引き出す。屈託のない、爽やかな微笑み。

それは乙女の、初な心を奪うのに十分すぎた。

「……………あつ」

「……………」

（巖勝君の額の痣……………まるで炎みたい。わたし、心臓の鼓動が上がってる！ バレてないよね!? さつきまで動いてたから誤魔化せてますよね!?)

（ここの見ると可愛い……………というかどうかどうしたものか。この体勢）

ゆっくりと巖勝は力を抜くようにして腰から手を離す。巖勝は少し名残惜しかったが、それは薫も同様であった。

「申し訳ない……………」

「いえつ……………! こ、こちらこそ……………」

気まずい沈黙が流れる。

「と、とりあえず村のみんなも起き始めましたと思いますし、帰りましょうか……………」

「……………それもそうだな」

二人して山を降りる。当然、会話は無かった。



## 陸話 呼吸そして野営

巖勝達は村人に朝飯を作ってもらって、食べてから出立の準備をする。ありがたいものである。村人達にとって巖勝達は命の恩人である為、喜んで振舞ってくれた。

二人は感謝を伝える。名残惜しいが出立の時である。

「世話になった」

「お世話になりました」

二人は村人達に頭を下げる。村総出で見送ってくれたことが巖勝には無性に嬉しかった。鬼が蔓延り、戦が頻発する世の中にも平穩は確かにあった。

「こちらこそ、助けていただき感謝の言葉もございません！ 村の者は皆、お侍様方に感謝しております」

「助けていただき、ありがとうございます！」

「お兄ちゃんありがとう！ また遊びに来てね！」

村を発つ。笑顔の村人達に送られて二人は歩き出す。巖勝は何度も何度も振り返って手を掲げた。とても嬉しそうな巖勝とは対照的に薫は終始余裕のない顔をしていた。

（このままだと巖勝君と別れてしまう……！ もしかすると、もう会えないかもしれないな

い……………！ どうしたらいいかな……………)

気の落ち込んだ薫を、巖勝は話を振ろうかそつとしておくべきか迷った。何度も躊躇う。巖勝は山での一悶着がかなり堪えていた。薫が蚊の鳴くような声で口を開く。

「……………巖勝君はこれからどうするんですか？」

「鎌倉の戦に馳せ参じるつもり……………だったのだが、正直面倒になってきてなら行くか行くまいか迷っているところだ」

巖勝は特段將軍に忠誠がある訳でもない。家への忠誠は縁壺が家を出ていつてからはもう無いに等しい。最早家に帰る気など毛頭なかった。

巖勝のフリー発言に、薫は花を咲かせたように笑顔を浮かべる。

「……………！ そうですか！ 奇遇ですね。……………わ、わたしも鎌倉へ行く手筈になっているのです。戦の後は死体を鬼が食べに来るので、それを退治するのが次の任務です。行くところがないのなら、わたしと一緒に行くほうがいいですよね！」

(……………で巖勝君と別れたら、もう会えないかもしれない……………そんなのは嫌、絶対に……………) 薫の目に昏い光が灯る。それはある種の兆候であった。依存や執着よりも強い何かである。幸か不幸か巖勝はそれには気が付かなかつた。

「……………そうだな、……………一緒にさせてもらおう」

(……………それとなく圧を感じる……………が、うん。目的地が同じなら安全のため、多少遅くなり

とも行動する人数は多い方がいいよな、そうだよな)

巖勝は理由をこじつけているが、薫と共に行くのは悪い気分ではなかった。寧ろ、巖勝も別れたくないと強く思っていた。早速掴めた鬼殺隊への繋がりを手放したくなかった。そしてなにより、彼女の隣はとても心地よかったのだ。

★

二人して鎌倉への道を歩く。薫は透き通った声で鼻歌を歌いながら、巖勝はそんな薫の美声に耳を傾けながら。

「♪　　♪　　♪」

(聞いたことの無い曲だ。……しかし、何となく距離が近いな、加えてやけに上機嫌だ)

「……薫殿。稽古の話だが……」

「薫。とお呼びください。巖勝君」

「……しかし年う………なんでもない。それでは薫。稽古のはな………どうした……」

「……うっ………な、なんでも………なんでもないです」

手で隠しているが、顔は赤くなっている。巖勝は閃いた。

「……薫」

一言。

「えへ……んんっ……なんででしょう？」

「薫」

一言。

「ッ！ ………………」

（耐えてる……）

「……ふっ」

「い、今笑いましたね!? ……もう巖勝君なんて知りません!」

（ああっ!? わたしのばか! ……なんでそんなこと言っちゃうの!?!）

薫は内心では怒っていないが、しゃがみ込んだままそっぽを向いてしまう。年相応の恥じらいである。気になる人は気になるままでいて欲しいという気持ちの下に隠しきれぬ強い感情を隠しているのだ。他人からもそして自分からも。

しかしその仕草は余計に巖勝の嗜虐心を煽るだけである。

（可愛い……でもさすがにそろそろ機嫌を治してもらおうか）

「すまない薫。お巫山戯が過ぎた」

「……」

「後で何とか埋め合わせはしよう。約束する」

「……仕方ないですね。特別に許してあげます」

巖勝は自然な笑みを浮かべて、未だしやがみ込んでいる薫に手を差し伸べる。薫はその手をとって立ち上がる。ここで前を向いて巖勝の顔を見てしまうと、また落ち着きをなくしてしまいそうで、そっぽを向いたまま立ち上がった。巖勝にはまだ薫が機嫌を治していないように見えた。

(ごっごっした、刀を何回も振っている努力している手。でもひんやりと冷たい)

「……どうした、薫」

見れば、薫の手はまだ巖勝の手を握りしめていて……

「ひゃあっ!? ごめんなさい!」

薫は慌てて手を離す。巖勝も少し名残惜しかった。巖勝は薫と違って溢れ出す感情を押し殺せるので声色は平然としていた。内心は言わずもがなである。

「大丈夫だ」

(色々とまずい……)



互いに無言で歩く。まだ薫の顔は朱に染まっているものの、落ち着いたのか、巖勝に問いかける。

「……それで先程は何を聞こうとしたんですか」

「ん？ ……ああ、稽古の続きと言つてはなんだが、私はある呼吸法を使って身体能力を上げ、先日の夜のような技を放つことができるようになってる」

（昨日見た感じだと力は十分であつたしな、鎌倉まで道は長いし教えてもいいだろう）

「そうなんですか……して、その呼吸法とは？」

薫は目を輝かせる。自分よりも年上が尋常ではない力を振るう理由。それを一人の剣士として知りたかつたのだ。

「呼吸法と言つても単純だ。肺を大きくすることで空気を大量に吸い込めるようにするだけだ」

薫は少し拍子抜けした。表情に少し疑いの念が発生する。

「……どうやって鍛えるのですかそれは」

「走る」

「え？」

「走る」

「……本当ですかそれ？」

このやり取りに巖勝は少し懐かしさを感じた。

「俄には信じ難いだろうが本当だ。私は走ってこの呼吸を身につけ、それを日常的に続けたら、特別大量に吸い込んだりして、強くなった」

「……眉唾ではなさそうですね」

「分かってもらえて何よりだ。……じゃあ走るか」

「え!? 今からですか!？」

「ああ、夜まで走るぞ。次の関所まで歩けば2日かかるが、走れば半日で済む」

「まあ、いいですよ……でも倒れたら介抱してくださいね」

「その時はおぶってやろう」

「……言いましたね?」

（こうなったら倒れるまで走ってやりましょう。そしたら巖勝君におぶって貰えます  
!）

薫は単純思考であった。

★

走ると決めたのなら、二人は村人に作り置きしてもらった昼ご飯を食べ、走り出した。

時に、昔の日本人は屈強であった。特に元寇を追い払った重装弓兵である鎌倉武士の血を継いでいる武家は、この時代まだ多く残っている。平安時代から続いている煉獄家も、その中のひとつである。中でも薫は鬼殺隊の炎柱の娘として恥ずかしくないほどの実力は持っていた。決して弱くはない。寧ろ鬼殺隊の中では強者の部類に入ってくるような人物である。

「もう日もくれる、ここらで野宿だな」

「はあ……はあ……巖勝君って……肺が六つあるって……言われたことない？」

もう一度言うが、薫が非力なのではない。彼女は呼吸が身に付いていないといえど、鬼殺隊の中では飛び抜けて優秀である。実際一度も止まらなかった。そのため幸か不幸か巖勝がおんぶすることにはならなかった。

継国兄弟が規格外なだけである。

「……ないな。薫。肺が空気を欲している状態のまま、身体中の血管に血が行き渡るのを感じてみるんだ」

「……わかりました」

（さーっと言われたけど、絶っっつ対に難しいことだよね……巖勝君の言うことだし、やるだけやってみよっか）

薫は集中する。だが酸欠状態に陥っている為、そっちに気が紛れてしまう。集中が思



うように続かない。そのうち集中が目的になり、本来の目的すら考えられなくなつていった。しかし、しっかりと血管も膨らんでいる為、すぐには行かないが兆候は見えた。「無、無理です、そもそも……血の行き渡りを感じると言われても……分らないです！」

「……これから何回か繰り返すぞ、鎌倉まであと少し、薫には炎の呼吸を習得してもらう。大丈夫。コツは掴めている」

「炎の呼吸？ それが巖勝君が振るう技の名前ですか？」

「いや、私のは月の呼吸だ」

「……なんだか奥が深そうですね」

「それぞれ自分に合った呼吸法がある。例えばだな……」

巖勝は話しながらも野営の場所を決め、そこらの枯木を一撃で切り倒し、幾つもの薪にする。顔が引き攣っている薫を横目に、火打石で枯葉に火をつけ薪に燃え移らせる。道中で狩つてあつた兎を火に焚べて、焼きはじめ。テキパキと要領よく野営の支度を始める巖勝を見て、薫は夫婦みたいだと脈絡のないことを考えていた。

「……手際がいいですね」

「褒められるほどでもない。走って疲れただろう、眠るといい。見張りは私がやる」

「……鬼が来たら……」

「ああ、問題ない。気配には気づく性だ」

(巖勝君が言うのと、絶対的な安心感がある。かつこいいなあ)

薫が手頃な柔らかかさの地面を探していると、不意に巖勝が刀を手に取った。

「……………ほらお出ました」

「……………え？ ……ツッ！」

巖勝が鬼の気配に気づき、遅れて薫も気づく。二人とも即座に構える。鬼が暗がりから現れる。薫の目には、姿形が余りよく見えなかつた。その体軀が焚き火の明かりで照らし出され――

・月の呼吸 式ノ型 珠華ノ弄月 ・

——る前に巖勝が放つ三連続の月輪が両腕と下半身を抉り飛ばした。

「久々のごちこそ……グギヤアアアア!!」

斬られた後も残響して傷口を抉る三日月は、例え痛覚が鈍い鬼でも叫ばせるのに十分であった。巖勝の刀にとって鬼の体は脆すぎた。斬撃は鬼のみならず周囲の倒木や木々を切り裂いていった。

蹂躪とも取れる圧倒的な力の前に、呆気にとられていた薫がハツとして半開きになっていた口を閉じる。

「……………それではわたしが止めを」

(……………い、今斬撃が飛んだ……………よ……………ね? しかも刀を振ったのは両腕と下半身を狙ったので多分三回……………なのになんで斬撃音が何個も重なって聞こえてくるの!?! 最初見た時もそうだったけど、人間業じゃない……………本当に人間? もしかしたら……………)

「待て、折角だ。呼吸を使って斬ってくれ」

「……どうやるんですか？」

「息をいつもより多めに吸い込んで、筋肉や血管を強化し………あー、いっぱい空気を吸って、思いつきり斬ればいい」

「はいー！」

(……そういえば巖勝君はこんな風に言ってたよね)

薫は構える。そして息を吸い込む。体に力が入る。刀を握りしめると、色が橙に変わる。日輪刀の特徴の一つである。使える呼吸によって色が変わるのだ。

・ 炎の呼吸！ 壱ノ型！ 不知火！！

「グハッ………！」

薫が踏み込んで肉薄し、刀を横薙ぎに振るう。あっかりと鬼の首が落ちる。巖勝は刀が業火を纏っているのを幻視した。鬼殺隊の歴史の中で初の・炎の呼吸・使用者の誕生である。



あれから何事もなく夜が更け、朝日が昇ったことを確認した巖勝は薫を起こして出発する。薫から寝ていないのかと聞かれたが、寝ていたし、なんなら近づいてきた鬼を数匹切つたと聞いた時には薫は驚きのあまり大声を上げた。巖勝が薫の日輪刀を一時的に借りたことはもちろん許した。

（鬼が近づいても気づかないわたし。いつの間にか巖勝君を至近距離まで近づかれても大丈夫だと無意識に受け入れてるわたし……）

そうやって二人が目的地に着いたのは昼過ぎであった。戦はもう終わっており、死屍累々とした戦場では盗賊が死体漁りをしていた。

「……のんびりしすぎたな」

（まあいいか、楽しかったし、薫が可愛かったし）

理由は主に後者であった。巖勝も男である。

「では！ 近くに鬼殺隊がいるはずですよ！ 一緒に探しましょう。……それと鬼殺隊ではわたしはこう……所謂ですね、自分で言うのも恥ずかしいのですが冷静沈着な人物として知られているので、そこは承知の上でお願いします」

（まずは鬼殺隊に入隊してもらいましょう。最終選別に参加してもらって、実力は十分だから煉獄家の婿養子ってことにして、父様が許してくれるかな……）

「……そうか……素の薫はそっち寄りか？」

「断然こちらです！」

## 漆話 鬼殺隊

「……鬼殺隊。見当たりませんか」

二人は荒廃した戦場を歩く。時刻は昼の三時頃。今の時代鬼殺隊の目印は藤の花しかない。隊服は西洋の文化が入ってくる明治後期からだ。他愛もない会話をしながら向かってくる盗賊を切り捨てながら進む。

因みに藤の花の家紋が鬼殺隊の協力者の印として浸透するのも明治終わりである。明治後期に鬼狩りに助けられた人が、恩返しとして藤の花の家紋を掲げて鬼狩りを全面的に援助するようになったのだ。

「何人かで集まっているものなのか？」

「はい。こういう大規模な鬼狩りは大人数で行うことで互いを助け合い、被害を最小限に抑えるんです。もし巖勝君が入隊すれば、百人力ですね！」

薫は遠回しに巖勝に入って欲しいと伝える。実際に巖勝が入れば、鬼殺隊は大きな戦力を得るだろう。というのは薫の建前で本当は巖勝とより長い時間をすごしたいからである。薫は、そうやって二人で過ごしていくうちにこの蟠りの正体もわかっていくような気がした。加えて、巖勝にもメリットがあった。

「……入隊するのもいいかもな」

「ええ!？」

「……何をそんなに驚く」

「いや、時間をかけて説得しようとしていましたのにあっさり引き込みました……」

「……仕事がないからな、全くの無一文だ。鬼殺隊は報酬がいい。悪くないだろう」

そう。家を捨てた巖勝にとつて路銀の調達は死活問題であった。報酬のいい鬼殺隊に入ることで稼ごうとしたのだ。というのは建前で実際巖勝も薫の魅力に引き込まれかけていた。巖勝も薫と過ごしていけばこの違和感がどういふ感情なのかわかるような気がした。

「ええ！　そうですね！　　そうと決まればさっさとこの任務を終わらせて、入隊手続きと行きましょう！」

「確か……最終選別は鬼の蔓延る藤の山の頂上をめざすのであったか？」

「はい。よくご存知ですね。それも巖勝君なら楽勝でしょう。頂上では刀に使う玉鋼が支給されます。その玉鋼で打たれた日輪刀が届けば、晴れて鬼狩りです！　　そうしたらずっと一緒にいきましょうね！」

薫は大胆な自分の発言に気がつかないくらいに浮かれている。それから二人は他愛ない話をしながら、鬼殺隊を探す事に専念した。



薫は鬼との戦い、鬼殺隊との関わりでの疲れを忘れていた。巖勝は自分がかかなり原作とは逸れていることを自覚しながらも薫との邂逅があつたのなら意味があつたと思えた。互いが互いに安楽を見出した。今はそれだけで十分。

「……………私には弟がいてな」

「弟さんですか？」

「ああ、私より強いぞ」

巖勝は少し得意げに言う。薫はまるで意味がわからないといった表情をうかべた。たつた一日で薫が今まで会った鬼殺隊よりも遥かに強いと断言出来るほどの猛者である巖勝が自分より強いと言わしめる弟。

「ええ!? 継国家って…………」

「薫!」

「あらっ？」

「……………む」

薫が呼ばれたようなので、巖勝は薫が反応してから振り返った。見ると、案の定そこには腰に日輪刀を差した鬼殺隊がいた。

黒髪に垂れ目。顔は童顔に近いが年齢は確実に巖勝より上だろう。腰に刀を差し、背丈は巖勝と同じくらい。黒い着物に白い袴。余計な飾りはほぼないとやっていいが、目立つものは首元に勾玉の首飾りくらいか。どこか真面目な印象を持たせる雰囲気であつた。

「……………房綱さんですか。お久しぶりです」

巖勝との会話を邪魔された薫は、滲み出る不機嫌を隠そうとしない。薫に話しかけた鬼殺隊、房綱は気づいていない。

「ああ！ 薫、久しぶりだな。見つかってよかった！ 心配したぞ。俺はいつものよう

に薫と行動を共にしろと炎柱様から命じられた。薫も顔を出しに行くといい。俺はここで待つてるから。あつちに鬼殺隊の本陣がある」

「父様が来ているのですね……」

房綱が指さした方向を見て、薫は複雑な表情をする。それを見た巖勝が推測するに、親子の仲はあまり良くないようである。

「……薫殿。私は任務に参加する意志を示すために炎柱殿に会わなければならぬだろう。一人では不安なので着いてきてくれるか？」

結果、巖勝は薫を気遣った。父親ともし仲違いがあるのならば、薫自身が顔を見せなければさらに軋轢を産むだろうし、何せ会って少ししか経過していなくても、信頼のける人物が目の前で悩んでいるのだ。ならば手を貸すのは巖勝にとって当たり前のことであつた。

「そうですね。……巖勝君ありがとうございます」

「ああ」

薫は巖勝の気遣いに感謝すると同時に、気を遣わせてしまったのを申し訳なく思う。互いに信頼し合っていることが人目でわかるようなやり取り。その一部始終を見ていた房綱が口を開く。

「……薫。そちらの侍は何者だ？」

「あー……えっと、彼はですね……」

「薫殿。私から話そう。」

お初にお目にかかる。私の名前は継国巖勝。歳は十だ。……鬼狩りとなるために薫殿の元で修行している。今回の任務に協力するために炎柱殿に日輪刀の支給をお願いしたい」

巖勝は事の経緯を誤魔化す。嘘は言っていない。鬼殺隊のイロハを薫に教えて貰っているのは事実であるし、日輪刀がないと鬼を殺せないのだ。

（十……だど?! それにこの佇まい……そして薫の信頼を得ている。しかし本当に強いのか? 見たところ此奴からは強者特有の気配が感じとれないが……）

自分より遥かに年下の男が想いを寄せる相手に信頼されているのを見て、房綱の心に嫉妬の念が沸き上がる。加えて巖勝の雰囲気は何処か常世離れしていた。強者なのか弱者なのか一切感じられないのだ。

「俺の名前は御門房綱。年齢は十四。……見たところその刀も日輪刀では無いようだ。……だが、実力の程は確かめさせてもらおう！」

結果、実力を定めるといふ結論に至る。

「……………！ 房綱さん！」

「大丈夫だ。薫。こいつが鬼殺隊に相応しいか確かめるだけだ。手加減はするさ」

房綱は刀を構える。

彼は薫に恋心のようなものを抱いていた。懋実力は高いために炎柱の継子となり、その娘である薫は、自分に生涯寄り添ってくれていると信じて疑わなかった。今も昔も、そしてこれからもその関係は変わらないと思っていた。

そこに突如として現れた、自分より三つも下の癖に薫と強い信頼を築いている男。薫を慕う男として、やはり気に入らないものがあつたのだ。言うなれば……………私怨である。

「薫殿。房綱殿の言っていることも正しい。私の実力を示せるのなら、喜んで受けて立とう」

巖勝は抜刀し、中段に構え、房綱を見据える。もちろん、薫が心配しているのは巖勝のことでは無い。寧ろ房綱がボコボコにされないかである。

「参る」

瞬間、世界が塗り変わる。房綱はまるで自分の中でいちばん強い鬼狩り、炎柱と対峙した時のような威圧を一身に受ける。巖勝の殺気が凍てつく刃のように房綱を蹂躪する。薫は一度一身に受けたことがあるので大丈夫ではと高を括っていたが、そんな甘い考えごと塗り潰される。

(なん……)

房綱は無意識に一步後退してしまう。それを見た巖勝は大きく踏み込み間合いを詰める。抜刀の構えで肉薄されるほど剣士にとって恐ろしいものは無い。房綱は何とか迎え撃とうとする。

二人の刀が交差しようとした時、一本の刀が差し込まれた。

「なっ……！」

「……む」

「父様！」

上に向かうほど燃えるような赤が濃くなり、背中まで届くほど長い髪。裾の白い着物と黒い袴。その上には薫と違い、炎の刺繍がある羽織を羽織っている。そして鍛え抜かれた肉体は百九十センチにも及ぶ。そんな巨漢が、二人の刀を自身の日輪刀で止めていた。

「お前達、何をしている。房綱。今は仲間割れをするような状況では無いことぐらい阿呆でも分かりきったこと。真面目なお前らしくもない」

「も、申し訳ありません！」

房綱が慌てて刀を収めているのを見た巖勝も、刀を収める。炎柱だと思われる人物が房綱に向け非難の目を向け、叱責した。

「正寿郎様！ 俺はこの巖勝なる者が任務に参加する意志を示したので、実力を見極め

ていたのです！」

「……ほう……」

正寿郎と呼ばれた当代炎柱は巖勝に鷹のような双眸を向ける。射抜くような目線を向けられても巖勝は表情ひとつ変えなかった。

「お初にお目にかかる。私の名前は継国巖勝と申す。今は鬼殺隊に入隊するために薫殿に師事させてもらっている身。お見知り置きを」

巖勝は口調を丁寧にして話す。入隊する以上、完全な上司である正寿郎には粗相は許されない。

「なるほど……これは房綱では手に余るな。私の名前は煉獄正寿郎。御館様より炎柱の位を授かっている。そしてそこにいる薫の父だ。巖勝と言ったか……いいだろう。任務の参加を許可する。日輪刀を支給しよう。本陣までついてこい。……薫は房綱と共に私の連れてきた隊士の指揮をしてもらう。いいな？」

「……わかりました。父様」

「わかりました」

技術の面で、巖勝は既に達人の域に到達していることを見抜いた正寿郎は任務の参加を許可する。横目に薫が途轍もなく不機嫌であるのを見て少し悩む素振りを見せたが、事前の指示通り、房綱と行動を共にさせる。





巖勝と正寿郎の二人は藤の花の横断幕がある本陣に到着する。鬼を殺す屈強な集団。鬼殺隊の証であり、藤の花を背負うものは鬼殺隊という目印になっていた。戦侍達も暗黙の了解で藤の花の家紋には手を出さないことになっている。姿勢よく待っている巖勝に正寿郎は予備の日輪刀を渡す。

「その歳でそれ程の剣。巖勝、鬼殺隊に入らずとも、どこかの武家にお抱えになるのも良かったのではないか」

「……私は鬼殺隊に入隊し、弟と再会したいのです」

巖勝は日輪刀を貰い受け、二刀使いのように脇に差す。巖勝は縁壺が鬼に家族を殺されるのを知っていた。それを阻止するために全国に任務に赴く鬼殺隊の力を借りて、縁壺の家を特定したかった。

「……まあいい、なにか複雑な事情があるのだろう。無理に聞きはせん。……時に巖勝。薫のことはどう思っている」

「薫殿ですか。女子とはいえ剣の冴えは目を見張るものがあります。……なぜでしょう」

「……なんでもない、忘れろ。次の最終選別は1年後だ。それまでは薫に面倒を見させよう」

「……承知しました」

これでも正寿郎は子煩悩であった。特に娘である薫には、常に危険が伴う鬼殺隊に入つて欲しくないと考えていた。皮肉なことに、悪い鬼を薙ぎ倒す父親の憧れから薫は鬼殺隊をめざした。次第に剣の才能を開花させ、最終選別を突破し、とうとう鬼殺隊に入隊した。正寿郎はせめてもの親心として当時将来有望な鬼狩りであった房綱を継子にして、あわよくば結婚し、薫が鬼殺隊を引退して房綱に薫を守ってもらおうとしたが、房綱も薫に過保護なまでの執着を見せた。

薫は二人からお前は鬼殺隊に向いていないと言われていている気がして、次第に不満を募らせていった。

そこに現れたのが巖勝であった。正寿郎は明らかに巖勝を特別視している薫を見て、薫が求めるのなら薫を彼に任せようと考えていた。



(……………あーあ)

薫は極めて不機嫌であつた。いつその事、房綱を置いて本陣に駆け込み、巖勝に会いたい一心だつた。

隊士と隠の統率は房綱がやってくれている。房綱は女である薫には荷が重いと考えているのだろう。その気遣いがさらに薫を不機嫌にさせる。薫はいつものように真顔で佇む。そしてたまに本陣を見ては溜息をする。

(巖勝君は今、何をしているんだろう。父様は許してくれるかな。同じ鬼殺隊として、巖勝君と肩を並べて戦う……のもいいけど夫婦として二人だけの、誰にも邪魔されない家で、帰つてきた巖勝君に「おかえりなさい」って言いたいのもある……究極の二択ね……わ、私は何を……!?)

薫の端正な顔に自然と笑みが零れる。近くで埋葬作業をしていた隠や房綱が見蕩れる程の笑みであつた。直ぐに元の無表情へと戻つたが、暫くして、本陣から巖勝と正寿郎が顔を出す。薫は駆け寄り、房綱は手を止めそちらに向かう。

再び四人が会した。

「皆、集まったな。まずは薫。巖勝を任せる。見たところ多才だ。こき使つてやれ」  
「それでは父様！」

「ああ、巖勝を鬼殺隊見習いとする。一年後の最終選別まで面倒を見てやれ。房綱も今までご苦労。引き続き私と隊士の統率をしてもらう」

「……分かりました。お供します」

房綱は指示に従う。しかし内心は荒れ果てていた。対して、薫は傍から見ても頗る機嫌が良かった。二人を置いて正寿郎と房綱は指揮に向かう。途中何回か房綱は振り返ったが、終ぞ薫は気づかなかつた。

「という訳だ。薫、これから世話になる」

「ええ！ こちらこそよろしくお願いします！」

二人して微笑む。余計な言葉は不要。互いに互いが望み通りの結果になった。今はそれで十分。

## 人物紹介

継国巖勝（つぎくにみちかつ）

身長155cm 体重58キロ 十歳

本作主人公

髪を無造作に後ろで束ね、額には巖勝から見ても左上と右下に炎のような痣。

紫色の着物と黒い袴を着ている。

従来持っていた刀「蛟落天津」（みずちおとしあまつ）と日輪刀をそれぞれ両脇に差している。

実力は人間離れしており、月の呼吸を使用して鬼にならずとも三日月形の付随した斬撃を纏う刃を広範囲に飛ばして戦う。

しかし、人の範疇を超えていることは自覚しているので余り見せようとはしない。

月の呼吸はギリギリ漆ノ型まで使用可能。もちろん原作より斬撃の質や飛月の量は落ちている。

透き通る世界を展開することで、相手の次に繰り出す動きが予測でき、偏差撃ちならぬ偏差斬りが遠距離斬撃によって可能となる。

性格は義理堅く、マイペース。

今は鬼殺隊の中で序列を上げ、縁壺の家族を救うのが目標。

煉獄薫（れんごくかおる）

153 cm 体重不明 十三歳

今作ヒロイン

黄色を基調とし、先へ行くほど橙が濃くなるような髪色をボブカットにしている。

薄ピンクの着物と臍脂色の袴。その上に羽織を羽織っている。

容貌は整っており、女性らしい体つきをしている。

呼吸を使った型を巖勝との旅で身につけたが、今のところ威力の増大が見込めるだけ

で応用はまだ不可能。それでも十分強い。

鬼殺隊の中では実力は高い方。その佇まいと強さにより、物腰が丁寧で、落ち着いた人物として知られている。

巖勝に対してはそうではなく、今までであった男のように「嬢」女子として扱わず、対等、若しくは一人の「女性」として接してくれた巖勝には恋慕以上の感情を抱いており、感情豊かな素の性格が出ている。

巖勝以外の鬼殺隊に対しては、まだ、守らなければという義務は感じている。

継国縁壺（つぎくによりいち）

身長143cm 体重41キロ 十歳

主人公の弟

生まれつき痣があり、日の呼吸を操り、透き通る世界を使用して戦う。兄上と同じくチートキャラ。

原作とは違い、世界の憧れと兄への尊敬から家を出る。

家を出たあとは、原作通りうたと会って穏やかな日常を送りつつ、剣の腕を磨いている。

兄上は今頃何をしているのかとたまに考えている。

その兄上は絶賛縁壺を搜索中。

御門房綱（みかどふさつな）

身長162cm 体重60キロ 十四歳

黒い着物と白い袴を着用し、勾玉の首飾りをかけている。童顔である。

煉獄正寿郎の継子。風の型を使用し、次期風柱として有望株。

煉獄正寿郎は房綱を薫の護衛として、任務に同行させている。半ば許嫁として。

そのため、薫には鬼殺隊をやめて、自分の伴侶になって欲しいと考えている。

もちろん巖勝にはいい感情は抱いていない。

薫のことはまだ諦めていない。

煉獄正寿郎（れんごくせいじゅろう）

身長193cm 体重95キロ 三十三歳

薫の実の父

着物は上に行くほど赤が濃くなり、裾に行くにつれて白っぽくなっている。袴は黒色。

髪は背中まで届く。

子煩悩。

代々炎柱を請け負う家系である煉獄家の正当な当主。

任務で父が死亡したため、炎柱を継ぐ。実力は鬼殺隊トップクラス

子は二人おり、暢寿郎（ちようじゅろう）と薫である。

暢寿郎は任務で九州に行っている。

薫のことを特別気にかけており、薫を守るためには職権乱用も辞さない。現に有望株な房綱に目をつけ、継子にし、薫を任せる。

薫はこのことをあまりよく思っていない。



## 捌話 安息を遮る怪鳥

時刻は既に昼の四時頃。昇つてしまえばあとは落ちるだけ。太陽は地平線へと向かつていった。死屍累々とした戦場は静かに土へと還つていく。後の世には古戦場として語り継がれることになるだろう。

戦場から少し外れた丘の上に一本の大きな木が生えていた。その木を中心として辺りは緑が広がっていた。巖勝は立ちながら腕を組んで木に背中を預ける。薫は木の根元に座り込み、互いに体を休めていた。二人を暖かい木漏れ日が照らし、程よく冷たい風が潜り抜ける。

鬼殺隊の仕事は日が落ちてから始まる。鬼達は夜に死体の山を漁りに来るのだ。基本的に鬼は新鮮な肉を好むため死体は食べない。しかし早く強くなりたい鬼や鬼殺隊を狙う鬼はこういう所に集まってくる。日が完全に落ちきるまでは隠の仕事。戦場に無数にある死体を埋葬するのだ。日が落ちてからは鬼殺隊の仕事。任務開始時刻の七時過ぎくらいまでは仮眠を取ったりして体力を温存させるのだ。故に二人は堂々と休むことが出来る。

「わたし、巖勝君が鬼殺隊に入ってくれて凄く嬉しいです。巖勝君の呼吸法を鬼殺隊み

んなが身につければ、わたし達もつと鬼と戦いやすくなります」

「ああ。私もそう思っている。最終選別後にでも教えよう。まずはこの任務を完遂させるぞ。

……暫し体を休める。薫もそうしろ。何かあつたら起こす」

そう言うのと巖勝は二本の刀を腰から抜いて横に置いた。胡座をかいて座り眠りの体制に入る。そんな巖勝を見て、薫は膨れつ面を浮かべながら空を見上げた。単純に彼女は巖勝ともつと話したかったのだ。しかし逆を言えば巖勝が薫を信用しきっており、そのためこうして傍で眠ったということ。それはそれでいいと満足する。

(……)

薫は巖勝の顔を覗き込み、熟睡していることを確認する。周りに人影はなく、この瞬間、彼は薫だけのものであった。ゆっくりと巖勝に肩を寄せ、撓垂れる。目を閉じ、体を預ける。自然と顔がにやけた。もしほかの隊士がこの顔を見れば別人だと錯覚するだろう。

「……巖勝君はずるいね」



巖勝はふと目を覚ました。肩にかかる重みから横に目を向けると、薫が眠っており、スウ、スウと微かな呼吸音が聞こえた。微風が彼女の髪を揺らしている。巖勝は目を見開き、鼓動が加速する。触れた肩に熱が集中した。彼女特有の甘い香りが脳を揺らす。火照る体と湧き上がってくる保護欲。一瞬とはいえ、守りたいとそう思ってしまった。

「……薫はずるいな」

巖勝は無意識に薫へと手を伸ばす。髪をひと房、片手で包み込むようにして優しく梳く。薫は眠りながら、擦つたように口角をあげた。見上げると、夕日が空を焦がしている。これよりは大禍時。この戦場は阿鼻叫喚の地獄と成り果てる。これだけ大きな戦場となると当然集まってくる鬼も多く、強い。隠達が埋葬しきれなかった分を戦場の中に集め、守りやすくしてくれている。

「……薫。起きろ、あと少して任務の時間だ」

「……ん……あ……おはようございませぬ巖勝君」

とても気持ちよさそうに眠っていたので、罪悪感を感じながら巖勝は薫を起こした。直ぐに薫は起きて目を擦り、小さく欠伸をした。巖勝は傍に置いてある刀を両腰に差し直し、伸びをして凝り固まった筋肉を解し動かした。薫も髪を結び直すなど支度をして立ち上がる。

「往くぞ、薫」

「はい！」



「鬼殺隊！ 集合！」

他の鬼殺隊より先に巖勝達が先に正寿郎の元にたどり着き、ちやうど正寿郎が掛け声を発した。ぞろぞろと鬼殺隊が集まってくる。数は三十人程度、これでも多いほどだ。鬼殺隊は死亡率が極めて高いため顔ぶれがよく変わる。故に巖勝が訝しげな視線を飛ばされることはなかった。既に太陽は落ちかかっており、暗がりが増していく。直ぐに鬼が動き始める時間だ。指揮を執る正寿郎は鬼殺隊の注目を一点に集め、作戦の概要を伝える。

「皆、簡潔に説明するぞ！ 本陣に隠と埋めた死体がある。私たちの任務はそれを守ることにある。負傷した場合は本陣に駆け込め。各自警戒を怠るな」

「[[[[[[おこー]]]]]]」

鬼は基本的には群れない。こういう場合少しずつ攻めてくるため、休み休み交代する

ことで戦線を維持するのだ。

しかし何事にも例外は存在する。長い年月を生き、より多くの人間を食べた鬼がそうである。有名所だと酒呑童子や茨木童子が挙がる。それらは弱い鬼を纏めあげる強さがあり、運が悪ければ派遣された鬼殺隊がただでさえ人より強い鬼に群れで襲われ壊滅する。加えて纏めあげる鬼も一級である。となると必然的に勝負は鬼殺隊が朝まで耐えるか、迅速に鬼を殲滅するかの一択となる。

「たつた今、隠より鏖鴉で連絡があつた。鬼の総数は十前後。しかも鬼を纏めあげている存在がいるらしい。特徴からしてこの当たりを縄張りとする鬼・以津真天だろう。向かつてくる鬼を狩り尽くした後、以津真天が現れなければ、短期決戦を仕掛ける。いいな」

この時代十二鬼月はまだいないものの強い鬼には無惨自ら名前をつけ、多くの血を与えていた。鬼は意気揚々と自らの名前を晒す。故に悪名高い鬼は名が知れ渡り、鬼殺隊は鬼の強さを名前付きかどうかで判断していた。



時刻は真夜中。巖勝が気配を探っていると。空気が僅かに揺らいだのを感じた。巖勝は気を引き締めた。程なくして近場の森から鬼達が現れる。ギラついた瞳に食欲を写し、死体の山が本陣に集まっていることを優れた嗅覚で知覚したらしい。本陣に向けて進行してきた。

それらを正寿郎の鏖鴉が目撃し、正寿郎に鬼の出現が伝わる。

「全員！ 戦闘態勢！」

正寿郎の号令が響き渡る。鬼殺隊が各々刀を抜く。因みに巖勝は薫と共に本陣の最終防衛線を守護する役目である。鬼は合計十一匹。十四以上となると死闘は必然である。

首魁である以津真天もその体軀を月明かりの下に晒し、鬼達の後方の木に泊まり、鬼殺隊を睥睨している。橙の羽毛に爛々と光る黄色く濁った目、曲がった嘴に鋸のような歯が並び、体は蛇のようで、爪は鋭く、その横幅は翼を広げれば五メートルにもなるだろう。まさに怪物。

正寿郎は命令を下す。以津真天も鉤爪を鬼殺隊に向ける。

「一匹に対して、三人で応戦しろ！」

「……殺せ、皆殺しだ！」

正寿郎の号令で鬼殺隊が徒党を組み、本陣を守るように広がる。

対して、以津真天の命令により、鬼の群れが大地を踏み鳴らし、突貫してくる。それはまるで獣の群れのようなであった。

そんな中、一人敵の中につつまむ影があった。

「づあつー！」

「……グギギイイ!!」

紛うことなき正寿郎である。誰よりも速く走り、一匹目の首を裂破の勢いで切り落とした。柱の名前に恥じない勢いである。

「よし。皆、持ちこたえろ！」

生き様は何処までも頼もしく、何処までも強い。炎の揺らめきのような羽織を靡かせ、日輪刀の切っ先を鬼の群れに向ける。士気は最高潮に高まる。自分達にはあの炎柱がついている。

正寿郎を皮切りに所々で戦いが勃発する。

……

「……ふんっ!! 今だ甚七！」

「…………ウグツ…………腕が！」

「…………おらア！」

「…………ギイ…………！」

「よし！ よくやった甚七！」

違う所では房綱が腕を切り落とし、房綱の同期である久武甚七が連携して鬼の首を切り落とす。そうやって連携しながら鬼殺隊は着実に鬼の数を減らしていった。数では圧倒的に鬼殺隊が有利。力の差を数の差で埋めるのは戦場の常である。

しかし…………

「ぐっ…………っ！」

「やはり人間は弱いなあ!! まるで相手にならん！」

房綱達が目視できる範囲内にいる隊士が、容易く、鬼の爪に腹を貫かれ、崩れ落ちた。もう助からないだろう。房綱は激昂した。見知った顔が突然死ぬことは房綱も経験してきたが、彼が仲間の死に慣れることは一生無いだろう。それは美德に変わらないが理性を失うことは戦場において悪手ではない。

「貴様…………！」

「止せ、房綱！ 俺たちから離れるな！」

「…………くっ…………悪い、甚七」



「なんだなんだ？　いくら人間が増えたところで俺様には敵わんぞ」

隊士を殺した鬼が房綱に近づき近づいてくる。この鬼は群れの中では以津真天の次くらいに強いのだろう。房綱はそう判断した。それ程迄に鬼の放つ威圧感は凄まじかった。肌は灰色、筋肉質な体躯に爪は返り血で赤く染まり、不衛生な髪をその長さのまま垂らしている。幽鬼であつた。房綱は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

「ふうう………はああああ」

房綱は刀を構え、呼吸を整える。横目で甚七の方に目をやると、甚七は頷いた。二人は覚悟を決めたようだ。鬼がゆつくりと近づいてくる。鬼が爪を掲げると爪が伸び、鋭利な凶器と化した。仲間もあれに貫かれた。一本一本が鋼のように硬く、鋭い。無事に倒せるか定かではなかつた。

そして、

- ・ 炎の呼吸　壺ノ型　不知火　・

房綱の真横から飛び出した一条の炎閃が、鬼へと突貫する。速度は房綱の目で追えるのがせいぜいだった。

「…………ぐおっ!」

咄嗟に防御した鬼の右腕が、軽々と切断される。突如として現れた強者に鬼が勢いを失う。房綱の目の前で彼岸花の羽織がはためいた。たつた今鬼の腕を切り落とした剣士。振り向いたその顔は房綱の見知ったものであった。

「…………まさか、薫か!」

「房綱さん。ここはわたしが引き受けます。その間にあなたは他の隊士を援護してください」

「だが…………」

「………………………」

「…………わ、分かった」

(何だ、あの目は!?! 俺はただ薫を心配してあげただけだ……………! なのになんで……………)

戦いに乱入した薫は房綱に戦線を離脱するよう言うが、房綱は渋る。しかし房綱は見ただことのない薫の顔に言葉を失った。薫の表情はなんの感情も読み取れなかったのだ。目は房綱の姿を見ていなかった。房綱はこの時初めて薫に助けられた。今までは自分が助けていたのだ。それはまるで、房綱の実力が自分以下になったことに失望してい

るかのようにだった。

(……くだらない、わたしも巖勝君の所に行きたいのに、巖勝君の頼みだから引き受けたけど、早くこの雑魚を殺して巖勝君の所に行こう)

(一撃で俺の腕を落としただど？ これは戦いがいがありそうだ)

薫の背後で房綱が仲間と共に走り去っていく。薫は房綱が離れたのを確認し鬼に向き直った。そして刀を肩に担ぐように構える。

鬼が笑みを深くする。

「見るからに強者だな？ 名を名乗るがいい、女」

「これから死んでいくモノに名乗る名前などありません。散りなさい」

「ふははっ！ ぬかせえ!!」

薫と鬼が衝突する。

全体の戦況は鬼殺隊が有利。確実に言えることは柱の存在が鬼殺隊に勢いを与えているということだ。しかし、他にも薫の戦いぶりは鬼殺隊を奮い立たせていた。



薫と鬼が戦い始めた所より遙か前線の森では正寿郎が以津真天に狙いを定めたところであった。正寿郎は以津真天の大柄な体軀をもともせず枝を足場にして距離を詰める。以津真天は、間合いに入れば秒で首を切られる。目の前の男からそう感じとつた。

「お前、柱だな……忌々しい！ だが！」

正寿郎の攻撃が届きそうになる直前で以津真天は飛び立ち、戦場の真上で旋回し始めた。それに気がついたのは正寿郎のみ。

「待て！……ちっ……皆、空からの攻撃に気を配れ！」

声を上げるが、空という文字通り次元の違う場所に居られては鬼殺隊になす術はなかった。実力があるとはいえ、現に目の前に鬼がいるというのに空に気を配るほど器用ではない。

間もなく蹂躪が始まる。

？ 血鬼術 鳴吼鎌？

以津真天は自身の血を刃に変える。そして翼で巻き起こされる暴風により広範囲に撒き散らす。所謂空からの広範囲遠距離攻撃。隊士達は刀で受けようとするものの、血刃の数が多く、腹や足を切り裂かれる。当たり所が悪く、遂には命を落とすものさえ現

れた。対して鬼達は以津真天の血鬼術に巻き込まれたもののすぐに回復し、今の攻撃で負傷した鬼殺隊に襲いかかる。

これが以津真天の目論見であった。天と地。双方から攻めればどれだけの数がいよると同じこと。刀の間合いでは圧倒的に届かないからだ。鬼の数は初期からは半減したものの、鬼殺隊の大半が負傷し壊滅は時間の問題だった。以津真天はほくそ笑む。

(問題は柱だが、さすがに空には攻撃できまい。それに今の攻撃で負傷した隊士達を他の鬼から守るのに忙しいようだ)

「さて、もうそろそろ儂もご馳走にありつこうか」

以津真天が堂々と本陣の空まで飛び渡る。

それを見て、刀を構える剣士が一人。

以津真天は気づいていない。いや、気づけない。空は彼の物。誰にも犯されない領域である。弓矢は威力が低すぎて傷もつかない。この時代、火縄銃もまだ普及していない。

「忌々しい鬼狩り共め。有象無象だが半分まで減らされた。こんなに鬼を集めるのにどれだけ苦労し……」

・月の呼吸 肆の型 虧月突・

以津真天は気が付かない。気が付くのは攻撃が当たってから。

「……なっ!? ぐエッ……!!」

(……は!? か、刀だと……!? しかも日輪刀では無い!?)

刀が一縷の月光となって、以津真天が察知出来ない速度で右翼の付け根に突き刺さる。刀は上手く骨を砕いている。投擲した主は意図してそうしたのだ。まるで体の何処につき刺せば、致命的か理解しているようだった。

翼を砕かれた以津真天は上手く飛ばず、刀を抜こうと藻掻くうちに高度を下げてしまふ。刀の主がそれを逃すはずもない。

・月の呼吸 陸ノ型 常世孤月・無間

「いぎイ……………」

(ば、馬鹿な!? 空だぞ! 文字通り間合いなんて次元じゃない! 敵に鬼でもいるのか!?)

たかが一振、されど一振。巖勝の日輪刀から放たれた飛ぶ刃が以津真天の体を蹂躪する。流石に以津真天は飛ぶことが不可能になり、天から堕ちる。安全な天から、危険な地へ。いや、天すら安全ではなかった。

「まずい! 誰にだ!? 誰に斬られた!? 全く気配を感じなかった! 早く翼を再生させなければ……………」

以津真天は背後に気配を感じる。空は彼だけのものではなかった。

「その声、甚だ不快だ」

・月の呼吸 壱ノ型 闇月・宵の宮

「…………ツ! ……」

投擲した主・巖勝は刀を収め、柄に手をかけながら、呼吸を使つて高く跳躍した。そして以津真天が地面に届く前に頸を頭ごと抉り飛ばした。そして難なく地面に着地し、遅れて以津真天の体と首が鈍い音を立てて地面に落ちた。

夜が鎮まる。

残った鬼たちは首魁の死を感じとり、蜘蛛の子を散らすようにして退散して行つた。偶然、そばに居合わせた正寿郎は巖勝に修羅のような覇気を感じとり、戦慄する。

「……巖勝、お前は……」

「私は鬼ではありません。そういう技です」

「いや……そうか。すまなかつた、これで任務完了だ。今回の功労者はお前だな巖勝。御館様にも報告しておこう。しばし休むとよい。埋葬などは隠に任せておく」

「ありがとうございます」

正寿郎は巖勝を労つて、去っていく。暗にその背中が薫を任せたと云っているような気がした。

(薫は無事だろうか、房綱殿と仲がいいとは隊士の声から聞こえていたから向かうよう勧めたが……醜い嫉妬だな。早く薫を探しに……)

「巖勝君！」

巖勝はすぐさま振り向いた。自分の聞きたかつた声自分が聞きたかつた言葉を言ってくれたことに内心歓喜するが、そんなことはおくびにも出さずに巖勝は微笑ん



だ。

「薫か。無事で何よりだ」

「はい！ 巖勝君もご無事で何よりです！」

互いの無事を確かめ合う。初めて任務がすんなりと終わったのは僥倖であった。巖勝は透き通る世界で薫の体を見る。どこにも傷はなく、それどころか呼吸をより上手く扱えるようになっていた。

「父様に聞きましたよ、巖勝君。鬼の首魁を倒したのですね！」

「薫も今回倒した鬼の数は正寿郎殿と並びそうな勢いだっただ」

（だって早く終われば、巖勝君に会えますし……）

「そうなんです！ 褒めてください！」

薫は徐に頭を巖勝に寄せる。暫し硬直した巖勝だが、周囲に人がいないのを確認すると、薫の頭に手を被せる。

「ああ、よく頑張った薫。本当によく頑張った。………まだ続けるか？」

「もちろんです！」

暫く続けていたが、人の接近を察知した巖勝は撫でるのをやめる。薫は落胆したものの、人の接近には気づいていたのと、巖勝に変な噂が立つのを危惧して、人が来た方向に開き直る。隠が走ってこちらにやって来ているのが見えた。

「正寿郎様より伝言！ 『薫、巖勝。任務ご苦労であった。戦後処理はこちらでやっておくため、二人は里に戻り、薫は巖勝を案内してやれ』との事」

そう言つて隠は去つていった。

「また二人つきりですね。巖勝君」

「ああ、楽しい旅になりそうだ」

「ふふっ。ええそうですね。本当に」

## 玖話 鬼殺の里

「……やつとか」

「え、ええそうですね。正直わたしもこんなにかかるとは思っていませんでした……」  
「ふっ……しかし長閑でいい所だな」

鬼殺の里に着いた二人。道中は両方とも目隠しと耳栓をされ、外されるのは隠の使用する宿の中に入った時だけだった。後は全部隠の引く牛車に一週間前後ずっと引かれるだけであつた。これでは二人旅も何もあつたものでは無い。

疲れ果てている薫を他所に、巖勝は里を觀察する。一見普通の村のようだが、その実態は藤の花に囲まれた秘境。比較的簡素な家々が立ち並ぶ。寝泊まりのための家など数える程しかない。

鎧鴉を調教するための家。

隠を育成する設備。

食料保管庫。

それら全てが緊急の引越しがしやすいようにしてある。正に実用性のみを求めた

里。これまでも何度か引越しを迫られたことがあったのだろう。そうやって巖勝が一人観察していると、隠が近寄ってくる。

「失礼します、巖勝殿とお見受けします。御館様がお呼びのため、ご同行ください！」

産屋敷耀哉直々のご指名且つ顔パスである。見た目は少年な巖勝に対しても敬語を使う。言い方は悪いが鬼殺隊の消耗品として徹底して教育されている。巖勝は身震いした。漫画だからと受け入れていたが、これではまるで洗脳教育と変わらない。人ならざるものを殺すには、此方も人ならざる所業を積み重ねなければならぬということ。

「……わかった」

「いつてらっしゃい巖勝君。わたしはここの辺の宿で待ってますね」

隠に連れられて巖勝が去っていく。薫はその後ろ姿を見送った。彼女は含み笑いを浮かべていた。

(これで鬼殺隊での巖勝君の立ち位置は揺るぎないものになる。そうすればわたしは巖勝君と添い遂げても誰も文句を言えない。

でも巖勝君に余計な虫が着くのも嫌。早く、もっと私を好きになってもらわないと……)



巖勝は隠に連れられ、産屋敷邸まで歩みを進める。恐らく薫は呼ばれたわけを知っていたのだろう。というか巖勝にも簡単に想像がついた。巖勝の呼吸術のことである。薫も鬼殺隊に広めたがっていたし、何より現炎柱である正寿郎が目撃している。

(……原作より随分と早いな……大丈夫だよな……? まあいいか、呼吸を教える代わりに縁壺の搜索でも頼もう)

とりあえず巖勝は呼吸が広まる時期は原作の流れにはあまり関係ないと結論付ける。そもそも縁壺の妻であるうたを鬼から救えば縁壺が鬼殺隊に入隊して呼吸を広めることもない。だが縁壺を見つけるためには鬼殺隊の搜索能力に頼りたかった。恩を売って損はない。

数分歩くと、巖勝達は産屋敷邸の前に着いた。巖勝のみが入れるようで、連れてきてくれた隠は家の前で待機である。軽く礼を言つて巖勝は質素だが趣のある門扉をくぐり抜けた。

「此方へ。御館様がお待ちです」

今度は隠ではなく鬼殺隊が案内係である。砂利で舗装された道を歩くと玄関らしき所へと着いた。

(上がつてもいいのか……)

巖勝はまだそこまで警戒はされていなかった。警備が嚴重になるのは当代の産屋敷が原作の巖勝に殺された時である。その時に一気に改革したのだ。今の巖勝に産屋敷を殺す理由は毛頭ないのでどうなるかは分からなかった。原作の黒死牟としては敵の首魁の首を主に持ち帰るといった、侍的考え方から起こした行動なのだろう。

巖勝は客間に案内され、恐る恐る勧められた場所に正座する。目を閉じて瞑想していると、屋根裏と背後の襖に気配を感じる。片目を向けると微かな違和感がそこにはあった。忍が隠れているようだ。さすがに産屋敷もそこら辺はしっかりしているらしい。

## ★

巖勝が少し待っていると今代の産屋敷が入ってきた。護衛を二人連れている。だとしても例え巖勝が産屋敷を害する気持ちがあつて、刀を抜かれたとしても物の数ではない。瞬殺できる。

(武器も取られなかったのは予想外だったな。ならば……朱華ノ弄月で一瞬か)  
巖勝は物騒なことを考えながらも、座ったまま、深く頭を下げる。

「面をあげよ」

巖勝は顔をあげる。改めて今代の産屋敷と目が合う。四百年後とは違い、威厳に溢れ

ている。筋肉もあり、鍛えていることが伺える。だが、透き通る世界で見ると身体中が病の巣になっていた。これでは十年と経たずに死ぬだろう。

「私が今代の産屋敷当主、産屋敷終哉だ。

お前の活躍は聞いている。継国巖勝。継国の跡取りだが失踪。鎌倉への道中で鬼を倒し、煉獄薫と合流。その後、鎌倉で煉獄正寿郎率いる鬼殺隊と共闘し、名付きの鬼、以津真天を討伐したと報告にある。一先ず、名付きの鬼・以津真天の討伐ご苦労であつた」「お褒めに預かり光栄でございます」

「うむ。でだ、私が巖勝をここに呼んだ理由はもう察していると思う。単刀直入に言うが、その呼吸法とやらを柱達に教えて欲しいのだ。報告によれば超常の力を振るえるそうではないか。それがあれば鬼殺隊の戦力の底上げに繋がるだろう。もちろん、こちらとしてもできる限りの事はさせてもらおう」

「……ならば、一つだけお願いしたいことが御座います」

護衛二人の気が揺らぐ。一介の鬼殺隊、それも数日前に鬼殺隊見習いになったばかりの新米が御館様に意見するのが気に入らないのだ。産屋敷は本人は戦闘能力こそ皆無なもの、人の心をつかむ術は長けていた。この時代の産屋敷も配下からの忠誠を集めているようだ。

部下の怒りを産屋敷は目配せして黙らせた。

「すまん……では申してみよ」

「……私の弟。継国縁壺を搜索して欲しいのです。彼は私の弟。しかし家を出ていったきり帰ってきませんでした。縁壺は私と同じ呼吸の使い手、しかも彼が起源です。必ずや鬼殺隊のお役に立ちましょう」

「……そうか、分かった。こちらとしても戦力が増えるのは嬉しいことだ。至急取り計らおう」

「ありがとうございます」

（案外すんなりと通ったな）

「ああ。早速だが明日は柱合会議の日でな、その時に巖勝にも出席してもらおう。かくいう私もその呼吸とやらを自分の目で見たいのでな。柱とも模擬戦をしてもらおう。私を失望させるなよ」

「……」

巖勝の真顔が固まる。だがもう後には引けない。

「御意」





巖勝は門をくぐって、産屋敷邸を後にする。

（今代の柱か、楽しみでもあるな。縁壺搜索も頼んだし、鬼殺隊の情報収集能力で見つけてくれるだろう。次の目標は……特に無いな。強いて言えば無惨が私に勧誘してくるまでにさらに鍛えなければ、鬼になつてもある程度、支配に対して抵抗ができるように）  
巖勝は今後の方針を決定する。しかし、とりあえずは次の日の柱合会議である。気持ち行きよりも早歩きで薫の言っていた宿に着くと――

ひよつとこがいた。

「初めましてだね。儂は弔替八尋。日輪刀の刀鍛冶さね。御館様直々のお願いで、お前に日輪刀を打ってきてやった。というか前もって打っておいたやつさ。

素材となった狸々緋砂鉄と狸々緋鉈石は何れも他とは違つて苦労して富士から取つてきたやつさ。普通は陽光山から取つてくるんだが……そんなことはどうでもいい。

儂の人生の中で最高で最後の刀だ、さあ、抜いてみな」

ひよつとこはお面であり、刀鍛冶の里の者は総じてつけている。巖勝が見たところかなりの年齢を重ねた老婆であつた。体軀も衰えてはじめているが技術は本物。

家の中には薫もいたので、二人で話していたのらしい。二人の間には祖母と孫のような雰囲気が漂っていた。巖勝は自分の腰に差してある予備の日輪刀を脇に置く。八尋はそれを引つ掴んでしげしげと観察していた。

（刀に細やかな傷。最近できたものだね。一体どうやったたら刀の表面に傷がこんなにしっかりとつくのかね）

八尋は既に巖勝が只者では無いことを察していた。目の前の老婆がそんなことを思っているとは露知らず、巖勝は渡された日輪刀を凝視していた。

(うおおおおお！ すげえ!!)

巖勝のために作られた。彼専用の刀。柄は黒い紐で編まれた黒一色の意匠を凝らし  
ている。鏝は秋草文様で彫られており、鞘は黒い光沢のある下地に金の彼岸花が描かれ  
ている。男であるのなら興奮せずにはいられなかった。刀を上に向け、柄を握り締め、抜  
刀する。途端に蒸気のようなものを上げて刀身が根元から紫色へと変化する。仄かに  
発光しているそれは幻想的な空気を醸し出していた。

「やはり紫か……」

「は？ ……」

「……巖勝君のは紫色？」

(月の呼吸は紫だったか、強く握れば全ての日輪刀は赫刀になるのだった。もし赫刀が  
使えるようになったら、刀から月要素は完全に消えるな……日の呼吸以外はそうなる  
か)

巖勝の困惑を他所に弔替は狼狽える。呼吸が乱れ、動揺を隠せていなかった。

「どういうことだい!? 日輪刀の色が変わるなんて聞いた事がない!」

八尋は巖勝が持っている日輪刀をひったくるように奪う。その刀身を隅から隅まで  
観察した。それは目線で刀の方が折れそうな眼力だった。

「あの一。弔替さん、わたしもなんですけど……」

「はあ!? なんだつてえ!? 抜いて見せな!」

「は、はい!」

薫も慌てて抜剣する。刀身は熱を持っているかのように橙色に輝いている。八尋は日輪刀を巖勝へと返す。今度は薫の日輪刀に惹き付けられた。数秒後、丁寧に薫へと日輪刀を返した。

そしてぐったりと天井を見上げるようにして倒れた。

「……………どういふことだい……………」

「……………恐らくだが私と薫は特別な呼吸を使える。それが影響したのだろう」

「……………もう驚かないさね。はあ……………長生きはしてみるもんだね。とりあえず儂は帰る。この事実を御館様と刀の里の奴らに伝えなきゃいけないからね。……………巖勝とやら、その刀、折りでもしたら喉元をかつ捌いてやる。いいね?」

「……………肝に銘じる」

「……………ふん」

弔替は巖勝を軽く脅迫して出ていく。少し早足だったのは早く伝えたいからである。いつの時代も刀鍛冶は刀を折られるのはご法度らしい。巖勝は抜き身の刀を鞘に収めた。

「……………それで? 巖勝君! 御館様とは何を話したんですか!?!」

薫は待ちきれない様子で巖勝に問いかける。もはや刀の事など眼中に無い。彼女は正座の姿勢から流れるように手をついて四つん這いで近寄った。質問の為に傾けた顔は、期待に満ちていた。何となく巖勝は恥ずかしくなつて目をそらす。

「明日の柱合会議で柱達に呼吸を教えて欲しいと言われた。断る謂れはないので受けた」

「ありがとうございます！ これで鬼殺隊は強くなります！」

（鬼殺隊つていうか巖勝君が名をあげれば煉獄家のわたしと釣り合うという印象をもたせられる。そして一緒に任務に行く回数が増えれば巖勝君も……）

巖勝に顔を近づけたまま考え出した薫。居た堪れなくなつた巖勝は窓の外を見る。空には朱が差していた。いつの間にか夕方になつていたらしい。もうそろそろ就寝の時間だろう。

「とりあえずは明日だな……私はここが宿として割り当てられているが……」

「偶然ですね！ わたしもここが宿ですよ！」

「……そうか、ならば……私は彼処の部屋を使わせてもらおうとし」

「何処へ行く気ですか？」

薫が巖勝の裾を掴んでいた。巖勝が珍しく焦燥を顔にする。顔はこれでもかという程に引きつっていた。対して薫は万遍の笑み。目だけは笑っていないかったが。

「待て。それは色々とまずいと思」

「いいじゃないですかあゝ何も起きないですって。……それとも巖勝君はなにかするつもりなんですか？」

薫は自然と寝転がる。湯浴みでもしたのか、湿った髪が畳に広がる。得意げに微笑んだ顔は夕日のせいなのか少し赤くなっていた。挙句の果てに寝転んだまま巖勝に向けて両手を伸ばす始末。巖勝の理性は縁壺の赫刀でズタズタに引き裂かれたように、瀕死であった。しかし、

「……もしそうだと言ったら？」

「ふえ？」

巖勝は澄まし顔で薫に問いかける。勿論内心は動揺して、顔が真っ赤になりそうであつたが「透き通る世界」を全開にし、顔への血流を極力通常に抑えた。なんとも無駄な使い方ではある。なんと効果は靦面であつた。薫は驚きの余り、両手を後ろについて上体だけ起こす。巖勝は薫に近づくと、

「うえっ!! わ、わたしは……」

(なんで誘惑が効いていないの!? しかも今の発言って!)

方やあたふたと手を動かす薫。方や真剣な顔(内心大慌て)で近づくと巖勝。薫は目を瞑ってしまう。

「氣迷っているんだつたら見栄を張るのはやめろ。」

……せめてもだ、そちらの部屋が空いている。布団を引くから襖を閉じて休むように。でないとい……」

「え? ……わっ!! ……っ! わ、分かった! わかりました!!」

巖勝は薫を横抱きにする。俗に言うお姫様抱っこである。薫は頭が沸騰し、真っ赤に染つて何度も頷く。巖勝は部屋を跨いで移動する。そこに薫を優しく下ろし、襖を閉じる。

「……」

巖勝は透き通る世界を全開にしても、額に朱が差し始めていた。それ程までに理性が決壊を迎えそうだった。なんとかして気持ちを落ち着かせる。先程のことを考えながら布団を敷き、先程のことを考えながら着替えて横になる。

（でも……あれは……反則だ！ 頬も柔らかそうだったし、それに、首筋も……！）  
目を閉じても瞼の裏に浮かぶのは薫一色。今晚は寝られそうになかった。

……

（わああああ?!?!?!）

それは薫も同じであった。布団にくるまりながら足をばたつかせる。が、余計に熱くなるだけである。頭だけ布団から出しても自然と目が向くのは巖勝の部屋の襖。

（やばい、明日どんな顔してあったらいいの!?! この胸の高鳴り……二人で朝日を見た時の比じゃない!）



それでも夜が更けていく。

## 拾話 柱の実力

柱合会議当日。

巖勝は薫に見送られ、朝早く宿を出て行つた。朝のおはようから巖勝が出ていく行つてらつしやいまでほぼ無言であつた。目が合えば必ずどちらか一方が目を逸らした。未だ二人とも昨日の出来事が痼となつていたのだ。

(四百年前の柱。楽しみだ。炎、岩、水、雷、風がいることは承知の上……個性もとんでもないのだらうな)

巖勝は期待と僅かな不安を抱えて、隠の案内で産屋敷邸に向かう。客間で待つてゐると柵哉が護衛と共に迎えてくれた。巖勝は両手について頭を下げる。

「継国巖勝。只今参りました。そして日輪刀を支給していただき感謝します」

「うむ。今日は宜しく頼むぞ。随分と早く来てくれたな。庭が無駄に広いのでな、そこで披露してもらおう。柱はもう集まっているから、柱合会議の後に報告にあつた飛ぶ斬撃とやらも見せてもらうつもりだ。それと昨日、弔替が血相を変えてやつてきたが、何やら日輪刀の色も変わるらしいではないか。それも合わせて見せてもらおう」

「御意」

柀哉は庭に移動する。巖勝は奥の部屋で待機を命じられた。少し隙間から覗いてみると、原作のように白い砂利が美しく、植物も植えられ、整った庭であった。巖勝はどう説明するか考えながら、気長に待つことにした。何となく腰に差している日輪刀の柄を押し上げると、昨日と変わらぬ紫紺の仄暗い燐光を放っていた。



巖勝の耳に柀哉が柱達に軽い説明をする声が聞こえる。そろそろ巖勝の出番のようだ。気配は五つ。その全てが並々ならぬ強者の雰囲気。

「——という訳だ。巖勝、来なさい」

襖をあけ、少し歩いて、縁側に座り直す。片膝を着いて顔を上げている柱達の視線を集める。

「只今紹介にあずかりました。継国巖勝と申します」

一礼して顔を上げる。

(おおお……)

錚々たる顔ぶれ。射抜くような視線は品定めのものに近い。巖勝が想像よりも遙かに若かったのが理由である。体格、服装、髪色も様々。共通点なんてほぼないに等しい。炎柱である正寿郎。やはり一番の巨漢である。

水色の下地に雲が描かれている着物を纏う黒髪の男剣士。恐らく水柱。

黒髪に黒い着物、白い袴。風の型を使う房綱の親族、おそらく父に当たるであろう風柱。

輝く金髪を持ち、興味津々で巖勝を見ている女剣士。黄色い着物を着ている。恐らくは鳴柱。

目付きが鋭く、身長も女性にしては高め、茶髪を後ろで一纏めにし、緑色の着物を纏う気の強そうな女剣士。消去法で岩柱。

原作のように個性が質量を持って押し寄せてくる。

「巖勝については今言った通りだ。まずは巖勝の日輪刀を見てもらおう。巖勝、抜刀を許す」

「はっ……それでは失礼仕る」

巖勝は柀哉の許可をもらって日輪刀を抜く。抜き放たれた刀身は、紫紺が吸い込まれそうな輝きを放っている。柱達の中には感嘆の声を洩らす者もいたが、大半は無言である。巖勝は言外に呼吸を早く見せろと言われている気がした。

「……ほう。それが其方の呼吸の傾向とやらで色が変わった後か」

柀哉が目を輝かせる。

「はい。ある程度の剣術と呼吸の適正により色が変わります。呼吸を身につけていけば、柱の皆様方の日輪刀も色が変わるでしょう」

「……素晴らしい……！ とりあえず呼吸を見たい。……持つてまいれ」

「……し、失礼します!!」

隠達が数体の藁人形を持つてくる。彼らも柱全員の目線を貫っており顔が蒼白くなっている。四百年前髪でも柱の威光は健在である。隠たちによって庭に並べられた藁人形。それらは稽古用にはかなり太い。

「巖勝、これを的にして良い。呼吸と型を合わせた技で切ってみせい」

終哉の許可が下りる。巖勝は庭に下りて、藁人形に向き直る。

「わかりました」

——ホオオオオオオオオオ

巖勝は藁人形からあからさまに5メートル離れて刀を構え、呼吸を始める。身体の筋肉を意識し、血管を膨らませる。柱たちは巖勝の雰囲気の変化に目を見張る。

（既に肉体以外は剣豪の域か……）

（聞いたことの無い独特の呼吸音だ）

（……ん？ どう見ても間合いの外やけど……）

（初めて見た時もそうだったが、……巖勝はやはり天才だな、娘が執着するのも頷ける）

（額の痣はなにか関係があるのか？）

そして……

・月の呼吸 陸ノ型 常世孤月・無間・

紫紺の刀身が縦に一振される。その一閃には斬撃に蒼い三日月が付随していた。超  
速で藁人形に到達し、完膚なきまでに蹂躪し尽くす。

「なっ……！」

「……………これは凄まじい」

「……………」

「流石だ。巖勝」

「……………まるで鬼だ」

柱がそれぞれ声を漏らす。中には日輪刀に手を伸ばした者もいた。特に水柱は畏怖  
と嫌悪が隠しきれしていない。彼の同期の命を奪った鬼の血鬼術に酷似していたのだ。

「由重、巖勝は鬼ではない。私が保証しよう」

「……わかりました」

産屋敷が聞きかねて戒める。水柱はまだ不服なようだが産屋敷への忠誠が納得させた。感情も闘気もない幽鬼のような人間が、血鬼術のような芸当をして見せたのだ。無理もないと巖勝は同情した。一撃で藁人形を全て切ったので刀を収め、柱達に向き直る。

「……というふうな感じですよ。ちなみに刃が飛ぶのは私の呼吸ならではありません。柱の皆様も身につけていただければ日輪刀の色が変わり、鬼にも遅れを取りにくくなります」

「奇つ怪な話だが、人の身かつ我らより年下の者がその一閃を放てるのであれば信じるに値しよう。では早速……」

「……待てよ!? 人ならば斬撃が飛ぶのはおかしい! それに額のあの痣、不吉の象徴ではないか! 御館様、俺はこいつの言うことはあまり信用できません!」

柱達は強さを求めるのに手段を選ばない。血反吐を吐くような努力も、骨が軋むような鍛錬も当たり前。呼吸法を変えることで鬼のような力を振るえるのであれば飛びつくのは道理であった。勿論異議を唱えるものもいる。

(……散々な言いようだな。だが気持ちはわかる。他の柱達も訝しげだ。正寿郎殿は信用してくれているが、共闘した補正もあつての事。彼も初見ではすっかり鬼だと疑われ



たしな……)

「ならば由重。巖勝と稽古してみろ」

「！」

柱達に緊張が走る。百戦錬磨の柱と鬼殺隊になりたての巖勝。そこには体格差や経験といった埋められない壁があるのだ。確実に巖勝が負ける。そう考えたのだろう。

「……構いませんが、斬撃を飛ばされては素の実力が測り切れません」

(……正論だ)

「では巖勝。申し訳ないが其方の使う月の呼吸以外で稽古してくれぬか？ 其方は昨

日、呼吸は弟殿の呼吸が起源と申していた。弟殿の型で稽古してみてはくれぬか？」

「……わかりました」

(一度も使っていない訳じゃない。そりゃ原作最強の型だから試しに使ってみはしたが、相性が悪すぎて、私の体が拒否してしまう。短期決戦だな)

そう考えながらも、稽古とはいえ実戦で日の呼吸を使うことに巖勝は高揚感を覚えていた。円環を成す太陽は巖勝を魅了して見せたように、柱達もを魅了するのだろう。

水柱・新見由重が刀を構える。

巖勝と対称的に色は着いていないが、気迫は十分。体格差は呼吸を使つて無理やり埋める。それで漸く互角以上。巖勝も抜刀する。日輪刀ではなく二本目の刀、「蛟落天津」を右手で抜き、左手は鞘を握る。双方、自然体で構える。

由重は流れ落ちる滝のような怒涛の闘気。巖勝はただそこに「在る」植物のように闘気を発さない。

「……始め！」

柊哉が合図を送る。先に動いたのは由重だった。

「はあっ！」

(動きからして、参ノ型 流流舞い だろう。速攻で決めに来るとは警戒されたものだ。これを圧倒せねば印象を刻むまでにはならないか)

——ゴオオオオオオ

今度は巖勝の口から、燃え盛る豪炎のような呼吸音が漏れる。

・日の呼吸 陸ノ型 日暈の龍・頭舞い・

「なっ……!」

流れる水は、太陽の前では全て無力。

巖勝は透き通る世界で予知した由重の動きの上から、被せるように踏み込む。そしてそのまま太陽の如き輝きをもって、切り続けた。

「……! 由重が押されているだ?!」

「巖勝……まるで精霊のようだ」

柱も関心を寄せる。経験ではない。一片の曇、僅かな癖が何一つとしてない巖勝の動き。正しく天才。だが本当は努力の塊。巖勝にとつての天才は弟のみ。だが不思議と悪い気はしなかった。むしろ自分が褒められているように嬉しい。

「っ! ならば……!」

由重は型を変えて対抗する。

(次は拾ノ型 生生流転か、回転を重ねる前に止めるのが得策か。……分かってはいたがやはり体力の消耗が激しいな)

・日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽・

巖勝は刀を合わせて、回転を止めようとした。

「くっ、おらア！」

由重に力技で突破される。体格差は歴然。流れが抑えきれなくなる。現在進行形で由重の力は回転を重ね続け、増す一方。拾ノ型は回転を重ねる毎に威力が上がる型。止めないと手がつけられなくなる。

「……！」

(まずいな、ならば仕方ない。繋ぐか)

・日の呼吸 拾壺ノ型 幻日虹・

(消えた!?)

手応えがあると確信した一撃。巖勝は体を捻り、独特の歩法で消えた相手と錯覚させる。刀を振ってもそこには何も無い。まるで虹のように。

「上か！」

・日の呼吸 式ノ型 碧羅の天・

かつての縁壺のように、体格差を上からの体重を乗せた一振で、潰そうとする。腰を支点とした半円切り。互いに鍔迫り合うが、巖勝は止まらない。

・日の呼吸 参ノ型 烈日紅鏡・

刀を両手で握り、左右から水平に合計二回、首を狙って振り下ろす。由重は体を後ろへ逸らすことにより首への攻撃をギリギリで回避するが、体勢が崩れる。

その隙を巖勝は逃さない。

（やばいやばい死ぬ！ これで決めないと、筋肉が千切れる！ やはり根本的に合っていない！）

なれない呼吸を使ったことによる激しい消耗が、巖勝を苛む。

・日の呼吸！ 壱ノ型！ 円舞！

由重の体勢が崩れたところになさげ横からの一撃を叩き込む。由重は刀で受け止めたが、腰に力が入らず、体ごと横に倒れてしまう。

手を地面につけ、それでも立ち上がるとうとする。その前に喉元に刀が突きつけられた。

決着。

「……ハア……ハア……勝負ありましたね」

自分より疲れている巖勝を疑問に思いながらも由重は立ち上がり、一礼する。

「……その力は本当に呼吸によるものなのか？」

「……はい。このように……ある程度の体格差は……埋めることができます」

「そうか」

巖勝は呼吸を落ち着かせる。体が悲鳴をあげている。兄弟でこうも違うものなのか。(やはり体に合っていない。黒死牟の斬撃は即死級。近づかれても一撃一撃振るうだけで広範囲かつ遠距離までカバーできる剣技。小細工は寧ろ邪魔となる。)

対して、縁壺は広範囲の攻撃手段が少ないから、避けたり、防いだりして一撃一撃を正確に切り抜き続け、仕留める。似ているようで方向性が違う)

巖勝が分析していると、由重が頭を下げる。

「そうか、認めよう。正々堂々、俺は負けた。都合のいいことだろうが、呼吸を教えてください。この通りだ」

「私は大丈夫です。頭を上げてください」

すぐに巖勝は頭を上げるように促した。由重が言っていたことは至極真つ当なことであり、当然の成り行きだったと巖勝は思っていた。

終哉が満足そうに微笑む。

「柱達よ。呼吸の効果もわかった事だ。巖勝に教えてもらうがいい。特別だ。今日はこの庭を使つても構わん」

「「「はっ！」「」」」

柱が次々に巖勝に近寄ってきて、自己紹介を始めた。

「紹介が遅れたが、水柱の新見由重だ。改めてすまなかつたな」

「一応だが。炎柱の煉獄正寿郎だ。任命したのは私だが、娘が世話になつてゐるな。危なつかしいが支えてやつてくれ」

「俺は風柱の御門主膳。房綱が迷惑をかけたらしいな。煉獄ンとこに修行に出させたんだが、今は薫ちやんにご執心でなア。まあ何かあつたらぶん殴つて貰つても構わねエ。今は恋の病つてのにかかちちまつて盲目だが、次期柱として育ててる分には物分りはいい方だからなア」

「主膳は少し息子に厳しいと思うが……私は岩柱を御館様より請け負つてゐる。明道院早百合だ。何かあつたら私を頼れ。……因みにこいつを頼るのはやめておいた方がいいがな」

「早百合はんは酷いなあ……ウチは鳴柱の緋咲鳴。それにしても巖勝君ほんまかわいらしいなあ。ウチの娘の許嫁になつてくれへんか？ そしたら、巖勝の望むとおりに柱の権限を行使して何でもしてあげたるでえ」

「貴様、趣旨がズレてきているぞ、とりあえずだ。やり方を教えてくれ、こう見えて私たちは柱だ。鬼殺隊の中でも能力は高い方だから案外すぐに習得するかもしれないぞ？」

「……………呼吸なので肺を使います。皆様方まずは……………」

巖勝はおくびにも出さないが、怒涛の個性に圧倒されかけていた。口調も三者三様の柱の見た目や雰囲気と呼吸の属性が似通つてゐる部分があるのが救いであつた。

巖勝は縁壺から教えてもらったことをそのまま伝えるのでは無く噛み砕いて教えた。柱達は飲み込みが異常に速く、巖勝を驚かせた。巖勝の教え方もそれに一役買っているだろう。

天才は常人がつまづくところを理解できないが、秀才はある程度理解出来る。それが証明されて、巖勝は少し嬉しかった。



一年間。

巖勝は呼吸の習得方法を任務の合間を拾ったりして柱に教え続けた。柱達の上達速度は想像以上に速く、ものの半年で全集中の呼吸が使えるようになっていた。日輪刀も開始数日で色が変わった。



炭治郎が2年を費やしたことを考えると、破格の習得速度。地の体が出来上がったというのなら後は比較的簡単に習得できたのだ。それぞれが継子にも広めるらしい。その際には自分の呼吸を強制させるだけでなく、それぞれの型にあった呼吸を身につけるよう促した。

因みに薫や房綱、途中からは煉獄家の長男である暢寿郎、

水柱・由重の継子である鱗滝正助。

鳴柱・鳴の娘である愛染。

早百合の継子である琴音が参加し、彼らは次期柱として育てられた。

(まんまこれ合同強化訓練・柱稽古だよな……てか本当に縁壺どこ行つたんだ。一年も見つからないとか相当だぞ)

これより巖勝は、受ける必要性が全く感じられない最終選別へと向かう。因みに身長も少し伸びている。もちろん薫も着いてくるようだ。ここ一年で印象が可愛いから綺麗に変わり始めていた。巖勝への執着っぷりは増し、房綱が恋敵云々言う以前に自分の知る薫との差にドン引きしていた。もちろん巖勝は気が付かなかつた。本人の預かり知らぬところで薫はゆつくりと外堀を埋っていたのだ。

「最終選別の山はここから近いな、すぐ着きそうだ」

「ええ、参りましょう」

## 拾壹話 今更すぎる最終選別

「ほんと今更ですね、御館様も巖勝君をさっさと柱にすれば良かったんじゃないですか？」

「今更だろうがなんだろうが、まずは正式に鬼殺隊の仲間入りからだ。柱になるのはもう少し後だろう」

巖勝もこうは言ったが最終選別を今更やることに強く反対しなかった。主な理由として聖地巡礼をしたいという思いが大半を占めていた。アニメでも漫画でも見た藤の花が一年中咲く山。そこにつき、その美しさに巖勝は圧倒されていた。夕日の橙ですら、藤色を染め上げられないでいた。朝も昼も夜もこの花は変わらず鬼から人を守りつづけているのだ。

巖勝が到着してからも、鳥居の前にはぞろぞろと鬼殺隊志望が到着し始める。総計、三十人ほどである。大体は自信に満ち溢れていた。しかし中にはこの世の終わりみたいな顔をしている者もいる。巖勝は確信した。ああいった類はすぐ死ぬのだと。自信は実力に繋がるからだ。それでも生き残るのだとすれば、それは自信をなくしても強い実力者かただ運がいいだけだ。

しかも彼らは巖勝が呼吸を柱に伝えた時間を考えると、一年少ししか稽古していないことになる。主人公ですら二年の月日を要したのだ。呼吸はうる覚えに違いない。抑、呼吸を習っているかすら怪しい。

「そう考えると、房綱達は呼吸なしで最終選別を突破したのか。凄まじいな」

「……わたしも突破したのに」

「……………すまん。して、どうだった？」

「朝になったら寝て、夜になったら鬼を斬る。その繰り返しだったよ。うーん。そんなに難しくはなかった……かな？」

「……………」

さすがは炎柱の娘。最終選別はそれほど苦でなかったとみえる。それに呼吸を一日で覚えただけのことはある。そうやって二人が駄弁っていると山の入口に豪華な服を来た子供が出てくる。護衛も連れてくることから、産屋敷の親族だと巖勝は判断した。貼り付けたような笑顔が殊更不気味だった。

「皆様。これより最終選別を執り行います。ここで五日間生き延びたものが晴れて鬼殺隊として認められますので、ご健闘をお祈りしています」

産屋敷の親族は簡潔に試験内容を伝えると、あとは黙って山への道を開けただけだった。彼らが伝えた期間は原作よりも二日短い。確実に呼吸による隊士の質の向上が期間延長の理由なのだろう。しかし過酷なことには変わりなかった。これでは鬼殺隊も鬼のことを言えない。未来ある子供をやり直しのきかない実戦に放り込むなんて、人として狂っている。巖勝が周りを見渡せば、子供の姿も少なからずいた。

(……狂っている……お前達、逃げ出してもいいんだぞ……誰も何も文句を言わないだろう……)

現代風に言うならば、刀一本のみを持って、ゾンビより速く動き岩よりも硬い首を切らなければ死なない存在が跋扈する中生き残れと言っているようなものである。巖勝は拳を固く握りしめた。

「……薫。山の鬼は全て殺す」

「ふふっ……巖勝君らしいね」

顔つきが侍のそれへと変わった巖勝。瞳には一遍の曇りもない正義を掲げている。そんな巖勝を横目に、薫は自らの内に黒い感情が渦巻くのを感じた。

(本当に巖勝君らしい。自分の強さを他人のために使える人。……人の気も知らないで。そうやってこれから沢山の人を救って、沢山の人に慕われるんだろうな……それで

も、巖勝君には私だけを見ていて欲しい。その為には例え、鬼殺隊がどうなったって構わない)

自分を盗み見る薫に、心配をかけてしまったと勘違いした巖勝は語りかける。

「……薫。私だつて適当に救うだけじゃない。ただ、未来ある子供があつさりと死んでいくのが儘ならないだけだ」

「知ってる。どのくらい一緒にいると思ってるの？」

全肯定。今から巖勝のすることはただの偽善である。鬼を倒さずとも試練を突破してきたとて、この先の任務で死なないとは限らないのだ。だとしても好きな人の言うことは欠片も否定したくないのが乙女である。

「……ありがとう薫。お前は私の大切な仲間だ」

(嬉しいものだな、人に見てもらえているというのは……いや、薫だからこそなのか)

(仲間……仲間仲間仲間? ……違う。違う違う違う違う違う。私はただ、巖勝君の傍に……ああ……)

巖勝は素直に嬉しかった。だからこそその仲間発言である。しかし薫の存在は巖勝の中でとても大きなものになっている。彼女がいるというだけで今後の方針を変えなければならなくなる程に。

対照的に、薫の中で巖勝への想いは既に抑えきれないほどに膨らんでいた。その正体に本人は理性でも感情でも気がついていない。だが、それを曝け出した所で拒絶されるだけ。拒絶されれば、薫は自分が巖勝の信頼している自分でいられる自信がなかった。

(無惨からある程度の支配を免れた鬼となる。そして原作において、本来殺されるはずの人を救うという方針。……それを変えてしまえば、原作通り、多くの人が死ぬだろう。だが、薫とこのまま過ごすのも……悪くない)

そう考えている内に子供達が山の闇へと消えていく。戻れるはずのない闇だが、今回はそれを照らす月がある。

「とりあえず行ってくる」

「行つてらっしゃい。ここですつと待つてるよ」

巖勝がすれ違った産屋敷の子供とすれ違いに山へと入っていった。産屋敷の子供は当然巖勝のことを知っていた。しかし眉一つ動かさず、笑みを浮かべて見送った。



「さて、宴の始まりだ」

夜の帳は既に降りていた。巖勝は夜の闇が山を覆い隠すと同時に疾風の如く駆け出す。なるべく早く鬼を減らすためである。早ければ早いほど助かる命がある。取り残された試験者達はあまりの速さに思考が停止する。皆が皆、山の奥に進むのを躊躇っていた所に子供が颯爽と自分達を追い抜かして行つたのだ。

「速……………なんだあいつ!」

(気配を探る。鬼は独特の気配がする……………見つけた)

巖勝は鬼の気配を察知して、進む方向を変えた。気配を頼りに進んでいくと前方で争っている三匹の鬼が巖勝の視界に映る。鬼達は巖勝を発見する……………がもう遅い。

「お前らどきやがれ! 久々の食料だ……………ああ!」

一歩。

紫紺の日輪刀を抜き放ち勢いに任せて、横に一閃。呼吸を使つても技を放つ必要はない。舐めているのではない。偏に呼吸を使う必要がないくらいに弱いからである。

「なっ!?! ……ガツ……………!」

二歩。

日輪刀を両手で握り、二体目の鬼の首を頭ごと十文字に切り裂く。断末魔すら許さない。鬼に慈悲はない。



「ヒッ！ た、助けっ……！！ 痛っ……」

三歩目を踏み込みながら、二本目の刀、「蛟落天津」を投擲し、逃げようとする鬼の足を地面に縫い付け、無防備な首を間髪入れず斬り飛ばす。二匹の鬼が崩れ落ち、三匹目の鬼が塵へと変わる。巖勝の抜刀から数秒。数多の試験者を葬ってきた鬼達は月光の煌めきに吞まれ、死んだ。

彼の斬撃に巻き込まれた木がゆっくりと倒れた。巖勝は地面から刀を抜いて回収し、次の鬼へ向けて走り出す。今鬼を屠った飛ぶ斬撃にも、名前をつけたほうがいいのかとこの場には似つかわしくないことを考えながら。



米田重常は不幸な男であった。

「くそ！ くそくそくそお！ なんでいつも俺が狙われるんだ！」

重常は走る。走って、走って、走る。いや、この場合逃げるが正しい。重常は稀血であった。稀血という体質を持ちながら鬼狩りを目指すことは不可能に近い。ある程度

の才能がなければ強くなる前に鬼の猛攻に耐えられず死ぬからだ。まして稀血という概念すらあまり知れ渡っていないこの時代において、この年齢まで生きのびたことは奇跡以外の何物でもない。

最近広まり出した呼吸も仮ならぬまま、師匠に選別へと送られた。彼の師匠は古臭い考えを持つており、新しいものには目もくれなかった。特に呼吸は鍛え上げた型を侵害するものとして忌避していた。

(こうなつたら一か八かだ！)

重常に向かつてくる鬼は二匹、共食いするよりも前の獲物を食べた方が強くなれることを本能的に理解しているのだろう。協力して逃げ道を無くすように追いかけてきていた。このままではいつか力尽きて食われるだろう。

(……………!!)

重常は鬼達に向き直る。そして震える手で抜剣し、構える。歯がガチガチと音を鳴らす。膝が笑うのをとめられず、涙から焦点が合わなくなる。

鬼たちは笑みを深くする。この子供の血は甘美なのだろう。それを絡めた肉は極上の美味さなのだろう。弱く、仕留めるのも容易そうだった。鬼は肉薄し、すぐさま飛びかかる。

対して、重常は体が動かなかつた。

「腸晒しやがれええ！」

「宴の時間だああ!!」

(死にたくない！ 死にたくない！ ……!)

「見上げた根性だ」

紫紺の月輪が夜空を侵す。否、剣士の斬撃である。回転する三日月の形をしたそれ

は、飛びかかってきた鬼を死すら悟らせずに瞬時に肉塊へと変えた。その後も勢いは止まらず、周囲の木々を巻き込んで塵にする。

「遅れてすまない。怪我はないか？」

重常は月に照らされた男の顔を観察する。炎の様な痣が特徴的な少年であった。重常よりはるかに年下。だと言うのに二匹鬼を瞬く間に葬つて見せた。これが天才だと重常は思った。あまりにも鮮烈。

「あ、ああ……ありがとう。感謝する」

「ここら辺の鬼は退治した。少し休んだら山を下れ。剣士が増える筈だ。貴方は鬼に襲われやすい体質のようだから、言いにくいが棄権することを推奨する」

重常は肩を落とした。鬼に追いかけるまでは自分には才能があると過信していた。もしかすると最終選別も簡単にこなせると思っていた。それは一瞬の内に裏切られ、本物の天才に叩き落とされた。

(……やはりそうか、だがどの道弱くなれば鬼に見つかつても喰われるだけ……)

重常は目線で訴える。剣豪は表情を変えなかった。しかし雰囲気は僅かに柔らかくなった。

「そうか、止めはせん。だが無理はするな」

そう言うと彼は闇の中に去つていった。

「名前、名乗ってもねえし聞いてもねえな。まあいか生き残つてから聞くか」  
恐らく、いや確実にあの剣豪は生き残る。そう思つて、重常は大きく伸びをしてその場を後にした。心臓の鼓動はまだ落ち着かなかつた。鬼に襲われた恐怖が残っているのでは無い。単純に魅せられたのだ。



巖勝は疲れていた。

「呼吸を使つているとはいえ肉体がついてこないな、だが鬼はまだ残つている」

夜の帳が降りてから巖勝が斬つた、若しくは細切れにした鬼は合計十二匹。その全てを一撃で屠つていた。だが流石に齡十一の体では多少の疲れが見え隠れする。巖勝はその場に座り込んで、月を見上げる。付近に鬼はいない事は確認の上。

「ふう……大体は斬つたな」

休んでいると、悲鳴が聞こえた。誰かが鬼に襲われている。体感数秒しか休みは取れ

なかった。休んでいる暇はないようだ。巖勝は己が取りこぼした鬼だと思い、舌打ちをした。

——  
ホオオオオオオオオオ

巖勝は立ち、呼吸を整える。体力の全回復にはまだ時間がかかる。しかしそれを待つてなどいられない。足に血を送り、大地を蹴る。

(間に合ってくれ……！)

★

その鬼はただ強かった。

重常は山を下り、ほかの剣士と合流しようとしていた。その時に遭遇したのだ。次は怖気づかず鬼に立ち向かおうと決意を新たにす。そんな矢先に女の剣士が鬼に襲わ

れていたため、死角からその腕を切ろうとしたら、日輪刀が根元から折れた。本日二度目になるが思考が停止した。

重常が切りつけた鬼は筋肉質な体躯をしていた。特筆すべき点といえば、腕が四本ある事だろう。皮膚があれほど硬いということは、頸はさらに硬い。人の形からあまり変化はしていないが優に3メートルを超えるその巨体に対し、人間はあまりにも貧弱。

「おかしいなあ。こんな雑魚一匹倒せないのはなんでだろうなあ。さつきまで眠っていたからか？」

鬼は眠っていたため、巖勝に見つからなかった。加えて、山の鬼の中で最も強かったので、定期的に開催される最終選別はこの鬼にとつて宴でしか無かった。

「まあいい。それにしても、こいつは特別美味そうな匂いだあ。手足を腕いで、喉を潰して、踊り食いと洒落込むかあ……!？」

「うわああああ!!」

(なんて情けない声だろう。女子一人すら守れてないのに)

しかし重常は刀を構えて突進する。依然無抵抗な鬼の足を切りつけるが、折れた日輪刀では文字通り歯が立たない。

「鬱陶しいぞ。弱者が」

「……いつ……!？」

まるで道端の小石を蹴飛ばすかのような軽い脚撃。それだけで重常はボロ雑巾のように地面をころがった。肺の中の空気が吐き出され、肋も数本折れた。咳き込んだら血が混じった痰が出た。

(世界が回って……る……刀も根元から折れた……不味い……起き上がれ……！)

「……かはっ……」

「うう？ まだ生きていやがるのか。苦しいだろう。安心しろ、お前の肉もしつかりと食ってやるからよお……」

しゃがみ込んだ鬼の手が伸ばされる。巨腕は容易く頭蓋を握りつぶすのだろう。手が迫る。汗が止まらない。涙が溢れる。助けてもらったというのに、恩返しすら許されずに死ぬのはあまりに情けなかった。

「死んでたまるかよおおお!!」

「恨むんなら、お前の師匠を恨むんだな」

大岩程もある手のひらが重常を包み込み……



・月の呼吸 壺ノ型 闇月・宵の宮・

「それでこそだ。稀血の剣士殿」

「うおっ!!」

「きやつ!!」

再び現れた若き剣豪が鬼の腕を切断し、重常のその後ろにいた女剣士を抱き抱えて遠ざけ、死の運命から守る。

(……今俺の事を稀血と言ったか)

光が飛び散る視界の中、自分と鬼との間に守るように人が立っているのが確認できた。重常よりも背が低いのに、頼もしきは尋常ではなかった。

「また会ったな。勇猛果敢な剣士殿。すまないが、そこの方を連れて立ち去ってくれないか?」

「だが、そいつは……!」

「任せろ。私は……強い。この国で二番目にな」

巖勝は顔を傾けて重常に視線を超越す。

「……あ、ああ!!」

丁寧な、しかし有無を言わさない剣豪の言葉に重常は勢いを取り戻す。もう心配ない。この剣豪なら倒してくれる。重常は負傷している女剣士をおぶってすぐさまその場を離れる。重常が去ったことを確認し、巖勝は刀を構え直す。

(とは言ったものの、かなり強そうだ……面白い。自分が今、月の呼吸をどれほど使えるか試してみるか)

巖勝は無意識に笑みを浮かべる。その笑みは原作の縁壺のそれに酷似しており、どこか不気味であった。鬼はそれを挑発と判断する。

「ほう……その齢で俺様に立ち向かうか？ 命知らずも程々にしな」  
「見た目に縛られないことだ。肥えた世界は時に人を盲目にさせる」

巖勝は鬼を観察する。四本腕の鬼。以津真天よりも力は上。今まで頸を切った鬼達よりも一線を画す。もしここに囚われていなければかなり前に無惨から名を貰っていただろう。

「いいぞ……！ 殺し合おうじゃねえか！ ちっぽけな剣士サマよお!!」

鬼が腕を振り上げて突進してくる。踏みしめた大地が悲鳴を上げる。巖勝は一步も

動かなかった。

(怖気付いたか！)

「おらあ!!」

巖勝がいたところを殴りつけ、轟音と土煙を伴って地面が陥没する。小細工は不要。実際に、大体の剣士は避けられなかった。速さと力は純粹に強いのだ。

「……………あ!？」

巖勝は軽く横に飛んで回避する。土埃が晴れ、鬼が目線を向けた時には既に刀を振り降ろす寸前で……………

・月の呼吸 式ノ型 朱華ノ弄月・

「ぐっ……………」

月輪を伴った三連撃が片腕と両足を切断する。耐えきれず、鬼が体勢を崩す。両足がすぐに再生し始めるが、それを待ってくれるほど巖勝は優しくない。切った腕を踏み台に頸を狙って突き進む。

「嘘だろ!?! ……」

・月の呼吸 参ノ型 厭忌月・銷り・

巖勝は鬼の頸を狙った左右からの水平な二撃を放つが、鬼は咄嗟に、残った三本の腕のうち二本を犠牲にすることで受け止める。腕が鮮血を撒き散らしながら宙を舞った。

「おい、おいおいおいおい……!?! なんだお前は……ま、待ってくれ! 俺が悪かった! 見逃してくれ!」

鬼は足が動かないので、座り込んだまま残った一本の腕を巖勝に向け後ずさる。戦意喪失。敵意がないことを示すが、再生は止めていなかった。虎視眈々と隙を伺っていた。救いようのない鬼である。生前もそうやって生き延びてきたのだ。

巖勝は淡々と刀を構え直す。

「終わりだ」

「ひっ……!?!」

巖勝の身体中の血が沸騰するように駆け巡り、額の痣が広がり黒死牟のそれへとますます近づく。

・月の呼吸 漆ノ型 厄鏡・月映え・

斬。

斜めに振るわれた刀から地を這う斬撃が二撃放たれる。それには重低音が漏れ出すほどの月輪が纏われていた。空気が振動する。山が嘆く。容易く鬼を切り裂してしかし速度は落ちない。木々を細切れにし、突き進む。

鬼は古来より人を襲い、喰らう存在である。それゆえ人は鬼を恐れた。そこには絶対的な食う食われるの関係があった。だが今や人が鬼の四肢を折り飛ばし、鬼が命乞いをし、そして躊躇いもなく蹂躪される。

これではどちらが鬼かわかったものではない。

女剣士を避難させた重常もまた、その光景を木の影から覗いていた。鬼はともかく、巖勝には見つかったが。

（なんだ……アレは……人の範疇を超えている。アレはこの世の理の外側にある、あの剣技、神々から寵愛されると言っても過言ではない……!）

巖勝は刀を納める。満月の光が彼を照らす。横顔は見えない。重常は巖勝が修羅や羅刹の次元では説明できないなにかに見えた。

（薫は今頃どうしているのか）

五日後、犠牲者を一人も出すことなく、最終選別は終わった。

## 拾弍話 繼国巖勝という男と煉獄薰という女

「案外呆気なかつたな」

巖勝は最終選別を終え、鳥居の場所に戻つた。歓声と共に迎えられる。彼の特徴的な紫の着物と炎の様な痣は特定しやすかつた。巖勝の助けた多くの子供に感謝された。口々に褒め称えられ、相手は全て年上なだけに氣を使いへとへとである。

「ふ——う」

（疲れた……）

巖勝は切り株に腰かけて休む。感謝されて悪い氣はしない。助けてよかつたと心の底から思えるこの氣持ちは、鬼になれば無くなるのかと思つた。少し経つて、包帯を巻いた重常が近寄ってくる。どこか彼の足取りは重かつた。

「む」

「あつ……け、劍士殿。……お、お前に俺は二回も命を救われた。本当にありがとう。本当に……なんてお礼をいえばいいのか……」

「礼には及ばない。私がしたくてやったことだ」

「つ……………！　　そ、そうか……………」

「？」

何故か重常は巖勝に対して挙動不振であった。凡百感情がごちや混ぜになつて顔に浮き出ていた。加えて透き通る世界は心の深淵まで見透かしていた。結果それは負の感情である。

（憧れ、嫉妬、自己嫌悪……………か）

「……………け、劍士殿」

「……………なんだ」

「……………お、俺は強く……………なれるだろうか。お前みたいに人を助けられるようになるのだろうか」

本心の吐露。若しくは弱音。重常は悔しさに顔を歪ませている。しかしそこに一抹の希望を抱いているのだから余計に夕チが悪かった。下手に否定することは彼自身の生き方を否定することになるだろう。巖勝は重常の肉体を透き通る世界で見る。そうして少し申し訳なさそうに眉を下げたのを重常は見逃さなかった。彼は紛れもなく目の前の格上に失望されたと思つた。



「……呼吸を身につけろ。話はそれからだ」

「つー、で、出来るわけないだろ！ 簡単に言ってくれるけどなあ！ 聞けば地獄みたいな訓練らしいじゃないか!」

重常が叫んだことで、巖勝達に注目が集まる。彼は少し不快であった。白い目で見られていることに重常は気が付かない。

「ならば私に言えることは無い。強くなることに近道などない」

「巫山戯るなよ!?! 才能があるからそうやって言えるんだ……!」

重常は巖勝の襟首を掴む。体格の面ではどちらかといえば重常の方が一回り大きい。重常は目の前の少年を体ごと持ち上げるぐらいの力を込めたのだが、震えるのは自分の手のみでビクともしなかった。

「……」

そして巖勝が重常を見る目。深淵が形を成した様な瞳。そこには憐憫でも憤怒でもなく。只只寂寥があった。巖勝もまた、才能という壁にぶつかってきたのだ。

「……お前は……いや、お前も」

【皆様、選別突破おめでとうございます。これより日輪刀に使用する玉鋼をこの中から選んでいただきますのでお集まりください】

「……」

「どうやら注目を集めている。これで終いとしよう」

巖勝が重常に手を差し出す。空いた手ではだけた着物を軽く直す。非の打ち所のない人格者。重常はあらゆる面で巖勝に大敗を喫したのだ。不満そうな顔を浮かべながらも重常は巖勝が握手をする。

「……」

「……」

(おっと、手が勝手に)

「……あつ……ぐつううう!?!」

(血流促進、冷え性、関節痛、五十肩、健康増進のツボだ。痛かろう)

巖勝はしれつと重常から手を離し、何事も無かったかのように周りを見回した。目が合いそうになった者達が自然と目をそらす。依然重常は片手を抑えながら悶えている。

(ぐおおお……!! 体が熱い……!! 何された!?)

「さらばだ稀血の劍士殿。励むことだ」

余りに鮮烈な軌跡を残して巖勝は去っていった。巖勝の予想とは反してここで生き残った者は鬼殺隊に入隊後、目まぐるしい活躍をすることになる。同時に巖勝が鬼人の如き力を持つことも目撃しており、あの日に集まった鬼殺隊もここにいる者が大半であつた。



「薫は……」

それはそれとして巖勝は薫を探していた。些か不快になつた後、無性に彼女に会いたくなつたのだ。当たりをそれとなく見渡し、黄色い髪の持ち主を探す。

(何処だ……何処にいる)

ふと、裾が何者かに引つ張られる。

(……………！)  
 巖勝は勢いよく振り返った。

「巖勝様！　ありがとうございます！　私は阿茶、四本腕の鬼から助けられた者です！  
 あの時助けてくれなかったら、私は……」

「……………」  
 四本腕の鬼に襲われていた女剣士。負傷は治ったようだ。薫だと思って振り向いた  
 が上げて落とされた巖勝は気分が急降下する。だとしてもここで失礼は出来ない。

「……………皆まで言うな。助けられてよかった」

「まあ！　お優しいですね！　どうでしょう、もしよければですね……この後散歩で  
 もしませんか？　もちろん二人つきりで……ひっ……！」

阿茶。そう名乗った女剣士は話の途中で突然巖勝の横を見て顔を青くして後退った  
 後、足早にこの場を後にした。

(気温が下がったか？)

巖勝は確信を抱いて振り返る。口角は上がっていた。

「……………そう睨むな、薫」

「睨んでなんかいませんよ。ただあの方に向かって微笑んただけです。

……巖勝君が悪いんですよ、聞けば鬼に襲われているところを助けたらしいじやないですか。晴れて巖勝君はあの子の命の恩人となった訳です。良かったですね。今巖勝君があの子に告白でもしたら喜んで妻になつてくれるんじゃないですか？ ほら、完全にあの子、巖勝君に惚れ込んでましたよ。顔を赤らめて、瞳も濡れて、声も高く、男受けの良さそうな方ですね。私ですか？ 私は全然なんとも思つておりませんよ。ええ。ただ、巖勝君は頼れる年上のお姉さんじゃなくて守つてあげたくなるような繊い女の子の方が好みなんですか？ だつたら私、次に鬼と遭遇したら無抵抗のまま喰われますので巖勝君は私を助けてくださいね」

言葉とは裏腹に、薫は巖勝を労いたかつた。お疲れ様ですの一言を言いたかつた。最終選別での生存率は限りなく低い。他人に気を配りながらならもつとである。しかし口から出る言葉は非難一色。彼女には余裕がなかつた。

実を言うと薫は重常の一件で既に巖勝を見つけていた。軽く巖勝がお仕置をして悶絶する重常を絶対零度の視線で見た後、確実に此方を探している巖勝に気がついた。すぐに機嫌を良くし、巖勝を労いたい一心で駆け寄ろうとした。

しかし薫よりも先に阿茶が巖勝の裾を掴んだ。

「えっ……？」

その時薫は足を止めた。火照った身体が凍りつくように冷えていく。胸がズキズキと音を立てて罅割れていく。薫から表情は見えないが、確実に阿茶の方に体を向けている。巖勝。万遍の笑みで掴んだ裾を離さない阿茶。

お似合いの二人。

薫は心を殺す。女であるが故の蔑みの為に、何度もしてきたそれが酷く難しかった。邪魔な虫は薫の深淵を垣間見ただけで去っていった。しかし心は灼けついたまま。

(……気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。胸が痛い。もし、もしもあの子に巖勝君が惚れていたらどうしよう!?! 例えそうでなくてもこれからさらに増えていくなら……)

薫は無言で巖勝に訴える。目に光は灯っていない。唇が触れそうになるまで近寄る。

また、巖勝の頭から先程のことは全て抜けていた。重常との悶着も、阿茶の言葉も。ただ薫の一挙一動が彼の心を大きく揺さぶる。薫は埃を落とすようにして巖勝の裾を払う。巖勝にとってはその裾でさえ血が流れているかのように熱を持った気がした。

「落ち着け……そうなたら真っ先に助ける。何処にいても、必ずだ……だから……少し離れろ」

紛れもなく巖勝の本心から出た言葉。しかし薫はいつもの誰にでも向けられる優しさを受け取る。

「っ……冗談ですよ。私も巖勝君が困っていたなら駆けつけます」

(……違う違う違う違う違う違う違う違う！ 私だけを助けてほしいの！ なんと伝わらないの?)

薫はさらに気持ちを押し殺す。無表情の下地に作り笑いを貼り付ける。ここ数ヶ月、薫は余裕がなかった。

名付きの鬼を倒し、柱に特別な呼吸を教え、更には最終選別の鬼すらも全滅させた剣豪。最早、天才や鬼才では説明できない麒麟児。しかも名家・継国家の生まれ。巖勝が知らないだけで、柱の娘との見合いや、噂に目をつけた武家が召抱えようと画策していたのだ。もしそうなってしまうえば薫はもう巖勝の傍には居られない。

振り払うようにしてさらに近寄る。

「……そういえば、巖勝君の痣。濃く大きくなってませんか？」

「そうか？ 今は鏡を所持していないので分からないが……」

薫は巖勝の目を覗き込む。そして欠片も揺らめいていない巖勝の感情に気を落とす。もちろん巖勝は透き通る世界で抑えている。逆に言えば透き通る世界で抑えなければ

ならないほど動揺していた。

(これ……でもダメなの？ 私は……どうしたら……)

(近い近い近い！ 口付けの距離ではないか!? 落ち着け！ 顔に血液を流すな！ 心頭……滅却……)

巖勝は血流を抑える。因みにこうやって取り乱さないようにしているのは、精神的に年上というのも少しあるが、薫にあたふたした姿を見せて、幻滅されたくないからというのが理由の大半を占めている。薫が巖勝の額を覗き込んでいると、不意に一匹の鳥が巖勝の方に泊まる。

二人は揃って目を向けた。

「あら、鏝鴉ですね」

「……最終選別を合格した隊士には支給されるのであったな。そう言えば、薫のはどうしたんだ？」

「私のは大抵空を飛んで回りを偵察させてますよ」

「なるほど。賢いな……しかしお前は私の近くにいろ。攻撃範囲が広いのでな、偶然切ってしまうかもしれない」

『委細承知、吾輩の名は八咫。巖勝殿、これから宜しく頼む』

「ああ。こちらこそだ」



光沢のある羽毛と落ち着いた低声。他の鏝鴉より一回り小さい体だが、引き締まっているのがわかる曲線。嘴に割れ目が入っており、巖勝は歴戦の個体だと推測する。

八咫の声を聞いた薫がゲンナリした。

「私の知ってる鏝鴉じゃない……もつとこう煩くて、無遠慮で、濁った声で……こんなに丁寧で落ち着いてない……ああ、私のはハズレでしたか」

すると、一羽の鴉が薫の上に泊まった。爪を花の汁か何かで桃色に染め、黄色い布を首に巻いている。なんとも派手な鏝鴉である。

『ええー!? ひどいじゃない! 誰が毎晩巖勝君の活躍を報告してあげたと思ってるの!? 本人に聞かせてあげたいわ! 目を輝かせたり、濁らせたり………つていうか大体濁ってたわね。でもおもしろかつ……! もごつ……』

薫の頭の上で翼をばたつかせて暴れる。聞きかねた薫が嘴を握って黙らせた。

「……」『……』

『つ——!! ——ぐ!!!? む!?!』

「き、聞かなかったことにしてください。良いですね? ……ちなみに名前は天外です!」

天外と呼ばれた鏝鴉はまだ羽をばたつかせている。

「……とりあえず宿に帰るか」

『お供致す』

「近くに煉獄家の所有する屋敷があります。そこに参りましょう」

『いい心がけよ薫！ そうやって外堀を……もがっ……』

（わかつてるけど……！）



「でかいな」

『流石は柱の娘』

『まるで私みたいね!!』

「な、なんか恥ずかしいですね」

（巖勝君を家に入れるって………顔が赤くなりそう！）

二人と二匹は門をくぐる。待ち構えていたかのように女中が出迎えてくれた。下げすぎでは無いかと思うぐらいに頭を下げている。巖勝は礼儀正しさもここまで来ると怖いものがあると思った。

「おかえりなさいませ。お嬢様」

「ほう……お嬢様とな」

『薫様は柱の娘。れっきとしたお嬢様故』

『ふっふーん』

「や、やめてください！ 恥ずかしいです……っっていうかなんで天外が得意気なんです  
か!?!」

四人は女中の案内で客間へ通された。客間も整っていて武家のような文化人のような狭間で美しく仕上がっていた。

「私は着替えてきます」

『吾輩は任務を受け取ってくる』

『あ、じゃあアタシも。後輩の面倒を見るのは先輩の義務だからね』

……

今ここにいるのは巖勝一人。鳥の囀しか聞こえない。流麗な装飾の座布団に足を沈め、目の前には木製の大きな机。誰もいないので存外に独り言が漏れた。

「……………静かだな」

巖勝は思考の海に沈む。

(私はもうすぐ十二歳。体が出来上がるのが二十だとすればまだまだ先は長い。珠世は既にこの時代にいる。だが無惨の支配から逃れていない。……縁壺はまだ見つからないのか……)

その時、客間が開かれた。冷静に巖勝はそちらに向き直る。

入ってきたのは薫の父である正寿郎と、薫に似て目元の美しい女性であった。恐らく薫の母親だろう。意匠の施された机を介して向き合う巖勝はできるだけ丁寧な座礼をするよう心がけた。

(……両親直々か。というか薫はどうした……)

「……………お邪魔しております。改めて、私は継国巖勝と申す者です」

「うむ、そう固くなるな、寛いでくれ」

「あら、礼儀正しい子。私は薫の母の翡翠と言います。薫がお世話になっております」

「滅相ありません。薫殿には助けて貰ってばかり故……」

巖勝は当たり障りのない会話を続け、彼処が口火を切ってくるのを待つ。時は室町時

代。娘の結婚先を決めるのは彼らである。常識には逆らえない。ここで幻滅されては今までの印象が台無しになる。それでも礼儀正しい武家の子供を演じてきたつもりである。

「巖勝よ。歳はいくつだ」

(歳……?)

「今年で十二になりますが……」

「……思ってたより若いな。……しかし、継国家もそろそろ許嫁を望んでいるのではないか?」

巖勝の笑顔が固まった。どう反応していいか分からず、目線が宙を舞う。

「継国家とは、私が半ば家出という形で縁を切っておりますので……申し訳御座いませ  
ん」

「そ、そうか。それは初耳だ。すまなかつたな。それでは……むう」

「……?」

「いや、なんでもない。いやだが、やはり娘を預けるには後ろ盾がないと……あ、いや、後ろ盾というのはだな……」

「……もう……！ 焦れたい！ ねえねえ巖勝君！ 薫のことどう思ってる!? 可愛いよね？ 可愛いでしょ薫。私の自慢の娘だもん！ とつくの昔に惚れちゃってるわよね？」

「ひ、翡翠!？」

「それは……」

——ドンドンドンドン

その時、廊下を踏み鳴らす音が近づいてきた。音の主は丁度客間の前で止まり、襖が勢いよく開かれる。

「……むむ」

「あらっ」

(薫?)

そこには薫が髪を後ろに結って、いつもの動きやすい袴姿ではなく、着物姿で現れた。急いでできたことがわかるほど上気した頬。巖勝は目を奪われる。

薫は客間を一瞥し、状況を「彼女なりに」理解する。そして巖勝のそばに座り込み、両親に向き直る。片方の手は巖勝の袖を掴み、もう片方の手を机に乗せて立膝になり、体を父の方へ乗り出す。

「とうさま！ 私はまだ巖勝君に教えていないことが沢山あります！ ……の……の……で、正式に鬼殺隊となったからとはいえ！ ……どうか巖勝君の任務同行者から私を外すのは待っていただけ……な、何笑ってるんですか！ ……母様!!? ……母様……? ……え? ……待って……何故母様がここに……?」

翡翠は、薫の勘違いに肩を震わせて笑いを堪えようとしているが、耐えきれず口の端から漏れ出してしまう。その様子を見て混乱を顕にする薫。わけも分からずあたふたとしていた。

(娘よ……お転婆がすぎるぞ……)

正寿郎はこの混沌とした状況をどうかして、薫を余計に混乱させず乗り切るか考えていた。

(……え、ほんとになんて!?)

薫は母がいることに困惑するが、まずは巖勝が薫から離れない方法について思考を巡らす。裾を掴まれた巖勝だが、薫の手が震えていることに気づき、半ば無意識に両親の見えないところで手を重ねる。

(……………?!?)

薫は動揺するが、同時に落ち着いてくる。しかし手を握られているという事実にもた顔が赤くなる。

(落ち着け。大丈夫だ薫)

(巖勝君が手を！……………これって優しきで説明できない……………よね!!) 好意的に捉えても

いいの……………か……………な?)

「……………あはっ……………くっ……………」

翡翠はまだ笑っている。対して正寿郎は開き直った。もう解決策を考えるより、薫に説明する方が先と判断した為である。

「……………翡翠……………笑いすぎだ。埒が明かないから私から説明するぞ。薫。言っておくが、私たちは巖勝が正式に鬼殺隊となったという理由から、薫の任を解こうとしているのは無い。寧ろ、その逆だ」

「……………逆?」

「そうだ。単刀直入に言うぞ、私たちは巖勝を煉獄家に婿入りさせようと考えている。次期柱として申し分のない技量。揺らぎない胆力。弱気を助ける精神性。並の武家であれば喉から手が出るほど手に入れたい人材であろう。とられる前に婿入りの提案を巖勝に持ちかけていたところだ」



(婿入り……………？ 結婚つてこと？ ……誰ど？)

正寿郎達は先に薫に相談してから巖勝に話そうと思つてはいたが、薫の、好意むき出しの態度に対して巖勝はあまり表情が読めなかつたので、まず巖勝に真意を問うことにしたのだつた。つまりは巖勝が受け入れさえすれば万事解決である。

「ええええええええ!! わ、私と巖勝君が……………け……………結婚!?!」

「……………そ、そうよ薫……………んんつ、報告はあとから聞くから母さん達はお邪魔するわね。精々可愛がつてもらいなさい」

「……………では、な」

「……………」

「……………」

二人が襖を閉じて、足音を立てて去つてゆく。

巖勝は頬を染めて縁側を向いたまま、薫は下を向き、されど両者とも手は握ったまま押し黙る。

（手汗大丈夫だよね？ 引かれてないよね？）

（薫は本当に幸せになれるだろうか、私は鬼になる上に程なくして薫にも痣が発現する。同じ時間を……生きることは出来ない）

言い様もない静寂が場を支配する。先に口を開いたのは……薫であった。

「……巖勝君」

「……ああ」

「私は、巖勝君が好きです。どうしようもないくらい貴方が好きなんです。でも……突然変なことを言うようですが、近いうちに巖勝君はどこか遠くへ行つちやうような気がするんです」

「……そ……それは」

巖勝は瞠目し、薫の方に顔を向ける。すると薫は蕩けるような笑みを浮かべながら、

巖勝を見ていた。朱の双眸が想い人を写して嬉しそうに輝く。

「当たり前でしょう?」

見透かされる。見通される。看破される。見破られる。

縁壺に透き通る世界で見られたのはまた違う。薫は巖勝の一挙一動から考えていることが臆気に分かる。巖勝だけを見てきたからこそ分かる。愛のなせる技。それ以上はあつてもそれ以下はない。誤魔化すことなど不可能。

「……俄には信じ難いだろうが」

「教えてくれる?」

「そうだな………私は未来に起こることを四百年先まで知っている」

「うん」

「その知識の中で確実に私のような患者は皆二十五を迎える前に息絶える」

「っ………う………ん」

「それを回避し、鬼の始祖に奪われる命を救う為に、私は鬼になる。他の鬼とは違い、私が鬼になってもそれまでの人格や記憶は残る。上手く行けば始祖の支配を逃れることができる……以上だ。……信じれずとも……っ!」

自嘲気味に目を閉じた一瞬。その内に薫は巖勝の首に両腕を回し撓垂れ掛かる。至近距離で見つめ合う。予想だにしなかつた巖勝は、無抵抗で受け入れた。そうして巖勝

達は後ろに軽く倒れ込んだ。

「嬉しい。凄く嬉しい。ありがとう話してくれて」

「幻滅したか？」

薫は首を横に振る。曇りない目。欠片も疑っていない目。それだけで巖勝は涙が零れる。普通は戯言と一蹴するだろう。受け入れても、純粹な好意によって巖勝のあり方を否定し、鬼になる決意を変えようとしてくるだろう。

薫はただ受け入れた。故に溢れだす涙。恐らく陸斗がこの世界に転生して初めての激しい感情の発露。

「っ……ありがとう薫……！！　ありがとう……！！」

薫は巖勝が落ち着くまで彼を抱きしめる。

(満たされていく……私にだけ話してくれた。この世で私しか知らない秘密)

★

巖勝が落ち着いた頃、薫は話す。

「巖勝君が鬼になったら私も鬼になるからね」

「……」

「貴方が鬼になれば敵う者はいない。そして長い寿命を手にしたら、誰も着いて来れない。最強でも孤高でもなくて、孤独。そんなの私が許さない」

「……」

巖勝は言葉を失う。純粹な好意などではない。その眩しすぎるあり方は否定も肯定も求めない。ただ一人を想って出た言葉。最早恋心ではない。愛情である。

縁側を二人で眺める。いつの間にか帰ってきた鵞鴉達が水浴びをしていた。二人は熟年夫婦のような雰囲気でそれを眺める。何気ない日常の一コマ。これからは二人でそれを積み重ねるのだ。

「今、私は世界で一番の幸せ者だな」

「貴方は二番目。一番幸せなのは私」

二人の影が自然と重なる。互いに先程のやり取りを思い出しては、顔が赤くなる。雰囲気とは対照的に初々しい男女の姿であった。

## 拾参話 縁壺のその頃

一部始終を薫の両親に話し晴れて婚約となった二人。その夜、縁側で二人は会っていた。今宵は新月。闇夜に包まれていても確かなのは互いの手の温もりのみ。夜風が透き通るように吹いている。

「……これから十年以内に私の弟である縁壺の家族が鬼に惨殺される。まずはそれを阻止するのがこれからの目標だ」

「うん、わかった。弟君は巖勝君の知識の中で、どういう立ち位置なの？」

「そうだな……はつきりいつて化け物だ。」

「どれだけ走っても、息一つ切らさない。」

「どれだけ攻撃されても、かすり傷一つ負わない。」

「どれだけ相手の防御が固くても、一撃で倒す。」

「私達がどれだけ太陽に手を伸ばそうが、届かない。それが継国縁壺という人間だ。最終的に鬼の始祖をあと一步まで追い詰める」

「……………え？」

薫は驚愕する。もしかすると始祖は弱いのかかもしれないという考えが頭を過るが、

勝の真剣な横顔を見て、すぐに払拭する。始祖が弱すぎるのではない。彼の弟が異次元の強さなのだと確信した。

「そのお陰で、私達が鬼になつても近くに居さえすれば、縁壺によつて始祖が弱つている場合、始祖の支配から逃れることが可能だ」

「……その計画の流れだと、私達その時鬼だよな？ 弟君に殺されないよね？」

「支配から逃れさえすれば、恐らくだがいける。その場にいるもう一人の支配を逃れた鬼は、見逃されていた。強さから想像は出来ないだろうが、あれは家族にとことん甘い」  
(それよりも薫を本当に鬼の道に巻き込んで良いのか……)

珠世は人を襲わないことを条件に見逃されていた。もしかすると、二人も見逃される可能性がある。もし無理なら、全力疾走しかない。逃げ切れるか分からないが。縁壺という存在は味方になると心強いことこの上ないが、一旦敵に回すと絶望とかいう次元ではない。万が一敵対した時、薫が縁壺に殺されるなぞ決してあつてはならない。

すると八咫と天外が帰ってくる。

『巖勝殿、弟君の居場所が判明した』

『喜ばなさい！ 私のお帰りよ！』

「……！ 本当か、どこだ!？」

『……少し……いや、かなり遠いのだが、……蝦夷だ。蝦夷で額に痣がある少年と、黒い

目をした少女を任務中に目撃した隊士が任務から帰ってきた』

「……………は？」

巖勝は思考を停止する。そんな描写は原作ではなかった……気がするのだ。だとしても蝦夷にまで行っていたのは予想外であった。何せ日本の最北端、北海道である。寒さはどうしたのかなど疑問が次々と浮かんだが縁壺なら何とかしそうである。

「……………弟君って探検家とか目指してたの？」

「……………いや、そんなことは言ってなかった。しかしそういえば世界を見てみたいとか言っていたな」

だとすれば鬼殺隊の力を持つてしても見つからなかった説明がつく。縁壺は定期的に移動していたのだ。それも昼夜問わず走り続けていたのだろう。

蝦夷。縁壺は兎も角、うたにとつては過酷な環境だと思つたが、縁壺のことだ、素手で熊や鹿ぐらい狩れる。生計を立てずとも、縁壺の剣ならどこの武家でも買つてくれる。路銀の調達は容易い。

「……………早速、向かうとするか」

「義理の弟かあ。会つてみたいし、付いてくよ」

『御館様に連絡を入れる』

『……………私も着いていかなきゃいけない流れよねこれ……………』





縁壺とうたは各地を巡り、北に向かつて旅をしていたところ、寒さの関係で今いる地点を終点とした。しかし二人は蝦夷の山で少しの間暮らすことにした。蝦夷は食べ物が美味しいと気づいたうた。彼女はここが気に入ったからである。彼が簡易な家の中で木の実を選別していると、うたが興奮した様子で扉を押し開ける。

「縁壺ー!」

「うた。どうしたんだ?」

「向こうにでえつかい、黒いものが見えるぞ!」

でかい黒いもの。鹿や猪ではなく、縁壺はそれが熊だと確信を抱き、うたについて行き遠くの丘にそれを目視する。縁壺の予想通り大きく熊であった。うたは熊を知らないらしい。

「あれは……熊だよ。……食べたいのか?」

「お？ ……食えるのか？」

「食べれるよ。うたのために俺が取ってこよう」

「おお！」

そういうと縁壺はまず家に戻り、一月前に任務中の鬼殺隊を助けた時に貰った刀を引つ掴んで、駆け出す。大きさから熊は雄の成体のようだ。瞬く間に距離は縮まった。遅れて熊が縁壺を認識し、威嚇がてら爪を振り上げようとする。

「すべつくが違うぞ」

——  
斬。

縁壺はなんの躊躇いもなく回避し、すれ違いざまに熊の首を切り落とす。断末魔すらあげずに呆気なく熊は倒れた。倒れた振動で地面が揺れた。

「……随分と大きいな。ここらの山を縄張りとしているのなら、うたに危険が及ぶからな。許してくれ」

そうは言いながらも何百キロもある熊を担ぐと行きと変わらぬ速さで、うたの待つ家に戻る。

「よこしよ」

熊を地面に下ろし、血抜きを始める。ここまでで縁壺は息切れひとつしていない。本人はただ走って、斬って、担いで、走っているだけ。しかもこの芸当が練習さえすれば誰にでもできると思っているのだから余計にタチが悪い。

「うおおお！ 鹿なんかよりずっとでかいぞ縁壺！」

うたは黒曜石のような目を輝かせる。それだけで縁壺は満足する。兄に教えてもらった、世界の美しき。最早縁壺にとつてそれは既に、うたと過ごす日々の中で完結していた。うたと過ごした二年弱、もう世界の北端まで来た。次は……

「うた」

「なんじゃ？ 縁壺。そんなに改まって」

「……俺はそろそろ兄上に会いたい。少し旅路を戻ることになるが、着いてきてくれるか？」

縁壺は兄も共にこの世界を見てみたいと考え始めていたのだ。うたがいるだけでこんなにも世界が美しくなるのなら兄も一緒ならどれだけ美しくなるのだと期待に胸を躍らせた。

「当たり前じゃ！ なにせ、縁壺はわしの家族だからな！」

「そうだったな。それじゃあこの熊を解体して、明日にでも出発しよう」  
「賛成じゃ！」

うたも今を楽しんでいた。両親の死は悲しかったが、縁壺がいる。お墓にお別れもしてきた。縁壺と過ごす今が一番幸せである。うたもそれで十分だった。

二日後、二人は現在進行形で旅の途中であった。大きな荷物を担いでいる縁壺にうたが口を開く。

「縁壺の兄は、どんなやつなんじゃ？」

「そうだな……俺よりも強く、賢く、謙虚で、かつこよく、そしてとても優しい人だよ、兄上は。うたもきつと気に入る」

「ほーん。でもわしは縁壺が一番だぞ！」

「あ、ありがとう。なんか照れるな、うた………ん？」

縁壺は人の叫び声と怒号を微かに聞き取る。うたも気づいたようだ。

「……なんじゃ？ 戦か？」

「いや、話している内容からして賊だと思う。うた、少し行ってくる。俺の荷物を持って追いかけてきてくれ。何かあったらまたいつもみたいに笛を吹いてくれ」

「うむ。気をつけるのじゃぞ！」

縁壺は刀を掴んで、走り出す。見たところ少し遠い。空を見上げると、曇り空で太陽

が見えなかった。

すると、賊に襲われている村よりも遙か遠くに鳥を二匹見つけた。

「黄色い布を首に巻いているとは、おかしな鳥もいるもんだなあ」



巖勝と薫が北の蝦夷地へ向かって旅をすること、既に一週間が経っていた。八咫や天外といった銚鴉達は前方の偵察に行ってくれている。

「ええっ！ 月の呼吸って拾陸ノ型まであるの!？」

「ああ、最後の方は飛ばし飛ばしだが、そのうち振るえるようになるだろう」

「炎の型は玖までしかないからね」

「それでも多い方だ。奥義で止まるのではなく、その先の型を自分なりに作ったらどうだ？」

「うーん……いい案が浮かばないんだよね、炎の型は煉獄家が代々受け継いでいるから完成形に近いの。手を加えなくても正解だと思うんだよ」

「縁壺に会ったら日の呼吸を見せてもらおうとするか、広く対応の効く型ばかりだからな、何か思いつくかもしれない」

「私はどつちかと言うと、巖勝君の月の呼吸が見たいなあ」

「それならば後で飽きるほど見せてや……む」

「……多分賊だね、どうする？」

二人は怒号と悲鳴を察知する。話している内容からして山賊辺りだと見切りをつけた。鎧鴉達も報告に来たようだ。

『巖勝殿。ここから先の村が賊に襲われているようだ』

『行くわよ！ 助けてあげたら久々のご馳走が待ってるわ！』

「走るぞ、薫。八咫達は先に様子を見てきてくれ」

「うん、付いてく」

曇天の空。そういえば初めての稽古の日、縁壺の廃屋に赴いたのもこんな感じの空だったか。そう巖勝は懐かしんだ。

（あれからもう二年か。縁壺は本当にどうしてるだろうな）

再会の時は近い。

## 拾肆話 再会

巖勝と薫は村に近づくとつれて、状況が段々と鮮明に分かつてくる。

賊ではない。見たところ屈強な武士団、所謂武者崩れである。戦に負けて食料に困窮して村を襲ったといったところ。愁武装している分、賊より厄介なのだ。下手な武士が返り討ちに会うのはよくある話。巖勝と薫は並走しながら作戦を立てていく。

「薫は囚われている村人をすぐに助けられるように奥から回って準備している。私は賊を引きつける。十中八九交戦するだろう」

「分かった。気をつけてね巖勝君」

「薫もな」

互いに互いを信頼しているから、野盗如きに手こずるとは思っていない。それでも心配はしてしまうものである。

薫は村の横から回るために離れていく。少し名残惜しいものを巖勝は感じるが、すぐに思考を切り替える。作戦は至って単純。巖勝が引き付け、ついでに討伐し、薫が村人を助ける。巖勝は村の正面に到着すると、武者崩れ達をこちらに注意を向けさせるために、深呼吸して、声をはりあげる。

「我が名は継国巖勝！ 野暮用のためここを通つたがこれは何事か！」

「ん？ ……なんだ？ 侍か？」

「やけにちつぽけなお侍だな」

武士崩れがなんだなんだと巖勝の方を向く。十過ぎぐらいの男が、歳に合わない声量を発しているのが興味を引いたのだ。武士崩れ達が次第に集まってくる。不快な目線に巖勝は顔を顰めさせた。

するとその中から首領と思しき一際大きな体格の男が前に出てきた。髭や髪が無造作に伸び、酒の入った赤い瓢箪を片手に持つている。顔がほんのりと赤いのは恐らく酔っているのであろう。何度も形容しがたい不潔さをありありと曝け出している。

「これはこれは。ご立派なお侍様だ。俺たちは將軍、足利義教様の名により戦に出たが、情けないことに負けちまつてな。食うもんもねえからちよいと村のもんを頂戴しているところだな」

「ほう。見たところ頂戴していると言うには些か乱暴が過ぎるのではないか？」

「それは仕方ないことだなあ。將軍様の命によつて動いてる俺たちは將軍様そのものよなものだ。」



幾ら不作だからとは言え、そんな俺たちに食い物を出さないのは悪いことだろう？

気が進まないが、将軍様の名誉の爲にも悪人は成敗してやらねえとな。ガハハハ!!」

首領は笑い出す。少しも罪悪感など感じていないような笑い。実際感じていないのだろう。彼の仲間も身の程を知らない哀れな侍に向かつて笑い出す。彼らにとつて巖勝は降つて湧いた金の卵であり、搾取されるだけの存在であつた。身なりのいい武士ほど一騎打ちを重んじる。それに従つたふりをして戦っている最中に後ろから切り掛る。簡単なことであつた。

「あの侍の腰に差している二本の刀も上物だろう」

「売ればまあまあな金になるはずだ」

口々に聞こえる巖勝を世間知らずの餓鬼としか見ていないような発言。不快極まらないが巖勝は顔色一つ変えない。

「そうか。将軍の命なら仕方ないと言うのか。ならば見過ごせん」

そういうと巖勝は刀に手を掛ける。村の家の屋根で事の有様を見物していた武士崩れがゆつくりと弓を構え出す。

もちろん巖勝は気づいている。首領は手を挙げて一時的にそれを止める。

「運が悪かつたなちつぽけなお侍さんよお。こつちだつて生きるのに必死でな、綺麗事だけではこの世は生きていられないんだ。最期に身の程つてやつを教えてやるよ。安

心しな、貰えるもんは貰ってやるからよお……!」

首領が手を振り下ろす。首領は例え巖勝が頭を射抜かれようが、袋叩きに会おうがなんの興味も持たなかった。所詮この世は弱肉強食。強ければ生き、弱ければ死ぬ。綺麗事では腹は膨れない。

(じゃあな。世間知らずの侍)

弓兵が躊躇いもなく矢を射る。放たれた矢は風を切りながら巖勝の頭目掛けて直進していった。

(精度はいい方だ。腐っても武士は武士だな)

そう言いながらも巖勝は柄から手を離し、向かってきた矢をまるで止まっているかのように掴み、打たれた方向に向かって勢い良く投げ返す。一連の動作は決まりきったように流麗だった。

(……は)

まさか巖勝が投げ返すと露に思っていたいなかった弓兵は、まともに眉間に矢を受ける。しかし勢いは止まらず、弓兵が放ったそれよりも威力の高いそれは彼の頭蓋を貫通した。勿論即死である。力が抜けたように屋根から滑り落ちる。肉の潰れるような音とともに地面に落ちた。

暫しの沈黙が場を支配する。

「……………なっ！ 野郎！」

そこは経験のあるものから状況を理解した。目の前にいるのはただの侍では無い。武士崩れ達が一気に刀を抜く。顔は先ほどとは打って変わって殺意のある表情を浮かべている。向かってくる矢を掴み、まして投げ返すなど人間業では無い。その中で一人。彼らの首魁は冷や汗が背中を流れるのを感じてていた。叩き上げの感覚がよりはつきりと目の前の相手の強さを解らせる。

(なんで……………こんなに弱そうなのにでかく見えるんだ!?)

もう手遅れである。巖勝は標的を逃がさない。続け様に蛟落天津を抜く。民家と村人がいるため月の呼吸は使えない。少し時間がかかるだろうが、一人一人葬っていくしかない。

(將軍の命とならば、役人はこの武士崩れを庇うだろう。なら口封じをするに越したことはない)



縁壹は適当な賊に近づく。気配はない。ただそこにある植物のように静かだった。これに気がつけるのは同じ透き通る世界を持つ存在のみ。この世界ではまだ巖勝しかない。

「ああ？ 餓鬼か？ がっ……!?!」

「さつきよりも随分と少ないな。村の反対側に行ったのか」

刀を峰打ちで首に叩き込み、昏倒させる。縁壹は巖勝よりも背が低い。因みに、巖勝が年齢の割に背が高すぎるのであって、縁壹は世間で言う普通の子供に該当する背丈であった。縁壹はそれを少し不満に思っていた。弟として見上げるのはいい。ただ、兄とおなじ景色を見たいという願望からである。

「村の反対側でも何か起きているようだし、運がいい。あつちに賊の気が逸れているうちに後ろから回って倒して行こう」

方針が決まればあとは早い。縁壹は呼吸を使いながら急所に刀を叩き込んでいく。

呼吸で強化された一撃は、賊が激痛を感じる前に昏倒する威力。彼が大人になればどうなるのか、想像に容易い。縁壺は見つからないように隠れて村の中心に賊を昏倒させながら進む。

すると、

「……………」

村の奥で急に騒がしさが増した。どうやら賊が武装を整え、村の奥の方に集まっている。向かう先からは賊の悲鳴と怒号が聞こえてくる。それと血の匂い。濃密で今までに嗅いだことの無い残酷さがした。

「なんだ？ 援軍か？ ……どうしてか分からないが楽になったな。余程腕の立つ援軍がきたのだろう……それにしてもやけに静かだな。もう少し剣戟の音が響いても可笑しくは無いけど」

縁壺は不思議に思った。しかしやることは変わらない。賊は戦支度に夢中。そして逃亡する準備をしている無防備な背中につきかりと一撃を叩き込んでいく。気づかないようにしてはいたが、村人の死体がそこらかしこに点在している。明らかに暴力を受けたあとが見て取れた。

（酷い。命をなんだと思っっているんだ）

不快感と怒りを頭にする縁壺。すると今度は賊が一人こちらへ向かってくる。比較

的強そうである。縁壺の物差しでは一寸と二寸の差ではるが。

(……なんで怯えているんだ？ 心音がうるさいほどに脈を打っている。まるで何か……般若でも見たような……)

体格は族の中でも飛び抜けている。ぼさぼさの髪と髭、戦で鍛えられ古傷がある肉体。瓢箪を腰につけてあることから酒を飲んでた事がわかったが、酔いは覚めているようだ。何故なら賊の顔は青白く、恐怖に染まっている。必死の形相。縁壺に気づいても進行方向は変えようとしない。早く村を出て、ここから離れたいという思いがあったのだ。

(もしうたが見たら心底嫌そうな顔をする強面だな)

「はあ……はあ……！ どけ！ 餓鬼い！」

「……ほい」

「なっ……！ うぐっ！」

縁壺は向かってくる賊に対して足をかける。あつさりと体勢を崩した大男は無様に仰向けに倒れた。縁壺はしゃがみこんで問いかけることにした。

(大の男がここまで怯えるなんて、只事じゃない。武士の大軍でも来たのか?)

「なあおじさん。向こうでなにがあつたんだ？」

「ひっ……！ なんでもうここにいます！ さ、さつき向こうにいただろう！」

「……？」

縁壺はよく分からなかったが逃げ出そうとしたのでとりあえず昏倒させる。縁壺は俄然興味が湧いた。大の男をここまで怯えさせる存在など並の者ではない。

「俺よりもつよいのかな」

そう言いながらも、縁壺の方に次々と逃げてくる賊を持っている刀で瞬時に眠らせる。

（もしかして兄上よりも強いのかな！）

胸が高鳴る。足に力が入る。また少し進むと、村人を先導して一つの家に集めて、避難させている女性が見えた。特徴的な外見で、ただものでは無いと縁壺は判断した。

「大丈夫ですから。私達が来たからにはもう大丈夫です。すぐに落ち着来ますので、安心して下さい」

彼女の周りには賊が数人倒れている。全員一太刀で無力化されている。そうなると思えばかなりの手練である。黄色を基調とした燃えるような髪に臙脂色の着物。腰には刀を差している。

縁壺は瞠目する。体の構造が呼吸を使える者にしか現れないはずであったからである。

（呼吸を使える劍士……！ 呼吸は兄上以外には教えていない……だとすればあの女性

は絶対に兄上をしつている！」

縁壺はすぐさま走りよる。

「あらっ！」

その女剣士——薫は縁壺の存在に気づき、彼女も瞠目する。もちろん彼女の想い人に似ていたからである。

(……巖勝君に似てる子供！　もしかしてこの子が縁壺君かな?)

薫は抱き抱えていた村人の子供を下ろして縁壺に問いかける。薫は目を輝かせた縁壺はまるで弟のようだと少し失礼なことを考えた。

「あの、もしかして、縁壺君じゃないですか？」

「っ！……そうです！　あなたは兄上を知っているのですね！　今兄上はどこにいますか!？」

「お、落ち着いてください。あなたのお兄さんは今あちらの方で武者崩れ達を倒していると思いますけど……」「ありがとうございます！」　って速い!？」

瞬時に縁壺は走り出す。会いたい。その一心で。村も村人も目に入らない。こちらに向かつてくる賊は一人もない。

(兄上！　俺は強くなりました！　家族も出来ました！　うたと言うんです。兄上も



きつと気に入ります！ 兄上！ 兄上！

縁壺が角を曲がると、二人の男の人影が見える。

みると片方が遥かに大きい男の胸を貫いた所であった。その瞬間、辺りが先程の喧騒が嘘のように静まり返る。血の海に佇み、賊の返り血が遅れて吹き出す、その男は一滴も濡れていない。

周囲は死体で溢れていた。男が刀を一振り、血を払う。そうしてゆっくりと縁壺の方を振り向いた。痣も濃く、大きくなっている。その力は二年前の比ではない。しかし

……

「兄上!!」

「久しいな、縁壺」

微笑む顔は変わっていないかった。



縁壺が巖勝に抱きついてくる。巖勝は弟が血で汚れないように細心の注意をはらいながら受け止めた。

「兄上！ 兄上！ 俺は会いたかったです！」

「ああ、私もだ。立派になったな。話したいのは山々だが、まずはこれを片付けなければ。美しい女剣士に会っただろう？ 呼んできてくれないか？」

「はい！ すぐに！」

縁壺は意気揚々と走り去っていく。まだ話し足りないことがあるのだろう。それでも巖勝は自分の頼みを優先してくれたことに感謝した。

「……憎悪は……しない。嫉妬も……抱かない。一先ずは安心だな。しかしまさかこんなにも早く会えるとはな。それにしても」

巖勝は死体の山に目を向ける。

「村の皆が怖がる前に片付けるか、峰打ちで後から息の根を止めた方が良かったな。もう手遅れだが。……穴でも掘って村の遠くにでも埋めておくとしよう」

巖勝は死体を一箇所に集めていく。久々の大量殺人を犯したというのに心は酷く風いっていた。それがまるで人の命をなんとも思っていないようで、巖勝は自己嫌悪に陥った。

（何も感じない。なんとも思わない）

殺人は普通のことではない。誰しもが普通のことではないと言う。そんな当たり前のことが理解できなくなっていく。後々悪さをするのであれば殺しておくのは正しいのではないか？ 情けをかけたものが改心せず、また人を殺めれば、その責任は誰にいくのか？

ならばいつその事——

「お疲れ様です、巖勝君」

薫が現れる。ソプラノ調の声が巖勝の耳朶に響く。沈んだ心が晴れていく。彼女がこの惨状を目にして何も言わないのならば、それは間違っていないかった。そう思えた。縁壺に会ったのだろう。説明よりもまずは後片付けということは薫も分かってくれていた。

「……随分と暴れたね。処理が大変だったら私も手伝うよ？」

「気持ちはとても嬉しいが、村の皆を頼む。これらは全部私が広げたから、やってもらう」

「巖勝君に一人でさせるのは気が進まないけど……ありがとうね。すぐ戻るから」

薫は去っていく。縁壺も村の復興に力を貸してくれるだろう。これから縁壺と薫にどう説明するか考えながら、巖勝は死体処理を始めた。先程とは打って変わって、巖勝の心は晴れていた。

## 拾伍話 秀才が天才に届くために

「改めて……久しぶりだな縁壺」

「はい！ お久しぶりです兄上！」

「私の名前は薫と申します。よく見ると雰囲気は全然違いますね」

「おお！ 縁壺の兄上とその嫁か！ わしはうた！ 縁壺の家族じゃ！」

武者崩れは処理し終わった。そこで村人に一軒家を借りて四人で近況報告といく。原作を知っているからといって巖勝はうたの性格を奥底まで知っている訳では無いし、薫に至っては巖勝以外とはほぼ初対面である。巖勝の横に薫。縁壺の横にうたがおり、向かい合っていた。

巖勝は原作通りに縁壺がうたをつれていることに安心する。

「縁壺の兄上と縁壺とではどっちが強いのじゃ？」

「兄上です！」「縁壺だ」

（兄上には勝てませんが、兄上以外なら……）

（どう考えても縁壺だろう。公式チートだぞ）

「……前言撤回です……やっぱり二人はそっくりです」

一通り話した後、薫とうたは巖勝達が久々の再会ということもあって、空気を読んで二人だけにしてくれていた。薫とうたの二人は家の外へと出ていった。

「兄上は今どこかの国に仕えていらつしやるんですか？ その刀も仕えている主から授かったものなのでしょうか？」

「いや、今は薫と共に鬼狩りをして暮らしている。この刀は日輪刀と言ってな。鬼を斬るための刀だ。鬼殺隊に入隊したら刀鍛冶に打ってもらえる。因みに縁壺、鬼殺隊に入ったのはお前を探すためでもあつたのだぞ」

「？ どうしてですか？」

「あー………最近鬼の被害が拡大しているからな、戦も頻発している。人はどうともなるだろうが、鬼は別だ。日輪刀のない縁壺達が心配だつたのだ」

巖勝は原作の知識とは口が裂けても言えないので尤もらしい理由を言つて回避する。しかし心の隅で縁壺なら日輪刀がなくとも鬼を滅せるといふ気がした。根拠はない。巖勝の苦し紛れの言い訳を縁壺はもちろん好意的に捉えた。

「俺の事を心配してくれたんですか！ ありがとうございます！」

「ああ、そして縁壺の呼吸は鬼殺隊に広めさせてもらった。お陰で鬼と互角以上に戦えることが増えたと隊士達から聞いている。感謝するぞ縁壺」

「普通の人には覚えるのですら難しいのですが……とりあえず兄上のお役に立てて良

かったです。兄上は鬼殺隊の中ではどれくらい偉いんですか？」

当然の質問。縁壹は鬼殺隊の仕組みをまだ知らない。

この時代、鬼殺隊には癸、壬、辛、庚、己、戊、丁、丙、乙、甲の十段階階級制度がなかったので巖勝は少し言い洩る。

「……縁壹の言う階級制度はなかったが、柱という最高階級はある。しかしそれだけだ。私の地位は普通の隊士とそう変わらないぞ？」

「ええ!? 兄上が並の剣士と同じだなんておかしいです! 階級制度を新たに作った方がいいと思います! もちろん兄上は最高位の柱で!」

「柱は難しいと思うが、階級制度は素晴らしい案だ。こちらから提案しておこう」  
(なるほど、この提案が後の鬼殺隊階級制度の起源か)

「兄上! それでは本題です!」

「……本題?」

「はい。兄上! 俺と二年ぶりに稽古しましょう!」

(……薫に情けない姿は見せられんな)



薫とうたは継国兄弟が久々の再会話に花を咲かせている間、村の近くの森で話し込んでいた。当然のように恋愛話。互いは互いの想い人を雰囲気でわかっていた。うたはありありと好意を剥き出しにしているし、うたから見た薫は巖勝に向ける目線が色を持っていたからである。

「それで、うたさんは縁壺君のどこに惹かれたんですか？」

「うたでいいぞ薫！ 縁壺に惹かれた訳か……うーん。わしはいつの間にかだな。気がつけば……というやつじゃ。薫は縁壺の兄の何処を好ましく思ったんじゃ？」

「私は……えつとその、巖勝君は私を何の先入観もなく、等身大で見てくれたんです。それ迄は他の皆は私を守らなければならぬ存在だと思って、態と任務から遠ざけたり、逆に自分の任務に無理やり連れていかうとしていたりして私に理想像を押し付けて、うんざりしていたんです。でも巖勝君は違ったんです。私を私のままで見てくれて、屈託なく話せたのは家族以外に彼だけで、そうしている内に……こほん。うたは縁壺君とどんな風に会ったんですか？」

薫は話しているうちに、うたの顔が微笑ましくなっているのに気づいて赤面し、話すのを止める。うたはありありと好意を表面に出して裏表もそんなにない人物だが、薫は

好意を表に出さない分、心の奥底で昂らせている人物である。

「う、うむ。初めに会った時はわしが父上と母上を流行病で亡くした日だな」

「それは……」

「別にもう悲しんではおらん。今は縁壺がいてくれるからな。その日に縁壺はふと現れてな、家に帰る理由を無くしたわしを見て、一緒に家に帰ろうと言ってくれたのじゃ」

「……かなり大胆ですね」

「うむ。それからは一緒に暮らしていくうちに、縁壺とは家族になったのじゃ」

「えっ！ 家族って事はその、えっと、そういう事もしたんですか……？」

「ん？ よくわからんが、まあとりあえず一緒に暮らしているのじゃから縁壺とわしは家族じゃー」

「そうなんですか。ふふっ。うたは縁壺君が本当に大好きなんですね。……あら？」

薫は空気が変わるのを察知する。

「……巖勝君達が移動するようですよ」

「な、なぜわかるのじゃ？」

「女の勘ですね」

薫は少し照れくさそうに答えた。少くない色香を纏った仕草にうたは目を輝かせた。



「おお！ 女の勘か、なんだかかっこいいぞ！ わしにもつかえるか？」

「ええ、そんなに縁壺君が好きなら、すぐにつかえるようになりますよ。大好きな人と一緒に居ていれば、もし彼が何処かへ行こうものならその場所に私がいる意味が無い気がしてくるんです。

そうしていくうちに彼の居場所は私の居場所。私の居場所も彼の居場所……ふつ。うたにもいつか分かる時がきますよ」

そう言つて、うたの髪を梳く薫。実際薫の方がうたよりも身長が高い。髪の色さえ違わなければ姉妹にも見えただろう。

（姉……みたいじゃ。ならば縁壺の兄上も兄と呼べる日が来るのか？）

「うたの髪は綺麗ですね。漆黒ながら光を反射して艶やかなのが美しいです。将来が楽しみです」

「えへへ。そうであろう？ 縁壺もよく褒めてくれるのじゃ！ 薫こそ、光を受ければ金色に輝いておる！」

「ありがとうございます。褒めてもらえて嬉しいです……さあ、行きましようか」

薫は腰を上げて伸びをする。振り向くと、うたがきよとんとしていた。

「？ ……どこへじゃ？」

「巖勝君達の所にきまつてるじゃないですか。……そうですね、一緒に女の勘を鍛えま

しよう」

「わかつたのじゃ！」

振り向いて手を差し伸べる薫。その手を掴んで勢い良く起立するうた。薫とうたは二人を追う。薫だけは何をするのか大体予想は着いていた。



「兄上、その刀は使わないのですか？」

「この刀、日輪刀は鬼を切るための刀だからな。人に向けるのは些か気が引ける」

巖勝は腰の刀の柄をなぞった。家の中から二人は竹の生えた林へ移動していた。村人からは村には関係ないところだと聞いている。つまり人は全く居ない。明るく日の差し込む竹林。剣豪が立ち会うにはかなりお誂え向きであった。

縁壺は巖勝よりは短いが、普通よりは長めの髪を後で縛り、蘇芳色の着物に黒い袴を身につけ、腰には無銘の刀を差していた。

対して巖勝は縁壺より長い髪をこれまた後で縛り、紫の着物と黒い袴を着ている。腰

には一目見ただけで業物とわかる刀。蛟落天津が差してある。

「では兄上、胸をお借りします」

「ぬかせ、技はおまえの方が上を行くだろう」

「力はそうではないと？」

「……さてな」

会話はそこで途切れた。空気が一変する。

両者は柄に手を置き、抜刀の構えをとる。手練の強者は構えただけで相手の力量が見て取れる。

(……… 化け物め！ まだ届かないか！)

(っ！ やはり強い！ 前よりも格段に！)

先手を取ったのはもちろん、間合いに優れる巖勝であった。

・月の呼吸 壺ノ型 闇月・宵の宮・

巖勝から放たれた一閃が縁壺に接近するも、縁壺は高く飛んで回避する。

(避けられたが、遙か彼方まで竹が切り倒される音がした。範囲も威力も格段に上がって

いる。間合いと言う概念は兄上の前では通用しない。加えて、受けでもすれば瞬時に纏われた斬撃は俺の体を一瞬で塵にするだろう)

巖勝の太刀筋は避けでもしなければ掻い潜るのは不可能。縁壺は今の一瞬でそう判断した。さらに視界が開けた竹林で巖勝は絶えず刃を振るう。

・月の呼吸 肆ノ型 虧月突・

突きすら、投擲された槍のように飛び、縁壺を狙う。巖勝は異変に気がつく。

(……なぜ接近してこない？ 接近しなければ縁壺は攻撃できないはず……先程から周りをうろちよろと——まさか!?)

巖勝は攻撃をやめ、刀を鏢迫り合えるように、月魄災禍の構えを取る。瞬間、遠くを走っていた縁壺が一瞬で巖勝に肉薄する。

・日の呼吸 陸ノ型 日暈の龍 頭舞い!・

(やはり!)

(これを防ぎますか!?)

巖勝の予想通り、死角から刃が叩きつけられる。円を描くように人外の力で何度も攻撃される。距離を取って回避しようとするが、攻守一転。巖勝は防御にまわりきつてしまふ。

先程から縁壺は幻日虹の歩法で巖勝の目を眩ませながら少しずつ近づいていた。呼

吸と型の応用。常人ならば数歩でも足に尋常ではない量の意識を向けなければならぬが、縁壺は平然とやつてのける。天才はいつも上を行く。凡人は驚くのみ。

(つ！)

・月の呼吸 伍ノ型 月魄災禍・

巖勝が苦し紛れに技を放つ。攻撃は中断されるが、斬撃が通らず、縁壺の体が陽炎のように揺れる。

(……飛輪陽炎か？ いや、まさか！ これも歩法の応用か！)

縁壺は全方向に放たれる刃を巖勝の後ろに周り、回避する。歩法が巖勝を混乱させ、縁壺が攻撃するのに十分な隙を与える。

・日の呼吸 伍ノ型 陽華突・

(勝てる！ 兄上に！ これで……！)

縁壺も初見殺しの為に鍛えてきた歩法だが消耗が激しく、数回しか使えないことはわかっていた。故の速攻。巖勝の無防備な背中へと縁壺の突きが放たれる。

(駄目だ、背後からの攻撃。単純だが出遅れた。)

私はこんなにも弱かったのか？ 兄の癖にこうもあつさりと弟に負けるのか？ 刃を飛ばせるからなんだ。接近されれば終わりではないか！ 小細工を弄して、周りを氣遣っているようでは勝てない。——ならば！ 命を削るまで！)

「——ッ!!」

巖勝は叫び、縁壺に対して背を向けたまま刀を握りしめる。尋常ではない握力で握られた刀の柄が指の形に陥没する。血管が隆起し、首元の痣が胸と背中まで広がり、黒死牟のそれよりも拡大する。

巖勝の纏う空気の急激な変化に縁壺は攻撃をやめ、後退する。

(痣が!? 兄上! それは体の負担が大きすぎる……! ———— なっ! うた、薫さん!? そして村人もか!)

縁壺はこちらへと近づいてくる家族達の気配を察知する。村人も侍が竹林で二人で斬り合うとあつては興味が湧いたのであろう。大勢で寄ってくる。余り近づかないように言っていたが、縁壺は今の巖勝では易々と村人の場所まで届くと確信する。

これでは稽古どころではない。

「皆よせ! 近づくな!」

「! 皆さん伏せて! うた! ごめんなさい!」

「……なんじゃ? うおっ!」

村人達は薫の劍幕に気圧され、言う通りに思い思いに地面に伏せる。うたは薫が抱いて地面に伏せさせる。

巖勝は何も聞こえていなかった。体が耐えられず心臓の音が聴覚を侵害していた。

只只、自分の体が燃えるように熱い。そして一つの極地へとたどり着く。縁壺に負けるのはこの体が許さなかった。負ければ己は原作通り、縁壺への憎悪と嫉妬に飲み込まれるかもしれない。そうして自らに課した縛りは、寿命と引替えに巖勝をさらに上の段階へと昇華させた。

・月の呼吸 拾肆ノ型 兇変・天満織月・

世界が悲鳴を上げる。

周囲の空気を巻き上げるようにして刀が振るわれる。月の呼吸の中では最大範囲を誇る型。絶望の嵐が竹林を全て切り飛ばし、地面を抉りとり、切り飛ばされて宙に舞った竹ですら瞬時に塵へと還す。

伏せている薫達のすぐ上を死が音を立てて通り過ぎる。村人はその異常なまでに唸

る風切り音に怯え、薫は全身から冷や汗が吹き出した。頭のすぐ上で竹が切り落とされる音が幾重にも重なる。

縁壺は透き通る世界を発動したまま、地獄の綱を渡るように接近する。そして、

「!!」

懐から笛を取り出し、思い切り吹く。ただでさえよく響く笛が縁壺の肺活量によつてさらに響き渡る。

「——私は、ぐっ」

巖勝が少しずつだな落ち着いてくる。彼は人の身では不可能な技を出した反動により体が思うように動かなくなる。恐らく寿命が一年ほど縮んだだろう。

縁壺は巖勝に肩を貸す。見回すと竹林が遙か彼方まで根元のみを残して消えている。

(これは……全部私がやったのか。……もうこれ鬼だろ)

巖勝は自分の力にドン引きしていた。

「大丈夫です兄上。大丈夫ですから、とりあえず休みましょう」

ドン引きしている兄を見て、酷く疲れていると思つた縁壺は、兄に休むよう促した。竹林が開けた事により、薫達の存在が明らかになる。巖勝は余りにも近くにいたことに気づき、瞠目する。



薫とうたが駆け寄ってくる。

「巖勝君！ 大丈夫!? 怪我は……」

「縁壺！ 何があった!? 鬼でも現れたのか?」

薫達の心配が巖勝の心に沁みる。しかし、危険だったので少し考えものである。

「……どうしてここにいます。近づくなと村人達にも言っていたはずだ」

「……ごめん。でもあんなに届くとは思わなくて」

「む……」

巖勝は竹林の方に向き直る。明らかに巖勝が普段飛ばす刃の範囲では無いところまで竹林が無くなっている。

「……化け物」

「まるで鬼じゃ」

「お侍様の戦い方じゃない」

村人が恐怖の形相でこちらを見ている。刃を飛ばせる時点で既に人外の力なのだ。今更恐れられた所で巖勝にとつては何の思いもなかった。縁壺と薫は言い返しそうにしていたが巖勝が止めておいた。ちなみに薫は刀までも抜こうとしていた。目が笑っていないかった。

とりあえず鬼殺の里に縁壺とうたを案内するために鎌倉付近まで戻ることにした。

「……兄上は、これからどうするんですか？」

「お前を鬼殺隊へと推薦する。うたも保護してもらおう。拒否権はない。黙って従え」

「かなり過保護では!？」

「縁壺の兄の仲間と会えるのか！ 何だかやたらめつたら強そうだな。斬撃を飛ばすの

次は……口から火を吐くのか？」

「……うた、このおふた方が逸脱してるだけですよ」

「縁壺よ、仕方がないことだ。呼吸の起源など、鬼の始祖からしたら排除したいだろうからな」

巖勝はとりあえず目標の一つを達成したことに安心する。

（次は、無惨との邂逅までひたすらに強くなることだな。縁壺には自由行動をさせて原作通りに炭吉と会ってもらわねば、だが人の身で鬼呼ばわりとは……仕方がない。元より呼吸そのものの特性。今更よ）

## 拾陸話 真劍勝負

「巖勝。弟が見つかつて何よりだ」

「はっ！ 全ては御館様の助力があつての事。心より感謝申し上げます」

巖勝は鬼殺の里まで薫と共に縁壺とうたを届けた。正確には鎧鴉に隠を呼んでもらい、道程の半分以上は目隠し継走だった。道中、巖勝と縁壺は稽古をしたものの、巖勝は型を使わない斬撃ですら先程の戦いからかなり高範囲に飛ぶようになっており、木の棒かつ完全に呼吸縛りで縁壺と戦い、腕を上げていた。因みに縁壺は巖勝の飛ぶ斬撃を「飛月」と名付けた。巖勝はかなり気に入った。

薫は日の呼吸を見て炎の呼吸と複合せせようと考え、うたは巖勝の飛月に興味津々であり、縁壺に真似してもらおうとした。

しかし巖勝は、

「刀に空気の層を纏わせろ。そして振れ」

「違う。もつとこう……あれだ、刀に指向性を持たせろ」

と、縁壺に精一杯教えたが縁壺は終始頭の上に疑問符を浮かべていた。紆余曲折を経てやっと着いた鬼殺の里。巖勝は終哉に縁壺とうたの保護を頼むつもりである。半年

ぶりではあったが、久しぶりに見る柊哉の病は進行していた。もう目は殆ど見えていないだろう。

「そう硬くなるな。此方としても我が鬼殺隊の戦力拡大の礎となった呼吸の起源ともあれば、手厚く保護するのは道理。伴侶も鬼殺の里で隠見習いとして保護しよう。なるべく前線には出さん」

「重ね重ね感謝申し上げます」

「うむ。日輪刀も其方と同じ弔替に頼んである。出来上がり次第届けさせよう。……余談だが薫と結ばれたようだな、おめでとう巖勝。鳴柱が嘆いておったぞ」

「お祝いいただきありがとうございます。……鳴柱殿は恐らく、からかっておられるのでしょうか」

一年前の呼吸訓練の最中、巖勝が鳴柱に、娘である愛染と見合いして欲しいと言われた時、薫が鳴柱の家に突撃し有無を言わさぬ顔で愛染に勝負を仕掛け、完膚無きまでに叩き潰した為、見合いの話は暗黙の了解でなかったことになった。当然、柊哉は知っている。

「……時に巖勝。其方は柱になる気はないか？」

「——！ 柱ですか!？」

巖勝は堪らず顔をあげる。あまりにも早すぎる昇格。誘いが来たとしてもまだ先の

ことだと考えていた為、これには面食らった。

「然り。柱になるための条件は主に二つ。

一つ目は名付きの鬼を退治すること。

二つ目は三名以上の柱から推薦を受けることだ。巖勝はその二つを満たしている。柱になれば縁壺達の屋敷も用意させよう。それに二つ目に至っては全柱一致だ。後は本人の意志のみだが……どうだ？」

入隊から二年での柱への昇格。

柱が満席な今の時代は、柱になるのは原作の時空よりも難しい。そう考えると異例中の異例。紛れもなく巖勝の実力が認められた証。柱になれば屋敷を貰える。縁壺達に安心して帰る家が提供できる。巖勝に断る理由はなかった。

「謹んで柱の命、お受けいたします」

「そうかそうか！ ありがとう巖勝。これよりお前を産屋敷終哉の名において柱と認める。そして柱合会議は二週間後だ。柱も逐次この里に集まってきている。二週間後にお前の柱就任と、お前の弟に鬼殺隊に入隊してもらい、隊士達に呼吸を教えてもらうことを伝える。いいな？」

「御意」

「これからも頼んだぞ月柱・継国巖勝」

そう言つて終哉は屋敷の奥へと妻に支えられて去つていった。



(これは縁壺が日柱になるのも時間の問題だな。早く鬼のように強くならねば。そうしたら私が鬼になつても縁壺達は切腹を命じられることは無いだろう……)

巖勝が産屋敷の屋敷から出ると、薫……ではなく鱗滝正助——水柱の継子が屋敷の塀にもたれかかつて巖勝を待つていた。

「やあ、巖勝君久しぶり。とうとう柱になつたようだね。おめでとう」

「……御館様の話を盗み聞きとは無礼だぞ、正助」

「つれないなあ。まあそんなことより、見てくれよこの桜を」

正助は基本的に気分屋である。こちらの話をまるで聞かないし、ただ自分のしたいように動く。その私の強さで味方を鼓舞したり、敵を食い破ることで戦いにおいて鬼殺隊に有利な流れを作ることが出来るのだ。故に実力は確か。仕方なく巖勝が正助の目線の先に目を向けると桜ではなく、街路樹のように木の芽が丸石に囲まれて植えられていた。

「……桜？　これがか？」

「そうだ、名は猛勝。僕はもし継子ができた時も桜を植え、名付けるように指導する。そして名前には勝を入れるよう伝える」

「……何が言いたい」

「人の思いは永遠ということさ。君が一体何を焦っているのか、何を危惧しているのか僕には分からない。しかし、その想いを伝えていけばいい。そうすればいつか自分の思いを受けた誰かが叶えてくれると僕は思うんだ」

(顔に出ていたか)

「そうか……心に刻んでおこう。——名前に勝と付けたのは私を意識してのことか？」

「さて、どうかな。……巖勝君。僕はいつか君を超える。そして鬼舞辻無惨を倒し、鬼の居ない世の中を作る」

「……そうか、応援している。励むことだ」

巖勝は歩きその場を後にする。正助は巖勝にとつて掴みどころのない男であった。巫山戯ているかと思えば至つて本人は真劍であり、偶に核心を突いた発言をする。本当に普段は飄々としているが。

(私には時間が無い。継いでくれるものもない。正助。心苦しいがそう遠くない未

来、お前とは……いや、もしかするとお前なら受け入れてくれるかもな)

巖勝は少し気が楽になる。合理的な判断ができ、自分のとの仲も悪くない正助ならば、たとえ自分が鬼になったとしても説得ができるかもしれない。そう思った。

(柱になったと言えば薫はどんな顔をするのであろう。薫のことだから自分の事のように喜んでくれるのだろうか……)

巖勝は無意識に薫を意識している事を自覚し苦笑する。

(私も染まったものだな。薫にも、この世界にも)

宿の前につき、戸を開けると、薫はもちろん何故か房綱もいた。うたは隠の訓練に行き、縁壺はそれについて行っているのだ。薫と房綱は旧知の仲。話していても何の支障もないのだが、巖勝は一気に機嫌が急降下する。相変わらずの無表情は変わらなかったが、それに気づいたのは薫だけであった。

(あれ……巖勝君、もしかして今私に嫉妬してくれた？ 私が自分以外の男と話しているのを見て咋に不機嫌になったよね。嬉しい)

薫の瞳に昏い輝きが灯る。そんな二人の内面など知らない房綱は平然としていた。

「……………房綱か、久しぶりだな。息災で何よりだ」

「ああ久しぶりだな。巖勝も見違えるほどに強くなつたな。以前よりも体格が大きくなる長している」



「房綱もな。単刀直入だが、今し方、御館様から柱の命を承った。これより私は月柱となつてさらに鬼殺に励む」

巖勝は房綱への対抗心から少し得意そうに柱になったことを報告する。

房綱は巖勝がもうそろそろ柱になることは想定していたが思ったより早かつたことと、横にいる薫が満足そうにしていることにより少し嫌な顔をする。

薫は巖勝が柱になったことにより誰も自分との婚約を疑わなくなることに喜び、自分が柱では無いので今まで通り巖勝についていけることに内心北叟笑む。恋人との旅路がより磐石なものとなつたのだ。

「そうですか！ 史上最年少ですね！ おめでとうございます！」

「……良かったな巖勝」

「ああ、ありがとう二人とも」

「しかしなんだ？ 聞いたぞ巖勝。お前の弟はお前とほぼ互角らしいではないか。しかも広めている呼吸もその弟の模倣ときた。これでは柱の面目が成り立たないのではないか？」

「私を卑下するのは構わんが、それは私を柱へと昇格させた御館様の決断への侮辱にも値する。取り消せ房綱」

「む。俺はただ事実を言ったただけだ。それに御館様とは言え、二年しか鬼殺隊に在籍し

ていない奴を柱にするのは他の隊士が納得しないと思うんだが？」

「房綱君。そうやって巖勝君の実力を軽視している者がいるから、巖勝君を柱にすると御館様だけでなく柱の皆様も考えたんじゃないですか？ 何せ、いきなりこの呼吸法を使つて戦えと言われても隊士達は納得しないでしょう。ただの隊士かつ、年下である巖勝君ならば尚更です。彼を柱とすることで柱が巖勝君を、強いては彼の教える呼吸法も支持していることが鬼殺隊に示されます。縁壹君の入隊からの呼吸指導も円滑に進むでしょう。そういう理由があつてもまだ房綱君は、御館様と柱達は間違つていと主張するのですか？」

「あ……ああ……そうなのか」

（房綱の目が死んで……というか私も気づかなかつた。そうだったのか）

「ああ、知つていたとも。知つていたさ……すまない邪魔したな。あと世話になつた」

そう言つて房綱は戸を閉じて去つていく。薫はまだ不機嫌であつた。好きな人を悪く言われて不快にならない人間などいない。

「むう……巖勝君ももつと言ひ返せばいいのに」

「……それはすまなかつた。因みに房綱は薫が招き入れたのか？」

「適当な理由をつけて追い返そうにも、私が巖勝君と蝦夷に行つてからなんの連絡もしなかつたからね。彼なりに心配してくれたから追い返そうにも追い返せなくて」

「……私が言うのもなんだが、薫。他の男と同じ部屋にしようとするな」

「ふふつ。……ええー？　なんで？　理由を聞きたいな」

「……言わなくても薫なら分かるだろう。彼奴は私と薫が婚約しているのを知らないのか？」

「言っていないよ？　だって言えばあの人、絶対巖勝君に勝負仕掛けるよ。つていうか多分、薄々気づいてるとおもうけど、見ないふりしているだけで……あら？」

「む」

誰かが接近する気配を察知する。

途端に、勢いよく戸が開かれる。そこには房綱が抜き身の緑に染まった日輪刀を肩に担いで堂々と立っていた。後ろには外にいた天外が顔を出している。大方彼女が巖勝と薫の婚約について伝えたのだろう。薫が睨みつけると天外は笑いながら去っていった。こういう展開が好きなのだろう。なんとも豪胆な鋳鴉である。

「巖勝！　数分ぶりだな！　早速だが薫と婚約したらしいな！　薫の鋳鴉に聞いたぞ。風柱の修練場に来い！　薫を任せられるかどうかこの俺が見極めてやる！」

「……ほう」

上司にあたる柱である巖勝に対して、余りにも不遜。

薫は目を輝かせて房綱ではなく巖勝を見ている。まるで次の巖勝の台詞を期待する

ように。隠が慌てて房綱を止めようとすると房綱の雰囲気がそうさせない。彼も次期柱として期待されている新星なのだ。正助と同じく実力者である。

（おお！ 縁壺！ これが修羅場というものか!?）

（激昂する相手に対して冷静さを失わない兄上。とても凛々しくいらつしやる）

いつの間にか戻ってきた縁壺とうたは、面白そうに静観している。

（中々混沌としているな。だが、薫に期待されては引けん）

「ふん。いいだろう。その驕り、その蛮勇、その高邁、私が直々に正してやろう。覚悟しろ房綱」

「その意気やよし！ 先に待っているぞ！ 逃げるなよ巖勝！」

「ああ……!?! お待ちください房綱様！ 風柱様に殺されますよ!!」

「頑張ってくださいね。巖勝君も房綱君も」

「おお！ 風の型か！ 見てみたいのじゃ！」

「そんなに見たいなら次から俺が模倣して見せてやる。それでは先に行っております兄上」

薫以外の野次馬達が房綱につられて風柱の修練場へと向かう。残されたのは静かな空間に男女二人。

「……かなり大事になったな」

「……巖勝君。次期柱との勝負ということで多くの人が見に来るよ。良くも悪くも巖勝君の実力を見せつけることができるんじゃない？」

「ああ、弟よりも兄の方が怖いことを鬼殺隊に披露してやろう。月の呼吸と日の呼吸は対照的だ。縁壺に向かうはずの嫉妬も受け止めるぞ。私の我儘で縁壺達へ迷惑はかけられん」

「私達」の我儘だよ。大丈夫。がんばって」

「ああ、思う存分暴れてやるから見ていろ」



二時間後、風柱の修練場に巖勝らはいた。修練場と言っても屋外の広い土地のことであり、観客は周りの家の屋根に乗っているだけである。薫、縁壺らだけでなく柱と次期柱に加え、鬼殺の里に居る鬼殺隊や、隠達も大半が集合している。

水柱は以前より強くなった巖勝に興味を示し、正助は爆笑している。

風柱は頭を抱え、道場に立った房綱を視線で殺しそうである。

岩柱は腕を組みながら堂々と静観し、琴音は巖勝をじつと見つめている。

炎柱は巖勝が柱となったことで上機嫌。そしてこの試合の原因である薫はにやけそ

うになる顔を保つので精一杯。

鳴柱は何故か悔しそうに歯噛みしていた。因みに愛染は薫の視界に入らないように隠れている。

もうすぐ柱合会議ということで柱全員揃い踏みである。

「巖勝！ 準備はいいな!？」

「いいぞ。そして喜べ、観客が居る時点で私の飛月は余力を發揮しない」

「っ！ 手加減されているのは承知の上だが、やはり腑に落ちないな……」

両者日輪刀を構える。巖勝の普通の刀は現在修理中。そもそもほかの日輪刀を使えば弔替に嫌味を言われる。人に向けるものではないが、仕方なく巖勝は日輪刀を抜刀する。

房綱は目を疑った。ついでに本人も瞠目した。

「な、なぜお前の日輪刀が赫い!？」

「……わからん。——しかしこう……グツと握ると赫くなった」

「……」

「すまない説明不足だった。そうだな……」

「っ！ ・風の呼吸！ 壱ノ型 鹿旋風・削ぎ！ ・」

房綱は初めのある程度近づいていてその間合いを詰めようと風を纏って突貫する。月の呼吸の次に間合いの広い風の呼吸。纏う風は鎌鼬のように地面を抉り取りながら房綱の突貫を援護する。

しかし、月の呼吸は間合いの点で別格である。風の呼吸と比べるのも烏滸がましい。

・月の呼吸 陸ノ型 常世孤月・無間・

巖勝は跳躍し、房綱の頭上から万の剣閃を放つ。地面が捲り上がり、砂塵が舞い上がる。観客が騒めいた。飛月の色は今までの薄い水色や紫ではなくただ赫かった。

「……………くっ！ ・風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹・」

房綱は何とかして巖勝の真下から抜け出し、着地隙を狙って技を放つが、それも折り込み済み。連続の斬撃を至近距離で放つことが出来た房綱は月の呼吸の飛月を封じることができたと安堵するが、急遽巖勝は信じられない行動に出た。

・月の呼吸 肆ノ型 虧月突・

「なっ!?!」

巖勝は突きを放つ。ただの突きではない。なんと突いた勢いのまま刀から手を離し、投擲したのだ。突きの軌道を逸らすために刀を横から叩きつけて軌道を逸らそうとした房綱は予想の位置に刀がなくとうに投げられた後だった為、空振る。

(しまっ……………!?!)

がら空きな脇腹に向けて巖勝の回し蹴りが直撃する。観客席から悲鳴が上がった。中には目を覆う者もいた。

「バウッ……」

房綱は少しの滞空時間の後、地面を三度不時着した。ふらつきながらもゆつくりと起き上がる。しかし、内臓への被害は無視できなかつた。

「……………っ！ ま、まだだあああ!!」

既に巖勝は刀を拾って大上段に構えている。房綱は悲鳴を上げる体に鞭打って刀を構える。先程の巖勝の言葉が脳裏に過る。しかし房綱力任せに日輪刀を握りしめようが、色一つ変わらなかつた。

（クソが！ 一撃で終わらせる。……消耗させようだなんて考えるんじゃないやねエ！ 一撃で傷だらけにしてやる……………！）

（次の動きは……跳躍か。ならばこれだな）

・風の呼吸 玖ノ型 韋駄天台風・

今度は房綱が跳躍し、大小様々な斬撃を巖勝に放つ。痛みに耐えながらも放たれたそれは、観客が感心するほどの斬撃。観客が房綱に向けて、歓声を上げる。風柱は舌打ちをしながらも機嫌が少し治った。

だが、圧倒的な力の前には全てが無意味。そうとでも言うように巖勝は凄惨に笑みを



浮かべた。房綱は全身が総毛立つ。

(不味い! まずい! 不味い! まずい!?)

・月の呼吸 玖ノ型 降り月・連面 ・

巖勝は刀を上段から一振。

瞬間、空中の房綱に向けて、赫い三日月が降り注ぐ。空が赫く染まり、観客は表情を一転させた。悲鳴が上がる。此方にも、攻撃がまくるのではないかと立ち上がって逃げ出そうとする者も現れた。

鬼のように無慈悲な技を放つ巖勝と、人らしく何度も起き上がり立ち向かう房綱。

(……なんだあれは。あれは————本当に人なのか?)

(斬撃が血のように赫い。鬼の血鬼術と酷似している)

房綱が血塗れで着地する。全て受けきったため、大事には至っていないが、すぐに倒れ伏す。歓声は薫と縁壺達だけであった。圧勝にしては歓声がやけに少ない。柱も険しい顔をしている。他の鬼殺隊に至っては一人も拍手していない。すぐに隠が房綱を

介抱する。巖勝の前を恐る恐る通って行ったのは気の所為では無いだろう。

（圧倒なんぞ生温い。これではただの蹂躪だな）

（内面も鬼か、岩柱として、本当に柱に推薦してよかったのか？）

「御館様が決定されたことだア。文句を言うのは間違っている。が、まあこの惨状は考え物だなア……」

（……まあ、愛娘である薫を守ってくれる程強いのなら俺は諸手を挙げて歓迎だな！）

「むう。巖勝はんが歓迎されないのは分かっとったけどこれは余りにも鮮烈すぎやなあ」

修練場の地面は地割れのような刀傷に覆われ、修復に時間がかかるだろう。凡そ人が作り出していない環境では無い。しかも十五にも満たない少年が。

「勝ったのは巖勝君です。ふふっ。とても嬉しいです」

薫はもう誰も二人を邪魔出来ないと喜ぶ。縁壺は無言ながらも目を輝かせ、うたは一番の大声ではしゃいでいた。だが、大半の鬼殺隊や隠は嫌悪感を隠そうとしない。鬼に家族を殺されたりした者達が鬼と同じような技を使う巖勝を忌避するのは当然の結果と言えた。

二週間後の柱合会議は嘘のように円滑に進み、巖勝は月柱へと、縁壺は柊哉の前で日の呼吸を披露し、晴れて鬼殺隊として認められた。

血鬼術に似て禍々しい月の呼吸を使用する巖勝。

太陽のように鮮烈で温かい日の呼吸を使用する縁壺。

鬼殺隊や隠の巖勝と縁壺に対する扱いの差に縁壺達は何度か激昂した。巖勝は気にしてはいなかったが。

しかし、柱合会議から一年後、炎柱・煉獄正寿郎が痣を発現し、名付きの鬼・崩落天の頸を満身創痍で切った後、急死。

その一月後、岩柱・明道院早百合が名付きの鬼・龍牛を痣を発現して退治後、数時間持ったものの急死。

炎柱の戦闘状態と死の淵ながら遺した岩柱の証言から最低でも三十を超えて痣が出た者にはその晩急死するという推測が建てられた。そのため、一種の呪いでは無いかという噂が鬼殺隊の中で広まり、その元凶とほぼ確定している月柱である巖勝は、多くの鬼殺隊に嫌疑されることになった。

幸か不幸か、巖勝と比較された痣持ちである縁壺はその美しく、正々堂々な剣技と他の鬼殺隊を慮る配慮と、連れているうたの太陽のような雰囲気や鬼殺隊の心を掴み、殆ど忌避されることなく、巖勝より半年の一年で柱へと昇格。本来受けるはずの縁壺への

嫉妬は、全て巖勝へと向けられた。

## 拾漆話 戦国初期の刀鍛冶の里

「巖勝君、待った？」

「いや、ちようど着いたところだ」

「それじゃいこつか。と言つても、里まで導いてくれる隠の所までだけどね」

ある晴れた日。

二人は連れ立って、隠の住む町までの田舎道を歩く。

巖勝と薫は暇を言い渡されたので、刀鍛冶の里を尋ねることにした。弔替に修理を頼んでいた蛟落天津を取りに行くのが主な目的だが、なんでも縁壺の型を見た刀鍛冶の一人が縁壺に似せた人形を作つたらしい。縁壺は自分の日輪刀ができたと聞いて、取りに行く気満々であつたのだが、柱が地方に偏るのは良くないことや自分をモチーフとした人形が恥ずかしいという理由で同行を拒否した。序に日輪刀は取つてきて欲しいと懇願された。

二ヶ月前に炎柱には暢寿郎、岩柱には琴音がそれぞれ就任。薫は柱級だが柱になると任務割り当ての都合上、他の柱（主に巖勝）とは柱合会議以外ほぼ会えなくなるので実力は隠していた。

「ねえ、柱の皆はどんな感じ？　こう……痣的な意味で」

「そうだな。新しく就いた二人は十七と十八。まだ大丈夫だ、しかし後の三人は全員二十五を過ぎてている。その為赴く任務は強大な名付きが主らしい。痣が出れば名付きも火事場力で殺せるが、その日のうちに亡くなるからな……やはり御館様には痣の副作用について伝えて置くべきであつたな」

「そんなことしたら鬼殺隊は柱を指さなくなる人も増えるんじゃないかな？　最近は何戦が続いて鬼殺隊の高い俸給を目的に入隊する人が多いから、鬼を殺すために自分の寿命すら捨てられる人って大体半分くらいだからね。」

とうさまにお別れを言えなかったのは悲しいし、明道院さんがいなくなって寂しい。けれど皆も私も覚悟の上で鬼殺隊に入ったから。

因みに新しい岩柱の琴音は巖勝のこと目の敵にしてるし、あまり近寄らない方がいいよ」

こうは言ったが薫の発言の目的は巖勝の身のためである。

痣の真実が広まると痣は巖勝が原因ということが確定し、巖勝が鬼の手先であるという誤解の裏付けになってしまう。そうなってしまうえばいくら産屋敷でも巖勝を庇いきれなくなり、良くて鬼殺隊追放。普通は切腹。薫はもう巖勝とは会えなくなる。

(それほど迄に一年前に里で披露した赫い月は、余りにも鮮烈だった。鮮烈すぎた)

「そうか。助かるぞ薫、お前がいなければ要らぬ間違いを起こすところだった……感謝する」

「うん。どういたしまして」

巖勝が他の鬼殺隊に忌避されても薫は対応を変えず巖勝と接し続けた。本人は気にしないようにしていたものの、尾鰭が着いて任務の妨げになるような噂には多少辟易していた所があつた。

（巖勝君は私に対しての依存が以前にも増しているのを自覚していない。私は、私に対しての巖勝君の依存が増していることに勘づいている。

知らなくてもいいからね巖勝君。

——鬼になつたら全部私が……）

こうなると薫は知っていた。知っていてそうさせた。全ては二人のため。

二人して、隠に目隠し、耳あてをされ、牛車に揺られる。因みに、当初は巖勝の鋭敏すぎる感覚と、無惨の手先説を危惧して隠達は里への案内を渋つたが、終哉の文を見せると、渋々里まで連れて行ってくれた。

隠に鬼殺の里よりも巖重に連れてこられ、二人は刀鍛冶の里に着く。山奥に造られたその里は生活感鬼殺の里よりもあつた。

（空里といったか、バレたら移動するんだつたな、これでも住んでからまだ時間は経って

ないようなものだろう)

早速、弔替の家を探す。隠達は引つ込んで行った。仕方なく道行く人に弔替の家を聞く。どうやら巖勝の噂はここではあまりひろまっていないようである。快く道順を教えてくれた。

薫は温泉に行くために、巖勝と暫し別れた。薫が向かう方向の家々には湯気らしきものが立ち上っている。

(私も後で行つてみるか)

温泉など今世ではまだ入ったことがなかった。巖勝の心はしつかり現代人な為、一日に一度は必ず温かい風呂に入つて体を洗うようにしている。また薫は清潔好きなので昔から入つていゝらしい。巖勝は道行く人に聞き込み続け、やつとのことで弔替の家を見つけた。

(……無性に疲れたな)

他の家より比較的贅沢な戸を開けると弔替が扇子を扇いでいた。身に纏っている黒い着物には上品さを感じさせるような白い花の模様が縫われている。扇ぐ扇子も高級品であろうか。そして顔は相も変わらずひよつとこ。何かと台無しである。

「なんだい。遅かったじゃないか」

「ご無沙汰している、弔替殿。修繕を依頼した刀を取りに来た次第だ」



「ふん。やけに頭のおかしい壊れ方だったよ。柄が握りつぶされて、刃の部分に刀傷が刻まれている。こんな壊れ方は何十年生きてたけど初めてだったさね。

修繕というか長年の使用でがたが来てたから新しく作り直したよ。柄と鞘は修理して再使用しているから、違和感はなからうて」

巖勝は刀を受け取る。装飾が日輪刀と対になるように追加されており、黒く質素な日輪刀に対し、少し華美で赤い花の装飾がある美しい刀に仕上がっていた。やはり刀鍛冶では弔替は他の鍛冶師よりも別格である。

「重ね重ね感謝申し上げます」

「はいはい。そんなことより、私の打った刀はどうだい？　こんな鈍とは訳が違うだろう？　弟の分も完成したから、後で取ってきてやろう」

「ありがたい。私はやっと刃を赫くして赫刀にすることが出来た所だ」

「……………は？」

「え？ ……あ」

弔替は呆然として扇いでいた扇子を落とす。お面を被っているため表情は分からないが目の色は絶対に変わっている。その反応から赫刀がまだ刀鍛冶の里まで広まっていなかったことに巖勝は気づく。

「なんだい。やな予感がするね……………なんだい赫刀って」

「こう……………ぐつと握ると日輪刀が赤くなる現象だ」

「……………みせな」

「……………む？」

「聞こえなかったのかい!! 今すぐ見せなと言ったんだよ!! ほら刀を抜け早く! ほら!」

弔替は怒涛の剣幕で巖勝に接近し、腰に指してある刀を鞘ごと引つつかみ、巖勝に押し付ける。

巖勝は気圧されながらも受け取り、抜刀し、型を振るう時と同じ握力で柄を握る。途端に日輪刀は柄の方から赫く染まり、その色を赫へと変えた。

「これが赫刀と私が呼んでいるものだ。こうなつた刀で鬼を斬ると再生が格段に遅くなる」

「見たところ、握つた手の熱が日輪刀に伝わっているようだね。はあ……そりや儂が知らないわけさね。手の熱で日輪刀を赫くするような剣士がちらほらいたら鬼なんてとうの昔に滅んでるね。それをできるのはあんただけかい?」

「確実に弟の縁壺はできる。弔替殿が打つた日輪刀の所有者になる男だ」

「ん? ……ああ、あの刀の主になる奴か。それなら噂だけだが、聞いてるよ。」

なんでもその型が美しすぎて、あの天才なのかバカなのか分からない保土原の奴が絡繰人形を作つたらしいね。全く、兄弟揃つて話題に事欠かないね……お前達兄弟が人外と言われても儂は納得するよ」

「(バ)冗談を」

「くつくつくつ……そう言えばお前は弟と違つて鬼殺隊の雛共ひなどもに邪険じあけんに扱われているらしいじゃないか。鬼のような技を使うんだつて？ ……ホント不名誉極まりない……が、お前さんは否定しない。それはどうしてだい？」

弔替ぢうかへが射抜くような視線で巖勝を見つめる。

「私が邪険じあけんに扱われれば私よりも化け物じみた才を持つ弟は非難されにくいだろう。そして薫も……いや……なんでもない」

「はあ。今から喋るのは歳食さいじきつた老婆の戯言だが、

お前さんが、そうやって振る舞うのも他にもなにか深い理由があるんだろう。お人好しなお前さんのことだ。多分それは誰かの命を救うことに直結するんだろうね。

だけどね、お前さんの輝きは強すぎる。闇夜に輝き、美しく、静かに世界を睥睨びげんしている月のように。太陽と違い、見たものが心を動かされ、魅了めいりやうされるほどにね。だから、お前さんに着いてきてくれて、隣に立とうとしてくれる数少ない子達はお前さんにとつてかけがえのない存在だ。お前さんは否定されようが侮辱されようがあまり気にしない性しやうだろうけど、お前さんが傷付くことで、他に傷付く人がいるのも忘れちゃいけないよ。

何せ鬼に墮おちた馬鹿でも、偶なにそういう誰かのために生きている奴がいるほどだからね」

巖勝は押し黙る。そして揺らぐ。揺らいではいけないものが揺らぐ。弔替の言葉は余りに目的を射ていた。無意識に日輪刀を触る。

（無惨は殺せる。この赫刀と縁壺の助力があれば簡単に。そうすれば平和が訪れ、鬼のいない世の中が実現できる。

だが、私の前世は楽しみもなく、ただ働いて働いての毎日だった。そして転生したら鬼殺の日々の中、生死と隣合う毎日。しかも後十年少しで死ぬ人生）

巖勝は長い休息を求めている。想い人と過ごす、長く続く平穏と幸せに。故に黒死卒となるのは自分の中で、もはや唯の過程と化していたことに気がつく。

既に前から鬼になる目的は変わっていた。

それは薫と紡ぐ“平和な日常”であった。

巖勝は重い口を開く。

「……私は私の周りの人々が幸せであれば私はどうなってもいいと思っていた。鬼を狩るのはそれが目的であった。

別段、鬼殺隊に入隊したのは鬼を滅ぼしたいからでは無い。薫や縁吉達が笑って暮らせるためには、鬼の存在は邪魔でしか無かったからだ」

「ふん。高々十五に満たない餓鬼が言うね。そんなの鬼を滅ぼすよりも難しいことさね。」

そんなんだつたら日輪刀を返しな。お前みたいなどこまでも無性に優しい奴はどっかの山奥で分相應の幸せを見つけて、炭でも売って暮らしていればいいんだよ」

弔替の言うそれが冗談なのか、或いは真剣なのか分からない。弔替は痣者が三十ではなく少し早い二十五で死ぬことを知らないのだ。

「……私達を取り巻く運命は鬼と密接に絡んでいる。故に、この定めは避けられぬ」  
「欠片も面白くない模範解答だね。」

……はあ……じゃあ弟の日輪刀を取ってくるから待っていない、さっきの儂のことばの意味でも反芻していな。ああ、別に保土原の所に行ってもいいよ。場所は温泉の近くの森さ」

「感謝する」

弔替は家を出ていく。少し逡巡して、温泉の近くの森へと足を進める。これ迄の理念や手段は変わらない、ただ目的が変わっただけ。そのためなら力が湧いてくる。巖勝は彼女を守る為ならば修羅にでもなんにでもなれる気がした。



巖勝が鍛冶町を抜け、弔替に言われた森に入ると、何処からか剣戟の音が聞こえてきた。其方へ方向を変えて進むと、齡二十辺りの若いひよつとこが、刀を六本持った縁壺に似せた人形の背中を弄っていた。巖勝は近づいた。無意識に気配を消しているのが気付かれなかった。

「……これがそうか」

「うわああ!? びっくりした! うおっ!」

縁壺零式(?)の背中から落下した保土原らしき人物を、巖勝は受け止める。

「すまない。驚かせたな、大事ないか」

「お、おう。ありがとなつて、縁壺殿!」

「……その兄の継国巖勝だ。どうやら縁壺に似せた絡繰を造つたらしいではないか。これがそうか?」

「……よく見ればなんか似てないな。まあいい。その通り! この縁壺一式は俺が作った最高傑作だ。」

俺は保土原利政。そしてちよいどいい所に来た！ 縁壺殿の兄であるならば一度戦ってみてくれ。本来なら縁壺殿が来てくれるはずだったのだが、その旨を鏖鴉で送ったところ、何故か渋られてな。兄であるならば縁壺殿の戦い方も知っているだろう。……いいか？」

「承知した」

巖勝は少し楽しみであった。このからくり人形は原作ではあまり戦闘描写がなかったのも、どのような動きをするのか些か気になっていたのだ。

柄に手を添え、抜刀する。

「ではいくぞ、巖勝殿。縁壺一式！ 起動！」

利政が首の薇を回すと、一式が機械音を鳴らして刀を構え出す。巖勝も刀を構え、受けの体勢に変える。一式の持っている日輪刀は弔替が打ったものだろう。長年の月日を経ても劣化しにくいような独特の技法が凝らされている。

(……弔替殿もお人好しだな)

一式が刀を連続して振るって来るが、振り下ろされる刀を巖勝は半身で避けたり、手の甲を刀の腹に当てて軌道を逸らしたりして受け流していく。

利政はその流麗さに見蕩れていた。

「……なんて美しい」



(……これは攻撃しても良いのか?)

試しに巖勝が頭に柄で一撃入れてみると、一式は避けずらしなかった。攻撃に全てを割いているのだろう。

しかし、その一撃で左目周辺の皮膚が剥がれ落ち、複雑な内部構造が明らかになる。改めてオーバーテクノロジーだと巖勝は思った。

「うわあああ! 巖勝殿!? 終了! 一式を停止! やめてえ!!」

巖勝は利政の剣幕に凄み、距離をとって一式が止まるのを待った。直に一式が止まると、利政が駆け寄って、調子を確認している。その必死さに巖勝は顔を曇らせる。

(どう考えても室町時代の技術じゃないだろ。世界規模での偉業じゃないか? ……皮膚らしきものが剥がれ落ちたが、必死さからしてもしや直らないのでは?)

「ほ、保土原殿、すまない」

「いや、これくらいすぐに直せる。

……そんなに落ち込まないでくれ、というかあの見事な体捌きはなんだ? 何かの型か?」

「……私の型はほぼ不動なのだ。受け流さなければ一方的にやられてしまうから、体術

は他の隊士より鍛えている」

「！　そうか……ならば巖勝殿！　恥を忍んでお願いが！」

「なんだ」

「巖勝殿の歩法と体捌きを一式に取り入れたい！　だから、これから一刻、一式の攻撃を避け続けてはくれないか？　俺はその動きを目に焼き付けて紙に書き取る。どうだ？」

巖勝は逡巡する。原作にて、零式は縁壺の動きを基本にして作ったと言われていた。巖勝では無い。だが、利政は筆と、この時代まだ高価な紙を持って、鼻息を荒くしている。断るのは気の毒だ。

（しかしまあ、ここで私が介入した所でそんなに変わらないだろう）

「構わん。……八咫。薫に伝えてくれ。私は温泉の横の森にいると」

『委細承知』

八尋が飛び去っていく。巖勝は刀を収め、一式に向き直る。

「では始めるぞ」

「ああ！　縁壺一式、再起動!!」



結論から言うと、縁壺一式の足が六本になる。また追加で蹴り技もするようになる。原作では隊士を育てるのに一役買っていた一式だが、巖勝の記憶上、原作の足は二本だった。殺戮兵器の製造に手を貸した気分である。主人公はこの縁壺一式で修行するのだが、猛攻に耐えられるのか不安であった。

(もはや縁壺要素って顔と胴体だけだな。ていうかこれだと炭治郎はこいつに殺されるんじゃないか?)

巖勝はまだ薫が温泉にいますると思ひ、温泉への道を歩いていた。すると、この時代では珍しい金髪の女性と、水色の着物に雲が描かれた男性が道の端で話し合っている。

巖勝が通り過ぎようとする目と目が合った。

「む。愛染と正助か」

「やあ巖勝君。一年前の柱合会議以来だね」

「巖勝はんか。久しぶりやな」

次期水柱と次期鳴柱はいつも通り接してくれた。それだけでも巖勝は少し嬉しくなった。

## 拾捌話　輝きは赫月・あかつき・が如く

「えっ。薫ちゃん、ここにおんの!？」

愛染は金色に似た髪を持つ雷の呼吸の使い手。次期鳴柱として期待されている。女性特有のしなやかな身体を駆使したバネのような動きで敵を翻弄する戦い方である。故に彼女のみならず雷の呼吸の使い手は足が生命線である。

「ああ、今温泉から出たくらいだろう」

「愛染。巖勝が薫さんと一緒なのは君も身に染みて知っているだろう?」

正助は黒髪に雲の描かれた水色の着物を身に纏っている好青年。彼も次期水柱として期待されている。癖の強い性格と、癖のない剣技が持ち味。少々気分屋なところがあつたが、最近ではなりを潜めていた。

「やからやつて正助君!　帰ろ!　温泉なんてもうええから!　早う!」

「温泉は美肌効果があるから女子であれば入った方がいいよ愛染。折角来たんだしさ」

「そんなあ……!?　助けて巖勝はん!　あの子あんだのことになる……」

「あら。巖勝君と愛染さん、少々距離が近いのではありませんか？」

「ひっ!？」

鶴の一声にしてはドスが聞きすぎている声。

声の主である薫は少し濡れた髪を束ねずに下ろし、比較的通気性の高い浴衣に着替えていた。巖勝も薄々気がついてはいいいたが、十六歳になり更に女性らしい体つきになっており、美しくも扇情的な姿に見蕩れる。

愛染は咄嗟に巖勝の後ろに隠れ、顔を覗かせる。正助では薫に敵わないという事実と、巖勝なら薫を御せるといふ判断から来た行動であつた。

「あーらあらあらあら」

「ひえっ……た、助けて巖勝君!」

だがしかし、その行動はただ単に薫の血管を浮き上がらせる結果に終わった。薫にも足も出ずに叩きのめされた過去を思い出し、更に恐怖した愛染は巖勝の着物を掴む。それが更に薫の機嫌を急降下させるといふ悪循環に陥っていた。

巖勝はふと我に返った。

「薫、そのくらいにしておけ。そして愛染、私の着物から手を離せ」

「えっ? ああつ!?! ほんまごめん」

「冗談ですよ巖勝君。唯久しぶりにあえて嬉しかったので……うう……ちよつと失礼」

薫は後ろに周り、愛染に掴まれて皺が着いた巖勝の着物を、直し始める。皺なんて着いていないようなものだが、それでも薫は汚れを払うかのように入念に払う。恋する乙女には許容できない何かがあつたようだ。

それを正助は苦笑いで見る。

「怖いね、女性は。特に恋しているともつと」

「そうか？　微笑ましくならないか？」

「……君もだんだん薫さんに毒されてきたね」

薫はすれ違つて縁壺一式を見に行く予定だつたのだが、「不安要素がありますので」と、巖勝と共に再び温泉に向かつた。

「どうだつた？」

「どう。とは？」

「温泉だ」

「かなり良かったよ。もう一生入つてたいくらい！」

「ふっ……そうか、それは期待するでしょう」

（温泉のある所に引越して過ぐすのも悪くは無い……な）

薫が嬉しそうに飛び跳ねる。彼女特有の甘い香りが巖勝の鼻腔を擦る。脳がガツン

と叩かれたような衝撃を受けた。揺れる胸元から目を逸らし、まだ見ぬ温泉へと想像を巡らせる。

(やはり。温泉に刀を持っていくのは……無作法というもの)

鬼殺隊は温泉での帯刀を許可されているが、場違いも甚だしい気がして脱衣所に置いていった。露天風呂にゆつくりと浸かる。紅葉が鮮やかに空を彩り、涼しい風が吹き抜ける。元から高温を保っている体には生温いのでは無いかと邪推していたが、杞憂に終わった。

(素晴らしい……至高の湯だ。温泉は前世でも入ったことがあったが、四百年前の温泉という事実も噛み締めながら愉しむと、感慨深いものがあるな……)

「……」

「……」

すると波を立たせながら正助が黒い頭だけ出して寄ってくる。丁寧に頭の上に日輪刀を乗せていた。巖勝は至福の時を邪魔されて不愉快な顔をする。彼は温泉は一人でゆつくり浸かる派だった。

「巖勝ってこんなに筋肉があるのに着物着ると、比較的瘦軀に見えるんだね……羨ましい。僕と交換しようか」

「無茶を言うな。無駄な筋肉はつけていないだけだ……なんだ。話すことがないならその口を閉じろ。私は今この湯を堪能しているのだ」

「そんな怖い顔しないでよ。男二人、すると言ったら、やっぱ恋話でしょー!」

「話題の扱が狭すぎるぞ。まあいい……正助、お前は愛染と仲はいいのだろう? 浮ついた話の一つや二つないのな?」

巖勝は少し揶揄うように話す。巖勝と比べて正助は三歳ほど年上だが、それを気にするほど彼は狭量では無い。年下年上を超えた仲間という関係である。巖勝もかなり心を許していた。

「愛染はぶつちやけかわいいし、嫁に来てくれるなら諸手を挙げて喜ぶけどさあ……巖勝は希望あると思う?」

「……気持ち悪いぞお前」

「開口一番に酷くない!?!」

「いつものおどけた調子はどうした。真面目な顔をしているなんてらしくもない」「さすがに色恋の話となると……ね?」

「そういうものか」



「そういうものさ。んで、どう思う?」

「そうだな……先程の光景からもわかるだろうが、愛染は薫に恐怖している。薫より強くなるのが出来れば、愛染もお前を信頼するのではないか?」

「薫ちゃんに勝つ? それこそ眉唾物だよ」

さも当たり前かのように正助が言い放つ。この認識は何も正助だけではない。次期鳴柱よりも速く、次期炎柱のような力を持つ一般隊士。そんな肩書きからするとギャグ感が否めないが、紛れもない事実である。しかも縁壺の呼吸を知ってさらに力をつけ始めている。

「そう気を落とすな。薫が強すぎるのだ。大丈夫、決して正助が弱い訳では無い……ただ……本当に薫が強すぎるだけだ」

「言ってること変わってないよ。いやまあ、そうだけどさ、それでもお前達は次元が違うんだよ。なんだよ手の熱で日輪刀を赫くする兄弟に、柱より強い女とか……房綱が本当に不憫だなあ」

「……房綱か」

「まさか忘れちゃった? 君の恋敵だろう。まあ俺も唐突に現れた男に惚れた女がべた惚れだったら普通に凹むからなあ。あいつには同情するね」

さすがの巖勝も房綱を出されては何も言えなくなる。ここで擁護すれば房綱の面目

が本当に立たなくなるのだ。

「……………んで？　話を逸らしたつもりかな？　薫ちゃんとはどこまで行つたんだ？　ん

？」

「……………くっ」



「……………えつとー、薫ちゃん？」

「……………」

愛染は男湯と女湯を隔てる壁に耳を当てて巖勝達の会話を聞き取ろうとしている薫の姿に困惑していた。しかし、怒らせたくないで言葉は選ぶ。

「壁に聞き耳立てても会話は聞こえへん仕様になつとるから多分無理やで……………」

「むう……………それもそうですね。はあ、巖勝君の会話が少しでも聞こえれば良かったんですけど」

「……………聞いてどうすんの？」

「何もしないですよ？　ただ想い人のことは大体知っておきたいでしょう。ちがいますか？」

薫の目に光が灯っていないことに気づき、愛染はこれ以上追求するのを止める。ふと、薫の玉のような肢体に目を向ける。前に会った時よりも成長している気がして堪らず驚いた。

「……薫ちゃんって着痩せするんやね。あんだけ強いのに肌も染みとかないし。え、うちなんか自分が惨めに感じてきた」

「あら？　そうですか？　愛染さんは………まあ動きやすい体じゃないですか？」

「いや、沈黙したのに結構直球やな!？」

薫は純粋な私怨で愛染に棘を放つ。体つきは愛染にとつて女子として気にしている点であり、弱点であった。よく言えばスレンダー。悪く言えば凹凸の無い体。そして足以外は傷だらけの肌。戦う上で仕方のない事だと本人はわかっている。

「いやいや、いいと思いますよ。ええ、雷の呼吸は速さが強みでもあるのでしょうか？　そうであれば比較的軽いことは喜ぶことじゃないですか？　足腰が強靱であれば戦闘を有利に進められますし。男受けはよくないかもしれませんが」

「うぐつ、うちは薫ちゃんに何か悪いことでも………巖勝君の事やんね。でもあれはうちじゃないし！　あの縁談は母上が勝手に進めようとしたことやから！」

実際、薫は既に愛染の事を許している。しかし、いつも絡んでくる友人が珍しく弱みを見せた。この期を逃す彼女では無い。結局、二人は逆上せるまで身の上話に花を咲か

せた。

★

巖勝は温泉から出たあと普段着ている着物は隠に洗って貰うために預けた。今彼は浴衣に着替え、鎧鴉の八咫からのもつと役に立ちたいという要望により、温泉の前で彼を鍛えている。

暫くして、温泉の入口から愛染がでてくる。

(顔が赤い。逆上させていたな、ならば薫はもう少し時間がかかるか)

愛染が巖勝を見つけて駆け寄ってくる。もちろん薫が居ないことを確認して。脱衣所に居ることは知っているがいつの間にか先回りしているのが彼女である。

「? ……巖勝君なにしてるん。その鎧鴉は……八咫君やったっけ? ……め、めっ  
ちやへばつてるやん! 大丈夫なんこれ!?!」

「ああ、八咫に全集中の呼吸を教えている」

「いや、本当になにしてるん!?!」

『かア……かア……愛染殿、なんの……これしき』

(鏝鴉に呼吸はできるのだろうか。人とは構造が違っているが……)

★

「異常は……ない」

太陽が沈み、夜の帳が降りる。

巖勝は柱の任務でもある、夜間の里見回りを八咫と共にしていた。温泉を出たあとは仮眠をそれぞれとったので眠くはない。この体なら仮眠を取らずとも動けたが油断は禁物。

時刻は既に深夜帯であった。それにしても月が綺麗な夜である。

(なんだ？ 妙に胸がざわつく)

巖勝は気配と音を完全に消して、屋根に登る。無骨な瓦に足を乗せて駆け上がる。見渡すと刀鍛冶の里は嫌になるほど静まり返っている。

「……………来たか」

ド———!!

突然、振動とともに家が倒れる音が鳴り響いた。刀鍛冶達がざわめき起きる声がかしこから聞こえてくる。敵襲を知らせる鐘の音がそこかしこから響いた。

程なくして八咫が姿を現す。

「八咫」

『名付きの鬼による襲撃だ。北と南からこの里を挟むように攻めてきている。南は薫、正助、そして愛染が向かっている故、巖勝殿は北へ向かって欲しい』

「……そうか。早く北の鬼を殺して南に加勢する。八咫は里の避難を誘導しろ。南だけでいい。こちらの鬼はすぐ殺す」

『委細承知。任せられよ』

八咫は飛び立っていった。無駄口を叩かず、主を急かさず。ものの数秒で状況把握と軽い指示。彼も彼で鏖撃の中でも飛び抜けた存在である。彼自身の巖勝への忠誠心はかなり高く聞いて欲しくないような会話でも、鬼殺隊には報告しないでいた。それが彼なりの忠義である。

巖勝は屋根を飛び降りて、硬い地面に着地する。そして刀鍛冶達が避難している里の中心とは逆方向の北へと疾風の如く走り出す。

（何故里がバレた？ いや、隠から情報が漏れたのか？ まあいい……この気配、名付きの中でも相当高位の鬼だな）

「皆！ 里の中心へ避難しろ！ 鬼は我らが引き受ける！」

「!? 聞いたかお前たち！ ここは鬼殺隊に任せて俺たちは避難するぞ！」

「みんな急げ！」

（人が邪魔だな。屋根の上を走るか）

屋根の上を跳躍しながら進む。直に、建物を破壊する音に交じって聞こえ出す人の悲鳴が徐々に大きくなる。

「……………む」

鬼の影形がはつきりと見え出し、足を止める。鬼は大通りを堂々と練歩いており、口元が血に濡れている。鬼も巖勝に気づいたようだ。にやりと笑って足を止めた。体軀は人型だが、内包されている力は常軌を逸している。角も生えていた。

巖勝は刀の柄に手を乗せて臨戦態勢へと移行する。

「ん？ 鬼狩りか、遅かったな。我が名は疱瘡魃。あのお方に名を頂き、里を襲撃する命を受け……………うおっ!？」

(む、避けたか)

巖勝は牽制がてら闇月・宵の宮を放つが、首を多少切り裂き、片方の腕を飛ばしたのみである。十分過ぎるほどの手応えであるが、彼にとっては避けられたも同じである。この一撃で終わらせるつもりでもあったのだから。

疱瘡魘があまり動じていないところを見ると、体の再生に自信があると推測した。

(もう遅い)

「おっと！ 血鬼術の色じゃないか、お前もあの方から名前を……………あ？ なんだ？ 傷が回復しねえな？」

「……………」

「おい？ ……嘘だろ?! ……おっ！」

巖勝は飛月を放つ。幾重にも重なったそれは、頭部を易々と抉り飛ばす威力。疱瘡魘は間一髪で避ける。しかし片耳が飛んだ。巖勝の飛月を二度も見てから避けた時点で今までの鬼とは訳が違うのだろう。

(猗窩座のような体術を駆使した戦闘か、回復も早い。ならば一気に決める)

この間、数秒。

巖勝は原作になかった型を使うことにした。彼の作る型は呼吸の祖である日の呼吸を元にするので、月の呼吸にない動きを取り入れていた。



故に、隙はない。

▪月の呼吸……▪

想像する。神々しい龍神ではなく、猛々しい荒神を。

▪拾壺ノ型……▪

型は十六まで幾つか不明なものがある。裏を返せば、十六までなら生み出して使える。

## ・月暈の虎狼・真神乱舞・

それは虎とも狼とも取れる獣の具現。

それは舞の美しさとはかけ離れた唯の乱切り。しかし、巖勝の身体能力と、透き通る世界での予測からの確に弱点に向けて放たれる一振一振は、必中かつ致命となる。

飛月を身に纏い、突貫する巖勝。

それだけで大地に無数の凄惨な爪痕を残し、夜空を蝕み、蹂躪する。未だ刀を振つていないのにこの惨状。近づこうものならその身体は瞬時に肉塊どころか血煙と化すだろう。しかし、無情にも巖勝は刀を握りしめる。途端に周囲の飛月が赫く染まり、破壊の嵐は威力を増す。

悉くを無に帰して迫り来る修羅の前に、庖瘡魑は死を覚悟する。

「これじゃあどつちが鬼か分かったもんじゃねえな!? ガハハハ!! 見ているか、龍牛よ! 吾輩は今、人の至る極致の片鱗と相對しているぞ!」

(知るものか。これは薰との旅を邪魔した恨みだ……)

こうしてあっさりとは決着は着いた。いかに強くても巖勝の尺度では弱い部類へと分類された。どんな鬼でも首を切れば死ぬ。もし死ななければ塵にするだけである。

★

その少し前、薫達は刀鍛冶の避難を促しながら、微かに臭ってくる悪臭の方向へと向かう。十中八九鬼の臭いである。血鬼術の類にしては薄い臭いだった。

(北の方は巖勝君が巡回している所。彼処は彼がなんとかする。私達はこちらを何とかしないと)

段々と濃くなっていく澱んだ空気。少し吸い込んではいいるものの、今は余り効果がわからなかった。

「…………この臭いは酒やな……………」 待つて二人ともこれ以上吸ったら視界がぼやけ始める！  
「うちが遅れた人を助けるから、二人は下がって！」

「…………待て！ 愛染！」

愛染は既に血鬼術の効果に真つ先に気づき、薫達に下がるよう促す。

彼女はまだ意識がはっきりとしているうちに、悪臭の霧が濃い場所で倒れて、酩酊している刀鍛冶を見つけては血鬼術の範囲外へと運びはじめた。自分はもう最大限の力

を發揮できないと知ると足手まといにならないうちに退場する。この判断力も大切なのだ。

（既に血鬼術の効果が現れた愛染に比べて私達はまだ現れていない。愛染の判断は間違っていない。間違っていないけれど………つ！ やばいのが来る！）

突然、薫と正助を悪寒が襲う。何かが来る。受けてはいけない攻撃が来る。

「炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり！」

「水の呼吸 漆ノ型 雫波紋突き！」

瞬間、悪臭の霧が火薬のように次々と引火し、燃え上がる。

「あぐっ………!?!」

その爆風を愛染は諸に受け、辛うじて技を出した薫達も余波で吹き飛ばされる。残った民家や大通りが瓦礫で埋まり、粉塵が空に舞う。大災害にでも見舞われたような惨状が一瞬で作りに出される。先程まで人が走っていた道は瞬く間に戦場のような明るさと瓦礫に覆い尽くされた。

灰燼の中から一体の鬼が現れる。

長身？ 軀で肌は青く、不気味な笑みを浮かべ、背中から鮮やかな赤い花を一輪咲かせている。薫達に叩きつけられる途方もない悪意の塊。

薫と正助は辛うじて立ち上がる。

「名付きの鬼だ。背中の花がこの悪臭の原因だろう」

「……ええ、そのようですね……私が気を逸らすので、正助君は奴の背中をお願いします。恐らくはあの花が先程の爆発を起こした悪臭の根源」

「……味気ないですね。この風乱を楽しませるような鬼狩りはいないのですか？ ん？

今鬼狩りもいっしょに吹き飛ばしてしまいましたか」

視界が朦朧とし、動かしている部位がわからなくなる血鬼術を用いる、頭脳派の鬼。

欠片も薫達を警戒していない。まさか自分が倒されるなんて思っただけでもない表情。その間にも霧は生成され続けていた。

——今や!!

瞬間、轟音の踏み込みと共に、雷を纏った愛染が煙の中から現れ、鬼に向けて居合を

抜く。

・雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃・迅・

万全の薫達でも視認できない程の速さで愛染は鬼へと向かう。しかし、

「遅いですね」

「うっ……」

鬼は愛染の一撃を余裕で躲した。

愛染はこの血鬼術と爆風を真つ先に受け、重傷を負っていた。故に踏み込みも儘ならなくなっていた。それどころか力任せの蹴りを無防備な肩に受けてしまい、愛染の骨が折れる嫌な音が響く。

(いつ……受け身イ!! つと! 壱ノ型がこれやと稲魂も無理や! ううつ、頭がくらからする……ああ、まずいなこれ、肩を砕かれてしまうた……刀はもう片手でしか振れん。目もよお見えんし)

愛染は動かなくなる。

それを黙って見ている薫と正助ではない。二人は既には走り出していた。この鬼は悪臭を引き金に爆発を起こす戦い方であるならば、悪臭がない今が好機。

・水の呼吸 拾ノ型 生生流転!

・炎の呼吸 玖ノ型 煉獄・

「……む、お前達だけは別格のようですね、いや、見たところ私の血鬼術を受けていないようだ。流石鬼殺隊。お仲間を犠牲にするとは狡賢いですね」

「……黙れ、悪鬼が」

水と炎の双龍が嵐に向けて牙を剥く。

しかし、正助の回転斬りを腕で逸らし、薫の一撃は腕を切り落とすまで持ち越せたものの、首を切るまでには至らない。

「残念でした。それではどうぞ、あなたがたも存分に私の毒を浴びなさい!!」

「……くう」

「っ！ 下がれ！」

鬼を中心に悪臭が撒き散らされる。二人は咄嗟に下がろうとするが、

「残念、お終いです」

ド  
——  
!!!

再び、爆風が二人を襲う。紙屑のように吹き飛ばされ、二人は受け身を取って衝撃を最小限に抑えこむ。回転する世界の中で可能な限り遠くに飛ばされて体にかかる負荷

を少なくするのだ。しかし、損害は先程の比ではない。

「ぐっ……肺……焼けた」

「正助君！ ……貴方にはもう戦闘は無理です。下がってください」

「……なら……もし……ても……みすてろ」

「……ええ、わかりました。但し無理はしないでください」

二人は刀を再び構える。鬼は笑みを深くして両手を広げまた悪臭を吐き出す。さらに近づきにくくなった。絶望的である。

「また来ますか！ 私。貴方達を気に入りましたっ！ いいでしょう跡形もなく吹き飛ばして差し上げましょう！」

「……正助君、今度こそ花を潰します。無言は肯定と看做します」

（ああ分かった）

「行きま……ぐっ……大丈夫です。少し……なんでしよう、こんな時ですが熱ですかね」  
「……っ」

「何を話しているのですか、さっさと諦めなさい。そうすればゆっくり殺してあげますよ!! ほら、早く止めなければまた爆発しちゃいますよ！」



(行く……！ 血を巡らせる！ 体温を高める！ 巖勝君や縁壺君がしているように)

突然、巨大な化け物が暴れるような轟音が連続して北方から轟く。

「ん？ おやおや、彼処も派手に暴れているようですね。……少々音が大きい気が……いや、おかしいあれほどの音が伴うような攻撃は疱瘡魃の身では出せない。……火薬庫でも爆発した？」

鬼が突然の轟音に気を取られている隙に薫が刀を杖にして、立ち上がる。鬼はそれをつまらなさそうな目で見つめた。先程の爆風で受けた傷は癒せていない。つまりもう楽しめることは無いのだ。

(まだ降伏しませんか、いい加減力の差つてのを思い知らせてやりますかね)

(巖勝君があつちの鬼を倒した！ 巖勝君の隣に立つんじや、こんな雑魚に手こずつてなんていられない)

薫は刀を構える。闘気を練り上げ呼吸を整え出す。そして、

・ 炎の呼吸 伍ノ型 炎虎！ ・

「……………む」

刀が燃え盛る虎を纏って風乱へとその爪牙を振るう。鬼は周囲の悪臭を爆発させることで迎え撃った。

風乱の首に刀が届く直前で爆風が発動し、薫は勢いよく吹き飛ばされる。

（……………っ!? だが悪臭は消えた!）

「おっと危ない。早くあちらの様子を見に行きたいので手っ取り早く終わらせましょう! 大丈夫です。気が変わりました! 皆さん残らず私が食べて差し上げましょう! 晴れて鬼殺隊はひとつとなった、めでたしめでたしです!!」

鬼が薫に近づく。

愛染と正助は肺を焼かれ、愛染に至っては肩も壊れているため、動けない。

正助は警戒されている。隙が出来なければこれ程強い鬼の背後を取るなど不可能に近い。薫は胸を抑える。肺が焼けただけでは説明のつかない熱が体中を駆け巡る。

（くそ! 何か、考えろお!）

（動け動け動けえ! 体が熱い。熱い! 暑い! 熱い。暑い! 心臓の音が煩いけど

大丈夫！ 巖勝君に微笑まれた時に比べたらどうってことない！ 心は冷静に。今ならなんでもできそう！ 立ち上がれ！

薫は満身創痍でなんとか立ち上がる。

焔が漏れ出すような呼吸音を響かせる。

脳裏に浮かぶは縁壺に見せてもらった日の呼吸。

それを炎の型に合わせる。

始まりの呼吸からの歴史において、初めて日の呼吸以外から派生された呼吸。

・ 暁の呼吸 壺ノ型 暁闇の明星 ・

日の呼吸の本質である繋ぐ事はこの際、重要ではない。ただ、一撃一撃を必殺にする。薫の日輪刀は橙であった。炎の呼吸の使用者でありながらである。本来なら赤く変わる筈なのだ。まだ弱いたため色が薄いと考えられましたが、今になっても橙から変わらないのは余りにもおかしいと薫自身は思っていた。

原作では音柱・宇髄天元が、雷の呼吸から派生させた音の呼吸は橙色であったが、薫のは炎の呼吸からの派生であり、さらに日の呼吸を取り入れた故の橙色であった。

故に・暁の呼吸・。

薫は袈裟斬りの要領で振り下ろす。

嵐乱は余裕を持つて避ける。

「おおっ!? ……危ないですね……なんですかその痣……んえ?」

鬼の肩から血が吹き出す。薫の太刀は当たっていないと思つていた為、鬼の顔から余裕が消える。

暁闇の明星は袈裟斬りに似せた二連斬りである。振り下ろしたあと、神速で再び踏み込みながら、同じ軌道で切り上げる。後の時代において、それは《燕返し》と呼ばれている技であった。

(はあ!? 嘘ですよね!?)

嵐乱はさらに距離を取ろうと足に力を入れるが、

・雷の呼吸 漆ノ型 鳴神天翔!!

「あがあ?」

愛染が砕かれていない方の肩で、刀鍛冶に支えてもらいながら日輪刀を投擲する。

轟雷を纏った日輪刀が嵐乱の腰に刺さり、体勢が大きく崩れる。

すかさず正助が現れ、背後から切り掛る。

(水の呼吸 捌ノ型 滝壺お!!)

「うぐつ……馬鹿め! 近づき過ぎだ! 喰らえ雑魚どもが!!」

鬼は背中に刃を受け、花がズタズタに引き裂かれている。しかし最後の抵抗とばかりに風乱は後ろに向けて悪臭を撒き散らす。

風乱は今の攻撃で意識すらないであろう正助を振り返って見て、目を見開く。

(赤い顔に長い鼻、天狗のお面だ?! 新しい増援か!? まずい! 起爆ではなく、まずは血鬼術を撒き散らさなければ……いや待て、こいつは天狗の面では無い! まさかさつきの奴がひよつとこに血を塗ったのか!?)

正助の小細工はすぐにバレたが、その隙で十分であった。

(あつぶねえ!! この面がなけりや悪臭を吸ってたぜ)

「つ! ……クソがあ! 死ねえええ!!」

残った悪臭が起爆される。悪臭も少なく想定内だった為、正助は回避に成功し体勢を立て直せた。鬼はもう背中の花が再生するまで悪臭も起爆もできない。それに悪臭は既に消えている。

薫はこの時を待っていた。

## ・暁の呼吸 式ノ型 参魂天羅・

逆袈裟二回からの水平切り。

一撃目で腕を切断し、踏みこんで円を描くように再び切り返し、胴を両断。最後は体の回転を活かした水平切りで首を切断する。血鬼術が解けて、薫達の肺が治る。

(……私……痣がでたよ。巖勝君。貴方と同じ痣が)

「この……雑魚……が」

「……あはは……雑魚は……お前ですよ……」

薫はその場に倒れ込もうとするが、抱きとめられる。少し目を開くと夜空に輝く満月が見えた。視界の端に写る景色が瞬速で流れていく。

薫を横抱きにした主は振動すらおこしていないようだ。

(ふふ。やっぱり、来てくれた……)

「取り乱した顔……久しぶりに見たよ」

「……もう話すな。本当に……本当にすまない。……今屋敷に連れていく。隠に正助と

愛染は任せた。後は私に任せろ。もう大丈夫だ」

## 拾玖話 邂逅

薫達が風乱を倒す少し前。

血の一滴すら残さず疱瘡魘は死んだ。巖勝の生み出した新たな型によって。死の間際に柱の倒した鬼の名前を叫んでいたのは生前に交流があったからではないかと推測した。真実は闇の中だが。

「他愛ない。疱瘡魘といったか、覚えておこう」

巖勝は刀を取める。薫達なら全滅していたぐらいの強さはあった。加えて戦闘を楽しむ所と敵を侮らない冷静さを持ち合わせていたので格下ならば確実に勝利を収めていた鬼。今巖勝に殺されなければ上弦の鬼に確実に入っていたであろう。

(……)

巖勝がふと周りを見ると身体中が刃物で覆われた怪物が好き勝手に暴れ回ったような景色が広がっていた。

瓦礫が散乱し、大地は無数の裂傷が刻まれている。それは赫刀の熱により仄暗く光っていた。正しく人外。

(……全部私がやったのか……まあ刀鍛冶は全員引越すし大丈夫か。しかし常識的に



考えて、人として色々と駄目では？)

倫理的に考えるべきことは多々あったが、思考を切り替える。これ程の鬼が薫達の方にもいるのならば確実に彼女達は苦戦している。

(向かうとするか)

巖勝は大地を踏みしめ、走り出そうと前傾姿勢になる。

「おい、お前」

ゾワリ。

全身が粟立つような悪寒。生命が警告音を鳴らす。声の主は人ではない。鬼である。しかし鬼の中でも最上位に君臨する存在である。

鬼滅の刃における原作開始から四百年前。室町時代後期の時間軸において、今の巖勝を威圧させられるような人物など、縁壺以外に考えられるのは一人しかいない。

(は……今くるのか！ 幾らなんでも早すぎる！)

巖勝は刀を掴み、抜刀の構えで振り向く。すると屋根の上に三匹の鬼が佇んでいた。個々が異様な雰囲気纏っている。

黒髪を無造作に垂らし、黒い着物に身を包んだ男性。彼が男女二人を両脇に待機させながらこちらを見つめている。巖勝はその圧倒的な雰囲気から目を離すことができない。地味な格好だが、爛々と輝く赤い目と不敵な笑み。そして溢れ出す暴力的なまでの生命力がそれを人ではないと証明していた。火山から噴き出す岩漿を彷彿とさせ、ぐつ

ぐつと煮えたぎり全てを飲み込むようであった。

女の方は花の着物に身を包み、どこか寂しげで儂げな雰囲気醸し出しますが、その美貌により思い悩む表情ですら美しい女性——珠世と、一つ目の筋骨隆々で、今代の柱すら易々と殴り殺せる強さはあるであろう鬼がいた。

（接近に気が付かなかつたのは片目の血鬼術か……というかまずい。十中八九鬼への勧誘だろう。まだ体は成長途中だから鬼になるのは先でないダメだ）

頭は回転に回転を重ねているが、いつでも抜刀できるようにする。

鬼の始祖——鬼舞辻無惨が突然キレて攻撃してこないとは到底思えなかつた。巖勝の身動き一つが無惨の機嫌を決定づける。

臨戦態勢の巖勝に対し、無惨が不敵な笑みを浮かべながら問いかける。

「鬼になる気はないか、仲間から化け物と呼ばれる剣士よ」

「……鬼に……なるだと」

（落ち着け。まずは惚ける。交戦すれば私には不利でしかない）

「そうだ。私はお前達鬼殺隊が血眼になって探している鬼の始祖だ。私は人を鬼へとできる。鬼となれば無限の刻を生きられる。私は呼吸とやらを使える剣士を鬼にしたいのだ」

「……」

「お前は鬼狩り達から恐れられ、拳句の果てに鬼の手先とまで言われているらしいな……ここで名実共に鬼となり復讐してみたくはないか？ 自分を見下す愚か者達に一矢報いてやりたくはないか？」

月の劍士よ。お前にはその権利がある」

無惨の声が巖勝の心に土足で入り込む。不思議と不快感は感じなかった。それどこか説得力が内包されている。

（このカリスマ、産屋敷と遠い親戚なだけはある。それに圧倒的な力を持つものから勧誘されたという事実は日陰者にとつて蜜のように甘い。結果その手を取ってしまうのだろう。大丈夫だ……落ち着け、私は今満ち足りている……言葉を選べ）

「私は……復讐など望んでおりません。ただ……技を極めたいだけなのです」

「なら双方に利がある！ 先程も言ったが私は呼吸とやらを使える劍士を鬼にしてみたい。お前は技を極めたい……これ程割のいい話はあるまい？ ……どうだ？」

（ここらで跪こう……うん、上機嫌になったな。このまま承諾して、頼みを通す）

「……わかりました。忠誠を捧げましょう。我が主」

「ふっ……それでいい。お前は何も間違っていない。あの疱瘡魃を倒して見せたのだ。

ある程度強くなった暁には私の右腕として仕えることを許そう」

巖勝は原作から台詞を引つ張り出してくる。無惨はすんなりと勧誘できたことに喜んでいのか上機嫌であった。

(……一か八か、パワハラ会議の奴らより私は強いから無理はある程度通る……ハズ！)  
「……主様。恥を忍んで頼みたいことがございます」

「ほう……なんだ？ 言ってみろ」

「鬼にして頂くのは私の体が成長するまでの間……五年程待つてはいただけないでしょうか」

瞬間。空気が凍る。一つ目が身震いをし、珠世が顔を背けた。無惨の血管が激情に呼応して脈動し、浮かび上がる。

(……やばいか)

「……五年だと？ ……この私を馬鹿にしているのか小童」

静かだが、怒りが滲み出ている声。無惨の機嫌が急降下し、手を挙げ、今すぐにも一つ目に殺害を命じそうである。自らが赴かないところは無惨らしいが。それでも今ここで鬼になる訳にはいかなかった。

「私は鬼狩りの里の場所を突き止められそうなのです。今鬼になってしまえば里へ再び

赴くことは困難です」

「だからどうした。その程度の利点で私の誘いを五年も先延ばしに出来ると思っているのか……呆れたものだ。身の程を弁えろ人間風情が」

無惨の触腕が巖勝のすぐ前の地面を抉る。地面が砕かれて、巖勝の髪がその風圧に？。だとしても身動きひとつせず、真つ直ぐに無惨を見つめた。

（大丈夫。まだ無惨は、私を疎まれている呼吸を使える剣士としか知らない……ならば）  
「貴方様の知る呼吸を鬼殺隊に広めたのは私です」

「……………ほうお前がか」

（……嘘は言っていない。広めたのは私、始祖は縁壺だからな）

無惨は自分の攻撃に動揺すらしないう巖勝に少し驚く。対して無惨は巖勝の言葉に少し動揺する。この瞬間、話の主導権は巖勝が握った。

（柱以外はただの有象無象の集まりであった鬼狩り共がここ数年急激に力を伸ばした理由ある呼吸。その起源がこいつであるのなら無理にでも鬼にすることで鬼狩り共はまた弱体化するのではないか？ いや、そもそもこいつがいれば大体の鬼狩りは殺せそうだな）

「はい。私としても私のお陰で勢い付いた癖に私を疎む恩知らず共が他ならぬ私によって滅んでいく様を見てみたく存じます」

(最後に……下弦の壺が助かった自分やバイやつですよ感を出して……どうなるか)

「ふん……まあいい。私はそれほど急いでもない。期限は五年……いや、四年後だ。四年後に私の元へ馳せ参じろ。いいな。それまで他の鬼狩りへ鬼への誘いはやめる。有難く思え」

「……御意。寛大な心掛けに感謝の言葉もございません……失礼致します」

(……珠世さんがゴミを見る目で見てくるな。そりゃこんな強い癖に思想が狂気に染まっている男が鬼に入れば尚更無惨の陣営が強化されていくだろうからな)

そんな珠世を横目に巖勝は薫の元へと駆け出す。もし薫に何かあれば鬼になる理由もなくなる。その時は無惨を四年後に殺すことにした。

(とりあえずは乗り切った。しかし、まだ機嫌はいいほうだろう。今はまだ縁壺に瀕死にされているのだから。皮肉なものだな……私の想い人が死ねば、私は鬼は全滅させるのだから……だが、考え方は変えない。もし私が鬼になれば薫にも血をあげよう。そうすれば……やつと……私達の悲願が叶う)



「……」

私の誘いを半ば交渉という形で纏められたな。少し腹立たしいがまあいい。掴みどころのない男であった。何を考えているのか分からない顔がやけに印象に残る。あの者が此方に来れば鬼殺隊は壊滅したも同然。

「珠世、あの男はどうであった」

「……はい。どこか年齢の割に大人びていました。そしてあの強さ、鬼にすればもはや日ノ本に敵う者はいないでしょう。それほどの武人であった」

「……瘡」

「あれは……俺には勝てません。強いとか風格とかで決められる次元じゃない。鬨気がなかった。だからおかしいんです。あの瘡瘡を倒した剣士が、鬨気すら感じられないほど弱いはずがないと」

それにしても忌々しい。産屋敷め、人の身であれほどの力。鬼と言いがかりをつけられて追放した方が簡単に鬼に出来たものを。あのずる賢い奴のことだ、慈悲の心ではな



く、呼吸の起源であるから庇ったのだらうな。

最近私の鬼が尋常では無い勢いで駆逐されている。雑魚ですら炎や水のような闘気を纏って刀を振るっている。拷問してみれば柱に教わったとほざいておった。教わっただけで普通の人間ができるものではない。

やはり鬼狩りは異常者の集まりだ。

「素晴らしい……だが、四年待てと言ったぞ。この私に向けてだ」

そうだ。私に殺されると思っていながらそれでも彼奴は進言したのだらう。四年など私からすれば一瞬に過ぎないが、他人の指図に従うのは癩だった。

しかし、あいつ自身が呼吸の起源と言っていた。ならば鬼殺隊の中で頂点に君臨しているのだらう。そうなればもう剣士を鬼にする必要がなくなってくる。弱者など必要ないのだからな。皮肉なものだ。一人の人間によって強くなつた鬼殺隊が、同じ人間の裏切りによつて滅ぼされる。熟私は運がいい。

「十四の身であるの惨状を作り出したのです。人の成長速度を鑑みれば人であるうちに身長などを成長させておきたい思うのは武人であるのなら仕方無いかと私は愚考致します」

「……………何を言っている。あの惨状を作り出したのは瘡瘡だらう」

「恐れ入りますが、俺が思うに瘡瘡はあのように地面を抉るほどの血鬼術や爪は無

かったかと……」

「……………ん」

「……………？」

「嵐乱が死んだ」

「あの剣士の仕業でしようか」

「いや違う……面白い。四年後、彼奴が鬼にならなかつたら嵐乱を殺した剣士を鬼にしよう。だが」

「もしも私があそこであの剣士に牙を向けられていれば、私は逃げ切れていたのか……？ 嵐乱を殺したのは柱と似た実力者三人。三人掛りでやつとならあの剣士は……いや、刀を最後まで抜かなかつた危害を加えるつもりは無かつたのだろう。」

「だが、もしも刀を振るってきたのなら……そうでなくても刀を抜かなかつたのはいつでも私を殺せたからではないか？」

「……………まだ日が昇るのに数刻はあるな。珠世、瘡、出るぞ。伴をしろ」

「……………はい」

「承知しました」

「あの剣士が四年後に私に対して愚かにも牙を剥いた時の準備だ」

——  
強い鬼を……そうだな、  
十二体程作る

## 廿話 兄弟で共闘

巖勝と薫は日柱である縁壺が担当している地域の町へと足を踏み入れ、その中でも縁壺達が住む屋敷へと歩みを進める。そこかしこに藤の花を植え、隠と鬼殺隊ですら何人か常駐しているという徹底ぶり。里の真ん中を通る道には街路樹のように藤が植えられており景色を彩る。

（来たことは無いのになんだ……どこか懐かしい気配だ。やはり近くに鬼殺の里があるのだろう……そんなことよりも）

「……薫。本当に大丈夫なのか？ たかが二週間程度で治る怪我ではないと思うのだが」

「大丈夫！ なんだか不思議な感覚なの、体が微熱みたいに熱いのに、だるくもないし息苦しくもないの」

「それは、痣が発現した証拠だろう。特に日の呼吸の使用者に顕著なのだが……薫の派生した呼吸は日の呼吸に関連しているのか？」

「うん！ 日の呼吸の繋ぐ戦い方に炎の呼吸の爆発力を重ねた型でね、暁の呼吸って呼んでる」

「……………そうか」

巖勝は天上の華のようににはかむ薫から目線を外し、遠方を見る。薫が原作にすらない呼吸を派生させたのも興味深い。そして死中に活を得て痣が発現したのは巖勝にとつて喜ばしいことだろう。だが、彼はどこか腑に落ちなかつた。

それは焦りでも、蟠りでもなくただ、

「もしかして嫉妬してるの？」

「……………いや、どのような呼吸か想像してただけだ……それだけだ」

「そう、ふふ。そういうことにしておくね」

「む……………揶揄っているな」

（……………最近薫に手玉に取られることが多くなつたな。薫が楽しそうなら構わないが）

（可愛いなあ……………でも戦闘になると雰囲気が一気に変わるんだよね。惚れない方が無理っていうか。隠や鬼殺隊にも極少数だけど熱をあげている羽虫もいるし……………邪魔だなあホント）

因みに巖勝は柱でありながら担当する区域を持たず、他の隊士のように任務を経てから動く遊撃部隊のようなものであつた。それというのも終哉が気を利かせたから……………と巖勝は思っているが実際は薫が終哉を半ば強引に説得させたからであつた。

「縁吉に会つたらまた日の呼吸を見せてもらえ。暁の呼吸の型が思い付くかもしれん」

「うん！ さつき言い忘れたけど、巖勝君の月の呼吸も込みの・暁・だからね。巖勝君にも見せてもらおうよ」

「……役立つのか？」

「もちろん。日の呼吸とは指向が真逆に近いけど体捌きや空間把握は月の呼吸の立ち回りが群を抜いているからね。それにただみたいっていう気持ちもあるよ」

「そうか」

巖勝は薫の方に目線を戻して少しうわずいた声で返答する。先程とは違い、表情は喜色満面であった。

（簡単に上機嫌になった……反則じゃない？ ああもう！ 顔がまた赤くなっちゃうじゃん！ やっぱりまだ巖勝君には敵わないなあ。笑うと可愛いじゃなくてこう、包み込む安心感があるっていうのが本当に……ずるいなあ）

二人はそうやって話しているうちに縁壺の屋敷へとたどり着く。道中に見かけた日の呼吸の道場とは別に生活感の溢れる佇まいであった。それでも十分広いのだが。

巖勝達が門の戸の前で身だしなみを互いに整えていると気配を察知したのか足音と

共に縁壺がうたをつれて戸を開けてきた。

「兄上！」

「縁壺。夜分にすまないな。お前の日輪刀、取ってきたぞ」

「お邪魔します。縁壺君、うた」

「……態々ここまで御足労いただきありがとうございます！ 薫さんもお久しぶりです！」

「おー！ 薫と縁壺の兄上か！ よくぞ来た。ちようど昼飯ができたところじゃ、無駄に広い屋敷じゃから布団も沢山あるぞ！ 今日泊まつていくがよい」

「ああ、世話になる」

「ありがとうございます。うた」

巖勝達は勢いで泊まりを勧められた。少し気圧されながらも二人は承諾する。丁度いいことに任務はまだ入っていない。

うたが薫の痣に気づく。薫の右頬には小さいながらも丸を中心に三日月のような紋様が幾つかその丸を囲むようにして痣が出ていた。

「？ ……薫。その痣は」

「ああ、これですか？ 巖勝君や縁壺君と同じ性質のものですから悪いものではありませんよ」

「むう……儂だけなのか……仲間外れにされた気分じゃ」

「うた。俺が墨で描いてやろうか？」

「縁壺、それは無理がある……うたも本気にするでない………竈から炭を持ってくるな。手が汚れるだろう」

巖勝達は久々の会話に花を咲かせながら客間へと向かう……と言つても形だけの客間である。そこに着くと継国兄弟は対面に正座で座るが、薫はうたを自身の膝に寝転ばせて土産話に花を咲かせている。

縁側から差し込む暖かな陽の光と、涼しくて体を透き通るようなそよ風が客間を流れていく。軽快で趣のある風鈴の音が既に夏であることを示していた。

(平和だな、途轍もなく……とりあえず日輪刀か)

「さあ、抜いてみる」

「はい。兄上」

刀袋から日輪刀を取り出して縁壺に渡す。金糸で織られた紐を使った黒の下地が見える柄に、これまた職人技が光る黄金の鍔。鞘は光沢のある漆塗りの黒一色で染め上げられていた。

縁壺がその日輪刀を握りしめて一気に抜刀する。天を向いた鋒から鍔に向けて燃えるような刃紋が煌めいている。そして焼けるような音とともに、刀の色が漆黒へと変わ



る。

薫達も視線だけを巖勝達に向け、刀の色に興味を示してていた。

「……兄上の日輪刀は紫色でしたよね」

「？ そうだが……なんだ久しぶりに見てみるか？」

「はい！」

すると縁壺は巖勝の抜いた紫紺の日輪刀を見て目を輝かせ、自分の漆黒の日輪刀を見て真顔に戻る。二振りの日輪刀を交互に見た結果、眉尻を下げてなんとも言えない顔をする。

「……縁壺、そう気を落とすでない。私も黒は好きだぞ。それにだな……うたの目と同じ輝きではないか」

「……！」

「そうだと縁壺……ひよつとすると……あんまり嬉しく……ない……のか？」

「!? そんなことはない！ 俺は自分の刀がうたの目と同じ色で嬉しい！」

うたの悲しい顔をこれ以上見ていられなくなった縁壺は万能薬を投じる。刀を瞬時に納刀し、うたに向かって両手を広げ、微笑みを浮かべた。

「うた、俺は嬉しいぞ。お前と同じ刀の色だからな」

「！ 縁壺!!」

要するにただの抱擁である。しかし家族らしいこの行動がうたは大好きであった。太陽のように温かい体温で優しく包まれると心の底から嬉しくなって頬が緩むのだ。

そして行動そのものではなく、縁壺だからこそ大好きであることにうたが気づくまでまだ少し時間がかかる。

「ごめんうた。お前の気持ち俺は分かっていたいなかった」

「うむ！ 許す！ 故に暫しこのまま続けろ！」

「ああ」

（……大胆だな。だが、劣情は一切ないのだろう）

互いに幸せそうに戯れ合う姿はまるで兄妹のようであった。縁壺とうたが幸せそうにしているのを微笑ましく思っていると薫が四足になって近寄り、巖勝に撓垂れかかるように座った。不満そうな表情を浮かべている。

「……あまり男女の戯れは見ない方がいいんじゃないですか。特にうたさんは女性ですよ」

「ああそうだな……っ！」

「外じゃなくてほら、私だけを見て」

薫が巖勝のかいた胡座の中心に両膝を着く。すると、ちやうど縁壺達が見えないよう

に巖勝の視界は薫で埋まる。巖勝の両頬には薫の手が添えられた。

独占欲を見せた薫がいつもより魅力的に見えた巖勝は無意識に片手を薫の頬に添える。すると薫は嬉しそうに目を細めて顔を傾け、巖勝の手を肩に押し付ける。

「何処か懐かしいな」

「巖勝君に初めて会った日の次の日。朝日を見に行く巖勝君を追って稽古をつけてもらった時だよ。その時は——」

薫が屈み込むことで二人は至近距離で見つめ合う。長い睫毛に縁どられた琥珀色の目が巖勝を写し、深淵の様に全てを飲み込むような漆黒の瞳が薫を包み込む。

「これぐらい近かったね」

「あ、ああ……」

巖勝はその色香に頭が思考を放棄する。女性として成熟が近づいていることがわかる凹凸があり、丸みを帯びた健康的な体つき。白紙のような肌に、細く女性らしい指先。汗ばんだうなじから微かに漂う薫の香りが脳を揺らす。

外からみても筋肉質な体躯。ひんやりとしている男らしい手が刀を握る時と違って壊れ物を扱うように優しく添えられ、どこまでも黒い目が最愛を写して優しく垂れる。戦場とは打って変わって溢れ出る男の色気に薫はときめいた。

（妾も側室も許さない。誰にも渡さないし希望すら抱かせない）

互いに愛し、愛されていることを確認した。ならばあとは――

二人は縁壺達に視線を向けられているのに気がつく。薫も気がついたようで顔が引き攣り、さらに朱に染まっていく。薫の影から顔を出すと、縁壺達が啞然としていた。うたに至っては顔を真っ赤にして言葉を失っている。

「……兄上、お、俺は退出しますのでどうぞ続きを」

「……………」

巖勝はいたたまれぬ顔をする。薫は再起不能になっていたため、どうしたものかとため息をついた。

余談であるがこの時、縁壺達は薫が影になってわからなかったが二人が接吻したと思っていた。薫もそう見えていたことに気がついた。そして、室町時代における接吻は性行為と同じ扱いをされていた為、巖勝はどこか樂觀視しているのに対し、薫は頭から火が出そうであった。



未明、まだ朝日は昇っていない。巖勝は立て掛けてあつた木刀を構えて月の呼吸を広い庭で振り続ける。

(血液の濁流、細胞の蠢動、筋肉の圧力、腱の伸縮、骨の硬化、関節の可動域、心臓の鼓動)

聴いた者が生来的恐怖を感じるような呼吸音と共に木刀を振る。今までで何千何万回と繰り返している型。繰り返す事に重心の移動や痣の発動段階を見極める。鬼になれば、こういった肉体の疲労に気を使う必要もなくなる。しかし無惨が最終決戦で能力を使用しすぎて疲れていたところを見ると鬼でも体の使い方は心得ていた方がいらしい。

「こんなものか」

巖勝は汗一つかいていない。もちろん態とである。そうすることで熱は身体を駆け巡り、皮膚の表面も体温が高まる。一日中この状態を維持することで身体を高体温に慣らす。

風に当たっていると気配が近づいてくる。縁壺であつた。日輪刀を腰に差している。

「おはようございませう兄上。精がでますね」

「おはよう縁壺。お前も朝から鍛錬か？」

「いえ、どうやらこの町から出ようとすする者を鬼が待ち伏せして襲っているらしく、討伐しに行きます」

「なら私も行こう。朝日が昇っては遅いからな」

「なっ!?! 兄上も赴かれるのですか!」

「……何を。そこまで驚くことは無いだろう。あまり大声を出すな。皆が起きてしまうぞ」

「申し訳ありません。俺は嬉しいです。ただ……今の兄上が刀を振るうと山のひとつやふたつなくなりそうだなと」

「ふっ。そんな馬鹿げたことはない……はず………だ」

巖勝は回想する。まず十歳の縁壺との稽古で既に大木を何本もなぎ倒し、ほぼ一年後の最終選別で鬼を全滅。序に所々森や地表を禿げさせ、縁壺と再会後の稽古では林を更地へと変え、最近では、どの道引つ越すのだからと刀鍛冶の里で鬼よりも家屋を倒壊させている。

「……兄上。そこで詰まらないで頂きたい。俺はなんだか怖くなってきました」

「安心しろ。大丈夫だ縁壺」

「……! 兄上!」

「お前や里は巻き込まないように善処する」

「!？」

なんだかんだあつて最強の鬼。黒死牟（未）の巖勝と、原作最強である縁壺の兄弟がたかが数匹の鬼へと牙を剥いた。

★

「縁壺、継子の育成に力を入れすぎて腕が鈍っているのではないか？ 私はもう五体目だぞ」

「兄上の飛ぶ斬撃は反則です……」

「ふっ、それもそうだな」

会話しながらも息一つ切らさずに鬼の首を刈り取り続ける二人。縁壺は当たり前のように刃を赫くしていた。巖勝は赫刀を発現するとんでもないことになるので握力は抑えている。紫紺と赫の斬撃が未明の山を駆け巡る。

「兄上。これが終わったら俺の道場に顔を出してくれませんか？ もちろんお忙しくなければですが」

「今日は任務も入っていない。別に構わないが何故だ」

「兄上には、俺の継子達に稽古をつけてもらいたいのです」

「益々分からん。お前が継子だと認めた者だ。私が口を出す必要はないだろう。それに日の呼吸と月の呼吸はほぼ真逆の立ち回りだぞ」

「それは大丈夫です。実を言うと、あの者らは最近天狗になってましてね……懋才能はあるだけにいぎ勝てない敵に遭遇した時が心配なのです」

「ああ、そういうことなら了承した。任せておけ」

「ありがとうございます兄上！ ではさっさと終わらせましょう」

そう言うのと縁壺はさらに速度をあげて走り出す。ここからは巖勝と別行動をするという暗示でもあるのだろう。劍の才に加え、序とばかりに備わった研ぎ澄まされている五感によって捉えられた鬼はすぐさま赫刀の餌食となった。

接近から鞘を握りつつの、抜刀一閃。

「グエツ！」

その勢いのまま日輪刀を両手持ちに変え、袈裟懸けに振り下ろす。

「た、助けエツ……!?!」

「……ゲゲツ！ 鬼狩りか！」

「数が多いな。近々里に侵攻でもしようとしていたのか？ 不幸な事だ。ここには兄上が滞在して……いや何を言っている。不幸なものか。兄上がいらっしやるのだ、幸



せに決まっているだろう」

「な、何を言っている！ よせ！ 近寄るな！」

怖気付いて混乱している鬼も、焰のような熱を纏った水平斬りで首を落とす。そこに慈悲は無い。

「ギッ……！」

今切った数匹の鬼の中に親玉であるそこそこ強い名付きの鬼が居ることにすら気付かず、縁壺は次の目標へと狙いを定める。いつも浮かべている感情の抜け落ちたような表情ではなく、その目は兄と鬼狩りができる幸せに輝き、口角は少し上がっていた。

縁壺と別れた巖勝はとりあえず鬼の匂いのする方向へと向かう縁壺とは違って、直感の示すままに方向を変えながら鬼へと向かう。

「……この辺りか？」

「!? なんでここ……ガッ！」

「当たり前だ」

鬼たちがいくら血鬼術で気配を消していようと巖勝によってあっさりと暴かれ首を

切られる。悪夢以外の何者でもない。違和感のある茂みを漁ると案の定鬼が潜んでいたので首を切る。また、移動中に何となく空を見上げると透明になっている鬼と目が合う。どうやら木の枝につかまっているようだ。

「そこだな」

「クソ！ 見つかったか！ だが、ここまでは追つてこれま……………え？」

この鬼も不幸であった。縁壺であればもしかすると気づかない。若しくは枝を足場に追つてきた為、短時間寿命が伸びただろう。

巖勝は天空に向けて刀を切り払う。飛月によって容易く頸椎をぶつ切りにされた鬼はまさか切られるとは思っていなかったのか素つ頓狂な表情を浮かべながら胴体とともに落下していく。

朝日が昇る直前には二人によって里を取り巻く鬼は全滅していた。折角なので二人で朝日を拝むことにした。

「兄上は継子を取らないんですか？」

「……………今更何を。私の悪評が広まっている中、型を習いたいものなぞ逆に正気を疑うぞ」  
「そんなことはありません！ 兄上の型は美しいです！ なんなら私の道場で教えましょう！ それがいいです！」

「……………分かったが……………斬撃を飛ばせそうな剣士はいるか？」

「……………」  
「縁壺、おい縁壺、目をそらすな」

## 甘壺話 日柱の道場

巖勝と縁壺の二人は家に帰った後、うたと薫がまだ起きていないので朝食を作ることにした。縁壺はうたと放浪生活を送っていた分、動物の料理等を得意としていたのに対し巖勝は前世の一人暮らしから米の炊き方等を知っているため主食を担当した。故に縁壺は川の下流で猪を解体しに行っている。

「……うむ、炊けたな、味噌汁でも作るか……肝心の味噌は何処にあるんだ」

室町時代では普通に味噌汁が食べられている。ご飯も庶民に広がりを見せてからというものの、一般家庭にご飯は主食という概念が浸透していった。因みに戦国時代になると食糧不足の観点から一日三食から二食に減ってしまう。

巖勝が簡素な着物姿に着替えて味噌を探していると、猪の皮や肉を担いだ縁壺が帰ってきた。

（何を使って解体した？ 小刀は……持つてない。まして日輪刀も持つてない……素手とかじゃないよな……？）

「ただいま戻りました兄上」

「縁壺か。おつかれ」

巖勝は旁うが、縁壺はキョトンとする。数秒後に巖勝は自分の発言の異様さに気がつき、味噌を探す手を止める。ふと縁壺を見ると、目を輝かせていた。

「……継国巖勝はおつかれなどという人物ではなかつたな。気が緩んでつい口から出てしまった」

「……ただいま戻りました兄上！」

「おい縁壺、二度は言わんぞ」

「そこをなんとか！ 今し方とても信頼しあっている兄弟みたいな空気が！」

「諄い。今のは忘れろ、いいな」

面倒臭い弟と化した縁壺から半ば強引に猪肉を奪い、てきぱきと賽子状にして串に刺し、焼き始める。

「……少し失礼な言い方になりますが。兄上って料理できたんですね」

「ああ、任務で野営していたからな」

「俺と同じですね。米の炊き方を知っているようですし」

「……隠の屋敷に泊まっていた時に教えて貰ったのだ」

「なるほど」

流石に前世の記憶があるとは言えず、巖勝は適当に誤魔化す。味噌汁も縁壺の助けを借りながら作った。残りの猪肉が焼けるまで兄弟は真顔で串焼きをじつと見つめる。

傍から見ればかなり異色な光景だろう。

巖勝は、串焼きが生焼けなのにごく当たり前のように摘み食いをしようとす縁壺の手を「まだ中まで焼けてないぞ」と叩いて止める。

焼き上がる頃にはうたと薫が匂いにつられて起床してきた。

「二人共ごめんさい！ 昨日の夜はうたと盛り上がってしまいました」

「おはよう皆の衆！ それにしてもいい匂いだな！ 早く食べるぞ！」

「構わんど薫。配膳を手伝ってくれ」

「うた、来客用の箸を二膳持ってきて」

四人で食卓を囲う。猪肉の串焼きは秒で消え失せた。



「縁壺、弟子達の強さは如何程だ」

「名付きの鬼には苦戦しますが、片腕くらいは持っていきそうな者が何人か。後は通常の鬼くらいなら首を切れる者くらいですね」

「……とても強いのだろうか、世間基準では」

二人は道場へと歩みを進める。縁壺の弟子の技量は並の鬼殺隊程度のような。それでも正式に鬼殺隊として認められていないのに現役の鬼殺隊と同程度の実力がある時点で、選りすぐりの武人達である。

ただ単に比較対象がおかしいだけである。

道場では既に刀を振っている者が大勢いた。なんでも縁壺に助けられたりした者や鬼に特別恨みを持つ者は挙つて弟子入りを志願したのだという。道場は結構しつかりと作られており、天井のある屋内や、外にも木刀等の設備が整っていた。弟子達が全員いるのを縁壺が確認すると稽古を始め……る前に縁壺が巖勝を紹介する。巖勝が見渡してみると皆、強者の部類に入るのであろう肉体をしていた。

「皆注目。私の兄上で月柱の巖勝殿だ」

（私？ 縁壺の一人称は俺ではなかったか？）

巖勝は縁壺の一人称に違和感を感じて、縁壺に顔を向ける。縁壺は咋に目線を逸らした。確実に巖勝の真似である。

「……日柱より、紹介に預かった継国巖勝だ。今日限り、稽古をつけさせてもらおう」

反応はそれぞれ違う。睨みつける者、巖勝から闘気を感じられず実力を測りかねている者、無表情な者、目を輝かせている者。

「日柱様、その方は……」

「月柱って……あの」

「……」

「鬪気が……ない？ 弱いのか？」

「……かつ……いい」

巖勝が赫い月を見せたのはほぼ一年前。観戦者は現役の鬼殺隊と少人数の継子であった。そのため今の鬼殺隊志望の者は月柱の戦いについて噂程度しか知らず、噂の内容も刃を飛ばしたり、日輪刀を赫くしたりと現実味のないことばかりであったから縁壺の弟子達は半信半疑であった。

「月柱殿には木刀を用いた稽古をしてもらう。皆、準備が出来たものから月柱殿の前に並べ」

縁壺の一声に巖勝の実力を測りかねている者はとりあえず観戦を決め込み、自身の腕に絶対の自信があるものから並び始める。こうすることで自然と天狗になっているものが分かりやすくなった。

（うむ、考えたものだな）

一番目の弟子が出てくる。巖勝が思ったよりも観戦者が多く、一年前の試合を思い出し少し感慨に耽ける。



「では、往くぞ」

「……」

（ほう？ 無視か、視線は反抗的。なるほど、道場では強い方だな。名乗りもしない……

一番目でいいか）

（兄上を無視しますか、身の程を知らないようですね）

一番目が脇目も振らずに斬りかかってくる。それは日の呼吸を彷彿とさせる動き。あくまで彷彿とさせるだけである。型はまだ完成していないらしい。

（形からして円舞か）

余りにも遅かったので巖勝は自分から仕掛けることにした。一番目の足が踏みしめようとしている地点に態と巖勝が肉薄し、足を置く。

「なっ……!!?」

歩幅が崩れる。一番目は間合いに入ってしまったので刀を振り下ろすしかない。もちろん力が入りきれていない。軽い音を立てながらあつさりと一番目の刀が弾かれ体勢が崩れる。巖勝はその隙を逃さず木刀を喉に突きつける。

（これが縁壺様以外の柱か……！ 闘気が一切ないからって舐めてかかるなんてどうかしてた）

勝負は一瞬であった。五秒もかかっていない。周囲がどよめき縁壺は笑みを深めた。

「走り方が真つ直ぐ単調で間合いが測りやすかった。鬼が血鬼術を使う前に殺そうとするのは正しいが歩幅に気を配ればさらに実力は向上するだろう。励むことだ」

「あ、ああ。……申し遅れたが堅田孝郷だ」

「構わない……休憩しておけ」

巖勝は孝郷を労い、そして列に目を向けると女剣士が木刀を構えて待機していた。腰まで届くほどの黒髪を流している。その姿に巖勝は見覚えがあつた。それは最終選別において四本腕の鬼に襲われており、巖勝が守つた女性であつた。

「……阿茶……であつたか、久しぶりだな。最終選別以来か。よもや日の呼吸を学んでいるとはな」

「名前を覚えてくださつたのですね月柱様！ 私が日の呼吸を習っているのは……成り行きと申しますか……」

「？」

「その、月柱様と同じ呼吸を習いたかつたのですが、月柱様が道場を開いていらつしやらなかつたので日柱様に学んでおります！ ……月柱様は今からでも道場を開く……若しくは継子をとるつもりはありませんか？」

「ないな、とりあえず構えろ、向かつてこい。話はそれからだ」

阿茶は不満そうに頬を膨らませながらも刀を正眼に構える。

・日の呼吸 壺ノ型 円舞・

(む……まともに日の呼吸を使えるのか。さすが戦国初期、やはり平均的に身体能力は高いな)

体の回転を活かした水平切りが横から巖勝を襲う。一撃を生身で受ける気は毛頭ないので木刀を横に立てて受け止める。阿茶にとって簡単に受け止められることは想定内であった。しかし早く決定打を与えられなければ体力的にジリ貧になるのも自覚していた。

(やつぱり巖勝様は受け止めますね……日の呼吸は消耗が激しいというのにこうも簡単に捌かれますと……ううん。頑張りなさい私)

(縁壺には遠く及ばないが……女の身でこの威力。弱い名付きなら油断しているうちに首を切られるだろう……おお、繋ぐつもりか)

「……………！ 阿茶の円舞を止めたぞ！」

「これが日柱様以外の柱……孝郷の時もそうだったが、やはり格が違う！」

「化け物かよ……………！」

・日の呼吸 伍ノ型 陽華突・

阿茶が体を捻らせながら木刀を片手持ちに変え、もう片方の手で柄を押し込むように突いてくる。巖勝は冷静に後ろに下がることで対処する。そしてがら空きな胴に向かつて刀を振るう。

・日の呼吸 漆ノ型 斜陽轉身・

巖勝の胴を狙った一撃は空振り、お返しにと首を狙って、宙で反転した阿茶の一撃が飛んでくるが、巖勝は透き通る世界で全て見えている。

（あの日の月柱様のお眼鏡に適う女になるために鍛えた型。これならば……！）

「それは悪手だ」

「うわっ!？」

巖勝は阿茶の木刀に真っ向から刀を叩きつける。技を繰り出しているとはいえず空中なので単純な衝撃には弱い。斜陽轉身は相手の虚を突く技なのだ。阿茶の体が尋常ではない膂力によつて押し流され、不格好に着地し、巖勝の木刀が喉に差し出される。周囲がまた騒ぐ。一番日柱に近いであろう阿茶が簡単にあしらわれるなどと、目を疑っている。

（野次馬が騒々しいな。聞こえてくる会話からして阿茶がこの道場において一二を争う実力者なのだろう。阿茶は日の呼吸の本質である『繋ぐ』戦い方もできている……しかし……体力的な問題か……本人もわかっているだろうし、敢えて言う必要は無いな）

阿茶は肩で息をしていた。それも当然のこと。日の呼吸は一つの型を繰り出すことですら体力を大幅に消耗する。逆に一年足らずで繋ぐことすら可能にした阿茶の努力と才能は並ではない。

巖勝は倒れ込む阿茶の近くにしゃがみ込む。

「阿茶よ。繋ぐことも出来ている、威力も申し分無い、素晴らしい。後は相手の体勢や特徴から、相手が嫌がって反撃されにくいような型を選択し、相手を翻弄しながら戦えるとなお素晴らしいぞ。暫し休め。焦ることは無い。体の下地は十分できてきている」

「は、はい！ 月柱様ありがとうございます……後で少し時間をいただけませんか」

「承知した。稽古が終わってから聞かせてもらおう」

（継子をとるつもりはないが……どういう意図だろうな……いかん、待たせたか）

巖勝は切替える。それからというものの残る数十人を相手に戦ったが、巖勝の圧倒的な戦いで出鼻をくじかれたのか反抗的な弟子や目立った弟子はほぼ居なかった。



日も完全に昇り、朝の十時頃。

次は巖勝が鬼と想定しての稽古。故に巖勝は無手、弟子は木刀をもつ。見る人が見れば見せしめのような光景であつたが、この一時間で巖勝の実力を際限なく見せつけられてなお、まだ底が知れない彼に対して「手を抜いている」という言葉は誰の口からも飛び出すことは無かつた。

「うっ……！」

——巖勝の掌底を辛うじて避ける。弟子の耳のすぐ横を死が通り過ぎ、その風圧で唸る。振り切つた腕に向けて木刀で切りつけるがもう片方の腕で手首を掴まれ、投げ飛される。

受け身を取つた弟子に巖勝が近づく。

「肉弾戦を得意とする鬼は間合いが大切だ。刀を持っている鬼殺隊はその点において有利であるが、懐にはいられたら間合いを取らないと出の早い拳技で抑え込まれる。しかし腕を狙つたのは正解だ。並の鬼ならば再生に時間がかかるだろうからな」

「はい！ 勉強になります！」

巖勝は完全に尊敬されていた。その強さも理由であつたが、相手の欠点を指摘してから褒める。所謂落として上げる戦法と、相手を等身大で見る曇りない目が弟子達の心を

驚掴みにした。

(皆飲み込みが早いな、教えがいがある)

そうして何人か投げ飛ばしたり、蹴り飛ばしたりしているうちに周りの弟子達が急ぎざわつき出すのを感じ取る。それを少し訝しげに思いながら、今戦っていた弟子の一人に助言を施し、次の相手を見据えると――

――縁壺が木刀を構えて列の最前列で待っていた。

(……………おい待て……………なぜお前がそこに居る)

巖勝の困惑を他所に縁壺が突貫してくる。悪戯が成功した時のような表情だが付き合いの長い巖勝であるからこそ分かるのであって、他のものから見ると不気味な笑みに見えるだろう。

巖勝は瞬時に木刀を構え、縁壺の一撃を食い止める。縁壺の木刀から感じる重みは以前の比では無い。因みに木刀は日輪刀を差している方に念の為追加で差しておいた。

傍から見れば三刀流に見える。

「……お前とは再会する度に戦ってばかりだな」

「私は兄上と戦えて嬉しい限りですがね！」

互いに軽口を叩き合うが目は相手を見据えている。勿論先手を取ったのは間合いの面で優れている巖勝であつた。

・月の呼吸 拾壺ノ型 月暈の虎狼・真榊乱舞・

飛月は余り纏えない。木刀ではその握力と斬撃の衝撃に耐えられないからである。月暈の虎狼・真榊乱舞は縁壺には見せたことがない型の為、彼を瞠目させるには十分すぎた。

周囲は瞳を月のように輝かせた異形の獣が巖勝を主としてその力を振るっているように見えただろう。それでもなお縁壺は笑った。とても楽しそうに。巖勝は次の縁壺の動きが、透き通る世界とその笑みによって理解出来た。

・日の呼吸 陸ノ型 日暈の龍・頭舞い・



太陽の龍が現れ、主に牙むく無礼な存在をその牙を以て排除せんと差し迫る。太陽と月が重なり合う。

昂るような鬨気の中、互いに互いの木刀を鳴らし続ける。この時点で実力は拮抗していた。僅か数秒の間に劍戟が幾つも木霊する。

・日の呼吸 玖ノ型 輝輝恩光・

次に先手を取ったのは縁壺であった。体ごと渦巻くように回転し乱舞を避けて巖勝にさし迫る。

(っ！ 化け物め！)

・月の呼吸 捌ノ型 月龍輪尾・

壺ノ型 闇月・宵の宮の宮の上位互換とも言える技。実際に威力も範囲は桁違いである。横にも縦にも広い斬撃であり、避けるのは至難の業。しかも——

(木刀に限界が来ているな……)

木刀の表面には無数の斬撃跡が痛々しく刻まれており、あと何回か打ち合うだけでその寿命を終えるだろう。

・日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽・

縁壺の纏う鬨気が形を為して刀と共に前方へ薙ぎ払われる。木刀とはいえ達人が使うことで名刀や神刀にも成りうるのだ。

(道場だからな、地面を抉ったり周囲を危険に晒したりはできぬ……などと言っている  
余裕はないか)

・月の呼吸 肆ノ型 虧月突・

巖勝は霞の構えで刀を持ち、怒濤の突きを繰り出す。一点突破なため受ければ木刀は  
砕け散るだろう。

・日の呼吸 漆ノ型 斜陽転身・

縁壺は空中への逃げを選択する。無防備な空中で巖勝の突きが縁壺に殺到するが、宙  
に浮きながら全て受け流す。

虧月突を全て払うために尋常ではない力で握り込まれた木刀は耐えきれずにその役  
目を終え、縁壺は柄だけになった木刀を巖勝の首を掠めさせ、背後に着地する。巖勝の  
木刀は縁壺の肩を掠めていた。

「……縁壺の刀が健在ならば私の首は切れていたのに対し、私の刀は急所に当たってい  
ない。実戦であれば私の負けだろう」

「兄上、私が斜陽転身で先程の攻撃を受け流している時もう少し技を繰り出せたでしょ  
う？」

周囲は哑然としていた。

縁壺が空中で反転しながらも怒濤の突きを受け流したのもそうであったが、巖勝が人

の身で刃を飛ばしたのだ。普段の道場では実力すら測ることが出来ないぐらいに底がしれない日柱。それと互角に戦って見せた月柱。日柱である縁壺の本気（らしきもの）を見られて興奮したのもあるが、剣豪達の戦闘はただそれには収まらず神話の戦いを見ているようで、弟子達は胸の高鳴りを抑えるので精一杯だった。

木刀でこれなのだ、日輪刀を用いた時果たしてどうなるのか。ただただ純粋な賞賛から拍手が巻き起こる。

これが鬼殺隊の頂点である柱。

これが紛うことなき化け物。

これが人の身でありながら人の限界を超えた天才達である。

## 廿式話

## 水面下（ヒロイン＋縁壺視点）

巖勝君が弁当を忘れていることに気づいた私は、日柱である縁壺君の道場へと向かっている。

「♪ ～♪♪ ～♪」

弁当を忘れた恋人に弁当を届けに行くなんてまるで夫婦みたい。今の私はとても機嫌がいいから町にいる鬼殺隊の有象無象が私のことを不躰な目線で見ても流してあげる。私って優しいな。

道場に着くと、何やら騒がしい音がする。いつもの稽古を見ていないから分からないけど、縁壺君の稽古ってかなり厳しいのかな。とりあえず無骨な広間の戸を少し開けて……

「お邪魔しまー……」

「うわあああああ!？」

「ひゃっ!？」

開けた瞬間なんと人が飛んできた。何を言っているのか分からないと思うけど、私も何が起きたのか分からない。

視界に人の背中がめいっばいに広がるが、間一髪でなんとか避けられた。日柱の弟子らしき人は屋外に飛び出したあと、受け身に失敗して何回か転がって動く気配がない。息はしているみたいだから気絶したと思う。

——— そんなことよりも

（巖勝君はどっこに……）

結果的に巖勝君はいとも簡単に見つかった。だって道場のど真ん中で木刀を持った弟子を相手に素手で応戦してたから。

差し出された木刀の突きを刀の側面を手の甲で打つことで払い、足を狙った低い水平切りを跳躍して避け、背後に着地して後ろ回し蹴りを繰り返す。弟子君が刀で防御しても刀ごと吹き飛ばされた。

動きをある程度見極めてから最小限の動きで全てを叩き壊す流れはまるで鬼神。

(ああつ………！ かっこいい………!!)

動く度に揺れる長髪、振り回される鞆やかで力強い脚、腕捲りして血管が浮き上がっている腕。表情が変化しない顔。

——その全てが私を狂わせる

そして稽古が終わったら一人一人に助言を施している様子……その優しさも気遣うような顔も私だけに向けて欲しいけど巖勝君がそうしたいのなら仕方ない。家に帰ったらその分まで沢山構ってもらおう。

私が見蕩れていると道場の雰囲気が変わった。どよめき、どこか浮いている。

「……お前と再会する度に戦ってばかりだな」

「私は兄上と戦えて嬉しい限りですがね！」

……なんと縁壺君が巖勝君に斬りかかっていた。

道場の荘厳な雰囲気が一気に様変わり。木刀とはいえ二人の柱が繰り広げる剣戟の

応酬は大層心踊り、特に巖勝君は普段よりも表情が豊かになっている。そして決着の瞬間はさらに心が昂った。最終的に縁壺君の木刀が折れて、縁壺君は不本意そうな表情を浮かべていた、仕方ないけど得物が使えなければ戦えないから決着は決着だ。

周囲に混ざって私のできる精一杯の拍手をする。剣士として、いいものを見せてもらいました。

さて、私も弁当を届けるといふ役目を果たし……

「月柱様！ 今の飛ぶ斬撃はどうやったのですか!？」

「あれはだな……少し説明に困るが……」

「巖勝様、お時間があればもう一戦よろしいですか?」

「まずは……飯を取りに行かせろ……それからだ」

「日柱様とは本当に兄弟でいらっしやるんですね!」

「ああ」

（弟子たちが虫みたいに寄ってきた……女も巖勝君の着物をべたべたと……）

嗚呼——煩い、五月蠅い、苛立たしい、煩わしい、忌々しい、腹立たしい、厭わしい、鬱陶しい……

巖勝君が受け入れられて嬉しそうだから良かったものの、対応に困っているみたいだ。彼の為にも私が行って邪魔な虫は排除してあげないと——

「おおっ!? うたさんと同じくらいの美人さんじゃないですか」

(誰かな……私が今恋人にに会いに行こうとしているのを邪魔するのは)

ああ、軽い男だ。以前、鬼殺隊にもこんな男が寄ってきた時があった。名前は忘れたけど。私の顔はあなたに見せるためにあるんじゃない。

「もしかして鬼殺隊だけど弟子入り志望? じゃあ……あちらの日柱様に……」

「その容貌……なんなら拙者たちが推薦して差し上げるで御座る。その代わり……」

「お氣遣いありがとうございます。弟子入りではありませんので……」

「あ、じゃあその弁当をどなたかに届けるおつもりだな、俺が渡しておいてあげようか?」

有象無象達がの前に立ち塞がってきた。かなり困った。無理言つて道場に入ろうとしても今縁壱君は一人一人に指導中だし、巖勝君はこの人達が壁になって気づいていない。かと言つて無理矢理入つてしまえば、この男達に不審者として取り押さえられそう。避けるのは容易い。けれど巖勝君のためにうたに教えて貰いながら頑張つて作った弁当だ。

崩れてしまえば巖勝君が食べにくくなってしまふ。



—— 斬つちやおうかな……

「ん？ ……なんとか言えよ女。聞こえてないのか？ ……しかし本当に別嬪だな」

「さつきからずつと微笑んで固まっていますし……もしかして其方に惚れたのでござろうか？」

「勝手に決めつけるな！ それに……俺にはうたさんが……いやこの女も負けず劣らず……」

「あれは日柱様の御家族でござろう。日柱様に目をつけられても知らぬぞ」  
「わかつている！ ……わかつているが……」

ああ、私としたことが……そういえばこの方達は縁壺君の弟子達だったなあ——  
仕方ない。

四肢のどれか一本で手打ちにしてあげよう。それがいい。

これでも私と巖勝君の逢瀬を憚る屑にしては安い方だったけど。確か以前の方は、巖勝君は鬼の手先だから一緒に行動しない方がいいと言つてたから、態と煽つて名付きの任務に行かせたつけ。その上うたにすら劣情を抱くとは、救いようのない屑。

—— 腕にしてあげよう。足だと鬼殺隊に入った時に不利だろうからね。

「おい……貴様ら……薫に詰め寄って……何をしている？」

嗚呼、私の旦那様が来た。私のためだけに。

彼のいつも変わらない表情が今回ばかりは不快を全面に表している。あれだけ動いていたというのに汗ひとつかかないのは我が恋人ながらどういう体の構造が気になるなあ。

「なんだ、月柱様の奥さんか。薫って言うのか。勘違いして悪かった」

そう言つて手を差し出してくる。この人は頭に脳みそが詰まってるのかな？もうさつさとどこかへ行つて欲しい。つい手が出そうになるのを抑えるために巖勝君の顔を見て気を紛らわせよう。

「……行くぞ薫。弁当を態々持ってきてくれたのだな。助かった……感謝する」

感謝の言葉を求めているように捕らえられたけど、まあいいや。褒められて悪い気はしないからね。

「はいー」

しかも巖勝君が独占欲を……満足満足。もう全部許してあげる。脣を斬るよりも巖

勝君と過ごす方が断然良いに決まっている。不機嫌に屑達を睨みつけている横顔さえも愛おしい……

「ええー……名前く……ら……」

執拗かつたので振り返って男の顔を見つめる。今私はとてもいい気分だから。邪魔しないのでっていう気持ちを含めて。屑さんは顔を青白いを通り越して真っ白にして震え出してしまった。可哀想に。

すると、誰か近づいて来る気配がしたけどこれは……

「ほう……兄上とその奥方に対して斯様な物言いととは……偉くなったものだな」

「ひっ……日柱様……!?!」

「た、助け……ぐえっ……」

縁壺君が屑達を小脇に抱えて申し訳なきそうに一礼して去っていった。

あちらはもう大丈夫そう。ああ、女性がこちらに駆け寄ってきてる。最終選別の時は阿茶さんとか言ってたっけ……後回しにしてね。私がいるから愛人や妾志望とか許さないけど渋々去って行ったから十中八九継子になりたいのかな？

兎に角——

——早く鬼になりたいな

★

夜。私は兄上の傍に座り込んで、体を揺すり起こす。最近私呼びが板に付いてきた。兄上と同じと考えるとつい微笑んでしまう。

(そんな私の微笑みを兄上はどこか不気味だと言っていらつしやった。いくら兄上とは言え心外だ)

兄上はすぐに起きて下さった。眠そうな目を擦っていらつしやるのを見て少し……いやかなり罪悪感を感じた。瞳には困惑が浮かんでおり、訳を説明しなければならぬのはわかっているが今訳をいえば朝でいいだろうと言ってしまわれるだろう。そして朝になると兄上が任務に行かれるかもしれない。

「……む……どうした縁壺……もしかして厩か？」

「お願いします兄上、着替えて日輪刀を持って一つ山を超えた薄原まで来てください」  
兄上は夜の暗闇に目が慣れてきたようだ。寝ぼけていらっしやるようだがここは聞かない振りをする。ただ少し魅力的な考えだと思った。

私は白、黒、黄土の着物に黒い袴を白い紐で縛り、暗い赤の羽織。漆黒の日輪刀を腰に差して髪も結っている。これぞ私の鬼狩りの装いであつた。そして私なりの誠意の表れでもある。

兄上は上体をゆっくりと起こす。

「……鬼でも出たか？」

「……そんな感じの……ものです」

「……なんだ……歯切れが悪いな……とりあえず了承した……先に向かっている……すぐに追いつく」

「ありがとうございます」

了承してくれたのでは私は屋敷を出ていく。

兄上を見たところ余り疲れていないようだ。日中あれほど戦つて教えてを繰り返していたのに加え、午後は月の呼吸を披露してくださっていたのだ。

その型が余りに不可解すぎて漏れなく全員お手上げに近い状態であつた。刃を飛ば

す必要はなくても、太刀筋とは違う斬撃を繰り出さなければならず、その上必要以上に相手を傷つける剣技であった。実際に鬼を肉片にしていた。

私の呼吸から派生した五つの呼吸はどこか日の呼吸の面影を見せるものがあるが、兄上の月の呼吸は態とと言っていていくらい真逆。真逆であるが故に日の呼吸を知る者は月の呼吸を見た時、日の呼吸を連想するだろう。日の呼吸が一番上手で、かつ兄上の継子希望の阿茶ですら一度も成功していなかった。

それでも疲れの兆候すら見せないのは私と同じ体質のようで少し嬉しい。

枝や木や岩を足場にして山を登り、跳躍と受け身を交互に行いながら山を下る。一山超えると広大な薄原が広がっていた。

先に薄原に到着し、少し待っていると兄上が近づくと気配がした。

「……待たせたな縁吉」

兄上は白の着物に腕を通し、黒と紫の水玉（つぼい）色の羽織を羽織り、黒袴に白い帯を巻いている。夜空に浮かぶ三日月が薄野と兄上を照らし、幻想的なまでに荘厳であった。

「よくお似合いです兄上」

「ああ……縁壺もよく似合っている……本当に……それで、なんのために私を呼び出したのだ」

「まずは謝罪を。兄上を夜分遅くに呼び出して申し訳ありませんでした」

私は頭を下げる。

当たり前だ。ゆっくり寝ている兄上を起して、鬼狩りの装束まで着込ませたのだ。それに早く準備しようと思ったのか、いつも差している二本目の刀ですらお持ちでない。要らぬ心配をかけさせてしまった。もう少しいい言い訳があったであろうに。

「……謝罪を受け取ろう縁壺。怒らないからとりあえず訳を話してくれ」

兄上が私を見つめて真剣に聞いてくださる。

この目だ。向けられた者の深淵まで見通されそうなほど覗き込んでくる目。私の視界とは違う見え方なのだろうか……

私は深呼吸をして答える。

「もちろんです兄上。単刀直入に言う……兄上には俺と斬り合ってもらいたいのです」

沈黙が流れる。兄上は困惑しているようだ。本気で斬り合うのはいいとして、何故このような場所で夜に呼んだのか不思議に思っているらしい。そう、私は兄上と一度、本気でいいので斬りあってみたかった。それには理由がある。

「兄上。私と兄上がともに斬りあつたことは一度もありません」

「……そうか？」

「そうです。最初は木刀かつ兄上の初見殺しによつて一瞬で終わり……」

「……ああそうだな。……懐かしい」

「次は村の林で勝てそうだったのに兄上が暴走して仕方なく終わり……」

「……ああそうだな、あれは……すまなかつた」

「今日とて木刀かつ弟子の前だから日本一優しい兄上は手加減してくれました」

「……ああ」

「私たちは一度もまともに斬りあつていません」

精一杯、兄上に理由を説明する。これで了承してくれなければ引き下がるしかない

「……これはただの我儘なのだから。」

「ふっ……」

すると、兄上が不気味な笑みを浮かべながら柄に手を乗せる。私は少し身震いとしてしまった。透き通る世界でも感情がわからず、なんで笑っているのかも分からなかった。

（……私の笑みもこんなに不気味なのだろうか……そしてこれを見る兄上もこんな気持ちなのだろうか）



一つ懸念すべき事案が出たがそれは後回しでいい。こうなったときの兄上は手加減を一切しない。

大気が震えると錯覚するような剣気——殺気や威圧感等を複合したそれは今まで感じたことの無い、桁違いの迫力であった。

「いいぞ縁壺。兄弟水入らずで斬り合おうでは無いか」

「それでは……最後に。私は一つ兄上に聞きたいことがあります。勝負に勝てば答えて下さらないでしょうか？」

「……………申してみよ」

「兄上は私に隠し事をしていらつしやいますよね？ 私が勝ったら、それを話してもらいます」

兄上の威圧が嘘のように霧散する。

困惑、理解不能、焦燥。何か心当たりがおありなのだろう。ついでには思ったがここまで心を乱されるとは思わなかった。

（やはり兄上は隠し事をしておられる。弟としては聴きたい気持ちがある）

兄上は本心を明かさぬ人だ。それはこれまでのやり取りからよくわかる。さらに月

の呼吸の継承者がいないと言うのに弟子を作ろうともしない。ある程度の道を極めた者はそれを後世に残そうと必死になるものであるが、兄上からはそういう気持ちは全くと言っていいほど感じ取れない。

まるで自分の技術が残してはいけないもののように。

恐らく薫さんは兄上の秘密について知っているのだろう。あの人と接する時の兄上は素をさらけ出しているように感じるからだ。尊敬する兄上のことだ。何か訳があるのだろうか。

(そこで引き下がるほど弟は捨てていない)

「……いいだろう。私に勝利すれば答えてやろう」

「……本当ですか!？」

「ああ……男に二言はない」

「ありがとうございます。それでは早速——」

日輪刀を握りしめて鞘の中で赫く変える。

さあ、ご覧下さい私の全てを。

呼吸をして技を繰り出す準備をする。

——  
ゴオオオオオ

——  
ホオオオオオ

あの日、私が出ていく一年前。兄上は私に言いましたよね。「私はその孤独を、痛みを知っている」と。ならば私にも兄上の孤独を背負わせてください。それが私なりの兄孝行です。

兄上を下した上でその腹の中を全て聞かせていただきます。

## 廿参話 月を照らす日輪

天才は追いつくためには努力するしかない。だがその者が天才に加えて秀才だったのなら……誰も追いつけないのは自明の理。天才は努力の天才でもあるのだ。

(狙いは首か！)

巖勝は察知し、日輪刀を首まで持つてくる。

瞬間、縁壺の姿が消え失せ、首の刀に金属が弾かれる音とともに尋常ではない衝撃が加わる。そして背後に縁壺の気配を感じた。

(全く見えなかった……！)

縁壺は踏み込みと同時に走り出しすれ違いざまに抜刀し、切りつけたのだろう。だとしても見えなかった。

抜刀攻撃は鞘滑りがあるから威力が増す。だが一撃で患者である巖勝の体幹を崩す程とは化け物じみている。

「踏み込みで地面がひび割れるとは俄には信じがたいな」

縁壺の肉体は全盛期にほぼ近い。しかし圧倒的力量差にもかかわらず、巖勝は高揚していた。見えずとも防げたということとは裏を返せば見切ることができたということ。今の一撃で体が完全に起きた。勝負はまだまだこれからである。

(原作のように一撃では首を捕えさせなかった。私は戦えている……この天才を目標に積んだ修練は間違っていないかった)

縁壺が振り向き、その刀身を露わにする。

刀が赫く染まっているという生半可な表現では表せない。巖勝の赫刀が蜃気楼のように見えるほどの熱量。赫刀の発動条件は三十九度以上の体温であるが、縁壺はそれを超える体温を常に保っておきながら顔色ひとつ変えずに技を繰り出す。

——これが最強

「今の一撃に全霊を込めて倒すはずでしたが……」

(なぜ兄上に悟られたのでしょうか? ……まあ兄上ですから!)

- 日の呼吸 壺ノ型 円舞 ▪
- 日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽 ▪

- ・日の呼吸 漆ノ型 斜陽転身・
- ・月の呼吸 貳ノ型 朱華ノ弄月・

円舞の威力、灼骨炎陽の薙ぎ払い、斜陽転身の反転跳躍。

巖勝の朱華ノ弄月は三連撃中、胴と首を狙った二撃が灼骨炎陽に薙ぎ払われ、足は斜陽転身で回避された。縁壺は空中で回転しながら水平切りを叩き込んでくる。

- ・月の呼吸 陸ノ型 常世孤月・無間・

巖勝は本来飛ぶはずの飛月を全て日輪刀に纏わせて、迎撃する。ただでさえ一撃一撃が必殺の斬撃に威力がさらに上乘せされ、縁壺の刀を弾く……否、受け流される。

縁壺は既に他の型を振るう目処が立っていた。

- ・日の呼吸 陸ノ型 日暈の龍・頭舞い・
- ・日の呼吸 貳ノ型 碧羅の天・
- ・日の呼吸 伍ノ型 陽華突・
- ・日の呼吸 拾貳ノ型 炎舞・

(……………いけるな!?)

太陽が如き輝を放つ龍、それが三体。

それぞれ碧羅の天、陽華突、炎舞の性質を持ち、顎を開いて巖勝に差し迫る。

——爪牙を用いて薙ぎ払う碧羅の龍。

角を振り上げて突いてくる陽華の龍。

顎を開いて嘯み砕こうとしてくる炎舞の龍。

それらがほぼ同時。

・月の呼吸 拾陸ノ型 月虹・片割れ月・

本能的に一番威力の高い型を繰り出す。三つの頭蓋を上から降り注ぐ巨大な三日月によつて刺し貫く。桁違いの威力によつて地割れが起き、土煙が巻き上がる。

・日の呼吸 拾壹ノ型 幻日虹・

しかしそこには縁壺はいない。太陽の龍は縁壺が鬨気によつて創り出した囷であつたのだ。最後の型を繰り出した巖勝。その隙を逃がす縁壺では無い。

・日の呼吸 玖ノ型 輝輝恩光・

・日の呼吸拾ノ型 火車・

立ち込める砂煙の中から縁壺が巖勝に向けて突貫してくる。そして直前で跳躍し、背後から一撃を入れてくる。

巖勝は鬨気を出したり抑えたりして揺らぎを作り、間合いをとる。縁壺の攻撃が当たらず、巖勝の斬撃は通る程度に。原理は霞柱・時透無一郎の霞の呼吸と同じ。背後から迫つた火車は巖勝の煙のような存在感によつて避ける。

・月の呼吸 拾肆ノ型 兇変・天満織月・

そうやって至近距離まで近づかせてからの広範囲に渡る斬撃の嵐。すると巖勝は縁壺の足の筋肉に血が集中しているのを透き通る世界で視る。

(この流れは……跳躍で避けてからの碧羅の天か?)

巖勝はそう結論付けて上に向けて刀を振るうが縁壺は真つ向から巖勝の斬撃を掻い潜り肉薄する。

(想定と違う!? ……血流操作か!)

岩柱・悲鳴嶼行冥が黒死牟戦においてやってのけた技術。ならば始まりの呼吸の剣士である縁壺ができて当然。透き通る世界持ちに対しては初見時に裏をかくことが出来る切り札とも言える技。

巖勝が気づいた時には斬撃を掻い潜った縁壺の赫刀がすぐそこまで迫ってきていた。

- ・日の呼吸 参ノ型 烈日紅鏡・
- ・日の呼吸 捌ノ型 飛輪陽炎・
- ・月の呼吸 捌ノ型 月龍輪尾・

呼吸の型を無理矢理変える。型をいきなり変えるのは体の負担が大きいが、患者の肺活量を持つ巖勝にとっては余り苦ではない。

縁壺の必殺の一撃を真つ向から叩き潰す。何とか着物を裂かれる程度に抑えた。寸でのところで防がれた縁壺は不満顔。



「……そこまでして聞かれたくない隠し事なのですか」

「……」

「ですが、約束は守ってもらいます」

「分かつている。さあ続きだ」

縁壺が再度斬りかかってくる。手の甲を狙った一撃を巖勝は日輪刀から手を離すことで回避し、無手による拳の乱打と蹴りで縁壺を吹き飛ばした。

「……兄上、もろに私が食らっていれば私の腹に兄上の手が貫通していましたよ」

「お前なら避けれると思ったからな、それにお前の斬撃も、避けなければ私の手首は体と泣き別れだ」

「……長引けば朝になります……故に終いとしましょう」

縁壺は刀を鞘に収める。困惑する巖勝を置いて縁壺は“溜め”を作る。あらゆる点において力を溜めなくても最高の力を振るう縁壺が溜めることの驚異性。

「っ！」

鞘滑りからの――

円舞、碧羅の天、烈日紅鏡、灼骨炎陽、陽華突、日暈の龍・頭舞い、斜陽轉身、飛輪

陽炎、輝輝恩光、火車、幻日虹、炎舞。

——総数……十九連撃が一呼吸でほぼ同時に迫り来る

(これが本当の拾参ノ型……！ 繋ぐ速度をひたすらに早めたら型と型の時間差は減っていくが、拾弍ある型がほぼ同時に放たれるとは！)

巖勝はあつさりと刀を弾かれて無様に腰から倒れ、縁壺がその首に日輪刀を突きつける。

「見事。お前がこの国で一番強い侍だ」

——勝負あり

(おまけ)

「……縁壺、お前の勝ちだな」

「はこ」

「変なことを言うようだが……この体勢のまま……命をなんだと思っている」と言ってみてくれ」

「……？」

「いいから……威圧するように」

「人の命をなんだと思っている？」

「……鬼の始祖の気持ちがよくわかった気がするぞ」

「……兄上、一体どうされた？」

★

巖勝は深呼吸をする。

この事実を今の縁壺に伝えることが原作にどれほど影響するのかわからないが、今までして慕ってくれている弟に対して、事実を調弄するのは人として間違っていると思うのだ。巖勝も毒されているのだろう。

縁壺は真剣にこちらを向きながら巖勝の言葉を待っている。

「縁壺、私は鬼になる所存だ」

「……は」

「嘘や妄言ではない」

「な……………で！ 兄上が!?!」

縁壺が驚きのあまり立ち上がる。

巖勝は「とりあえず、座れ」と縁壺を宥める。言われるがままに座る縁壺だが心の内は困惑と驚きで埋め尽くされていた。目は見開かれて、虚空を見つめている。かなり重症のようだ。当たり前前の反応である。尊敬し、敬愛する人物が突然人を喰らう化け物になると言い出せば誰でさえも混乱するだろう。嘘と断定するかもしれない。しかし聞こえてくる声色に嘘の香りは含まれていなかった。

「鬼の始祖とも話した。そして薫も鬼にする……………本人も承知している」

最早縁壺は空いた口が塞がらなかった。頭が真っ白になっている縁壺は話の流れに

置いていかれそうである。ここで巖勝を斬り伏せるといふ発想が出てこない当たり、ブラコンは健在のようであるが。

少し待つて縁壺を落ち着かせてから巖勝は話し始める。

「その視覚を持つお前なら薄々気づいているのだろう……自分の体が二十五を過ぎても……痣の代償を払わなくても良く、八十程まで生きていられることに……」

「……ええ、恐らくそうだろうとは思っています……」

しかし！ それは兄上も同じ事では!?! 私と同じ、もしくはそれ以上の視覚を持ちそこまで鍛えられた肉体であるならばっ！ 私のように数十年先まで生きていられる筈！ 故に鬼になつてまで寿命を伸ばす必要はっ……」

——縁壹、薫は痣を発現しているのだ……

「……………」

縁壹はつい巖勝の方に顔を向けてしまう。

月を見上げる巖勝の瞳は子供のような羨望と歪み切った絶望が混在していた。その混沌とした中に『継国巖勝』という人格は形成されている。

これが薫以外に見せた巖勝の素であった。その希望は薫の存在そのものであり、彼の心の人につなぎ止める役割を果たしていた。

(これが……兄上の本質……)

「私は……置いていかれたく……ないのだ……お前にはうたがおり、うたにもお前がいる。五十年以上先もな……たとえ我らが鬼を殺し尽くして真つ暗な夜が終わったとしても……私は……」

薫のいない夜明けなど……見る価値を欠片も感じられない……!」

(兄上はなんでも出来るし、悩みなどないほど満ち足りていると思っていたが……そう思っていた自分が恥ずかしくて堪らない……兄上だって等身大の人間だ。しかもその生きる目的はただ、想い人と添い遂げたいだけなのだ……その思いだけはどこまでも純粹で美しく……そしてどこまでも人間らしい。鬼になるとは思えない)

「お前たちは子を成し御館様の保護の元、後継を育成しながら余生を過ごすのだろう……もし鬼殺隊を辞めたとしても、私に残された時間は恐らく五年もない……このまま私が柱を引退して自由になった時、薫は既に他界している」

「それは……」

「そうやって……生きた屍を晒すのは御免だ」

それは紛れもない本心。

月が影になって縁壺は巖勝の顔が分からない。しかし縁壺の五感全てが耐え難い悲しみを巖勝から感じ取っていた。

「兄上は……人を喰らうおつもりですか……?」

「鬼が人を喰らうのは仕方ないことだろうが……抗ってみせる。人の肉ではなく血ならば半永久的に人を殺めず、口にできるはずだ」

「……」

（兄上は、本気だ。本気で想い人と添い遂げるために鬼になると言っておられるのだ……その覚悟は決して生半可なものでは無い。

止めるべきなのだろう。それが紛れもない正解なのだろう。兄上が鬼になってしまわれたらどれほど強くなられるかは想像に難くない）

縁壺は立ち上がる。巖勝からすると何か吹っ切れた様子である。

その感情を写していない澄み切った空のような目は優しい心を孕んでおり、世界の美しさに輝かんばかりの青陵を湛えている。

「何が正しいかなど、この際はいつでも良いでしょう」

「……」

「鬼になる意志のある者は鬼同様に処罰の対象です。そして見逃した者すら同罪です」



縁壺は抜刀し、その刃を月に翳した。刀はただ静かに月光を返している。縁壺が抜刀したのを見て巖勝は身構えるが、彼はそのまま刀を収めた。

「これで私と兄上は共犯です。もし人を襲うようなことがあれば責任を持つて兄上と薫さんの首を斬り、私も腹を斬ります。ですから私に兄弟殺しと自刃をさせないでください。」

ああ、私の血くらいならいくらでも差し上げますので鬼になつても気軽に私とうたを尋ねてください。うたも二つ返事で了承するでしょう。あれはそういう女です」

「——っ」

少年期、縁壺が原作で持つていなかったものを巖勝は満遍なく与えた。覇気も闘気も感情もない……人形のような子供に、自尊心を培わせ、対抗心を育ませ、世界の美しさを教え、その全てに家族愛を込めた。

皮肉なことにその行いによつて縁壺は巖勝を……最強の鬼を……見逃した。全ての鬼狩りが縁壺の選択を否と断じるだろう。

しかし正解はない。

巖勝が居なければ縁壺はうたを失い、心が伽藍堂のまま生きていたかもしれなかつ

た。巖勝は怨嗟と嫉妬の中、生きる目的を見失つていたかもしれない。巖勝が縁壺を救つたように、縁壺も巖勝を救つて見せた。縁壺は微笑む。それは変わらぬ親愛の証。

相も変わらず不気味な微笑みだな、と場違いな感想を巖勝は抱いた。

「私は鬼程永くは生きられません。兄上と同じ時間は過ごせないでしょう……故に全霊を以て兄上を人を喰わない鬼にします。いいですね？」

「ふははっ……ああ……ありがとう縁壺」

——お前のような弟を持って、私は幸せ者だ

## 廿肆話 月下の語らい

「縁壺、そういえばお前はうたに夫婦になってくれと告白しないのか？」

「……………そのうち……………」

立ち会いは縁壺の勝利で終わった。巖勝は縁壺に目的を告白した後互いに全力で戦った疲れを癒すために、男同士水入らずで恋愛話に花を咲かせることにした。

縁壺は無表情を貫き通していると思っただが、悩みに悩んでいるのがありありと顔に書いてあった。ここは兄として、原作を知る転生者として背中を押してやらねばと、湧き出す謎の使命感に溢れた巖勝は口を開く。

「鬼殺隊の柱は優秀な子を残すよう直接ではないが言われている。子を成せとは言わずとも結婚ぐらいはしておけば良いのではないか？」

「……………ないですか」

「……………？」

その時の縁壺の顔を巖勝は一生忘れないだろう。無表情が顰められたと思いきや混乱から羞恥一色へと移り変わっていき……

「恥ずかしいでは無いですか！ うたは私を家族と言つてくれますが……それが……それが兄や弟としての意味であつた場合、うたとどう接していけばいいかわからなくなります！ ええ、確かに……道場によく顔を出してくれはしますが、道場の弟子の誰かに思いを寄せていたらその弟子を私怨で破門にしてしまうかもしれない……というか確実にします。うたの両親を抜けば私が一番うたとすごしてきた時間は長いのです。だからこそこの関係も続けて行きたいと思ひながら……もう少し進みたいと思う私は……」

（恋心に気づき出した幼馴染か！）

巖勝は堪らず破顔した。縁壺だつて人である。それも十四歳、現代で言えば中学二年生。故に人並みに女性に対する感情も持ち合わせている。あれほど化け物じみた強さの癖に女一人に告白するとなるとただの青年へと変化する様は巖勝を破顔させるに十分であつた。巖勝は顔を手で押えて笑いを堪えようにも抑えきれない。

「ふっ……はっ！ はっはっ……くっ……」

「兄上!」 笑い事では……それに! うたは純粹で、天真爛漫で、誰にも明るく接するの  
に……! 稀に私にだけ妙にあたふたとしている時があるのです……ああ、兄上。これ  
は他の者よりも特別強く生まれてきたものの運命なのでしょうか」

見ての通り縁壺は至極真面目に、実の兄に自分では理解できないことを相談してい  
る。繰り返す言うが縁壺は至極真面目なのだ。それ故に十四歳にして気付いた身近な  
者への恋心に思い悩むのは仕方ないと言える。それでも巖勝は面白すぎて笑いが止ま  
らなかつた。

(無惨を……鬼の始祖をバラバラに切り刻んで一生消えない傷を残すような劍豪が  
……)

「っ……! くっ……」

「兄上」

「……んんっ……すまない。あー、私から見るとうたは十中八九お前に惚れているぞ  
……だから大丈夫……」

「……十中八九ですか」

「いや確実に惚れている。間違いない。胸を張れ縁壺。私の弟であるお前なら受け入れ  
てもらえると信じているぞ」

原作では無表情からの天然思考で夫婦まで持つていったのだろうか、いまの縁壺は良

くも悪くも感情豊かである。つまり熱しやすく冷めやすい。縁壺は落ち着いたあと、深呼吸をした。

「兄上がそうおっしゃるのなら……何とかうたに……想いを伝えます」

「ああ、応援しているぞ」

巖勝は心の中で拳を高く挙げる。これで縁壺とうたは晴れて結ばれる。原作の惨劇を回避するために、うたの臨月が近づいたら巖勝が決死の覚悟で守ればいい。巖勝はその時ぐらい任務を全て蹴ろうと思っている。

巖勝は岩から腰を上げて徐に立とうとすると、縁壺が裾を掴んでいた。指三本であるがしっかりと掴んでおり、離さないという意味を巖勝は強く感じた。加えて悪寒も感じた。

縁壺は微笑みながら台詞を顔に貼り付けていた。

——兄上の番です



「さて、何から聞きましたようか」

「……縁壺……無理して聞く必要は……」

「兄上と薫さんはいつから互いを想いあっていたのですか？」

縁壺はずいっと体を乗り出し、目を輝かせて問いかける。少し圧倒されながら巖勝は口を開く。

（当分話し込むことになりそうだな）

「……会って数日だ」

「なんと！ そんなに早くからですか」

巖勝は言えない。数日どころか会って一日も経たずして薫の魅力に飲み込まれてきたことに。所謂一目惚れである。言ってしまうえば縁壺はさらに問いかけてくるだろう。それは巖勝にとって……兄としては気恥しかった。

「薫さんの両親も賛成の上で婚約……というか結婚と……」

「ああ、薫の両親が理解してくれて助かった」

「私と大違いですね……因みに婚礼の儀などは……」

「出来るわけなからう……私も炎柱殿も多忙を極めている……そして……最早結婚しているようなものだしな」

薫の両親もそういう鬼殺隊特有の事情も織り込んで巖勝を認めたとはいえない。義父の方は殉死しているが、義母はまだ生きている。義兄の現炎柱は合理的で熱血漢な煉獄家らしい人である。母と息子、二人揃って薫に孫を見せろ、従兄弟を見せろと意味深に催促している。

藪から棒に縁壺は問いをやめない。

「兄上は薫さんと子を成そうとは思いませんか？」

「なにを………今更………私と薫は鬼になるのだぞ。子を残したところで会うこと、況て育てることすら叶わないだろう」

縁壺は核心を突く。巖勝も薫も子孫を残すのかについては暗黙の了解で保留であった。鬼子と言われ殺されるかもしれないし、原作が狂ってくるかもしれない。それに鬼殺隊から迫害を受けて当たり前だ。もし鬼に殺されたら巖勝は心を失う自信があった。薫とはこのことについて話してはいないため分からないが。

「いや、言い訳であったな。縁壺、本音を言えば私は……」



「? ……育てるも何も……兄上達が育てられなかった場合、私が養子として育てれば良いのではありませんか?」

縁壺はまるで当然のここのように言った。巖勝はきよんとする。

「父親が兄弟ならばある程度は似つく筈です。私は三十を超えたら後継を本格的に育てようと思つているので兄上の子であるならば半生を掛けて守りきると誓いましょう。兄上も偶に私に血をもらいに来た時に会えば良いでしょう?」

「……縁壺はいいのか?」

「はい! 兄上と薫さんの子供であれば喜んで!」

縁壺の提案は巖勝の懸念していること全てを解決する天啓のようなものであった。

「……薫と相談する。返事は待ってくれ」

——尚この後、薫は二つ返事で了承した。

「当たり前だが……産むだけ産んであとは全てお前に任せるなどと無責任も甚だしいことなどやらん……育てるのならほぼ私たちのみで育てる……お前は万が一の保険だな!?! しかし兄上、赤子は人間。鬼である兄上なら……その……」

「……別に間違えて喰うなどとそんな間違いは起こさない……中身は鬼であっても目の色以外は寸分違わず人間に似せるつもりだ」

(六つ目が一番の問題だがな、まあ擬態くらいでできるだろう)

「……楽しみだ。是非とも好きな道へ進んで欲しいものだ」

「……鬼殺隊に入隊するといえはどうしますか?」

「全力で止める………とりたいところだが鬼の蔓延る世の中だ。自衛として呼吸を身につけさせるのは確定している……故にそれが理由で鬼殺隊に採用されても文句は言えまい……それでも全力で阻止するがな」

巖勝は未来への妄想へと夢を膨らませる。瞳は生き生きと見開かれ、口元は分かりやすく綻んでいた。

「もし……もしですよ? もし仮に私とうたの子供と兄上と薫さんの子供の性別が違っていたら……許嫁として……」

「ならぬ」

「……即答ですか」

巖勝には巖勝なりの考えがあつた。許嫁等。恐らくこれは現代人ならば誰もが理解できない風習である。

「最近では親の決めた相手と婚姻するのが風習らしいではないか……悪習だ、恥ずべき

習慣だ。私ならば将来を添い遂げる相手くらい子供に選ばせる。子供なぞ親を振り回して、周りに迷惑をかけて、好きなように人生を楽しめばいいのだ」

（自分が欲しいと思つて授かつた子供だ。できる限りの我儘は聞いて当たり前。甘やかすのと優しくするのは分けるがな）

前世で捧げる対象すらいなかつた子供への愛情は底なしであつた。現代における幼児虐待や車内放置による死亡。栄養失調や運動不足による発育不全。ニユースが流れる度にその子供が紡ぐ筈の未来や大人になつて微笑む姿を想像して、胸を痛めていた。巖勝は我が子にそのような経験すらさせまいと思つていた。

「……もし兄上の子供が力を持たない普通の人間を連れて来たらどうしますか？」

「……………私と戦つて」

「はい。兄上、不可能です」

縁壺に一蹴され、渋い顔をするが巖勝に勝てるものなど縁壺が無惨でも引つ張つてこないと無理であろう。

少し時間が流れる。夜の秋風が吹く。平熱四十度を超える二人の体にはそれが沁みるように気持ち良かった。

縁壺が口を開く。

「鬼となつた後でも子供つてできるんですかね」

「……分かんが……太陽を克服したのならあるいは……」

「……え？ それだと日中でも活動できるじゃないですか!？」

「ああ、因みに首を切っても死なない鬼もいるぞ」

「……」

「案ずるな……赫刀で切れれば傷も再生しない……首を切っても動くのなら……より細かく刻めばいい……日中動き、切っても死なないのなら富士の火口にでも投げ入れれば良い」

「それもそうですね」

原作の鬼殺隊がこの会話を聞けば鼻で笑うか、発狂かの二択だろう。赫刀を発現できるのは今のところこの兄弟のみであるし、その状態で岩より固い時もある鬼の躰をバラバラにできるのもこの二人だけであろう。

(彌豆子や炭治郎は……薬で人に返ったから関係ない。鬼の素体となると愈史郎か……珠世一筋だから分かんかったが、無限城での猗窩座も怪しいな……首の弱点を克服した後日光の順だから普通に考えていた日光を克服する方が難しいのだろう。珠世に会ってみなければわからんか)

原作において素の実力で首の弱点を克服した鬼は黒死牟と猗窩座だけであった。無惨は身体中に重要器官を複製することで首の弱点を克服していたが、あれは違う。あれ

はただのゴリ押しである。



「話は変わりますが……兄上はその技術を本当に次の世代に残さないおつもりですか？」

「ああ、とは言つても残さないのでは無い。残せないのだ。縁壺も道場で見たであろう……誰一人として斬撃を飛ばせなかった……」

「鬼となつてからでも遅くはないです。国中探してみれば一人くらいいるのでは？」

「……人喰い鬼に剣を教えてもらいたいものがあるか？」

「……」

「まあ……そういうことだ」

「ですがやはり……儘ならないですね」

少し不満そうな縁壺に巖勝は苦笑する。技術の継承への憂い。本来ならば巖勝が感じていたもの。ならば返す台詞は決まっている。縁壺ならば嫉妬に狂つたりはしないだろう。

巖勝は岩から立ち上がる。

「縁壺、我らはそれ程大層なものでは無い。長い長い歴史のほんの一片。我らの才覚を凌ぐものが今この瞬間にも産声を上げている。彼らがまた同じ場所へとたどり着くだろう」

「——っ」

「浮き立つような気持ちにならないか？　これから産まれてくる子供達が我らを超えて、更なる高みへと……登りつめていくのは」

縁壺は瞠目していた。まるで巖勝らしからぬ言動。誰かが憑依したような雰囲気。刀に片手を乗せて月下に佇む様は紛うことなき武人。けれど少し。ほんの少しなにかが混ざったような。

「……兄上、いつもより微笑みが不気味さを増しております」

「……む……微笑みに関しては縁壺の方が不気味だと思うが」

「……」

「……」

両者押し黙る。互いが互いの微笑みを不気味と思つて、今さらながら知り、揃つてシヨックを受けていた。先程の感動的（？）な雰囲気はどこかへ去つていったようだ。

「……帰るか」  
「そうですね」



## 廿伍話 四年後

「巖勝君！ 紫明を見なかった!? 起きたら隣にいない……………」

「薫、紫明ならここにいます」

「よ、良かったあ……………」

「とーさま、もっかい」

薫はがつくりと安堵のために座り込んだ。特筆すべき点などない。本当に何気ない日常の一コマである。



早朝。妻より早く起きた巖勝は家の庭で朝稽古をしていた所を偶然起きて来た紫明の目に止まってしまい、興味津々の紫明を観客に月の型を披露していた。紫明は漆黒の艶やかな髪を持ち、煉獄家特有の朱がまじった瞳をしている。

所謂、黒髪赤目であった。

（子供は成長が早いな……………まだ二歳だぞ）

## ——縁壺との戦いから四年後

巖勝は十七、薫は二十歳となっていた。

鬼殺隊では柱達の殉死により房綱が風柱、愛染が鳴柱、正助は水柱へと昇格。今のところ痣の発現はないようである。これで完全に始まりの呼吸の世代へと世代交代は完了した。

縁壺達と言えば、うたが妊娠した。その際に巖勝は文字通り付きつきりで守護した。縁壺が数時間家を開ける時ですら、うたの隣室に刀を装備して座り込んでいる程であった。薫も同じ女同士、身籠って自由の効かないうたの支えとして、働いた。

巖勝曰く、「万が一があってはならぬ」との事。縁壺の家は藤の花に囲まれた鬼殺隊が常駐する町の中の中心であるが、万が一原作の修正力が働き、母子共々殺されてしまわないように守りきった。その後、うたは兄弟を出産した。

一方、それから少しして薫は女兒を授かった。

四年前の縁壺との語らいの後、自分たちが子を残し、万が一両親が鬼とバレて、身を隠すことになったりした時は、柱である縁壺が権力を使って援助してくれることを薫に報告した。薫は涙が溢れるほど喜んだ。

縁壺は二人から半ば強引に名付け親に任命され、うたと二人で考えたという名前を産

まれてくる巖勝と薫の子供に与えた。

——名は、『紫明（しあ）』

巖勝の日輪刀の色、高貴を示す色、魔除けの意味を持つ藤の花の色から『紫』、薫の暁の呼吸から明時の『明』。

薫が妊娠したと透き通る世界で確認した時、巖勝は柄にもなく滂沱の涙を流して喜び、薫もそんな巖勝を抱きしめて涙を流した。それからというもの二人は任務先のかなり大きな村の領主を鬼から助けた恩を逆手にその村に居座った。巖勝は任務どころか挙句の果てに柱合会議も蹴つて付きつきりで村の老婆達と共に甲斐甲斐しく世話をした。

結果、生まれた女兒に『紫明』と名付け、二人は二年間幸せな生活を送っている。巖勝にとって満ち足りた理想がそのまま実現したような日々であった。

紫明は巖勝の裾を掴みながら言った。

「とーさま、おねがい。もっかい」

「分かったが……これが終わったら朝ご飯にするぞ」

「うん」

そういうと巖勝は大地を草履で踏みしめ、一から拾陸の型までを順番に披露している。手首の角度の違い、足の運び方、呼吸の間隔。無駄を削ぎ落とした人の身を越える体術の極地。

(とーさま……かつこいいかつこいいかつこいいかつこいいかつこいいかつこいい！)

日の呼吸を使うものはその姿形が精霊に見えるという。月の呼吸はそれと似て非なるもの、巖勝の舞う姿は荒々しい力の威容を見るものに連想させた。

巖勝は九歳で呼吸を学び、成長期に極めることで縁壺のような強さを実現した。今、紫明は二歳。尚且つ呼吸を教えているのは天才ではなく秀才。天才が道を駆け抜けていくのに対して、ゆっくりとしかし頭で理解しながら道を進んだ者。事教えるのに関しては縁壺より数段上である。

(とはいえまだ幼子。刀を握るのはまだまだ先の話。欲を言えば一生握ることの無い人生を送ってほしいが……戦国の世でこの考えは甘すぎるな。せめていざと言う時に暴力によって侵害されないよう最低限の力をつけてもらおう)

「ふう……よし、父様達は朝ごはんを作るから紫明は少し待つてなさい」

「しあもする」

「二歳の紫明にはまだ早いから……いや、そうだな……体力増強だ。家の周りを三周してきたかい」

「うん！ しあ、しようちした！」

紫明は父の言うとうりに家の外周を走り始める。元より体を動かすのが好き……と  
いうかこの年齢の子供は体力増強だとか訓練とが最もらしいことを言うと目を輝かせ  
ながら嬉々としてやろうとする。

紫明は二歳児。なのに屋敷と言っても差し支えない程の大きさを誇るこの家の周り  
を走っているのはもはや二歳児の体力でない。

ただ、父親は遠くの山から藤の大木を引っこ抜き、それを数本担いで来て家の周りに  
植えるといったことを当たり前のようにやってのけ、母親は熊や猪を素手で殴り殺し、  
申し訳程度の包丁で血抜き・解体をする等周りが異次元すぎるために霞んでいた。

巖勝が台所に着くと薫が割烹着を着て料理に勤しんでいた。巖勝にとつて見慣れた  
光景であるが何度見ても妻が料理する風景を眺めるのは男として感慨深いものがあつ  
た。

「薫。何か手伝えることはあるか？」

「あつ巖勝君！ 紫明は？」

「外周を走っている」

「いつも通りね、わかった。それじゃあ串焼でも作ってくれない？ 最近紫明が沢山食  
べるようになったから量そのものを増やしたいんだ」

「串焼か……任せろ」

薫は既に鬼殺隊を辞める旨を伝え、これから一度里に戻って兄に子供の顔を見せたあと、最後の任務で死亡する手筈になっている。

巖勝もそうしたいのは山々だが、上弦の壺として君臨する以上どの道顔バレは免れなため死を偽装する必要はない。紫明は一時的に縁壺の家で過ごして、すぐに回収する手筈になっている。

二人台所に並んでいると、格子窓に一羽の鎧鴉が止まった。首には日輪の首飾りを掛けている。

「主の兄上よ」

「む、その声は……朝日か」

「はい。炭吉様の家までの道のりが書かれた地図を持って来た」

「ああ、助かる」

朝日は縁壺の鎧鴉である。生涯の忠誠を縁壺に誓っており、縁壺以外には基本的に敬語を使わず無愛想だが、兄である巖勝については敬語こそ使わないものの縁壺と同じように接していた。

朝日が炭吉の家の地図を取り出そうとしている時、一羽の鎧鴉が巖勝の肩に止まる。遅れてもう一匹、薫の肩に止まった。

「八咫と……天外か」

「如何にも。巖勝殿、御館様より受けた命を伝えに参った」

「アタシが来たわよー！　んで、アタシからは伝言よ！　同期である柱の皆と兄様からね」

「……………手短に話せ。紫明が戻ってくるまえにな……まずは八咫から頼む」

巖勝はまだ鬼殺隊の存在を紫明に知らせたくなかった。

「承知。『月柱は武蔵国へ赴き、周辺の山に潜む鬼を退治せよ』との事だ」

「あれ、私は？」

「それがアタシからの報告の肝になるわね……要約すると……」

『岩・水・風・雷の柱より……』

鬼殺隊辞めるって聞いたけど、最後の任務おわったらもう里でゆっくりしたら？

薫の兄様より……

煉獄家当主として命じる、帰ってこい薫。余生を里で過ごせ。お前は十分鬼殺隊として活躍した』

だ、そうよ巖勝君。八咫から聞いたけど任務の場所は珍しく彼岸花がとても綺麗なところらしいわ、薫も着いてく？

「私は……一度里に戻ろうかな」

薫はそこで天外に里に帰る意思があると説明する。天外は『あら、珍しいわね』と言って薫の伝言を里に伝えるべく飛び立って行った。

巖勝は八咫の報告に次の目的地と炭吉の家、どちらを優先するか思案する。

「あ、そのちかくだ。主の兄よ」

「ん？」

「炭吉様の家は武蔵国の近くに位置している。天外様の言ってた通り、彼岸花が美しいところだ。場所的に一日で両方向かえる距離だな」

「わかった。今日発つぞ。紫明は薫と共に里に、私は武蔵国へ行く」

「ああ、それと主が近い夜に会いたいと言っていたぞ。息子である兄弟にも会って欲しいぞうだ」

「承知した」



「計画を確認するぞ」



「うん」

場所は変わって家の玄関。朝ご飯を食べた後、親戚に逢いに行くという理由で巖勝達は旅支度をしていた。紫明は旅の途中で退屈しないように、家の奥で巖勝の作った玩具を厳選している。巖勝は手先が器用な為、前世の知識から作った様々な玩具を紫明に与えていた。

巖選に夢中な紫明なら聞かれることは無いだろう。

巖勝は計画を薫に説明する。これが成功しなければ後腐れなく鬼にはなれない。鬼殺隊を上手く脱退し、尚且つ紫明を匿わなければならぬのだ。そうすればまた幸せな生活が待っている。

「まずは別行動だ。」

私は炭吉の家に行き、血を貰いに行く。薫と紫明は、薫が次の任務で殉死したという情報に信憑性を持たせるために里へ行き、里に到着した縁壺に紫明を預ける」

原作お墨付きである竈門家の血。無惨よりも鬼への適合力が強いその血は始祖の支配を克服するためには必須条件の一つになるだろう。

まず巖勝がそれを貰いに行く。原作では縁壺の妻・うたが斬殺された時に残った家そのまま竈門家の家になっていたが、この時空でも同じような場所に家を作り生活している。縁壺と何回か尋ねたことがあるため、地図をみれば余り難易度は高くない。

血についても、握手の際などに神経の間を通して剃刀の刃で薄く傷つけて採取すればいい話である。

薫の場合は……

「私は里から任務に行つて殉死に見せ掛ける。その後縁壺君の家に紫明を迎えに行く。その間に巖勝君は鬼になる。巖勝君は炭吉の血を飲んだりとか何とかして始祖の支配を克服した後、この家で集合。うん、分かった」

薫は頷く。巖勝はその頬へと手を伸ばし、顔を近づけて口付けをする。大丈夫だ、全て上手くいくという意味を込めて。鬼になればと勧誘されているのは巖勝だけなので、薫は寿命が来るまでに鬼になれさえすればいい。まずは巖勝が鬼になるのだ。

「紫明は鬼になった私達をどう思うかな」

「まずは鬼だとバレないようにする。そのためのこの目だ」

巖勝は自分の目を指さす。そこには少し朱が混じっていた。もちろん透き通る世界による目の活性化である。原作では花の呼吸の集大成として使われた技術であるが、透き通る世界を持つ巖勝にとつては血流操作など造作もなかった。そのかいもあつて紫明は赤い目が元来の父親の目であると信じきっていた。これで鬼になつても多少はごまかせぬ。

「頑張つてね。私も遅れてだけど鬼になるから」

「ああ、俺が鬼になって始祖の支配を免れれば薫に渡す血も支配を受けないだろうからな」

巖勝が人であることが出来るのはもう数日。そう思うと最後の朝日は絶対に見逃すまいとした。

紫明がありつただけの玩具をもつて玄関に着いた。何がなんでもこれらは離さないという表情を浮かべている。どの道巖勝が前世の知識から作った大容量旅行鞆的なものがあるので物の数ではない。

「それでは炭吉の家に行ってくる。紫明、母様の言うことをしつかり聞くんだぞ」

紫明はこの世の終わりみたいな顔をして絶望を漂わせた。背中に背負われている可愛らしいリュックサックが単調な音を立ててずり落ちる。

「え……………とーさまは…………？ しあとかーさまといっしょに…………こないの？」

そんな紫明に二人は苦笑する。巖勝は笑みを浮かべ、しゃがみ込んで紫明の頭を撫でた。

「父様はちよつと行く所があるんだ。ごめんな、少しの辛抱だ。耐えてくれ」

「やだ！ しあ、とーさまとずつといっしょがいい！」

紫明は誰に似たのかいつでも巖勝と共に里に行きたいと駄々をこねる。頭に置かれている巖勝の手を両手で自分の頬へと持っていき、ありつたけの力を込めて握りしめ

る。紫明は太陽みたいに暖かい父の手が大好きであった。親離れなんて二歳児なのだから仕方ない。それを見た薫も微笑みながら巖勝の隣に座り込む。

「あら、じゃあ母様のことは嫌い？」

「ううん！　すごくだいすき！　でもとーさまも……みんないつしよじやなきややだ！」

「……じゃあそんな優しい子にはこれを渡そう」

巖勝は懐から一本の笛を取り出す。竹を材料にして、本体には幾つか穴が空いており、藤の花の装飾がなされている。縁壺のみならず自分の子供にも御守りとして笛を与えられるのは嬉しかった。

「お守りだ。きつと紫明を守ってくれる」

「…………とーさまのほうがいい」

「大丈夫。それを思いつきり吹いたら何処にいても父様が駆けつけると約束する。だからいざと言う時にありつたけの力を込めて吹くんだ」

「……ほんとに？」

「ああ、その笛があればいつでも会える。安心しておじさんに会ってきなさい」

「……うん、わかった。ぜーったいきてね、やくそくだよ」

「ああ、約束だ」

紫明はそういうと家の中に戻り持つてきた玩具を玄関に置いて来た。曰く、この笛があれば何もいらぬらしい。貰ったばかりというのにとても大事そうに抱き抱えている。

「あの笛つて巖勝君の手作り？」

「? ……そうだが薫にも作ろうか？」

「いらぬ。だつて私には本物があるもの」

「……ふははつ。それでは……な」

巖勝は再び薫と口付けを交わす。四年間で更に磨きのかかつた美貌は男であれば誰でも振り返り、そして息を飲むだろう。艶やかな髪も白磁のような肌も血色のいい唇も、歳を重ねて大人の妖艶さが増しており、この世でただ一人だけに向けられる彼女の蕩けた表情は絶世のものであつた。

因みに今前述したものと同じような、容姿に対する感想を薫も巖勝に抱いている。二人は典型的なおしどり夫婦であつた。

互いに名残惜しそうに唇を離す。

「紫明は任せて」

「ああ、頼んだぞ」

## 廿陸話 竈門家

「…………… 巖勝さん!!」

巖勝は任務の前に炭吉の家へと赴いた。

炭吉の家は、先の見えないほど鬱蒼とした森林を抜けた先にある一軒家。山奥ということもあり、小鳥が鳴いて、獣の息遣ですら聞こえてきそうなほど自然豊かな所である。しかし、巖勝が戸を開けようとしたところ、中に居た誰かの手で戸が勢いよく開かれた。

現れたのは竈門家の大黒柱、炭吉である。

「炭吉、久し……………どうした。何があつた」

巖勝の目からして炭吉は明らかに普通では無い。息は絶え絶えで酷く焦っているのがわかる。

「すやこがつ! ……すやこが!」

「落ち着け……………ゆつくり話せ……………私に何をして欲しいか言え……………」

「すやこが……………産気づいたんです!!」

「産婆は?」

「山の麓の人里です！」

「私が呼びに行く……暫し待っている……すやこについていてやれ」

「はいっ！」

☆

巖勝は人里へと降りて、産婆を探した。勘によって一発で産婆の住む家を当て、戸を開ける。中には老婆と若い男がいた。二人ともぎよつとした顔で固まっている。無理もない。戸を開けたら身長190の男が刀を携えているのだ。この時代の平均身長はかなり低い。継国兄弟と同じくらい背が高い人間はそうそういない。

「なんと、お侍様がいらつしやるとは！ 一体どうなされましたか」

「一大事だ。竈門の妻が産気付いた」

老婆は顔色を変えた。

「まあ大変！ 急いで向かわねば！」

「婆ちゃん、無理だよ！ 竈門の一家はこの里よりもつと山奥に住んでるんだ。行きだけでも婆ちゃんの足じや日が暮れちまうよ！」

今にも出ていこうとする産婆を息子らしき人物が止める。正しい行いだ。険しい道のりを母に歩かせたくないらしい。親思いの少年である。

「兎や角言っている暇などない……お前の母を借りてゆくぞ……数刻で戻ると約束しよ

う」

しかし巖勝は家に押し入り、産婆を抱き抱える。息子が何やら叫んでいるが、四の五の言っている状況ではない。巖勝の人生が掛かっているのだ。もし竈門家の血が途絶えた場合、自分にどんな結末が待っているのか想像できない。出来なくなるからこそ怖い。

「言っておくが……叫ぶな……舌を噛みたくはないだろう」

「は」

「婆ちゃああああん?!?!?!?!」

是認の意志を確認した瞬間、巖勝は烈風の如く走り出す。息子が騒いでいるが竈門家存続の危機だ、かまってはられない。

一歩で家を出て、二歩で踏み込みながら髪をたなびかせて走り出す。急加速すると産婆が吐いてしまうのでゆっくりと加速する。

「?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

老婆は景色が飛ぶようにすぎているのに自分の体にそれほど負担はかかっていないことが不思議であった。



それもそのはず。巖勝は一挙一動に気を配り、振動すら感じさせない歩法で走っている。山道を無視して一直線に炭吉の家に向かうため道無き道を進んでいるが、木を足場に、枝をくぐり抜け、ほぼ垂直の崖を駆け上がる時も速度は落とさないが、産婆に負担もかけない。そうしているうちに竈門家へと到着する。息切れひとつしていない。対して産婆は顔が青白くなっていた。肉体的な負担は減ったものの、精神的な負担は逆に増していた。

「巖勝さん！」

風と木の葉を纏いながら森から飛び出してきた巖勝を見つけた炭吉が駆け寄ってくる。産婆の血の気は失われているが、気は失っていないかった。

「……産婆を連れてきた」

「……ふう……はあ……よし！ さっさと見せな、炭吉い！」

「はいっ！ こちらです。巖勝さん……本当にありがとうございます！」

「礼はいい……兎に角……お前はすやかに付いていてやれ」

巖勝は手を振って、炭吉にすやこの傍にいるよう催促する。炭吉は何度も頭を下げながら家の中へと消えていった。程なくしてすやこのくもぐった声が家の中から聞こえてきた。

（炭吉の子供……ああ、すみれという名前だったか）

二人の子供と言えば、原作で縁壹が抱き上げた子供がいたと巖勝は思い出す。ここにいなくてもすやこの声が聞こえてきた。なんだか申し訳なく思った巖勝は、罪悪感に駆られて猪でも狩つて来ることにした。



血抜きした猪を担いで家に戻ると、程なくして産声が聞こえて来た。どうやら出産に成功したらしい。かと言って巖勝がやることはない。餅は餅屋。出産は産婆である。

「……ついでに皮も剥いでおくか」

一通り処理をした後、巖勝は日光浴ついでに縁側に座っていた。すると、人の近づくと共に戸が開き産婆が顔を出した。

「終わったよ、お侍さん。元気な女の子さ。さあ……とつとと儂を家に返しとくれ。碎が心配しとるんだわ」

「承知した……突然誘拐してすまなかつたな」

「誘拐した自覚はあったのかい。っていうか全然済まないと思つてなさそうな声色だ

ね。まあお待さんがあんなに早く連れてきてくれたから母子ともに支障はないね。そこは感謝してるよ」

「……」

「……何とかいったらどつつ?」

巖勝は心做しかムスツとした顔で産婆を抱き上げる。私怨など入っていない。断じて入っていない。だから勢いよく抱き上げようが巖勝は悪くないのだ。何せ私怨は入っていないから。

二人して騒いでいる（主に老婆）と、家の中から炭吉とすやこの嬉し泣きが聞こえてきた。巖勝と産婆に抱えられている産婆は顔を見合わせる。

「邪魔者はお暇するよ……ほれ今度は道を歩きな」

「……善処する」

巖勝は早く炭吉の子供の顔が見たかった。故に産婆をさっさと行きと同じく最短距離で届けようとしていたのが、案の定、巖勝は頭を引っぱたかれた。



結局、整備された山道をゆっくりと走って産婆を届けた。

途中、心配から重装備で山を登っていた息子も担ぎ、親子二人に小言を言われながらも家へと返した。精神的に疲れつつ炭吉の家へと戻ってくる。すると家の縁側で炭吉が座っていた。障子は風通しを良くするために開かれており、奥の部屋からは赤子を抱き抱えながらすやこが布団から上体を起こして座っている。

炭吉は巖勝を見つけると嬉しそうに手を振って招いてくれた。その健気さに少し心が安らいだ。そして巖勝は流れるように縁側に座らせられる。

「巖勝さん……本当に……なんてお礼を言ったらいいか」

「礼など不要だ」

「いやしかし、あと、それでですね……その」

巖勝の目には炭吉がどこか緊張しているように見えた。炭吉が意を決したように巖勝の両手を取って口を開く。

「あの子の名付け親になってください！」

(……は)

産婆を届けたあと、感謝の言葉が来ると思っていた巖勝は斜め上の展開に困惑する。彼の目が少し見開かれる。目は口ほどに物を言う。巖勝の目はなぜ自分なのだ、自分より遥かに相応しい者がいるだろう。と、訴えていた。

「……………私は縁壺では無いぞ。」

「俺は知っています。貴方は俺達がこの山に住んでいると知り、帰り際に藤の花の木を植えてくださったでしょう……！ たった今も俺たちの為に産婆を連れてきてくださいました！ 他人の為ならばいくら労力が掛かろうと協力を惜しまない。そんな貴方だからこそこの子の名付け親になっていただきたいのです！」

もちろん藤の花を植えたのは打算まみれである。

(炭吉の家に立ち寄ったのは縁壺の情報からであった。初めはこんな山奥に人が住んでいるのかと思ったが、あばら家から出てきた人影を見た瞬間身体中に電撃が走ったのをよく覚えている)

彼らは鬼滅の刃の主人公・竈門炭治郎の先祖。良くも悪くも巖勝は物語の流れを壊して続けている。

そのため今の縁壺は、もしかた彼らが鬼に襲われている時に運良くここを立ち寄るとは思えない。藤の花の木を植えたのは何年か後に鬼に襲われた時の保険。竈門家が全

滅してしまうと四百年後に主人公が生まれなからだ。

「私は……そう大したものでは無い……木を植えたのも……なんでもないただの気まぐれだ……お前たちのためを思つてでは無いのだ」

「俺には分かります！ 貴方は心の底から人にやさしくできる人だ」

「人より強く生を受けたのなら……それは必然のこと……」

「だからこそです！ そんな貴方だからこそ俺は……貴方にこそ！ あの可愛い娘の名付け親になつていただきたい！」

身振り手振りで自分の娘がどれだけ可愛いか、巖勝はすごい人だから名付け親になつて欲しいなどと示す。その様子はまるで誰かに似ていた。

「……ふっ」

声も背丈も違うが、炭吉の雰囲気はどこからどう見ても完全に炭治郎であつた。純白な精神はこれから四百年先でも受け継がれていくのだろう。

「まあ……いいだろう」

「！……本当ですか!？」

「ああ……産まれたばかりの、神聖な赤子の名付けをこれ以上断るのも……無作法というもの」

そう言つて、巖勝は考え始める。原作では淡い瞳の活発な女の子であつた。当たり障

りのない名前、長寿を願う名前、壮健な子に育つて欲しいの言う願いを込めた名前、未  
来が明るくなる名前。

それでもやはり……

「……………すみれだ」

「すみれ……」

「……………すみれの花言葉は『小さな幸せ』『誠実』『謙虚』。自分なりの幸せを掴んで……まっ  
すぐと……親のように曇りなき心を持ちそして……あの子の笑みが誰かの救いに  
なってくれるよう……願いを込めた」

巖勝は結局原作と同じ名前にする。名付けた人物は定かではないが、承ったのなら悩  
みに悩んでしつかりと意味も込めて『すみれ』と名付けたのであった。

「つ……巖勝さん……本当に……ほんとうに……ありがとう……ごさいます……ほんと  
……今日は泣いてばかりです」

「ありがとうねえ巖勝さん。炭さん、私のお腹がおつきくなってきたときから、巖勝さん  
に名付け親になってもらうんだとそれはもう鼻息を荒くして、ふん！ ふん！ つて意  
気込んでたからねえ」

炭吉の目に涙が溢れ続ける。巖勝はそんな炭吉の背中をさする。すやこはすみれを抱きながら縁側の部屋の奥より微笑ましそうに見つめていた。

「そう泣くな……ほら……お前の背中を妻と娘がみておるぞ……もうお前は立派な父親なのだ……胸を張れ炭吉」

「はい……」

巖勝は心がじんわりと暖かくなるのを感じた。真つ直ぐで素直に感動のできる家族がそこにはあったからだ。

「巖勝さん」

後ろから声がかかる。

「炭さんのお願いを聞いてくれたから、次は私ねえ」

「……いや……そう言うわけでは」

「私、巖勝さんの月の呼吸がみたいなあ」

（夫婦揃って話聞かないな……）

「私の……呼吸をか？」

巖勝はまた動揺した。

まだ『日の呼吸を見せてください！ 同じ鬼殺隊で兄弟ならできますよね？』とか言われたのなら分かる。因みに彼は日の呼吸を既に体の相性抜きにして舞えるように



なっている。あまり好きではないが。

すやこは出産したばかりだと言うのに芯のこもった声で恩人へと語りかける。

「縁壺さんの日の呼吸はねえ……精霊のようでねえ……胸がどんどんって高鳴るの……でも巖勝さんの月の呼吸はねえ……なんだか心が安らぐの。子守唄みたいに。」

だから今は巖勝さんの舞いを見たいんだあ……」

巖勝の月の呼吸は見るものを恐怖させる程荒々しく、無駄が削ぎ落とされている……と本人は思っているが、そんな激しい型をなぜかすやこは望んでいた。

「すやこ、お願いだから無理をしてないでくれ……すやこは今子供を産んだばかりだから寝ておかないと……」

「えー、いいでしょ炭さん。あの綺麗な舞いをすみれにも見せてあげた……」

「わかった……わかったからもう喋るな……出産直後の身なら……少しは安静にしている」

「ふふっ……炭さんと同じこと言うてる……それではお願いします」

「……任された」

「ああっ!? ……本当にありがとうございます巖勝さん」

炭吉は眉を下げて申し訳なさそうにしている。なんだかんだ彼も巖勝の月の呼吸が見たい。炭吉はすやこが少しでも見やすいように布団ごと引っ張って縁側に寄せる。

布団ごと移動している時、すやこはなんだか楽しそうだった。

そうしている間に巖勝は庭へと歩みを進める。

長い髪と高い身長を持つ巖勝の後ろ姿は炭吉達にとっても勇ましく映った。

「上体を起こす必要は無い……子供を産んで疲れているのだろう……気にしないから楽な姿勢で見てください」と嬉しい」

「はい。本当にありがとうございます……」

「……構わん」

—— 空気が変わる

巖勝が刀を握った瞬間——意気揚々と囁っていた小鳥達が鳴きやみ、栗鼠が巣穴に籠り、静観を決め込んでいた猪や、熊が逃げ出した。

巖勝の周りだけが静寂に包まれており社のさらに奥、神域のような雰囲気醸し出す。

巖勝は舞い始める。

一呼吸、一振り、一步、一回転。微細で些細で緻密な動きでさえ叩いて、磨いて、研いで、重ねて、極めた、剣技の極地。

月輪は敵への最期の光景としてではなく、三大家族の健やかな生活を願ってその身に纏われる。

荒々しき月は過去のもの。あれは巖勝が縁壺に——天才に——太陽に手を伸ばすために荒削りで叩き上げた、云わば不完全な型。

縁壺より強くなることよりも別の生きる意味を見つけた彼は、今まで即席でなんとか叩き上げてきた型を極めきるくらい心の余裕と時間ができた。

月の呼吸はそうやってさらに昇華されていた。

(縁壺の日の呼吸がヒノカミ神楽なら……ツクヨミ神楽とでも言ったところか)

集中している中、少し思考が逸れる。新たな命の誕生を祝い舞うのは、そう遠くない未来鬼になる化け物。その皮肉に、巖勝は苦笑する。

「今の俺は……房綱に、暢寿郎に、正助に、琴音に、愛染にどう映るのだろうか」

この四年間、何回か任務を共にした風柱、炎柱、水柱、岩柱、鳴柱。

彼らに痣が出るのも時間の問題だろう。技量的にいつ発現してもおかしくはないのだ。彼らは始まりの呼吸世代の剣士。呼吸と共に育ってきた。大体の鬼は体温を上げずとも討伐可能なのだ。

「だからこそ……私が鬼となっても、斬りかかるのだろうか……躊躇なく」  
(少しくらいは躊躇って欲しいと思うのは……贅沢な願いか)

巖勝は甘い考えを切り捨てる。

だが彼は知らない。柱の中で月柱の存在は良くも悪くも大きすぎることに。

## 甘漆話 ひとたびの別れと凶報

炭吉とすやこは魅了されていた。

威風堂々たる迫力に飲まれ、八面玲瓏の動きに瞠目し、軌跡すら見える秋霜三振の太刀筋は息が詰まるほど流麗で美しい。

日も昇りきって、既に真昼間だと言うのに竈門家の周囲だけは夜の帳が降りたように静かである。中心にいる巖勝はまるで月読命のように落ち着きを纏っていた。

月は昼であろうと佇む。炭吉達は息を忘れていた。

「……………あ……………す……………い……………」

「……………」

純粹な賞賛の声が聞こえ、巖勝は少し照れくさそうに口角を上げた。

締めを刀を下から上へと昇るように振り上げ、月輪を空へと飛ばす。

一通り舞い終えた。

パチンと軽い音を立てて納刀した瞬間、再び鳥が囀り出し、風が吹き始める。止まっていた時が動き出すようにして、先程までの巖かな雰囲気は嘘のように霧散した。

いつの間にか夕日が山の端に差しており、全員が全員時間を忘れていた。

「さて、世話になったな……私はここで失礼させてもらう」

「ええ!!? そんな……せめて……せめて晩御飯でも食べていきませんか? すやこもほ

ら……」

「……………すう……………」

すやこは眠っていた。巖勝の月の呼吸を子守唄代わりとは豪胆なものである。満足そうにすみれと共に眠っている姿を見て炭吉と巖勝は口角が緩む。言葉を交わさずとも、互いに互いが言わんとすることは分かった。二人して小声で話す。

「貴方は命の恩人だ。貴方がいなければすやこどころか、この子も産まれていなかった。せめて俺になにか貴方の為にさせてください……………」

「……………お前たちを助けられた……………それだけで私は満足だ……………」

「……………わかりました。ならばせめて貴方のことを後世に伝えます」

「気持ちはありませんが……必要ない」

「しかし、後を継ぐ者がいないのでしょうか?」

「……………誰から聞いた」

「縁壺さんです」

（あいつは私の事となると口が特別軽くなるな……………）

「たとえば炭焼きの俺には無理でもいつか才能ある誰かが……」

炭吉がそう言いかけた時、初めて巖勝は炭吉に目線を合わせる。黒曜石のような瞳が炭吉の姿を映す。

「炭吉、道を極めた者が辿り着く場所はいつとも違う……時代が変われば……境遇が変われば……考え方が変わればそこに至るまでの道のりも変わり続ける……当然……辿り着く場所も辿る者の数だけ存在する」

才能だけが全てではないし、道半ばで倒れる人もいるのだ。

巖勝は知っている。

太陽に手を伸ばして燃え堕ちた、至極人間らしい鬼を。

全員が全員縁壺が辿り着いた場所と同じ所に辿り着けるとは限らないのだ。

「なにも道を辿るのは全員では無い……辿らずとも生きていける。」

人の一生は短いのだ……だからお前はお前の道を行け……たかだか私の呼吸を残すために友が時間を浪費することを……私は望まない……この世界は美しい……生まれ落ちることが出来ただけでも幸運なのだ……」

巖勝は自然と自分の口からその台詞がでてきたことに内心、少し驚いた。魂が、人格

の残滓が、散々な前世を過ごしたからこそ声に出た、心の底からの本心。

「それでも私の呼吸を学びたいと言うのなら……まずは縁壺の日の呼吸を学べ……兄でありながら……私の道は……転がる小石から立ち塞がる壁に至るまで全て……縁壺の模倣だからな」

「……………」

そう言つて、巖勝は自嘲気味に笑う。

炭吉は何か言わなければならぬと思つていたが、なぜか声が出なかつた。巖勝の言葉には経験を感じさせる重みがあつたのだ。半端な言葉ではかえつて無礼となる。

（ああ、そんなふうに……そんなふうに言わないで欲しい……どうか……頼むから自分のことをそんなふう……）

「……少し説教臭くなつてしまった……晩御飯に誘つてくれて感謝する……気持ちはとても嬉しいが……待たせている人がいてな……失礼させてもらう」

「……………い……………え」

「ああそうだ……ここに来るのは下手したら最後だな」

（……………え？）



あつさりそう告げると巖勝は縁側から立ち上がり、すごすごと去っていく。唐突すぎて炭吉は呆気にと取られていたが、我に返って巖勝の後を追う。

炭吉は走っていて、巖勝は歩いているのに何故か距離が縮まらない。

少しでも気を抜くと巖勝がどこか遠くへ行ってしまうようで、炭吉は必死に山道を駆ける。



炭吉はなんとか巖勝が藤の木の囲いを出ようとしているところで追いつく。巖勝は藤の花の木を見上げていた。

「……………この美しい木に近づくことが出来るのも……………最後か……………竈門家を頼んだぞ……………ん？」

巖勝は炭吉の存在に気が付く。

「約束です巖勝さん！」

「……………？」

(……………で言わなきゃ……………絶対後悔する！)

炭吉は声を張り上げた。

「絶対に！ 必ず！ 何がなんでも、また俺の家を尋ねてください！ それまでに縁壺さんの呼吸も全て覚えます！ だから……貴方の進む道を俺にも歩ませてください！

俺が、日の呼吸と共に月の呼吸も後世に伝える！ 約束します！ 貴方の道は決して誰かの模倣なんかじゃない！

だから……また……俺の家に……！」

「……」

巖勝は炭吉に近寄り、腰に差してあつた日輪刀では無いもう一振の刀を胸に押し付けるようにして渡す。

継国家の宝刀・螭落天津である。

何度も鍛え直され、日輪刀の素材によって鍛え上げられた名刀は鬼だけではなく、人すらも斬ってきた妖刀である。

炭吉がそれを少し抜くと巖勝の日輪刀と同じ紫紺の煌めきが刃紋を形造り、夕日を反射して輝いた。鍛えたものの高い技量が伺える。

無論、弔替が打ち直し、かつ巖勝が握って色を変えたものである。

「これは……?」

「見ての通り刀だ……私の刀と同じ素材で出来ているから……朽ちにくく、頑丈で、扱いやすい……月の呼吸に適している」

「……!」

「その刀をお前に預けた……別に振るつても構わない……物干し竿でもよいぞ……特別頑丈だ……今度尋ねた時には返してもらおう……では……またな」

(またな……? つてことは……)

呆然としている炭吉を置いて、巖勝は身を翻す。数秒経って、炭吉がはつとした時にはもう侍の姿はそこになかった。

刀を抱えながら帰ったところ、丁寧に血抜きされ、部位ごとに分けられた猪が家の玄関に置かれていた。

★

日も既に暮れた夜。

巖勝が山を降り行きと同じような彼岸花地帯を眺めながら歩いていると、彼岸花畑の

中に人影を見つけた。辺り一面に咲いている彼岸花地帯に花を踏み付けるように歩いている。少し注意でもしてやろうかと思つた瞬間……顔を見て怖気が走つた。

(なっ!?)

闇を溶かしこんだような黒い髪に血のように赤い目、鬼の始祖・鬼舞辻無惨である。

無惨も巖勝を見つけたようだ。赤い双眸が巖勝をしげしげと見つめる。巖勝はすぐさま近づいて跪いた。

「久しいな巖勝よ。ふむ……順調に体を仕上げてきているな」

「はい……四年前は……私の下らない我儘を耳を傾けて下さり……恐悅至極に存じます」

無惨の機嫌の低下がそのまま巖勝の死に直結するかもしれないのだ。もし殺し合いになつた時には逃げの一択だろうが、原作のように薬で弱体化すらされていない以上戦闘力は不明瞭な為、極力戦闘は避けたかった。

(なぜか機嫌はかなり良いようだ)

「構わん。お前が目指す侍の道を私は全力で応援しよう。……それで、お前はいつ鬼となり私のために刀を振るってくれるのだ?」

「お望みとあらば……すぐにでも」

「そうか……! 私は嬉しいぞ。お前が鬼になれば私としても優秀な仲間が増えて喜ば

しいことだからな」

「勿体なきお言葉」

(優秀な仲間……どう考えても道具としか見てないな)

無惨の機嫌は最高潮に達する。鬼狩りについての有力な情報を持つ巖勝が鬼になれば鬼殺の里が分かり、邪魔な鬼狩りを一掃できるからである。結局は自己中の塊のような人物である。

「……巖勝よ。お前だけに伝えるが」

「はい」

「私は青い彼岸花を探している」

「……青い……彼岸花でございましょうか……？」

もちろん巖勝は知らないふりをする。

「それさえあれば……！ 私は太陽を克服でき、無敵の存在となるのだ！ もちろんお前達も私が太陽を克服出来れば、共に不滅の存在となる」

無惨はいつの間にか巖勝を既にお気に入りに入れていた。青い彼岸花を求めていることを示すのもその一環。

もちろん『共に不滅の』の下りは真つ赤な嘘である。巖勝も気がついていない。無惨自らが太陽を克服すれば、全ての鬼は用済みということに消されるだろう。例えば鬼の一

人が太陽を克服しようが、そいつを呼び出して喰ってあとはおなじだ。

「そのような崇高な思想がお在りだとは……！ この巖勝。感服致しました」

「そうだろう」

さらに無惨は機嫌を良くした。巖勝は内心ほくそ笑む。無惨がひざまづいている巖勝に近づいて来た。

「今夜は数百年ぶりに気持ち昂る……巖勝よ、これを受け取れ」

「……頂戴致します」

巖勝は皮でできた袋を渡される。恐らく獣の皮だろう。それ以外だとは思いたくない。受け取った感触から、中身は液体のようであった。

「私の血だ。お前ほどの強さを持つ人間はそうそういない。故に血も大量に必要であり、尚且つ小分けにして血を渡すべきだと珠世が言っていた。私が他の者に手間をかけるなどそうそうない事だ。お前は特別に用意した。有難く思え」

渡されたのは普通の人間であれば細胞が壊れ、即死するような量の血である。

「光栄の極み」

「……もうすぐ期日だ。必ずそれまでに血を飲んで私の元へ馳せ参じろ、いいな……？」

「御意……必ずや参りましょう」

「鬼となった身では……私の名を呼ぶことは禁止しているが、お前は特別に許そう」

無惨が立ち去ろうとする。巖勝は跪いたまま、主人が立ち去るのを待つが……  
「ああ、そうだ」

ふと、無惨は立ち止まる。

「十二鬼月という鬼の幹部を作った。下弦が六体、上弦が六体で十二体分。入れ替わりの血戦で上になりあがれる。上に上がれば上がるほど私の血を大量に分けてやるつもりだ。」

……私からお前に名を授ける。謹んで受け取れ、継国巖勝よ。

お前はこれより十二鬼月の頂点。最強の鬼、“上弦の壺”……

『黒死牟』だ」

告げられた名は果たして諱となるか、それとも……



「黒死牟……か」

無惨との会話の後、巖勝は野宮をしていた。ふと、巖勝の鎧鴉である八咫が舞い降りてくる気配を感じ目を開く。

「巖勝殿、薫殿達が狙われています」

「は？」

開口一番に八咫から告げられた言葉に、ほんの一瞬だけ思考が停止する。すぐに元に戻るが、聞き間違いではないかと現実逃避をしたかった。まるで意味がわからないのだ。

「……どういことだ……いや待て……誰にだ……理由はなんだ？」

「順を追って説明致す。」

首謀者は鬼殺隊の柱。なんでも巖勝殿が鬼になるという疑いがあり、薫殿を人質にとつて月柱に本当に鬼になる意志があるかどうか試させる腹積もりらしい……因みに



紫明殿の存在は知られておりませんが、恐らくは……薫殿と共に人質にするでしょう」  
巖勝は動揺する。眠気が吹き飛び、無意識に刀に手が届く。自分の中で鬼殺隊の何か  
が崩れ落ちる。鬼殺隊は正義である。原作において主人公の所属する機関であり、皆が  
皆優しく強いのだ。

そんな鬼殺隊がまして幼子とその親を人質にとるとは到底信じられなかった。

「……………何を……………馬鹿げたことを……………鬼殺隊は……………鬼を殺すための組織だろう……………幼子を  
巻き込むなど……………」

それに意志を示すだけならば人質を取つてまでする必要は無いだろう……………そんなこ  
とをするのなら……………余程確信が……………」

巖勝は冷汗が身体中から吹き出す。巖勝が勘違いしてただけだ。鬼殺隊は弱きを  
助け強きをくじくのでは無い。

鬼を殺す為ならば法律にすら臆せず刀を所持するような者達である。そして今、巖勝  
は鬼になろうとしている。余りにも辻褄が合はずすぎた。

（待て、無惨との会話を聞かれていたら？ 四年前、刀鍛冶の里であの場に透き通る世界  
ですら勘づけけないほどに死にかけていた人間が偶然その話を聞き、偶然四年後に目を覚  
ましたのなら……………？）

「……………本当に……………情報は確かか？」

巖勝はまだ信じきれていなかった。この四年間、何回も任務を共にしていた彼らが女性と子供を人質にとるなど考えたくなかった。

しかし――

「はい。柱達の密会を盗聴しました故」

真実は残酷であつた。

(……………くそが)

「決行は……………何時だ」

「明日の夜です」

「……………すぐに向かう。おまえは縁巻に知らせろ」

「委細承知……………巖勝殿」

「なんだ？ ……八咫？」

「……………いえ、なんでもございません」

「……………？ ……そうか」

しかして歯車は狂い始めた……………しかしそれは巖勝や薫にとつての歯車であり、原作に向かつていつも正しい方向へと回転している。

鬼滅の刃における始まりの呼吸、その開祖達の物語は収束しようとしていた。

## 廿捌話 絶対的正義・上（房綱視点）

俺達はまあまあ大きな町の通りの小さな宿屋に来ていた。因みに俺以外の柱も全員来ている。大所帯だ。柱全員集合なんて、こんなことできるのはもう二度とないだろう。流石は御館様だ。

「……………こんなんだなア？」

「ああ、ここで薫が休んでいるらしい」

「一人か？」

「？ そうだが……………」

「そうか……………んで、誰が行くんだよオ」

「……………」

「こいつらそっぽ向きやがる。特に正助、お前口笛吹けてねえぞ。」

「どうした？ 薫を説得して、抵抗するなら無力化して巖勝の奴を誘き寄せ餌にするんだろ？」

「……………房綱、言い方」

「琴音。俺は何も間違えたことを言つてねエ。俺は元々この計画に反対だ。俺はあの巖勝が鬼になるなんて思えねエからなア」

「それを今から確かめるんだよ」

「正助は……疑つてゐるんだな」

「ああ」

こいつらはある名付きの鬼の討伐に向かった。面子は水柱の正助、炎柱の暢寿郎、岩柱の琴音。その鬼の最後の言葉は、巖勝が鬼になるのを示唆するものだったらしい。たかだか一匹の鬼の言葉を真に受けるなんてどうかしてる。

その鬼・瘡は、なんでも切ったそばから再生して、尚且つ再生したところは斬られる前よりさらに硬化したらしい。その上、首を切つても死ななかつたそうだ。最終的に日光で焼き殺したらしい。とんでもない鬼だ。

「んで、まだ傷は痛むのか?」

「いや、もう大丈夫だよ。あの鬼に片目で済んだのが奇跡だ」

「そうか……」

正助はその鬼に右目を抉られていた。良くもまあ片目で勝てたもんだな。暢寿郎と琴音は五体満足だし、運良く三人とも痣がでたらしいしなあ。俺もさつさと出さねエと。

「そんなことよりはよ決めよ！」

「ええ……」

「頑張りやがったのに、ひでえな」

「……………愛染が行けば？」

「いやや！ 巖勝君と引き離してまで呼び出して、その上巖勝君を倒すために協力してなんて言ったら、私が薫に殺されてまう！」

「……………それには激しく同意」

「じゃあどう済んだよ。まさか俺に年頃の女の部屋に入れとも言うんじゃねえだろうなア？」

「そうこうしているうちに、暢寿郎が近づいてきやがった。」

「愛染。冗談を吐けるようなら、問題ないな」

「暢寿郎。てめえの妹だろうが、お前が行けやア」

「正直に言おう！ 俺は昔から薫に勝てないし、なんなら滅茶苦茶怖い！ 絶対に行きたくない！」

「お前……」

「ウチらん中で一番強い房綱やし……ね？」

「……………賛成」

「俺、片目負傷中」

「どいつもこいつも……」

結局、俺が行くことになるんだよな……

★

「薫様」

「っ……！……誰ですか!？」

時は既に夕暮れ。

俺は隠を連れて薫の休む部屋の前にいる。

流石に俺だけで女の部屋に入るのははばかられた。その上薫ならもつとだ。俺は部屋の外で待機し、女の隠に説得は任せた。もちろん帯刀もしている。準備するにこしたことは無い。

「私は鬼殺隊の隠でございます。薫様に伝言を伝えに参りました」

「ふーん……そこにもう一人いらつしやいますね?」

薫は厳戒態勢だ。気配と音からして日輪刀を抜刀の構えで持ち、いつでも斬りかけられ

るようにしているようだ。呼吸までつかつていやがる。こいつの呼吸音はどこかあの兄弟を思い出させる音をしているからわかりやすい。

(……だが、なんでそんなに警戒する？　なんか大事なものでも隠してんのか?)

「隠のあなた、どうして私の居場所がわかったのでしょうか？」

「……恐れながら、私にお答えする権限はございません」

「なら、そちらの方に問いますよう」

(障子越しに視線を感じる……)

とりあえず俺は隠に目配せして強引にも障子を開けるよう隠に示す。

隠は頷きゆつくりと障子を開け……ようとし、手を障子にかけた瞬間。

(ツ！)

「ひっ……!?!」

俺は無意識に刀に手を伸ばした。それほどまでに深い濃密な殺気。隠の奴が完全にビビってやがる。泣きそうな顔をして俺を見やがる。いやどう済んだよ。お前は貴重な交渉役だろうが。

薫も薫だ。障子に手を掛けただけでこれだと相当ヤベえモン匿ってるな。……まさ



か巖勝本人じゃねえだろうな。

「……………か、かつ……………風柱様……………助けて」

「風柱？」

位の呼称でバレルが、仕方ねえか。

「ああ、房綱ですか……………何故柱である貴方がこんなところにいるのか疑問ですが、隠諸共に去りなさい。私はこれから里に戻り……………」

「……………そのための馬を外に用意してある。なぜお前が姿を見られることに嫌悪感があるのかわかんねえが……………とりあえず出てこい」

「虚言ですね。軽口を叩く暇があったら訳のひとつくらい話したらどうですか？」

「……………禅問答だ。とりあえず……………開けるぞ」

「意味がわかりません。私にそこまで固執する理由を言ってください」

「……………ふああ……………んう？ かーさま？ もうおてんとさまがのぼったの？」

あ？

(かーさままだあ!?)

俺は咄嗟に障子を全開にする。

口を半開きにして驚いている俺を他所に、薫が渋々と刀を納める。子供の前だからか……んで、誰の子かって話になるが。現実逃避してえくれえだ。滅茶苦茶似てやがる。目元がそっくりだ。

「そいつは……」

「私の子供です」

「養子……かもしれねえだろ」

「失礼ですね……しつかり私が腹を痛めて産んだ子供ですよ」

「……」

(嘘だろ……本当に、嘘だといってくれ)

落ち着け……絶叫したい気持ちを抑えろ……

「かーさま……この人……なんかこわい」

「だ、そうですよ房綱。紫明の目に毒なので少し失せてくれませんか？」

「ああ……つておい。いや、その言い方は無いだろう。」

……それにだ。これでも俺は鬼殺隊の頂点である柱だし、面も結構男前……」

「とーさまのほうがずう——つとかっこいいもん!!」

「……ア?」

(この餓鬼の親父つてことは………)

子供……餓鬼でいいか。餓鬼の射干玉を塗りこんだような艶やかな黒髪と、形は薰寄りだが心の深淵まで覗き込んできそうな目は……完全にあいっしかしねえ。その上この……飲み込まれそうなほどの圧迫感。餓鬼の癖してもう父親に似てきてやがる。

「とーさままつーことは、巖勝の野郎か」

「……おじさん、とーさまをしってるの?」

「ん? ……ああ、知ってるぞ」

「!」

即座に餓鬼が距離を詰めてくる。

なんで怖がらねえ、なんで臆さねえ。俺は目つきも悪いし、ガタイがいいのも自負してる。少なくとも片手でこの餓鬼は殺せる。なのになんで遙か格上の存在に對してこうもあつさり距離を詰められる?

「おしえてください！ しあのしらないとーさまのことぜんぶ！」  
「……」

（全部かあ……親に向ける執着にしては強すぎねえか？）

「……いや、悪い。俺も流石に全部は知らねえんだ」

「ふーん」

（こいつ……！ 俺が巖勝について話す気がないと知った途端に興味を無くしやがったー）

「はーいそこまで。父様のことは後で教えてあげるから、紫明はこっちにおいで？」  
「わかったー！」

紫明と言われた餓鬼が薫の着物の裾にしがみつく。落ち着け、流れに吞まれるな。餓鬼相手に何を本気になってんだ。

そうか、この餓鬼は薫という存在が守ってくれろと信じていやがるのか。それにしても、

（本当に煉獄の血が混じってんのか？）

俺にとつて煉獄姓といえは薫の実兄である、炎柱・煉獄暢寿郎だ。

薫にされるがままの紫明の面には、あの暢寿郎みてえな鷹のような目もない。唯一面影があるとしたら赤い目だが、これは薫の色だ。薫は薫でえらい別嬪になってやがる

し。

俺達つてフツーに邪魔者じゃねえか？

俺達が里に呼ばなかったらこいつらはこいつらで真つ当な人生をすごしてたんじゃないか？

「この人はね。柱、と言って、父様と同じお仕事なんですよ」

「んー？ でもとーさまより……」

「紫明、本当のことを言っちゃいけません」

「オオイ」

「かーさま、あのおじさんにらんでくる。しあこわいよ」

「怖いねえー。それじゃあ、母様が今からやつつけちやうから少し待っててね」

薫は紫明に見えないように自然と手を刀にかける。もうそろそろ限界らしい。薫の機嫌的にもさつきと話を進めた方がいいな。

(餓鬼、お前が母と呼んで今しがみついてんのは、戦闘集団である鬼殺隊の中でも、特別化け物じみた強さを持つ剣士なんだぜ……怖えのは俺なんだよなア)

「……話を戻しましょう。私達に外に出て欲しいんですね？」

「そうだ」

「にしても貴方のような柱を寄越すとは……これは御館様のご意向ですか？」

「いや、柱の皆の独断だ。ほら……いるだろ？」

薫は目を閉じた。そしてすぐに目を見開いた。

「あら、結構居ますね。私としたことが気づかないなんて」

この街には柱が五人、鬼殺隊十八人、隠が三十人。揃い踏みだ。

なのになんだその反応は。もう少し驚けよ。まさかこれを一人でどうにかできるわけがないよな。

とりあえず、だ。

今の御館様はもう長くない。あと一年もせずに次に交代だ。それ迄には片付けるモン片付けねえと。次代の御館様もまだ幼い。柱の一人に鬼の疑いがあるから拘束しろだなんて突拍子もない命令できるかもわかんねえしな。

「理由はなんですか？」

「……言えねえ。とりあえず外に出ろ」

「言えない……というのは理由を聞けば私が抵抗するからですね？」

薫が等々殺気立ち、左手の親指で日輪刀の柄を押し上げた。最早斬り掛かる気満々かよ……随分とおっかなくなつたな。子供がいるんならしゃーねえか。

まずはこいつに人質になってもらわねエと巖勝の疑いを晴らすことすら出来ねエかならなア。俺の頭を下げるだけであいつへの疑いが晴れるならいくらでも下げるさ。

俺は刀を収めて、薫に頭を下げる。

「頼む。この通りだ」

「……………そこまでして、私達に外へ出て欲しいんですか」

「あア」

「……………はあ……………紫明に危害を加えないと断言できますか？」

「もちろんだ」

「わかりました。しかし帯刀はさせてもらいます」

「……………構わねエ」



とりあえず薫に紫明を連れて宿の外に出させる。ここは鬼殺の里への中継地点。町は鬼殺隊専用と言ってもいい。大体の家には鬼殺隊にゆかりがある人物が住んでいる。故に……有事に対応しやすい。

(刀もってこさせちまったけど、どうしようもなかったしなア)

俺たちが宿から出てくると、薫は鬼殺隊の多さにたじろいだ。

呼び出した理由をいつ言うべきか迷っているうちに、薫に気がついた暢寿郎が寄つきやがる。

「これは……結構集めましたね。柱の皆さんも揃い踏みで……兄様も」

「久しいな薫。……その子は……まさか……」

「兄様の望んだ姪ですよ。紫明と言うんです。可愛いでしょう？ ほら紫明、あなたのおじさんです。挨拶しなさい」

「しあといいます。よろしくおねがいしますおじさん！」



「……あ、ああ、よろしく」

(分かるぞ暢寿郎。紫明の雰囲気には俺も驚いた)

「……！　　そうか、紫明と言うのか！」

「ええ、縁壺君が付けてくれたんです」

「……………姓は煉獄……………」

「『継国』です。継国紫明。煉獄姓にしなかつた理由はしつかりあります。これから万が一私や夫、若しくはその両方が欠けた場合、縁壺君に任せられるからです。強いんですよ私の義弟」

「……………」

ああ、見てられねえ。

薫、知らねえだろうがお前の兄はな、縁壺にな、模擬戦であつさりと、それも一息で四発打ち込まれてやられたんだぞ……………以来、縁壺の名前が出されると、暢寿郎は自信をなくすんだが……………ああ駄目だ。見てられねえ。

ほら、暢寿郎の野郎が肩を落として呆然とふらつき出しやがった。どんだけ気を落としてんだよ……………

「ねえ、かーさま」

「なあに紫明」

「しあ、おじさんにあいさつしたよね？」

「ええ、よく出来ました」

薫が紫明の頭を撫でる。紫明は嬉しそうに目を細めている。褒めてもらいたかったのか、随分と餓鬼らしいお願いじや——

「じゃあ！ もう帰ろう！ しあ、とーさまにはやくはやくはやくはやくはやくはやくあいたいの！」

（誰だろうなア………ホント………誰に似たんだろうなア………俺は知らねえなア………）  
薫も実の兄そっちのけで紫明と会話してるし、揃っておつかねえ。

ていうか継国姓なのか。てつきり巖勝が婿入りしたんだから煉獄姓かと思ったが……理由も当てつけだろ。どちらが欠けるもなにもお前らを屠れる鬼がいたらこの国は滅んでるぞ。もつとなにか別の理由がある気がするが………まあ俺が口を出すことじゃねえか。

そうやって話していると、愛染・正助・琴音が集まってきた。

「おおっ！ 久しぶりやね薫はん。何時ぶりやろ」

「……………久しぶり」

愛染と琴音が薫と紫明に寄ってくる。だがこいつら、紫明の存在に気づいていねえな。

「おい愛染、それに琴音もだア。大勢で来ると紫明がびつくりしちまうだろうア」  
「え？ ……しあ？ どなたはん？ 新しい鬼殺隊？」

「……………誰？」

きよとんとした愛染と琴音に目配せしてやる。

すると、紫明がひよつこりと薫の足元から顔を出した。

「ええー!? か、可愛い！ 誰?! 誰や!？」

「……………」

「ふふつ、可愛いでしょう？ 私と巖勝君の子供です。紫明、挨拶なさい」

「よろしくおねがいます」

「わあーっ！ おめでどう薫！ えらいかわいらしい子やな」

「……………はっ！ ……天女」



暢寿郎は……つと……こいつ地面にのの字書いてやがる。どんよりとした雰囲気を

纏ってやがるし、軽く印象崩壊してんな。炎柱だろお前。うむうむ言っとけ。

「俺は縁壱の兄である巖勝にも負けたのか。ふっ……笑え！ 房綱。俺はあの兄弟に完敗したのだ！」

紫明に至っては、あの目だ、あの目はなんだ！

紫明は俺達が怖いから刺激しないように平然を装っているんじゃない！

俺達が、思ったより弱すぎて興味を無くしている失望の色なんだ！」

「落ち着けエ。あの兄弟が頭おかしいだけだア。お前は弱くねエ」

「いや分かってたけど……え？ 早やない？ いや、世間一般で言う普通……もしかして鬼殺隊って恋人作りにくい？ それも柱ならもつと？ え？ え？」

「………今更………全然………つらくない」

「愛染も琴音も落ち込まないでよ。縁談くらい御館様に頼めば斡旋してくださるよ」

「!？」

「二人とも知らなかったんだ………うおっ！」

「正助君、それについて」

「詳しく」

「………」

俺が暢寿郎を慰めて、愛染と琴音が正助を問い詰めて、紫明と薫は和氣藹々と遊んで……なんだこれ。ここに集まっているのは鬼殺隊の最高戦力のはずなんだがなア。それにしてもこいつら……顔はいいのになんで恋人居ねえんだよ。恋人がいないことに関しては俺が言えた台詞じゃねえけどな。

とりあえず薫の対応は正助にでも任せるか。俺はこいつらの相手と………どんより落ち込んでる暢寿郎は……ほつとくか。

揃いも揃ってよオ……！

「さてと、本当にごめん薫、巖勝が来るまでの辛抱だから……」

「？ ……正助、夫がこの事態と何か関係あるんですか？」

「夫ね………つてあれ？ 房綱から聞いてない？」

「へ？」

(……きたか)

出来ればこのクソくだらねエ時間が一生続いてほしかったがなア……ほんと………なんでこんなことになったんだろうなア。俺達はどこで道を違えたんだろうなア。

「薫」

暢寿郎を阿呆二人に任せて、もとい押し付けて鬼殺隊に目配せする。本意ではないが混沌としているながらも和やかな雰囲気は消し飛ばした。

これから話すのは外道みたいな、それも反吐が出そうになるほどの作戦だ。

「……なんですか改めて」

「先日柱三人がかりで倒したとされる名付きの鬼……☒瘡と名乗った鬼が最後にこう言い残した。

『カカカツ……！ あの剣士が……あの化け物が鬼になればお前ら鬼殺隊は終わりだぞ！ アレは……生まれついで鬼だ！ 我らの時代が来る……！』

となア。☒瘡は出鱈目に強いらしくてなア、そいつにここまで言わせる存在かつ剣士となると月柱かお前しかない……つつーことだ。……この意味がわかるな？」

薫は黙り込む。

(ああ、薫。その反応が……表情が……真実を証明しちまつてるんだア……)

「……理解不能です。それに言いがかりです。夫や私が鬼になるという確証なんてないでしょう？」

「その通りだ。全くと言っていいほどない。だが、なんと少しでも柱が鬼になるのだけは避けねばならねえ。可能性は潰す。これは……俺たち柱の総意だ」

月柱という存在は恐怖の対象であると共に一部の隊士（主に日の呼吸使用者）にとつては尊敬の対象だ。

強いからって柱合会議すら蹴るのはさすがに鬼殺隊としてどうかとは思っていたが……納得した。薫が身籠つていたんだらう。それなら仕方ねえな、まあ、それでも俺に理由くらい言つて欲しかったがア。

それにあいつの鏖鴉……八咫と言つたか、あの鳥、鏖鴉にしてはやけに強えんだよな。ダメ声で叫ばないし、なんなら流暢に喋るし、柱合会議の真つ最中に月柱欠席の連絡だけ言い残して去つてくし、俺が後を追わされるし、何故か追いつけないしで……

そんなことはどうでもいい。現実逃避なんてしてる場合じゃねえ。

お、暢寿郎が自力で復活した。頼むぜ兄様、ここは兄の威厳つてやつを見せてもらわねえと……

「……薫。従え」

「……」

「……」

（前言撤回。一言で精一杯かよ）

「……ですが」

「言つておくが本当に強かったよ。俺なんてほら、目を持ってかれたし」

（正助が帰ってきた。じゃあ俺は鬼殺隊に人払いの命令でも……）

「房綱、あんたも知つとつたんならなんで言ってくれへんかったん!? 言ってくれれば……ウチは今頃、それはもう勇ましい殿方と一緒に……!」

「……………女に取つて婚期は生命線……故に房綱。貴方は万死に値する」  
「次はお前らかア……」

すぐに阿呆二人がまた詰め寄ってくる。話が全く進まねえぞオイ。

★

「もしそうだとしても……そこまで追い詰めたのは貴方たち鬼殺隊ではありませんか？」

「許せ薰。月柱は強すぎる。こうでもしないと対等な立場になれないほどに……本来ならば日柱にも加勢してもらわうはずであつたが兄弟という面から特別に内密にしておいた。我ら鬼殺隊は鬼を殺す為にある。」

手を汚してでも鬼の可能性は断ち切らねばならん」

（まだ兄弟で話し合つていやがるのか……もう夜だぞ。だが、このくらいの時間、安いも



んだ）

あの日柱に並んで最強の一角と謳われる月柱が、鬼になるという可能性がほぼ確定。そして月柱に対抗できる存在が完全に皆無。建前としては確認のために、薫と紫明を人質にとるとのことだ。……気持ちのいいもんで無え。寧ろ反吐が出る。

月柱を直指して鬼殺隊に入るやつは腐るほどいる。だがすぐに実力差に気づいて絶望し、鬼殺隊を去る。その方がまだ幸せだ。侍は主への忠誠心と共に強さを求められるから最強を目指す侍は少なくねえ。才能が中途半端にある奴はあいつを直指し、絶望の獄炎と失望の劇毒に身を包み込まれて死ぬ。

本人は気づいていない。いや、気がつけない。あいつの物差しは入りたてのヒヨっ子も歴戦の柱も等しい。

縁壺のように強者も弱者も等しく照らすのでは無く。

見上げてはその差に絶望し、焦がれることしか出来ないような得体の知れない化物。それが月柱・継国巖勝。

つまりはそういうことなのだ。俺も柱の皆も薄々気付いている。巖勝は鬼になると

いうことに。気がついていて。どこか納得させるなにかがあるのだ。理解できないからこそ予想しやすい。

ならば妻子を人質にとつてでも月柱が鬼になるのは防がにやならねえ。

——これだと……どつちが鬼かわかんねエなア

「……やはり協力できません。巖勝君と話し合いたいのならば、私は兎も角、紫明を巻き込まないでください」

「そうか……時間も押している。薫、すまない」

「……っ！」

「……クソが。胸糞悪いな」

薫の口に残るから布が当てられる。確か強い昏睡の作用がある薬の一種だった気が

する。鬼殺隊にとつては痛み止めに使われることの多い薬だが、生身の人間が服用するには極少量でいい。薫に投与されたのは比較的多量な筈なんだが……まだ意識があるようだ。

「かーさま!?!」

薫の足元にいる紫明が心配そうに自分の母を見つめている。当たり前だ。母親が薬を飲まされて苦しんでんだからなア。生まれて数年の幼子が驚愕するのも無理はねエ。(いや驚愕で済む話か? こいつ驚きながらも冷静に状況を分析してたりしてねえだろうな?)

薫は少しのあいだふらついたあと、紫明を抱え込みながら膝を着いてガツクリと項垂れる。俺は薫に薬が周り切ったと判断し、隠を呼ぶ。

とうとう紫明が母が動き出さないので見てしゃくり始めた。

(……わざと力を抜いたな。薬の分解に力を入れるつもりか……とりあえず黙っておくか、柱に並ぶ実力者だ。下手に見破って追い詰めたら月柱との戦闘の前に深手を負うかもしれないねえからな)

そういえば巖勝の月の呼吸の道場や、薫の暁の呼吸の道場なんて一度も見たことがな

い。下手したら作っていないかもしれないがそんなことは全くもって有り得無え。技術を受け継ぐことは武人の本懐だ。あいつに限ってそれは有り得ねえ。巧妙に隠していやがるんだ。

「なア、暢寿郎」

「なんだ？」

「……最初からこうしておけば良くねえか？ これではあまりにも薫と紫明が可哀想じゃねえか」

「……房綱。良くも悪くも薫には鬼を狩るより大切なものができたらしい。鬼殺隊の身としては考えものだが、兄としては嬉しい限りだな」

「話を聞けや。その薫を強制的に鬼殺隊の都合で連れていくんだろ？ それもこいつの夫を嵌めるために……もう俺には何が正しいのかわかんねえよ」

「……でも鬼は皆殺しにする。これは曲げられない。例え……彼が鬼殺隊全ての恩人であつても」

「……琴音もかよ」

「なあ正助……なんか紫明ちゃんめつちやこつち睨んで来るんやけど……」

「……まさか……愛染、紫明はまだ子供だぞ。ただただ混乱しているだけだよ」

浮かんだ疑問に蓋をする。そうだ。大丈夫。まだ餓鬼だ。……待て、俺は何に言い訳

をしている？ そんなに……この餓鬼が、紫明が怖いのか？

隠を待っていると、紫明は途端に懐から笛を取り出して思い切り吹いた。

!!

「うわっ！ なんや!? ……なんや、笛かいな」

「落ち着いてみんな。子供の玩具だよ。なにか聞いたことの無い音色だね。何か特殊な製法で作ったのかな？」

ヤベエ……

よくわからんがああの笛は駄目だ。音の響きから音色に至るまでただの笛じゃねえ。俺の勘が今までにないくらい警鐘を鳴らしてやがる。

咄嗟に笛を取り上げる。

(ほら、なんも抵抗しねえ。寧ろ吹いた途端、安心しきりやがったツ……!)

「房綱!?!」

「あの二人の子供だぞ?! 嫌な予感しかしねえよ!」

「にしてもやりすぎじゃない? まだ子供だ。ほら、笛を返してあげなきゃ」

そうなんだよ。まだ子供なんだよ。その子供が母親を害されてもなお泣きもしない時点でおかしいんだ。

「お前達、何を騒いでいる。」

おいその隠、紫明を抱えろ。そしてその女の隠は薫をおぶれ。薫を極力紫明の目が届くようにするんだ。呉々も丁重に運べ」

俺があいつらを引き止めていたら……何か変わったか?

## 廿玖話 絶対的正義・下

「月柱つて案外雑魚だったりして」

「柱が一席空いたら……俺達が柱か!？」

「……」

紫明は隱に預けられ、薫も他の隱におぶられている。

これから鬼殺隊一行が向かうのは水柱の道場。遮蔽物があり、万が一戦闘になつても戦いやすくするためである。ここにも飽きるほど遮蔽物に溢れているが、街である以上。被害は避けなければならない。

紫明は泣き止んでいた。

その瞳には自分から母親を遠ざけ、父親を陥れようとする愚者の姿形をありありと写していた。しかし九歳で大人を圧倒して見せた縁壺に比べても、紫明はまだ二歳。本人も抵抗すらできないのを理解していた。

まだ歯向かう時では無い。だが紫明にも譲れないものがある。世界一強くかつこい父親と、世界一綺麗で優しい母親に対する侮辱である。故に紫明を抱える隱の指が顔に近づいた時、思い切り噛んだ。

「いつ……こいつ噛みやがった！」

「この歳で大の大人にここまで抵抗するのか……もし月柱の気色悪い痣があったら、さらに強くなるんだろうな」

「うるせえ！ ごちやごちや言つてねえで早く助けろや！」

「……っ！」

（……つきばしら、とーさまのあかいあざ、しあにもあるあかいあざ、きもちわるくない！）

紫明の体温が上がり、咬合力がさらに強くなる。歯は骨に到達し、鉄の味が紫明の口いっぱい広がるが、離す気はさらさらない。親を悪く言われて、ただ言われるがままにされるほど、紫明は悪い子ではない。

「ギヤアアアア!!」

隠は痛みには耐えかねて指を抜こうとするが、それでも紫明は離そうとしない。近づけば思い切り噛んでくる紫明に対してギョツとしている。少しずつ騒がしくなっていた。

「……子供一人ぐらい多目に見ろよ……」

「愛染、助けに行つてやれ」

「うわあ血や。ちよつと行つてくるわ」



「えぐ」

「鬼みてエだな」

「……お前たち私の姪がそんなに嫌いか？」

「どう考えても年齢にしては凶暴すぎるだろうが」

仕方なしといった様子で柱達の目が紫明に向く。

……

喧騒に耐えかねて、朱の射した眼が薄く開かれる。

「……ん……………あ……………」

薫の双眸に映るのは隠や柱が愛娘を取り囲む姿。

「……………！」

眠る前に起こったことを思いだし、紫明が自分の手から離れて柱に囲まれているのを視界に入れた時、隣を歩く隠が抱えている自分の日輪刀を奪い取り、自分をおぶつてい

る隠の頭を蹴って無力化する。

「もう薬の効き目が切れたのか!？」

「全員離れて! 完全には抜け切っていないはずや! まだ抑え込める!」

(私はどのくらいの時間休眠していた? 薬は……まだ分解できていないか。体が重い。いつもの六割といった所かな)

紫明は柱達に囲まれている。最優先は紫明。よく見ると紫明を抱える隠の指から血が流れている。紫明の口元からして紫明が噛んだのだろう。

隠が紫明に対して何かしらの危害を与えるような行動の結果、紫明が抵抗して噛まれたのだろう。薫はそう判断した。そして薫は紫明を抱えている隠を睨みつける。射殺されそうなほどの眼力に隠はたじろいだ。

「逃がしませんよ……! 地獄の果てまで逃げても追いかけて……! 貴方の首を、斬

り飛ばします! 私の紫明に手を出したこと、後悔させてあげます!」

「ひ、ヒイイ!?!」

鬼を見なれている隠ですらその威圧感に冷や汗が止まらず、無意識に紫明を抱えたまま走り去ろうとする。

「紫明!」

手を伸ばしても隠の足は止まることは無い。ならば鬼に向けていたその刃を、今度は、家族を魔の手から救うために振るう。

・暁の呼吸 肆ノ型 壊劫・

隠に向かつて薫が突撃する。柱や鬼殺隊が妨害することを見込んでいるため、型も連撃のものを選んだ。

これなるは夜空を覆う三つの円環。

- ・炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり・
- ・雷の呼吸 弐ノ型 稲魂・
- ・風の呼吸 壺ノ型 鹿旋風・削ぎ・

「くっ」

薫の繰り出す三連撃を豪炎の熱壁が、雷霆の五連撃が、暴風の颯が受け止める。十分過ぎるほどの防御。薫は簡単に弾き飛ばされ、地面を転がる。それでも薬が効いていながらにしては余りに強すぎた。

「ありえへん……今完全に殺す気やった……!」

「おいおい、ほんとに睡眠薬は効いてるんだらうな?」

「落ち着いて。紫明は無事だから」

「ならばなぜ紫明は抵抗しているんですか!?! 貴方達に害されたからでは無いのですか!?!」

薫は刀を納める。敵意がないことを示す……否。『溜め』を作る。

・ 暁の呼吸 参ノ型 陰陽進退 ・

抜刀しつつの水平切りで辺り一帯を薙ぎ払い、続く真上からの振り下ろす型。十文字に似たそれは刀ごと断つ。ただし、それは本来の威力。

薬が分解できていないため、薫の握力は弱くなっており、あっさりと言輪刀が弾き飛ばされる。いくら柱を超える実力者として、現役の柱三人掛りでは非常に分が悪すぎた。

「ちっ……」

刀はないが、紫明を助けたとしてもこの包囲網をどう突破するか思案を巡らせる。一瞬の思案が命取りであった。手元に刀は無い。

薫の首元近くに兄の日輪刀の鋒が向けられる。

「薫。これは鬼殺隊の問題だ」

「だったら放っておいてください！ 私はどうなってもいいです。ですが紫明は巻き込まないでください！」

「鬼殺隊に入ったのなら……こうなることは覚悟しておくべきだった」

(はあ!?)

「覚悟なんて……！ ある訳ないじゃないですか！ 鬼殺隊とか、鬼を殲滅するとか、掟とかなんて知りません！ いっその事鬼殺隊なんてなくなってしまう方がいい！」

「私自身も……子供を見捨てて……大勢の為という理由だけで諦めるような人間が！」

「永遠に！ 巖勝君の隣に！ 立てるはずがありません！」

「薫の一言に空気が凍りつく。柱達はたかが一単語に耳を疑った。」

「永遠だと？ ……まさか薫、お前も……！」

「やつとです……やつと見つけた私の……私達の幸せです！ 貴方たち如きに踏み躪られてなるものですか！」

「お前は！ ……！」

鬼殺隊は鬼を殺すのが使命であり、存在意義である。故に今この瞬間において、薫は

紛うことなき悪であり、鬼殺隊は清々しい程に正義である。

悪鬼滅殺の為ならば……何をしても構わないのだ。例えば子供の前で母親を殺そうとしても。

戦況は滞り、以前薫が不利。絶望的状况で尚、薫は足掻き続ける。

（考えて、考えろ私。巖勝君ならどうする！）

薬で弱体化している今の薫は、刀なしで柱と渡り合うのは不可能に近い。だが、ただかその程度で子供を諦めるほど『母親』を薫は捨てていない。

朦朧とする意識の中、拳を握りしめる。爪が食い込むほどに握りこまれたそれは血が滴り、痛々しかった。それほどまでに込められた殺意は本物。薫は近くの鳴柱・愛染に縮地法で肉薄してからの掌底を放つ。

「はあっ！」

（初めて巖勝君が本気で避けた拳！）

「嘘やろ!!」

死の音を纏わせた拳はすんでのところで避けられた。だが再び柱達を警戒させるには十分であった。

「例え私のすることを……世界が否定しようとも！」

・岩の呼吸 貳ノ型 天面砕き・穿・

岩柱による柄を用いた刺突。

貫きはしないが、もろに喰らえば気絶は免れないだろう。決死の覚悟で突き出された槍を……片手で受け止める。そしてそのまま力任せに槍ごと投げ飛ばす。

(……!?! 有り得ない!)

「彼だけは……! 味方でいてくれる! だから戦える!」

・水の呼吸 壺ノ型 水面切り・

水柱が振るう水平切り。

対して薫は左足を軸にして右側面から回し蹴りを叩き込む。正助はなんとか受け止

めたが、彼が体制を崩した瞬間、薫はもう一度左足を軸にして、今度は左側面から後ろ回し蹴りを叩き込む。

完全に無防備な方向からの衝撃に、正助が吹き飛んだ。

柱達は思い出の中での存在と姿が重なる。剣技だけでなく、格闘術でも鬼を圧倒して見せた人間の技であり、これから捕らえようとする鬼の技であった。その動きはまさに鬼神。刀鍛冶の里でからくり人形の手本となった動きである。

「ぐあー！」

「今の……は、巖勝の……！」

柱達の驚愕など何処吹く風。紫明を助けるための障害は全て取り除いた。

（やっど……！）

伸ばされた手は隠の袖を掴み取る。

「捕らえました！」

「ひいひいひい！」

（まずは……！）



「そこまでだ。愚妹よ」

薫の脇腹を煉獄の炎刀が切り裂く。

「うっ……」

「かーさま!？」

薬の効能に加えて無視できない傷の追加。薫は腹を抑えてしやがみ込んでしまう。それでも薫に対する恐怖から隠がさらに距離をとる。

「大丈夫。大丈夫だよ紫明。大丈夫だから……」

「……まって! ……つれていけないで!」

遠ざかる紫明を悔しげに見つめる薫に、血を払った暢寿郎が近づいて来る。

「動くよ傷が開くぞ」

「……っ」

無念を胸に、薫は気を失って倒れた。

「心苦しいが、鬼は全て滅ぼさねばならん。おい! どこまで離れていく! 娘を此方へ連れてこい! 私の姪だ。丁重に扱え」

「大丈夫ですよね……? つ! こいつまた噛みやがった……!」

「炎柱の家系は子供でも凶暴と聞く。その上継国の血が入っているのなら、潜在能力は計り知れん。直ぐに指を治療させよう」

「隠君。子守りお疲れ様」

「炎柱様、水柱様……！　ありがとうございます！」

紫明に指や腕を噛まれて辟易している隠を労うように鬼殺隊達が笑う。

「他人を労う暇があつたら、まずは自分の心配をしろやア」

「……………正助。貴方が一番重傷」

「琴音だつて投げ飛ばされてたでしょ」

「はあああくホント疲れたで…………」

これにてまずは一件落着。月柱と戦闘（予定）の前にほぼ誰も怪我をしなかったのは鬼殺隊にとつて大きい。それにこれで鬼殺隊は万が一、月柱が鬼であつても諫めることが可能になった。母子を人質に取れば鬼であつても躊躇するだろう。

これは正しい行いだ。鬼を殺す鬼殺隊は絶対的な正義なのだ。故に鬼も鬼を匿う者も鬼になろうとする者も絶対的な悪である。

隠が母親から遠ざけていた紫明を暢寿郎の元へ届る為に走る。

——  
隠を月刃が切り裂いた

「…………え」

彼が月を背にして跳躍する様はひどく絵になった。

切り飛ばされているのが鬼の首であれば、鬼殺隊達は戦いを忘れて見蕩れていただろう。それほどまでに幻想的であった。

しかし、血を撒き散らして飛んでいるのは紛れもなく隠の首だ。

見開かれた瞳は激情に燃え盛り、この世の全てを焼き尽くす様である。月の光を反射して輝く紫紺の日輪刀がひどく美しい。

「巖勝……………！」

「嘘……………やろ」

彼の存在は二振りの刀であった。一振で鬼殺隊の未来を切り開き、もう一振で鬼殺隊の落日を創った。

そうして柱達は望まぬ邂逅を果たした。



巖勝の耳に紫明の吹く笛の音が聞こえた時、彼は自身の思考が研ぎ澄まされていくのが分かった。

心身共に理解しているのだ。薫や紫明を失えば自分が壊れてしまうことを。彼女達を守れなければ自分に生きる意味はないのだから。しかし、音の反響からして目的地までは数十里ある。加えて薫と紫明を人質にしている鬼殺隊を排除するには人の身では骨が折れるだろう。

あつさりと仲間である鬼殺隊や柱を殺す覚悟ができたことに、もはや自分には人の情がないことに気がつく。

巖勝は自嘲気味に笑った。

「縁者。私は生まれながらにして……鬼であつたのだな……どう足掻いても……お前にはなれなかつたのだな」

——無惨に貰った血袋を飲毒し、炭吉の血と縁壺の血を摂取する

口を乱暴に拭う。

——何だ

(身体に……力が有り余る……これは……?)

「ガアアアアアアアア!!」

灼熱が体を駆け巡る。体が肥大化し、身長と共に赤みがかった髪がさらに伸びる。目も爛々と赤く変色し、犬歯が獣のように発達する。しかしまだ完全な鬼ではない。巖程の剣士を鬼にするには無惨の血が少なすぎたのだ。

それでも鬼と相性の良い血と最強の血が、少量とはいえ無惨の血を巖勝の体に馴染ませる。

「……………」

(まだ支配はされていないし、位置も特定されない。日光は既に致命傷になるだろうが

時は既に日没後の黄昏時、大丈夫だ)

半人半鬼のようなあやふやな存在となった巖勝だが、既に走る速さは格段に上昇している。ただでさえ人外じみた臂力や脚力をもつ彼の基礎体力がさらに昇華されていた。一步一步が地面にヒビが入るほど強く踏み込まれ、周りの景色が飛ぶように過ぎていく。五感が更に研ぎ澄まされる。暗闇の中で数十里先の里の位置が分かり、そして――  
――藤の花の香りに顔を擧める。

「縁吉ならば……自分の家族と鬼殺隊……両方救えたのだろうか……人の体のままで……誰も殺めることなく」

走りながらも体の形は変わり続けていき……町に着く頃には一匹の鬼が誕生していた。

★

そうして巖勝はものの数分で笛の音が響いた町についた。手頃な屋根に飛び乗って冷静に状況を理解する。夜風が巖勝の髪を揺らす。鬼殺隊は柱ですら巖勝の存在に気づいていない。

(柱が勢揃いか、入念な事だ。薫は交戦中だが……毒でも盛られたか？ 動きが鈍い。

紫明は……)

薫が必死に向かう先、隠の腕に紫明は抱かれていた。子を思う母に凶刃が迫る。巖勝は目を見開いた。躊躇ってすらいなかったのだ。

(……………!? やめろ!)

無慈悲に刀が薫の身に吸い込まれていく。

「うぐっ……………」

「かーさま!?!」

「……………は?」

薫の腹から命の水が滴り落ちる。

巖勝が透き通る世界で見ると、内臓は無事だが下手に動く悪化する程の傷。巖勝は薫の死を連想する。

顔は青を通り越して白くなるのだろう。温もりは抜け落ちていくのだろう。人とい



う命から死体という物になるのだろう。二度とその唇が愛を囁き、微笑むことは無いの  
だろう。

(……なぜだ。お前達)

絶対に鬼殺隊は薫を傷つけないと、巖勝は心の隅でどこかそう思っていた。例え裏切り者でも、鬼になる気があるとしても、共にすごした仲間は傷つけないと思っていた。

加えて紫明は泣いていた。紫明にとつては、母親が眠らされたのならまだ大丈夫だという根拠はあった、だが今、自分の母親は血を流している。生命の源である血潮を。目の前で母親が負けそうで、苦しそうで、いなくなってしまうそうで……

「うぐつ……うぐう……うう……いやあ……」

いつもの感情豊かに笑う紫明が泣いていた。泣かせたのは鬼殺隊だった。

「これで……はつきりした」

——唇は、異常者は、糞野郎は、悪人は、鬼は貴様達だ

巖勝の身体中に力が漲る。体温が更に上がり、握りしめた拳から血が滴り、噛み締めた奥歯は砕け散った。目からは血の涙が流れ、屋根の瓦が粉々に砕け散る。

最後に崩れ落ちる薫が自分を見て笑った気がした。



「は？」

鬼殺隊の誰もが一瞬何が起こったのか理解できなかつた。

自分達は薫の日輪刀を弾いて無力化した。その怒髪天を突く烈火の如き怒り様と、射殺しそうな目線に紫明を持っていた隠が顔を真っ青にして必要以上に距離をとった。柱達は紫明を落ち着かせるために薫の戻ってくるよう催促し、他の隊士は隠の怖がりように吹き出し、揶揄った。

空気が和んだ瞬間だった為、次の瞬間隠の首が宙を舞うなど誰が想像できただろうか。況して武蔵国の任務に赴き、里まで全力で走っても数日は帰ってこないと思つていた月柱が帰ってきたのだ。

普段感情の欠片すら見せない目は激情の血涙に溢れている。瞳の奥から垣間見える深淵と目が合った隊士は無様に刀を落として座り込み、目が合わずとも、その威厳すら感じる重厚な気配に鬼殺隊は腰を抜かしていた。

柱達はすぐ様抜刀する。

「月柱……なのか……？」

「巖勝君……うそやん……本当に」

「鬼に落ちたな。恥を知れ」

「巖勝……お前え」

「………そんな」

非難しながらも柱達は背中に冷や汗が滴るのを感じる。

対照的に巖勝は紫明に血の涙を見せないために声だけで紫明を案じる。それは戦場とは思えないほど優しい声であった。隠から飛び散る血飛沫を紫明に見せないように、そして掛からないように優しく掻き抱く。

その変わりように鬼殺隊士達は瞠目する。目の前にいるのは恐怖を振りかざす鬼でも、鬼のように力を振るう月柱でもなく、子を案じるただの一人の父親であった。

「大丈夫、大丈夫だ。安心しなさい、遅れて本当にすまない」

「……しあはいいの……！ とーさまっ！ とーさまああ!! かーさまがっ!!」

「分かっている……あとは全部父様に任せろ」

「……でもっ！ いっぱいいるよ！」

親を按じる子、子を按じる親。

戦場に似つかわしくない空気が流れるが、巖勝は声色とは裏腹に瞳を鬼殺隊から逸らしていない。鬨気に当てられて鬼殺隊は誰も動けなかった。

対照的に、紫明を安心させようと巖勝は空いている片手をそつと紫明の目に覆い被せる。

「紫明は安心して眠りなさい。母様も紫明も父様が守るから」

「……………」

紫明は暖かく安心する手に包まれて眠った。

そして巖勝の姿が……消える。

「っ！」

・月の呼吸 拾貳ノ型 朧月夜・

少なくとも鬼殺隊にはそう見えた。巖勝は鬨気に緩急をつけて鬼殺隊の間を縫って鬼殺隊に囲まれている薫を抱き抱えたあと、遠ざける。柱ですら一瞬で薫の元へと瞬間

移動したように見えただろう。巖勝に向けて日輪刀を振るうが、捉えるのは空虚な幻影のみ。

三人は路地裏へと逃げ込む。

(……傷は浅いが……激しい動きは禁物だな。薬を飲まされて朦朧としているが、抜けてはきている)

薫の傷は激しい動き……それも呼吸を使うような事さえしなければ大丈夫なものであった。巖勝は大丈夫だろうと判断する。

「薫。紫明を頼む。ほら、お前の日輪刀だ。私が全てを終わらせてくる。私に何かあれば縁壺を頼れ」

「ううん。大丈夫だから、傷は心配しないで。もう血は止めたし、筋肉が少し裂けたただけだから」

「……頼む。無理はするな……ではいつてくる」

駆け出そうとする巖勝の裾を薫は空いた手で咄嗟に掴む。

「巖勝君……もういいよ！ 逃げよう！ 私は何とか走れるし、紫明も無事だから、あとは巖勝君が居ればもう他に何も要らない！ またあの家で、三人一緒に、仲良し家族だなあなんてご近所さんに言われながら暮らすの！ だから……」

巖勝は自分の衣を掴んでいる薫の震える手を優しく握る。

「すまない。どうしようもないし……今のままだと逃げられんだ。

無惨よりも鬼殺隊の方が情報戦に長けている……逃げ切れてもいつかは場所がバレて俺達は兎も角……今度は紫明が当たり前の生活を送れない……

私はここで鬼殺隊と戦い……皆殺しにする……一連の騒動が柱達と一部の鬼殺隊・隠のみの計画ならば……『なかつたこと』にできる……」

「……でも！　ここは鬼殺隊縁の土地だから喧騒で漏れるし、何より縁壺君の立場が……」

「安心しろ……町も消す……縁壺のことは気にするな……縁壺の切腹は御館様が何かなんでも止めるだろう……なにせ柱の皆が縁壺を除いて殉職するのだから……」

「……待って！　……ん……」

薫は巖勝の肩を寄せて口付けする。巖勝はいきなりの出来事に瞠目するが、そのまま受け入れた。すると口の中に甘美な味のする液体が流れ込んでいるのが分かった。

——薫の血である

薫は口内をわざと歯で噛み切って出血させたのだ。彼女は唇を離したあと、舌で口から零れ落ちる血を舐めとる。その様は酷く妖艶だった。

「……驚いた」

「でしょ、どう？ 元氣出た？」

「ああ、力が漲る。今なら……縁壺にすら素手で相手に出来そうだ。では今度こそ行つてくる」

「ふふ、行つてらっしゃい。ずっとずうーつと紫明と一緒に待つてるからね」  
「ああ……必ず帰ると約束しよう」



巖勝は路地裏から跳躍し、鬼殺隊の前に姿を現す。しつかり、薫は紫明を連れて奥へと避難したようだ。巖勝の見開かれた瞳は何処までも赤く血に染まり、瞳孔は猫のように縦に割れていた。

「我が妻子を甚振る鬼畜……不快……不愉快極まれり」

「……鬼だ……やはり月柱は鬼だった！」

「応援を呼べ！ アレはこの人数じゃ無理だぞ！」

鬼殺隊は口々に叫ぶ。声は畏れを孕んでおり、恐怖のあまり腰を抜かして倒れるものが増えていく。まだその方が良かった。問題は勇敢にも鬼へと向かう隊士達。

「私からしてみれば……お前たちの方が余程鬼らしいぞ……鬼狩り共」

——向かってきた一人の隊士の胴を両断する。

鬼となつて尚、流麗な剣筋。隊士は斬られたことに一瞬気が付かなかつた。遅れて上半身だけが頭から地面に落ち、臓物や汚物が零れ落ちる。下半身からは血が吹き出す。怒まだ意識があるだけに命の灯火が完全に消えるまで、地獄という言葉すら生温い程の痛みを味わう。

しかし巖勝は目を合わせずらしい。目を向けるのは柱達。彼らは隊士を助ける、若しくは退くよう命令する。そうしなかったが、体が強張り声が出なつた。



「私のみを対象としてなら……いくらでも許した……現に私に向かっての狼藉や罵倒は任務遂行の観点から規律を乱すもののみ諫めてきたし……些細な事なら……見逃しもした」

—— 想い人を殺された仇に燃え、向かってくる女隊士の頭を殴って破裂させる。

女は重心を失って無様に倒れる。たまたま巖勝の進行方向に横たわるように倒れたため、巖勝は痙攣している体を踏みつける。あつさりと肋を砕き、肺を貫通し、心臓を潰す。

二人殺めても歩みの速度は止まらない。

巖勝は紫紺の日輪刀を納刀する。鞘という密閉された空間の中で刀が極限まで熱され、日輪刀の色が赫へと変わる。四年の時を経て尚、継国兄弟しか発現していない色。鬼にとつては太陽を想起させる恐怖の色であり、鬼殺隊にとつては最強と共に刀を振るえる憧憬の色であった。

「だが、家族に……危害が加わるのならば……別だ」

——顔を蒼白にさせながらも二人の剣士が雄叫びを上げて向かってくる。

顔立ちからして兄弟なのだろう。巖勝は一人の足を払って両膝を砕く。絶叫が上が  
る。片方が勢いを失い、跪いて命乞いをする。その隊士に近づき、右肩に赫く赤熱した  
刃を歩きながら差し込み貫通させた後、高く持ち上げる。

「!! あー、あああ!! ああああああ!!」

膨大な熱量が全て痛みに変換され、肩口を焦がす。気絶すら許さない。たとえ気絶し  
たとしてもすぐに痛みに耐えかねて意識を取り戻す。

そのまま左足目掛けて袈裟懸けに振り切る。

勇気ある隊士は夥しい量の血を撒き散らしながら襤褸雑巾のように転がり続け、臆て  
絶命した。

ここで初めて、両膝を砕いた隊士と巖勝の目が合う。

「……………あ……………つ……………あ」

赤き双眸に見つめられた隊士の本能が、巖勝の暴力的な生命力と圧倒的な生物として  
の差異を感じ取る。結果、生きることを放棄し、呼吸と心臓が止まる。

間もなく虫のように事切れた。

本来鬼に向けられるはずの赫刀が鬼によって振るわれ、鬼を斬るための技術が人を殺す。

敵対するは柱五人、鬼殺隊十四人。

巖勝の纏う空気が急変する。ここまでは蹂躪。これからが戦闘なのだ。

もうそこには始まりの呼吸を教え、数多の鬼を葬り、鬼殺隊を導いた月の柱はどこにもいない。

「来い……鬼殺隊……そして刮目せよ……其は紛うことなき十二鬼月が一人……」

上弦の壺・『黒死牟』なり……」

修羅の鬼を照らす月は血のように赤かった。



「主よ、どうやら主の兄が鬼になる……という確信から、鬼殺隊が薫様と紫明様を人質にとるつもりらしい。主なら主の兄の肩入れをすると推測されて伝えられていなかったらしいが……」

「……すぐに向かう。朝日、うたを起こせ」

「承知！」

## 世話 誰がために振るう刃

——ホオオオオオオオオオ

一匹の鬼が家族を守るために牙を剥く。

（身体中が滾る。通常よりも何倍もの握力で刀を握ることが出来、透き通る世界もより澄んで見える）

柱は何とかして立ち直った。歯が震え鳴るのを止められずとも、刀を構えて戦いに備える。月光の侍から目を離すことが出来なかった。力の威容に飲み込まれかけていたのだ。他の鬼殺隊は巖勝の放つ圧倒的存在感に平伏しそうになるのを精神力で抑え込む。

「だめや……こんなのってないやろ……」

「どうして……ははっ、僕達のせいか……」

「……巖勝……いや、黒死牟。覚悟しろ。鬼は滅ぼ……」

「……」

——  
ゾワリ

巖勝が刀に触れた途端、柱達の体に怖気が走る。世界が震えていると勘違いするほどに体の震えが収まらない。

彼が腰を深く落として構える。途端、空気が重石のようにのしかかる。柱達は取り返しつかないことをしてしまったのだと今更ながら自覚した。巖勝と稽古をした事のある房綱達ですら感じたことの無い程の威圧感、稽古において、巖勝が本気を出さず手加減してくれていたことを暗に示していた。

気づいていた。彼と自分たちとは天と地程の差があることに。でも手を伸ばさずには居られなかった。彼のあり方は鬼殺隊抜きにして侍としての理想像そのものであり、弱きを助け強きを挫く姿は堪らなく尊かったから。

(対峙してみるとわかるなア……こんなに遠くにいたのかア)

(あれは駄目だ。真っ向から戦ってはならない)

(駄目駄目駄目無理無理い!?)

(落ち着け……落ち着け)

—— 刀が振るわれ

・月の呼吸 壺の型 闇月・宵の宮・

居合の構えから放たれるは災厄の月輪。

最早技術で補う必要はない。自らの血肉と血鬼術と呼吸。全てを組み合わせた斬撃は必死である。

「全員っ！……い！ 避けやがれえええ!!」

柱達は身を翻して腰が抜けている者を数人、襟を引つ掴んで無理矢理避難させた。巖勝から振るわれる攻撃は受け切れないという判断の元の行動。それは正しかった。

—— 世界が切り裂かれる

月の煌めきが轟音を伴って周囲の家屋を巻き込む。瞬く間に辺り一帯を更地へと変える。宙を舞う瓦礫は瞬く間に刃によって塵芥へと変わり、数々の裂傷が大地に刻まれる。

鬼殺隊は巖勝に相対するように扇状に広がっていた。屋根の上にも隊士が刀を構えて待ち構えていた。巖勝を逃がさないための布陣である。だがそれがいけなかった。無理もない。巖勝は四年間、殆ど一人で任務を遂行していた。

故に月の柱に間合いは存在しないなんて、信じられなくて当然である。剣士にとって、斬撃が飛ぶなど悪夢でしかないのだ。

一 太刀でこの有様。

一 太刀で町の四分の一が消滅。

一 太刀で鬼殺隊が壊滅。

砂煙が晴れた後には、凄惨な光景が広がっていた。

★

やがて、土埃の中から房綱が顔を出す。柱達は重傷を負ったものもいるが基本的に戦闘続行可能。しかし周りを見渡しても柱以外に起き上がっている者がいないというこ



とは……生き残りがほぼ皆無ということにほかならない。

「……ゴホツゴホツ……無事か、お前ら」

「よいしょっ！」

瓦礫の中から一人抱えた愛染が顔を出す。愛染は頭から血を流しているが、止血済み。

「房綱！　うちは大丈夫やで！　……ほら、怪我とかあらへん？」

「は、はい！　……ふっ……」

「え！　……う、嘘や!？」

ここで初めて、愛染は避難させようと抱え込んだ隊士が逆に自分を庇ってくれたことに気がつく。鋭すぎる斬撃故に斬られたことに気が付かなかったのだ。死の刃は脇腹を抉りとつて貫通している。もう助からない。それでも諦めはしない。仲間の命を易々と諦めていては柱は務まらない。

「大丈夫や、大丈夫やから！　眠ったらあかん！」

「死にたくない……まだ……鬼を斬ってない……」

「分かったから！　もう喋らんととき！　分かったから……」

「……」

「あ……」

「クソがア……!」

房綱は激情に任せて日輪刀を再び構える。そこには既に巖勝の姿はなかった。鬨気も気配もない巖勝を見失ってしまったのは痛手であった。再び見つけるのは至難の業である。

（薫が会話を長引かせたのは、夜まで待たせるためか!? いや考えすぎか。そもそも薫は知っていたのかすら定かじゃねエ。だが巖勝は家族を助けた。……わからんが、そんなことは本人が近くに居るんだし本人に聞けばいいよなあ!）

房綱は単純な男であった。恐怖に歯を鳴らしながらも本能が分かっていたのだ。鬼は滅さなくてはならないと。

「待てよ……俺たち以外の隊士共は。どこいきやがった」

「房綱……後ろ……全部……なくなってもた」

「はア!?! ……マジかよ」

房綱は堪らず振り返る。

見ると数十メートル先まで家々が塵と化していた。中に避難していたもの、喧騒に気づかず眠っていたもの、運悪く巖勝の攻撃の射線上に向かって逃げていたもの。

全滅である。

「一撃……一撃でこれかア」

黒死牟に斬られたものは、ズタボロに切り裂かれる。死体を残すことすら許されな  
い。

房綱は気配を探る。巖勝はまだ近くにしていると確信していた。凡そ生命が醸し出して  
はいけない圧がまだ残っているのだ。

「っ！」

(そこかア！)

・風の呼吸 式ノ型 爪爪・科戸風・

「死ねええ！ 関係エねエモンまで巻き込むんじゃねえ！」

「お前達がそれを言うのか……」

「薫達は該当者だろうがア！」

「お前達の計画においてだろう……そんなくだらない計画の為に……薫は腹を裂かれ  
……紫明は凡そ幼子が経験してはいけない体験を……経験してしまった……何もお前  
たちだけが悪いのではない……私の力が及ばなかったのもある……これが怒れずにい  
られるか！」

——銷魂する。

・月の呼吸 伍ノ型 月魄災禍・

(避けたか……だが腹に一筋入れたぞ)

一人目

・雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃・迅・

裂破の勢いで肉薄した愛染と鏢迫り合う。巖勝は一条の閃光が如き抜刀技を見切った。

「巖勝君！ もうやめて！ これ以上は……」

「……お前は薫が……紫明に危害を加えるなど言った時……やめたのか……？」

「仕方なかったんや！ あんたが鬼になったんなら……なつてもたんなら！」

「その通りだ……仕方なかった……だからこそ私は許せない……剣の道を極めても……最強と互角に立ち会えても……超常の力を手に入れても……大切な人の危機に駆けつけられなかった己自身が」

——絶望する。

・月の呼吸 式ノ型 珠華ノ弄月・  
(足は潰した。雷の呼吸もろくに使えんだらう)

二人目

気配が二つ。瓦礫を突き破つて突進してくる。琴音と正助だ。

「おらっ!」

「……………っ!」

巖勝は受け止める。琴音は左手、正助は右肩を損傷していた。加えて所々木の破片が痛々しく突き刺さっている。

「……………腕を上げたな琴音、正助」

・岩の呼吸 参ノ型 岩軀の膚・双槍・

・水の呼吸 捌ノ型 滝壺・

互いに片腕を失っているとはいえ、二人がかりで隙を潰す。上から且つ重い型を選んだ。

「……………悪鬼滅殺」

「ほう……『悪』鬼か」

「鬼は悪だ！ 鬼がいるから人は夜を脅えて過ごさなければいけない！」

「見ていたぞ……指文字で……『再び薫と紫明を捕らえて人質にしろ』などと……隊士や隠に命令していたな……」

「……薫やあの子供が巖勝にとつての大切なら……もう一度人質にするまで」

「最早……悪びれもしない……か」

——絶望する。

巖勝はあっさりと二人の得物を弾く。そして琴音の槍を正助の腹に、正助の日輪刀を琴音の肩に突き刺す。

「……………あぐつ」

「いっ……………」

「下手に動けば……臓物がまろび出るぞ」

三人目、四人目

（最後は……）

・炎の呼吸 壺ノ型 不知火・

「薫を何処へやった……!」

「義兄上……」

「鬼に兄と言われるのは些か腹立たしいな! 俺はお前の兄でもなんでも無い!」

暢寿郎を弾き飛ばす。両者距離が空く。暢寿郎は刀を後ろ手に構え、独特の構えで闘気を高める。寸分の隙もない構え。暢寿郎の頬に痣が浮き出る。

(威力を高めた一撃で決める!)

・炎の呼吸 奥義 玖ノ型 煉獄・

踏み込んだ地面から炎が吹き出す。煉獄の龍が大口を開けて、敵を屠らんと巖勝に差し迫る。

数寸まで肉薄されても巖勝は眉ひとつ動かさなかった。

(ああ、やはり五人の柱といえど、縁壺より遥かに弱い——)

——失望する。

「なんと遅い……なんと弱い……そしてなんと脆い」

「!?!」

刀を上へと放り投げる。刀に注視していた暢寿郎が意識を持っていかれる。巖勝は必殺の刃を白刃取りの容量で挟む。

——パキン

そして刀をへし折った。

驚く暢寿郎の無防備な脇腹へと横殴りを叩き込む。暢寿郎は大地に数回体を当てた後、瓦礫の山に突っ込んだ。

(咄嗟に横へ飛んだか……手応えが軽かった)

・月の呼吸 陸ノ型 常夜孤月・無間・  
ダメ押しの一撃を瓦礫の山に叩き込む。

「こつちだああ！ 巖勝！」

・風の呼……

・月の呼吸 拾ノ型 穿面斬・羅月・

「ちつ……暢寿郎、下がれ！ そこの剣士の刀を拾ってこい！ バキバキに砕けてるかもしれないえがなア！」

(なんでこいつはこうも速いんだ。こいつには……何が見えている?)

「一人で立ち向かうな！ 必ず複数で切りかかれ！ でないと押し切られるぞ！ ……」



正助エー！ いるんだろ!? 合わせろオ！」

・水の呼吸 式ノ型 水車・

「言つちや意味無いでしょ……っ！」

「……む」

渾身の一撃が刀に叩きつけられる。火花が散り、正助の日輪刀が赤みを帯びる。

(……刀の焼けるような匂い? ……)

「正助え！ その調子でお前の刀を鬼の刀に叩きつけるお！」

「そうはさせ——」

・雷の呼吸 陸ノ型 電轟雷轟・

・岩の呼吸 伍ノ型 瓦輪刑部・

・炎の呼吸 伍ノ型 炎虎・

・風の呼吸 漆ノ型 初烈風切り・

瓦礫から柱達が再び飛び出してくる。各々着物を止血帯にして出血箇所を縛ったり、紐で刀と腕を縛り付けたりと痛々しい傷が目立つが、目から鬨気は消えていない。

(暢寿郎は死んだと思っていたが……やむを得んな)

仕方なく、計五本の刀を受け止める。受け止めてしまう。

「っ！」

(不味いか……)

今、巖勝の振るっている刀は日輪刀である。さらには痣を出した柱五人を合わせた力と互角以上の力を巖勝は持っている。故に赫刀の熱が程よく柱達の日輪刀に伝わり、熱量が摩擦とともに底上げされる。

生まれるは五振りの赫刀。

「どうだア巖勝！ お前や日柱と同じ色だぞ！ はっはっは！ これで鬼ということ以外お前と互角だア!!」

「房綱！ 血！ 血吐いてるから、叫ばんとき！」

(これらの刀で斬られる……いや体を貫かれるのが一番まずい)

原作の岩柱と互角、もしくはそれ以上に強い柱が五人。加えて一撃だけでも受ければ確実に動きが鈍る赫刀。更には……

(柱稽古もしているな。それも五人全てが思い思いに。私への対策か)

隙の無い連携で攻めて来る柱達には、次に互いのだす技が何かなのかを把握して、着実に巖勝を追い詰めている。

しかし——

「五人合わせたところで……遠く及ばぬぞ……!!」

・月の呼吸 拾陸ノ型 月虹・片割れ月・

相手は五人。地を這う斬撃も五連撃。柱達を牽制する。巖勝は少しずつ自分の力がどのようなものか分かり始めてきていた。

柱達が発現した赫刀。縁壺の写し身かのようなそれは本物に比べ酷く劣っていた。巖勝はその柱達の姿が、縁壺に手を伸ばして結局模倣しか出来無かった自分を見せられているように耐えられなかった。

(そうではないだろう巖勝。薫が、紫明が、そして炭吉が肯定してくれたでは無いか……それに、鬼になった私だからこそできることがある)

「試してみるか」

巖勝は日輪刀を収める。

・雷の呼吸 参ノ型 聚蚊成雷・

・風の呼吸 仇ノ型 韋駄天台風・

今が好機と捉えたのか赤雷と赫風が巖勝の着物を削ぐ。

巖勝は目を閉じて集中する。怒涛の猛攻は全て体が避けてくれる。

手のひらを軽く開く。

刀を血肉で創る。

鉄は血潮で、芯は堅骨。

幾多の命を吸い取って煌々と輝く。

誰ひとり逃れること能わず。

何ひとつ残すこと叶わず。

鬼は常に独り 満たされた世界を掴み取る。

故に、立ち塞がるものは昏き死へと誘われる。

その体は、きつと血の一滴に至るまで黒死の刃でできていた。

光ははじけるといったかつこよさなど皆無。手の平から文字通り生えてくるような形で刀が生成される。瞳が一行に並んでいる不気味な刀であった。

創れたはいいものの、材料は鬼と化した自らの血肉。

(やはり赫刀相手では相性が悪すぎるか……だがまだ冷たい……私や縁壺の赫刀には遠く及ばない。特に縁壺の赫刀はあんなものではなかった)

・岩の呼吸 壺ノ型 蛇紋岩・刺突・

・風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹・

一本目・旋風と石龕によってバラバラに刻まれる。

・水の呼吸 壺ノ型 水面切り・

・炎の呼吸 式ノ型 昇り炎天・

二本目・劫火と濁流によつて碎かれる。

三本目、四本目、五本目……掴めてきてはいるものの、密度や強度といった無惨の血が関係する所が致命的であつた。

(無惨からもらつた血の量が圧倒的に足りなかつたか)

巖勝は方向性を変える。

研ぎ澄まされた一本が効かないのなら、質より量。

・月の呼吸 肆ノ型 虧月突・

「っ!?!」

「なんでもありかよー!」

片っ端から長刀を創り出す。その刀を今度は拳で打ち出したり投げたりして使う。云わば消耗品としての刀。

かくして凶刀が四方八方に撒き散らされた。柱達の頬の数寸近くを死が通り過ぎる。そうやってギリギリで避けたとしても皮膚が着物ごと持つていかれる。

(不味い!)

打ち出された刀にも飛月が付随していた。持ち前の勘で房綱は避けるが、体を薄く割

かれた。各々も何とかして避けてはいたが、巖勝と柱との距離が離れる。柱達はまた死の月を潜り抜けて接近せねばならない。

愛染は足、正助は内臓と右肩、琴音は左手と右肩、暢寿郎は内臓を損傷若しくは欠損している。

対して巖勝は無傷。

「正助、短期決戦だ」

「夜明けまで待つことは？」

「いや、こうしている間にも、あいつは探っている。鬼となった自分は何ができて何ができないのか……控えめに言って絶望的だなア」

「でもほら房綱君、刀が継国兄弟みたいに赫くなったで。……これで巖勝君を斬れば……」

「愛染、『黒死牟』だよ。それに……」

「私から目を離さなければ……対応できるとでも思っていたのか？」

「「「「!?」」」」

（いつの間に!?）

・月の呼吸 拾肆ノ型 兇変・天満織月・

至近距離での広範囲技。巖勝から近づいてきてくれたはいいものの、また防戦一方の戦いに持ち込まれる。

「うおおおおお!!」

暢寿郎が斬撃の嵐を掻い潜つて巖勝に迫る。巖勝の拾肆ノ型を掻い潜れるということは、透き通る世界が見えているということに他ならない。

「視えているのか……この世界が……だが遅いと言っている」

巖勝は手の平に刀を生成し、柄頭を殴って一直線に飛ばす。

投げた刀は暢寿郎の胸に突き刺さるが筋肉で無理やり軌道を変えて肺に到達するのを防ぐ。しかし勢いを削ぐことは出来ずに、彼の体を地面に縫い止めた。

透き通る世界が見えたからといって体が追いつけるはずがない。慣れていないもの

は透き通る世界の維持に意識を割かれる為、必然的に動きが鈍くなるのだ。

倒れた暢寿郎に巖勝が歩み寄る。

「鬼の力を測るため手加減していたとはいえ……お前への殺意は本物だった……薫の傷は一生残るだろう……ただし鬼にならない限りは……な」

「つ……… 貴様あ！」

巖勝は刀を構える。暢寿郎は肩に刺さっている刀を抜くことができない。刀が形状を変えて、地面に根を張っているのだ。

「煉獄っ！」

「やめろ！ 巖勝！」

「……」

刀を振り下ろそうとして、巖勝は少し躊躇う。暢寿郎の苦痛に歪んだ口元が、少し、ほんの少しだけ薫を想像させたのだ。だが、それも一瞬。だが躊躇った。

鬼が人を殺すのを躊躇い、人が鬼を殺すのを躊躇わない。

何故なら鬼は悪なのだから。

▪ 月の呼吸 拾漆ノ型……▪



—  
!!  
—  
!!!

甲高く、抑揚が特徴的な笛の音が鳴り響く。それは紫明の持っていた笛の音。紫明と紫明を抱えている薫に危機が迫っていることを残酷にも示していた。

巖勝は技を出す手を止めてしまふ。目を見開き、聞き間違いではないかと疑ってしまひ、堪らず視線を向けた。

(避難できていない……だと？ 新手の鬼殺隊か？ 薫が、紫明が……向かわなければ

！ 助けなけれ……………)

・水の呼吸 肆ノ型 雫波紋突き・

「……………がつ」

真上から正助が刀を逆手に持って落下してくる。

完全な無防備。正助は暢寿郎を囷にして好機を伺っていたのだ。それも透き通る世界を発現して。

無慈悲に、巖勝の首に赫刀が突き刺さる。焼け付くような痛みが巖勝を駆け巡る。傾くことのなかった戦局が、一気に傾く。

「……………ぐ……………がああああああ!?!」

「よくやった！ 正助ア！」

(首を熱した鋸の刃で絶えず引き切られ……………痛い痛い痛いいたいいたい!!)

「ああああああああああああ!!!!」

最早それは人の声帯から出される声ではない。獣混じりの濁った咆哮である。

(巖勝君……本当に鬼に……)

「今だ！ お前ら！ 攻撃の手を緩めるなああああ！ 首を切り落とせええ！ 正助！

もつと強く握り締めろ！」

「……！ はああああ!!」

刀を突き刺している正助に痣が浮き出る。水色の泡のような痣である。同時に赫刀の温度もさらに上がった。巖勝は痛みに悶える。生成した刀も形を成さずに灰となる。暢寿郎は助け出された。

降つて湧いた好機、悪鬼は今しか倒せない。

「……！ 今だ！ たたみかけろ！ 愛染は薫共の所へ……」

「行かせるものか……！」

・月の呼吸 漆ノ型 厄鏡・月映え・

(こいつら……土壇場で力が増したのか!? どういう原理だ!)

巖勝の体が脈打つ。

これ以上突き刺していれば、自分の身が危ういことに気がついた正助は刀をさらに握りしめて刃の向きに切り飛ばして離脱する。

「がつ！」

(……比較的柔らかい頸……鬼になって日が経っていない……? いや、完全に鬼にすらなっていない! 半人半鬼のようなものか! それでこの強さ……)

今の巖勝の首の皮と少しの筋繊維が数枚繋がっているようなものであった。鬼の肉体改造で無理矢理神経だけを繋いでいるに過ぎない。

それでも巖勝は身を返して笛の音の源に向かおうとするが、柱達が回り込む。

「逃がすな! 挟むように戦え!」

「隠! いるやろ! 炎柱を頼んだで……!」

「どけ……屑共がつ! 私の邪魔をするな!」

(技が出せん……!)

(体に入力が入っていない。今なら首を切れる!)

柱達は欠片も、少しも、微塵も躊躇わない。心の底から恐怖しているのだ。今ここで黒死牟を倒さなくては後々もって手がつけれなくなることに。恐怖は時に手足を動かすための揺るぎない原動力となる。

・岩の呼吸 式ノ型 天面砕き

・水の呼吸 拾ノ型 生生流転

巖勝の刀を持った腕が切り飛ばされる。首の再生に全ての力を注ぎ、赫刀で斬られている以上、再生する術はない。今度は琴音が薫達の方へと足を早める。巖勝は体が動

かない。五臓六腑が焼き着れるような痛みに視界が明暗する。

刀が迫ってくる。

「薫……紫明……」

（強くならねば……強く、強く……！）

巖勝は負けられない。

今ここで死ねば、紫明は鬼の子として忌み子の扱いを受けるだろうし、薫は切腹を命じられるだろう。

——駄目だ。あつてはならないのだ。そんなこと。

対等にならなければただ搾取されるだけ。前世は権力により搾取された。今世は力がある。

巖勝の頬に線が刻まれる。否、瞳である。

獣は瀕死の状態が一番強い。

人ならば既に死んでいるような傷。

火事場、土壇場、修羅場。

死の淵を垣間みた生物はより強靱になる。死を回避する為に通常生きていく上では

不必要だった感覚や力の扉が開かれる。扉を開けなかった者は死に、扉を開いたものは

巖勝は項垂れる。

無惨の細胞すら物の数ではない。

巖勝の細胞全てが戦えと、死ぬのなら全てを壊してから死ぬと叫んでいる。

(黒死牟の動きが止まった!?)

「今だ！ 首を落とせえ！」

「もらっ——」

ガ——ツツ——  
!!!!

濁音から始まったこの世のものとは思えないほどの咆哮。同時に巖勝の体から鈍色

の衝撃波と共に無数の飛月が凡百方向へと放たれる。

黒死の刃は、いとも容易く世界を蹂躪した。

「ぐはあっ!？」

(体が動かない……………! 毒か!?)

柱達は自分の体が思うように動かなくなる。悲劇はそれでは終わらない。畳み掛けのように街の周囲から囲うように夥しい数の鬼の気配が発生した。

「……………今確かに……………!」

「鬼の声やんな!? なんぞ!？」

(鬼が増えていのだと!? 何が起こっている!?)

混乱を隠せない柱達の視界に一人の男が映る。黒い着物を着た男である。

「ほう……………私が折角作った右腕の家族を人質にとるとは……………やはり鬼狩りは異常者の集

まりだな……」

中肉中背。だが漏れいずる威圧感は巖勝に次ぐ。柱達は動けない。威圧されてでは無い。この男に威圧感で勝る存在に先程まで黜られていた所である。動けない理由は単純に巖勝の放った最後の攻撃が直撃したから。

先程の戦闘が嘘のように静まり返る。柱達はとりあえず傷を呼吸で癒すことにした。

「なんだ？ お前の支配が解けているな……まあいい、虫どもの住処を暴いた褒美だ、受け取れ」

男の触腕が巖勝に突き刺さる。巖勝はそれを避けようともせずに受け入れた。その男から尋常ではない量の血を輸血されて、巖勝は痙攣しながら崩れ落ちた。

圧倒的存在感。

生物という範疇の頂点。

「呼吸を使う剣士にはもう興味はない。こいつがいれば十分だ。鬼狩りは今夜潰す。私  
がこれから皆殺しにする」

鬼の始祖・鬼舞辻無惨が戦闘に介入する。巖勝は動けない。支配に抵抗するので精一杯。

「さあ。死ぬ」



無惨の触腕が振るわれる。柱達は既に瀕死の状態。距離をとり、回避に専念するので精一杯。それどころか搦手や未来でも視えているかのような攻撃をしてくる巖勝に比べる力任せな攻撃をしてくる分、断然避けやすかった。

「ちよこぎいな……!」

腿から八本の管が柱達に迫り来る。愛染は片足を潰されているため、咄嗟の事態には対応が遅れた。

(あかん! 避けきれへん!)

・日の呼吸 玖ノ型 輝輝恩光・

無惨の触腕が全て切り落とされる。現れた救世主は巖勝を一瞥した後、怒りを顕にする。斬られた本人は激痛に加えて再生しないことに困惑していた。

「遅れてしまい、申し訳ない……兄上」  
今此処に太陽が降臨した。

## 世壺話 鬼子母神

薫は逃げていた。屋根の高低差をもものともせず、一直線に町の外を目指す。彼女はただ帰れたかった。あの日常に戻りたかった。あの腕に我が子と一緒に抱かれたかった。それだけが今や果てしなく遠い。

「止まれ」

「あら？」

一人の隊士が薫の前に立ち塞がる。元より町の警護を担っていた隊士である。計画の概要も理解していたため、薫の逃走にいち早く駆けつけられたのだ。

「刀を置いて、降伏しろ。万が一人質が抜け出した場合は子供諸共切り捨てる許可を貰っている」

「ふーん」

薫は笑う。凄惨に、啜う。

「やれるものならやってみなさい」

隊士の宣告に返ってくるのは底冷えするような声。薫は紫明を持つ手に力を込める。紫明は母の温かさに包まれて眠りながら微笑む。我が子の可愛さに少々悶絶した後、もう片方の手で日輪刀に手をかける。

薫が降伏の意思を示さないと判断した隊士が指笛で仲間を呼ぼうとする。

「……………え？」

一瞬だった。

支えがなくなつて、隊士の視界が宙をむく。激しい痛みが手足を焼いた。彼の手首は笛を掴んだまま地面に落ちており、足は付け根から両方とも斬り払われていた。未だ情報処理しきれしていない彼の耳には、刀を納刀する軽快な音がやけに鮮明に聞こえた。

薫は強い。柱達と互角以上に渡り合える実力は伊達ではない。遅れて自分の四肢が喪われていることに気がついた哀れな隊士は泣き叫ぶ。

「あ、ああつ！ 足、俺の……………足！ ……ひっ……………く、来るなっ!!」

隊士に薫という死が近づいてくる。逃げられない。避けきれない。子に危害を加え

ると高々に宣言された母の怒りは生易しいものでは無い。

「やめでええたすげで……………つ……………」

「むう……………紫明が起きてしまうではありませんか」

容赦なく首を落とす。笛がなくても叫ばれると面倒だった為、息の根を止める必要があった。物言わぬ骸となった隊士。薫の興味は既に彼から外れ、向かってくるもう一人の隊士の気配に向いていた。

程なくして進行方向から一人剣士が駆け寄ってくる。薫はその顔貌に見覚えがあった。女性として、恋敵の把握は欠かせなかったのだ。

「あら、阿茶さん……………でしたっけ？」

向かってきた隊士は阿茶だった。嘗て巖勝に最終選別で命を救われ、縁壺を師と仰いで師事し、道場を訪れた巖勝に月の呼吸の道場は無いのかと聞いた人物である。

彼女は四年で風格も剣気も格段に上昇していた。腰に指してある刀をは紛うことなき日輪刀であるし、常に呼吸法を使って呼吸している。

薫は先程殺した隊士よりも格上と判断して、この場を立ち去ろうとする。口封じするよりかは、戦う方が手間だと判断したのだ。

「薫さん……………ですよね？ え……………？ 今斬ったのって……………!？」

「ただの屑です。私は行くところがあるので少し失……………」

- ・日の呼吸 式ノ型 碧羅の天・
  - ・暁の呼吸 壺ノ型 暁闇の明星・
- (ま、そう簡単にはいかないか)

薫が言い切る前に阿茶が斬りかかってくる。跳躍してからの腰を支点とした半円切り、薫は迎え撃つように片手で燕返し。

すれ違った後に肩から血を吹き出したのは……阿茶の方であった。

「……………」

「危ないですよ阿茶さん……紫明が目を覚ましたらどうするんですか。悪いことは言いませんから、退くことをお勧めします」

「戯言を。それに師匠の呼吸の模倣……甚だしく不愉快です。裏切り者。子供諸共に腹を切つて師匠にわびなさい」

「苦しそうな顔で言われても怖くないですよ。それに……貴方が不愉快なのは師匠である縁壺君の呼吸を使つてゐるからではありませんよね」

「……………何を」

薫が得意そうに口を開く。阿茶が醸し出す感情は不愉快や不快感等といった生易し

いものではなかった。もつと強い感情。憎悪や憤怒である。

「私の呼吸に月の呼吸の面影を見出したでしょう？ 私が巖勝君の呼吸を使っているのが気に入らないのですね」

「……」

「動揺しましたね。私の読みは的中し……」

・ 日の呼吸 壱ノ型 円舞 ・

（折角、かっこいい台詞を言えると思ったのに……まあ、冷静さを奪えたのは僥倖ですね）

薫は半身で構えた刀で受け止める。相手を挑発して尚、彼女の目は冷ややかに敵を見定めていた。対照的に阿茶の目は激情に燃えている。戦場で感情を発露することが致命的なのは阿茶も理解しているが、それでも譲れない物が彼女にはあった。

「あなたが！ 巖勝様を誑かした！ あの方は鬼になるような人ではなかったというのに……！」

「……何か勘違いをされているようですが……」

「黙れ！ ありえないありえないありえない！ あんなに綺麗な剣技を振るうような方が鬼に堕ちるなどと……あつてはならないのです！」

阿茶は阿茶なりに巖勝を理解しようとしていた。結果生まれたのは欠点も弱点も曇りもない、鬼なんかよりも圧倒的に強く、優しい最強の侍それが阿茶の見出した巖勝像であつた。手を伸ばせば燃え尽きると分かつていても手を伸ばさずにはいられない存在。

故に完璧な人間を鬼に墮としたとされる薫を、阿茶は許せなかつた。

「それに、あの方は！ あの方の呼吸は……！ 私一人が受け継ぐべきだつたんです！ 模倣も許さない！」

皮肉にも阿茶は柱達と同じ結論に至つた。彼女の持つ完璧な人間としての彼は死ぬ訳にはいかなかつた。死ぬのなら自分の思い出のままの姿で死んで欲しい。だから巖勝の持つ月の呼吸を彼女は自分だけのものにしようとした。そうすれば彼女が見蕩れた呼吸は残る。誰にも犯されない理想を手に入れることができるのだ。

薫は不快感を露わにする。傲岸不遜な考え方に顔を歪めた。

「正気とは思えませんね……貴方頭大丈夫ですか？ 本当に吐き気がする……貴方の目には月の呼吸だけで、巖勝君が映っていない」

（ですが、自分の理想を押し付けているのは……私も同じですね。それでも私は彼に見



ていて欲しい。彼の瞳に映るのは私がいい。私だけの声に振り向いて欲しい。なんて醜い女。それでも……私は彼に受け入れられて、この女は受け入れられなかった……）

激昂する阿茶を見て、満たされるはどす黒い欲望。想い人の幸せを願うと同時に自分に染め上げてしまいたいという二律背反の願ひ。たとえ巖勝が薫の本性を知ったとしても笑って受け入れてくれるという自信があつた。そうやって巖勝を想う気持ちが薫を無限に強くさせる。薫にとって彼は、手を伸ばせばいつだって掴み取ることができる太陽であつた。

・暁の呼吸 伍ノ型 天流乱星・

大上段からの振り下ろし。

単純な技だが片手で振り下ろすことにより間合いが伸び、単純な技だからこそ使わない筋肉に供給されている酸素を全て片手に集約させる。日の呼吸の特徴である、使用者の肉体強化という点に着目した型。

（速い!? それに斬撃が重い!? 威力が感情に左右されるとでも言うの!?!）

攻撃を受け止めきれずに阿茶の体が吹き飛ぶ。阿茶は空中で一回転して着地した。傷はない。しかし力で易々と押し切られたのは事実。阿茶の額に冷や汗が流れる。

「それに巖勝君以外が振るう月の呼吸なんて、月の呼吸じゃないですし」

「っ……お前が言うなあああー!」

・日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽・

・暁の呼吸 肆ノ型 壊劫・

（私の方が速いですね……このまま腕を斬り飛ばしましょう）

（そうだ。あの方の子供なら……月の呼吸が使える……使えてしまう……使えるかもしれない）

力の差は歴然。このまま行けば阿茶は四肢のどれかを失い、薫に逃げられてしまう。

走馬灯のような思考の中、結論に至る。敵が母親ならば狙うべきものは一つ。

阿茶は剣の軌道を変えた、それは真つ直ぐ紫明に向けられる。

「なっ——」

紫明の喉を刀が刺し貫く未来が見える。薫はそれを全力で阻止する。

このままでは薫の刀が阿茶に届いたとしても、阿茶の黒刀が紫明を刺し貫くと判断したのだ。

「っ」

薫は何かかして、紫明の着物が多少裂かれる程度に済ませる。紫明には傷一つ着いていない。しかし薫の背中に浅くない傷が刻まれる。背中に赤い線ができ、着物が血に染まっていく。

(まーた傷ついちゃった。巖勝君の顔が悲しみに歪むのは見たくないんだけどなあ……)

「ぐっ……」

「ざまあないですね裏切り者……！ 次こそはその腹の立つ童……」……と

阿茶が突然勢いを無くす。彼女の目は見開かれ、先程の余裕は嘘のように霧散し、息が荒くなる。堪らず日輪刀を落として、後ずさる姿はまるで怯える子犬のようであった。

「お前……それ………は？」

「……バレましたか」

切り裂かれた紫明の着物。その隙間から露出された背中から肩にかけての巖勝と同じ炎のような痣。

「あ……うそ……ああああ」

阿茶は頭を掻き耨る。髪が振り乱され、目が充血する。幽鬼のような形相で睨めつけた。

「どうして！ どうして！ どうして！ どうして！ どうして！ どうして！ どうして！ いつもお前達だけが！ どうして私はあの方に対して何も残せない！ どうして私はあの人になれない！ どうしていつも私ではなく、お前達だけが目にかかけられている！ 私とお前達の何が違う!？」

貪欲な愛が、偏屈な愛が、迷子の愛が、皮肉にも阿茶を最適解へと導く。どれだけ歪んでようが愛は愛であり、強い感情なのだ。

阿茶が狙うのは紫明一人。紫明を攻撃するだけで薫はそれを守るために防戦一方になり、勝手に傷が増えていく。そうやって阿茶の自尊心が満たされていく。

あわよくば鬼子諸共に斬るつもりで。

子を守るために戦う母、それをいいことに斬りかかっていく剣士。これでもまだ薫と紫明は誅殺対象である。

・日の呼吸 拾弍ノ型 炎舞・

「……………か……………ふっ」

加えて、日の呼吸は連撃を与え続けるには最適すぎた。拾弍ノ型全てが円環を成して一周する頃には薫は紫明の周り以外血濡れであった。

最後に浅くない傷をつけられて。薫は血溜まりに膝を着く。だが対照的に紫明には一切血が着いていない。薫の刀を握る右手や頬、足は着物が真っ赤に染まるほど傷だらけであったが、紫明を抱える左手に傷はひとつも着いていなかった。

薫は痙攣する体に鞭打って立ち上がる。

「な………んですかあなたは………立ち上がれるような傷じゃないはず………」

薫の痣がさらに濃く、大きくなる。

「本当に………揃いも揃って屑しかいませぬ………理解不能です。巖勝君が居るから今の鬼殺隊があるというのに。その優しさに漬け込んでおきながら鬼になればすぐ処分………なんですか？ 貴方たち鬼殺隊は………紫明を………私を………巖勝君をなんだと思っ  
ているんですか？」

「っ！ お前が！ その名前を！ 口に出すなあ!!」

・ 暁の呼吸 弐ノ型 参魂天羅

・ 日の呼吸 参ノ型 烈日紅鏡

「ふんっ！」

薫の刀は阿茶の刀と鏢迫り合い………阿茶の日輪刀を叩きおった。折れた刀身が宙を舞い、地面に突き刺さる。だが間合いが有利になっただけであり、鬪志は消えていなかった。

「あああああ!!! 許さないいいい!!」

「それでも向かってきますか……いいでしょう」

(腕の一本くらい覚悟しますか……)

——赫刀が阿茶の腕を薄くなぞった。

太陽の耳飾りを揺らして到着したのはうたを抱えた縁壺。担がれているうたは顔色が悪かった。兄の危機に駆けつけるためにうたを担いだ縁壺が全力疾走したのだ。担がれているうたも最初は家族の危機に我慢していたものの、今や吐きそうであった。

「師範!! なにを!!」

「縁壺君……ですか」

(万事休す……ですかね)

薫は鬼殺隊の首を切ったことを少し後悔していた。縁壺が鬼殺隊に情をかけた場合、脱出が少し難しくなる。縁壺が薫に刀を向ける可能性があるのだ。

「阿茶。私怨で手を出すのは鬼と変わりない」

「……な……んで……腕が……」

「今私は腕の腱を割いた。力を入れれば激痛が迸るだろう。日常生活に支障は無いが、お前はもう二度と刀を振るえん」

縁壺の刃は赫い。人の身ならまだマシだが、たとえ阿茶が傷を癒すために鬼になったとしても傷が焼けるように熱く痛むだろう。絶望的な表情を浮かべて倒れ伏す阿茶を縁壺は受け止めて寝かせる。

縁壺は薫の前に片膝を着いて頭を垂れた。

「遅れてしまい……申し訳(ご)ざいません。義姉上」

(似てるなあ)

「来てくれて本当にありがとうございます。縁壺君」

「は……」

縁壺は黙り込む。義姉が人を殺す必要に迫られ、傷だらけなのは自分の到着が遅れたことでもあるのだと本気で思っているのだ。薫は少し悲しい顔をする。



「……縁壺君」

「はい」

「貴方は優しいですね。しかし、優しすぎるのも考えものです。貴方は自分が他者より特別強く生まれたのは他者を助けるためだと思っただろう？」

「はい」

縁壺は間髪入れずに答えた。

「その考え方は万人が尊く正しいと讃えるでしょうが、助ける対象にはあなたも入っているのですよ」

「自分で……自分を助ける……ですか？」

「ええ、弟が不幸でありながらも……誰かの幸福の為に奮闘しているのは……寂しいですからね」

（兄上と同じ目だ……言葉が心に染み渡る）

縁壺はこの目が好きだった。本当の姉のように、いつでも欲しい言葉をくれる薫の慈しむような目。いや、本当の姉なのだ。守らなければならない家族。

「義姉上、私は……」

「ええい！ 縁壺！ 後にしろ！ 薫も薫じゃ！」

隠の家からありつたけの包帯と諸々の治療薬を両手に抱えたうたが飛び出してくる。

「最後にひとつ……！」 縁壺君は今の私を見て、どう思いますか？」

「……怒りませんか？」

「ええ、縁壺君の目に、私はどう写っていますか？」

「……鬼子母神だな……と」

「ふふっ……」

満足そうに薫は倒れた。衝撃に揺れた紫明が目を覚ます。見上げると母親が血塗れで倒れているのが目に入った。直ぐに笛を吹く。この音は巖勝の所まで届くだろう。

縁壺はそんな紫明をとてもし訳なきような目で見つめていた。

「義姉上……!?!」

「相も変わらず天然だな縁壺は!?! わしが薫を見る！ 縁壺は義兄上を頼んだぞ！」

「……分かった。うた。あとは頼む」

「任せろ！ ……紫明。我らは敵などでは無い。お前の母を助けに来たのだ！ このわしに任せよ！」

「……」

薫の治療に取り掛かったうたを尻目に縁壹は走り出す。縁壹は紫明をあやすうたをこんな状況でも愛おしく思った。

（状況は思ったよりも深刻か。兄上は人を殺した。それは紛れもない事実。だが、柱達の策略も残酷が過ぎる。もしもだ……もしも仮に俺が兄上の立場でうたと子供達が人質に取られ、最悪うたが斬り殺された時……俺は鬼殺隊を許せるのか？それに、もし既に兄上が殺されていた場合、俺は……仕方なかった……どうしようもなかったと受け入れられるのか？）

——遠くで、鈍色の衝撃波と月刃が夜空を犯した。

## 世式話 太陽の具現と鬼の始祖

(圧倒的に血が……足りてないのじゃ)

うたは苦悩していた。

「死なせるものか！ 儂の大切な『姉』を……家族を失うのはもう嫌じゃ！ 義兄上は縁壺が助ける。儂は薫を助ける！ 夫婦で共同作業じゃ！」

薫の顔は死人のように青白くなっており、生気に乏しかった。

うたが自分のやれることをありったけやっている、心配が一つ。建物の影に隠れているのに気がついた。

「……！ 誰じゃそこにおるのは、見ておらんと手を貸さんか！」

人影から顔を出した人物の目は赤かった。うたの体が強ばる。だが手はとめない。手を止めれば薫は死ぬからだ。

「危害を加えるつもりはありません。私は珠世。私ならばその方を助けられるかもしれない  
ません」

「……そなたは鬼であろう？ 信用ならん。去るがよい」

うたは懐から笛を取り出した。

「信じてください。なぜか始祖の私に対する支配がどんどん弱まっているのです。このままではその方は死んでしまいます。しかし、私は今……治療法を知っています……どうですか？」

「……」

今の状況は猫の手ならぬ鬼の手を借りたい状況。悪意や敵意がこれっぽっちも感じられなかったので、うたは珠世を受け入れた。

珠世は駆け寄ると同時に驚愕した。薫の状態は最悪所ではなかった。出血多量。裂傷。打撲。もはや生きていることが奇跡。

母親の危機に目を覚ました紫明は、そんな母親を心配するよう手を伸ばしている。

「かーさま……え……あかい……ち？」

「……ごめんさい。少しお母さんから離しますね」

珠世は罪悪感を感じながらも紫明を母親のそばから離す。薫を一刻も早く治療しないと手遅れになる。紫明は今自分に来ることはないと理解して抵抗せず、されるがままになっている。

薫の着物をはだけさせると澄み切った肌に痛々しい傷が刻まれていた。

(……本当になんで生きていられるんですかね)

珠世は脳内に次々と浮かび上がる疑問に一旦蓋をする。そして自らの懐から出した小包から数本の筒を出す。

「それは……」

「鬼の血です……尤も薄めたりして措置は施していますが」

うたは薫の容態を察する。

「それほど迄に、深いのだな」

「もはやなんで失血死しないか不思議なくらいです。特に脇腹の傷が酷い。これは少し前に斬られたのでしょうか。なのにほかの傷とは一線を画するほどに深い」

ここまではするのも珠世には目的があるからである。ここで薫を何がなんでも治療する。そうすれば巖勝に恩を売れるのだ。運が良ければ味方へと引き入れる口実になる。珠世は確信していた。巖勝が無惨と協力すれば、最悪の未来が待っていることを。

「この方は今暴れている鬼の大切な人なのではないでしょうか？」

珠世の言う鬼を指す人物はうたにとっても大切な家族であった。

「まだ義兄上は鬼では……」

「いいえ、もう鬼に成っていますし、鬼舞辻の血を飲まずとも、貴方の兄は根っからの鬼です。あれほど冷徹で機械仕掛けのような目を私は知らない。『人間』という範疇では

ないどころか有り余る存在です」

「そんな鬼ではない！ 少なくとも……少なくとも兄上は優しい鬼じゃー！」

「優しい鬼。だなんて存在しません。鬼は総じて醜く、卑怯で、身勝手な存在です」

うたは隠として多くの鬼の被害者を見てきた。鬼の精神性を疑うような死体や吐き気を催すほど考え方の歪んだ鬼もいた。

しかしそれらを考慮して尚、巖勝は大好きな家族の一人であり、彼女の中で他の鬼とは一線を画する気がした。

それが揺らぐ。

うたの目から見た珠世の瞳は絶望に染まりきっており、鬼に想像を絶するような扱いを受けたことが容易に推し量れた。何より、経験者としての珠世の言うことは説得力があつたのだ。

言葉とは違い、珠世は自嘲気味な笑みを浮かべる。

（鬼ですね……私も……純粋な善意ではなく、あの修羅を利用する目的で大切な人を救うのですから）

珠世は自己嫌悪に陥る。万が一縁壺が無惨を逃した時、縁壺に並ぶ実力者且つ長き時を生きれる存在をこちら側にひきいれておきたいのだ。

自責の念をありありと浮かべる珠世を見たらうたが、包帯を巻きながら口を開く。

「多くの者は義兄上を利用したり、手に余るものとして除こうとする。今がそうじゃ」

珠世は顔を歪める。自らの行いは無惨のしていることと何ら変わりはないと思つたのだ。

「じゃが、お主が薫を救っているのは紛れもない事実。人質にとるなぞより遥かにマシじゃ」

今度はうたが顔を歪める。

鬼殺隊、無惨、珠世は継国兄弟に全てを背負わせようとしている。在り方の違う二人ではあるが、彼らを中心に一連の事件が廻っていることは事実である。

太陽と月。手を伸ばす動機や抱く思いは千差万別。見上げる者達は本人達の意向や都合を無視して無限大の期待を込めて頼ることしか出来ない。それがこの二人には苦痛でしかなかった。

「珠世と言つたか。偽善でよいではないか。少しでも兄上達が救われるのなら。それがせめてもの、手を伸ばしたものの贖罪じゃ」

「……」

紫明は会話のことなんて耳に入っていない。ただただ母親を心配していた。



そんな紫明を見て、珠世は心の底から微笑んだ。目の前の子供に罪は無いのだ。

「私の子供もこのような時期がありましたね……今でも鮮明に思い出せます……」

「そうか……鬼である以前にそなたは人であったのだな」

珠世は頷き、紫明に目を向ける。自然と顔が微笑むのを自覚した。そしてまだ人間らしい感情が残っていることに自己嫌悪する。家族を皆殺しにした自分が子供を抱き抱えるなどなんという皮肉であろうかと。

母親を見ていた紫明の目が、ふと、心配そうに珠世を見つめる。そうして珠世は初めて自分が泣いていることに気がつく。珠世は紫明を抱きしめた。

「ああ……ごめんなさい。でもありがとう……うっ……大丈夫よ……だからもう少し……このままで……」

（なんて暖かい……太陽みたい……この数十年私が忘れていた温かさ……）

紫明はその手で珠世の額をぺたぺたと撫でるように触る。鬼の力ではすぐに壊してしまいそうなか弱い命。そんな存在をまだ少しも傷つけずに抱き抱えることができるという事実が彼女に束の間の安楽を与えた。

★

「とりあえずはこれで大丈夫でしょう」

薫の体には至る所に包帯が巻かれていた。包帯が血に染っていないのは薫が無意識

に呼吸で止血したのか、鬼の再生能力かはたまたその両方か。

二人でできることは全てやった。

ふと、薫の包帯を巻き直していたうたが固まる。

「……? どうされました、うたさん」

「そういえばお主はさつき始祖の支配が解かれたと言っておったな」

「? ええ」

「……………ならば義兄上の支配もとかれているのでは無いか!」

「ええ、仰る通りかと…………」

うたは顔色を変える。想像するのは最悪の未来。うたが心から信じる、家族の絆が危

ういかもしれないのだ。

「ええい! 薫が要じゃ! 縁壺の元に急ぐぞ!」

「薫さんが要…………? まさか…………!」

「そうじゃ!」

うたは薫の傷がより早く治るようにより早く包帯を巻き直す。手際は先程より改善されていたが、焦りが顕になっていた。

「支配と云う名の柵から解き放たれた義兄上が、次に刃を向ける相手など決まっておろ  
う! 鬼殺隊じゃ! だが問題は次じゃ! 縁壺はなんとしてもそれを止めるじゃ

ろう。家族で殺し合いなどわしが許さぬ……！」

「……私も向かいますよう」

「だったら、私もちこつかな」

薫が起き上がる。浮かべる笑顔は強がりか、完治したのか。

「薫……傷は……その髪と目は……」

薫は自分に巻かれた包帯をゆつくりと取り去る。最早傷跡一つ残っていないかった。

加えて、彼女の髪は黄色から黄金のそれへと変化していた。瞳の色も淡い赤から血のように真っ赤な赤色を湛えている。

珠世は無意識に後ずさる。得体の知れないナニカが薫の瞳の根底にあった。食人欲を示した方がまだ鬼らしい存在として理解出来た。そのために血鬼術の準備もしていた。だが彼女には鬼らしき欲が無い。代わりにあるのは、横溢した愛。塵殺も、反逆も、自己犠牲も厭わない。

凡そ個人に抱くにしては尋常ではない愛情。

薫もまた、精神面が鬼のそれであった。

「もう大丈夫です。うた。それと……」

「……………珠世です。見ての通り鬼ですが、信じてください。被害を加えないと約束します。」

薫さん、許可を得ずに鬼にしてしまったことを謝罪致します。かなり薄めたと思いますので比較的ゆつくり鬼化が進むとは思いますが……」

「構いません。紫明を預かってくれてありがとうございます。とりあえず鬼殺隊の皆が心配です」

（良かった……紫明が笑ってる）

薫は珠世から紫明を受け取ると、血に濡れた着物を不快に思いながらも歩き出す。珠世は既に薫を鬼にしたことを後悔していた。だがそれも巖勝を引き入れれば解決する事実。

もちろん薫の目には鬼殺隊等は少しも写っていない。家族の幸せが自分の幸せ。夫の痛みは自分の痛み。子供の敵は自分の敵なのだ。

（漸く、漸く巖勝君と同じになれた……）



・日の呼吸 玖ノ型 輝輝恩光・

「なっ!？」

太陽の刃が無惨の触腕を全て斬り落とす。それだけでなく柱達を全員抱えて避難させ、戦場から遠ざける。鮮やかなまでの手際であった。

(……再生……しない?)

無惨は困惑を隠しきれていない。焼ききれたような断面図を晒す触腕。そこから沸き起こる焼け付くような痛みがどうやっても止まらないことに驚愕していた。

「皆、遅れてすまない」

「……なんだお前は。私の鬼共は……」

「全て斬った。灰の一粒すらこの世にのこっていない」

「……何？」

間髪入れずに縁壺が答える。無惨は嘘だと叫びたいが、何故か言葉が出なかった。視界の端に写った手は恐怖に震え、齒が音を立てる。脳が今起こっている現象の理解を拒む。

(なんだ……この私が！ 恐怖しているというのか!?)

縁壺と無惨が対峙する。しかし勝負は最初から決まっていた。

生まれた時から神に目をかけられているもの。

生まれた時から神に見放されたもの。

無惨は押し上がる不安を振り払うように威圧的な声を出す。しかし震えていた。

「鬼になる剣士はもう必要ないと、何度言えばわかる」

「兄上を救ってくれたことは感謝する。悔しいが貴様のお陰で兄上は一筋の光明を得た」

太陽を刻んだ耳飾りが揺れる。無惨は縁壺の感情の起伏すら感じられない声が不気味でたまらなかった。その手に握られている黒曜石のような色をした刀も酷く弱そうにみえた。

「何を言って」

「だから——」

刀の色が変わる。鬼に生来的恐怖を覚えさせる色。鬼の体を焼き、再生すら許さないほどに焦がす刃。

赤、紅、朱、緋……赫。

「貴様はもう用済みだ鬼舞辻無惨」

赫刀が振るわれる。

- 円舞 ▪
- 碧羅の天 ▪
- 烈日紅鏡 ▪
- 灼骨炎陽 ▪
- 陽華突 ▪
- 日暈の龍・頭舞い ▪
- 斜陽轉身 ▪

- 飛輪陽炎 ▪
- 輝輝恩光 ▪
- 火車 ▪
- 幻日虹 ▪
- 炎舞 ▪

縁壺の少年期に巖勝との戦いで見出した型。巖勝が名付けた日の呼吸の本質。十二の型が円環を成し、太陽を夜の世界に顕現させる。

先手すらとらせない。基本遠距離な兄との戦いで培われた縮地法の極地で無惨へと肉薄する。

巖勝は、縁壺と無惨との戦いを見越して日の呼吸を縁壺に教えた。

「!？」

(なっ……!?)

一撃且つ十九連撃。

無惨が血を撒き散らして倒れ込む。喉を切り裂かれた為、叫び声すらあげられない。呼吸をしたところで掠れた息が裂けた喉から漏れいづるのみ。



勝負……否、蹂躪である。最強同士の戦いは一瞬で幕を閉じた。

縁壺は刀を少し強めに握る。赫刀が輝きを増し、水が蒸発するような音とともに、付着している無惨の血が消え失せた。しかし縁壺は戦いの顛末に怒りを隠せなかった。

(失望した。まさか兄上よりも弱いとは……当たり前か、誰が言おうと兄上はこの国で一番強い侍なのだからな)

「……は……あ?!? ……な……ぜだ」

無惨は自分の首が再生しないことに酷く戸惑っていた。縁壺が無惨へと近づく。

倒れ込んだ無惨は手を着いて後ずさる。直ぐに尻尾を巻いて逃げ出したかったが、無駄に大きな自尊心が縁壺に背中を向けることを許さなかった。結果、余計に無様になる。最早今の彼を鬼の始祖と信じる者はいない。

無惨は頭を巡らせる。

「ま、待て!?! 私を殺せば……! お前の兄も死ぬんだぞ! わかっているのか……!?!」

「兄上が……死ぬ……?」

縁壺は動揺しているのを感じとり、勢い付いた無惨は畳み掛ける。我ながら名案だと自画自賛した。

「そ、そうだ！ 鬼となったお前の兄を鬼たらしめているのは私の細胞だからな……！ 私を殺せば！ お前は実の兄を殺し………ぐはっ」

言葉を締めくくらせない。

縁壺は無惨を蹴り飛ばした。彼の額には血管が浮かび上がっている。目の輝きは無表情を通り越して冷徹に、されど憤怒に猛る。無惨は縁壺の尊敬する兄を侮辱した。虎の尾を踏み、龍の逆鱗に触れた。

「兄上が……たかだかお前の細胞に生殺与奪の権を握られるだ……？ 兄上は、お前如きが死んだところで何とも思われない。兄上がお前如きの命令に従うと思うな。お前と一蓮托生など、兄上に対する侮辱にも成り得る」

「ひっ……!?!」

無惨の歯がガチガチと音を立てる。この数百年一度も感じたことの無い感情。恐怖に無惨は怯えていた。鬼を呼ぼうにも彼を助ける者はひとりとしていなかった。

実際、無惨は一番近くに居る巖勝の支配すらできていない。なんなら珠世もどこかへ消えたのである。彼は独りであった。目まぐるしくちらつく走馬灯の中、膝を着き、死んだように動かない巖勝が目に入る。

無惨は声を張り上げた。鬼の始祖とは思えない、裏声に塗れた情けない声であった。

「おい、黒死牟！ いつまで寝ているつもりだ！ 私を守れ！ き、聞いているのか！  
おい！ 返事をしろ！」

（支配がまだできない……!?! まずい！ 体が全く再生しない！ 想像以上に巖勝に使った血液が多すぎた！ 体の再生に力を持っていかれ、反対に巖勝の支配まで余力が回らない!?!）

「兄上に指図とは……貴様、本当に、何様のつもりだ。愈以て救いが無い。お前は……兄上をなんだと思っている」

縁壺が刀の鋒を無惨の首に翳す。怒りに任せて鬨気が昂る。辺りが灼熱地獄へと変化する。

（……どうやら、大丈夫のようだ）

やつとのことで巖勝は意識が戻る。実際彼の適合率はかなり高かった。無意識下で、支配しようとしてくる無惨の細胞を自らの血肉と適合させていった。だいたいは炭吉

の血液と縁壺の血液のおかげである。それに体力を使い、良くも悪くも動けなかった。「つー……ここで無くすには惜しいが……! やむをえんな……!」

無惨は最後の力を振り絞って未だ起きない巖勝へと触腕を伸ばし、ありつたけの血を投入する。

支配に抗えていた巖勝は溜まったものではない。

(ふ……ぞけるな……!?)

無惨による巖勝の支配は未だ不可能のままである。しかし最早理性など残さない。そうすることとただただ強くし、一夜限りの寿命にする。出来上がるのがどんな姿の化物でいい。云わば逃げる時間を稼ぐ捨て駒なのだ。触腕は直ぐに縁壺が切り落とす。

「この借りはいつか返すぞ……! 鬼狩り共!」

そう言った後、すぐ様いくつもの肉片に弾け飛んだ。無惨にとつての最終手段である。透き通る世界で爆ぜることは予期していた縁壺が刀を構える。

「本当に爆ぜるとは……多芸だな。鬼舞辻無惨!」

「助かったぞ縁壺!」

「ああ、とりあえずはこいつだ!」

縁壺に加えて満身創痍だが柱がいる。これならば肉片ひとつ残らず切れるだろう。

柱達が体に鞭打って刀を振るう。縁壺は日輪刀の熱を底上げし、千幾つかの肉片を消し炭にした途端。

巖勝の体から一際大きな心音が響く。

「!? 待て……兄上の様子がおかしい!」

結果的に、無惨は逃げ果せた。

無惨の勝算は巖勝がしつかりと己が逃げる一瞬を稼いでくれたこと。

『逃げる時間を稼げ』という命令だけは何とか押し付けることができたのだ。

それ以降、命令も支配も不可能になった。

無惨の誤算は巖勝が鬼殺隊や鬼と敵対する第三勢力になる可能性があること。

今この場において縁壺と同格に強い巖勝が起き上がったことにより、柱達や縁壺に動揺が走る。その間に脳みそひとつ分の無惨は地中から逃げ延びた。

敵か味方か分からない強者の出現に緊張が走る。中でも縁壺は焦る。巖勝が牙を向いた場合、柱五人を守りきれぬ確信がなかったのだ。

ゆつくりと立ち上がるのは完成された鬼。

「兄上……」

「縁壺か」

縁壺が本当に守りたいものは兄やうたと言った家族。しかし鬼殺隊から求められているのは柱として、実の兄一家の殺害。

巖勝が本当に守りたいものは薫や紫明、そして縁壺達と言った家族の幸せ。しかし鬼殺隊から求められているのは切腹や斬首による巖勝一家全員の死亡。

さらに巖勝は多くの人間を葬っている。どうしようもないくらいに縁壺は正義であり、どうしようもないくらい巖勝は悪であった。

絶対に相容れない二人。それでも――

「……」

「？ 私の顔になにかついているのか？ ……ああ……眼が増えたからか………気味が悪いだろう」

「いえ、気味が悪いのではありません！ ……どちらかといえば……その……」

「？」

「む、六つ目だと、たくさんの兄上に見られているようで、少し落ち着かず……」  
「……………そうか」

——二人は紛れもなく兄弟であつた。

## 世参話 決別の時

「そこをどけ」

「いいえ、退きません。私が退けば、兄上は房綱達を殺すでしょう」

「当たり前だ……彼奴らは……薫と紫明を殺そうとした……生かしては置けぬ」

巖勝は拳を握りしめる。縁壺は家族を守るために参戦した。その目的は巖勝と同じであつたにもかかわらず、彼は見事守つて見せた。家族も鬼殺隊も。

(憎い！ 憎い！ 憎い！ 憎い！)

だか、憎しみや怒りの矛先は縁壺では無い。薫や紫明を危険に晒し、浅はかにも鬼殺隊の意向を予測できず、剩多数相手且つ防衛戦とはいえ柱達の猛攻に耐えきれず鬼の力に頼るしかなかつた己である。

どうしようもない。仕方ない。なんて言い訳は後から幾らでもできる。

「私はどうするべきであつたのだ……薫や紫明がその身を朱に染めようが……ただ何もせず、傍観するべきであつたのか……？」

「………兄上……」

縁壺の悲しそうな顔を見ると、幾らか激情が和らいだ気がした。まずやるべき事は薫



達の安否確認である。

「……はあ……すまない、取り乱した。私は薫達の容態を見に……」

「やりましようか！」

——縁壺は兄の苦悩に向き合った

縁壺は右手を左腰へと回して刀を握る。腰を深く落とし、耳の太陽が揺れる。顔はこれでもかかという程に晴れていた。

縁壺は単純な男であった。兄が自分の無力に打ちひしがれているのなら、受け止めるのも家族の務め。自分の兄はやけに自らを卑下し、何をしても自分には及ばないと考えるきらいがある。

(私の方が追いつけなくて焦っているというのに)

兄の葛藤を受け止める。そうすれば幾ら示しても足りない感謝の念を少しでも示せるかと思つたのだ。

嬉々として斬り合い宣言をする縁壺に、巖勝がなんとも言えない顔をする。

「少し落ち着け、縁壺。薫達は」

「義姉上達ならばうたが診ております！ さあ兄上、刀を抜かれよ！ 私がいくらでも受け止めて差し上げましょう！」

縁壺の肉体から焼け付くような鬨気が放たれる。巖勝は身構えた。

「薫は無事か……そうか……ならば受けて立とう。それにどの道やり合おうとは思ってしたが」

ここで巖勝と縁壺が限りなく本気の戦いをすることで、縁壺が身内から鬼を出した汚名を返上しようとしたという証拠ができる。

巖勝は日輪刀を抜く。虚哭神去では瞬く間に折られてしまうからだ。

これ迄の災害級の戦いの中、住民は退去。観客は柱達のみ。

・月の呼吸 壺ノ型 闇月・宵の宮・  
 ・日の呼吸 壺ノ型 円舞・

自分に向かつて放たれた無数の斬撃を縁壺は全て斬り葬る。周囲への被害はない。斬撃を掻い潜って本体へと迫る。

「とつた！」

「甘……」

巖勝は咄嗟に日輪刀を片手に持ち替え、空いた手で短刀を生成する。そして刃の部分  
を指で挟み、ナイフのように縁壺へと投げつけた。赫刀にさえ斬られなければいいの  
だ。縁壺の肉体は人なのだ。

「っ……!?!」

刀身に無数の目が刻まれたそれは死の音を唸らせて縁壺の髪を数本切り落とした。

縁壺の体幹が少し崩れる。それを巖勝は逃さない。間髪入れず右ストレートを放つ。  
もちろん拳頭から数寸にも亘る虚哭神去を伸ばして。

「……」

「……これ避けるか」

縁壺は避けることすら不可能な拳を避け、お返しとばかりに赫く熱された刃を突き出  
す。

二振りの赫刀が鏝迫り合う。

原作の最終決戦において、柱達は自らの刀と刀を合わせることで縁壺には遠く及ばな  
いが赫刀を発現させた。

今、史上最強と言っても過言ではない二人の兄弟が——本物の赫刀を発現させた二人  
が刀を合わせるのだ。ただでさえ熱で発光する日輪刀がさらに極限まで熱される異常

事態。

故に刀は――

「っ……っ！」

「これは……っ！」

――燃え上がった

紫炎が燃え上がる刀、

赫炎が燃え上がる刀。

幻想的に揺らめく炎。

互いが互いの日輪刀に目を見張る。比喻でもなんでもなく、刀が音を立てて燃えているのだ。縁壺の赫刀に至っては、鬼に対する殺傷能力が高まる所の話ではない。その刀で鬼を斬れば切り口から瞬く間に炎が広がり、首を斬らずとも一撃で死に至らしめる。

赫あかく赫かがやく赫刀。

縁壺一人では出来なかつた現象である。

「俺と兄上の絆ですな！」

縁壺が目を輝かせる。とても嬉しそうであつた。

「……絆か」

巖勝は自らの刀を見つめる。彼の血液から生み出される血鬼術が赫刀と適合した形。揺らめく炎のように見えるそれは細かい月刃の集まりである。

細かな月の刃は振動するカッターの如く、どんなに硬いものでも抵抗なく切り落とすだろう。

（縁壺のが赫灼刀なら、私のは滅~~□~~刀か……）

「先程の一撃に全てを込めました。体も今までにないほど熱を帯びています。次で終いと致しましょう」

「ああ……参る」

ただでさえ常時高温な体を持つ縁壺をして、高温と言わしめる体温。対照的に巖勝は血流を加速させ、一気に最高温度まで押し上げる。体温の調節すら任意。なんとも便利な肉体であった。

- ・全集中 日の呼吸 陸ノ型 日暈の龍・頭舞い・
- ・全集中 月の呼吸 拾壺ノ型 月暈の虎狼・真榊乱舞・

暴龍が爪牙を以て、太陽の威光を知らしめんとする。

虎とも狼ともつかぬ姿をした月の獣が世界を塵芥と変えながら、突進する。最早周囲への被害は考えていなかった。

（兄上ええ！）

（縁壺！）

双方が今、その大口を空けて主の敵を屠らんとし、

「やめよ!!!」

「うた!?!」

「……!?!」

龍と月の獣が勢いを失って霧散する。

燃え滾る刀は胴を、紫紺の焰は手足を切り裂く寸前で止められていた。あと少し遅ければ、華奢な体を容易く切り裂いていただろう。

縁壺が慌てて、うたに傷がないか隈無く調べた。覇気はとうに消え失せている。

「うた! 危な……危ないどころじゃない! 一歩間違えれば、斬るところだったんだぞ?! 天真爛漫なのもうたの魅力の一つだが、今回は本当に危なかったんだからな!」  
「か、家族で斬り合いなど、わしが許さぬ! 縁壺も縁壺じゃ! 一に兄上、二に兄上。わしはお主の妻じゃぞ! もっと気にかけてんか!」

（私は……今しがた斬り合っていたが……なぜだ……いつの間にか夫婦漫才を見せられていた……）

「縁壺、今回はやめにしよう……私と向き合ってくれて嬉しかったぞ」

巖勝の殺気が霧散し、刀を収める。六つ目のうち四つが閉じられ、見た目は人間の頃へと戻った。

(……戦闘の影響で舞い上がった砂煙が、上手く目隠しになっているな)

「兄上？」

「……何故残念そうな顔をする。別にこれが今生の別れでもないだろう」

「……そうですか！」

「そうだぞ！ 縁壺！ ……いや、許さんぞ……！ ええい、昨に落ち込むな！」

「？」

(……縁壺、当分稽古はお預けだな)

巖勝は微笑む。刀を振るわない縁壺は少し物悲しい気がするが、武器を持たないのは幸せの形。これからどうするかは縁壺とうたが決める。

「巖勝君！」

「とーさま!!」



(それに、私には……)

——家族がいる

必死に巖勝の方へと駆け寄ってくる薫。彼女に抱えられている紫明。巖勝は一瞬で二人に近づき、抱きしめる。薫の芳香な香りのする血が鼻腔を擽る。だがそれよりも見過ごせない香りがした。

ツンとする消毒液と包帯の匂いである。

「薫……その怪我は……」

「これのこと？ 唯の掠り傷だよ」

「縁壺ではないな。誰にやられた……そいつの首を月下に晒してやろう」

「大丈夫だって。ヘーキヘーキ」

「私はまた……守れなかったのだな」

大丈夫だと全身を使って表現する薫の痛々しい姿。金色の髪も血のような瞳も、薫が鬼にならなければならぬほどの重傷を負ったことを示唆していた。

「巖勝君は頑張ってくれたよ。だからこうして会えてる」

「とーさま！ しあもいるよー！」

「ああ、お前達が無事なら……何も言うまい」

家族と無事に再会した巖勝達。重苦しい絶望を振りまいていた兄はもう居なかった。今の彼らを鬼と言って信じるものが果たしているのだろうか。縁壺は彼らを眩しいと思つた。そして……ドヤ顔で腕を組む妻へと目を向ける。彼女も巖勝達を見つめており、その目には涙が溜まっていた。

「うたもよくがんばつた」

「もつと褒めろ。わしは家族を救つたのじゃ。……っ！ ……わしは今度こそ……！」  
家族の危機に無力ではなかつたのじゃ」

「ああ、うたと同じだ、俺が本当に守りたかつたものは……」

縁壺の視界に映るは幸せそうな兄と義姉とその子供。

下を向けばうたが笑いかけてくれる。

家に帰れば弟子たちと共に息子達が待っている。

(世界の広さを知らずとも……幸せはすぐそばにあった)

巖勝が縁壺達に振り返つて口を開く。うたは涙を見られたくないのか縁壺の影に隠れた。

「私は……帰るべき所へと帰る」

「ええ、また夜にでも遊びに来てください。血をいくらでも分けてあげましょう」

「むう……家に帰ったら鎧鴉を寄越せ！ 絶対じゃぞ！」

手を振る縁吏。うたも隠れながら手を振る。巖勝達も手を振り返して、その場を後にする。

「鬼殺隊から追われる身になったな」

「そうだね……」

（さて、どうするか……）

「もし……」

「む……」

「あら、珠世さんですか」

現れたのは見た目麗しい鬼。珠世であった。

「単刀直入に言います。巖勝殿、薫さん。私と取引しませんか？」

「取引？」

「はい。鬼殺隊におわれるのでしょうか？ どうですか？ 私は各地を転々とする医者顔も持っています。貴女方を護衛や患者として匿えます。その代わりに貴女方の血を

調べさせたりしてくれませんか？」

★

涼し気な風が吹く夜。産屋敷当主・産屋敷柊哉は起きていた。たかが直感、されど直感。この夜、何かが起きると確信していた。

(もう長くはないな)

見上げた月。踏みしめた砂利の音。

「御館様。夜分遅くに失礼します」

「巖勝か。どうしたこんな遅く……に……」

現れたのは月の侍。しかし六つある瞳を惜しげも無く晒し、鬼になったことを隠しもしなかった。柊哉の頭が最大限に回転する。常人ならば目を逸らしていた。

呼吸を伝えた存在、人の身で刃を飛ばす天才、日柱以外の柱が束になっても勝てない逸材。いつかは鬼のいない夜を齎すと考えていた希望。

そんな剣豪が鬼に堕ちるといふ、この鬼殺隊にとっては不利でしかない状況から。

「お前は……」

「私が参つたのは、先日起こつた一部始終の説明です。私が、私の意思で無惨を逃がしました……縁壺は全く関係ありません。鬼の始祖には配下とした鬼を操る力が御座います……ですが私は支配から逃れ……」

「ならば無惨を逃したお前は特に重罪。鬼となつた薫と共に切腹、紫明は隠として鬼殺隊に永久奉仕となるな」

「……………」

「提案するが」

終哉は口を重々しく開く。

「私の首を持っていけ。そうすれば無惨は完全にお前を信用する。どの道そうだな……私は今もう二日と生きられない……そうだろう？　巖勝よ」

「はい」

「なら君は忍びだ。十二鬼月と言つたか？　無惨の配下として生きると同時に、月柱として鬼殺隊を支えて欲しい。それで家族に手を出さないと約束しよう。柱合会議も任

務の必要も無い。ただ懐に入れておきたいのだ」

「寛大なお心に感謝致します」

巖勝の声は何処までも機械的だった。それを知らずか否か、終哉は続ける。

「無惨を殺すために鬼殺隊に仕えよ『月柱』よ……ああ、心配するな。死体は……そうだな、後腐れないように病死にしておこう。内密に燃やして他殺とはバレなくする」

「……随分と準備がいいですね」

「これでも鬼殺隊という組織の長だからな。では巖勝、宜しく頼む。出来れば痛くない型がいい」

「仰せのままに。痛みすら感じない型を選びます」

どこからともなく現れた産屋敷の妻が諸々の支度を整える。

準備は整った。これから振るうのは決別の刃。

「御館様。私は貴方の刀でした」

・月の呼吸 拾漆ノ型 千夜一夜・涅槃

せんやいちや  
ねはん

(嗚呼、冷たく、優しい。巖勝よ、大義であつた……だが、鬼になり、人を殺めたお前を最早鬼殺隊とは思わぬ)

——  
斬

柀哉は崩れ落ちなかつた。

介錯の時には首は落とさない。拾漆ノ型は慈悲の具現。痛みも愁いもなく命を奪う。血も一滴すら落とさせない。第三者が見れば、斬られたことすらも疑うだろう。ただ安らかに、座つたまま柀哉は眠つていた。

パチンという音と共に納刀する。その一挙一動までもが美しく、鬼になつたとしても風格は失われていなかった。

巖勝は産屋敷の妻へと一礼する。

「丁重な埋葬をお願い致します」

「畏まりました」

巖勝が首を丁重に包み込み、姿を消す。

産屋敷の妻は黙ったまま首元が布で丁寧隠された夫を見つめていた。ずつとずつと。

何がきっかけか定かではない。彼女はゆっくりと柎哉だったものへと近づいた。

着物に触れる。冷たくなった手の平を握る。胸に触れ、実は死んでいないのではないか、これは夢ではないか。そう思い込もうとした。

「……………つ！ 柎哉様！」

そうして、首のない柎哉の遺体にしがみついて泣いた。

終始表情一つ浮かべなかつた彼女。人形のように決められた役割を決められたように執行する産屋敷の妻。それ以前に彼女は一人の男を愛した、一人の女性であつた。壊する感情の波は皮肉にも、彼女を人形では無くさせた。

震える手で懐に手を伸ばし、警笛を鳴らす。その笛すらも夫の命を奪つた月柱が作つた物であつた。

「御館様?! ……これは……………なんということだ……………！」

「……………え……………うそ……………！」

「父上……………！ 父上父上父上ええ！」



隠や、産屋敷の息子達が現れる。  
鬼殺隊は正義である。ならば……

「つ、月柱様が……現れて……お、夫の首を……！」

鬼は悪でなくてはならない。



「これより月柱・継国巖勝、並びに煉獄薫、継国紫明を全面搜索します。どこに隠れていようとその住処を暴き、首を切り落とさない。奴らに休息を与えてはなりません。日柱はよくやってくれました。よくぞ柱達を救ってくれました。次は鬼に堕ちた兄を斬りなさい。あの者は無差別に人を殺しました」

「……」

今此処には産屋敷の妻と日柱である縁壺のみ。他の柱は治療中である。

産屋敷一族はハナから巖勝を鬼殺隊の手先として無惨の元に送り込む気は毛頭ない。終哉は自分はどうなつてもいいが、産屋敷全滅は避けたいという思いから適当にこじつけて巖勝をおいはらつたのだ。

自らを殺させたのも無惨の巖勝に対する信頼を底上げするのではなく、最強の鬼となつた巖勝に対する鬼殺隊の敵愾心を煽るため。

屋敷ごと爆破も考えたが、最終目的は無惨の討伐。そう考えるとこの手は最初で最後の初見殺しとして、無惨までとっておきたかつたのだ。

笑つてしまうほどに善悪ははつきりしている。

(……)

縁壺があつさりと土足で座敷へと乗り上がる。畳が汚れるのも知つたことではなかつた。

「……………え？ ……ぐっ！」

縁壺が産屋敷の妻の襟首を掴んで宙に晒す。足が離れて苦しそうにしているが、縁壺は力を少しも緩めなかつた。

「……………か……………っ」

「兄上が殺しただと……………?! 兄上は優しいから必要に迫られなければ人を殺さない。激情に任せてなどありえない。他にも道はあつたはずだ！ 兄上は始祖の支配を克服し

ていたかもしれないかった！ 人を喰わないかもしれないかった！ 誰も傷つけなかったかもしれないかった！」

負けじと産屋敷の妻が言い返す。

「人を喰わないという証拠なんて、何処にもない。鬼は全て皆殺しです。人を喰ってさらに強くなる前に……」

「兄上が！ そんなことをするはずないだろう!? おい!? 貴様の演技じみた涙を今すぐ引つ込めろ！ 聞いているのか！ なぜ騙す!? なぜ陥れる!? 兄上がやと……！ やつとの思いで見つけた幸せをなぜこうも易々と踏み躪る!? お前は兄上がこの四年間……鬼殺隊の為に、どれだけ奔走したのか知っているのか!?」

「黙りな……さい」

産屋敷の妻が苦し紛れに言葉を零す。

「その発言は鬼殺隊の信条を踏みにじって……います。罪のない人々を殺しておいて……逃れるなど正に鬼の所業」

「もう……もういい……お前はもう……これ以上……兄上についてしゃべるな」

縁壺が産屋敷の妻から手を離す。畳に落ちた彼女は咳き込んで、目の敵を見るように縁壺を睨みつけた。縁壺は感情のない瞳で見下ろす。

数瞬の後、縁壺は産屋敷を後にする。

縁壺の視線。それだけで産屋敷は月の柱に加えて、太陽の柱の信用も失ったことを理解した。しかし彼女は理解出来ない。なぜ縁壺が齒向かったのかを。家族であろうと鬼になってしまえば親の仇も同然。人も殺したのだ。

「御館様。今すぐにも里を変えた方がいい。我ら鬼殺隊は龍の逆鱗に触れ、虎の尾を踏んだ」

去り際に一言。

縁壺の瞳は光を失っていた。少なくとも産屋敷の妻にはそう見えた。

……

産屋敷家の門から出た縁壺。見上げる空に太陽の円環はなく、光が漏れ出ている程度。時は黄昏。柱合会議とはいえ緊急も緊急。柱達は治療中。出席者は縁壺のみ。一人居ない通りはまるで魔界にでも迷い込んだかのよう。

縁壺は虚空へと話す。

「出てきてもよろしいですよ。義姉上」

「む、バレちゃいましたか」

姿を現したのは、黄金の髪を持つ異色の鬼。自然体で家の影に姿を隠していた。瞳が赤く、正体が鬼であるとわかっていても、大抵の男は見蕩れてしまうほどの魔性の顔。

薫の浮かべた表情は慈愛と言うよりかは、罪悪感に陰っていた。

「縁壺君は、本当にそれで……」

「いいんです。俺は柱としてもう残せるものは残しました。あとはゆつくり、うたや子供達と過ごします」

「ふふつ……まあ、縁壺君らしいですね」

金色の鬼・薫は、鈴を転がすような音色で言葉を紡ぎ、花が咲いたように笑う。縁壺も釣られて笑った。

縁壺が伸ばして伸びをする。体を解した後の彼の顔は先程とは打って変わって晴れていた。兄と共に居たくて刀を手を取った。兄と力を競いたくて鬼殺隊に入隊した。兄の力になりたくて鬼殺隊を抜け出した。

街並みを飲み込んだ暗闇。されど包み込むように優しい暗闇だった。月の花嫁が隣にいるのだ。夜が縁壺を歓迎している。

「義姉上どうでしたか、俺の演技は！」

「とても良かったですよ……程よく破綻していました。産屋敷様は今頃、こいつとは話を通じない、とても思われているでしょうね」

「はははつ。それは良かったです」

「さあ、帰りましょう。うたは今頃女中と子供三人の世話に追われていますし」

連れ立って歩く二人。燥ぐ弟と微笑む姉。これも紛れもない家族の形。

「ところで、兄上はどちらに？」

「鬼の始祖と会っていますよ」

「……」



無惨は月明かりを光として読書に耽っていた。赫刀で刻まれた傷はどうしようもなかったので痛覚を切除したのだ。時折軋む体と、神経の食い違いに顔を不快一色に染め上げている。

「……ん？」

ふと、一陣の風が無惨の頬を撫でる。思わず活字から目を上げると、手放したはずの侍が片膝をついて侍っていた。侍は見蕩れる程、清廉とした佇まいで頭を垂れていた。

無惨は目を見開く。

「驚いた。生きていたのか」

「はい。これを。産屋敷めの首です……我が忠誠の証としてお受け取り下さい」

無惨が差し出された柎哉の首を睥睨する。見れば見るほど自分の顔貌との共通点が多りに出てくる。無関心だった視線は少しずつ不快の色に染め上げられていった。

少し考え込むような仕草をした後、再び活字へと目を落とした。

「お前が食べ、そいつの顔など見たくもない。そもそも何故産屋敷を殲滅しなかった」

「……一刻も早く、貴方様の元へと馳せ参じたかったです。あの別れ方では我が忠義が喪われると思いました」

「だからといってもだな……どうした、食えんのか？」

巖勝は黙って首を見つめている。無惨が指摘すると、思い出したように手の口から飲み込むようにして取り込んだ。

少し訝しげに思ったが、無惨は続ける。

「……お前の血には三つの突然変異が起きている。

まず位置を知らない。そして強制的に命令できない。私の意思で殺せない。つまり、お前の中にある私の血は完全に別物となったようだ」

「はい」

「余り興味が無いようだな……まあいい。それにしても珠世の恩知らずめ……せつかつくわたしが側仕えとして置いてやったというのに逃げ遂せよって……お前が居るからど

うだつていいが……そうだ、こちらへ来い。黒死牟」

「はっ……」

巖勝は無惨へと近づく。

無惨が手を伸ばし、手の平が巖勝の両目を覆う。六つある内の人の目に相当する位置であつた。

巖勝は真ん中の一对の眼に違和感を感じる。だがそれも一瞬。

無惨が手を離すとその目には文字が刻まれていた。

右に上弦。左に壺。

「お前は今までも、そしてこれから私の腹心……十二鬼月・上弦の壺だ。失望させるなよ『黒死牟』。命令はおつて伝える。それ迄は手頃な者でも鬼にしている。お前にはそれが出来るだろう?」

「御意」

巖勝は音もなく姿を消す。彼がその場からいなくなつたあとも、無惨は彼が先程まで片膝を立てていた場所を訳もなく見つめていた。

「……………支配できない、意志を読み取れない、裏切られてもおかしくなかつた。そんな状態でお前は私を救つてくれた」



ポツリと零した言葉は虚空へと消えた。縋り付くような一言は次の瞬間にはもう無惨の記憶から跡形もなく消えていた。

耳飾りの剣士に全身を隈無く切り刻まれて次の一撃は必ず自らを絶命たらしめるには十分なほどの威力で刀が振られるだろうと言う時、命令した訳でもないのに救ってくれた巖勝。彼の存在は知らず知らずのうちに無惨の中でかなり大きいものになった。

（あいつの血を与えた者がどうなるかが知りたい……十二鬼月。上弦だけはあいつに任せるか）

## エピソード

——満月の夜には鬼があまり姿を晒さなくなる

それはここ数十年にできた鬼殺隊や、鬼の存在を知るものの共通認識である。満月が映える夜には鬼がなにかに怯えるように挙って巣穴に隠れているのだ。鬼殺隊は月と太陽は似たようなものだからという理由で結論づけた。

しかし、真実は似て非なるものである。人が上位者である鬼に怯えるように、鬼も上位者に怯える。生来的恐怖とも言えるそれは果たして……



「久しいな……縁壺」

「ご無沙汰しております。兄上」

今宵は満月。

立ち会うは二人の侍。

片や暖色の着物に身を包み、無骨な刀を腰に差して佇む。見た目は死にかけの老耄。中身は人外の肉体。某名探偵も驚く。静かに微笑んでいる。

片や精悍な顔つきをした偉丈夫。しかし六つある瞳が決定的に人ではないことを示している。紫黒の着物を身につけ、刀を二本。脇に差している。

二人は血を分けた兄弟である。

弟は鬼の始祖から化け物認定され、未だ人という種族の頂点に君臨する太陽の剣士・継国縁壹。

兄は鬼殺隊という組織の根底を作り上げ、導き、そして自らは妻子を守る為に鬼に堕ちた最強の月鬼・継国巖勝。

「なぜ私がここに來るとわかった？」

「何となくです。此処には……我らの思い入れがありますから」

彼らが立っているところは薄原の中。五十年ほど前は継国家が栄華を誇っていた領地の跡。裏山では彼らが斬り倒した切り株からは芽が生え、新たな命を紡いでいる。

後継を失った継国家は喜劇かのように没落した。残っているものは何も無かった。

彼らの選択が招いた結果であったが、後悔はしていなかった。彼らにはこの戦乱の世において、自分で自分の道を選択出来る強さがあった。

そんなことは余り気にも止めず数年ぶりの再会に顔を綻ばせる。先に口を開いたのは縁壺の方であつた。

「兄上、義姉上はまだ……」

「……………ああ、まだかなりの時間がかかる」

薫と無惨の命は結びついていた。

貧血で瀕死も瀕死。生と死の狭間で無惨の血を摂取したのがいけなかつたのだ。しかし珠世が輸血しなければ薫は死んでいた。人間の血では拒否反応が起きるかもしれない。なかつた。

弱りきつた体を再生するのに、無惨の血は最高に条件が良い。

結果、高い適合率と引き換えに、無惨が死ねば薫も道連れにされるようになってしまった。生命の根幹に関係する以上、青い彼岸花での治療も怪しい。無惨は基本的に殺される事がないので薫が突然死することは無いだろうが、原作までに何とかしなければいけないだろう。

治療法は時間か、若しくは……

（禰豆子の血か……）

「少なくとも私が生きているうちには無理でしょう……」

「……」

（血で済むのか……もしも……例えばの話だが、禰豆子を喰わなければ治らなかつたら？）

「なんとも心苦し……兄上……如何されました？」

「む……すまない。唯の考え事だ。気にするでない」

巖勝は首を擡げた懸念を押し込める。四百年後に産まれてくる存在を今考えても仕方ないのだ。

疑問符を頭の上に浮かべる縁壺。巖勝は少し申し訳なく思った。

「取り留めもないことだ……それで……やるのか？」

「……やめておきましょう。今日の私は体調が悪いので……」

「……そうか」

「奇縁なものです。初めは兄上が稽古に誘ってくださいって、次は私が稽古をせがみ、それを繰り返して、最後の最後は兄上が誘ってくださいる」

「ふっ……そうだな」

他愛もない話をしながら散歩をする二人。縁壺はこの時間が好きであった。

ふと、縁壺が踏みしめた草原から沢山の虫が飛び立つ。風が吹き、川の水が流れる音

を運んでくる。

「美しいですね兄上」

「ああ……」

(美しい……世界だ)

(ざつと百五十三匹。もう少し強く踏めば兄上はもつと感動してくれるのでは?)

うち光つて飛び違う蛍達。その姿に巖勝は縁壺やうたを重ねた。縫い付けられたように重い口を開く。

「人の命は……短すぎる……そうは思わないか、縁壺?」

「……気づいておられましたか」

「……お前が体調を崩すなど……天地がひっくり返っても有り得ん」

「ふははつ。酷な事を仰る」

巖勝は弟の笑う姿すら弱々しく感じてしまった。縁壺の命の灯火は消えかかっている。

「そんな悲しい顔をしないでください。技術も知識も残しました」

「そんなものはどうでもいい……死期が近づいていると自覚していながらなぜここに来た……うたと過ぐせばよかろうに」

「だからこそです。最期の時は……兄上に看取ってもらいたく……」

巖勝は縁壺を抱きしめる。角張った骨の感触。陽光のように暖かい体。縁壺は震えていた。巖勝が力を少し入れるだけで折れてしまいそうな体は、力を入れずとも今にも折れてしまいそうであった。

「看取るなどと……」

巖勝は抱きしめる力を弛めた。暫しされるがままになっていた縁壺。幸福に満ちた顔のまま、

「縁——」

弟の体から力が抜けていき……兄は咄嗟に支えた。痩せこけた体は異様に軽かった。(鬼殺隊は……私は……どれほどの期待をこの老躯に乘せていた……押し潰されてもおかしくはなかった)

「兄上……?」

「大……丈夫だ、気を保て」

巖勝は自分の手を見つめる。巖勝の願いに呼応するように触手が生えてくる。今これを縁壺の肌当てれば一匹の鬼が誕生する。

(縁壺を鬼にするのは……容易い)

しかし、鬼にはしなかった。代わりに縁壺を抱え、疾駆する。  
「兄……上？」

「……ここで死ぬことは許さんぞ戯け者。死ぬのなら、うたに看取られて死ぬ」  
「うた……うた……そう……私は……俺は……」

——最期に、うたに会いたい

巖勝は既に六つ目を閉じていた。朦朧とする意識の中、縁壺が最期の最期で兄ではな  
くうたと死ぬことを選んだのは微かなきっかけか、それとも今までの選択の結果か。

「お願いします兄上……うたに会わせて下さい」

「……それでいい。弟は兄を振り回してこそだ」

「ふっ……兄上……」

「なんだ？ ……言ってみろ」

「相変わらず笑顔が不気味でいらっしやる」

「……………」





「遅い！」

うたは激怒した。必ず、かの天衣無縫の夫を叱らねばならぬと決意した。うたにはいつものほほんとしている夫が何を考えているのかがわからぬ。うたは、ただの人間である。数秒の間に千五百もの肉片を切り払えないし、技術のみで斬撃を飛ばすこともできない。けれども夫の気まぐれな行動に対しては、人一倍に敏感であった。何故ならば彼女は縁壺の妻であるからだ。

「なんじゃ！ 『行ってくる』 っ！ 『行ってくる』 の 『行く』 はまさか 『逝く』 ではあるまいな!? 思わせ振りを宣いよって！」

わしもわしじゃ！ なにが 『行つてらっしゃい』 じゃ！ わしが言う台詞ではなからうに！」

うたは憤慨する。いくら騒いだところで誰も来ないのだが。その静寂がより一層うたを孤独にする。

「縁壺め、一人で義兄上に行くなぞ……儂も連れて行ってほしかった……」

「では、姉とお話しませんか？」

庭に天女が舞い降りた。うたはそう錯覚した。

「かお……義姉上……！」

「薫でいいですよ。久しぶりですね、うた」

金色の髪は満月の光を喜ぶように輝き、赤い目は嬉しそうに細められた。重力を感じさせないような着地。血鬼術の類だとしても鬼のようには見えなかった。

「丁度よい！ 聞いてくれ薫！ 縁壺が……！」

「ええ、知っています。知っていますとも。お互い奔放な夫を持つと苦労しますね」  
(うた、貴方はもう……)

うたも死期が近づいていた。笑う姿は弱々しかったのだ。曲がった腰が時の流れを嫌でも突きつけてくる。だが愛する人と歳をとっていくのも美しい人の形。ほんのちよつぱり、薫は嫉妬した。

「——じゃろ？ 最期くらい一緒にいても良かったのに……まあ、この五十か、六十年間。互いに振り回し振り回されの繰り返しで……まあ……こんな終わり方も悪くはなからうて」

「……っ」

「かかつ！ そんな顔をするでない！ 八十そこらまで生きたんじや。悔いなどない

……悔いなど……」

うたは声を窄めた。目を伏せていた薫が顔を上げる。うたは哀しい顔をしていた。

「可能であるならば……せめて……お主達が紡ぐ物語をもう少し……見守っていたかったのう……」

「うた……」

薫は言葉が出なかった。

瞬間、一陣の風が吹く。そこには老人を抱えた鬼が立っていた。

「縁壺……？ 義兄？」

「久しいな……義妹よ……どうしようもないお前の夫を持ち帰ったぞ」

巖勝は縁壺を下ろして、寝かせる。

「ふうー……ありがとうございますございます兄上」

「……もう無理をするな。目も見えてないのだろうか？」

「お気づきでしたか。しかし御心配には及びません。何となく分かります」

「そうだろうな」

「縁壺！ お主は……おっ！」

「……」

縁壺は近づいてきたうたを抱きしめる。力の弱くなった縁壺。以前は強すぎる力の余り、全力で抱きしめることは叶わなかったが、皮肉にも弱りきった今ならそれができた。うたは顔を赤くする。

残り少ない時間を堪能している二人を氣遣って、巖勝と薫は一時的に席を外す。

「……私の血鬼術で、紫明と昊羽君達の子供を呼ぼうか？」

「いや、それには及ばん。若人達の時間を邪魔するのも無作法というもの」

「紫明はもうおばあちゃんだけどね」

「……やはり鬼になるのか」

「うん、紫明も望んでる。珠世さんの医療に魅了されたらしいから。私達を日光の下に連れていきただって。あの子が選ぶのなら、私達は背中を全力で押してあげるだけだ」

からね……もし道を踏み外し、手当り次第に人を襲うようになったら……」

「その時は私が斬る……でもあの子ならば大丈夫だ」

「うん。なんてったって、私達の子供だからね」

縁壺の双子は齡二十五にしてこの世を去ったのだ。紫明は縁壺と同じ体質で今まで生き永らえていた。六十年前、すぐにでも鬼になりたいとせがむ紫明に、人の時間を生きてから判断しろと一抹の希望を添えて言い放った。願いは変わらなかつたが。

「……義姉上、兄上、まだ、そこにいらつしやるのですか？」

「ああ、ここに居る」

「はい縁壺君」

「儂もおるぞ。安心せい」

巖勝と薫は戻ってくる。ほんの数分席を外しただけで、目に見えて縁壺は弱つていた。今や目の前の存在が最強の侍だったなんて誰も信じはしないだろう。

縁壺が話し始める。

「私は……辛かった……息子二人……昊羽と權晴が痣の寿命で亡くなって……家族が二人もいなくなつて……あの子達の子供は痣が発現していないことを悔しがっていましたが……置いていかれる身としては……痣なんて発現しない方が……何倍も良かったような気がするのです……」

「……そうじゃ。あれは強者の証でも何でも無い。ただの病氣じゃ」  
「……」

「兄上は先程、兄は弟に振り回されてこそだと言っていました」

「……？」

「……兄上」

——私を食べてくれませんか？

(……は)

巖勝は耳を疑った。兄が動転しているのを感じ取った縁壺は悪戯が成功した子供のように笑った。対して巖勝はそれどころではなかった。

「何……を言い出す……私に……この私に……家族を喰え……と申すか」

「あ、儂も薫になら構わんぞ！」

「……!?!」

「ええ!?!」

今度は薫も耳を疑った。動揺に目を瞬かせる兄を置いて縁壺が続ける。

「兄上、人の想いは永遠……です。ならば兄上の見る景色を、私は見てみたい……私の遺品は兄上のご自由にしてください……耳飾りは……炭吉の元へ届けてくださいませんか? 兄上と何回もお邪魔したお礼として……わたしたいのです」

「待て……縁壺。お前は喰われても……いいのか?」

「もちろん……兄上になら……喜んで」

「……相分かった」

「ふふ……ありがとうございます……ごさいます……もう眠ってもいいですね」

「……………ああ」

縁壺が天へと手を伸ばす。両目からは涙が零れ、指先は震えていた。うたはその手を

支える。

「う……………た……………俺は……………先に」

「うむ。待つておれ。今度はお主からわしの手を引け」

「……………あ……………あ……………」

……………

「縁壺は……………」

「もう……………眠ったぞ」

うたが縁壺の目を閉じる。その際に手についた彼の涙を大事なものののように握りしめた。

巖勝は世界が色を変えるようにして褪せていく気がした。

これより鬼の活動は活発になる。



太陽は落ちた。

「私が月となろう。太陽のように煌々とは行かずとも、夜の世界を照らす月光を放つ。そんな孤高の月に」

「でも独りじゃないよ。私がいる。私が一番側で貴方の輝きを見てるし、受け止める」

巖勝は鬼を喰う鬼である。世間に鬼の存在が大々的に明るみになったりするほど暴れている鬼は、巖勝自ら赴き、消していた。

人一人分滅った空間。えも言われぬ喪失感が三人を包み込んだ。

突然、うたが薫へと凭れ掛かる。

「うた？」

「わしは幸せじゃ……家族に囲まれて……姉の腕の中で死ぬるのじゃから……」

うたの子供のような行動に驚いた薫だが、すぐにその意図を察した。悲しみに包まれた表情を崩し、慈母のような微笑みでうたの髪を梳かす。しかし表情は何処と無く寂しげであった。

「うたはよく頑張ったよ。うたがいなかったら私はここにいなかった。私は妹に命を救われたよ」

「ふふ……そうじゃ……そうじゃとも……それもこれもお主達のおかげじゃ、ありがとう……ありがとうのう」

(つ……)

か細い声は二度とうたの口から紡がれることはなかった。

四人家族の団欒から、巖勝と薫のみになった縁側。

(弟よ、せめて安らかに)

巖勝は無言で縁壺の骸へと手を伸ばす。

口から直接では無く、吸収の形で取り込む。摂食ではない。自分の闇を広げるようにして縁壺を取り込む。

これは継承である。最強の名前は受け継がれなければならない。

(暖かい……陽だまりのような……)

残ったのは着物とこじんまりとした袋であった。

袋の中にはいつの日か巖勝が縁壺へと渡した笛が入っていた。色褪せ、罅が目立つ。縁壺がどれだけ吹いたか手に取るようにわかった。

「どれだけ吹いたのだ。直せと一言そう言ってくれば……いつでも直してやったものを……」

巖勝の視界が滲む。袋の中にもうひとつ違和感を感じた。

(まだなにか入っている)

——紐？

所々解れが目立つそれは、製作者が不器用ながらも必死に作った努力が伺える一品であった。目立たないような配色の糸が使われている。巖勝の控えめな性格を知る者が選んだのだ。

「……………これを何に使えと……………」

原作で巖勝が持っていた縁壺の所有物は笛一本である。黒死牟となつてもこれといった装飾品はつけていなかった。

「巖勝君。それ、髪を縛る紐だよ」

「……………」

うたを吸収し終えた薫が彼らの着物を畳みながら伝えた。

巖勝は髪を解き、今しがた己の髪を縛っていた安価な紐を見る。薄汚れ、年季が入つたといえは聞こえはいいが、もう寿命である。

「薫は知っていたのか？」

「うん。作り方を教えたのは私だよ。兄上には内緒にして欲しいって言つてたから、言わなかったんだ。縁壺君、何回もやり直しながら頑張つてたよ。上手く縫えたら笑つて、失敗したら落ち込んだ。そうやって初めて気づいたの。縁壺君って表情豊かなん

だなんて」

「そうだ……縁壺は表情がよく変わる……気付かれないだけで」

紐は縁壺の体温がまだ残っており、仄かに温かった。

「……時代に合わせて散切り頭にでもしようかと思っていたが……」

「巖勝君には長い髪が似合う。遠回しにでもそう伝えたかったんじゃない？」

(……お前は……本当に……どうしようもない弟だ……)

抑えきれなかった。

巖勝は溢れる涙を拭おうともしなかった。薫が気を利かせて、緩んだ手の平から紐を受け取り、彼の髪を結った。

不意に後ろから抱きしめられる。安心感から涙の量が増した。

「大丈夫。私がいる。私は巖勝君を置いていたりしない。だから巖勝君も私を置いていかないでね」

「……っ……どう……だ？ 似合っているか……？」

「うん。すごく似合ってる。普通にしてたら見えないけど、動いたら見え隠れする。キラキラとね。それで、昊羽君の子供達はどうする？」

「珠世に手紙を書いて……鬼殺隊に保護してもらおう……産屋敷も代替わりした……：：：：：始まりの呼吸の子孫ならば……手厚く保護してくれるだろう」

「手紙を八咫に送らせるね」

「頼んだ……耳飾りは……私が炭吉の元へ届けよう……この刀は縁壺零式の中に隠しておく……然るべき時……然るべき者がこれを見つけられるだろう」

「わかった」

「では……」

立ち上がろうとする巖勝。しかし首に巻かれた腕がそれを引き止める。結果、より深く薫に抱きしめられる形になった。

「何もそんなに急がなくても、うた達はここにいます。今までも、これからも四人一緒に進んでいくの。荆棘の道も、地獄の果ても。私達なら乗り越えられる」

「……っ……ありがとう……ありがとう……本当に……」

巖勝の目に再び涙が溢れ出す。今度は堪えようとはしなかった。家族を失った悲しみも欠点も弱さも全て最愛は受け止めてくれるのだ。

二人は暫くそうして悲しみに浸っていた。

薫は巖勝の髪を撫でる。

（今までよりも巖勝君を愛おしく思える……私の中にいるうたが巖勝君の中にいる縁壺君を愛しているからかな？）



薫はその身を蝙蝠の大群へと変えて家へと帰った。巖勝は耳飾りと笛の入った袋と、三本目の刀を背中に差し炭吉の元へと向かう。

(上弦を集め始めるか……)

「まずは無力な狛犬からだな」

## 間章

### ——話 めでたしめでたし

——これは有り得なかつたお話。

かの侍が自分の幸せよりも世界の平和を願つた話。人を殺すこともできず、人外として生き延びることもできなかつた鬼の話。

??

夜の帳が降りた世界。炭吉の家を後にし、無惨に血をもらつて鬼になつた巖勝は縁壺の家へと足を運んでいた。

「縁壺」

縁壺ははつとして起きた。兄が布団の横に鎮座している。軽く恐怖を感じた。兄だと確認し、眠気を吹き飛ばした縁壺は瞠目する。

兄は鬼になっていた。

それも鬼という言葉どおりの暴力さは欠片も存在していない。それよりもどこか、悲しい雰囲気漂っていた。

「兄上!？」

「あれだ。見ての通りだ。私は鬼になった」

「……え、えっと。素晴らしくかつこいいですね。特に六つ目の所とか!」

「……感想を求めているのではない」

弟の天然を咎めながらも、巖勝の口角は僅かに上がっていた。

「あれ、義姉上は?」

「……家に置いてきた」

「……本当に兄上で御座いましょうか……」

「どういう意味だ。ただ、これから始まる惨状には……巻き込みたくないからだ」

「なにを」

「ここを発つぞ。支度をしろ。うたは私の分体に護らせる。」

鬼の始祖を寂れた町に誘き寄せた。彼奴は私を信頼している。鬼になったのもそういうわけだ。始祖は用心深いからな。それに、目には目を齒には齒を。鬼に鬼をと言うやつだ」

「……俄には信じ難いですが、兄上が言うのなら着いていきます」

「助かる。終わりにするぞ。二人で……な」

「はい!」



かくして、太陽と月が夜の闇へと駆け出した。

??

瞬足の二人にかかれれば、常人が一日はかかるような道程も半刻で着くことが可能となる。

巖勝の言う通り、到着した所は寂れた町であった。最早廃村と言った方が正しいのかもしれない。屋根からは薄が生え、秋風に揺れている。

そんな人間が廃村の開けた箇所。そこに一人の男がいた。異様な雰囲気か漂っている。

「……兄上」

「ああ。気を抜くな」

それは彼らにしか分からない独特の雰囲気。縁壺にとつては兄と共に十数年間追いつけた鬼。巖勝の方は数回接触済みであるが、鬼と化した今ならば始祖は主も同然。根源的恐怖を一時的に炭吉の血で抑えているに過ぎない。

黒い着物。黒い髪。赤い目。名を——

「無惨様」

「黒死牟。なんの用で私を呼び出した。優秀なお前のことだ。それなりの理由があるの

だろうな」

巖勝を見つけた無惨が話しかけてくる。眉は少々不機嫌に顰められているが、それだけであった。抑、無惨が赤の他人の頼みを聞くのは異常事態である。彼なりの信頼の現れなのだ。

そして巖勝の横に目を向けた。

「ん？ ……なんだそいつは。黒死牟。今すぐそいつを殺せ。何処か不愉快だ」

「……」

「どうした？」

巖勝は空気が一変するのを感じた。自分の後ろにいる縁壺が刀を抜いたのだ。鬼に對しては喧嘩早い弟に苦笑する。

遅れて巖勝も刀に手をかける。

「参りましょう。兄上」

「承知……」

「な……」

ここでやっと無惨は理解した。この場に自分の味方は誰一人いないことに。この兄弟であろう二人の剣士は、自分を弑する為に来たことに。そして忠誠を誓われていた腹心に裏切られたことに。

「ふざ……けるなあああ!!」

太陽と月は日蝕が如く重なる。先に動きだしたのは縁壺だった。進んで前衛を受けてでた。

(そうだ。それでいい)

片や煌々と燃え盛る日輪の人。片や静かに構える月光の鬼。無惨はかつてない程の恐怖を感じていたが、無理やり抑え込む。自分は凡俗とは違う。生ける天災なのだ。それにあるうことか自らの信頼を裏切った巖勝を酷く許せなかった。視界が真っ赤に染まる。怒りに呼応するように無惨の体から触腕が複数生えてくる。

「死ねえええ!!」

そしてただ思いのままに触腕を振り回した。御伽噺の中に出てくる鬼よりも遥かに悍ましい本物の怪物。まともに受ければ人の体は肉塊と化す威力。それだけでなく触腕一つ一つから独自の血鬼術を飛ばして攪乱する。

そんな存在を前にして、縁壺は日輪刀を構え直す。

・日の呼吸 式ノ型 碧羅の天・

「なっ……!?!」

全て薙ぎ払われる。更に再生することは無い。

圧倒的な力よりさらに圧倒的な力で振るわれた刀は、地面にすら傷を刻む。

切断された触腕は放っておいて、新たに体生やしたものが再び縁壺に殺到する。

・月の呼吸 肆ノ型 虧月突・

縁壺の足の隙間、振り上げた腕の間、屈んだ体の真上の間を縫って月刃が飛んでくる。再生する暇すら与えず掠っただけでも根元まで抉りとる。加えて縁壺の後ろからの攻撃も防ぐ。お陰で縁壺は攻撃に専念できた。

彼らこそ天災。

「ちよ(こ)ざ(い)いな!」

・月の呼吸 拾肆ノ型 月虹・片割れ月・  
 ・月の呼吸 漆ノ型 厄鏡・月映え・  
 (なんだと!?)

さらに数を増やして伸ばした触腕は、縁壺に届く前に上から降ってくる三日月が縫い止める。地面から伸ばそうにも鬼の力で地面ごと抉り取られる。そうしている間にも

体は赫い刀に切り刻まれる。

それは唯の蹂躪であつた。圧倒的な力がさらに圧倒的な力で押し潰される。死。

終わりの影が脳裏にちらつく。

「おい！ 黒死牟、教えてやろう……私を殺せばお前も……がつ？」

巖勝は無惨が口を滑らせる前に刀を生成し、投擲する。それは一条の閃光となつて無惨の口内から喉奥へと突き刺さり、後頭部へと貫通する。

咄嗟に強靱な顎で刃を噛み砕いた。そして戦慄する。

（こいつ態と……まさか知っているのか!? 私を殺せば全ての鬼が死ぬことに!! 傷が再生しないのも可笑しい。不条理が起こりすぎている!）

「だが、これは避けれまい!! 体ごと貫うぞ、屑共が!」

パァン!!

無惨の体が碎け散る。細々しく碎かれた肉片は意志を持つて縁壺へと向かう。理由はない。ただ近くに居たからである。縁壺が刀を構え直し、攻撃に備える。

それも巖勝は折り込み済み。

「少し乱暴にするぞ」

「な!？」

縁壺に軽く体当たりする。とは言っても軽く持ち上げて放ったのである。まさかの方向からの衝撃に縁壺は為す術なく投げられる。

「あ、兄上!？」

巖勝を包み込むようにして無惨の血がおしよせる。縁壺の表情は困惑と絶望に彩られていた。対して縁壺の目には兄が笑った気がした。

「そのような……みっともない顔をするでない」

縁壺の目の前で巖勝の体に無惨の血がスポンジのように吸収されていき、巖勝はその場に倒れ伏した。

??

(ほう……お前のこの体。とうに青い彼岸花を摂取していたとはな)

(……精神世界……か)

(そうだとも愚か者め。後はお前の体も思いのままだ……)

(……)

(……なんだ黒死牟。命乞いの一つでもしてみたらどうだ？ どの道お前に待っているのは惨たらしい死だがな)

(ふはは！ 哀れだな、鬼の始祖よ)

(な……負け惜しみか！ 笑うしかできないのだろう！ お前は袋小路！ 体に乗った暁には、あの忌々しい弟をこの体で蹴ってやろう！)

(いや、短絡的なお前のことだ、考え無しに私の中に入ったのだろうか？)

(ない訳では無い！ お前を乗っ取ることができれば、私は日光を克服できる！ 無敵の存在となる！)

(いや、お前の望みは叶うことは無い。足りない頭で考えたらどうだ？)

(黙れ！ 死にゆくだけのお前………がっ………がああああああ！！！！ 熱い熱い熱い痛  
い熱い熱い痛い?!?)

(さあ、私の体から出ていけ！)

(やめ……ろ！ 待て！ お願いだ！)

(お前はここで死ぬのだ鬼舞辻無惨。潔く消えたらどうだ？)

(巫山戯るな巫山戯るな巫山戯るな！ こんな最期あつてたまるか！ ……ぐああああ

あああ!!!)

(さらばだ鬼の始祖よ………案ずるな………私もすぐそちらへ向かう)

(やめろおおお!!)

??

目を開く。満月が見える。縁壺が視界に映る。

「兄上！」

「縁……壺」

「そうです！ 兄上の弟の縁壺です！」

「縁壺。終わったぞ」

「ええ、お疲れ様です兄上。……そして申し訳ありません……こうしろと兄上の鎧鴉から……」

「構わない……八咫にそう命令したのは私だ」

巖勝の肩には縁壺の日輪刀が刺さっている。彼は血液と化して体内に入り込んだ無惨を弱体化させるため、弟に赫刀を突き刺させた。効果は靦面。すっかり鬼の始祖は苦しんでいた。縁壺はゆっくりと赫刀を抜く。

ここに鬼舞辻無惨を超える鬼の王が誕生した。

「くっ……」

そして巖勝は体勢を崩して倒れる。足は砂のように粉々になっていた。彼にはもはや体中の感覚が消え去っていた。



縁壺は気づかず、疲れたために兄が倒れたのかと思つた。

「はあ……やつと終わりました。どうです？ このまま私の家にも……？」

縁壺は刀を落とす。日輪刀は赫を失う。そんなことはどうでもよかつた。すぐさま兄に近寄り、心配そうに粉々になった足を震える手で触れようとする。しかし触つたところから脆くなったため、咄嗟にやめた。

「……兄上、……お体が……!？」

「落ちて着け縁壺」

「これが落ちて着いていられますか！ ど、どういうことですか!？」

巖勝は微笑む。酷く儂い笑み。対して顔を強ばらせ、取り乱している縁壺。縁壺の顔は今にも泣き出しそうな幼子のようであつた。そうこうしているあいだにも巖勝の痣は鼻付近まで拡大していた。体の制御がきかなくなつたのだ。

「……こうなることは……予想外であつた……が、私は鬼になつたのだからな……道連れは業腹だが……仕方ないことだ」

巖勝は支配には抗つた。しかし道連れには抗えなかつた。中途半端に摂取した無惨の細胞を根底から書き換えるには時間が足りなすぎた。

「道連れ……？ ま、待つてください……じゃあ兄上はこうなることも承知の上で……」

!？」

「縁壺。お前のような最高の侍を弟に持てて……私は誇らしい。これからもうたを大切にし、幸せになるのだぞ」

(ある結末では……お前はうたと心を失っていたのだから)

「い、嫌です!! 俺が侍をめざしたのは兄上に憧れたからだというのに! 兄上がいなくて俺もうたも幸せになれません! これでは始祖を殺した意味が……!」

縁壺が歯噛みする。理屈では理解しているのだ。透き通る世界はもう巖勝が数分も経たずに塵になることを示していた。だが感情では理解出来なかった。

「そう悲しむな縁壺……何も無意味ではない……見ろ」

巖勝は自分の掌から青い血を滴らせる。空いたもう片方の手で懐の瓶にそれを入れた。

「……………」

「この薬は……」

巖勝の視界の端で黄色い髪が揺れる。

「はあ……はあ……やっと追いついた。もう！私を置いていこうとしたつてそうはいかないからね。巖勝君が居ることろだつたらたとえどこにいたとしても分か……？」

「義姉上……！来てはダメだ!!」

「え……み、巖勝君!」

薫が現れる。間もなく彼らを発見する。駆け寄つて巖勝の手をにぎりしめた。薫は自分を見て驚愕と絶望を示す義弟と生気の失われた顔をした夫の二つから只事ではないと確信した。

「なんで体が崩れて……鬼になった……んだよね？鬼になったら一度体が崩れてまた生まれ変わるの？もしかして、人型では無くなるの？大丈夫。貴方がどう在つても私は愛してるから。ねえお願い……何とか言つてよ……でないと」

「薫。この薬は患者でも百年は生きられる薬だ……患者にしか効かぬ故に……数人分では用済みだが……何とか生成できた」

「え、ど、どうということ……待って、巖勝君……お願い……説明して……」

「見ての通りだ薫。私にはもう……時間は残されていない……始祖は殺したが、始祖の命は配下の鬼の命と呼応している。故に私はもう消える。それでも……お前には……どうしても幸せに……」

「駄目、駄目だよ！ そんなの！」

薫の目から涙が零れ落ちる。今起こっていることは夢だ。目を覚ませばまたあの満ち足りた日常が戻ってくるのでは無いかと愚考した。するしか無かった。でないと耐えられない。満ち足りていた世界が絶望の底に叩き落とされる音がした。

薫は差し出された薬を頑なに受け取らなかつた。

「ふざけないですよ……！ 知ってる？ 私の幸せなんて……なかつたんだよ……？ 巖勝君が私を見つけてくれたから、幸せになれた……貴方が私に手を差し伸べてくれたから……受け入れてくれたからっ！」

「私こそ、薫に救われた。本来なら私はここにいるような存在ではない。闇に堕ち、孤独に消え去る筈だった。しかしお前が共に歩んでくれたからここまで来れた。お陰で多くの人が笑顔になる」

巖勝は薫を抱きしめる。薫も二度と離さない気持ちで抱きつく。最後の抱擁。薫はそれが永遠に続いて欲しかった。しかし、抱擁に込められた意味は永遠の別れ。

「嘘つき！　ずっと一緒にいるって言った！　こんなことになるなら私は鬼になってもよかった！　もつと一緒にいたかった！　貴方がいれば、私はただそれだけで……許さない！　許さない！　こんなの許さない！　許さない……い……ああっ!?!」

掴んだ手は塵となつて消える。受け取った温もりはすぐ冷める。宙に舞う塵をかき集めようと手を伸ばす。そうしている間にも崩壊は進んでいた。

「待つて……何か方法があるはず……！　鬼……だったら、私の血肉……私の血肉を食べれば……！」

薫が己の腕を切り落とそうとするが、巖勝がボロボロの片手で止める。

「もう手遅れだ……薫……私はお前に生きていて欲しい……鬼のいない夜を過ごしてほしい……」

「まだ何か方法があるはずです兄上！　諦めないでください……兄上は絶対に死なせません！」

「そんなの……あんまり……そんなこと言われたら、直ぐに巖勝君の所まで行けないっ」  
掴んだ手は灰になる。

抱きしめた体は塵になる。



世界が音を立てて崩れ落ちていく。鮮やかな情景が色褪せていく。あらゆる音が雑音へと変わる。温もりは全て上弦の壺が奪っていった。

零れた涙は紫の着物に滴り落ちて滲みる。

「愛してる！ 愛しています！ 愛してるからお願い……戻ってきて！」  
やり場のない慟哭が響き渡る。

「兄上……っ」

至らぬ力は最後の最後で家族を守りきれなかった。生まれ持った天賦の才も、日輪刀も、呼吸も、赫刀も役立たず。

……

（大丈夫だ縁壺。お前はできる弟だ、同時にその弱さを私は知っている。何も気に病むことは無い。人生は長い。お前の才はこれから何人も人を助けるだろう。そして助けられなかった人も何人も思い出すだろう。私はその孤独を、痛みを知っている。私がいる。だから大丈夫だ。胸を張れ）

……

「そうだ。そうだと。私は……肝心な時にいつも無力だ……兄上に……何一つとして





しかし珠世は路地裏で塵になるまでずっと、己の存在意義を残酷な世界に問いていた。??

「無惨が……鬼舞辻無惨が……死んだ!?!」

「無惨が死んだ! 無惨が死んだ!」

「やったあああああ!!」

「これで鬼のいない夜が迎えられる……!」

鬼殺隊は解散。産屋敷は病も治り、元隊士達のアフターケアに奔走する。残った隠や隊士達と共に商いを立ち上げて有意義な毎日を送った。

一件落着。任務完遂。

画して、みんなはしあわせにくらしましたとき。めでたしめでたし。



「そんな……」

「事の顛末は以上です。伝えられて嬉しかったです。夫も喜ぶでしょう」

平和の実現から数年後。痣の寿命が近づいた薫は、縁壺の勧めで炭吉の家を訪ねていった。女剣士が訪ねてきた時初めは誰かわからなかった炭吉だが、腰に差してある見覚えのある日輪刀と、紫の羽織を見て理解した。彼女は自分の恩人の大切な人であるのだと。

そして月の侍はもうこの世を去つたのだと。

炭吉に一部始終を話した薫。炭吉は涙を流さずにはいられなかった。かの侍はただの鬼ではない、日本一優しい鬼であった。

「ちよつと……待つててください。すぐにもどります」

「ええ、わかりました」

「ふふつ。炭さん、いっぱい練習したからね」

涙を抑えながら家の中へと消えていった炭吉。すやこはそれを微笑ましそうに見つめた。薫は現れた女性に意識を向ける。

「貴方は」

「私はすやこ。宜しくね」

一人になった薫にすやこが話しかけてくる。彼女の足の影に幼い女の子が隠れていたのを目に止めた。

「私は継国薫です」

「凛々しい名前ね……よいつしよ。この子はすみれ。貴方の夫さんが名付け親よ」

「え、巖勝君が？」

「本当に素敵な名前でしょう？ そうだ、薫さんも抱いてみては？」

「わ、私がですか？」

「ええ是非。炭さんよりも背の高い貴方なら、すみれも喜ぶと思うの！」

「……ええつと」

「ん。だつこ」

（ど、どうすれば……）

すみれが薫の紫の羽織を掴んで催促してくる。恐る恐るすみれの脇に手を挟む。擦ったそうにすみれが身を攀じると、自然と薫の顔も綻んだ。

そうしてゆつくりと抱き上げる。薫は赤ん坊に触れるのは初めてであった。故に少し力を入れるだけでも壊れてしまいそうで怖々としていた。

「きやつ、きやはは！」

「……つ……」

「薫さん？」

「いえつ……だい、大丈夫です……なんでもありません」

声を出そうとすればツンと喉の奥が痛んだ。そうして嘔吐きそうになるのを堪える。すみれが心配そうに瞳を覗き込んでくる。薫は深呼吸をしてゆつくりと下ろす。名残惜しそうに裾を掴んでくるが、名残惜しいと思っていたのはすみれだけではなかった。下ろして尚、薫の手はすみれに触れていた。

巖勝はこの子供の笑顔で誰かが救われて欲しいという願いを込めてすみれと名付けた。しかし皮肉にも、彼が一番幸せに生きて欲しいと思っっている存在を悲しませるだけに終わった。

そこで炭吉が丁重に収められた刀を持ってくる。継国家に伝わる刀。巖勝の愛刀。蛟落天津である。

「薫さん……これを」

「これは」

「巖勝さんが残しておいたものです。巖勝さんの約束通り本人にお返しすることは叶いませんでしたが、せめて貴方には返しておきます。」

……しかし、その前にもう一つ見せておきたいものが」

「……？」

炭吉は徐に足を庭へと進める。蛟落天津を携えて。炭吉は涙を抑えて無表情になる。

(見ていてください巖勝さん)

——ホオオオオオオ

彼の形見を握りしめ、舞う。

- ・ツクヨミ神楽 闇月・宵の宮・
- ・ツクヨミ神楽 朱華ノ弄月・
- ・ツクヨミ神楽・……………

「あーあ。本当なら私が舞うはずだったのに。炭さんみたいに、私も感謝を伝えたかったな……………」

「うー?」

「大丈夫よー。すみれも舞えるようになるからねー」

薫は炭吉の姿に愛する人を幻視する。もう二度と見られないと思っていた姿。彼外にはできないと思っていた型。本物には程遠い。しかし命の芽生えを祝う神楽として神に奉納するには十分すぎるほど美しかった。

「あ……………あ……………」

視界が滲む。視界が滲んだことでかえって刀を振るう炭吉の姿がぼやけて、ほんの一

瞬だけ彼と姿が重なった。薫は無意識に手を伸ばす。そうしたところで彼は帰ってこない。わかっていてもいつもみたいに手を伸ばせば掴んでくれると信じて伸ばした。

(沢山……残してた)

「受け継いで……くださるのですね……」

「はい。そう約束しました」

「でしたら……その刀は貴方が……私にはもう受け継ぐ意味が……」

「いえ、これは薫さんが持つていてください」

炭吉が刀を薫へと差し出す。

「この刀はあるべき場所へと帰ろうとしている。巖勝さん亡き今。その場所は貴女の元です」

「……私は……巖勝君じゃ……」

「それでもです」

「……」

掴む。しつくりとくる重み。まるで愛刀のように慣れ親しんだかのような心入れ。試しに刀を抱きしめてみる。何も感じない。冷たい鞘よりも冷たくなった自分の体温

しか感じない。

薫は刀を背中に括りつけ、無言で一礼し、振り向かず歩き出す。それで炭吉達は察する。もうここに彼女は来ないのだと。かの侍のように消えるつもりなのだ。

「薫さん！ 死なないでくださいね！」

足が止まる。

「巖勝さんのことを覚えていられるのは薫さんだけです！」

「そうよ薫さん！ またいらっしやい！ すみれと一緒に待っています！ ほらすみれも！」

「あーう？」

再び離れていく背中。姿が見えなくなるまで炭吉達は目を離さなかった。

「薫さん。大丈夫かな」

「分からない。分からないけど……どうか報われて欲しい」



「……」

（私はどうなるのかな……巖勝君の遺してくれた薬を飲んで……そしたら……）

山を下る薫の足取りは重かった。聞こえてくるのは枯葉を踏み締める自分の足音だけ。

背中への重み。失った者の重み。一生共にいると言う約束を果たせなかった呪いの重み。幾ら時間が経とうとも、癒えることは無い。人と会えば気が紛れるものの、一人になつてしまえばまた失つた温もりが蝕んでくる。

右腰には自らの日輪刀。左腰には紫紺の日輪刀。背中には蛟落天津。三本分の想いを冷たい体に宿すには失いすぎた。

「う……」

足を止める。夏だと言うのに彼女の吐く息は白かった。最早空を見上げる気力もな



い。取り繕っているだけで彼女は最愛を喪った時から、伽藍堂であった。縁壺達は必死に元気づけようとしたものの、どうにもならなかった。乾いた笑いが溢れる。全ては無  
力な自分への蔑み。

(このまま……彼みたいにならなくなったら)

薫が近く藤の花の木に体を預ける。膝を抱えて座り込み、顔を埋める。奇しくもその木は巖勝が鬼になる前に炭吉の家を訪れた際、触れた木であった。

そして目を瞑る。無駄に鮮明に見える視界を閉じて視覚以外の感覚を研ぎ澄ます。

「!!」

「!!」

「!!」

(………煩い)

凡百所から聞こえてくる鬼のいない夜を謳歌する声。

鬼殺隊が笑っている。

巖勝が消えた後、彼らは無惨を討伐したのは日柱だと賞賛した。そして月柱は鬼になつて然るべき存在だったと罵倒した。挙句の果てに薫は月柱の被害者だと憐れんだ。幾ら薫や縁壺が彼の功德を並べようが無意味。

彼らは知らない。鬼を倒した英雄が紛れもなく鬼であることに。鬼のいない夜を謳歌するということは、彼の存在を真つ向から否定し、泡沫と消えた有象無象の鬼の一人と看做していることに。

（嗚呼嗚呼嗚呼。駄目ダメダメダメダメ。許せない。許せるはずがない）

「ぎ……（ー）」

薫は歯を食いしぼる。口から血が溢れて鉄の味が口いっぱいに広がるが、歯が粉々に砕け散りようが、激痛が脳髓を穿とうが、知ったことではない。この程度の痛みなど、彼を喪つた痛み比べれば無に等しい。

試しに自らの日輪刀を少し抜いてみると、根元から鋒まで漆黒に染まつている。彼女にはもう暁の呼吸は振るえないのだ。

彼も鬼もいない今、呼吸は無意味で何にも使えない無価値なモノで彼を救えなかった無能だからである。

一番救いたい人を救えなければ全て無駄。存在価値などありはしない。

そして目を開く。

だから見つけた。

この国で一番見つけてはいけない者が、見つけた。

見つけてしまった。

地に足をついても清廉と輝く青色の彼岸花を。

(あれ? この色は……確か……)

薫は懐から巖勝の形見でもある痣の薬を取り出す。色に關していえば、全く同じ。透き通った青である。灰色の世界でもこの色だけは鮮明であつた。それだけで十分。この花は鬼の力に連なる。若しくは根源なのだ。そう結論づけた。奇しくもそれは当たりである。

「……」

何が彼女をそうさせたのかは分からない。想い人と一緒の存在になりたかつたのか、只只復讐がしたかつたのか、はたまた好奇心からなのか。それとも、鬼になつて悪行を積み重ねれば、同じ所へ行けるとでも思つたのか。

薫は憎らしいほど蒼い花に手を伸ばした。

……

……





「おいたわしや。義姉上」

## 狂愛

「ねえ、本当にやるの？」

「ええ、立つ鳥跡を濁さずって言いますし」

「使い方あつてるのかしらね、ソレ」

崖の下にあるのは人里。巧妙に隠されているけれど、あれは鬼殺隊の里。全く……里の位置を変えただけで見つからなくなると思ったら大間違い。舐められたものだ。頭脳派の鬼なんていなかったから当然かな。

見つけ方は至極普通。鬼殺隊や隠が各地に散らばっていて場所が分からないのなら伝達役、つまり鏖鴉を追えばいい。

「さーて。どうなっているでしょうか」

これはやるのははじめ。由緒正しき炎柱の家に生まれながら鬼に堕ちた私と鬼殺隊の決別。

そして、騙し討ちのような形で娘を殺されかけ、夫の愛してくれた体に刀傷を貰い、可愛い義弟を失望させ、最後まで自分たちの恩赦を願った夫の気遣いも踏みにじった鬼殺隊。……もうこれ壊滅させても許されるよね。



壊滅はナシ。そう巖勝君から釘を刺されている。なんでも四百年後に私を無惨から解き放つことを可能にする存在が鬼殺隊の助けによって輩出されるらしい。

「要は皆殺しはダメってことでしょ」

これから忍び込むのは数年前の戦いで満身創痍の柱達が休養中の屋敷。ズタボロになつても尚権力の頂点に君臨する彼らはこれから後継の育成に追われている。なにせ有望な鬼殺隊は数年前のあの日に巖勝君によつて全員消されたから。自業自得だけど。

「さあ、行きますよ天外」

「わかつたわよ」

天外は巖勝君の鎧鴉である八咫と共に鬼……らしきものになりました。今のところ寿命の枷から解き放たれたのみですが、今後の活躍に期待ですね。気持ち体が大きくなつた気がします、気のせいでしょう。

「まずは、柱の皆からです」

崖から飛び降りて華麗に登場……なんてことはせずに体を無数の蝙蝠へと変えて里の中の柱達がいる家の前に着く。窓を開けて至極あつさりの中に侵入出来た。

見回りの鬼殺隊は私の存在にすら気が付かない。落ちたものだ。数年前なら技の一つや二つ放つてきそうだったのに。実力者は軒並み死んだから仕方ないか。

「あら、皆さん勢揃いで。お怪我は大丈夫でしょうか」

「……ふん。なんとも毒の利いた皮肉だな」

「うえっ!?! 薫! なんであえ!?!」

揃いも揃って包帯塗れですね。右から

炎柱、風柱、鳴柱、岩柱、水柱。最早布団の上で死期を待つだけでしょいか。手足欠損。大量出血。内臓損傷。複雑骨折。脳震盪。なんで生きてられるんでしょいか。

「……なぜ来た薫。止めを刺しに来たのなら……タダではやられんぞ」

布団から上半身だけ起こした兄様が、目線をこちらに向けたまま脇に置いてある日輪刀に手を伸ばす。最後まで抗うつもりなのかな。私が今ここで腕を真横に振るだけで首が五つ飛ぶのに。

「ただの挨拶ですよ兄様。そんなに身構えなくても楽にしてください。別に殺しやしません……」

いほん。

「それでは改めて……」

床に両手をついて跪く。所謂土下座。許してもらうなんて甘ったれたことじゃ無くて、私が今できる最大限の敬意を払う。

「私、継国薫は、今日を以て鬼殺隊並びに煉獄家との縁を切らせていただきます。柱の皆様、並びに兄様。今までありがとうございます」

「……承諾した。我が家系図にお前の名前は刻まん。栄えある煉獄家から鬼を出したとなれば末代までの恥だ」

でしようね。そう言うと思つてた。思つたより悲しくないかな。

「暢寿郎……」

「琴音。仕方の無いことだ。無惨を滅しきれなかつた以上。我ら煉獄家は繋いでいかなばならん。知恵を。技術を。私の子はまだ幼く非力だ。今私が腹を切つて途絶えさせる訳にはいかん。縁を切れれば、そういうわけでもなくなる」

正しい。どうしようもなく。そりやそうだ。私は彼らにとつて悪でしかない。切り捨てるのは至極当然のこと。

「今私が兄様を殺すこともできますが」

「それでどうする。仮にもしお前がこの場にいる全員を皆殺しにしたとしよう」

「おい」

「仮の話だ房綱。そうなつた時、お前の夫は悲しむのではないか？ 我が不肖の妹よ」

「……」

「あいつは敵対するものには容赦せんが、身内にはとことん甘い。それはこの俺が身に染みて知つている。お前のことだ。我ら五人の命よりも夫の感情が悲しみに揺れ動くことの方が大切であろう？ 『薫にかつての仲間を殺めさせてしまった』と」

……ほんとに兄様は人のことを見ていないようで見ている。かつてはその事が嬉しかった。

けれど、最早薄っぺらい御託としか思えない。もし見ているだけでなく、行動に移してくれていたら私は違う道を歩んでいたかもしれない。今そんなことはどうでもいい。過ぎたことだ。巖勝君に会えなければ、適当に鬼を斬つて名付きの鬼に殺されて終わつた人生だ。

名残こそあれど、後悔は欠片もない。寧ろ感謝している。巖勝君と会えたのだから。「……はいはい。私には殺せません。まるで私を血も涙もない冷血漢みたいにおつしやいますけれど、無闇矢鱈に殺すのは私も嫌なんですよ。あーあ。気が削がれました。私はここら辺でお暇しましょうかね。さよなら。もう二度と会うことは無いでしょう」  
おさらばです。

「待て」

「ん？ まだ何かあるんですか」

「日輪刀を置いていけ」

え？

「その腰に差している日輪刀だ。まだ持っていたとは、鬼であるお前を妹に持つ俺への当てつけか？ お前が持っているのは侮辱がすぎる。置いていけ。でなければここで折れ」

これは証。私が彼と同じく呼吸を使える鬼だという証。色の変わつた刀がそう。

炎の呼吸と日の呼吸の組み合わせである、暁の呼吸。兄様は私が日の呼吸を取り入れたのを気に入らないらしい。煉獄家は長年続いてきた炎の型を受け継いできた。それが突然現れた呼吸法に組み込まれ、あまつさえ私は混ぜ合わせた。

だとしても清濁併せ呑んでこそ私の私だ。

「兄様。貴方は何か思い違いをしています。」

私は鬼殺隊なんて。どうでもいいんです。誇りとかもどうでもいい。これはただ私を持ちたいから持っているだけ。ただそれだけ。……鬼殺隊が襲ってきたらこれで刺してみましようかね？」

「っ……………これだけは言わせてもらおう」

鷹のような双眸が私を射抜く。家族を見る目じゃない。化け物を、仇を、鬼を見る目。……継国薫。お前は一族の恥だ。いつか私の血を継ぐ煉獄の剣士が地獄の果てまで追いかけて、必ずお前の首に刃を振るう。

絶対に！ お前を……………許さない！

「暢寿郎やめろ！ もう話すな！」

口から血を滴らせて、まあ必死も必死。今の一言をいうために寿命が三年くらい縮ん

だんじやないかな。

馬鹿馬鹿しい。兄様にも家族がいるのに、下手に寿命を減らすこともないのに。でもこれに関しては巖勝君もそう。鬼になって本当に良かった。痣持ちは二十五までに死ぬ。私の方が巖勝君より年上だから私の方が先に死んでいた筈だ。私は置いていかないし、置いていかれたくない。

「もし、貴方の子孫が私に牙を剥くのなら……その時は……」

この赫き<sup>ぎょうとう</sup>暁刀が、煉獄の炎ですら焼き滅ぼして見せましょう」

「熱!?!」

「赫刀……それも蜃気楼が見えるほどか」

「……温度だけなら縁壺よりも」

はあ……帰ろう。どうやらここで柱を皆殺しにしてしまえば、鬼殺隊は壊滅する。

正直殺してしまいたい。だってすぐ目の前に仇がある。数年前のあの日、私たちの運命がこいつらに決定づけられた日。柱達がもう少し上手く立ち回っていたら、案外平和

に解決できたかもしれない。

腹が立つ。此奴らのせいで誰のものとも分らない屑の細胞が体に蔓延り、命を同調させられている。私の体に入っているのは彼だけなのに。

「薫」

「なんですか房綱さん」

「お前のこと、好きだったぞ」

は？

「……………」

「む」

「……………よく言った」

「あつは……………」

なんですかこの男は。今すぐにでもその口を閉じさせてしまおうか。薄々予想はしていたけれど、今の今更そんなことを言ったところでは何になる。腹立たしい。

周りも周り。何その空気。私はいつでもこいつらを殺せるのに。死が怖くないの？ 誰だつて家族を置いて死にたくはないに決まっている。



「だがまあ、欠片でもお前の感情が揺れて、片隅にでも御門房綱という男を覚えておいてくれたら嬉しい。」

「……………何せ俺は明日死ぬからな」

「……………あら」

ふうーん。明日死ぬんだ。で？ たかがそんなことを言うために家に帰ろうとする私を引き止めたの？

ふう……………深呼吸をして、感情を殺さなきゃ。

滑稽だろう。今日の前にいる勘違い野郎は私が動揺していると思っている。内心は風いているというのにな。

「お、もっと冷たく返されると思ったが、案外悲しんでくれるんだな」

「そりや……………まあ……………貴方はこの中で兄様の次に交流がありますし」

「ちなみに嘘な」

「は……………？」

「明日死ぬってのは嘘……………待て。俺が悪かった。だから刀を抜くな。……………だがお前を好いていたのは本当だ」

「……………」

「はあ……………いつから薫はあいつを好きになったんだ？」

そんなの決まってるじゃないですか。

最後ですし、あの巖勝君が可愛く目を逸らした私の姿を焼き付けてあげよう。たしかこうだったつけ。窓枠に足をかけて、片目を閉じ、人差し指を唇に当てて……

「教えてあげません」

(一目惚れか)

(一目惚れだな)

(一目惚れやん)

(一目惚れ……)

(一目惚れかよ!?　　っていうか可愛いなちくしょう!)

「ふふっ」

もういいでしょう。今度こそさよならです。んー?　何故か全然悲しくない。なんだろう。鬼になったから?　……違うな。鬼でも人のままでも、もう私の帰る家は鬼殺隊じゃないからか。そうに違いない。なんだか心躍るなあ。好きな人が家で待っていてくれるってこんなにも嬉しいんだ。

外へと身を投げ出せば、すかさず天外が肩を掴んで次の目的地へと運んでくれる。成

程、便利ねこれ。夜風が肌に心地いい。

「さあ、本命に行きますよ。これが最後です」

「……そうね」

「どうしたんですか？」

「あなたの事だから、柱を皆殺しだと思っていたわ」

天外は私のことをなんだと思ってるんでしょうか。

「放つておいても鬼殺隊は廃れて行きますよ。そもそもこの時代が異常なのです」

「そうなの？」

「ええ。だってよく良く考えれば不思議じゃないですか？ とりあえず継国兄弟は例外

中の例外のそのまた例外なので置いといて……」

岩より硬い鬼の首を刀で切り落とせる人間がそうポンポンいて堪りますか。そんな人間でもこの組織の最下層に位置しているんですよ？ 今代の柱の皆さんは数百年に一度の天才達です。

世に出ていれば必ず歴史に名を連ねるような武人が五人も存在しているこの時代は鬼殺隊全盛期と言っても過言ではありません。逆にこの時代さえ終わらせてしまえば、あとは簡単。鬼殺隊の存亡は私の掌の中です」

「……アンタ随分強かになったわね」

それもこれも全部鬼殺隊のせい。鬼の始祖の細胞がこの体に埋め込まれているせいでこんな回りくどいことをして太陽の克服を待つしかない。

さっさと終わらせて巖勝君に会いたいなあ。

「嫌ですか？」

「なにがよ」

「鬼殺隊を裏切つて鬼に加担するのは」

「ふん。私がついて行くのはアンタよ。鬼でもなんにでもなればいいわ。まあ最初は感情のない死人みたいな餓鬼だとは思ってたけど、あの侍と会ってから随分生き生きとした顔をするようになったし……」

「嬉しいです！ 天外！ かわいい！ 抱きしめてあげます！」

「ちよっ!? 暴れないでよ！ 今度こそ鬼殺隊にバレるわよ!? 落ちる!! 落ちるわよ!!」



「……昂」

「カアアア！ 暢寿郎！ 火葬！ 火葬の支度！」

「まだくたばつとらんわ戯け。よく聞け。御館様に知らせろ。妹が里に来たとな」

鎧鴉が沈黙する。

「イモウト……無事か……暢寿郎」

「見ての通り皆無事だ。私のことはいい。里を変えなければならない。一刻も早くな」

「あア……ワカツタ」

「待て。今行けば殺される。妹が里を彷徨っているやもしれん」

柱達は継国兄弟の次に強いのは誰だと聞かれれば間髪入れずに継国薫と答えるぐらゐに彼女の強さを認めていた。なぜ柱にならなかつたかと言うと、任務放り出して巖勝に付きつきりの問題児且つ本人が蹴つていたからである。

そんな異端児が今、鬼と成り果てて里に訪れた。誰がどう見ても絶望的である。重苦しい空気を消し飛ばすようにして快活な声が響いた。

「それにしても傑作だったな房綱の一世一代の告白」

「……無様……」

「黙れ……おい暢寿郎。巖勝に助けられたのか」

「ああ、あいつの刀に地面に縫いとめられ、首を跳ねられる直前。微かに彼奴の目が揺れ動いた。明らかに動揺していた。皆が皆、彼奴の首を落とそうと躍起になっていたのだ」

「あー……あの時か」

「そうだ正助。お前が巖勝の首に赫刀を突き刺す前だ」

「だよな、俺があいつに対してあんな綺麗に刀を突き立てられる筈がねえ」

「……つてことは巖勝はんがもし躊躇つたらんかったら」

「俺は死んでいた。いや、正助の奇襲に気づいていた節がある。

俺の首を切った後、正助も死ねば連携の密度が格段に小さくなる。お前たちも全員死んでいたな」

「……まさか情けをかけられてたなんて……最後まで届かなかったというの……」

「……悔しいな」

「それにしても本当に無様だったな。もう少し早く気持ちを伝えていればよかったものを」

「チツ……なんでだろうな……あの時も、いつか幼馴染の俺達は結婚するんだって信じていたし、あいつそう思っていると思ひ込んでた。だから結婚する前に、この初々しい時間を楽しもうとしていた。今思えば俺の勝手な妄想だったな」

「分かるよ。一歩踏み出せば届くのに、踏み出してしまえば二人が今いる場所も二人で歩んできた道も崩れてしまいそうで怖いよね。好き以前に友達で仲間なんだから。そうこうしているうちに『優しい友達』で印象が固定されちゃうんだ」

房綱の考えに正助が同意を示し、琴音が口を開く。

「……………房綱……………なんで嘘言ったの」

「[[[……………]]」

空気が凍った。誰が房綱に「そのこと」を聞くのか水面下で腹の探り合いがあった中、琴音が聞いた。

「……………」

「貴方は……………もう……………死ぬでしょ？ 巖勝君にやられた傷が私達と比べてひどすぎる……………数年持っただけで奇跡」

そう。房綱はあの戦いで心だけでなく命を燃やした。燃やし尽くした。偏に友に引導を渡し、幼馴染を救うため。誰よりも自分を顧みず戦った。

思い返してみれば間違いだつたと気がつく。友が鬼になったのは自分達の魔の手から妻子を助けようとするためだし、幼馴染は鬼殺隊から子を庇って受けた傷が深すぎて鬼にならざるを得なかつた。

良かれと思つてしたことは、徒勞であり、全てを滅茶苦茶に掻き乱して失敗に終わった。

「はっ！ 本当のことなんて……………言える……………訳ねえだろ……………試しに言つてみただけであいつは悲しみやがつた……………あんな顔見せられたんなら……………調弄すしかねエだろうがよ。俺はまだあいつに惚れてんだ。惚れた女を悲しませるなんてできるわけがねエ」

「……優しいね……度し難いほどに」

「優しいだけじゃ女は惚れてくんねエ。あーくそ。最後の最後になって理解した。もつと早く気づいていれば……いや、気づいていたな。だからこそ俺は何もしなかったんだ。俺って最低のクソ野郎だな」

房綱はそう言つて仰向けで寝転んだまま片腕で両目を隠す。

「……でも薫との時間は楽しかったでしょ？」

「……ああ。そうだと。その通りだ。何年経つても色褪せねえ。刀しか取り柄のない俺が誇れる最高の思い出達。」

「『思い出すことしか出来ない幸せ』だア……ただまあ」

——俺の人生の主人公は俺じゃなかったただけなんだなあ

「こちらも静かに潜入しないとですね。あ、私閃きました。天外。屋根から突っ込みま



す。落としなさいほら早く」

「……ねえ、アンタ早く帰りたいからって適當になつてない？ 最初の黒幕感はどうしたのよ。ちよつとでもカツコイイと思つたワタシがバカみたいじゃない」

「……知りません」

「……あつそ」

ドゴン!!

なんだかんだ天外がしつかりと離してくれた為、綺麗に屋根から飛び込むことが出来た。しかし思いの外瓦が硬かつたので手でかち割つて屋内に侵入する。

フツツの家だ。炭吉君の家に似てる。こじんまりとしてて意外と好みかも。そして私の来た音を聞いて顔を出した女性。

ああ……良かったあ……目当ての人物が目と鼻の先にいてくれた。

「お久しぶりです。阿茶さん。早速ですが死んでください」

・ 暁の呼吸 壺ノ型 暁闇の明星 ・

袈裟斬りに見立てた。振り下ろしと振り上げの二連撃。巖勝君が燕返しって言つてた技。巖勝君が言うのなら、燕返しに改名しようかな。でも燕返しって安直すぎない？

「っ!？」

「……避けないでくださいよ」

「避けるにきまつてるでしょう!? いきなりなんですか貴方は………薫………!? あなた継国薫ね!」

なんだか驚いてる。この方は馬鹿なのかな。あれだけ痛めつけられたら報復しに来るに決まつている。しかし今回は私は狩る側。冷静にしないと。人間とはいえ追い詰められたら何されるかわかつたもんじやない。

「はい。薫です。あなたが切り刻んだ薫ですよ。右手を五回。胸を三回。右足を二回。左足を五回。そして腹を一回。死ぬ前にこの顔を見て嬉しいでしょ?」

「死ぬって………ここは鬼殺隊の本拠地よ! 私を殺せばどうなるか………えっ………!」

あ、気づいた。腹の切り込みに気がついた。あの時のお返し。私の場合には内臓ごと切られたから、零れ落ちないように腹筋に力をいれなければいけないほど深かつたけれどね。因みに私の片腕が無傷なのはもちろん紫明を抱えていたから。

そしてこんな、力でも技術でも私に劣るような雑魚に数多の傷を付けられたのは……

—— 執拗に腕の中の紫明だけを狙ったから。

「……つぎい……よ、避けた……はずなのになんで」

倒れて苦しんでいる彼女はほつといて部屋を物色物色。

へえ、縁壺君に手を斬られたあとには隠の中でも飛脚や伝達などの足を使った仕事をしてるらしい。見上げた奉仕力ね。そこまでこんな組織に肩入れする理由があるのかな。

「よく出来ました。腕が儘ならない状態でここまでよくぞ成り上がりました。褒めてあげます」

「ああっ……ああああ。御館様はこの私を受け入れてくださった。生きる理由を与えてくださった……あの方のためならば……」

「はあ……あの方のためですか。実際鬼の始祖と御館様は何が違うんでしょうね。人を

導き、魅了し、体の一部に階級を刻み、命令通りの傀儡とする。もしかすると血縁だったりするんでしょうか」

「お前……！ 御館様と無惨を共にするな……！」

「それもそうですね。諄いくらいに善悪はつきりしてますし。それはそうと、痛かったですよ。別に私の腹を裂いたことじゃないです。貴方が紫明を狙ったことですよ。いつか貴方の刀が紫明を刺し貫いて、腕の中で我が子を失うかもしれないと考えただけでもう耐えられなくて……」

自分の体を抱き締めれば、震えと高揚が支配しているのがわかる。この女はあの日私を止めたことで御館様に褒められたのか。巖勝君が首を切つてあげた産屋敷の息子が継いだらしいね。

「いふ……っ……」

「……人つて案外早く死ぬんですね……これに関しては柱の皆様が異常だったのでしょう」

阿茶さんはなぜか月に顔を向けようとしてました……つて、は？ 何してるの？ そんなことさせない。月は彼の現身。そんなの幸せが過ぎる。立ちほだかつて邪魔をする。彼女の顎を掴んで目を合わせると、酷く怯えた瞳に私の姿が写る。

「違う違う違う違う。何をしているの？ 貴方は私に殺されるの。私救いを求めては以外を見てはいけ

ないの。わかった？」

「あ……ああ」

恐怖に染った顔。一瞬だが目が逸れた。私の破った天井を見た。ちらりと上見ると刀が天井裏からはみ出している。

日輪刀……握ることすら叶わないのにここまで大切に保管されているということは何かしら思い入れがあるらしい。元鬼殺隊員としての誇りか、自分の功績の結晶か、はたまた巖勝君との繋がりが。

「あれは貰っておきますね。とは言っても、もう聞こえていませんか」

阿茶さんの頬から両手を離すと、コトンと倒れた。やけに静けさが染入る。事切れた阿茶さんの死体。あたたかい死体。人の死体。私は鬼。人を食べる鬼。

「人の……肉。血。衝動は……全くない。これも巖勝君の血の力。人の血肉を喰らわなければ生きていけない鬼の性を克服した彼なら、納得出来る……けれど」

吐血した際に手に着いた血。試しにぺろりとひと舐め。美味しい。甘い蜜のよう。

「っ……はは」

涙が出てきた。私はもう人じゃない。こんな変わらない。ゴミみたいな罪悪感と、抑えきれないほどの愉悦。

細胞が悦ぶ。心臓が波打つ。始祖の細胞だ。それが喜んでいる。私は始祖の血の割

合が巖勝君よりも濃い。だからこんなにも興奮する。  
もうひと舐め

もう一口……………

もう〃人〃齧り。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、アアアアアア!!!」

視界が真っ赤に染まる。これはまだ軽い方だ。鬼になったばかりだった時よりも遥かに軽い。少しずつ始祖の血がうすくなっているんだ。それでも並の鬼よりも濃い。

落ち着け。ここで人の味を完全に覚えてしまつて、紫明を食い殺す訳には行かない。耐えろ。どうやって？ 余計なことを考えるな。私は鬼だ。鬼が嫌いなもの。鬼を殺せるもの。

「これで……………」

阿茶さんの持っていた日輪刀。漆黒の光沢があるそれを叩き折る。叩き折つて口の中に放り込む。バキバキと噛み砕いて粉にして取り込む。

「ふうう……… はああ………」

焼けるように熱い……食欲を痛みで上書きする。もつといい方法なんていくらでもあるかもしれない。それでも今の私にはこれぐらいしか思いつかなかった。鬼の衝動を舐めていた。



「……」

「来ると思っていました………継国薫」

こわ。微動だにせずに目だけかっぴらいてる。いや怖。

産屋敷家の人間ってこうも勘が鋭いものなのかな。

最後はここ。産屋敷の屋敷。なんだか語呂がいいな。御館様の屋敷よりも語呂がいい。

柱の状態もわかった。敵も殺した。あとはここだけ。もちろんここも皆殺しはだめ。

縁側に降り立つと、産屋敷の妻が布団から上半身だけを起こしていた。多分だけど目が影になって私の顔は見れない。

「……起きていたんですか」

「……」

なんか反応してよ。

「巖勝君を裏切った貴方の気持ち。わからなくはないですよ」

「……は？」

「私だって、夫が誰かに殺されて、それが仕方ないことだったとわかっていても多分殺した奴を地獄よりも深い苦しみを味わわせてやりたいとおもうでしょう」

「同情された？ ……」

「同情……と言うより、憐憫ですかね。私なら地獄に落ちろって思うかもしれませんが、ど思っただけです。折角夫が命を懸けて紡いだものを無駄にするなど愚の骨頂です。貴方にとって、夫の命は、我欲を満たすためなら無駄にしても良かったものなんですか？」

それにもし彼の残したものに灼かれ続けているのもまた愛の形だろう。

御館様の妻が怒りを踵にした。うーん。怒り……か。もっとう感情じゃなくて冷静な反応を見たかったけれど、まあいいか。

「貴方の夫は、きつと熱に魘されたことも、骨折して体の一部を失う無力感も味わったことがないのでしょね。ただ強いからというだけで」

そういえば聞いたことがない。というかいつも高熱みたいな体温してる。その暖かい手で包み込まれるのがすごくいい。うたも分かってくれる。縁壺君だって巖勝君み



たいにあつたかいだろうから。巖勝君は渡さないけど、一家に一人縁壺君がいれば冬も暖かいんじゃないかな。

それでもつて骨折つて、つい数年前に夫婦して骨どころか内臓も断たれたばかりなんだけれど、まあいいか。

「特にないらしいですね。『ばらんすの取れた食事、適度な運動、そして笑顔』でしたっけ？ 『ばらんす』つていうのは均衡と同じ意味らしいです。そんなこと巖勝君も言つてましたね。すいません話が逸れました。それがどうかしましたか？」

「つ……そうやって……命の苦しみを知らないようなやつが……」

「喜怒哀樂の『喜』と『樂』しか知らないようなやつが！ 私達について命について説くのか!？」

「お前たちこそ、命をなんだと思つている!!」

「……」

「人間は苦しむ生き物です！ 病に罹つて苦しみ、血を流して苦しみ、壁に当たつて苦しむ。だが、貴方達にそれは無い。」

技術のみで刀から月の形をした刃を飛ばす。いくら走つても息切れひとつしない。内臓を切られても刀を振り続ける。

私達はお前達とは違う！ 刀が描くのは普通の軌跡、走れば疲れる、内臓を斬られれば」

「煩い」

首を飛ばす。

なんだコイツは。嫌悪感で吐きそうだ。産屋敷からも漂ったそれはただの憎悪。鬼殺隊の隊士を散々魅了しておいて、あとは駒。鬼殺隊全員の名前を覚えていようが、最終的に正しかろうが関係ない。

私達が鬼なら、こいつらは人の皮を被った鬼だ。

余計タチが悪い。

「縁壱君は関係ない。それにどれほど辛いかなど本人がいちばん知っています。他人の物差して測るんじゃない。お前たちこそ命について語るんじゃない。まずは最終選別のやり方でも変えてから語りなさい」

ん？

・暁の呼吸 肆ノ型 壊劫・

三連続同時の回転斬りを足元の畳に向かって放てば――

「ほーら」

――爆薬

やっぱりこいつらの方が鬼だったんじゃん。

……私を消し飛ばすつもりだったの、家族諸共。やたら量が多い。分量も素人。それでも調べできたのは運が良かったみたい。私を殺せばそれでよかったのか。

屋敷のみんなは寝ている。これは独断。命を奪ったようなもの……いや、勝手に全滅されたらこっちも困るんだけど。

「はあ……なんで、巖勝君はこんなのを信じちゃうんだろね。私のせいか。私が見張ってないと。もう二度と悲しまなくて済むように」

### ★翌日

「とーさまとーさま！　ぐるんってやつやつて！　ぐるんぐるんってやつて！」

「ああ……いいとも」

そう言うのと巖勝君は宙で一回転。そして綺麗に着地。ふあさってなった髪の毛がすごく魅力的。凄い。語彙力が消滅した。

というか日光の下で平気なんだ。日傘さしてるとはいえもう克服したようなものじゃん。

「きやははは!!!　すごいすごい!!!」

紫明は精一杯ぱちぱちと拍手して、体全体で賞賛の意を示している。なんて可愛い。屑を見たあとだから余計……より一層可愛く見える。絶対に嫁に出してなるものか。

「しあもするー！」

思いつきり飛んで一回転。まだ五歳なのに宙返りできるなんて未恐ろしい。巖勝君は前傾姿勢を解いた。何かあつたら飛び込む気満々だったけれど杞憂に終わったみたい。

私も何かしてあげたかったけど……駄目だなあ。今鬼でもなんでもない人間に近づいたら何をするかわかったものじゃない。私は人の味を覚えた。覚えてしまった。涎が口の端からこぼれているのに気がついて慌てて着物で拭った。

「かーさま！ いまのみてくれた!？」

「……」

「かーさま?..」

「え? ……あら、ご、ごめんなさい紫明。母様今日は調子が悪そうなの」

布団を頭から被って極力紫明を見ないようにする。ごめんね紫明。本当にごめんね。

「ふえ? ……だいたいじょうぶ……なの?」

「しーちゃん!」

「しーちゃん遊ばー!」

友達だ。巖勝君と同じ侍の子供達。

「ほら紫明、お友達が呼んでるわよ」

「うー」

どうやら稽古を続けたいけど、友達とも遊びたいようだ。私のこともほおっておけないみたい。布団から頭と顔を出して紫明に手を差し伸べる。

巖勝君も近づいてくる。バレちゃったかな？

「大丈夫。ほら、刀は母様が預かつといてあげるから」

「母様は父様が見ておくから。いつてこい……日が落ちるまでには帰ってくるのだぞ」

「なくさないでね！」

「ええ。母様がしっかりと見張っておくから、遊びに行つてらっしゃい」

「ぜったいだよ！ ぜったいなくさないでね！ やくそく！」

「はいはい。やくそくね」

小指どうしを握つたら、紫明が駆けていく。転けないよね。転けても受け身はとるから大丈夫かな。

それにしても沈黙が痛い。縁側に巖勝君が腰掛けた。近くに行きたい。もぞもぞと布団ごと移動して陽の当たるギリギリのところまで止める。

「正直に言えば……紫明には刀を持たせたくなかった。争いとは無縁に幸せに過ごして

欲しかった」

「でも力がないといざと言う時に自分を守れない」

「そうだ……その通りだ」

「いいんじゃない？ 万が一があつた時に後悔はしたくないでしょ」

私はお日様の下を歩けない。だから扉があつて、ある程度裕福な家が必要不可欠。だから巖勝君は侍をしてかれている。少し前まではただの村人だったのに。

反面教師に育てられたからできるだけ紫明に不自由なく過ごさせたいそうだ。名門の継国家だもん。力が全てで侍を目指すのが当たり前みたいなお家だったんだろうな。

「巖勝君は、大丈夫なの？ 太陽の光が苦しくないの？」

「大丈夫……とは言い難いな。日傘に加えて、日光で細胞が燃え尽きるよりも早く再生するのに力を入れているだけだ。この状態では技もだせんし、斬られれば回復も格段に遅くなる」

「……無理しないでね。もう貴方だけの体じゃないんだから」

「大丈夫だ。ありがとう。薫も無理はするな。朝ごはんは食べなかつたが、昼もか？」

「うん。やつぱり普通の食べ物はあるし受け付けられないから」

「そう……か」

少し怒りの感情が滲み出てる。自分に対して向けている。私がこんな中途半端な体

になったのは自分のせいだと思ってるんだ。鬼殺隊が全部悪いのに。最近まではそんなに悩まないで欲しかったけれど、今になってみれば、こうやって悩んでいるということが私だけを思ってくれていることになる気がついた。

嫌な女。好きな人が自責の念に苛まれていることをどこか喜んでいるのだから。

「優先事項は薫の体質と紫明のこれからだ……薫については炭吉の血と私の血を混ぜたものを飲んで……経過観察。紫明は引き続きこの調子で育て上げる。だが鬼殺隊も私達を探している……どうしたものか」

鬼殺隊という言葉が彼の口から出てくるだけで嫌になる。あんなの気にしなくていい。気にする価値もない。

それについて昨日、掻き乱してきたところだ。

「あ……鬼殺隊は放っておいてもいいよ」

「……だが」

「いいから。あんな奴ら、放っておいていいの。巖勝君が気にすることなんて何一つないんだよ。鬼殺隊よりも大事なものがここにはあるでしょ？」

「……薫がそういうのならばそうしよう」

そうだよ。私のゆう通りにしていればいいの。

息を吸う。息を吐く。



静かに巖勝君の目が驚きに見開かれた。私は巖勝君から目を逸らして遠くを見た。あの味を思い出す。「たべたくない」と「おいしい」を、同時にかんじた、あのえも言わ

「人を食べたよ」

れぬ感覚を思い出す。吐き気がした。

「すごく美味しかったの。血も甘美で、お腹は暖かくて、それから……」

布団越しに背中に手が置かれる。私は顔を上げた。

なんでそんなに優しい目をするの。

なんでわかつたような顔をするの。

そんなに優しくされるとまた食べちゃうかもしれないんだよ？

紫明を襲うかもしれないんだよ？

怒っていいんだよ。欲望に負けた私を叱っていいんだよ？

「落ち着け……ゆっくりでいい……仕方の無いことだ。四百年先の娘は薫のように鬼化が進んでしまった時……人に一目散だった。それこそ止めなければ際限なく食ってしまっただろう。それと比べてみる……完全に鬼化しているというのにお前は……」

「ちがつ……待って……私以外の誰かのことを考えないで。私を怒って。私は人じやないことをしたの。ただの悪いのにみたいなことをしたのに……なんで……そんな顔を……」

「薫……ほら」

巖勝君がなにかしてる。涙で滲んでよく見えない。目をこすつてもう一回見ると……腕を刀できりつけて……って、何してるの!? 止めなきや!

「……何をし……っつー！……あああ」

何も考えられない。滴る血に釘付けになって、口からは涎が零れ落ちる。まるで鬼じゃん。いや、どうでもいい。早くあの血を啜りたい。滴って畳に落ちたものよりも鮮度のいい腕のほうがいい。

もう我慢できない。布団を弾き飛ばし、私は飛びついた。

「抑える必要は……「っー」……ないぞ」

「んっ……はふっ……っ……」

すごく甘い。脳が蕩けそう。昨日食べた阿茶さんの血なんて比じゃない。あれが毒なら、これは劇毒だ。一滴で墮ちる。体の隅々まで虜になる。

「落ち着いたか？」

……別の意味で落ち着かなくなっただけ

「う……ん」

「余り自分を責めるな……人を喰っても薫は薫だ。耐えきれなくなったら何時でも来い。忘れさせてやる」

そう言っ頭を撫でてくれる。

惚れ直す。愛が溢れていく。とめどない。満たされていく。際限ない。私が墮ちているのは愛の海か、奈落の底かその両方か。

きっとこの思いは異常なのだろう。こんな重い女をそうさせてしまった彼にも責任はある……つていう考えも重いか。でも受け入れてちやつたね。もう離さない。離れたくなくても離してあげない。一心同体だよ。分かるの。

私と貴方の首を同時に斬らないと私達は殺せない。

「ねえ。あなたのせいなんだからね。私が今大変なことになっているのは」

「薫？」

「……こつち見て。私の手を取つて。……そう、体ごとこつちに向けて？」

貴方の横顔が大嫌い。

貴方の後ろ姿が大嫌い。

貴方が何かを見つめているのは腹が立つ。

私以外のものが映る瞳は嫌い。紫明は仕方ないとして、それ以外は許さない。

私がか弱くて巖勝君に守られる薫。彼の認識ではきつとそう。

だから深淵は見せない。鬼殺隊の里に顔を出したのも言わない。たとえバレても彼は受け入れてくれるだろうけれど、まだ知らない方がいい。知らせたくない。

私は今幸せ。望むものは不変。

私は貴方のためならなんだってできる。

人も鬼も邪魔できない。邪魔させない。私たちは鬼だ。

四百年後、私は鬼殺隊を滅ぼし、鬼舞辻無惨を滅し、太陽を克服する。

そうしたらもう私たちに勝てるのは誰一人としていなくなる。今度こそ永遠が手に入る。

限られた命を燃やし尽くすのが人間の生き方ならば、無限の命を遊び尽くすのが私達鬼だ。この人となら同じ会話を幾千回しても飽きない。同じ毎日も幾星霜過ごしても満ち足りている。紫明と三人で小さな屋台を営むのもいい。大きな商売で一喜一憂するのも楽しそう。互いに体を子供にして近所の幼馴染として三人過ごすのもいいかも

しれない。紫明は嫌がりそうかな。

でも今は目の前のことに集中しなくちゃ。撫でられた頭が熱を持ったように火照る。確実に体温は上がっているのに心は穏やか。

「ほら……来て」

彼の襟を握って私が後ろに倒れ込めば、巖勝君はされるがままに身を寄せてくれる。頭の上に疑問符が浮かんでそうだけれど、これで完全に押し倒されている形になった。

「……真昼間だぞ」

「えへへ……私達にとっては真夜中だね」

「鬼には食欲以外にないらしいが」

「夫婦揃って特異体質みたいだね」

「……次からはいつも通り竈門家の血も混ぜるからな」

「ええっ!？」

心外だ。でも頼めば直接吸わせてくれそう。歯止めが聞かなくなったらこうして抱いてもらえればいい。……あれ、私って天才かな？

## 鬼の娘 序

私の話をしよう。私が両親と同じ体になるまでの話を。

世界は満ち足り得た。行きたいところ。やりたいこと。山ほどあった。だけどどこか心の奥で満足している私があった。思えばそれは境界だったんだなと思う。絶対に他人に踏み荒らされてはいけななもの。踏み荒らされていないからこそその我儘。それは私の家族であり、何気ない日常だ。

だから私は誓った。

もう二度と奪わせない。

目から血が零れるほど、激情に駆られた父。命の水が零れて、白くなっていく母。

両親は鬼と人の関係をどうにかしようとして色々考えているけれど、そんなことなんて知らない。興味無い。どうでもいい。私は家族さえいれば、それでいい。人の世界が黄昏を迎えようが、鬼が人を平らげようが私は私の家族を守りきる。

まず初めに私は鬼の娘。勘違いしないで欲しいけど、それを嫌だとかなんて思ったことは一度だつてない。ないつたらない。鬼と言っても、両親は人だった時に私を産んだから私の体は人間だ。

母様は昼の間絶対に屋敷の外に出ない。なんでかと思つていたら深くは聞かなかつた。今な頭を撫でてくれる。小さい頃は疑問には思つていたら深くは聞かなかつた。今ならわかる。母様はこれっぽちも悪くない。そうさせてしまった人達が悪い。

父様は本を読んだり、たまに村の行事を手伝つたりしている。誰が見ても大男だから力仕事でよく借り出される。棍棒でも振り回した方が合っているんじゃないかって当時の私は思つてた。だつて父様と同じくらい背の高い人なんて叔父様以外に見たことないし、忙しい日でも汗ひとつかかない。でも母様程じゃないけど日光に弱くて、数分事に日陰に入らないといけならしい。そして時々旅に連れていつてくれる。父が母様と紡いだ旅路を綴つた日記を見せてくれて、私が行きたいと思つた所へ連れていつてくれる。厳かな山の頂上から、活気溢れる町まで何処へでも。





次に痣の話。私はいつも通り座敷で本を読んでいる父様を訳もなく眺めていた。文字をおつて絶え間なく上下する眼。母様ほどでは無いものの血の通っていないように白い肌。正座姿で片手で本を挟み持ち、もう片方の手で膝の上に座る私が落ちないように支えてくれている。頭の後ろで結い上げられた畳に届くほど長い黒髪……いや長いな。生活していく上で邪魔になる気がする。

そして痣。

揺らめく焰をそのまま焼き付けたかのように、前額を覆っている。それだけじゃない。

「とーさま」

「なんだ？」

「なんでとーさまは首の下からもあざが出るの？ おじさまはおでこにしかないよ」

「……」

その時の父様は諦めたような顔をしたのを覚えている。どこか悲しそうだったから、とりあえずごめんなさいって言おうとしたけれど、それよりもそんな顔をした理由を知りたいという好奇心が勝った。

「そうだな……それは父様が兄だからだ」

「あにだから？」

「そうだ。兄となった者は心を賭して弟を守らねばならなかったのだ。なればこそこれは証だ。弟を守った証。誇りこそすれど、疎ましいと思つたことなどない」

父様は笑つて指で首筋の痣を撫でた。私はだんだんと不思議に思つていた痣の存在がなんだか嬉しくなってきた。何せ知る限りだと私の他に父様と母様と叔父様ぐらいしかいない。これは証なんだ。最高にかっこいい私の家族と同じ証なんだとそう思えるようになった。

「じゃあいつかしあもとーさまとおそろいになる！ そしたらこんどはしあがとーさまをまもつてあげる！」

「……そうか、父様は嬉しいぞ」

「えへへ」

そう言つてくしやりと頭を撫でてくれる。お日様みたいに温かい父の手が大好きだ。



そして私が鬼という存在を初めて認識した話。

鬼という生き物について知つたのは、なにも父と母が鬼だからでは無い。二人とも上手く隠してた。時折来る叔父様と叔母様が楽しそうに話しているのを見て、自分の親が

人間か否かなんて考えもしなかった。

私は遊んでいた。山の登山道。その途中にある開けた場所。紅葉の赤と夕焼け色の空が綺麗なところ。父様も母様も知らない。私が一人になれる場所。秘密基地を作っていた。遊び道具を沢山持ち込んで、なんなら寝泊まりしてもいいかなと思つて興奮していた。

だから浮かれていた。

だから気が付かなかった。

「やあ、お嬢ちゃん。ひとりかい？」

私はその日、吐き気を催す邪悪に出会った。

鬼じゃない。その男は紛れもなく人だった。目も赤くなかったし、何より太陽にあ

たっていた。それでも下衆びた瞳や厭らしく笑う口。漂う悪臭。頭の上を蠅が飛んでいる。とても同じ人とは思えない。身体中の全細胞が『逃げろ』と叫ぶ。

「い、嫌」

汚れ塗れの手が伸びてきた瞬間、私は笛を吹いた。

「————ッッ!!!」

「な……………んだよ笛かよ。驚いたじゃねえか!!! なア!!!」

「ひっ……………」

「……………怖がらせたね。怖くないからこっちにおいで」

気がついたら体は動いて逃げていた。大丈夫。私はこの山を知っている。男は私が逃げたことで、興奮し追いかけてきた。駄目だ追いつかれる。何されるのかな。痛いに決まっている。怖いに決まっている。苦しいに決まっている。

「これからが死? 私が生ぬ?」

嫌。嫌。嫌。無くなりたくない。消えたくない。帰りたい。父様と母様ともつと過ごしたい。なのになんで。

「嫌  
!!!」

「姫!!!」

誰かに持ち上げられる感覚。不思議と体は強ばらなかつた。地面が離れていく。後ろを見ると私ぐらいに大きいカラスが腰布を掴んで飛んでいる。

八咫だ。父様の飼っている鳥。何故か喋る。きつと新種の鳥。

「姫。我輩の一時の無礼を平に御容赦ください。面目次第もござらぬ」

「やた。あれはなに？ こわいよ。あのめこわい。あのひとたちみたいにわたしのことをまるで……まるで、ものみたいに」

「姫……まさかそんな、思い出されたか」

引き金となつて私は思い出してしまった。あの忌まわしい記憶。血塗れの母様を蹴り頃そうとする刀を持った人達。自分たちのしていることは正しいという曇りなき目で母様を斬りつける。正気だからこそその狂気。耳元で唸る金属音。息切れで苦しそうな声。

心の底から恐怖したあの夜。私は間近で母親の死を誰よりも感じ取つた。その時の恐怖が頭を叩いた。

鬼は誰？

鬼は……父様でもない。母様でもない。いまさつき私を襲おうとした獣。あれが鬼だ。人じゃない。おおよそ人としての感性を持ち合わせていない鬼畜。色つきの刀を持つているあれらもそうだ。例え父様と母様が鬼だとしても、あれらが鬼でなくてなんなのか。

「やた。おろして」

「……何故」

「しあがやつつける。ぜんぶぜんぶしあがまもる。しあがころすの」

殺さなくてはならない。繰り返すわけにはいかない。もう二度と。

私が暴れると八咫はふらつき出した。地面を走って追いかけてきている鬼が笑みを深めたのが見えた。私が落ちれば好きにできると思っているのだらう。上等だ。殺してやる。

## ・月の呼吸 拾ノ型 穿面斬・蘿月・

私は銚鴉の八咫に着物の帯を掴まれて飛んでいた。空からだとの下の景色がよく見える。だから、自分の父親がただの人間なんて忤組みには収まりきらない存在だともわかった。

その光景は、今でも瞼を閉じれば鮮明に思い出せる。

月が降っていた。空に浮かんで辺りを優しく照らしていた月が、今は殺戮の鋸となつて辺りを抉りとつていく。中心には刀を携えた父様がいた。月に阻まれて後ろ姿しか見えなかったが、長い後ろ髪を振り乱して佇む様に私は殺意も恐怖もなにもかも忘れて

見蕩れていた。

この時私は魅せられたのだ。そうやって届かないものに憧れてしまうのは、悪だったのだろうか。子供の心は熱しやすく冷め易い。一晚寝たらこの熱もいつかは冷める。そうだとしたらどんなに良かったか。

次の日から私は刀を振るってみたくなかった。怖い体験をしたあとなんだからと父様は困った顔をしたが、怖い体験をしたからこそだと母様が許してくれた。

まずは木刀から始めた。片手では持てないほど重かったけれど鍛えていくうちに両手なら易々と扱えるようになった。そうしていつかあの日の父様みたいな剣技が私にもできるようになる。一振で地を裂き、天を穿つような剛力。葉っぱから水が滴り落ちるぐらいに自然な動き。私の心に焼き付いて離れない、最高の動き。

木刀の持ち手が指の形に凹んだ。

血豆が潰れて黒くなった。

けれど木刀を振るった。

そうやってしてきた十五のある日。私はひとつの結論を得た。





「ああ、そうか。私にはこれっぽっちも刀の才能がないんだ。父様のように絶対になれないんだ」

だからなんだって言う話!!!

「どおりやああああ!!!」

走る。走る。走る。両肩に巨木を担いで山を昇り降り。身体中が沸騰するように熱いけれど、汗!つ流さない。せつかくあつたためた体温を下げたくないからだ。

今が成長期  
!!!!!!

「死ぬっ! 死んでしまおうぞ紫明ああああ! でもっ! 死なないっ! なぜかって!?!? なぜだろうなあああああああ!!!」

目をひん剥いて、歯を食いしばって、眉をひそめて、多分えげつない表情してる。心臓の音しか聞こえない。血管が隆起する感覚が全身を覆っている。

ずっと脳死で喋ってる。辛さを紛らわさなければぶっ倒れる。前に倒れた時は、勘づいた父様によって一命を取り留めた。次倒れたら朝がとも弱い両親の監視付きになる。そうなると必然的に稽古は昼からになってしまう。

なんだかんだあって私は十六になった。冒頭の天真爛漫で純粹で清楚に育ちそうな美幼女を返せという声が聞こえてきそうだが、清楚なんて男が作り上げた妄想でしかないんだよ。女はだいたい自由気まま。お淑やかで優美な女性も裏では毛虫に名前をつけて育てているかもしれない。いつも愛想を振りまいていて誰にでも好かれるような女性も裏では呪詛を振りまいているかもしれない。あと清楚が不足しているのなら母様に集れ。あれはすごい。本当に三十を超えているのか疑わしいぐらいに綺麗だ。

「水うう………ぶはー………かわいい」

水を飲むために小川を覗き込めば、父親譲りの艶やかな黒髪に、凛々しい瞳。そして母親譲りの顔立ちが映っている。面胞ひとつ、くすみひとつない血の通った白い肌如玉のような汗が滴っている。風が吹けば結われた髪が重力に逆らって靡く。

なんて可愛いのか。とてもさつきまで狂気の形相を浮かべながら走っていた人物と

は思えない。

もう人生勝ち組ってくらいに整っていると自負してる。黙ってそこらの城下町を歩けば三十歩に一回は声をかけられるし、縁談も腐るほど申し込まれる。我が父上がそういった手紙を箱詰めにして持つてきたけど全部突っぱねた。『適当に目を通しておけ』だなんて父様もやる気のなさを隠す気概がない。いるかもしれないじゃん。私の言うことを大体叶えてくれる人がいるかもしれないじゃん。いないと思うけど。たまに勘違い野郎が押しかけてくるけど父様が追っ払ってくれる。ありがとう父様。

料理作ってる時に私が脅かしたら包丁で家を真つ二つに仕掛けたこと、母様に内緒にしてあげる。だから私の悪戯も内緒にして。

でも、あの寡黙な父と、おっとりとした母に育てられた私がどうしてこんな破天荒で奇天烈な性格になったのか私にも分からない。見た目と中身が不一致極まりない。なんでだろう。教えてくれ師匠。でもこんなにきつい訓練を年頃の乙女に言いつけてくる師匠も師匠でかなり奇天烈な気がする。おのれ師匠。

「ふっ………！ ……せいっ………！」

地獄の走り込みが終われば今度は方天戟を振り回す。私は刀よりも方天戟が最強だと思っている。斬れる、突ける、殴れる、そして長い。剣が槍に勝つには三倍の技量が必要だと言われているくらいだから、これがちようどいい。

これで朝の稽古は終了。これだけ頑張つても腕と足は折れそうなくらいに細い。でもしつかり筋肉はついている。なんて素敵な体。母譲りに違いない。父譲りだったら、まもなく顔の整つた長身の筋肉女ができていた。

ありがとう母様。父様の着物を洗濯する時に必ず匂いを嗅いでいるのは内緒にしてあげる。

「ただいまー」

「おかえり紫明。もちろん白いほうの服で運動してないわよね？」

「……………え？ あー。うん。そんなことは無いよ」

「あらそう？ じゃあどこにあるの。さっきまで洗つて干してあつたはずなのにね」

「えー。おかしいな。母様の気の所為じゃない？」

「ところで紫明。運動用の服がまだここにあるのだけれど、何着て運動したの？」

「……………運動してないよ」

「飾つてある方天戟が一本ないのだけれど？」

「……………」

「もう、白い服は汚れが目立つからやめてって言ってるのに」

母様が居間から顔を出した。眉が不機嫌に顰められている。金色が揺れて、煌めく。きつと私があの髪色になって、目付きを少し柔らかくしたら母様に瓜二つなんだろう

な。

「紫明、あまり母様を困らせるな」

父様が姿を現す。見上げると首が痛いと言つて話題の父様。

「あ、おはよう父様、母様も、お願いがあります」

「……………」

「どうしたの紫明」

改まった態度をとれば、引き締まった態度で返してくれる。緊張している身体にはその気遣いが途方もなく嬉しい。そう空気を呼んでくれる態度にどれだけ救われたか。

普段とは大違いなのを指摘して冷やかしてもいいのに。

「今二人は幸せ？」

「ああ。もちろんだとも」

「うん、そうよ。巖勝君がいて、紫明がいる。本当に幸せよ」

「……………然して、今度は何が欲しい？」

「八咫と天外で空を飛ぶのは駄目よ？」

「指の間に刀を挟んで八刀流はやめておくといい」

前言撤回。わたしの真剣さは伝わっていなかった。というか今の感じ父様絶対六刀流やったことあるでしょ。今度師匠に聞いてみよう。っていうか足の指も合わせたら十六刀流じゃん。十六刀流してる父様を見てみたい気持ちと見たくない気持ちがある。んー。まあ、ここははぐらかしながら言うか。

「私、鬼殺隊に入りたい……………なんて……………へへ」

「……………」

空気が凍った。凍っちやった。

「どこで……………それを」

「師匠から聞いた。父様のことを聞いたら機嫌よくゼーんぶ話してくれたよ。どんなこ

とをして、なんでやめたのか」

「縁志……！」

父様が歯噛みする。

父様の弟。師匠から聞いた話を要約するところ。

鬼殺隊は鬼のように強すぎる父様を御しきれなかった。あろうことか父様に鬼の疑いをかけ、父様がいない隙に私と母様を人質にして真意を聞き出そうとした。

それに怒った父様と鬼殺隊は死闘を繰り広げ、当時まだ非力な赤子だった私と私を抱えて戦う母様を助けるために無理やり鬼になった。

母様は重症を治癒する為に不完全な形で鬼になってしまった。

鬼殺隊は父様が壊滅させたものの、鬼になってしまった以上は鬼殺隊に追われ、家族が危険に晒される。そこで父様は鬼の始祖の情報を渡し続けるのと引き換えに鬼殺隊の首魁に家族の恩赦を頼んだ。

けれど首魁——産屋敷はそれを受け入れるふりをして騙した。

私の臆気な記憶と照らし合わせると、父様と母様を狙った鬼殺隊の猛攻は一步間違えたら父様か母様、若しくはその両方が死んでいたかもしれなかったぐらいだ。背景を知った今、さらに鬼殺隊への怒りがわいて出た。

実は追い詰められていたのは父様ではなく鬼殺隊で、父様は当時の柱達をポコポコに



してたりして……してないよね？ 柱つて鬼殺隊最強の称号らしい。そんなのが何人も斬りかかってくるんでしょ？ 悪夢以外の何物でもないじゃん。よく父様は生き延びたなあ。きつと逃げに逃げたんだろう。人間より何倍も強い鬼を倒すえぐい人達と正面衝突なんてありえない。

「こればかりは領けない。お前に私達と同じ道を歩んで欲しくない」  
「むう」

沢山我儘を聞いてもらった。沢山教えてもらった。

それでも私は鬼殺隊に入りたい。母を殺そうとし、父を裏切った組織がどうなっているのかこの目で確かめたい。もつと知りたい。父様や母様のことを知りたい。

きつとそれらは私の運命に絡みついているから。

「呼吸と色変わりの刀を広め、階級制度を創り、鬼殺隊最強の称号を受けた痣の剣士、月の柱。」

栄えある煉獄家の中でも歴代最強と名高く、見ただけで剣技を模倣し初めて呼吸を混ぜ合わせた鬼才の女剣士」

「どい」でそれを」

「師匠じゃないよ？ この天上天下唯一無二の美貌でお話すれば、そこらのお堅い鬼殺隊士の口も羽毛よりも軽くてできちやう。あ、しっかりと変装したから安心して」

「……」

「あんな下つ端の鬼殺隊ですら知つてた。父様達つて普通じゃないと思つてたけど、鬼殺隊の中樞だつたんじゃん。だつたら私にも鬼狩りの才能があるとは思わない？」

「駄目だ。危険すぎる。縁壺から父様の話を聞いたのなら、鬼殺隊はお前を追つていゝことも知つてゐるはずだ。父様がしくじつてしまつたから」

駄目だよ父様。優しすぎるのも考えものだよ。私は記憶力が優れてゐるから、うつつらとあの日起きたことを覚えていた。そしてその記憶は叔父様の証言で全て繋がつてゐる。

「違う！ 父様は守つてくれた！ 私は鮮明に覚えてる！ あの夜、私は父様達の名前を呼ぶことしか出来なかつた！」

「……ありがとう。紫明がそう思つてくれてゐるのはとても嬉しい。紫明の声が私達に力を与えてくれた。だが座りなさい。それとこれとは――

(こゝなつたら……)

この屋敷は父様の趣味か分からないけど至る所に隠し通路とか隠し棚がある。子供の頃のかくれんぼの時にからくりは全部見つけた筈だけど、たまに父様は私の知らない

からくりを知っている時がある。

色の薄い暈は大抵手を突っ込めば刀が出てくる。わたしの隣にその暈がある。

「ちよつと紫明!？」

父様の肩を狙つて袈裟斬りを放つ。正座のまま上体を逸らして回避される。

踏み込んで手首を狙う。片足で立ち上がった父様に片手で逸らされる。

腹に向けて突きを放つ。あっさりを持ち手を掴まれて遠くに投げられる。木刀は私の手を離れて父様の手に収まっている。

やり直しとまでに投げ返された木刀を掴みながら肉薄し、最後に足首を狙った下段の一撃——宙返りで回避される。

ここまで一秒。

……化け物か？ 私に刀の才能がないとはいえ、私今座ってる父様に斬り掛かったよね？ 落ち着け。余裕余裕。それどころか楽しくなってきた。今度はまけない。私の得物は方天戟。今は大きすぎて家の外にある。戦場を家の外へと移さなければ……

「二人とも？」

「……すまない」

「ごめんなさい」

怖い。普段怒らない人が怒るととても怖い。

「と、とりあえず、私は強いよ？ 父様が思ってるよりずうーっと」

「……だが」

「名前も変えるし、鬘もかぶる！ 背中の痣は服で隠す。だからお願い！」

「……」

珍しく父様の感情が揺らぐ。普段家族といる時には剥き出しの感情は真剣な時に引っ込んでしまう。でも目に見えて揺らいだ。

もう一押し。

ここで取っておいた殺し文句を言い放つ。

私はもう、あの日父と母のことを呼ぶしか無かった無力な子供じゃない。

「じゃあ……私が師匠をこてんぱんに叩きのめしたら許可してね」

## 鬼の娘 破

「師匠攻略会議——」

どこか上の空なほのぼのとした声が森に響く。口はぼかんと開けられており、目は虚ろ。天に突き出した拳はそのままに静寂が訪れた。行動の主体が美少女なだけに、妙に愛嬌がある。

「……」

「……」

それを見ているのは二人の観客。もとい二匹の観鳥である。

巖勝の鏖鴉である八咫。

薫の鏖鴉である天外。

二羽は慣れていた。なにせこの程度は序の口。以前は北の海を泳いで渡るなどと言い出したこともあり、最低限の心構えはしている。

とは言っても、当の本人は初めから絶望を撒き散らしているのでどうにかなりそうだと二匹は思っていた。

「盛り上がっていい——」

「……アンタ、目が死んでるわよ」

「姫？」

「……天外も八咫も見たらわかるでしょ。師匠をぼこぼこのこてんぱんのたんこぶだらけにするの」

縁壺のそんな姿どころか、かすり傷を負った姿ですら想像出来ない二羽は首を傾げた。二羽からすれば紫明も十分強いが、継国一家と比べると霞む。今の紫明は鬼になる直前の薫と同じか少し上回るぐらいだろうと、二羽は思っている。

「勝算は？」

「え？ あるわけないじゃん。何言ってるの面白い冗談だね天外。よく父様はあんなのとずつと過ぎこしてきて狂わなかったよ」

「あんなのって……アンタね……」

「本当に……ないんだって。あーどうしよう」

「……」

紫明は初めて縁壺に会った日のことを思い出す。

それはよく晴れた日のことだった。

「とりあえず斬りかかってきなさい」

「え？ ……き、斬り掛かる？」

紫明は吃った。

目の前にいるのは紫明にとっての叔父である。父親が強いことは知っている。だからこそ剣を習いたいと思つたのに、庭で待つていたのは父ではなく叔父。落胆するよりも早く、渡された真剣で斬り掛かれと言われて驚かない方がおかしい。

先程まで風が吹いていたのに、いまや無風。静かさが紫明の心に沁みる。以前目の前の剣士の双眸は、紫明の瞳を捉えたまま揺れ動くことすらない。対して紫明の瞳は動揺に揺れ、縁壺と渡された刀を行ったり来たりしている。

(まあ、とりあえずは見てみるか)

『透き通る世界』

それは呼吸法の極地。

生物の肉体であれば、注視することで透けて見えることの出来る能力。血液の流れや肉體構造が手に取るように分かるので、次に繰り出す攻撃と弱点を瞬時に割り出せる、神の御業。



しかし、体温を三十九以上に保って現れる選ばれし痣の発現者ですらこの極地にはたどり着けないものがほとんど。生まれつきそれが可能な紫明は埒外の怪物に違いない。この能力が父親から特別なものだと言えられた時、紫明は自分が世界で上から数えた方が早いぐらいの強者だと自覚した。

生物にしか使えないとはいえ、分からない存在と対峙した時は、まずこの能力を使うようにしていた。

だが、

(……………は)

紫明は無意識に身構えた。そうでないと一瞬で殺られると理解した。

煮え滾る溶岩のような血流。

無限に力を練り上げる筋肉。

鋼鉄よりも硬い骨。

脳の命令を遅延なく伝える神経。

依然、周囲は無音。

だが透き通る世界を持つているものなら分かる、縁壺という存在の大きさ。それが目から伝えられるだけでなく、自身の震えとして紫明の耳に入ってくる。

(しかも見られているッ……！ 同じ能力で！)

縁壺の眉尻が少し下がる。紫明が臆していることを目にしたから、申し訳ないと思つたのだ。巖勝とうたから自分の異常さは痛いほど言われてきた。加えて心から敬愛する兄の愛娘相手に威圧してしまったのかと恥じ入った。

「つ……じゃあ……参りますっ！」

継国兄弟は双方とも、表情と思考が一致しない。悲しくも、紫明は縁壺の罪悪感から来る行動を失望と捉えた。

紫明は刀を正眼に構え、踏み込む。目の前の人間は余計なことを考えて勝てる相手では無いと悟った。今の全力で向かわねば、勝てない。

そこからの紫明は赤子だった。少しでも見失えば、次に姿を捉えたら喉元に刀のおまけ付き。紫明も愚物では無い。脳を限界まで使い、一度された動きは全て学習し、考えうる限りの最高の一打を放っている。それでも敵わないのは縁壺が次々と新しい攻撃を仕掛けてくるからであり、紫明の対策が甘いことを見せつけられていた。

もはや理不尽が人の形をしていたと言っても過言では無い。

戦場において、最強はいない。

強者と言われる類でも連続で五十人斬れる存在がいるかないかである。加えて、そんな人間は世界でも百人いないぐらいであるし仮に居たところで兵を百人増やせばいいだけである。何せ人は疲れる。疲れた体は鉛のように重くなる。

もし、疲れない人間がいるとしたら？

全力で動き続けても息を切らさない人がいるとしたら？

一 太刀で、数千人を殺せる刀を振るえば？

一 撃必殺の連撃を繰り出せるのなら？

それは最強と呼んでも差し支えぬだろう。

「あれは最強だよ。こと戦いにおいて無敵。まずったな。勝てる算段がつかない。……なら、手段を選ぶまでもない、か。師匠には悪いけどね」

一 瞬。紫明の瞳に光が灯る。父のそれを色濃く残した眼光は碧空の陽光に正面からぶつかって尚、瞬きひとつせず睨み返していた。玩具を与えられた子供のようにであり、将のようでもあった。

「戦わないんだよ。使えるもんはなんでも使う。ふふ。勝てばよかろうなのだ」  
そう言つて、紫明は年相応の笑みを浮かべた。

.....

「つてワケ。アンタ達が心配するまでもないつてのが、アタシの考えね」

「……一瞬、ほんの一瞬であるが、縁壹殿に勝る何かを垣間見た。まるで塗り替える様で

あつたぞ」

「……二人とも、苦勞をかけたな。もう休め」

夜。

屋敷の縁側で座っていた巖勝は、一通り鎧鴉の報告を受けたあと下がらせた。傍には夜の散歩から帰ってきた薫が正座で座り、複雑な心境の巖勝の横顔を見つめていた。

「紫明は巖勝君が思っているより強いよ」

「時々ふと思う……私は父親としてあの子を……導いてやれてるのかと」

「巖勝君も父親歴十六年。私も母親歴十六年。こればかりはどうにも出来ない。剣を振ろうが上手くなるわけでもないからね。そして分かっているでしょ？」

「？」

「あの子は導く前に、自分の意思で生きているって」

「……ああ、そうだな。……そうだとも」

★

紫明の作戦決行日。

そこには苔むした岩の上を軽やかに跳んで山を登る紫明の姿があった。

尚、縁壺はこのことを知らない。第一、『試合で』ぼこぼこにするなどと約束しておらず、とりあえずぼこぼこにすればいいのだ。

(見つけた)

「♪ ♪ ~♪ ♪ ~」

少し開けた山の端。そこには笛を吹く縁壺がいた。曲は紫明の知るものではなかった。縁壺は巖勝が偶に口ずさむ曲を吹いているのだ。その曲は遠い未来、または違う世界とある映像作品の冒頭に流れる曲である。

縁壺の傍には蛙や鹿、蜻蛉、野良犬などが集まっている。笛の主が母のような儂げな乙女であれば、美しい一枚絵になるだろうなど紫明は思った。しかし縁壺は百九十七センチの巨漢。台無しである。色々と。

後ろから木刀で斬りかかろうとも考えていた。きつと有利には働く。最初の一撃で決めることが出来れば御の字。当たらなくても焦りを相手に植え付けるのは重要。

(……なんか違うんだよな。それは。まあ、ここまで準備しておいて今更何をつて話だけ)

紫明には自覚があった。生まれつき痣があるのは天与の才がある証。近所の子供は石を握り砕くことは出来なかつたし、熊からは走って逃げ切ることも出来なかつた。確

実に才はある。近所の子供以上、父親や縁壺以下の才が。

刀は違ふとわかつている。実際には刀の才能はあるにはあるが、周りが周りなだけに霞むのだ。というか縁壺が刀を使うのに、わざわざ合わせてやる道理はなかった。

そこで目をつけたのが「間合い」だった。

「やあやあ、師匠」

草むらから紫明が縁壺の近くへと姿を現した。笛の音が止まり、縁壺が顔を紫明へと向けた。動物達は逃げることなく、総じて紫明を見ている。

紫明は腰に差してある刀を鞘ごと縁壺に渡した。黙って縁壺は受けとった。

「紫明？ この刀は？」

「師匠！ 勝負しよう！」

「っ、はい！ では……どこかへ移動を」

「ううん」

継国紫明は、煉獄薫と継国巖勝の娘である。母親の薫はあっさりと生まれてからずつとそばにあつた鬼殺隊を裏切り、初めて呼吸を派生させた。父親の巖勝は刀こそ正義の時代で刀を投げ、体術すら使いこなした。

つまり、両親は二人とも勝てばよからうの精神なのだ。

「すう……っ」

「?」

「よし……どおおりやああああ!!」

「え……う？」

轟く咆哮に動物たちは一目散に逃げ出した。途方に暮れる縁壺目掛けて、紫明はいつの間にか取り出していた方天戟を握ると思いい切り、斬りかかった。地を砕くほどの威力で踏み込んだ体は、瞬く間に最高速度へと到達した。まだ子供とはいえ、患者。距離は零へと近づき――

(左イー！)

衝撃。

先手は紫明。突然弟子が斬りかかった事実縁壺は動揺していた。だというのに体は瞬時に反応し、振り下ろされる戟を手に持った刀で逸らした。すれ違う瞬間、紫明の瞳には刀の鞘……否、渡したままの姿の刀が写った。抜き身ですらない。抜刀していいのだ。

「師匠お！ 逸らしてちゃ勝負になんないよ！」

「ほんとうに殺すつもりで来るのですね」



「そうだよ！ さあ、捕まえてご覧」

紫明は身を翻し、森の奥へと駆けていく。

「困った弟子だ」

一体誰に似たのか、続く言葉を飲み込む。人は生まれが全てでは無いだろう。あの天衣無縫な少女にきつと兄も義姉も振り回されているに違いない。どこか吹っ切れた縁壺は走り出した。森に足を踏み入れると、折れた枝から人が通った形跡を見つけ出す。

「しかしなぜ森に……」

直後、風を切って苦無が縁壺の眉間、胸、足を目掛けて飛来した。反射で眉間と胸の苦無は避け、脚の苦無は踏み砕く。ご丁寧に黒塗りで光を吸収して見えにくくなっている。

途端に踏み砕いた苦無から刺激臭が拡散する。何か毒物の類が入っていたのだ。込められた悪意はかなりのもの。

「何を……」

鼻が利かない。というか常人は戦闘で匂いを頼りにしない。だが無駄に五感の鋭い彼は嗅覚すら駆使して戦う。ともなれば、この刺激臭は常人より効くのだ。

縁壺は体制を立て直すため、即座に後ろに跳んで再び開けた場所に戻ろうとしたが、弟子の前で引くことはしたくなかった。もしかすると巖勝もみているかもしれない。

無様な姿を晒すのは得策では無い。鼻を刺す刺激臭に涙目になりながらも鬼も蛇も出てくるどころか死すら待つてそんな森の奥へと踏み込んだ。

(この場所。作り上げたのですか。数ヶ月では出来ない。きつと数年かけて作った独壇場)

思考の合間にも空気を唸らせて人の体よりも太い丸太が落ちてくる。それを片手で掴んで投げると、隠されていた十数個の罠を起動させながら転がって行った。発破どころかトラバサミもある。

縁壺は思う。なんてことはない。トラバサミを踏んだところで、挟み込んでくる速度よりも早く足をどければいいだけの話であるし、発破を爆破してしまっても爆風と同じかそれ以上の速さで受身を取れば無傷。それだけ。

問題は得物。

見た目は刀のそれだが、柄にあたる部分の中身が殆ど空洞であった。紫明の初撃を逸らせたのが奇跡である。

(下手すれば、柄を握りつぶしてしまう)

紫明が縁壺へ渡した武器も策のひとつ。縁壺に渡された刀は日輪刀でも何でも無い。故に赫く染まらないし、まして燃えもしない。そして脆い。要するに武器破壊が可能なのだ。武器を手放す訳にもいかないのです、破壊しないように力を抑えながら戦うしかな

いのである。今ここに巖勝がいたのなら、『常在戦場。常に刀の一本は持つておけ』と、咎めたに違いない。そう思うと縁壺は不気味な笑みを浮かべた。

・日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽・

・日の呼吸 玖ノ型 輝々恩光・

縁壺は周囲を薙ぎ払ったあと、目星をつけていたあたりに向けて突撃した。小細工を弄する間もなく、全てを無に返し紫明へと迫る。

(ただの数打ちでも叔父様が握れば名刀になるって言うの!? 冗談じゃない!!)

師匠を強者たらしめているのは日輪刀では無いことを再認識した。

時の名工、弔替八尋。巖勝と縁壺。そして薫の刀を手懸けた人物である。紫明も何回か見たことがあるが、言葉に出ないほど美しかったのを覚えている。こっさり抜いて、見蕩れているうちに触ったところ、予想外の斬れ味に指から血が出たこともあった。

そんな刀なんだから鬼に金棒である。なら、それが無くなれば有利に働くと思っていた紫明は、まんまと予想を裏切られた。

「追いつきました」

「ごんの……!」

・日の呼吸 拾ノ型 火車・

・日の呼吸 拾壺ノ型 幻日虹!!

紫明はまだ完全に隙を埋めきれしていない。だからこそその罨。がら空きの箇所を埋めるように発動された罨から苦無を飛ばす。次々と切り替わる展開。そこには爆発が、閃光が、鋼の火花が絶えずあつた。

だが、斬り合いになつた時は埋まることの無い差が出てくる。

「だつたら……」

懐から取り出したるは煙幕。地面にたたきつけければ、縁壺の視界に霧のような靄がかかる。

(多彩……)

・日の呼吸 壺ノ型 円舞・

・日の呼吸 肆ノ型 灼骨炎陽・

・日の呼吸 参ノか……っ！・

肆ノ型により、一撃で煙幕が晴れた。そして背後から戟を横薙にしようとしていた紫明と円舞がぶつかる。

「なんでっ！」

「目は見えない。音もよく隠している。けれど心音は止められないものです」

天才は階段を飛ばし飛ばしでのぼり、成長する。成長し続ける。不協和音轟く中で成長したのは聴覚であつた。

心音は消せようがない。つまり姿を隠すような道具はもう使えない。使っても意味が無い。紫明の脳内から罨の発動という選択肢が消える。まだ仕掛けた総数の三割も発動していないが、致し方なし。

「つ……あつははははは!!」 師匠、最高!!」

「笑いますか」

「ははは。ごめんごめん。もう罨は使わないよ」

「……と言いながらも、この場所も罨だらけなんでしょう?」

「ないよ」

「……」

「この場所は、師匠が本気になったら連れてくるところ。さっきの罨達は私が本気だと師匠に伝えるため。本気の師匠を倒さないと意味が無い」

「なるほど……では、望み通り参る」

「まあ……」

縁壺は笑った。罨だらけであつたが、ここからは師匠と弟子として力比べができる。思えばこれほど新鮮な戦いは初めてな気がした。今すぐにでも心より賞賛の言葉を送りたい気持ちでいっぱいだった。

壊れかけの刀を構え直し、突き進む。受けに回るなどと考えることすら邪魔。

・日の呼吸 伍ノ型 陽華突・

「嘘だけど」

ボコン。

不意に、縁壺の近くの地面が隆起した。否、縁壺自身が落ちているのだ。落とし穴。

古来から伝わる単純なもの。しかし、効果があるからこそ伝わったのであり、足場を命とする剣士ならば有効と言える。

穴はそこまで深くない。縁壺は着地後、確実に跳んで抜け出せるだろう。だからこそ、落下中が勝負。

「何?」

何か小指大の玉が勢いよく飛んで来るのを、縁壺の耳は感じ取った。空気のうちねりが、その玉は受けてはいけないと伝えている。直感通りにその玉を刀で受けると、想像を遙かに超える力が込められていた。

ぎりり、と。

嫌な音をたたて縁壺の刀が根元から砕ける。

(南蛮の武器か!)

それは火縄銃。

縁壺にとって銃弾を見切るなど造作もないが、透き通る世界を持つ者には手ごろに隙を作れる便利な武器であった。しかし、それは当たればの話。音で自分の位置を知らせるリスク。さらに一発打てば装填に時間がかかる。

だが当てた。

(やはり。体術のみならず、投擲の才は親譲り!)

縁壺が紫明と初めて斬りあった時、驚愕を感じていたのは紫明だけではなかった。初

めこそうたの作る献立を頭の隅に立ち会っていたものの、紫明が真劍の替えを縁壺が何本も用意しているとわかった時に流れが変わった。紫明はわざと刀を折るようになり、その度に新しい刀で斬りかかってきた。なんと地面に落ちた折れた刀を投擲しながら攻撃してくるようになったのである。加えて縁壺の身長は六尺少し。紫明より遙かに高い。ならばと、紫明は地面にすら手をつきながら足技を繰り出すようになった。

父親のように柄を殴って刀を一直線に飛ばす日も近い。

紫明の全力は終ぞ、縁壺の武器破壊に成功した。全てが噛み合わなければ上手くないかなかった。何か欠けていれば終わっていた。

近づけば終わりなのなら、近づかなければいい。

「もーほんとに。滅茶苦茶騙しまくってごめんね——!!!」

上から華奢な体が落ちてくる。だがその手に身長ほどある方天戟を携えて。落下中に数回、体の周りで回転させ遠心力を高めた後、石突の部分を両手で持ち、迫る。

迫る。

迫る。

「見事……!」

「殺つたぞ、師匠おおお!!」

完璧な流れ。



そして縁壺はふと考える。

自分はここまで追い詰められたが、我が兄は軽くあしらってみせるに違いない。武器を上手く使って破壊すらさせなかったかもしれない。

自らは兄の隣に立って同じ景色を見るがために、刀を手に取った。そして人として兄を見届けるために刀を振るった。最後は鬼となった兄の想いが誰かに踏みにじられないように、刀を育てるのだ。

ならば。

ならばこそ。

ここで負けを認めるわけにはいかない。

「まだです……い！」

縁壺はかろうじて形を保っている柄から手を離し、折れた刀の比較的長い方を掴む。鍔を境に砕けた刀、それこそ投げぐるまいしか使い道は無い。刃先ではなく峰を指だけで摘み、落ちてくる紫明の方天戟を迎え撃つ。

身も心も灼熱と化し、赫灼に染まる痣の感覚すら忘れるほどに力を込める。

壊れかけの刀を摘む指三本と、両手持ち方天戟の遠心力を込めた横薙が火花を散らし  
て拮抗した。

武器を破壊した。足も泥に埋まり、踏ん張りが効かない。暗い故に視界が確保出来ず  
透き通る世界も使えない。

（はあ!? 今まで本気じゃなかったの!? 今からが本気ってこと!? もしかしてまだ上  
があるんじゃない）

暗転。

「師匠!？」

紫明は飛び起きた。

「あら、おはよう紫明」

「お、おはよう母様。はあ……負けちゃった。記憶が飛んでる。何で負けたの?」

「縁壺君があなたの方天戟を掴んで振り回したら、目を回したのよ」

紫明は再び母親の膝に頭を乗せた。腕を組み、むすつとした表情で母に撫でられる。

「素手でも強いとかなによ」

「私の模倣だろうな」

「え?」

「私は剣術に体術を組み込んだ戦い方だ。体術に至っては縁壺に手解きをしたことも

……「うぐおがあああああああ!!」……ど、どうした」

「ぐえええええ!! 先に言つてよ!!! 知つてたら私も考えた!!! もつとうまくやれた

!!!」

「……まあ、いいだろう。十分うまくやった」

「え」

「鬼殺隊に入ってもいい。ただし、いくつか守ってもらうことはあるがな」

「やった——!!! 父様大好き……………」

「わたしうれしいです」と体全体で表現したあと、力が抜けたように紫明は眠った。今の今まで今日のために罠の設置から、戦いの想定まで考えてきたのだ。緊張の糸が切れれば、その分の疲れが押し寄せてきていた。

二人は眠りについた紫明を撫でながら語りかける。

「意識の差であろうな。紫明は完全に刺し違えてでも……………という勢いに対し、縁壺は最後以外全力ではなかった。赫刀も使えないどころか、痣の真価も引き出さなかったからな……………できるものなら……………紫明に我らの業を背負って欲しくはなかった。

普通の村娘のように花を編んで、ただ人と結ばれ、子を成し、天寿を全うする。生きていくうちに刀などに触れる機会がなければ」

「弱ければ死ぬよ。男でも女でも、強くなければ道具にされるか、嬲られて死ぬか。弱者には生きにくい世の中だね」

「強くなることは……………悪では無いか」

## 鬼の娘 急

鬼殺隊となつた継国紫明の武勇伝は全くと言つていいほどない。柱相應の実力を持つていながらひた隠しにした。その時の産屋敷当主は幼年故に才を蓄えた蕾。花開くまでに、生き残つた柱の子孫と次代の日柱が従わなければ鬼殺隊は消えていてもおかしくなかつたのだ。言い換えれば絶対の存在であつた産屋敷一族の権力が衰え、次代の日柱達とそれを二分する形になつた。

しかし産屋敷は壊滅状態の鬼殺隊を持ち直すために否が応でも人手を増やす必要があつた。育手すら片手で数える程しか生き残つていないが想いを受け継いでいくためには現実的な数がある。結果は心配するまでもなく、増えた鬼殺隊は個々の力が前の時代より劣っているものの運良く優秀な武士が多かつた。

あとはより隊としての統率力を底上げするために権力の全てを産屋敷の一存にすればかつての鬼殺隊に戻すことが出来る。しかしそれは誰もが望む形ではなかつた。

鬼殺隊が鬼殺隊として存続できるように、より混乱を起こさないような形で引き金を引いたのは継国紫明であつたのだ。



「……近い……・全集中・」

女の姿形を一言で表すとしたら、それは紅蓮であろうか。

血のような黒ではなく花のような明るい赤を瞳の奥に押し込み、纏う着物は血を弾くような加工がされており夜の光を反射する。肌は血の通った白過ぎずかといつて日焼けの少ない色。煌めく髪は少々黒に近い赤をしており、訳を知るものはその色が人工的に作られた色だと分かっている。

それらが霞むほど存在感を示しているのは背中に背負われた長大な代物である。女の身長すら優に超えるそれは穂先が布に包まれた方天戟だ。

「ア、マテー・アルジヲ置イテイクナ！」

制止を求める声を無視して女は足早に駆け出す。月光の煌めく夜道を街へと進む。自身の体重よりも遥かに重い得物を背負いながらも、鬼殺の伴として鍛えられた鳥が飛ぶより速く大地を駆ける。一体この細く長い足のどこから推進力を得ているのかは秘密である。ただ手遅れだとは分かっているにも被害が少なくなっていることを願って走る。

「いやあああああああ!!!」

「おい！ ぶつかるな殺すぞ！」

「とと！ かか！」

そこには沢山の人があった。それらは荷物を背負い、子を背負い、怪我人を背負いながら逃げ出している。顔は恐怖に凍てつき、阿鼻叫喚の地獄を拡散していた。

「街が赤い。鬼にしては有象無象が多すぎる……」

本来ならありえない。人が逃げてくる方向に鬼がいるのは確定。だが鬼は姿を隠すことが第一。破った暁には鬼舞辻無惨からの折檻が待っている。ならばなぜこんなに目立つようにして戦っているのか。

ふと人混みの端で黒ずくめの人間を見つけた。

「のう隠」

「あつ……鬼殺隊ですか!？」

「でなければ可笑しいであろうが。情報を寄越せ。隊士の名は？ 人数は？ 鬼の姿形は？ 血鬼術の内容は？ 数は？」

「た、戦っている隊士は二名。名は継国」

継国。その単語を聞いた途端、剣士は自身の最高速度で走った。

継国姓を持つ鬼殺隊と言えば継国縁壹の双子の息子しかいない。ヒトという種族の特殊個体とも言える彼の血を引く二人の身に何かあったに違いない。後ろで何か叫ぶ





「……っ！ あなた達！」

片や蝨く肉塊に頭を突っ込んで臓腑を食る人。

片や未だ生きている手足をゆっくりと食べている人。その瞳は女を見つめていた。瞳孔は充血しながらも、二人とも日輪刀を握っている。それはあやしくも人である証。

襲われているのは人では無い。鬼だった。鬼が何度も再生しその度に喰われている。不死性はもはやないも同然。このまま放置しても再生することなく日光が塵に還すだろう。

「どうして……昊羽、權晴。私のたった二人の友達。どうしてなの？」

「あア？？」

「ああ、どうしてだろうね。君の気配はいつも分からない」

赤髪の女剣士・紫明は言葉が出なかった。彼女の頭が最大限に回転する。幾ら考えても理解できなかった。目の前の彼らが鬼になるなど想像すらしていなかったのだ。二人はあの日柱・継国縁壺の息子。有り余る才能のどこが不満だったのかと紫明は思った。方天戟を持つ手が震える。

人はなぜ道を踏み外すのか。目先の事物に目が眩んだのか。悪人の口車に乗せられたのか。ただ狂ったか。踏み外したことに気がつくのはいつだって取り返しがつかなくなつたあとだ。些事であれば誰でもする。問題はそこでは無い。

人としてどうかである。もはや二人は人じゃない。人の道を外れている。

「いや。違う。違う。どうして鬼を食べているの？ ……鬼食いでもないあなた達がそんなことをする必要なんてないのに」

「気を悪くさせた？ ごめんね。でも必要なことなんだ」

「近寄らないで！」

昊羽は向き直るとぬらぬらと歩いてくる。

そんな彼に向けて方天戟の布を取り払い、突き付ける。しかし刃が胸板に食い込もうが距離を縮めてくる。刃を赫くするなど以ての外、かと言って今の二人は得体がしれない。肉体的な意味ではない、その点で言えば紫明にとって鬼殺隊など暗殺集団となら変わらない。大事なのは精神が人か鬼かである。

「変わらない。変わらないよ。鬼の血肉はなんの意味もない。ただ身を蝕まれるだけ。復讐心に身を委ねて鬼の肉を食べようとした隊士が今までにいなかったとでも？」

「……」

「食べても強くならない。これは事実」

根負けした紫明が武器を引いた。昊羽の着物を血が汚す。方天戟の精巧な装飾を伝って手に達する。

「……父様と師匠に報告する。いいよね」

「……ああ」

紫明は複雑な表情を浮かべた。どう考えてもこれは紫明の胸の内に秘めておくわけにはいかない。黙って後退することに決めた。

とん。

何かに背中をぶつける。

いつの間にか後ろにいた權晴が紫明を見下ろしていた。口の端から滴る血が紫明の頬を汚す。口元は笑っていたが目は笑っていなかった。紫明はその表情に見覚えがあった。それは權晴が自らの子供に向ける表情だった。

「じゃあ殺さなきやね」

「え？」

正面の昊羽が話す。形だけの笑みを浮かべている權晴と違って彼ら諦めたような、仕方のないような表情を浮かべていた。

「殺す？」

上手く飲み込めなくて紫明は聞き返した。

「私が黙っているとは考えなかったの？」

「お前はそういう奴じゃない」

「御館様に知られたら切腹は免れないし、それによって家族に迷惑はかけられない。これでも二児の父だしね」

「違うよ。もう一人、生まれているの。知らないの？」

「あー。うん、知っていたさ。忘れていただけで」

落ち着いた振る舞いを見るに鬼食いは習慣的に行われていたのだろう。日輪刀で首を切れば鬼の体は塵となる。その前に喰う。患者の実力では鬼は簡単に無力化できる。鬼の肉を食べた口で妻に愛を囁き、子に言葉を教え、父に教えを乞うたのだ。

紫明は吐き気がした。鬼を食べたことには無い。子を忘れていたことにだ。自分に当て嵌めてみる。父親と母親の記憶から己が消滅すると考えただけで吐瀉物が食道をせり上がってきた。

「貴方の子供を見たことがある。剣に没頭して姿を見せない父を恋しがってた。三人。みんな会いたがっていた。まだ一人で生きることすら儘ならない歳の男の子。ようやく言葉を覚え始めた女の子。乳母の腕に抱かれている男の子」

昊羽は、はあと溜息をついた。

「武士の子供はそういうものだよ。杓子定規に考えて欲しくないな」

「昊天、貴方の妻は……働き手を失い、子を抱える女は……これからどうやって子を養っていくというの？ 鬼殺隊がただで置いておくと本当に思っているの？」

「父上が育ててくれる。でも紫明。君が死ねば、私達はその心配をしなくていい。無事に家に帰れるのだから」

「頼むから死んでくれ。お前が生きていると不都合なんだ」

友人であろうと敵なら殺す。彼ら武士なりの人生観。きつとそれはごく当たり前でひとつの正解でもあるのだろう。ある日突然友人に刃を突き立てられた側はたまったものではないが。

「おかしい。間違ってる」

「何がおかしい？ 誰も人間は傷つけていない。鬼殺隊の名の通り鬼は殺している。おかしいのはお前の方だ。紫明。鬼の娘、継国紫明。今は天月夜叉と名乗っているのだったか？」

「黙つて」

町の火は勢いよく燃え盛っている。人の悲鳴も家屋が倒れる音もやまない。

「二人は父様に報告する。もしかしたら叔父様の耳に入っちゃうかもね」

・日の呼吸 壱ノ型 円舞・

・日の呼吸 拾貳ノ型 炎舞・

二人の斬撃を紫明は退かずに受け止める。踏ん張った両足から地割れが広がるほどの威力。

紫明の心は寧猛に歓喜した。ああそれでいい。ごちやごちや御託を並べて口論したところで鬼は止まらない。きつと崇高な目的があつたのだらう。患者特有の短命が迫っているとしても家に帰りたいだとか、父親に認めて欲しいだとか。

だがそんなことはどうでもいい。鬼となつたからには絶望の中で殺さなければならぬ。いつか蘇つたとしても家族に手を出されないように。

「私はね。八十過ぎまで生きることが出来るの」

紫明はもう片方の手で着物の肩口を掴み胸元をはだけさせた。そこから覗くのは着痩せにより小さく見えていたはずの胸部とそれを覆うようにして出来た痣。双子のそれよりも広く、濃いそれは元日柱のよう。

恥じらいよりも早く二人の顔が揃つて憤怒に滾る。双子らしいところもあるなど場

違うなことを紫明は考えた。

「私つてとーつても強欲な女なの。今のままで十分幸せだけどそれ以上を望むくらいにはね。父様達の幸せに師匠は必要だけど、私の幸せにあなた達は必要ない」

いつの間にか背後に立っていた紫明が、彼らの間の地面に突立っている方天戟を抜く。紫明の手に渡った途端、刃が赫く染まっていく。

赫い刃。

それは鬼を殺す色。地面から抜き放つと同時に構える。二人が後ろに振り向くよりも早く……

「貴方達は……痣の寿命で死んだ。そう父様達に伝える。師匠にも」

——  
斬

★

雨が降り出した。蒸気が靄となって当たりを覆う。

「師匠とうたさんは双子君の育て方を何も間違えてなかった。間違えて無さすぎたのかな」

事切れた二人。日輪の耳飾りは血に濡れ、描かれた太陽は錆色に曇っている。比較的新しいそれは二人が成人の際に縁壺が作り送ったもの。本当に縁壺が彼の母より授かった耳飾りは今、炭焼きの耳で輝いている。血を知ることなく。穏やかに。

「速イ！ サスガハワガハイカ……………」

「かや」

「オオツ！ ……ジ、ジゴクエズ…………ワガハイカヨ、イキノコリヲサガセ！」

「斯様な汚れ仕事は妾の務めでは無い」

独特な一人称と高慢な態度は舐められないようにするため。舐められて得をするこ



となどないのだ。二人の死体に近寄り、目を閉じさせる。

「継国昊羽、継国權晴。二人で一本の柱。二方は勇ましく鬼を討伐するも痣の反動によつて息絶えた」

「オ……オオオオオ!!! 柱ガ倒レタ……由々シキ事態。産屋敷様ハカナシマレルカ……アルイハ」

かやは翼を震わせた。産屋敷と柱との関係性は様変わりすると確信したのだ。皮肉にも産屋敷にとつて良い方向に。跳ねた雨粒が紫明の頬にかかり、嫌そうな顔をした。

★

ある晴れた日。鳥のさえずりと風のざわめきが耳に入る春の日。みすぼらしい小屋に二人の男女がいた。ここだけ聞くと困窮した農民だが二人はそうではなかった。実際この小屋は二人のうち男の方の妻が、引っ越しても前から続けていた生活を続けていたいと願った故に豪華な屋敷に接続される形でこの小屋が作られたものである。また女の傍には方天戟が突き立ててある。

二人は師弟であった。

「ねー師匠」

「なんだ」

「私って行き遅れでは？」

縁壺は茶を吹いた。気管に入った分を吐き出すために、ここ数年した事の無い咳を何度かした。そして何事も無かったかのように姿勢を正して紫明の方に体を向け一言。

「気の所為です」

「ししよー？ 私の目を見て言いなー？」

紫明の体型は母譲りが六割、父譲りが四割である。少なくとも本人はそう思っている。黙っていれば傾国の美姫と称しても差し支えない顔貌は母から一割。物憂げに響められた切れ長の眉や端正な輪郭は一割ほど父親と似ている。顔から下は母譲りで、平均より少し大きい程の胸部、着物からは分かりにくいが細い腰、安産型の臀部。母親のように成長の余地があるこれらは男にとっては垂涎の的で同じ女の嫉妬と羨望を集める。そういうところは五割ほど母親譲りなのだろう。

問題は残った三割。これが物理的なもので率直に言うとな身長が他の女性と比較して三割増で大きい。五尺半程度（170cmと少し）といったところ。江戸女性の平均身長がそれより一尺（30cm）ほど低いと考えるとかなり逸脱している。

紫明はそれをあまり気にしなかった。母親は自分と同じぐらいか少し低いぐらいであるし、父親と叔父はかなり高いが見慣れている。昊羽と權晴は少し高かったし、叔母は低すぎて可愛かった。

「髪と目は戻したようだな」

「話を逸らした……偽紫明こと鬼殺隊士天月夜叉は上弦に遭遇して死亡つてことになつてゐる。潮時だつたんだよ。もういいかなーつて」

「……その上弦の鬼の名前は？」

「云うまでもなく父様に一芝居うつてもらつたよー。だから刀を置いて？」

縁壺は目を伏せた。自分の何倍も小さな背中に背負させたのは、背負つて欲しくなかつたものばかり。

「……………苦しくはないか？」

「苦しい？」

「私の作つた呼吸。兄上の娘。嫌味に聞こえたら申し訳ないが我らは、辿り着いたもの。普通では無いし、人の器ではない。この差がどこか重荷となつてゐるのならば」

「え？ 何言つてゐるの？ かっこいいじゃん」

縁壺は目が点になつた。

「かっこいい？」

「うん。」

いやだつて父親は背が高く、刀から斬撃を飛ばせる元鬼殺隊の柱で現在は鬼の侍でしよ？ 母親は父親一目惚れ乙女で鬼だから若々しくて多分めっちゃ強いのお淑や

かで何より金髪だよ金髪。黄金の髪だよ？　んで師匠はもう最強。箸で鉄塊を断ち切りそうなくらい強い。そんな鬼強い師匠を射止めたのが悪くいうつもりは無いけど普通な叔母さん。

「こんな境遇、誰もが羨むほどかつこよくない？」

縁壺の心配は杞憂だった。紫明が両親に向ける愛情にかかれれば異質すぎる境遇など霞む。口早に捲し立てる威容は信仰じみている。

紫明は立ち上がった。腰に手を当て、縁壺に振り返り、見下ろして一言。

「胸を張って生きていく。私が私であり続けるにはそれだけで十分」

『胸を張れ、縁壺』

縁壺の瞳の中で姿が重なる。産まれたばかりの赤子を抱き上げたような。言葉にならない感動が押し寄せた。ああ目の前の女子は継いでいる。未だ不安定な完全無欠の面影を継いでいる。この喜びをなんと言う。

「私が父様にとつての叔父様になる」

「紫明」

「父様の隣で日の呼吸を振るい続けるよ。月を照らす太陽は私が担う。……父様と一緒に

に鬼にならなかつたことを後ろめたく感じているなら残念無念。父様の太陽の座は私が頂いたので〜」

眩しい。自分にも、恐らく兄にもない輝きを縁壺は目にした。

「それは……少し嫉妬する」

「駄目？」

「いいえ。……私の日の呼吸が兄上と共にある。六つ目になろうが、体中から刀が生えてこようが。紫明は私の弟子に変わりない。いつかお前も幸せになつて欲しい」

「……私は十分幸せだけど？」

「あなたは昔の私によく似ている。兄上しか知らなかつた私に。大丈夫だ。いつか気づく時がくる」

「……また難しいこと言つてる」

膨れっ面をする紫明を横目に縁壺は腰帯に刀を差した。置いてあつた団子を三串まとめて頬張ると立ち上がった。リスのように膨らんだ頬つぺたを除いてどこか吹つ切れた顔をした縁壺に紫明は嫌な予感がした。

「特訓しよう」

「うええ。今ものすごく綺麗に決まつたのに？ 終わりでもいいんじゃない？」

「お前が嫌でも、私の時間は有限だ」

「それ私達にとつての殺し文句だよ?」

「兄上に冗談半分で言ったら、無言で抱きつかれて泣かれた。そして夜の祭りに連れて行ってくださった」

「父様……」

「兄上が私のために泣いてくださるのは、こう……なんだかとても堪らぬ心地だった。また言つて見ようと思う」

「師匠……」

## 上弦集結編

### 猗窩座の章 プロローグ

鬼。

主食人間。

日光若しくは特殊な刀で首を切らないと殺せない。長く生き、多くの人間を喰らった鬼は奇つ怪な術を使うようになる。鬼舞辻無惨を首魁とし、絶対の服従を誓っている。

鬼殺隊。

鬼を滅する組織。政府非公認。

呼吸術と剣術を使い、鬼舞辻無惨の首に刀が届くその日まで戦い続ける希望の光。産屋敷家が代々纏めあげており、彼らの下に数百人もの鬼殺隊が集う。その頂点は柱と呼ばれる。彼らは人の限界を突き詰めた精鋭たち。

だが鬼殺隊に柱がいるように鬼にも最高幹部がいる。

——その名を十二鬼月

幾十の年を生き、幾百もの人間を喰らった下弦。六体。

幾百の年を生き、幾千もの人間を喰らった上弦。六体。

中でも下弦は入れ替わりが激しい。戦国から江戸にかけての鬼殺隊は少数精鋭を体現したような組織になっており、隊士の練度が時代を見ても極めて高い。下級剣士ならまだしも、柱と相対すれば十中八九首を切られる。しかし、上弦の鬼に至っては柱ですら屠る。異次元の強さ。生ける厄災。それが上弦の鬼達である。

時は江戸。

そこは名もなき山城。どこかの和風死にゲーにおいて、隻腕の忍びが義父や老剣士と凌ぎあつた場所に似た城。しかしとうに寂れ、寄り付くものは居ない。

その城の一室。雅な掛軸と傷んだ畳。罅一つない柱と色褪せた屏風。風化が進行している部屋。その中に一人の男がいた。無造作に切られた髪は湿つたように艶やか。漆黒の着物に身を包み、腕を組んで目の前にある真つ赤な彼岸花を睨みつけている。

「違う」



ぐしやり。

美しく咲いたそれはあっさりとなりの手によつて握りつぶされる。花卉が風に乗つて空いた窓から外へと流れていく。

「なぜだ。何故こゝも見つからんのだ……！」

苦々しい表情を顔にした男・鬼舞辻無惨は嘆息した。思い思いのまま今度は植木鉢を叩き潰そうとし……

「無惨様」

姿がひとつ増える。無惨は手を止めた。

後頭部で結い上げられた黒髪はたなびき、紫と黒の着物に黒い袴。腰には刀を二本差している。何より特徴的なのはその目。人間ならば当たり前に存在する双眸に加えて新たに二対の瞳がそこにはあつた。真ん中の一対には『上弦の壱』と刻まれている。

この存在こそ十二鬼月の頂点に君臨する鬼。始祖の信頼を一手に集める剣士。

上弦の壱・黒死牟である。

信頼を寄せる腹心の登場に、無惨は僅かながら機嫌を取り戻す。しかし視線は合わせ

ず、握りつぶした彼岸花を見つめ、腕を組みなおして問いかける。

「……黒死牟。青い彼岸花の搜索は順調か？」

「……申し訳ない……蝦夷を搜索してみたが、姿ひとつ……なかった」

無惨は眉をあげる。彼は蝦夷まで鬼を派遣していない。黒死牟はそれを汲んだのだ。紛うことなき忠臣。本人の素知らぬ所で無惨の好感度が爆上がりした。

「……ふん。まあいい。他の上弦共を呼んだ。近年は鬼殺隊が煩わしい。もはや下弦では手に負えない。上弦に血を与え、屑を一匹残らず消し潰す。黒死牟。お前は天守閣で待っている。直にそちらへ向かう」

「委細承知」

立ち上がった黒死牟。徐に天守閣へと歩む。背を向けて初めて無惨は黒死牟に目線を合わせた。無惨は自分より遥かに高く、広いその背中に命を救われた。同朋を増やすことに嫌悪感があつたが、黒死牟だけは心から鬼にして良かったと思つていた。今でも黒死牟の伝える道を行けば鬼狩りに遭遇しないし、黒死牟の計らいで悠々自適な生活を送れている。

「……黒死牟」

黒死牟を無惨が呼び止める。

「……………」

「苦勞をかけるな」

「…………滅相もございません」

そう伝えた無惨の口角は僅かに上がっていた。

★上弦の弐・羈軛きやく

「よっ……………」

久々の招集だ。何十年…………いや、百いったか？ まあまあ、そーんなことはどうでもいい。

軛む瓦屋根を伝って天守閣へと着く。天守閣とは言っても景色が一望できる程に全開の為、入り込んだ雪が畳の隅で溶けかけている。冬はもうすぐそこだ。日が照らす時刻が減り、夜の時間が増える季節が来る。鬼達が喜ぶ。

見た所誰もいない。

「俺が一番乗りか」

「おおおおお、オイラが一番だったぞおお……」

「ちっ……なんだよ」

「おお……」

下の階から浮遊しながら上がってきたのは上弦の陸、海坊主。

海から引きずり出せば唯の気弱な雑魚だが、逆に海から出なければ無敵。流石に今は海の底から出て本体を曝け出している。本体は唯の鯨。それも数寸程の大きさ。地鳴りの津波に乗じて港町を襲い、一度に数百人食う鬼。

「その声の不愉快なんだが、いつその事上弦の末席を空けるのも一興か」

「おお!?!」

うん。殺そう。多分みんなこいつが嫌いだろう。

「<sup>きやく</sup>羈軛様。入れ替わりの血戦を申し込むのは下から上に対してのみですぞ。訳もなく殺してしまえば、咎められますのは貴殿でございますれば」

術を解く。

よっこらせだなんて擬音語がつきそうな風体で柵を跨いで広間へと人骨が上がり込んで来る。

「……」

「おおお。助かった。お前、骨、いい奴」

「……骨……ねえ……間違つてはいませんが……一応私は貴方よりも数字は上なのですがね……」

上弦の伍、餓者髑髏。

海坊主と似た性質。本体は首の骨一本のみ。しかし骨が集まれば際限なく巨大になる。上弦の中でも奇抜な群れる鬼。こいつの率いる鬼達で百鬼夜行をすれば、一夜で国一つが滅びる。きつと上弦の中ではマシな部類だろう。そう思いたい。マシもクソもないが。

「<sup>きやく</sup>羈軛殿。ご無沙汰しています」

「……ああ」

「さて、<sup>おいぼれ</sup>老耄は何処へ座ったものか……文字通り骨に染入る寒さ故、この辺りが……」

餓者髑髏は比較的下の階へと続く階段に近い場所に決めたようだ。鬼でも寒さは感じる。鬼それぞれな。

「……ふおあつ!？」

「どけ骨!　そこは恐らくあのお方が一度通られた道!　凡骨の分際で傲慢にもあのお方と同じ場所に触れるなど身の程を弁えろ!　そうですとも……ワワワワワワタシワタシワタシがお守りしなければ!　お守りすれば私のことをより重宝してくださいに違いない!　……アア……早くお会いしようございます。今日こそはこのワタシが

あのお方の夜伽に！ ふへへへへへ！

「ひえっ……………おそろしやおそろしや……………」

(めんどくせえのが来たな)

上弦の肆、猫又。

猫の皮を人間にくつつけたみたいな造形をしてやがる。尻尾が二本。相変わらず気持ち悪い。何を考えてるのか俺でさえわからない。いつも恍惚とした表情で笑ってやがる。無惨様に愛情を抱いているのは確かだが、異常だ。歪んでいる。おそらくは上弦で二番目の嫌われ者。鼻をひくつかせて畳を這いずる様はえも言われぬ気持ち悪さがある。

「上弦の弐とあろうお方がなんとまあ……………感情の制御一つ出来ないとは……………」

「……………」

「あらあらあら。ごめんさいね。弟を亡くしていらつしやってたわね。それなら仕方ない仕方ない。神経が過敏になつて然るべきです。しかし乱暴な兄を持つてしまった弟君はさぞ地獄で泣いてるわよね……………ああ、可哀想に……………」

「黙れ。あいつはカンケーないだろう」

「え？ 私何か癩に障ること言いました？ 全て本当のことなのに？ 死に善悪なんて

ないのだけれど……」

「……は——ア。死ね」

？ 血鬼術 血槍ノ雨？

血の槍を生成し、指先から打ち出す。

「あゝあゝあゝ!! ……なんて。私だからいいものの、痛いのでやめるのがよろしいかと」

「ちっ……」

上弦の参、岩戸いわと

頭をふっ飛ばしても平気らしい。

はつきり言つて、最低最悪の女。柱を殺せば、手脚を鬼殺隊へと送り付けて士気を根こそぎ奪い、一家に仕えては幸せの絶頂で皆殺しにする。さつさと入れ替わりの血戦を挑んでくれれば殺してやるのに、ま、殺しても不味そうだから喰わねえけど。

それでも死なないタネが分からない。

「おおお、壺殿は遅刻であらせられるかあああああ？ 待たされるのは嫌だなあああ乾燥してしまうううだろう」

「海坊主殿。我らが嘆いたところでどうにもなりますまい。いくら遅れたところであの方もお許しになるでしょうし」

「そうだったなあああああ不公平だああああ」

「……羨ましい……全幅の信頼……なんて素敵！ しかしワタシはどうすれば得られるのでしょうか？ ワタシには無い何かがきつと壺様にはあるのです！ それさえ分かれば！」

「子猫さん。入れ替わりの血戦でもすれば聞き出せるんじゃない？ ……まあ、あの方のご鼻屑は序列云々で説明するには度が過ぎていらつしやるかもしれないけれど」

参、肆、伍、陸がこつちを見てくる。見るんじやねえ。

「羈軛殿ならば勝てますぞ。この凡骨が応援したす！」

「……」

「羈軛殿？ 如何なされました？」

「なんでもない。見上げるな。不愉快だ」



「これは失敬」

気のいいことを言って、どうせこのじじいは俺が死ねば数字が繰り上がって血を分けてもらえることにしか興味が無い。

(上弦の壱……か)

室町、戦国と激戦の時代を生き抜いた侍。徳川家の將軍の支配による争いのない世の中は侍が最強だということを実証してしまった。

先代の上弦の弐が入れ替わりの血戦を挑んで喰われたらしいが本当かどうかは分からない。ただいつの間にか自分の数字が繰り上がった。それは上の数字が殺されたことを意味する。まあ死んだやつだしどうでもいいが。

「では黒死牟殿は遅刻……」

「私は……ここにいます」

!?

「おおお!!」

「黒死牟殿?!」

「……!」

「い、いたのね……気づかなかったわ」

「……っ」

「……無惨様がお見えだ」

ああこれだ。得体の知れない雰囲気。唯一無惨様に名前呼びを許されている。俺は今日。此奴を超える。

上弦一同に会しての会合が始まる。

★三人称

「この城は捨てる。黒死牟。適当に崩しておけ」

「御意に」

重圧が解ける。無惨は去っていった。

無惨の話を要約すると、

血をあげるからさっさと鬼狩りを滅ぼせ。あと黒死牟を見習え。蒼い彼岸花見つかってない？ 何をしている。蝦夷まで行った黒死牟を見習え。それだけである。

「嗚呼、無惨様は今日もお美しかった……！ しかし、ワタシに目を合わせてくださいませんか……なぜデシヨウ？」

「何度でも言ってる。我が主はこいつがお気に入りだ。だろ……黒死牟様？」

「……」

「シカトか。はいはい。我らが老様は俺たちが見てえな雑魚は相手にする価値もないってか……シラケるシラケる。ちよいと人でも食わねえとなあ」

「待て」

(……………)

黒死牟は城から出ていこうとした羈軛の肩を掴む。振り向いた羈軛はいつの間にか真後ろに立たれていたことに驚いた。当然動揺は隠した。見上げなければ目が合わせられないほどの体格。見下ろす六つの瞳。

一瞬にして空気がピリつく。

海坊主は距離を置き、餓者髑髏は物陰に隠れ、猫又は無惨の立っていた所を舐めながら目線は二人に警戒するように向けられている。

「あ？」

「上弦の弑。近頃のお前の行動は……些か目に余る……我らが無闇矢鱈に姿を晒すのは……無惨様の本意ではない」

「断る。なんで俺がお前に指図されなきゃいけないんだよ。……あ、ちよつと待て上弦の吉」

「……………」

？ 血鬼術 血雨ノ槍？

羈軛の手に糸状の血が集まり形を成す。それは禍々しく赤黒い槍。形を保ちつつ、血液の流れのように流動している。

「……なんのつもりだ」

「わかっているだろ？」

「分かっている……だが……」

加えて黒死牟は背後から怖気を感じた。振り返らずに背後へと語りかける。

「お前もか……上弦の参」

「何も入れ替わりの血戦は必ず一対一……だなんて規則はないでしょう？」

「クソ鬼。邪魔をしてくれるなよ」

「私の人生なんだし、私の勝手でしょ？」

黒死牟は自分を挟んで投げ交わされる暴言に目もくれず、先程気づけなかった上弦の参の気配について考える。

（気づかなかった……有り得ん。いや……血鬼術か？ 先程から感覚が鈍い。加えて岩戸から血の匂いがする。稀血だな……それもかなり濃い。ふらつきはしない分、不死川実弥と同じ程度かそれ以下の稀血か。慣れるしかないな）

（岩戸がウザイ。ウザイが、上弦の壺の気が削がれるのなら目を瞑るか）

（あつ……ちよつと待つて……失敗したかも。何こいつ。後ろ向いてんのに隙が無さすぎる。今攻撃したら絶対殺されるかも……）

上弦の参は額に冷や汗を浮かべながら作戦を練る。

上弦の式は槍の感触を確かめながら構える。

上弦の壱は自然体で佇む。刀を握ろうともしない。

「さあ……入れ替わりの血戦だ……！ クソ鬼諸共ぶち殺してやる！」

この勝負、次期上弦の壱しか残らないなあ！」

先に動いたのは上弦の式・羈軛だった。彼の血鬼術は単純。自らの血を槍として形作る。単純故に応用も派生も様々。

？血鬼術 不遜ナル暴虐ふそん ぼうぎやく ちじろもの血衣？

それは触れただけで自動的に血槍で反撃する装備。見た目は血の竜巻が羈軛の体を覆っているように見える。水圧、いや血圧は計り知れない。

・月の呼吸 拾式ノ型 朧月夜・

迂闊に懐に潜り込もうとすれば……

「残念」

「む」

もはやそれは赤い壁が押し寄せてくるかのような現象であった。血に反応し、近付くだけで幾つも射出された赤い槍。咄嗟に畳返して受けたものの、数と勢いを増していく刺突の雨。当然畳を貫通してくる。黒死牟はその勢いを殺しきれずに天守閣の壁に激突する。

？ 血鬼術 血雨ノ槍・地衝？

ダメ押しとばかりに、羈軛がいくつもの血槍を衝撃波を伴わせて投擲する。破碎音が鳴り響き、天守閣の半分が消し飛ぶ。羈軛の前方は開けた夜空が広がっていた。

(衝撃波で五感を狂わせてからの亜音速で追尾する血の槍。避ける術はない。十八人の柱がこの技の前では為す術なく骸を晒した。そして鬼にも有効！)

羈軛は人型の弱点を理解している。そもそも人型であること自体が大きな欠点。特に五感のうち3つ。視覚、聴覚、嗅覚。

視覚は血の霧を浴びせる。それだけで血液が目に入り、凝固すれば視覚を奪う。

嗅覚は噓せ返る鉄臭い匂いで麻痺させる。

聴覚は衝撃波で鼓膜さえ破れさえすれば、次の衝撃波は脳を揺らし、さらに致命的となる。

これらは人が鍛えた所で鬼を上回ることの出来ない部分。あつさりと壊れ、修復に時間のかかる部分。潰してしまえば歴戦の柱と言えど、赤子に等しい。故に、羈軛は人に対しては負け無しである。それは目も鼻も耳もある人型であるのなら鬼に対しても有効。

「ふう——……」

「羈軛さ——」

？血鬼術 血雨ノ槍・乱咲時雨？  
らんざきしぐれ

「え」

「間抜けが！ 言つたら、次期上弦の壺しか残んねえんだ！ 前々からこうしてやりたかつたんだよ外道が！」

「まっ——」

次に槍の雨の標的になったのは傍観していた岩戸であった。羈軛の撒き散らした血



が槍を形作る。全方向から向かってくる血槍に礫にされてあっさりとはらばらになる。

静寂が訪れる。戦闘開始からわずか一分足らずの出来事。

「……………血の匂いがしねえな……………なんだ、さつきから体の動きが鈍い。この酔ったような感覚……………」

(まさか岩戸は……………)

——ズガガガ!!

「な……………!?!」

鎌首を擡げた疑問など考えている暇は与えられなかった。あろうことか瓦屋根を突き破って羈軛の真上から黒死牟が現れる。先程の連撃で弱っている筈の黒死牟には傷はなく、紫黒の着物にも埃一つ付いていない。羈軛が直撃したと思っていた衝撃波は受け流され、貫通したと思われた血の槍は避けられていた。壊れた五感も修復済み。

因みに表情は相変わらずの真顔である。

・月の呼吸 肆ノ型 虧月突・

「ぎっ……い！」

瞬く間に黒死牟の手のひらに刀が生成され、矢のように打ち出される。まもなく羈軛の体に根を張った。床ごと刀で突き刺され、縫い付けられた形。起き上がろうとしても上手く体に力が入らない。狼狽える羈軛。その胴を挟むようにして黒死牟が着地する。

「落ちろ」

そして黒死牟が柄を殴りつける。尋常ではない膂力で殴られた刀は根を貼りめぐらせている羈軛ごと床を割って下の層に落とした。

「がああああ?!?!」

再び下の層に落ちる。まだ終わらない。床を割り、下の層に落ち、床を割り、下の層に落ち、床を割り、下の層へと……

城の中心部に彗星が落ちたかのような衝撃に、城は煙を上げて傾く。羈軛の背中に数

多の木片が突き刺さる。

「がっ……ぐっ……げ……ぐっ……」

羈軛は永遠にも感じる地獄のような痛みを受けていた。消え入りそうな意識の中、目を少し開ければ周りの景色が自分の背後から吐き出されるように流れていく。現在進行形で落下中である。

(クソがああああ!!!)

……

……

落ちるところまで落ちた羈軛。後から降りてきた黒死牟が上を向くと、天守閣から今いる所まで綺麗に穴が空いていた。洩れた月の光が辺りを微かに照らす。

「最下層まで落ちたか……無惨様は壊せと言っていたが、修復して再利用もいいかもしれんな……地下は最悪だが」

地下牢と言えば聞こえは良いが、骸だらけの形容し難い惨状が広がっている。戦でこの城が落とされた時の名残である。

……

「らああー！」

瓦礫を吹き飛ばして羈軛が姿を現す。依然刀は胸に刺さったままで、刀からは未だ蜘蛛の巣のように血管のようなものが広がっている。抜こうにも抜けないのだ。しかも絶えず羈軛の体を蝕んでいる。

（こつちが与えた攻撃は全部完治。俺はこのぶつ刺されてる刀に再生を阻害されてる……決して楽観視していた訳じゃなかったが……数字が一違うだけでこうも差があるのか。これが上弦の壱！）

「……」

「チツ……何とか言えよ……馬鹿にしてんのか!!」

「馬鹿になどしていい……見上げた根性だ……」

「クハハハ!! 癩に障るやつだなああ!!」 その澄ました顔、原型がわかんなくなるまで砕いてやらあ!!」

## ★上弦の参・岩戸

(羈軛様……やつてくれたね)

私、どれだけ天守閣で気を失ってたんذار。

上弦の壱……想像以上の強さ。認めたくはないけれど、強さの一点だと無惨様より数段上かもしれない。ううん。確実に上。そりや無惨様も信頼する。

あーあ、なんてものに挑んじやつたのか。哀れ。羈軛様。加えて私。さつさと羈軛様と二人であわよくば共倒れしてくれないかなーなんて……無謀ならぬ無望か。なんてつたつてつたつて今の私は頭だけだけど。

? 血鬼術 災禍転福?

そこら辺を歩いてた虫が粉々に碎け散る。んー。やっぱし人じゃないとなんといつかこう、達成感つてやつ? せっかく命を奪うんだからより大きく、より強いものじゃないと。虫では圧倒的に足りない。

守るものがあると尚いい。殺した後に家族の様子を見に行くのも欠かせない。お土産の原型はあった方がいい。装飾品をつけているだけでも直ぐに本人とわかるから。なぜかしれつと受けいれたりする頭のおかしいやつは、見えて煮え切らないから生きた

まま食べてあげる。大抵発狂しちゃうからそっとしておいてあげるんだけど。

一番いいのは大家族の時。

ちよつとずつ殺して、送つてを繰り返すだけでどんどん崩壊していく。それが本当に楽しい。これぞ生きてるって感じがする。

私は神様だから「ずうーつと幸せに暮らしました」なんてのはほおっておけないの。だつて神様は幸せの次は不幸を運んでくるものでしょう？

とりあえず、自分の手足が修復され、傷が消えたことを確認した私は、起き上がつて黒死牟様と羈軛様が消えていった……もとい黒死牟様が羈軛様を連れていった穴を覗く。

「うわあ……ひよつとしてこれ城の地下までぶち抜いてるんじゃない？」

しかも下でまだ戦ってるし、羈軛様どんな耐久力してんのよ。加えて戦闘狂とか、鬼になつちやいけない部類でしょアレ。まあ、もつとやばい存在を私達は倒そうとしてるんだけど。あの鬼はダメ。ほぼ確実に鬼を殺している鬼はアイツ。

普通に考えて十二鬼月を弑する存在なんて限られてくる。それも上弦を。先代の上弦の式は黒死牟様に挑んで食われたんじゃない。消されたのだ。黒死牟様に。行動が目に残つただけで。

「羈軛様の次くらいに私はやんちゃしちゃうってるし……次狙われるのは確実に私だよ

ね」

本当なら上弦総出で潰したかったけどもちろんそうはいかない。それでも私と羈軛様がいるだけで今の上弦。全員合わせた強さの八割は固い。あとは有象無象が増えてもそんな変わんない。

あ、羈軛様がぶつとばされて城壁を突き破り、荒原に消えてく。大丈夫？ 死んでない？

「このまま天守閣にいても、入れ替わりの血戦を挑んじゃった以上、黒死牟様に食べられちゃうし……てか他の上弦みんな帰っちゃったし……」

ここで待ってても始まらないよね。逃げたところではったり金夜叉に見つかればそれこそ元の木阿弥。

「……行ってみるしかないか……そうよ。一撃で……一撃で死ななければいいんだし？」

……

……

「どうした……私に勝つのでは……なかったのか」

「……あ……ぐうううう！ ……ば……け物が！」

「聞きなれたぞ。化け物化け物と……全くお前達は私をなんだと思っている」

「お前を……化け物だと罵ったやつと是非会ってみてえなあ！ さぞ話が合いそうだし！」

「会ったところで何も変わらん……力の差に打ちのめされている暇があれば這い上がってくればいいのだ……血反吐を吐いて……打ちひしがれて……もがき苦しみながらも手を伸ばせばいいのだ」

あつ……………

隠れて茂みから覗いて見たけど……

ええつと……血塗れで腹と肩に刀突き刺さって倒れているのが羈軛様でしょ……？  
んで、黒死牟様は腰の本命らしき刀は抜いていない。多分あの突き刺さっているぎよろぎよろ目ん玉の刀は黒死牟様の血肉で作られた刀。無限に作れるらしい。

(うん……無理。無理無理無理!! なんてきたの私! 稀血をあと数百……いや数千人喰わないと勝てないって! ここは撤退し)



「そうは思わないか……お前も」

貫手が私の腹を突き破って現れる。私の腹。私の私の……腹。何が起きているのか理解できない。目の前の手に心臓が握られている。波打つ鼓動が聞こえてきそう。私の心臓……？　これ？　そして力任せに抜き去られる。

「……(´Д｀)」

臓物と共に命の水が溢れ出していく。

背後にまわられたことに気づかなかった！

この強さだと全ての攻撃が即死級。私の血鬼術は微かでも生きてないと意味が無い。死んだら発動すらできない。今のは運が良かっただけ。なんてこった。前提が塗り替

えられる。あのぶつとい腕に殴りでもされたら細胞ひとつ残らず消し飛ぶ。本命らしき腰の刀を抜かれた場合は……考えたくない。

(……でも。私は運がいいの。だって神様なんだから)

? 血鬼術 災禍転福?

背後の黒死牟様はどうせすぐ再生されるから無理だとして、そこらの虫けらに押し付ける。心臓が再生されるのを感じる。零れて地面を朱に染めていた鮮血が時を戻すかのように戻っていく。虫は鳴くのを止めて動かなくなった。心臓が無くなったんだもんね。しようがない。

「ほう……」

振り向けば、黒死牟様は興味深そうにこちらを睥睨している。そして心臓を投げ捨てている。あつさりと捨てられた。用済みとはいえ、心臓なのに。なんか腹立つ。

ってそんなこと考えてる暇じゃない。運良く黒死牟様は私を見てるだけで追撃はしてこない。私の血鬼術にご執心みたいだ。さつさと離脱して羈軛様の所へ行く。羈軛様も羈軛様で怪我が酷い。

「羈軛様。ここは共闘と洒落こみましよう」

「何を言い出すかと思えば、誰がお前みたいな性悪と組むかよ」

「ですが、負けたくないのでしょうか？」

「当たり前だ。だからつてお前に背中を預けるのはもつと嫌だな」

「強情なお方ね。いいでしょう。ここからは小声で。私の血気術は災禍転福、そして稀血です。」

即死でないという条件の元、前者は使えば自分の損傷と同程度の損傷を相手に与えます。それまでは後者で鬼の感覚系を狂わせます。私は貴方を味方と思って戦いますが、万が一貴方が私を攻撃した場合、災禍転福を貴方に使います。いいですね？」

「……」

「沈黙は肯定と見なします。あわよくば、黒死牟様を倒しても私を殺さないことを願います」

「……はあ」

★三人称

「話は……終わったか……では参るぞ」

「? 血鬼術 血槍ノ雨?

血の槍を数本作り出す。羈軛の狙い目は虚を突くこと。聞けば岩戸は稀血らしいので、少しでも気が逸れたところに全身全霊を込めた一撃を叩き込むつもりである。

(まずは……)

「終わりだ」

・月の呼吸 捌ノ型 月龍輪尾・

羈軛の胴が真つ二つに分かたれる。上半身が滑り落ちる。

「羈軛様!」

「く……こそ」

(間合いが倍以上伸びた! 刀のせいで再生が追いつかん……やべ……死)

……

走馬灯が空を過る。

「兄貴、俺は侍になるぞ。弱きを助け強きをくじく。どうだ？ 格好いいとは思わないか？」

「……やめとけやめとけ。お前には無理だよ。なつたところでこんなひよろっひよるじゃ犬死だ」

「じゃあ鍛えればいいだけだ。付き合ってくれよ兄貴」

「あーめんどくつき。お断りだね」

(記憶か、誰の?)

場面が変わる。老練という言葉が良く似合う武士が家を訪れてきた。

弟の遺体を添えて。

「最期まで、勇ましき武士であった。家族には、我が主より褒美が下賜される」

「うるせえええ!! 何が勇ましき武士だ! 死ねばただのクソだろうが! 俺の弟を返しやがれ!!!」

「おやめ下さい! お侍様! どうか、どうか! この者も反省しております! 弟の死に気が狂っておるのです!」

「武士の道理を辱めた。問答無用。切り捨て御免」

迸る赤。目の前で崩れ落ちていく母親。そして黒い着物の男。

「可哀想に。弟を侍に殺され、家族に庇われて一人。大丈夫。全ては君を虐げる者が悪

いのだ」

(俺のだ……俺の記憶……なんで忘れてた……こんな大切なこと)

……

「そうだ……俺、には……弟がいた」

ピクリと黒死牟が反応する。羈軛は終ぞ気が付かなかつた。

「えらく侍に憧れてた。いつか侍に……だなんて生意気な口を聞く救いようのない阿呆だった。彼奴の槍が認められて侍に連れていかれた時、俺達家族は大手を振って見送つた」

「……」

「侍には切腹とかいう小洒落た作法があるらしいな。弟もそれに習つた。追腹だとよ」

「……」

「なあ………可笑しいじゃねえか!? 主君が野垂れ死んだからつて追つて死ぬとか馬鹿げてやがる! 誰が広めた! 誰が他人如きのために死にたいと思う!?! 死んだら意味がねえ! 只只脳死で准ずるだけの規則だなんてクソ喰らえだ!」

お前だけの命じゃねえ! 汚辱に塗れても、腰抜けだなんだと後ろ指を指されようと、俺の元に帰つて来さえすれば俺が全部守つてやった!

全部侍のせいだ！俺が変える！この侍が支配するこの国をぶち壊す！そうすれば……このクソツタレた世の中も！」

記憶を取り戻したことにより、羈軛の体に力が漲る。分かれた胴から吹き出す血液が下半身と繋がり、修復される。羈軛はここで死ぬわけにはいかない。ここで死ぬれば武士が支配するこの国を壊せずに、弟のように下手に武士に憧れて大切な命を散らすような人が増える一方。

地面を蹴る。羈軛が今までで一番力を入れた踏み込み。

「らあああああ!!!!」

(力任せの唯の突撃……拳の一撃か……笑止)

黒死牟は虚哭神去を突きつける形に構える。刀と拳がぶつかり合う。虚哭神去は、鋼鉄よりも硬い羈軛の拳を抵抗なく半ばから抉りながら突き進む。

「ぐっ……うう!!」

あつさりと羈軛の右肩は粉々に砕け散る。だが、勢いは殺されない。何故なら本命は爆散した右肩の血を集め、左手に作り出した巨戟。それは大木の幹程の太さ。

(左利き……今の今まで右を主に使ってたが……策略……だが甘い。この程度

では……)

? 血鬼術 災禍転福?

ぐしや

「は……」

黒死牟の胸部が中から爆散する。明らかな致命傷。向こう側が見えそうな胸。黒死牟が恐らくこの傷を作り出した存在であろう岩戸を見ると、相変わらず無傷で片手に血の滴る虚哭神去を持っていた。岩戸は黒死牟が羈軛に刺した虚哭神去で自らの胸を抉り、その傷を黒死牟に押し付けたいらしい。

(痛み分け……否。ここまで来ると神通力の類!)

黒死牟の体勢が崩れる。羈軛はその隙を逃さない。

(感謝するぜ……! 岩戸オ!)

「だあらつしやああああ!!」

赤黒い杭が黒死牟のはらわたに突き刺さる。しかし黒死牟は欠片も怯まず、二本目の



虚哭神去を突き/body勢によって空いた片手に生成し、羈軛に向かって打ち出す。しかし血の衣がそれを阻んだ。

「上弦が二人がかり……やはり一筋縄ではいかぬな」

黒死牟の動きが止まったかと思えば、纏う空気が変わる。

? 血鬼術 刀界・佳宵かちようの天満月あまみつつき?

(血鬼……術?)

(だよな。当たり前だ……使えないわけが無い。目の前にいるのは十二鬼月の頂点だぞ)

狼狽する二人を置いて、世界が塗り替えられていく。

黒死牟を中心として闇が広がり、その闇の中から生まれるようにして数多の刀が生え

出てきた。刀身は抜き身で、切っ先は大地に突き立てられているもの、一本一本が意志を持つかのように脈打っている。加えて、黒死牟の眉間からは双角が生えた。戟が逆に吸収されていき、傷が跡形もなく閉じる。焦った羈軛が血の槍を投擲するも、幾百もの刀から放たれた飛月の餌食になった。

そして――

「さあ、続きだ」

異形。悍ましいという言葉が形を持ってばこうなるか。体の全ての部分が人を害することに特化している。すぐ前まで六つ目ながら、人外の風貌の中にも隠しきれぬ威厳があったが、今それは完全に消えた。

（侍なんですよ!? もっと正々堂々としなさいよ！ 人型の方がやりやすかったのに！  
ああもう！ ……どうする私！ ……賭けるしかない……精神を抉って、隙を作り、羈軛様に叩いてもらう。侍は馬鹿だから）

「さ、黒死牟様」

「なんだ」

「それが侍の姿で御座いましょうか？ ……………っ」

何千と大地に突き立てられた刀に刻まれた瞳はギロリと目を巡らせ、傲慢にも主に口出しする愚者を見つめ、視線の嵐が岩戸に叩きつけられる。これでは感覚を誤魔化すのも、鬨気を消すのも意味をなさない。

目。瞳。眸。

我慢できなくなった一本が飛月を岩戸に向けて放つ。岩戸は一步も動かずに避けた。まるで飛月自体が避けたかのような軌道。

（やはり有り得ん。いや、有り得ないからこそその力。神通力と言うよりは権能に近い。神降ろしか）

漸く黒死牟は正解に辿り着いた。

鬼のを滅する組織がいる一方、鬼を崇める組織も存在するのだ。神仏の色がまだ薄く残っているこの時代、生贄を捧げ、奉る代わりに鬼に土地を守ってもらう村は少なからず存在していた。御神体として神社の奥に祀る村もあった。人の思いは形を成す。気まぐれで人里を飢饉から救い、気まぐれで神として祀りあげさせ、気まぐれで皆殺しにした。皮肉にも人とはかけ離れた所業が信仰をさらに引き上げた。

現人神の誕生である。

岩戸は数多もの斬撃を不動の構えで避けていく。

「……何が言いたい」

「勝つために卑怯な手も使うなど、正に生き恥。侍としてどうかと思います。ええ、本当に。これ程までに醜い侍がかつていたでしょうか」

「……」

「身体中から生えた刀。伸びた牙。見開かれた六つの瞳。禍々しい角。異形化した触手。なんて見苦しい。もう一度問います。あなたが目指した侍とはそのようなモノだったのですか？」

「あなたが本当になりたかった存在とはかけ離れているではありませんか？」

「ここで黒死牟が初めて嗤った。馬鹿にするまでもなく、乾いてもおらず、喜んでもいない。けれど確かに口角は上がった。」

「なにか？」

「いや、お前はなにか大きな思い違いをしているようだ」

「？」

「私は……この体を一度たりとも忌避したことは無い」

「脳裏に嘗ての記憶が呼び起こされる。ある日の、いつも通りの弟との鍛錬。この醜い姿を初めて曝け出した日。」

『兄上、なんというかその体は……』

『鬼らしいだろう。試しにやってみたが……醜いだろう。すまなかつたな、すぐに元に……』

『とてもかつこいいです兄上!! 刀を体から生やす等、最強ではありませんか!』

『ほう………薫はどう思う………薫!? 鼻血が出ているぞ』

『え? ……あ………ご、ごめん………あれ? ……なんでだろ………巖勝君を見てたら心臓がど  
んどん鳴って目が離せなくて……』

『………わかった。ひとまず安静にしている』

「それはどうい……」

「言わん」

黒死牟は握っていた虚哭神去を分解し、とうとう腰にさしてある刀を抜いた。

(あ………)

岩戸は間もなく死を悟った。

抜いたのは最初から腰に差していた日輪刀。しかも唯の日輪刀では無い。見蕩れて  
しまうほどに美しかったのだ。煌めく刀傷のような波紋。仄暗く輝く紫の燐光。月光  
を受けて黒光りする鞘。意匠の凝らされた柄と鍔。

岩戸が今まで葬ってきた柱が所持していた物とは全くもって似つかなかった。明らかに鍛えた者の技量が違う。

紫紺の日輪刀は、奇しくも岩戸の人間であった頃の記憶を呼び起こした。それこそ子供であった時に、神社の神主が見せてくれた本殿。その奥に祀られていた神刀のような神々しさ。そして刀の色がみるみる赫く染まっていき……

・月の呼吸 拾陸ノ型 月虹・片割れ月・

まるで流星の如く降ってくる。三日月の雨。血鬼術を使わずとも飛ぶ斬撃は、人ながら人外の領域に至った証。

(ああ……きれいきらきら……花火みたい……あーあ。やつぱり何も感じない。まあでも沢山殺してきた私にはもつたないくらい最後のしょ……そうだ、花火つてやつ見たかったな)

降り注ぐ。天から地へと慈悲を振りまく。正しく神の御業。肉の一欠片、血の一滴すら残さず上弦の参は死んだ。血鬼術を使わずとも飛ぶ斬撃は赫刀と同じ性質なのだ。

「さらばだ……」

そして倒れている羈軛へと黒死牟が歩み寄る。

羈軛は首に日輪刀を突きつけられる。見上げると真顔の鬼が冷たい目で見下ろしていた。

これより自分は殺されるのだ。月の鬼によって。

「クハハハハ!!」

されど羈軛は笑う。弾ける痛みも、思い出した過去も、死ぬ恐怖も、笑い飛ばす。突き刺さった刀を周りの肉を引きちぎって抜き去る。

「……何が可笑しい」

「お前は俺の血流が見えていただろう。さっき殴った時、利き腕を晒したのに加えて、俺は自分の血鬼術で血流を誤魔化した。明らかにお前は動揺していた。顔に書いてあった。『予想外』ってな」

「だったら……どうする」

羈軛は笑った。

「こう……するんだよ!」





命の水だ！」

羈軛は痛感する。これこそが血。生命を形作る一部。満たせば生き、枯れれば死ぬ。動かせばそれだけで管が破裂し、止めればそれだけで細胞が壊死する。

黒死牟は、この槍は放っておくといわずれ命の危機に瀕してしまうと判断した。負けることは許されない。自らの体には弟が眠っているのだ。負けることは即ち最強である弟が負けるということ。

（仕方ない。本気を出すか）

黒死牟は大きく深呼吸した。額の痣がより濃くなる。

？ 燦々さんさんと赫かがやくは、宿縁の炉心核？

「……は」

黒死牟の纏う雰囲気が一瞬にして変わる。

覚醒。否。これからが本気であり、月の鬼本来の実力である。

〈お前はもう……用済みだ〉

〈日の呼吸 壱ノ型……〉

揺れる太陽の耳飾り。赤よりも赫い刀。圧倒的な身体能力。

それは羈軛の脳内に溢れかえった存在しない記憶。または細胞に刻まれた忌々しき記憶。

（なんだ？ 今の記憶は……無惨様の？ は？ ふ、ふざけるなこんな……こんな化け物が存在するなど！）

ありえない。あつてはならないのだ。

第一、鬼が鬼殺隊の使う呼吸を会得している時点で既に可笑しい。そして羈軛が今見た無惨の記憶の中の存在は目の前にいる鬼と酷似している。耳飾りはつけていないが、もしも同一人物だったら？ 人の身でありながら、最強の鬼である主を易々と追い詰めた存在が鬼になるなどそれこそあつてはならない。

であれば、最初から勝負なんて――

「死ね死ね死ね死ねええええええ!!!」

？ 血鬼術 紅血絡ミ・徒花五雨？

再び血鬼術を使うも、依然黒死牟は仁王立ちのまま。

「な、なぜ操れない!？」

「無駄だ。発動する前に……因子ごと体内温度で燃やし尽くせば……良い話だ……」

(つ！ ……こいつが人であった頃は確実に鬼殺隊……！ その中でも上位の実力……元日柱か……あいつらは日輪刀が赫くなる。だがそれだけ…… 刀が紫炎を吹き上げて燃えるわけが無い……まさか……！)

羈軛は一つの解に至った。そして口角泡を飛ばし、必死に言葉を投げつける。頼むからどうか嘘であつてくれ。そんな思いを込めて。

「何を喰った！ 上弦の壱！ その力。有象無象を食って身につくものではないだろう！」

「なにも……弟を喰った……ただ、それだけだ」

「弟……まさか!？」

神の寵愛を一身に受けた侍。

その血肉は凡百稀血を喰らうよりも遥かに黒死牟の鬼としての格を底上げした。自らの意思に呼応して身体中の細胞一つ一つが活性化し、各部位に複製されている心臓が大きく脈打ち、体内の毒も、不純物も、全てを焼き尽くすほどの温度が体内を駆け巡る。

全ては太陽の剣士の細胞を取り入れた結果。

羈軛は震えた。

目の前の鬼が言う「弟」は無惨の記憶の中の耳飾りの剣士で確定。最悪である。同一人物の方がまだ彼にとつて良かった。なぜならこの鬼はその剣士を喰っている。つまりは下したということになる。あの耳飾りの化け物を。

黒死牟が構える。変わった霧囲気も加味され、見た目が異形でも一種の神々しさを醸し出していた。

・月の呼吸 拾ノ型 穿面斬・蘿月・  
？血鬼術 不遜ナル暴虐の血衣？

咄嗟に防御しようにも、触れたところから水蒸気のように蒸発していく。血の槍で三日月の一部を受け止めたが、三日月は瞬間的に巨大化し、体勢を大きく崩される。されど輝きは止まらない。

百と少し生きた槍使いの鬼はあっさりとその首を飛ばされた。

「……………嗚呼、死ぬのか……………俺」

「羈軛はあっさりと自らの負けに合点がいった。偏にあの力の前では逃げることも勝

つことも叶わなかったからである。理不尽は時に清々しい終わり方を連れてくる。憎き侍を殺さなければならぬ気持ちよりも一人の武を修めた者としての潔さが勝った。訳もなく頬に触れた地面の冷たさを心地よく感じた。

「だが無念だ。もしも……お前が弟に会ってたら……な……」

「……久々に楽しめた……感謝する……」

「……はっ……その笑み……サイコーに気持ち悪……い……な」

上弦の弐は灰と化して消えた。今度こそ静寂が訪れた。パチン。と子気味いい音をたてて納刀する。

「これで上弦は肆と伍と陸……猫又と餓者鬮髑と海坊主か……新時代が来るまでには存在を消しておかなければならぬ鬼だな……とりあえず帰るか。そういうえば、薫と紫明の日傘にガタがきていたか。町によって買ってたか」

黒死牟——継国巖勝は月を見上げる。

「さて、もうこんな時代か。梅。妓夫太郎。半天狗。玉壺。狛治。童磨。鳴女と獺岳もか。楽しみだ。集うのは……いつになるだろうな……むむむ」

微かに聞こえた人の声が巖勝の鼓膜を震えさせた。それが悲鳴だと判断した瞬間、既に巖勝の足は悲鳴の元へと駆け出していた。幸か不幸か臨界点にまで達した体温のおかげで凄まじい速度で走ることが出来ている。

「鬼を滅したあとは人助けか。まるで鬼殺隊だな」

かなり近かつたらしく、喧騒が近づくにつれ、目視で状況が確認できた。先程の入れ替わりの血戦に巻き込まれていないのは奇跡である。

状況としては一人が襲われ、一人が応戦し、それを複数の野盗が囲っている。鬼はいない。多勢に無勢でありながらも応戦している一人は単独で野盗を圧倒しており、この時代ではかなりの武芸者と巖勝は判断した。野盗退治にどこか懐かしいものをひしひしと感じながらやるべき事をする。

因みに人相手の為、鬼とバレないように目は二つに減らした。

到着と同時に近くの野盗の一人へと飛び蹴りをお見舞いする。

「囲んで叩……………ぶべらっ……………!?!」

不幸な野盗は歯を数本口から零しながら、面白いように飛んで行った。

「助太刀致す」

「おおうーありがとうなあ」

気のいい返事が武芸者らしき人物から返って来る。

野盜は野盜でも武者落ちなどではなく農民の類が困窮したものらしく、巖勝が人間の子供時代に遭遇したそれよりも数段弱く感じた。最後の一人は逃げ出そうとしたので、死なない程度に力を込めて鞆を後頭部に向かって投げ、氣絶させた。

武芸者の方も最後の一人の首を軽く締め上げて昏倒させていた。巖勝が到着してからもその数秒で制圧完了である。

「大丈夫かあ、おじいさん？」

「大事無いか。御老公」

「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！　本当になんてお礼を申し上げたらいいか……」

感極まって涙を流し始めた老人に二人はほっこりした。それも束の間。巖勝はにこやかにこちらを見ている武芸者をみて目を見張った。

冬も間近だと言うのに道着の姿。髭が所々剃り切れていない。巖勝よりは短い髪を後ろで括り、馴れ馴れしく巖勝の背中を叩いている。悪い気はしなかった。

「すごいなあ、お侍様なのに拳法も修めているなんてすごいなあ。さっきの飛び蹴りなんて綺麗だったなあ。俺は素流っていう拳法を修めているんだが、俺が弟子入りしたいくらいだなあ。しかもその体格。よく鍛えたなあ」

間違いない上弦の参である猗窩座の人間時代の師匠。慶藏である。予期せぬうちに

巖勝は原作のワンシーンに介入していた。

「……………あ、ああ。其処許こそ、私が居なくてもこの程度の野盗なら一人で全滅させることができただろう」

「おふた方ともありますがとうござえます。じゃが困ったのう。儂としては何かお礼をしたいのじゃが、薄汚れた道場しか渡せるものが——」

「こちらの御仁に渡してくれ」

巖勝は即答した。



## 壺話 春夏終冬

「夜風が……肌に染入る。涼しくなったな」

時刻は夜。

今巖勝が歩いているのは慶蔵の住む街へと向かう山道である。

縁壺や無惨以外では初となる原作キヤラ（零式を除く）である慶蔵との邂逅から早くも一年が経過した。道場譲ってはい終わりなんてことにはならず、今は紫明が医者之道を歩んでることもあつて恋雪に薬を提供している。所謂、パシリである。狛治が鬼にならなければ全部ご破算なのだが、上弦候補はまだ猗窩座以外にもいるのであまり気にしていない。

因みに飛脚を使って運ばないのは巖勝の足の方が早いからという至極単純な理由である。

いつもならば夜中のうちに忍び込み、家の縁側にそつと置いておくだけだったが、前回届けた時に『次来る時は朝に来て欲しい。もてなしたい』と書き置きがされていた。（猗窩座の前世はまともだったんだから、引き込める価値はある。此方としても仲間を引き込めれば万々歳。しかしどう事を運んだものか……）

今継国一家の中で一番自由に動けるのは巖勝だ。

妻は各地を転々とし、刀鍛冶の空里を見つけて出している。

娘は珠世に付きつきりで医者道の道を歩んでいる。

家族は多忙、逆に言えば家族に迷惑をかけずに好き勝手動き回れるということ。これは原作を知っていることも大きい。心ゆくままに上弦を集めることが出来る。

時系列的に猗窩座が十二鬼月の中で一番古株。故に最初こそ驚きはしたものの、慶蔵と出会えたのは奇跡以外の何者でもない。

「原作通りゆけば刀鍛冶の里で禰豆子が太陽を克服。我らはその血を飲めばいい」

巖勝達の目的は一家全員の太陽完全克服である。巖勝は焼かれる速度に再生が追いついてなんちゃって克服をしているが、日光に照らされている間は損傷の回復が出来ず、人間大まで能力が落ちる。それでも出鱈目に強い。家族はまだそこまで至っていないし、薫は無惨と命が繋がっている。それも禰豆子の血、若しくは肉でなんとかなる。

問題はその後。

当たり前だが禰豆子を無理やり殺してしまえば鬼殺隊との衝突は避けられない。かと言って放置すると無惨とともに薫が死ぬ。

「刀鍛冶の里が終わった辺りで珠世に血を採取させて、横流ししてもらうのが一番安全

か。彌豆子も原作通り太陽を克服するまで経験を積みませなければならぬいな  
……………ん」

ふと、巖勝の足が止まる。五感の何れでもない、ただの勘である。すぐさま目を六つ  
に増やし、辺りを探る。

（なんだ？ 誰かに狙われている訳では無い）

巖勝は即座に虚哭神去を生成した。一秒と経たず、刀身に瞳の並んだ刀が掌に握られ  
る。それを地面に突き立てることで凡百感覚に意識を割いた。もちろん五感も使用し  
て辺りの状況を探る。ついでに刀を握ることで漏れいずる剣気が小動物を黙殺する。

故に鳥の囀はない。

木々が騒めいている。

風は一迅もふいていない。

刀は振動していない。つまり人は歩いていない。

ただ川が流れる音がし、そこには流れをせき止める障害がある。どうやら橋が架かっ  
ているようだ。

そしてそこに違和感の主はいた。

(そこ)か……一人の女。鬼ではないが……酷く生気がない)

呼吸の頻度。体温。微かな衣擦れの音から女と判断した。

鬼でもなんでもないただの女である。

夜の山奥に女一人で入るなど自殺行為も甚だしい。逆に考えれば、目的はそれしかない。

ただならぬ事情があるのだろう。だしても見過ごす訳にはいかなかった。鬼になったとしても巖勝の性根は人助けのそれ。皮肉なものである。

「山に入るといつも……道無き道を走ることになるな」

そう言いながら虚哭神去を塵へと返し、目を人間のそれへと戻し、地面を蹴って駆け出した。

裂破。

凡百障害も彼のの前では障害足り得ない。体運びひとつで細い枝が足場になる。？が足にまきつこうが、水面を走ることが可能な程の脚力で引きちぎる。

よって山奥であろうと平地を走ると変わらない速さで駆けることが可能。人間時代でもできた芸当である。

草むらから躍り出ればそこは川岸だった。橋はすぐそこに架かっている。見たところ立派な橋だ。交通の要でもあるらしい。

その上に女が一人、身を乗り出して川を見下ろしていた。巖勝の存在に気がついていない。よっぽど耽っているらしい。

(川が綺麗だから見ている……とかヤワな理由ではなさそうか)

巖勝は声をかけてみることにした。

「おい」

「ごめんね。ごめんね。私だけ逃げてごめんね……」

「……大丈夫か」

「でももう耐えられやしない！」

「おい、聞こえていないのか………ほら見ろ、甘藷だ。冷たいが、食欲を唆られはしないか？」

「……楽になれる。すぐに死ねる……大丈夫……」

「……」

(無視……ではない……よな?)

冬ももうすぐ終わる。されど未だ白く染る山から流れ落ちる冷水の濁流。雪解け水は人の身には氷とそう大差ない。半身浸かるだけで体温を貪り、感覚を殺すだろう。

ふと力が抜けたように女性の体がその中へと吸い込まれていく。目の端から微かに零れ落ちる激情の涙はなにかに追い詰められている証拠。

ガシッ

「ひっ」

宙に身を投げ出した女の胴をに片腕を回し、もう片方の腕で橋の縁を掴む。巖勝の長脚の先が水面に触れた。冷風が橋の下を通り抜け、二人を揺らす。

間一髪。巖勝がここにいなければ水死体が一体、下流の方で見つかっていただろう。

女は誰かしらに胴を捕まれ入水自殺出来なかったことに気がつく。顔を上げれば炎

のような痣がある長髪の男と目が合った。

助けられた。死のうとしている自分を。

「あ…………い、嫌！ 離しとくれ…………！」

（待!? なんでもここに！ それよりも動けない！）

巖勝の腕の中でじたばたと暴れる女性。しかし腕はビクともしなかった。暫くしてどう足掻いても抜け出せないと確信して諦めたのか、女は程なくして抵抗を止めた。

「…………橋の上に戻るぞ」

「…………ううっ」



橋の上に戻った後。女を下ろし、乱暴に投げ捨てた日傘に支障はないのを確認。

そして幽鬼のような顔をしてほおけている女がまた飛び込まないように注視しながら橋を渡りきり、道の端の開けた場所に火打石を叩いて火を起す。ついでに椅子になるような倒木を二本、焚き火を挟みこんで置いた。女は巖勝の怪力には突っ込まなかった。

「まずは座れ。体を温めろ」

「…………」

女は居た堪れなくなつて顔を背けた。

「とりあえずは落ち着いてからでいい……死の恐怖は一度臨界点に達したのなら……そう抜け出せるものではない。再び死のうとするのも一苦勞だろう」

「だったら、いつその事故つておいてくれれば良かったのに」

「……許せ。性分というものだ」

非難めいた視線が巖勝に突きつけられるが、本人は何処吹く風。拳句の果てに懐から甘藷を取り出して枝に刺し、焼き始めた。手際が良かったので、女の目には焼きなれて見るように見えた。

「……」

「……案ずるな。別に私一人で二つも食べる訳では無いぞ？」

「欲しいから見てるんじゃないよ！」

毒気を抜かれた女は座つてから数分後、沈黙を破つて身の上をポツポツと話し出した。

娘の看病に疲れた。

強い子に産んであげられなかつた自分のせい。

夫に迷惑はかけられない。

自分の無力が悔しい。



「私は……どうすればよかったのよ……ねえ」

侍の顔色を伺うように女が顔を上げると、侍は女の方をじつと見つめていた。正確に言えば女のすぐ後ろの茂みを。

「……去ね」

「なにが……『ガサツ』……ひっ!？」

女の耳には何かが木々の向こうへと走り去っていく音が聞こえた。後ろを振り向いた女の目にはそれが人の形をしているように見えたが、どう考えても人ではなかった。人ならば逃げるように山に入っていないか。

「何今の……」

(熊……? もしかして山賊かも!? ……そんなことより、いま侍の目に文字が浮かんでなかった? 焚き火の揺らぎでそう見えただけかな)

「なんでもない……猿かなにかだろう。とりあえず聞いた限りだと……死ぬぞ。その娘は」

「死……!?! まだ死ぬはずがない! あの子は心が強いのだ! 私が死んだ所で乗り越えていける強さがある!」

「人はそう強いものではないのだが……ほら、熱いうちに食え」

女は無言で甘藷を受け取った。一口食めば、柔らかな黄金の蜜が口の中でとろけた。

それからというもの、女は無我夢中で頬張り始めた。冷えた体にはとても効いたようだ。

「母親を失うというのは……想像を絶する虚構を産む……立ち直れるのはほんのひとり。それも深い傷と共にな」

「な……にをした風……あなたにあの子の苦勞が分かるはずがない！ あの子は頑張ってる！ 誰よりもつらいのに誰よりも頑張ってる！ そんな言い草はたとえ侍でも許さないよ！」

「お前だけ逃げるのか？」

「……あなたが……わかるのよ！」

女は頭を抱えて蹲った。

「……」

（参った。自殺志願者なんてどうやって説得すればいい。しかし正論をぶつけるのは些か不味かったな）

巖勝は自分か強いという自覚はあった。実際に、柱達との総力戦と縁壺との鍛錬以来、今日に至るまで最大限の本気を出したことがない。

心臓を貫いても数秒暴れ狂う戦国武将ですら、脳を破壊すれば即死した。何万の軍勢

に刀一本で立ち向かったこともある。捌ノ型 月龍輪尾で薙ぎ払うだけで半分が死んだが。

そうやって入れ替わりの血戦も戦国の時代も家族を守り抜いてきた。

だからこそ手こずっている。

満ち足りた者がうちひしがれている者にしてやれることなどほぼない。言葉の全ては裏目に出る。自分と縁壺の関係がいい例だろう。

だがそれでも救ってやりたいと思つた。

「私にはお前の事など何も分からない。だから偉そうに口を挟んですまないと思つている。だが、気づかせてやることは出来る。身をもつてな」

「……………」

「もし本当に死にたいのなら……………家族を天秤にかける程に決意が硬いのなら、今ここで殺す。私が助けた命。私の手で始末をつけてやろう」

立ち上がり、巖勝は刀を抜いた。

救いとは苦しみからの脱却。たった今女がそうしようとしたように葬ってやるというのだ。今度は他人の手によって。

(助けておいて殺すなどと……………自分勝手も甚だしい。だが、これで救われるのなら)

巖勝は鬼殺隊であった時に会った男の死に顔を思い出した。村ひとつが鬼に蹂躪された後だった。

祖父母が殺され、妻が鬻り殺され、子を頭から食われた男。周りに散乱している人間の体の一部一部からそう推測した。男自身ももう助からない程の重傷を負っていた。手足は根元からもぎ取られ、達磨だった。赫刀で傷を灼けばまだ助かるだろう。しかし巖勝を見るや否やこう懇願した。

『頼む。殺してくれ。もう生きることの意味を得られない。お願いだ……楽にさせてくれ！』

『そうか……相分かった。安心して眠るといい。お前の体は家族ともに丁寧に葬ろう』  
『……ああ、ありがとう。ありがとうなあ』

・月の呼吸 拾漆ノ型 千夜一夜・涅槃・

巖勝は快諾し、一太刀の内に斬り伏せた。最期に男はとても安らかな死に顔を浮かべていた。

『な!? ……月柱! ……なぜ殺したのです! 適切な措置をすればまだ助かる可能性

があつたかもしれないのに！」

『楽にさせてやりたかつた。埋葬は全て私がする。お前は休んでいろ』

『だからといって殺さずとも！ 説得すれば立ち直れたかもしれないではありませんか！』

『人はそう強くない……況して家族と四肢を失っていた。お前は……生き地獄のような後生を味わせてやりたいのか？』

『つ……！ やはり貴方は鬼だ！』

『……』

戦の絶えない世の中は弱者が生きることとを良しとしない。失われた幸せや逃れられぬ不幸が影みたいにひつついてくる。

逃げるが勝ち。ならば死は救いなのだ。

（千天の慈雨の上位互換である拾漆ノ型を生み出した今、目の前の女も苦しませずに葬り去ることができる。溺死よりは辛くないだろう）

……

「殺す？」

女の耳には鞘滑りの音が聞こえなかつた。それゆえ『殺す』などという突拍子もない

ことを言う侍に困惑した様子で女は顔をあげた。そして固まった。「へ？」

遙か高みから女を見下ろす無機質な瞳。横を見ずとも分かるほど女の右頬スレスレに刀が添えられている。刀に走っている裂傷のようなものは傷ではなく刃紋だと気づく迄にそう時間はかからなかった。

そして……全部吹き飛んだ。

自死への恐怖が全て、目の前の存在に塗り替えられる。

娘への後悔が全て、形を変えて叩きつけられる。

魔物のような精悍な顔つきに浮かぶ無表情に目を奪われる。

世間知らずの侍に叩きつけてやろうと思っていた言葉の数々を忘れる。

自分の心音すら鳴っているのか分からない。

恐怖ではない。恋慕でもない。動揺でもない。安楽でもない。

この気持ちを表すとしたら諦観。

首元に置かれている業物は、女の回答一つでその首を月光の元に晒すのだろう。

一種の諦め。それは高い建物から落下自殺を試みた者が、落ちてゆく瞬間に感じるそれに似ていた。

(ん……? でもこれって……)

「心配するな……楽に死ぬる……痛みを感じる前に首と胴は泣き別れだ」

女は暫くの間、ポカンと口を開けていたが……

「ふふっ……」

笑った。

巖勝があつけにとられる程に自然に笑った。

最近巖勝の周りでは訳もなく笑う者が多い。共通点としてその誰もが死を前にしていた。

「何が面白い」

「ふふふ……めんね……ふふ……殺気がこれっぽちもないんだよ。本当に斬ら

れるんじゃないかってちよつとびつくりしちゃったけどね。ひよつとするとお侍様は人なんて斬ったこと一度だつてないんじゃないか？」

「……」

「私これでも武人の妻だからさ、分かるんだよ。こう……殺気とか闘気とかかってやつがね」

(透き通る世界が裏目に出たか)

相手の体が透けて見え、闘気を消すことが出来る透き通る世界。鍛えれば生氣すら無くすることが可能となる。

それを常時発動している巖勝は有り体にいえば弱く見えた。武を少しでも極めていたとはいえ、一般人にはそう見える。何せ威圧のいの字もない。ただそこに在る植物のような気配なのだ。

「……………耳が痛いな」

「当たり前だろう？ ……ふふつ、お侍様は優しい人だね。人を救うために自分を犠牲に出来るひとだ。でもまあ……。冷たい水の中で息が出来なくなつて死ぬよりも、いつその事誰かに一撃で絶命させてもらう方がいいかな……………はあ……………お侍様



「！」

「……なんだ」

「うじうじしてたら私の首を斬ってくれるんだね？ 今言ったね？」

「ああ。言ったとも」

巖勝は流れが変わったことに疑問を持ちながら刀を収めた。すると女は頭を垂れ、手を合わせた。

「じゃあもう少しだけ待ってくれないかい？ もう少しだけ……ほんの少しだけ頑張ってみることにするよ。もしも本当にどうしようもなくなったらお侍様の所に行くから今みたいに決意が変わる前にちゃんと言と首を切ってくれよ？」

屈託なく笑う顔は憑き物が落ちていた。つい先程まで生気のない顔をしていたというのである。

太陽が顔を出した。以前山奥である為、日傘を差す必要はない。

（よくわからんが、救えた……いや、先延ばしにただけだ）

「もう朝か……早いね。心配される前に戻らなくちゃ」

人と鬼を対比するかのように女を日光が照らし、巖勝の方は木陰が遮っていた。そこで漸く巖勝は彼女の髪飾りが雪の結晶を模していることに気がついた。

「恋雪……？ ……お前、慶蔵という御仁を知っているか？」

「は？ ……知ってるも何も私の夫だよ。とうかかなんで知ってるのさ」

（そういえば、慶蔵の妻は入水自殺していたな。 …… …… …… また改変したな。い  
いだろう。そこまで支障はない）

「お前の娘に用がある。薬を届けているのは私だ」

「……あいつが言っていたのはあんたか…… …… ああ、別の意味で死にたくなつたね。それと私の名前は春夏だ。お前じゃないよ。それから、今日のことあいつに言ったら今度こそそ川に飛び込むからね。覚悟しなよ」

「なんの覚悟だ。それに、自分を人質にとるのか……」

巖勝は日傘を提げて歩く。朝日程度なら周りに違和感を与えずに歩くことが出来る。燃えるより早く再生すればいいのだ。竈門家の血は少しずつ巖勝を鬼ではないなにかへと近づけていた。

## 式話 招かれざる客

「そうだったかあ。もう既に知っていたとは……春夏も俺に言ってくれば良かったのになあ」

「い、いや……まさかこんなお侍様があなたの知り合いだなんて私どころかだれも想像なんてできやしないよ」

「ひつでえなあ」

客間に巖勝は通され、座布団の上に座した。

巖勝は歓迎されていた。といっても歓迎の空気は最初だけ。途中からは夫婦二人の軽いい言合いに置いていかれていた。

やれどこへ行ってただの、やれお前こそなんで探しに来なかつただの。言葉の一つ一つには冗談交じりだが、そこには確かな信頼がある。慶蔵は本気で春夏を心配していたし、春夏は自分だけ逃げようとしていたことを申し訳なく思っていた。

暗黙の了解のうち二人は和解した。それゆえの軽口の叩き合い。二人とも荘厳な空気はきらう性なのだ。揃って正座を崩していた。

「だいたい、あんたは拳法に夢見すぎなんだよ！　こんなだだっ広い道場を頂いたとい

うのに門下生も一人もいない！ その侍に譲つて下働きとして雇つてもらつた方がよかつたとおもうけどねえ!」

「道場貰つたとき、一番喜んでたのは誰だろうなあ……貰つた時はおんぼろだったここを『二人でこの国一の道場にしよう』つて掃除しながらも笑つてたのはどこの誰だろうなあ?」

「ツ!? ……あんたはっ!」

(いつの時代も夫婦が作る空気は心地よい)

今にも掴みかかりそうな二人の姿に縁壺とうたを懐かしんだ巖勝は、茶を一飲みし、懐から小包を取り出す。そして二人の前に置いた。一触即発……もう始まつてるかもしれないが、そんな空気だった慶蔵と春夏が揃つて小包に目を向けた。

「私も……慶蔵の妻など夢にも思わなかつた。……これが、恋雪の葉だ。食後に少しずつ飲ませろ。それと後でいいから恋雪の容態も診る」

診る……と言つても巖勝はそこまで医学に明るくない。しかし彼には「透き通る世界」がある。これだけで下手な医者よりも正確に容態を診ることが可能なのだ。本職泣かせである。

尚、表面上だが素山夫妻は落ち着いた。表面上は。

「本当に助かるなあ」

「恋雪の調子がいいのはこれのおかげかい？ 高価な薬だろう。どこでもらってくんのか？」

怪訝な顔をして薬の入った小包を春夏が手に取る。中には小粒の玉がいくつか入っており、軽く振れば小気味のいい音を鳴らした。

「娘が医学を修めている。私はその運び屋という訳だ」

「娘の小間使いかい。体力だけは有りそうだね。てか結婚してたのかい。いくつだよあんな。娘が成人してるなら普通四十手前なんだろうけど、見たところ二十そこらにしか見えないねえ」

「いつもなら夜中に届けてくれてくれてるんだが、やっぱしお礼がしたくてなあ。ついでにちよいと手合わせしてみたくてなあ」

「ばか言え。ついでどころかそつちが本命のくせに。娘の恩人に何させようとしてんのさ。全く、恋雪はあんたに似なくてよかったよ」

「じやあ誰に似たんだろうなあ」

「ふふん。そんなの私に決まって……………怪訝な顔をするんじゃないよー」

春夏が慶蔵を小突く。そこで慶蔵がけらけらと笑うものだから春夏も顛顛に青筋を浮かべた。第二回戦が始まりそうである。

「……構わん。体術なら心得ている」

巖勝の一言に春夏が動きを止める。慶蔵は笑みを深くした。

「やめときなつて。怪我したらどうすんのさ」

「……春夏は誰に言ってるんだあ？」

「そりやお侍様だけど？」

「だったら驚くぞお」

「？」

……

「参った、つて言ったら終わりだからね」

「おうとも」

「承知した」

片や柔らかな表情で片腕を回す道着姿の男。片や二本の刀を丁寧に隅におき、自然体で佇む侍。身長差では巖勝が圧倒的。

綺麗かつただだっ広い道場に春夏を含めた三人がいた。木造のそれは道場として申し分なく、らしいの雰囲気醸し出している。天井も高く、剣道場の者たちが喉から手が出るほど欲しいのも納得だった。

(なんだかんだ決着はすぐにつきそうだ)

春夏も伊達に慶蔵の妻をやっていない。夫の強さは熟知している。加えて刀を使わない侍だ。決着はすぐに着くと考えている。ただ心残りなのは慶蔵が放った一言。

『だつたら驚くぞお』だなんて、なにさ。……いやありえない。多少心得があろうが、あの人は生涯を拳に捧げたんだ。刀ばつか振ってるようなやつとはものが違う。ただ………)

違和感。

春夏の心の下に微かだが存在するそれ。ふと、侍の置いた刀が目に入る。なぜあの夜侍が近づくまで自分は気が付かなかったのか。なぜ人も斬れないような侍があれほど血を匂わせる刀をもっているのか。

(ありえないんだよ)

慶蔵は強い。盗賊が数人集まったところで軽くあしらう。道場を開けるほどの実力もある。そして何よりも、彼のその強さになつたところを助けたのが彼女なのだ。

悪漢に襲われ、全てを諦めそうになつたところを助けてもらった。よくある話だと言われようが、彼女にとっては慶蔵こそが俗に言う運命の人なのだ。故に欠片も興味の湧かなかつた拳法道場に男装して入り込み、めきめきと力を上げ、道場の中で一番強かつた慶蔵の次に強くなつた。一番近くで慶蔵を見続けてきた春夏は夫の勝利を疑わない。少しも。

「始めッ!!」

しかし仄暗い不安を拭いきるように力を入れた一言は……



「慶蔵さん！ 子供が殺される！ 大勢の大人に囲まれてる！」

「む」

「なんだ？」

「あら」

突如、切羽詰まった様子で道場の中に男が飛び込んできた。見るからに善人そうな顔を苦悶に染めて助けを乞うている。呆然としたのは一瞬。事の重大さを理解した慶蔵達が男に駆け寄った。

「……どこだ？」

「すぐその通りだ！ 早く！」

「旦那。ちよいと手合わせは待ってくれねえか。んでもって、妻と娘を頼んじやくれ

ねえか」

「任せろ。守るのには慣れている」

「悪いな」

慶蔵は男と共に出ていった。嵐のような一連の流れに春夏は置いていかれていた。切羽詰まった空気が霧散していく。春夏はなんだか疲れて、大きく息を吸って吐いた。

「はああ……なんだが変な汗かいたあ。そういえばあんた医者のお親だったね。怪我人の介抱だとか、そういうのには詳しいだろ。私になんでもいいつけな。とりあえず私は布団を敷くよ。あいつが怪我人を運んでくるだろうから看病しないと」

「いや、そこまでする必要は無い。軽い布ぐらいでいい」

「……そうなのかい？ でもまあ、あんたが言うならそうなんだろうね。えーっと布、布……どこに詰め込んでたっけな」

春夏は布を探しに出ていった。がらんとした道場で巖勝は息を吐いた。そして転生者として原作の重要人物に出会えることに歓喜する。軽く拳をあげたほどだ。

巖勝は知っている。誰が運び込まれてくるのかを知っている。鬼子と呼ばれた少年は気絶されても半刻で起き上がる。故に大した準備は不要。

「猗窩座……いや、狛治。誰しも幸せになる権利がある。お前にもだ………そして、来たか外道共。薫のいない一日だというのに、今日は退屈しないな」

……

「こつちだよ慶蔵さん！」

「おうさ」

慶蔵が友人に先導されて道場を出ていった。その後ろ姿を影から見つめる者が四人。終ぞ慶蔵は気が付かなかった。

「なんでかわからんが、どうやら出ていったようだぞ」

「運がいい。あいつさえいなくなれば、今いるのは恋雪とババアしかない。仕掛けるには絶好の機会だ」

「前は蝮を放ったから……」

「じゃあ次は……くひひ」

招かれざる客達。

着物に袴。侍の卵である彼らの小綺麗な見た目とは反して話す内容は悪人のそれ。

皆が慶蔵の近くにある剣道場の門下生である。剣道場を物理的に大きくしたい彼ら

にとつて慶蔵の道場は喉から手が出る程欲しいものだ。しかもこちらは侍。侍中心の世の中で拳法の道場があればほど大きいのは腑に落ちないのだ。

「落ち着けお前たち」

鶴の一声に三人は黙りこくる。

（いつになつたら恋雪は俺のものになるんだ？ 恋雪も望んでいるし、何よりも剣道場の後継である俺が望んでいる。なんにも憂いなどないはずだ。反対しているのはあの慶蔵だけ。あいつさえ何とかすれば）

彼らをまとめ上げるのはその師範の息子。彼は慶蔵の娘である恋雪に恋慕している。彼もまた、恋に狂つた男である。薫とは違つて本人の意思等完全無視しているが。彼の父親はこの事実を知らない。

「前門から堂々と入ればいい。女衆は家の中だ。恋雪達にもてなしてもらおう。それがいい。どうやら最近調子がいらしいからな。恋雪も喜ぶだろう」

原作では散々嫌がらせをされてきた慶蔵の道場。慶蔵はよく言えば温厚で、悪くいえば鈍感だった。

だが仕方ない。相手は卵とはいえ侍。口を出せば世間からの当たりが強くなり、何をされるかわかつたものではない。自分だけならいいが、今では道場と家族を持つ慶蔵。それだけは避けたかつた。

「なんで道場の持ち主はあんな奴に道場なんてゆずったんだか」

「我らと違って横暴なんだろう。それこそ脅して無理やり奪ったに違いない」

「その通りだ。でなければ俺たち侍ではなく、たかが拳法家なんかに譲るわけがねえ」

相手が侍故に慶藏達が反抗出来ぬのなら——

「何者だ。名乗れ……でなければここで切り捨てる」

——日本最強の侍が御相手いたす。

門は目と鼻の先。小憎らしいほどに立派な門の下で侍が一人、腕を組んで佇んでいる。彼らにはその男が巨人に見えた。見たところ自分達の頭の位置にちょうど男の二の腕があるのだ。

余談だが、江戸時代の平均身長は百五十五センチから百五十六センチ。だと言うのに巖勝は百九十センチ。彼らは見上げ、見下ろされる関係である。

(侍だ。強……いのか？ 分からない。不気味だ)

侍とわかつたのなら、次に目を引くのは刀である。巖勝はほぼ同じ長さの刀を二本差していた。一本は継国家に代々伝わる神刀『蛟落天津』。もう一本は言うまでもなく日輪刀である。

意匠の施された鞘は素人目でも業物と分かるほど精巧。侍達に殺してでもあの名刀を奪いたいという仄暗い欲望が鎌首を擡げた。それほどに素晴らしかったのだ。

「私はこの道場の留守を任されている。継国巖勝という者だ……して何用だ。名を名乗れ」

「あ……いい、いや、慶蔵とかいう腑抜けが……」

「名乗り返さないと侍ではないのか？ ……それにしても……腑抜けか……」

「ひっ……」

（ちっ……怖気付きやがって。背高のつぽに何を怖がることがある）

慶蔵の道場は門をくぐれば目と鼻の先。そして自分を待っているであろうはずの恋雪もすぐそこにいる。跡取り息子はもどかしかった。あと少いで望むものが手に入るというのに、目の前に巨大な壁が現れた。故に手段は選んでいられない。

リーダー格である彼が目配せすると、一番体格のいい一人が前に出た。とは言っても頭のとっぺんが巖勝の首元に届くかどうかである。恵まれた体格のおかげで所業が許された彼も、今はどうすることも出来なかった。

（こ、怖え）

巖勝の視線を一身に受ける。巖勝が何を考えているか分からないのだ。いつもなら睨めば誰もが怯えて逃げていった。つまり怯えた目しか知らない。対して目の前の男は怯えてすらいない。一挙一動一投足全てを見られている。何か動きを見せれば即斬られる。抜き身の刀がその鋒をこちらに向けている。そんな感覚だった。

「どうした……名も無き者。力で示すのなら抜けばいいだろう。その腰に差し込めるのは飾りか？ 腑抜けはどちらか……明瞭だな」

巖勝が近づき、煽る。完全に刀の間合いの中。一足二刀よりも近い間合い。

逃げ道は絶たれた。ねじ伏せなければプライドが許さない。逃げてもこれまたプライドが許さない。弱者にはなりたくなかった。

「う、うおおおおああああああああ!!」

抜刀。からの振り下ろし。大上段からの一撃。性根は腐っても剣士。速さと気迫は一級である。速さと気迫のみだが。

それだけで上弦の壱を相手にするには圧倒的力不足。鬼が人に道理を説き、人が鬼に屁理屈を掲げて暴力を振るう。なんと皮肉なことか。

（恐怖で刃先がブレている。右手に力が入りすぎている。少し挑発するだけで激昂する精神力。弱いな。やはり戦国よりも剣士の質は落ちている。鬼殺隊もそうだろう……  
嘆かわしい）

「ふっ」

巖勝は最小限の動きで避けた。彼の頬の傍を刀が通過する。風圧で髪がはらりと揺れた。瞬きひとつせず、そして眼前を通り過ぎる刃に目もくれず、刀を振った男の体を見ている。



（肉体も、普通より秀でていゝのは認めるが使い方がなつてない。本来の力の半分すら引き出せていない。呼吸を使わない者などその程度だろう）

避けられたことに気づいたところで振りは変えられない。避けられると思つていなかったし、振りを変える程の筋力がなかった。それどころか標的を見失つた刀は下段まで勢いよく振り下ろされていく。

「軟弱千万……」

巖勝は振り下ろされた刀の背に片足を乗せ、体重をかけて地面を斬らせる。土埃と共に大きな音が鳴り、地面に刀がめり込んだ。

「ぐっ……」

（動かせない!?!）

刀から手を離さずに力づくで巖勝の足から逃れようとする剣士。大胆に隙を晒した。それを月光は見逃さない。

続け様に刀を押さえつけているのと反対の足で無防備な男の脇腹を蹴り飛ばした。

「ぐわっ!?!」

骨が折れるとまではいかずとも微かに軋み、男の体が虫のように吹き飛ぶ。一秒ほど

滞空した後、二、三回不時着して、動かなくなった。

「受け身ともらぬとは……」

「……」

暫しの静寂。

(な、何が……起こった!? あいつの体が揺らいで……分からない! どういうことだ!?)

「お、お前ら! 刀を抜け! 全員で同時にかかるぞ!」

たった今武器を破壊された一人を除く三人全員が抜刀した。

心底不快な表情を浮かべながらも、巖勝は刀に手をかける。今なら人目もある。このまま侍同士の立ち会いに持っていけば、合法且つまとめて外道を消せると思ったのだ。

「次々と……騒々しい。まとめて相手をしてやろう……」

その光景を一心不乱に見つめる春夏。

「……………」

春夏は目の前の光景が信じられなかった。

なにやら外が騒がしいと思つて顔を出してみれば侍が数人相手とやり合つていた。刀を握るしか脳のない侍だと思つていた。刀を握つても人に向けられない侍だと思つていた。殺気も皆無だった。

根底から覆る。多勢に対して刀を向け、体のこなし方も夫より頭一つ抜けている。否、凌駕している。殺気が皆無なのは常日頃から消しているから。戦闘において、相手に殺気がないのなら此方の勘が効かないのは当たり前。勘は害意や殺気の類を知らせるのだから。この領域に至るまでにどれ程の修練を積んだのか。

よもやすると先程の手合わせ。結果は……

（この国は広いねえ……あんなのがごろごろいるんだろうさ。ますます惜しい。結婚さえしていなければ、恋雪を任せられたのに……っていうかお侍は徹夜じゃないか？）

「……はっ！ ……何してんだいお前たち！ とつと失せな！ 奉行様を呼ぶよ！」  
「ちつ……ババアがきやがった。お前ら帰るぞ！ そいつを担げ！」

……

招かれざる客が帰って数分後、駆け足の草鞋の音が道場に入ってきた。

「今帰ったぞー。春夏ー。湯を沸かしてくんねえか？」

慶蔵が帰ってきたのだ。顔が腫れ物にまみれた少年を抱き抱えて。慶蔵には傷一つなかった。その事に春夏はほつと息をつく。

「もうとつくに沸かしてあるよ。あら、これまた随分な拾い物をしたね。いい体してるじゃないか」

「そうだろう。しかも筋がいい。もう決めた。こいつは俺の弟子にする」

「門下生が増えるね、やつと一人目だけど」

「何言ってるんだ。これからどんどん増えていくんだよ……ああ侍、その地面に刺さった刀抜いといてくれ。質が良ければ質屋に入れるから」

「……承知した」

巖勝は出ていった。程なくして刃先がボロボロになった刀を引つ提げて帰ってくるだろう。不満げだったが仕方ない。

「またアイツらかあ……どうしたものか」

「このご時世だ。侍が一番。拳法なんかより剣術の方が聞こえがいいのさ。私たちが声を上げたつて、誰も味方しちやくれないよ……ねえ、ちよつと」

「ん？」

「あんた。この男刺青があるよ。ひよつとしなくても罪人じゃねえのかこれ」

「困つたなあ。起きた時に暴れられても……と言いたいところだが俺に加えて旦那もいる。しかもこいつは大の大人に対して拳ひとつで立ち向かっていた気持ちのいいやつだ。暴れたりなんてしないさ」

# 参話 素流道場の日常・上 (狛治視点)

俺は鬼子だ。

生まれた時から歯が生えていたし、力も強かった。家は貧しく、親父は病弱。だから俺は看病しながら、親父の薬を買うために盗みを繰り返さなければいけなかった。全く苦じやなかった。親父の為なら罰として滅多打ちにされても、骨を折られても耐えられた。

ある日、家に帰ってくると親父は首を吊って死んでいた。盗んだ金で生きながらえたくない、そう遺書に書いてあった。

自分から死んだその訳が分からず、自暴自棄になって放浪している所をこの道場の主である慶蔵さんに拾われた。今では弟子入りし、師範と呼んでいる。

「ふっ……！」

次に繰り出す攻撃を頭の中で組み立ながら型通りの動きを繰り出す。こうやって体を動かすのは好きだ。睡眠で凝り固まった筋肉が解れて心地いい。さらには朝風が汗

に濡れ、火照った体を透き通るように流れてくれる。

こうして拳を振るうのは嫌いではない。この拳は守るための拳。俺にはこれしかない。だから強くなつて拾つてくれた恩を返す。きつとどこまでも強くなつて、師範に一撃入れれば師範も喜ぶだろう。こんな得体の知れない俺をいつまで置いてくれるかわからないが。

「狛治ー!」

「……」

師範の声が聞こえた。どうやら自主練もここまですらしい。遅れても笑つて許してくれるが、俺は断じて遅れない。必ず駆けつける。何があろうとも。絶対に。

「ふうふう……はあ……」

緩んだ道着の紐を締め直し、気合を入れた。

玄関から聞こえてきたから客人だろう。俺に紹介したいのか? だったら尚のこと無様な姿は見せられない。手頃な布で汗を拭く。客人には敬意を払うものだと思はれた。

敷地内を走つて玄関に顔を出せば、師範の他にもう一人男がいた。紫を基調とした着物だったからすぐに誰かわかった。

「邪魔しているぞ……狛治」

「…………どうも」

巖勝さんだ。相変わらずでけえ。特徴的なのは首筋から頬にかけてと、額からでこに向かつての燃えるような痣。

あの痣は俺の刺青みたいな人為的なものじゃない。生まれつきだとか先天性のものだ。どうやったたらあんな綺麗な痣が出来るのか少し知りたいまでである。無性にもなんだかつかいいいと思つてしまった。

「…………私の顔に…………なにかついているか？」

「い、いえ」

失態だ。凝視しすぎたようだ。そして言葉の合間に入る沈黙も健在。この話し方は最初は全く慣れなかった。しかし今になつてはそれが言葉を選ぶための沈黙だと気がついてからはあまり気になつていない。ただ威圧感はしっかりとある。本人がそれに気づいているのかは分からないが。

「狛治、茶を頼まれてくれねえか」

「わかりました」

俺を呼んだのは茶を用意させるためだったようだ。素直に従う。これはよくある事だ。寧ろ作法を覚えられるという点で勉強にもなるからありがたいことこの上ない。

「失礼します」



とりあえず茶を用意するために一時退室する。

「慶蔵。茶は必要ない。私は恋雪を診たらすぐに帰らせてもらうが」

「相変わらずつれねえなあ。ま、ゆつくりしていつてくれ。うまい酒があるんだ。それにだ日頃の礼だと思つて泊まつてつてくれ」

「だから礼には及ばんと言つている……私はただの藪医者だ」

「まだ夜まで時間があるだろう？」

薄らと会話が聞こえてくる。巖勝さんは師範の恩人であり、恋雪さんの主治医でもある。……本人は藪医者だと言つてているが、冗談だよな？　だが持つてくる薬はどれも効果覲面だ。なのにどこからどうみたって侍。それもかなり位の高い部類だ。とても医者とは思えない。医者なのか藪医者なのか侍なのか。

それほど親しい訳でもないが、どこか親父を思い出させる雰囲気だ。あの人の言動はどこか親父と重なる所がある。

茶を準備し終わった為、玄関に戻る。

「恋雪の調子は……どうだ」

「何も目立ったことはないなあ。強いて言うなら、あまり咳き込まなくなつたくらいか？」

「ほう……喜べ。その調子ならば……十六になる前には完治するだろう」

「だってよ、ごめんな狛治。それまで看病よろしくなあ」

「……いえ、苦に思つてなどいませんで」

巖勝さんに茶を差し出すと巖勝さんは「感謝する」と言つて飲んだ。やはり品がある。本当に失礼を承知だが、師範とは雰囲気が似ても似つかない。この人の所作も勉強になる。

素性は不明だな、恋雪さんを救つてくれたんだつたら善人に変わりはない。無償で他人のために時間や労力を割ける奴は信用出来る。

どうやら恋雪さんはもう数年で完治するらしい。良かった。いよいよもつて俺は用済みになつてきたな。

大人二人が話してるんだつたら俺がここにいる意味はないだろう。

「俺は恋雪さんの様子を見に行つてきますので失礼させて頂きます」

「ああ……あとから私も行こう」

「ありがとうなあ。お前がいてくれてよかつたよ」

「……ありがとうございます」

一礼してこの場を去る。

『いてくれてよかつた』か。

初めて言われた気がする。いや親父に言われたことがあるか？　ここに來てから絆

されすぎた。親父との生活は忘れないがこの生活に慣れた分薄れていくような気さえする。

明日の飯も食えるか分からない状態で病人の看病もしなければいけない生活から、衣食住がすっかりした病人の看病もしなければいけない生活に変わったんだ。仕方の無いことなのだろう。

だが俺は薄情だ。ここで暮らしている時間が長くなるにつれて親父の記憶が薄れていつているのだから。こんなの人として間違っている。おかしい。

「……」

立ち止まる。無性に親父の仏壇に手を合わせたくなつた。恋雪さんの部屋に行く途中に仏間があり、そこに行けば親父がいる。親父の遺灰を師範は仏壇に置いてくれている。かなり気を使ってくれた。本当に感謝してもきれない。

仏間で膝を着いて正座をし、手を合わせて黙祷した。……こんな柄じゃないが今日くらいはいいだろう。

「親父。見ているか？ 俺は今幸せだ。だからこれからも見ていてくれ。俺は親父が生きるはずだった分までしっかりと生きるから」

ああそうだ。俺は今幸せだ。これ以上望むのは分相応だろう。



「え？」

「何度も言っています、俺は全く嫌じゃありません。恋雪さんが謝るようなことはなにひとつありません」

「だ、だって私は狛治さん達の時間を奪っています。私が自分の体調すら整えられないせいでみんなに迷惑を……」

違う。もつと欲張れ。そうだ。俺は恋雪さんを親父の二の舞にはさせたくないんだ。

親父は多分、俺を産んだことを後悔しながら死んでいった。育て方を間違えた自分が悪いとも思っていたんだろう。

だが俺はこの生き方を選んだことに後悔はない。親父の為なら薬だっていくらでも盗め、捕まって骨を折られようが肉を裂かれようが親父の為ならいくらでも耐えられた。

だから恋雪さんは後悔や自責の念に押し潰されて欲しくない。自分は生きていていつて気がついて欲しい。俺は大丈夫なんだ。辛いのはいつも親父や恋雪さんのような病人で、誰にもどうすることもできず身の置き場がないほど苦しいだろうから。

「違います。もう一度言いますが、恋雪さんは何もわるくないんです。こう見えて、俺も恋雪さんに救われているんですよ」

恋雪さんは目を丸くした。少し驚いてしまった。何せ初めてみる表情だ。少し気後

れたのを誤魔化すために薬の準備をしながら話すことにした。

「え……私に……？ 狛治さんがですか？」

「は、はい。恋雪さんを看病しているこの時間は、俺に父を看病していた時を思い出させるのです」

「そうなんですか」

「ええ。だから看病には慣れていきます。……父は完治して俺は武者修行として送り出されました。父は恋雪さんと似たような病気でした。だから恋雪さんもきつと治りますよ」

「……」

仏間の遺灰に恋雪さんは気がついていないし、気づくこともないだろう。下手に不安を抱かせるようなまねはしない。親父のことはこのまま誤魔化しておこう。

恋雪さんはさっきの暗い雰囲気や嘘のようにはあつと花が開いたような笑みを浮かべている。自分が一人の女性を笑わせたという事実がむず痒い。

「もう一度言いますが、何があろうと恋雪さんはわるくないです。もつと俺をこき使ってくださいいいですよ」

「こき使うだなんてそんな」

「私は小柄ですが力はありますので、『私をおぶって何処へでも』とかでも構いません」

「ど、何処へでも……」

……少し変な言い方になってしまったか？ 何か恥ずかしくなって照れ笑いをしてしまった。くそ。恥ずかしいな。

目を逸らして頬を搔いていると、恋雪さんがぼおつとこちらを見ていた。その後逡巡する様子を見せた。

「あー……恋雪さん？」

「……狛治さん」

「はい、なんでしよう」

「私……その……花火を見てみたくて……」

「え？」

「私！ 花火を見てみたいんですっ！！」

……

.....

呆気にとられてしまった。

「花火……ですか」

「はい」

確かに近くでは毎年のように花火大会が開催されている。当日の夜、河川敷は団扇を持った浴衣姿の人で溢れかえる。この家からは遠すぎて見えない。せいぜい音が聞こえるくらいだ。俺は興味がなかったから態々見に行ったことがない。

それくらいお易い御用だ。

「分かりました。但し約束してください」

「約束？」

「はい。約束です。絶対に一人で行こうとしないでください」

「は、狛治さん……!? 手を握つ……!」

大事な人が危険な時に俺はいつも居ない。認めよう。俺は怖いんだ。また無力な犬



だと証明されてしまうのが怖い。それは恋雪さんでもだ。恋雪さんになにかあってからは遅いんだ。病気からは春夏さんと巖勝さんが守る。暴力や理不尽からは師範と俺で守る。

「お願いします恋雪さん。約束してください」

「分かりました。約束しますからっ！ 手を離してください！ 手汗が！」

さてどうするか。花火大会までまだ半年はある。治りかけとは言え、体の弱い恋雪さんは俺がおぶっていくとして、その場合俺の両手は使えなくなってしまうのだ。何かあった場合、恋雪さんを連れて逃げなければならない。戦うという選択肢もあるが、どんな場合でも不利な時は逃げるのが一番正解だ。守りながら戦うのはやはり悪手ではない。だが逃げ切れるのか？

……師範に手伝ってもらおう。いや待て。師範も春夏さんと行きたいはずだ。師範は春夏さんを守らなければならない。師範程の強者でも二人分を守りながら戦うのはしんどい。

だとすると――

「狛治さんっ!!!」

「!?…………手を…………も、申し訳ありません!」

いつの間にか恋雪さんの手を握っていたらしい。上がった体温が急激に下がっていくのを感じる。最低だ。最悪だ。しかも手汗とか言われた。絶対不快だっただろう。

「私としたことが……………どんな罰も受け入れます……………」

「私は大丈夫ですから! 手汗というのも違うんですよ!? 粕治さんでは……………な……………く……………すいませ……………あ、また謝って」

「……………」

「……………」

「……………失礼します」

「……………はい……………ありがとうございます……………」

---

その後のことはよく覚えていない。

着替えなどを持った春夏さんがちょうどよく入ってきて入れ替わるようにして俺は恋雪さんの部屋を出た。俺と恋雪さんの気まづい雰囲気を感じた春夏さんが揶揄う様な表情を浮かべていたことが少し気がかかりではある。

「……」

そんなことを考えながら呆然としたままフラフラと廊下を歩いていった。たつたひとつ分かることは恋雪さんから嫌われたであろうこと。関わってきた人が少なすぎて今まで嫌われることなんてなかったが、明確に誰かから嫌われるというのはここまで辛いものなのか。

「……………」

まだじんわりと恋雪さんの手の感触が残っている気がする。熱が出ていないとはいえ病人だから手は温かいだろう思っていたが、実際はひんやりと冷たかった。

握って開いて試してみる。そして自分の両手で握手するように動かしてみる。

「……………って……………何してんだ俺」

なんだかんだしてしまったことはどうしようもない。何回でも頭を下げれば許してくれるだろう。だが一人に嫌われただけと言うのは何故かひどく心が痛い。出来れば仲は改善しておきたい。花火大会におぶつていく時、気まずい雰囲気は作りたくないからだ。

「師範に聞くと……………笑われそうだな。春夏さんは……………そんな気にすることないって言われそうだ」

というか師範夫婦はかなり豪快だ。過ぎたことは忘れるし、気になったことはこちら

が答えるまで質問してくる。恋雪さんは繊細なのだ。

あの夫婦にはこうしたことは専門外だろう。だとすると……

「巖勝さん……まだ師範と話しているから恋雪の容態を見た後にでも話しかけてみるか。花火の護衛も頼んでみよう」

## 肆話 素流道場の日常・下 (狛治視点)

「きゃつと」

恋雪さんは春夏さんが見てくれているので、用済みになった俺は師範と巖勝さんの様子を見に行くことにした。朝二人と話してから、もう日が登りきるといふのに姿を見せないのは、酒好きな師範のことだから飲んでいられるだろう。

あの医者兼侍が恋雪さんの様子を見に来たという目的を見失っていないか不安だ。恐らくだが師範に言い寄られて二人揃って飲んでいられるだろう。

(医者がゆつくり出来るほど恋雪さんの容態が良くなつていつていっているということではないんだな……? そう思いた……)

「む……狛治か」

「うえつ……!？」

廊下の角を曲がってきた巖勝さんとかち合った。

なんで気配がないんだよ。いざ真正面に立つてみると威厳はある。まるで植物みた

いな男だ。

驚きすぎて蛙が潰されたみたいな声を出してしまった。恋雪さんの部屋まで聞こえていたら恥ずかしい。

「……………今春夏さんが恋雪さんの様子を見ておりますので、しばしお待ち下されば……………師範は？」

「酔って草臥れている……………頑丈な奴のことだ。直ぐに回復するだろう」

「ありがとうございます」

「礼には及ばん。勿論……………私は飲んでいない。酔おうにも酔えぬ体質故な、酒が無駄になろう」

「え？ ……あ、はい」

なんだそれは。というか師範は相変わらず気ままだ。春夏さんに怒られるまでがいつもの流れ。客人がいる分そこまで怒りはしないでだろうが俺にまで飛び火したら面倒だな。

「天気がいい……………しばしここで風に吹かれるとしよう」

「……………」

「……………ここですか……………しかも曇り空だが？ この人にとってのいい天気とは曇り空のことな

のか？

……

……

………気まずい。

というかなんだこの構図。

縁側の廊下に男二人。行儀よく揃って座っている。

まだ寒いこの時期だ。俺は兎も角、客人なら空いた部屋にでも招いて暖を取らせるのが正解だろう。正解なのだが……全く寒そうにしてないならいいか。女なら兎も角男だし大丈夫だろ。さすがにほおっておくわけにはいかないから俺が見ていないといけない。

一瞬だけ目を向けたが、こいつは庭を凝視しながら眉一つ動かさないでいる。どういう感情の顔なんだ。黙想でもしているのか？

「……狛治、また私の顔になにかついているのか？」

「は……いえ！ なんでもありません」

「そうか……ならばよい」

また沈黙。このやり取りさつきもしたぞ。

待てよ。

俺は師範としか手合わせしたことがない。だから師範に合った立ち回りや技だけが伸びている。このままでは駄目だ。悪い癖がついてしまう。だが目の前には師範以外の猛者がいる。絶好の機会だ。俺は今暇だし、確実にこの侍も暇だ。

この侍の強さも見てみたいしな。

「巖勝さん」

「なんだ」

「無礼を承知でお願いしたいのですが、俺と手合わせしてくれませんか？」

「……手合わせか」

ああ、これだ。初めて会った時もされた。毎回会った時にされるこれ。

肌が泡立つようなこの感覚。



見られている。ただそれだけなのに慣れない。

漆黒に染め上げられていて、どこか赫色を想起させる眼光が俺を塗り潰そうとしてくる。心の奥底まで見透かされているような目。

だが怖気付いてはいられない。

腰帯をきつく締め、身体中の力を入れる。昂らせるは心。見せつけるは戦うという意思。

“闘気”を見せる!!!

「手加減不要です!」

「ほう……………いいだろう」

どうやらお眼鏡にはかなったらしい。

庭に出て向かい合う。広い庭だからかなり動けそうだ。

巖勝さんは腰に差した刀を丁寧縁側に置いて、どこからともなく取り出した木刀を腰に差した。

準備万端。

「参ります」

「来い」

まずは正面から殴る。様子見したところで付け入る隙なんてない。だからこそその正面突破。拳に込めた力は最低限。その代わりに足腰に力を入れ、出方を伺う。

「ふっ……っ……」

だが、俺の拳は侍の着物を打って止まった。滑らかな感触が肌を打つ。

本体じゃない。着物が異常に硬いんじゃない。ほんの僅かだけ届いていないんだ。完全に見切られた。

「……ちっ」

伸びきった俺の腕、伸びきればそこに破壊力は皆無。無理やり体全体を動かしてさらに伸ばそうとすれば体幹が崩れてしまう。

幸いにも入れた力は最小限。簡単に拳を引き戻せる。拳を引き戻しつつ、続け様にもう片方の拳を打ち出す。次は真っ直ぐではなく、横から相手の側面を叩くようにして振り切る。

これも避けられる。

……が、本命は拳じゃない。足だ。

二回目の拳を左から右に振り切った時に生じた回転。それを活かした右足での後ろ回し蹴り。

ガコン!!

音が鈍い。

見れば奴はいつの間にか抜刀し木刀で防いでいた。

「刀を使わなくても勝てると思っただか!!」

「ああ、非礼を詫びよう……少々侮っていたようだ。今度は此方から往くぞ」

木刀がうねりを伴って袈裟懸けに振り下ろされてくる。まだいける。余裕を持って避けられた。

突き。逆袈裟。真一文字。

半身で避ける。拳で流す。飛び込んで躲す。

止まない斬撃の嵐。だとしても刀にさえ注視していればどうってことない。側面に拳を軽く当てただけで刀の軌道は簡単に逸れる。

「慣れてるな」

「……」

「ならば下からならどうだ」

「は」

一瞬見失う。あいつの声が自分の下から聞こえる。

何が起こったのかなど単純明快だ。

こいつ、潜り込みやがった!? 圧倒的に体格差で劣る相手に対して下を選ぶのか!?  
しゃがむなんてもんじゃない。地面すら舐めることが出来る程に体勢を変え、股の下を  
潜ったんだ。どういう思考回路してやがる。

目で追おうにもはらりと浮いた赤交じりの黒髪が一瞬見えただけ。完全に虚をつか  
れたから何をされるか分からない。

直後、浮遊感。

手加減不要と言っておきながら手加減された。下からなら足を叩きおるなり股を切  
るなり致命傷をいくらかでも与えられた。だと言うのに投げるだけ。

いや——投げるだけじゃない。

「……さて」

クソが。着地地点に堂々と待ち構えてやがる。空中だから回避は不可能。精々体勢を治す程度。

こうなつたらどうしようもない。着地隙を狩られるか、空中で叩き落とされるかの二択だ。攻撃を受けることが確定している以上……

防御を捨てる……!!

「しゃらくせえええええ!!」

「いい判断だ」

俺は全体重を乗せたまま指を組んで両手を合わせ、体を大槌に見立てた一撃を繰り出した。

「……」

メリメリメリ!!

木刀で正直に受けやがった。馬鹿が、木刀如きで受け止められるかよ！　もう罅が入ってやがる。こいつをぶち抜けば顔面に俺の拳が直言するぜ！

直後、また浮遊感。

「あ？」

あっさりと木刀を手放した。わかったのはそれだけだし、こいつがしたのもそれだけなんだろう。だとしても思い切りが過ぎる。

支えを失った俺の体はひどいもんだった。

大胆に隙を晒した俺をこいつが追撃するまでもない。最後の一撃に全てを賭けたせいで俺の体勢は粗末も粗末。受け身を取るので精一杯。反動で筋肉も幾つかちぎれた。

「……………はあ！　……………はあっ……………はあ……………くそっ……………」

「慶蔵と動きが酷似している……………同じ人間と戦い続けた故にな。刀ばかりに気を取られていては虚を突かれる」

腹の立つ構図だ。

此奴は俺の横で天に聳え、対して俺は地を舐めている。

強者と弱者。

大柄と小柄

刀と拳。

侍と罪人。

俺が駆けつけられなかった親父の危篤にも、こいつなら駆けつけるんだろう。

まるで正反對。

決して楽観視していたわけではなかったが、ここまで差があるのか。

逆に此奴は何を持ちえない。息も切らしていないし、一撃すら入れられなかった。弱いやつからこうやって死んでいく。こんなんじゃないやまた失う。誰も守れないまま終わってしまう。

まだ足りない。もっと強くなりたい。こんなのが敵対されたとしても守りたいものを守りきれぬくらいに。

思い出す。

家に帰る。人集り。泣く人。諦観する人。近づく。肩に手を置かれる。同情されて

いる。何故かと聞く。家の中を見る。父親がいる。首に縄を巻いて吊られている。何かが壊れる。疑問が次から次へと浮かんで消える。駄目だ。

負けては駄目だ。また失つてしまう。こいつが恋雪さんを殺そうとしたらどうする。親父が大事な時に俺はいなかった。俺が居れば止めてれたかもしれない。

だが俺がいたとしても、こいつが恋雪さんを殺そうとすれば俺に止められるのか？

「重心は命と同等……相手の視界も重要だ。死角を探し……そこに決定打を繰り出すかよ。

さて……やめにするか」

「やめ？」

類稀なる強者との戦いは、自分をさらに上へと押し上げてくれる。

こんな闘いは久しぶりだ。師範に初めて会った時は一発でやられたから違う。

俺がまだ六つの頃、近所のガキ大将に売られた喧嘩を買った時と同じ。相手の一挙一動に視覚を研ぎ澄ませ、

血の混じった汗と唾液に噎せ返りながら、

自分の心音しか聞こえなくて使い物にならなくなった耳を捨て、



骨が見える程に磨り減った拳。その痛みを忘れるくらい人を殴ることに集中していたあの日。

自分が他の人間よりも強いことを理解したあの日と同じ。

体温も闘気も最高潮。この感覚だ。苦しきも、息苦しきもぶつちぎった。その先にあ  
る、頭が澄み切った感覚。

「……」

此奴も地味に高揚してやがる。微妙に口角が上がっているなあ。やつぱり礼儀なんだの綺麗好きな侍じゃなくて、確実に戦場にその身を置いてきたんだ。

これはいい。

全身の力で食らいつけ。俺は諦めの悪い男だ。

笑う膝を叩いて直し、立ち上がる。そうやって笑って見せれば、あっちも笑みを深くした。ははっ。随分と余裕そうだなあ！

「まだまだこれからだあ!!」

「……面白い」

「なんだ？ いつもより技のキレがいいなあ」

「ちよつと刺激をうけましたのでっ！」

翌日の稽古。

疲れなんて一日寝れば全部吹っ飛ぶ。昨日ちぎれた筋肉も元通りだ。

あの人との模擬戦闘が終わったあと、早く拳を振りたい一心だった。寝る前も起きた後もずっとだ。ここに来る前は毎日のように拳を振っていた。衣食住が与えられたからといって怠けていては世界の速さに追いつけない。あの人みたいな天才に追い抜かれる。

「……………ふっ……………」

地に顔を近づけたくないだなんて安っぽい誇りは捨ててしまえ。折角身軽なんだ。手を地面につけて全身を捻れ。下段も下段。剣術に大上段があるなら、大下段だ。初見で下段を見切れる筈はない。

「おっ？」

手だけで体を支え、より柔軟な蹴りを生み出す。

体を丸め、溜めをつくる。そして師範の顎を狙った大下段から直上への脚撃。蹴り上げた足は受け流されたが、意表はつけたようだ。師範の顔が驚きで染まっているし、何よりも今の受け流しは手加減されていなかった。師範が本気で止めるに値したのだ。

動きに見合った最適解を繰り出して隙を作り、攻める時は苛烈に攻める。守るための拳も、大切な人を守るためなら殺すための拳になる。

「ああ、あの侍に教えてもらったのか？ よく奪ったなあ」

掌底を放てば綺麗に躲されて捻りあげられる。その回転を活かして師範の肩を蹴って抜け出し、空中からかかと落としを繰り出すも、難なく受け止められる。

「今のはいい判断だ。だが俺が受け止めていなければ道場の床が抜けていた威力だなあ。単純な力も上がっているなあ」

「やはりっ！ 強者との戦いは自分を数段上へと伸ばしてくれるっ！ ……なので！」

「はっはっは。いいやつだろう。侍がみんなあいつみたいに気持ちのいいやつばかりだったら良かったんだけどなあ」

「得体の知れない点は置いておいてっ！ ……剣道場の奴らよりはマシです!!」

じれったい。正当な理由さえあれば俺が奴らの道場を叩き潰すというのに。あの人

みたいに強者ばかりじゃないだろう。だったら俺でも勝てる。

「得体の知れないときたかあ。それは仕方ないぞ、あいつは鬼だからな」

「……は」

空いた思考。遠慮なく拳が顔面を捉える。全く痛くない。多分手加減された。手加減されてばかりだな俺は。

いやいや、そんなことは今はどうでもいい。今師範、鬼って言わなかったか？ 鬼つてあれか二本角が生えていて、金棒を振り回して、虎の毛皮を腰巻にして、赤い体をしているあの鬼か？ あの侍が鬼だと？

俺は鬼子だなんて呼ばれていたからあれだが、あの人も鬼子ということなのか？

「この程度で動揺しているんじゃないや、狛治もまだまだだなあ。言つた俺が言うのもなんだが、このことは言わないでくれよ。俺が旦那に怒られちまう。あまりに狛治の動きが良くなっているから嬉しくてつい口が滑ちちまった」

「じゃあなんで言つた……。だが間が悪いように頭をがしがしと掻いているということは嘘じゃない……。のか……。？ からかわれているわけでもないし……」

「鬼つて……。なんでしようか」

「おっと、知らなかつたか」

「知らないわけではありません。耳にしたことはあります。しかしあれは架空の存在では？」

「いんや。鬼はこの世に存在する。神様や、仏様だつている。

鳥居に腰かけるお稲荷さん。

動く狛犬。

手水舎を泳ぐ龍神とかな。

もつとも、今の時代になつて数そのものはへつたらしいがなあ。

俺も最初は信じられなかつたが、あいつの嫁さんを見て、ああ、人間じゃないのかあ……つて思えるようになったなあ」

そういつてガハハと豪快に笑う師範だが、俺はまだ理解しきれていない。誰だつてそうじゃないか？ ある日突然『お前の知っているあの人は人間じゃない』なんて言われて、はいそうですかなんてならないだろう。というか結婚していたのか。相手も鬼らしいな。

きつと嫁こそ化け物みたいな顔してるんだろう。

「……鬼だということは、何か悪事を働いたりするのでしょうか。人を攫つたりとかするのですか？」

「人にも悪い人や良い人がいるだろう？ 鬼にも良い鬼、悪い鬼がいるんだ。旦那はそうじゃないって言いきれぬ」

「……………あー……………だとすればあの強さも納得がいきます」

「ははっ。まだ信じていないなあ。まあそのうち分かるさ。あと旦那は鬼だから強いんじゃない。強いから鬼なんだ」

意味がわからない。俺が馬鹿だから理解出来ていないのか？ 稽古の疲れも全部吹っ飛んでしまった。俺はどういう反応をすればいいんだ。あの人に来てからここ数日が濃すぎる。もうたくさんだ。

「……とりあえず俺には一生かかっても勝てそうにないってことだけはわかりました」

「どこにだつて上には上がいるもんだ。身体能力を強さでくくるんじゃないで、それ

外の面で勝てればいいんだ。狛治が旦那に勝っている所なんて探せばいくらでもあるぞっ。」

「……」

「少し休憩にしよう。戻っていつもの薬を恋雪に持って行ってくれ。頼んだぞ狛治」  
「……わかりました」

ギシギシと音を立てる廊下を歩く。

わからない。鬼云々の話は一先ず置いておく。考えたところでどうしようもないことは考えないようにしている。

強さとは身体能力だけの話じゃないか？

強さとは暴力だ。それ以外の何物でもない。

いくら気が強くて口が上手くても体が弱ければ意味が無い。そういったやつを沢山見てきた。理屈や御託を並べた所で、それが通るのは奉行所だけ。強ければ生き、弱ければ死ぬだけだ。

『……………(めんなさい……………(めんなさい』

「……………」

恋雪さんの言葉が頭を過る。

彼女は弱者だ。だから強者である俺達が守らなければならぬ。気がかりなのはあの剣道場の奴らだ。恋雪さんを見るあいっらの目はどうしても好きになれない。あの目は蔑む目だ。醜いものは自分が好きに弄んでいいとそう信じて疑わない目。病弱の親父をないがしろにした隣近所の屑どもを思い出す。

そうこう考えている間に恋雪さんの部屋の前についた。怒気を孕んだ声になりそうだったので邪念を振り払い、部屋の外で正座をして服装を正す。

「恋雪さん。狛治です。昼食を届けに来ました」

……

例えばの話だが、恋雪さんが治ったら俺は出ていかなければならないのか？ そうだとしたらそれはいつだろう。それでもきつと、師範達は俺がここにすることを許してく



れるはずだ。

「恋雪さん？」

……おかしい。いつもなら髪入れずに許可が出る。声がか細くて聞こえなかったか？ 寝ていて返事ができないのなら説明はつく。説明はつくのだ。

だというのに何だこの感じは。横隔膜が痙攣して苦しい。いや大丈夫だ。この障子を開ければいつもみたいに恋雪さんがいて……

「恋雪さん？ ……狛治です。入りますよ……」

いない。どうしてだ。

顔から血が引いていくのを感じる。

「っ……恋雪さん!？」

いない。

落ち着け。

大丈夫だ。

散乱した布団や枕。一人でどこかへ行ったのか？ いや、雪の結晶の髪飾りが置きっぱなしだ。いつも身につけているはずなのに。それに良くなってきたとはいえど、恋雪さんは一人で出歩けない。髪飾りは拾ってみると春夏さんのよりも小さかった。部屋

の外には雪が降っている。恋雪さんも春や夏は庭先で歩けるぐらいには良くなったが、冬は別だ。俺と師範は今の今まで稽古をしていた。あの人は市場に出かけた。春夏さんはあの人とは別の場所で購入物だ。恋雪さんは良くなっていたから声を出せばすぐ近くの道場にいる俺たちまで届いたはずだ。だがこえをだせなかった。

連れ出されたのだ。

誰に？

決まっている。剣道場の奴らだ。あいづらならやりかねないとは思っていたがまさかここまでするとは。俺と師範が稽古している間に侵入されたのだ。くそっ……！！あの侍は街に出ているし、春夏さんは買い物だ。完全にしてやられた。

また失うのか？

「違う」

また俺のいない所で大切な人が死ぬのか？

「違う!!」

必ず……駆けつける。何がなんでも。

## 伍話 我儘 (恋雪視点)

「……ふう、これでよしつと。次は何をしましょうか」

臥せることも稀になった私、素山恋雪は今自分の足で歩けています。これも全て家族と、あのお侍様の薬のおかげです。感謝してもしきれません。

すこしでも恩を返したい。けれど私にあるのはこの不自由極まりない体のみです。ふらつとどこかへ行ってしまうお医者も兎も角、せめても家事のひとつくらいしようとするばみんなして私を止めてしまいます。

何回もお願いすれば渋々家事の手伝いを了承してくれました。簡単なものだけですけど。

これもそのひとつ。洗濯物干しです。やはり家事はいいものです。家族の一員として役に立っている実感があります。

そして今しがた干した道着達の前を通れば、  
ふわり。

そうして香ってくるのは狛治さんの香り。

「これは……狛治さんの道着……」

周りを見る。誰もいない。

心臓の音がうるさい。きつとこれは病気のせい。

病気のせいだったら仕方ないです。少しくらいなら……

「つ……だめです私。こんなはしたないこと……」

「あ、恋雪さん」

「ひゃあっ!? ご、ごめんさい!」

「なぜ謝るのです?」

縁側を歩いている狛治さんに見られてしまいましたでしょうか。いいえ大丈夫だと思えます。布団で顔は隠れていたのですから。

しかしどうしましょう。最近変です。この胸の高鳴りをお医者様にお話した方がよろしいのでしょうか。

次の仕事を探そうと思ったたら、大方母様がしてくださっていました。なので掃除でもしようかと思いましたが、父様と狛治さんに止められました。なので自室で横になります。すると疲れがどつと出てきたので驚きました。暫く立てそうにありません。父様達は分かって休むように言ってくれたのでしょうか。

だとするとすごいです。

体を動かさなくなれば、代わりに頭が冴えてきます。

この時間が嫌い。浮かんだ不安が私を憂鬱にさせるからです。

「はあ……私の体が弱くなければ……」

きつと母様と一緒に買い出しに行けるのでしよう。

きつと父様と一緒に道場で汗を流せるのでしよう。

そして、狛治さんは私を看病することも無くなつて自由になるのでしよう。

私の病気は回復傾向にあるとそうお医者には仰っていました。数年前とは比べ物にならないくらい体を動かせている自覚もあります。

それ自体はとても嬉しいのです。しかし看病の必要がなければ狛治さんは出ていってしまうのでしょうか。狛治さんの実力は父様の折り紙付きです。ここに来る前ですら一人で十分暮らしていけたらしいでしょうに、親切心故ここに留まつてくださっているのでしょうか。

「いつその事、仮病……突然悪化したというのはどうでしょう……なんて、私は誰に言ってるんでしょね。……あら？」

ふと横を見ると曇り空ながらも、微かな日光が障子の向こうに人影が映っておりま  
す。何方かいらつしやる様子。狛治さん……ではありませんね。あの方は開ける時、律  
儀に正座をしてくださいますし、一言ことわってくださいます。

だとすると父様、母様。若しくはお医者様の筈ですが……反応がありません。何か息  
遣いも荒いです。

「……………」  
「……………」  
「……………」

すうつと微かな音をたてて襖が開かれると、私の予想した方たちでは無い人がいまし  
た。

「恋雪、迎えに来たぞ」

「え？」

それも一人じゃありません。何人かいらつしやいます。……なんでしょう。一番前  
に立っている人の顔を見ると怖気が走ります。目がぎらついて、とてもではありません  
が狂気を孕んでいます。

怖い。

怖いです。

「む、迎え？ ……なんの迎えでしょうか。そのような話は聞いておりま……」



「早く行くぞ。見つかったら厄介だ」

思い出しました。この人はあの剣道場の息子さんです。お仲間を数人連れて来たようです。『迎えに来た』とはなんなのでしょうか。迎えもなにも私は何も頼んでいないのですが。

本当に怖いです。身の危険を感じます。

「え? ……きやつ!?!」

「焦れつたい。早く行くと言っている」

ああ、私はこれからどうなるのでしょうか。これも自分勝手にあの人の自由を奪おうと考えた私への罰なのでしょうか。

体が熱い。足が覚束無いのに、無理やり歩かされ……熱い。私は足を動かせているのでしょうか。結び上げていた髪も、見苦しい程に振りみだしています。みつともないです。

「恋雪、良くなつたんじゃないのか? もう少し早く歩いてくれると……その……俺は嬉しい」

「おねがいですから。家に……帰して……ください……いい」

「大丈夫。剣道場はすぐそこだ。落ち着いたら二人でこれからの話をするんだ。もうあんな薄汚れた道場に帰らなくてもいい。おい手伝ってやれ」

全く話を通じません。

横から腕をより強く掴まれます。歩く速さがさらに上がりました。体が揺れて気分が一気に急降下する。吐き気が込み上げてきました。何かを考えることよりも、早くこの吐き気を止めることに意識が向いてしまう。

なんで？ 狛治さんに抱えられた時はこんなに体が強ばらなかつたのに。

「恋雪の腕以外に触れたら斬り捨てるからな」

「は、はい」

「離して……くれませんか？」

「恋雪が遅すぎるんだよ……ああ、すまなかつた。配慮が欠けていたな。おぶつて欲しいのならそういえばいいのに。ほら抱えてあげ」

「放し……てっ！」

「……………はっ。」

今の私に出来る精一杯で抵抗した。ああダメです。今ので余計に気分が悪くなりました。頭が痛い。息ができない。喉の奥で鉛が暴れているようです。

「おい。人が優しくしてれば離して『離して』だど？ 調子に乗……………恋雪…………？」

「はあ……はあ……」

「おいお前、どういうことだ！ 病気はなおった、そう言っていただろう!？」

「違つ……！ 俺は見たんです、家で元氣そうに洗濯をしていた所を！ まさかまだ治つてないだなんて思いません!？」

「ど、どうしよう……!?! ひよつとして……このまま死ぬんじやあないですか!?!」

「つ!?! ……か、帰る……ぞ」

「え、いやでも」

「帰るといつている!!」

分からない。分からない。分からない。地面が冷たい。私は死ぬのですか。こんなに簡単に死ぬのでしょうか。

人の気配が遠のくのを感じます。助けを呼びに行つてくれたのでしょうか。まさか。きつと逃げたのでしょうか。なんて薄情な人。

「恋雪さん!？」

幻聴すら聞こえてきてしまいました。

「恋雪さん!!」

ですが嬉しいです。最後に狛治さんの声が聞けてよかったです。

「恋雪さん!!!!」

「え……は……く……さん?」

「そうです。俺です。大丈夫です。楽になりますから飲んでください。薬です」

「ん……」

ひんやりとした感触とほろ苦い味が今は心地いい。のどのいがいがが薄れて楽になつてきました。でもまだ熱い。

なぜ狛治さんがここにいるのでしょうか。

「……その刺青。お前、あの道場にいる江戸流れの罪人だな。お前には関係ない。即刻去れ。……おい。聞いているのか。何を飲ませている。俺の質問に応えろ、罪人風情が!」

「……」

「っ! ……いい加減に」

「お前は……今逃げようとしただろう。苦しむ恋雪さんを置いて」

狛治さんの底冷えるような声が怖く感じます。しかし、私を支える手はとても優しく触れていてくれています。私のために怒ってくださっているのでしょう。今はそうやって怒ってくれるのがとても嬉しいです。

「な、何度も言わせるな！ お前には関係ないことだ。

それに恋雪の病は治ったはずだぞ、今の今までこうして歩いていただろう？ ……そうかわかったぞ仮病だ。そうしかない。恋雪を返してもらおう」

「断る」

「つ……罪人の癖して生意気な」

「知ってるか？ 拳じゃ刀に勝てねえんだよ！」

「そうだ。拳じゃ刀に勝てない。だがあの人に比べたらお前らごとき敵じゃない。向かってくるなら容赦はしない」

抜刀が彼らの答えでした。

あれで人は殺せる。簡単に。狛治さんが死んでしまう。一対一なら分かりませんが、相手は複数。多方向から斬られれば危ないです。

「刃傷沙汰になれば、大事になりますよ！」

「師範もこの道場は喉から出るほど欲しい。多少弟子を痛めつけた所で何もしてこない。恋雪を取り返して……………ぐぼはあ!？」

一撃。

いつの間にか肉薄していた狛治さんが剣道場の息子さんのお腹に一発。他の皆様にも何か一撃を入れて昏倒させてしまわれました。

私の目には最初の一撃しか捉えることができませんでした。それはあの方達も同じだったのでしょうか。倒れてしまわれました。

なんでしょう。なにか込み上げてくるものが。

「はあ……………はああ……………」

思わず口に手をあてれば、熱の籠った息が漏れ出てきました。

叫ぶ有象無象は視界に入らない。これはただの発作。そうでなきやこの胸の高鳴りを説明出来ません。薬で軽くなったのにまた再燃してきました。

玉のような汗も、刺青の入った双腕も、凛々しい横顔も、猛々しい風格も、包まれるような温かさも。全てが輝いて見える。

「帰りましょう。恋雪さん。俺たちの家に」

そう言うのと狛治さんはしゃがんでくれます。背中に乗れということなのでしょう。

ああ、どうかお願いだから、やめて欲しい。私ごときに構わないでほしい。分相応でしょう。こんなに強くて優しい人が私みたいな死に損ないに振り回されるなんて。

別の誰かの方が……いえ、なるほど。合点が行きました。狛治さんは誰にだって親切をするのですね。私はその中の1人でしかないのでしょうか。

嫌。嫌。嫌。嫌。嫌。

あれ？

「恋雪さん？ ……今なにか」

「なんでもないです」

「でも」

「なんでも……ないんです」

強くなりたいです。強くなればきつと……

★

屋根の上に鬼二人。雪と犬を見ていた。

明星を束ねたような髪と、鮮血に染め上げた瞳を持つ鬼。

腰まで届く黒髪をたなびかせ、六つ目で睥睨している鬼。

女の鬼の方は真つ赤な蛇の目を差している。

「……荒療治だね」

「我ながらそう思う。だが無惨が来る前に二人の仲を伸展させておきたい。危険が伴おうともな」

「だから道場に忍び込んできた彼奴らを見逃したんだね」

「それにしても、あれで婚約者同士じゃないって本当かわいい。二人とも自分が想い想われていることに気がついていないなんて」

女が妖艶に笑う。ありとあらゆる男を傀儡にさせるその笑みには獰猛さと幸福が入



り交じっていた。血腥く、それでいて自然な笑み。

女は怒っていた。恋雪を置いて逃げ出そうとした時、滅却せしめようとした程に。鬼は人よりも人並みの感情を持っていた。

「狛治の方は気づきかけている。恋雪を後押しして狛治に気づかせてやればいいか」「うーん。どっちかと言えば女の子の方が気づきかけてると思うけどね。」

それで、本当に彼は仲間になつてくれるの？ ああいうのは倒せるけど殺せない類の生き物だよ。攻撃は当たるのに斬つても潰しても起き上がってくるようなね」

「なる。なるにはなるが本来なら彼奴を鬼にするのは無惨だ。それは避けたい」「それで私つてことね」

「できそうか？」

「私に任せてよ。これで二人目だから。ついでに二人もくつつけちゃう。あ、女の子の方も鬼にするからね。だとすると三人目かあ」

そう意気込む女の鬼に、男の鬼は不安な顔をした。

★

結果のみ言いますと、今後ともあの剣道場と私達の道場は不可侵になつたらしいです。次の日にそれが決まったのですから早いものです。父様が狛治さんを連れて交渉？ してきたらしく、私は母様に看病されていただけで詳しいことはわかりませ

ん。

私ももうあの人達とは関わりたくありません。

「花火大会？ もうそんな時期かあ」

私の体調が回復してきたこともあり、先日からまたいつものように家族で食卓を囲むことができています。

話題は自然と差し迫ってきた花火大会になりました。今が好機です。何とかして父様と母様に狛治さんと花火大会に行く許可をもらわねばなりません。

「そうだよ。今年もやるらしいね。いつも通り、屋根の上に登るなりなんなりしてみればいいさ」

「うーん。恋雪の容態も安定してきた。狛治、連れて行ってやってくれないか？」

まあ！ 父様が言うてくださいました。しかも賛成の様子。

「勿論です」

狛治さんはそう言ってくれましたが、今になって反対でしたらどうしようかと答えを聞くまで安心できませんでした。

どうです母様。二対一ですよ？

「あんだ。恋雪は攫われたばかりなんだよ!？」

「旦那に手伝ってもらおう。あいつの強さならお前も認めてるだろう？」

「あ、俺も巖勝さんに頼もうと思っていました」

「狛治まで……恋雪は」

「行きたいです！」

「春夏。三対一だぞ？」

「勝負なんてしてないよ。はあ………うん。私も行くからね恋雪。数年ぶりに家族総出でお出掛けだ」

仕方なさそうな顔をしている母様ですが頬が緩んでいる様子。母様も楽しみにして下さっているのでしょう。

「分かりました母様」

ふふっ。楽しみですね。狛治さん。

しかし狛治さんは何やら思い詰めた顔の様子。どうされたのでしょうか。

★

厄災は静かにやってくる。彼らにとってはただの物見遊山。下々がどう思おうか知ったことではない。

だが災禍に見舞われる者たちにとって厄災は厄災でしかない。人が決して勝てないからこそその厄災。彼らは気まぐれで生かされていると言っても過言ではないのだから。

「くそっ！ 何であいつが、あいつなんかが」

一人の男がいた。未だじくじくと痛む腹を摩り、悪態をついている。彼は今し方無理やり恋慕する相手を手に入れようとし、拒絶され、女の目の前で恋敵に醜態を晒されたのである。

今まで下に見ていた存在は予想以上に大きく、自分の知らぬ間に好き合っていた。初めに好いたのは己であるのに。

「どうすればいい!? どうすれば恋雪を俺のモノにできる!?!」

返す相手はいない。

真夜中。橋の上。人通りも皆無。

化け物に会うのにこれ程うってつけの場面はないだろう。

「おい」

「あ? お前誰だよ」

「質問だが、その剣道場の跡継ぎで相違ないか?」

男は腹が立っていた。そして暴力を振るうことを厭わなかった。だからこそ今ここの目の前の不気味な存在を心ゆくまで蹴ってしまおうと思った。

「なんだよお前はっ……!?!」

人がいなくて好都合なのは相手も同じであるというのに。

「今質問しているのは私だ」



## 陸話 横顔照らすは夜の華

恋をした。

届かないほど近くのあなたに。積もった恋心と共に暮らす家族としての親愛。二つ合わせて愛情になるだなんて誰が予想出来ただろう。報われて欲しいだなんて思っていない。ただ私の近くにおいてくれればそれだけで満足。

ああ、そう思った時点で私はもう……



「すごく似合っています」

「あ、ありがとうございます」

上品な着物に身を包み、艶やかな微笑みを浮かべる恋雪。それだけで大半の男は蓬けるに違いない。守ってあげたくなるような可憐さがあつた。

しかし、一番彼女に彩りを与えているのは恋心だろう。彼の為を思つて自分を飾り付けた。いつもなら謙虚に慎ましく最低限の化粧のみだが、狛治に綺麗な姿を見せたいと

いう大義名分によつて輝かんばかりの容貌を際立たせている。

「では行つてきます。師範、奥方」

「……行つてきます」

対して狛治はいつもの道着。味気ないと言えばそれまでだが、狛治が何時でも恋雪を守れるように動きやすい服を求めたこと。慶蔵がよそ行きの服を持つていなかつたこと。それなりの服を持つてゐるはずの巖勝だが、サイズが圧倒的に合わなかつたこと。などが起因していた。

「おう」

「楽しむんだよ」

二人の若人は連れ立つて歩き始めた。初々しく、ぎこちない。微笑ましい限りである。

「さて、どう思う?」

「恋雪が緊張しすぎているなあ。大丈夫かなあ」

春夏は多少なりとも着飾つてゐるのに対し、慶蔵は道着である。この親にしてこの子あり。それに慶蔵が道着を選んだ理由は気慣れているから、それだけ。狛治より性が悪い。春夏は危機感を覚えた。この悪習は今代で断ち切らねばと決意した。

「遠くから見守るさ。私たちが心配しなくても、狛治はやる時にはやる男さ」

「随分入れ込んでるなあ」

「あたしは息子だと思ってるよ狛治のこと。度胸がある。根性もある。それに継がせるんだろ？」 道場

「ああ、これで俺はもうすぐ自由、弟子を集めねばという重圧から解き放たれたんだあ！」

「やり切ったみたいな顔をしてるんじゃないよ。はあ、師範になってからというもの、弟子が一人しかいないくせに」

「はっはっはっ！ 痛いところをつかれたなあ。まあ、なんだ……浴衣、似合っているぞ」

春夏はぷいと顔を逸らした。

それを見て慶蔵は春夏がまだ若かった時を思い出した。忘れもしない青春の日々。慶蔵がからかい、春夏が怒り、慶蔵が慰め、春夏がそっぽを向く。

あの日常と姿が重なるふとした日常に映る若き彼女の面影。それを独り占めするのは自分だけ。誰も知らない自分だけの妻。

「ふん……ありがとよ」

「かああいいなあ」

慶蔵は春夏の頭をくしやりと撫でた。春夏が時間をかけて整えた髪は完膚無きまで



に荒らされた。所々髪が跳ねており、見るに堪えない姿。怒って掴みにかかってくる妻から逃げ、飛来してくる瓦を受け止める慶蔵。その顔はどこまでも笑っていた。隣には愛する妻。道場を継ぐ息子と愛娘の逢瀬を見守る自分。慶蔵は幸せの絶頂にいた。



「ゆっくりでいいですよ。俺もそれに合わせます」

「……そうですか」

既に河川敷は人が集まってきている。家族連れも多い。初めて見る光景に恋雪は目を輝かせた。そんな恋雪を見て微笑む狛治。

彼らは両思いである。……もう一度言うが両思いである。そして彼ら自身も互いが互いに好意を持っていることに勘づいている。だがそれでも踏み出せないのが恋。考え得る最悪が頭の隅に巣食っている。

つまりは……

「……」

「……」

フラれるのが怖いのだ。沈黙が苦しい。口が閉じれば回転するのは頭。二人ともネガティブな所があるので思考はそちらの方へと脱線してしまふ。

(こういう時、なんて話せばいいんだ!?) 着物も褒めた。歩く速度も合わせた。恋雪さんを見る男は睨めば逃げたし、後ろを着いてくる不審者もない。恋雪さんの呼吸は穏やかだ。容態を確認するためにじろじろ見るのは不躰だったか。

いや待て。じろじろ見たから引かれてるんじゃないか!?)

(本当に狛治さんが道着でよかった。狛治さんは気づいていないでしょうがあなたがあなたをちらちらと見る女性のなんと多いことでしょう。もし狛治さんが着飾っていたらさらにこの目がさらに増えるのでしょうか。しかし狛治さんは先程から周りを見回している様子。もしや……私より素敵な女性がいらしたら声をかけるつもり……狛治さんに限ってそれは無いですよね?)

狛治は理由があつて辺りを見ていたが、良くも悪くもその行為が恋雪の背中を押しした。周りを見るくらいなら自分に向けて欲しいという気持ちで話しかけた。言うなれば独占欲である。

「狛治さん」

「はー」

「楽しい……ですか?」

「楽しいですよ」

「……本当に?」

狛治は優しい。優しいからこそ、恋雪は自分に気を使わせているのだと思った。胸の奥が摘まれているような気がした。

ネガティブになっっていることを一足先に自覚した恋雪は、新しく楽しい話題。狛治が嬉しくなりそうな話題を考えようとして――

「ひゃあ!」

「っ!!」

つまづいた恋雪を狛治は咄嗟に受け止めた。頭の隅で恋雪の歩幅を注視していた故、反応が早かった。

「痛っ……すいません!」

「大丈夫ですよ。見せてください……あー、鼻緒ずれですね。手当をしますので少々お待ちください」

恋雪は立ったまま、しゃがんだ狛治の肩を支えにした。ひりひりと焼け付くような痛

さを感じて足元を見ると、親指と人差し指の間を中心に痛々しく血が滲んでいる。狛治は道着の端を口で噛み割いて、簡易な包帯にした。丈夫な道着も鬼子には布切れも同然。

道の端で止まった二人を追い越して行くように人が歩いていく。中にはなんだなんだと一瞥する人もいたが、すぐ歩き始めた。

「う……ああ……つ」

その光景に恋雪は吐き気がした。ここ数ヶ月は忘れていた。忘れていることが出来た光景。自分のせいで家族に迷惑をかけ、家族を道連れにしている。狛治が路傍の石ころを見る目を向けられている。

（なんで、なんで。今日は大丈夫でしたのに！ まだ始まったばかりなのに！！ 私は普通の女の子みたく、好きな殿方と歩くことさえ許されないのですか!?!）

「出来ました。……恋雪さん? ……顔色が悪いです。とりあえず人の少ない横道に逸れましょう。つかまってください」

「ごめんなさい……ごめんなさい、本当に」

「……………」

そうしてゆっくりと脇にそれる二人。ちょうどいい高さの切り株が二つあったので二人は座った。

「私は弱いですね、本当に！ どうしようもなく！ ふふつ。笑えますよね……!!」

「いいえ……恋雪さ」

「つ……弱いだけじゃありません！ 弱いだけなら一人でゆつくりと野垂れ死にも出来ました！ 出来たというのに……つ……わたしは……身の程知らずにも、狛治さんの自由を奪つてのうのうと生きてます！

私は、そんな私が許せない!!」

声を荒らげる恋雪に、狛治は驚き固まった。しかしここで荒らげた声を宥めるのは違ふと思った。狛治は動揺する心を無理やり押さえつけ、恋雪の本音と向き合う覚悟をした。

「俺なんかより、恋雪さんの方がずっと強いですよ」

「え？」

零れた言葉は善意で包み隠されていない心からの本心。剣道場の一件を経て変わった『強さ』の理由。

恋雪は目を丸くした。自分に『強い』だなんて言葉は一番遠い言葉だと思っていた。貧弱、脆弱、懦弱、病弱、軟弱。全てが当てはまる。寧ろ『弱い』が妥当だろう。第一、『強い』の権化のような存在が目の前にいる。

「俺には、拳しかないんです。以前、巖勝さんは言っていました。『恋雪が軽快したのは

何も薬が理由ではない。抑、薬だけで病魔に打ち勝つ程の薬では体の方が持たぬ。病は気から。意思が病に打ち勝つただけのこと』だそうです」

「……」

「教えてください。何があなたをそこまで強くさせたのですか？」

「狛治はずっと知りたかった。もし巖勝の言う通り、薬に関係なく意思が病に打ち勝つたなら、恋雪と違い狛治の父親は生きるという意思がなかったことになる。狛治の父親が持ちえなかったそれを、目の前の女性は持っている筈なのだ。」

「何がなんて、そんなの……は」

「最初から決まっている。全ては目の前の存在に追いつくため。少しでも視界に入りたいから、振り向いてもらいたいから病魔に侵されている暇なんて無かった。」

喉が渇く程に彼と話したい。

迷うほど街を歩きたい。

体が動かなくなるほど愛して欲しい。

そして願わくば、両親のように支え合って生きたい。

……なんて言えない。吃る恋雪、狛治は早く答えが聞きたかった。

「つ……親父はなんで死んだんですか」

「え……完治したのでは……」

「すいません。嘘をついてました。俺の親父は薬を盗む俺に耐えかねて自殺しました」  
「そんな……」

「答えてください恋雪さん。親父は……死ぬ必要があつたんですか！俺の親父の体はともかく、心までも弱かつたのですか！」

恋雪は、泣きそうな声で詰め寄ってくる狛治がまるで帰る場所を持たない仔犬のよう  
に見え、呆気にと取られていた。いや、きつと仔犬なのだろう。鋼の肉体と、持ち前の善  
意に籠っていた彼の『弱さ』。

狛治もここで恋雪を問い詰めた所で意味がないことを心のどこかで理解している。  
それでも聞きたかつたのだ。

「狛治さんのお父さんは決して弱くなかつたと思いますよ。ただ……狛治さんに頼るの  
が耐えきれなかつたのだと思います」

「っ！俺は親父のためならいくらでも……!!」

「言い方を変えます。狛治さんのお父さんは死にたかつたんだと思います」

音が消えた。

「ナン……なにを言つて……」

「誰かに頼るといふのは辛いものなのです。それが愛する家族ならば辛さもより一層。大切な方々な時間を奪い、齷齪して手に入れた金銭を高い薬の為に湯水の如く使わせてしまう。病いに罹つた自分よりも、家族の方が価値があるのは自明の理だといふのに」

疑つてかかりたい。違ふだろうと否定したい。なのに狛治は声が出なかつた。恋雪の目は本気だつたのだ。狛治の感覚はある種の殺意を感じ取つた。それは狛治の父親も持つていた殺意。自分に向けての殺意である。だからこそ理解出来た。恋雪も死のうとしたのだ。狛治の父親のように。

恋雪は踏みとどまり、狛治の父親は踏み込んだ。ならばその違いは――



「それでも私はあなたが好きです」

今度は恋雪が泣きそうな顔をしていた。

「あなたが好き。先程言いましたのは紛れもない本心。本当は今すぐにも諦めたかったです。罪悪感に押し潰されるくらいなら死んだ方が遥かにマシだった。

そんな時に限ってあなたが部屋に来てくれた。とても嬉しかった。そこで思ったんです。『死にたい』なんて思うよりも、この人のことを考えていたい。もつとこの人と生

きていたい。ずっと看病されていたい。ああ、この気持ちは恋なんだって。……あ、浅ましいですよね……こんな……すいません」

「……っ」

強いと思った。綺麗だと思った。現に彼女の放った刃は彼の心臓を穿ち抜いている。いや、それはきつとずーつと前から刺さっていた。本当の意味で『強い』とは目の前の人のことを指すのだ。きつと喉笛に刀を突きつけられたとしても、彼女は一切信念を曲げないのだろう。

「……いわれてしまいましたね」

「え？」

「看病だって、悪いことだらけじゃないですよ」

「どういう……」

「……俺が今こうして歩いているだけで幸せなように、看病するだけで幸せにな人もいるんですよ。『ありがとう』といつてもらえる。頼りにされていると訳もなく嬉しくなる……それが好きな人ならもつと」

伯治は恋雪の両手を包み込むようにして握った。父親を喪ったが、その代わりに彼女だけは守るなんて思わなかった。第一父親にも恋雪にも不義理だった。

家族だから、病人だから、女性だから、可哀想だから恋雪を助けてあげたわけではな

かつたと狛治は自覚した。茶屋の看板娘に好意を向けられた時に流したのも、遊女に声をかけられた時無視したのも意味があつた。

他ならぬ恋雪だから少しでもそばに居たいと思つていたので。

剣道場の息子に握られた時に強ばつた恋雪の手は、狛治に握られた時に強ばることは無かつた。

「俺は誰よりも強くなつて、一生あなたを守ります」

きつと綺麗な告白とは行かないのだろう。狛治は取り乱していたし、恋雪は狛治の内面を踏み荒らした。だがそれでいい。惨めで、滑稽で、つまらない本当の自分を曝け出したにも関わらず受け入れてくれたのだ。

恋雪は真つ赤になつていた。あんなに冷静に狛治と話していた彼女とは似ても似つかず、狛治は吹き出した。

「ふふ」

「な、何がおかしいんですか!？」

今度は恋雪が取り乱す番だつた。

花火はいつの間にか始まつていたが、二人ともそんなもの気にしていない。目の前に

愛が、花がある。閃光に照らされた互いの顔は幸せに満ち溢れていた。重ねた手で体温を共有し、上がった口角で幸せを伝える。

この気持ちを二人は一生忘れないだろう。



地獄があつた。

噎せ返る血の匂い。転がる骨は何処の誰のものか分からない。人間は内臓の損傷や血液不足を経て死に至る。骨を砕くだけでは到底死なない。よつてこれは死ぬまで痛めつけた証拠なのだ。

「はああああああ……素晴らしい……!!」

力に酔うとはまさにこの事。人が力を得たなら、試して見たくなるのは道理。赤子ですらそうなのだ。

「ほらよっ……と」

「ぐああああっ!!!」

向かってきた勇者の腹部をすれ違いざまに切りつけ、もれいづる臓腑を啜る。戦闘の間に食事をいり混ぜた吐き気を催す光景。一口で五臓六腑を全て抜き取られた男は即死した。彼が最後の一人。

「やはり不味い。不味いが、悪くは無いら」

味覚は冴えていた。睡眠欲も性欲も食欲へと変換された。食欲が全ての価値基準となった。

初めての食事は父親だった。躊躇う事すらせずに手にかけて、悲鳴を聞いて駆けつけた父親の弟子を殺した。そこからは連鎖的だった。

花火大会の日だと言うのに夜間稽古があつたのが運の尽き。鬼と化した一人の男によつて剣道場は文字通り壊滅した。

「アア、そうだ俺としたことが忘れていた。極上の一品は最後にとつておかねばな」

鬼は思い出した。きつといちばん美味しい女のことを。病気を持っていたが、それすら程よい苦味となるぐらいに彼女は美味しいのだろう。

まだ夜は始まったばかり。花火大会に赴いているだろうが、彼女は雑魚中の雑魚だ。直ぐに帰るだろう。

「待っていてくれ恋雪。今度こそオレと一緒にになれるからな……ひひひっ!!あの罪人の前で生きたまま喰われたなら、どんな顔をしてくれるんだろうなああ!!」

## 漆話 荒ぶる罪の拳

男がいた。

その男は紛れもなく強者であつた。幼き頃から刀を握り、武功を挙げた名のある侍である父を持ち、体格にも恵まれた。刀を持てば髪の毛一本も触れられたことはなく、敗北の二文字を知らずに生きてきた。正に完全無欠。

そして井の中の蛙。彼がもう少し外の世界に目を向けていたら己の限界を知る機会なんていくらでも見つけることができた。心の底では分かっていたのかもしれない。外に出れば自分は弱者であることを――

「お見合いだと?」

「はい。もうそろそろお相手を見つけれられては如何でしょう。お父上も懸念されておいででございます」

「ふん。果たして俺に見合う女がいるのか。この町の女はだいたい見たことがあるが醜女しかない。というか醜女だらけだ。どうにかならないのか」

「さすがにそれは……」

男は従者の提案を一蹴した。町を歩いているのだ、女は嫌でも目につく。横に目をやれば、こちらを見つめている女が数人いた。だが男は無反応を決め込んだ。女は男の地位に惚れているだけだし、見てくれも彼のお眼鏡には叶わなかったらしい。

(醜女が。気安く俺を見るな。……もうだれでもいいか、美しい女が居ればその都度妾にとつてやれば)

「うお」

「わっ」

人は考え事をしたり、イライラしていると視野が狭くなる生き物である。例に漏れず、この男は目の前から来る女に気が付かなかつた。

「す、すいませんっ！ お怪我は御座いませんか？」

「あ、ああ………気をつけろ」

「はい………失礼します」

「………」

彼の名譽のために言っておくが、彼は一目惚れするような男ではない。少なくとも自分ではそう思っている。しかし彼は目の前の女から目が離せなかつた。そそくさと逃げるように去つていく女。男が初めて見る女だつた。それもそのはず。彼女には持病があり、おいそれと外に出ていける身体では無いのだ。たまたま今日、とある侍のお陰で体調が頗る良かっただけで、たまたま活気ある町に目を輝かせていたら、たまたま男にぶつかつてしまつた。それだけである。

「お……い。あの娘の名前はなんだ」

「確か……素山……恋雪だつたかと。素流道場の娘でございました。なんとも腹の立つ小娘で御座いますね。侍にぶつかつたというのに謝るだけだとは………どうされました?」

「……なんでもない。帰るぞ」

彼はひくりとわらつた。すれ違つた清純な乙女。いいものが見れた自分は運がいい。あれこそ自分の妻に相応しい女だ。彼女を妻にすることが出来れば本当の意味で勝ち組となる。

彼はその日、鬼となつた。



(……ア? ……何を俺は)

鬼は微かな微睡みから意識を引き起こす。何かを思い出していた筈だが彼はもう覚えていない。人間だった頃の記憶など殆ど思い出すことすら出来なかった。唯一残った人間らしい感情と言えば恐怖と愉悦だけ。前者は自分をこの体にした圧倒的上位者に対するもの。後者は力を得たことによる全能感からくるものだった。

「足りないモノ……足りないモノ。なにか俺には足りない……あいつが……恋雪が」

肉体が鬼になる前の願望が今の彼を突き動かす原動力になっている。もはや彼にはそれしかない。満たされているのか空っぽなのか。

恋雪を自分のものにする。そうでなければ自分が根底から否定されているようで耐えられないのだ。先日、この町でいちばん強いという誇りを刀すら持っていないただの罪人に完膚なきまでに否定された。しかし今はこの最強の肉体がある。

夜闇に飛び出した彼は素流道場へと向かう。

塀をのぼり、道場の中を見る。そこには今し方花火大会から帰ってきた家族四人が団

變していた。

「狛治!!」

「はい!!」

「お前には道場を継いでもらおう!!」

「はい!?!」

「この阿呆う! もつと他に言い方があるだろう!?!」

「……………なん……………だあれは」

鬼は一瞬来たことを後悔した。幸せの庭がそこにはあった。笑いに虚飾等一厘たりともない。彼はドス黒い血に塗れた自分の手を見た。血に濡れて浅黒くなった着物も目に入る。行くのも憚られた。

彼らは家族同士だ。ならば自分は何にかと問いかける。同期も家族も全てこの手で殺し尽くした。

——どうでもいい

「邪魔するぜえ」

御祝いに不幸せを贈ろう。孤独とは自由。自分は鬼なのだから。

(なんだ……こいつは)

対して狛治達は硬直していた。しかし男が恋雪に向けた禍々しい感情。それを機敏に察知した家族は動きだした。悪意と害意に塗れた瞳は恋雪を睨めつけていた。

「狛治！ 恋雪を守れ！」

「出て行きなあ！」

「おお怖い怖い。無理すんなよ、女の癖につと」

狛治は慶蔵達より数瞬遅れて反応し、恋雪を抱いてその場から離脱しようとしたが、彼はそれを許すはずもない。正面に立って妨害した。

それから鬼は春夏の真つ向からの蹴りを掴んで足首を握りつぶし、庭に向かって投げた。足はあらぬ方向に曲がっている。

慶蔵は一瞬春夏の方に気を取られた。

「春夏ー！」

「ぐっ……あたしに構うな！ 早く恋雪を……」

「逃がさねえよ」

彼は恋雪を抱き抱えて逃げようとする狛治から、簡単に恋雪を奪った。恋雪の伸ばした手は、狛治の手を掴むことはなかった。

(速い……!?)

「狛治さん!!」

「……恋雪さんツ!!」

「暴れるなよ。日が落ちたばかりだ、何を焦る必要がある。そのオマエ、狛治と言ったか、一人で剣道場に来い。妙なマネをしたら、恋雪の首を切り落とすかもしれない」

そうやって鬼は去っていった。

時間に表せば一分にも満たない。須臾にして家族は幸せを奪われた。

「あ……あ、あ、あ、あ……くそおおお!!!」

(守ると言ったのに……!!)　なんで俺は!!)

「あれはなんだ……本当に剣道場の跡取りか？」

「……違う。人じゃない。あれは鬼だよ。はあ、これじゃ多分一生歩けないね」

「今更病人の1人や2人の看病なんてなれてるさあ……狛治、どこへ行く」

「恋雪さんを助けに行きます」

「行くことは許さない」

「な、なぜです!?　恋雪さんは攫われた!　俺が行かないとあの鬼が恋雪さんに何をす

るかわかったものではありませんツ!!」

「狛治!!」

「ツ……」

慶蔵は先程の鬼が狛治なんて秒でひねり殺せる位に強いことを見抜いていた。だからこそ、春夏を狛治に任せて自分が行くべきだと思ったのだ。鬼本人は狛治を所望しているが、嬲りたいだけなのは目に見えている。

「……慶蔵。さっさと私をおぶって医者に連れていきな。狛治」

「はい」

「そこを動くんじゃないよ」

「行くよあんた。多数決でお前の負けだ」

「……」

春夏は狛治の味方をした。慶蔵はやりきれない顔をした。

「直ぐにこつちも向かう。必ず生きてもどれ」

そう言う慶蔵は春夏を抱き抱えて外へ飛び出していった。

狛治はこぶしを握りしめた。怒りから爪が手にくい込み血が流れ出す。

「俺はもう……役立たずの犬じゃない!!」

★

所変わって夜の街。花火大会もとつくに終焉を迎え、人々は冷めない興奮を押さえ付けて戻る日常の為に火照った心と体を休ませている。暗黙の了解として、夜の街を歩いているのは夜盗の類であるということだった。それゆえ、そんなことを知らずに切り殺されたとして文句はいえなかった。

今此処に一人の男がいた。人を待っている様子であったが、程なくしてまた一人男が現れた。ただならぬ雰囲気も双方とも漂わせている。

「……この家族に随分と入れ込んでいるようだが、何が気に入ったのか私にはさっぱりわからん」

「氣まぐれ。……というものです故」

「ふはは、貴様にもそのような非合理的な思考が残っていたとは、熟飽きさせない男だ」  
男が少し間を開けてから口を開いた。

「鬼を……増やされたのか」

「何を言っている？ 私はお前に言われてからというもの、誰一人として鬼にはしていないぞ」

「……は」

「そのことで来たのだ。あの鬼は何か違う。いや、鬼と言っているのか。当の本人は氣づいていないが、彼奴の寿命は持つて数時間だからな。私が同朋を初めて増やした時に似ている。忌々しい」

男、巖勝は目を見開いた。人を鬼にする。そのような芸当ができる存在など片手で数えるぐらいしかいない。目の前の無惨もその一人だが、始祖自ら鬼化を禁止しているのではかの鬼はありえない。

次に珠世だが、断じて徒らに人を鬼にするような者ではない。

残るは一人しかない。

薫が、妻が鬼にしたのだ

(恋の病の荒療治にも程があらう……)

「意図して寿命を数刻にしたのかかそうでないかは知らん。ああ、黒死牟。別にお前に問引いてもらうまでもない。お前が引導を渡さずともすぐ死ぬ。たとえ、あの鬼が血を与えた存在でもそうだろう。」

「承知した……」

上司からの無理難題に慣れてきた黒死牟。しかしながら、今回の件はどう回避しようか思案を始めた。



「来てやったぞクソ野郎。恋雪さんを返してもらおう」

腐臭が噓せ返るほど溢れているこの場所は、数時間前にこの街一番の剣道場として栄えた所である。だが、跡取りである唯一の息子は鬼となった。そしてこの道場を気まぐれに壊滅させ、門下生達をもの言わぬ肉塊にした。

今ここにある命は三つしかない。純粹に強い命と、暴力的に肥大した命。そして風前の灯となった命。

「くひひっ。まあそう焦るなよ。時間はたっぷり……ないか。放っておけばこいつは死



ぬからなあ」

「……何をした」

「何したんだろ？ 何をしたと思う？ ……なんと!! 恋雪を鬼にしたア!! これ  
で一生恋雪は俺のモノだ……なあ恋」

正拳突き。

粕治は目の前の鬼の口から愛する人の名前が吐き出されるのに絶えかねて殴りかかった。

しかし鬼は緩りとした動きで逃れた。この鬼が人間だった頃、一撃で無力化させた経験のある粕治が放った手加減なしの本気。それを簡単に避けたのだ。

「相変わらず育ちが悪いなあ」

（しかし、目的は果たした）

鬼は避けただけ。ならば粕治は足元で気を失っている恋雪をすくって逃げればいいだけの話。あの侍なら人に戻す方法も知っているに違いない。

「言い忘れていたが、恋雪はいつでも殺せる。なにせ体の中に俺の腕があるようなものだからなあ……グツと握るだけで内臓なんて粉々よ。」

逃げ出したら……分かってるな狛治?」

「……」

「いやな? 捕えたあと俺は思った。本当にこいつは美味しいのかと。そこで味見をしてみたのだ、まあまあ案ずるな。見ての通り手だけだ。腹がいちばん美味しいのは決まりきったことだが、人間は雑魚い。ちよつとしたことで死んで腐り始めてしまう。食った腕だが、それはもう絶品だった。」

そこで俺は閃いたんだア! 此奴を鬼にすればいい!! 鬼にすれば多少味は落ちるだろうが殺さない限り何回でも食えるツ!!」

「鬼は……悲しい生き物だな」

狛治は怒りを通り越して凪いでいた。目の前にいるのは悪そのもの。滅ぼすべき存

在である。命にかけても。

駆け出して鬼に肉薄するも、刀の間合いに拳が敵うはずもない。一足一刀の間合いより先に進ませて貰えず、刀傷だけが增える一方。ジリ貧である。力の差は歴然だった。仕方の無いことだ。今の狛治は人間の体である。日輪刀でしか傷を付けられないような鬼の体に拳が効きにくいのは道理である。

「ぐっ……」

「鬼が悲しい生き物だつて？ 馬鹿言え、お前の方がよっぽど悲しいな。お前の父親も可哀想だな。恋雪もかわいそうだ。可哀想でたまらない。女ひとり守れてすらいない男に思いを寄せているなんてなあ」

狛治は言い返せなかった。受けた傷の痛みが頭を貫いているのはもちろんのこと、鬼の言葉は紛れもなく真実。狛治はそう思っている。誰だつて嫌だろう、貧乏ながらも得た子供は盗みを繰り返し、反省もせず人を不幸にしているのだから。

俺は

「いやあ……!! 狛治さん!!」

「ちつ……うるせえな。口は縫い付けておくべきだったか?」

「そうだ、あの時だ——」

??

「狛治……手負いの獣はなぜ強い分かるか?」

ある夏の日。刀を降ろした巖勝の前に狛治は対峙していた。俗に言えばウォーミン  
グアツプ。狛治の連撃に対して最小の動きでいなす巖勝と、巖勝の間隙をついて攻撃を繰  
り出す狛治。既に常人には捉えられぬほどの攻防を繰り返しているが、二人とも肺と肉

体が離れているかように話している。

「……生存を大前提に置く獣が、瀕死の傷を負ったことで、捨て身で殺そうとしてくるからでしょう?」

「正解だ。では人も……手負いになれば強くなると思うか?」

「いいえ。手傷を負えば動きは鈍るのが人間です。獣のような膂力も体力もない人間が死に物狂いになったところで隙が増えるだけです。隙が増えれば弱くなるも同然」

「違うな。人も手負いになれば強くなる。人も獣もさして変わらん……鬼でさえもな」

突如として巖勝の動きが変わる。型を全て取り払った連撃。振り上げて振り下ろす。その連続。隙は増えたが、避けるので精一杯。焦れば隙を付けずに猛攻が苛烈になるだけ。

「大切なものは目に見えぬ。だが、死に瀕することで見えてくるものがある。息を大きく吸い込んで肺を膨らませ、体温を臨界点に叩き上げるのだ」

「……」

「見極めろ狛治……役立たずの狛犬にはなりたくないであろう?」

★ ??

「春夏……」

「ハッキリいわせてもらうけど、あんたの方が強いよ」

「じゃあなんでなんだ？　なんで狛治を行かせたんだ？」

「食いつけるかどうかは別つてことさ。あんたは敗北をしらない。というか敗北を敗北としていない。劣る点があれば、違う面で上回ればいい。あんたの戦い方はそういう天性のものだよ

けどね、身体能力で負けに負けちまったらあんたには勝ち目がない。あの侍に拳を当てたことないだろ？」

「そうだなあ」

「狛治はあるよ。一度だけね」

「……！」

「あたしは、それに賭けてみようと思う」



〔死に物狂いでみえてくる大切なもの……か〕

〔……意味がわからない。なにをやっている?〕

〔通しませんツ! 今度は私が狛治さんを守ります!!〕

〔恋雪さんの声……何をして……〕

「もつと分からなくなつた。お前がその小さい片手を広げたとこで障害たり得ない。やめておいた方がいい。腹のキズも痛むだろう、失つた腕もまだ血が止まっていない」

「……」

「あ、そうか。ハハハツ! そうか! もう痛覚がにぶいんだろう!? 当たりだなあ!

もうお前も俺と同じだ……早く言つてくれよ。

ならばもうここに用はない。俺と行こう恋雪。そうすればそこで転がっている狛治の命は助けてやる。誰にも邪魔されない所で永遠に二人で暮らすんだ」

愛の告白のように聞こえても、先程の会話からしてこの鬼は恋雪のことを食料としか見ていない。食べて治して食べて治しての生き地獄は決まっている。この手をとつた先に恋雪の幸せは微塵もない。

それでも――

恋雪は心配そうに狛治に振り返った。

目が合う。潤んだ瞳、覚悟の決まった瞳。好きな人の為なら自らを犠牲に出来る彼女。

狛治は許せなかった。想い人にそんな瞳をさせた自分が、何より目の前の悪鬼が許せなかった。

「ま……ちやがれッ!!」

想像よりも遥かに大きな声が出たことに狛治のみならずこの場にいる全員が驚く。何よりも一番驚いていたのは鬼だった。

(どういふことだ……こいつは死にかけに変わりない。血塗れの死に体だ。なのになんだこの……震えは!?)

鬼は、生前に見た紫の着物を着た侍を幻視した。鬼の全て、全身の産毛に至るまでが目の前の罪人を殺せと言っているのだ。



素流殺法 破壊殺・羅針!!!

狛治の足元を中心に雪の結晶のような方陣が展開された。否、そう見えたのだ。溢れんばかりの鬨気の高まりが臨界点に達する。狛治の頭は思考を放棄していた。ただその双眸で倒すべき敵の隅々まで解析し、勝利の糸口を見つけ続けている。

神経の一本一本、筋繊維の一筋一筋、血流の一滴一滴。

今此処に次期上弦の参は産声をあげた。

悪鬼滅殺。修羅が参る。

## 捌話 永遠を誓う

(これが……巖勝さんの見えていた世界。……そりや勝てない訳だ)

狛治には全てが見えていた。彼は類まれなる強者達の、その先へと至ったのだ。呼吸術も知らず、歳も重ねていないのにこの世界が見えるなど規格外にも程がある。

ただ一つ狛治には懸念があった。それは恋雪のことである。

(なぜだ。恋雪さんの闘気は無いに等しい。どう考えてもこのままだと数刻も立たずに寿命を迎える。

それに目の前の鬼もだ。何だこの力強くも掠れたような闘気は。寿命と引替えに力を得ているのか?)

目の前の鬼曰く、恋雪は鬼化が進んでいるとのことだ。しかし狛治の目に映る彼女の体にはそれらしき兆候は見取れず、死人のようだった。目の前の鬼の闘気も不可解。狛治にはもうすぐ二人とも消えてしまいうるような気がした。

それもそのはず。目の前の鬼はそうあれと鬼にされた。短時間で寿命を貪るのと引き換えに絶大な力を得る諸刃の剣、いや毒に違いない。今やその毒は恋雪をも蝕んでい

た。

「死ねエエエ!!!」

兎も角恋雪をどうするかを先ずは捨て置く。まず狛治は目の前の鬼を斃さなければならぬ。鬼がやたらめつたらに斬りかかってくるが、狛治はひらりひらりと躲す。裂かれるのは道着だけで、薄皮一枚切れていない。

躲す。

「おらああああ!!!」

躲す。 躲す。

「避けるな貴様あああ!!!」

躲す。 躲す。 躲す。

以前までは体の一部が動いてからどのような動きが来るのか予測して最適解を踏む

ようにしていたが、最早その必要は無い。感覚が教えてくれる。体が動き始めずとも脳から与えられた信号が動く筋肉を伝えてくれ、動き始める筋肉の膨らみで目の前の鬼が何をしてくるのか手に取るようにわかるのだ。

先程の苦戦が嘘のように攻防が反転した。かと言って狛治に余裕はない。ただ余裕そうに見せているだけで、鬼から際限なく送り込まれる情報を処理しながら体を動かすのはかなりの負担である。

「はあ……はあ……この俺が……息切れ？ なぜ？」

「教えてやるが、お前の寿命は最早数刻もない。……もちろん恋雪さんも」  
「なんだと」

狛治は覚悟を決めた。短期決戦を選んだのだ。

「鬼よ、お前と共に俺の弱さを葬る。弱者の宿痾、肉親の幻霊を置いて、全てを救い俺は生きる」

「減らず口を……！ 貴様は死ぬべき存在だ！ 俺の寿命がないなど戯言を吐くな！ 貴様こそ罪を犯した身で幸せになるなど傲慢の極み。恋雪を殺した後でお前の死体にこう言つてやろう。」

『何も守れなかつたな』となあ!!」

「お前がそれを言うかア!!」

(雑魚が！ 正面から叩ききつてくれる!!)

(一瞬で多くの面積を根こそぎ抉り飛ばす!!!)

両者構える。

血に錆びれた刀を大上段に構え、間合いに入れば叩き切る気概を見せた鬼。

両の手に尋常ではない血液を溜め、今にも突貫しそうな力で床を踏みしめた人間。

? 血鬼術 怨刀 金備?

・ 素流殺法 破壊殺・滅式

「つ、あ、あ、あ、あ、あ、!!」

「覇アアアア!!!」

一瞬を無限に分割したような世界で二人は激突した。

先手は勿論狛治である。振り下ろされた左手の手刀が鬼の肩に突き刺さり、左手を付け根ごと切り落とした。鬼は刀を袈裟懸けに振り下ろす筈だったが片方の腕を失い、バランスを失って狛治の左手を切り落すに至った。しかし狛治は表情一つ変えない。神経を無理やり切っているからだ。

そして鬼の鳩尾に狛治の右腕が貫通した。鬼は笑った。左腕は落とされたがまだ右腕は動く。刀を振り上げて今度こそ狛治の首を落とそうとして――

「あ、あ、あ、あ、あ、!!!」

「ぐおああああ!!」

決着。

狛治は力任せに突き刺さったままの右腕を左に振り抜いた。鬼の肋骨が腕に突き刺さりながらも、彼の右腕は鬼の肩や内臓や筋肉を体の外へとぶちまけた。

鬼は立ったまま項垂れて動かなくなった。

静寂が場を支配する。

「はあ……ぐっ」

「あ……狛治……さ」

「はあ……はあ。終わり……ました。帰りましょう」

「でも体が」

「貴方の方が大事です」

（片手を失ったか。止血はしておこう。……あの侍は何処にいる。いや、先ずは恋雪さんを安全なところに……家でいいのか？ 此奴がいつ起き上がってくるか）

「っ……狛治さん後ろ!!」

恋雪が狛治の背後を見て悲痛な声をあげた。狛治は分かっていた。鬼は再生する。そのことを分かっていたがいくらなんでも早すぎた。回復に数分はかかると思い込んでいたが、数秒で立ち上がるまで再生せしめた鬼。狛治の背中に冷汗がたれる。

「……ちっ」

「倒したかと思っただか……無……駄だ。手足を腕がれ……ようが、腸を引きずり出されようが俺の体は幾らでも再生する!! そらみる、貴様が与えた傷ももう治ってしまった」

「! ふう……はあ……」

「満身創痍だな、片手で俺を殺すことができるかなあ? 出来ないよなあ? じゃあな 狛治、まさかここまで傷を負わされると思わなかったがお前には死んでもらう。そして恋雪を連れて俺は行く」

一歩。

一歩。

獣のように伸びた爪で床を踏みしめて迫る鬼。背後の恋雪を抱えて逃げるか、もう一度滅式を使うか。狛治は判断に迫られる。

(……羅針を展開するにももう体力が残っていない。……やれるのか、腕一本で。完全回復したこいつを殺しきることが)





「……全部……ぜん……ぶ。お前が生きているせい……だ」

そう言い残して鬼は消えた。最後の言葉は恋雪に言ったのか狛治に言ったのか分からない。残った灰と着物が他の門下生の着物と同じように落ちていた。もう見分けもつかないだろう。

決死の戦いは、狛治達にとっては呆気ない形で幕を閉じた。

「何が……いや、早く恋雪さんを巖勝さんのところに」

「なんとも、凄惨な道場だな」

「巖勝さんー」

遅れて来た巖勝は道場を一望して、状況を把握した。薫の血が混じった灰。片手のない狛治。そして動かなくなった恋雪。間に合いはしなかったが、一先ず鬼は死んだ。薫はこちらの状況を把握していない。本当にただの気まぐれで鬼を消したのだ。

「遅れたことを謝罪しよう。訳は知っている。見せてみるがいい。その左腕、血は止めたな？」

「はい。恋雪さんをよろしくお願います」

狛治は一時的にだが『透き通る世界』を発現した。そのため平常状態でもうつすらとだが闘気を感じることが可能になった。いまの恋雪の闘気はほぼゼロ。最悪の結末が狛治の頭をよぎる。だが狛治は巖勝を信じていた。強さもさながら、鬼に関する知識

も豊富に違いないと思っている。彼になら恋雪を癒せる。

しかし、巖勝の返答は残酷なものだった。

「恋雪は治らない」

「なん……で。なんでですか!? 貴方は鬼であり医者でしょう! 恋雪さんは難病だったのにやっと回復した!! 貴方のおかげで、太陽の下を歩けるようになった! そこまでできたというのになんでですか!!」

「……毒は完治した。だが、もはや取り返しのつかない所まで来た……そもそも病人が致命傷を負って……普通の人間と同じ所まで回復はしない」

(まさか私の妻がそうなるようにした、だなんて言えるはずもない)

「つ……貴方が人ではないことは……前から分かってた」

「……」

狛治は土下座をする。今まで一度もしたことの無い行為である。相手に全てを委ねるといふ行為は屈辱的で無力的でなぜかほんの少し楽だった。

謝るくらいなら逃げてきた。

頼むくらいなら奪って来た。

死ぬくらいなら殺してきた。

「頼む。なんでもする。恋雪さんを治してくれ。俺はどうなったって構わない。理解し

ている。俺は何一つ返せない。だから俺の命くらいしか渡せない。鬼なんだろう？」

(選択肢など……ひとつしかない。よもやあちらから頼んでくるとは)

「……例えどうなろうともか？」

「当たり前だ。もう……失うのは……御免だ」

「そうか……」

巖勝は躊躇いなく恋雪の頭蓋に手を突っ込む。形容し難い音とともに沈み込むように手が吸い込まれていった。勿論粕治は言葉を失っている。

「おい……」

「待て。お前はこれでも飲んでおけ」

「……っ……!! 腕が……!」

(心肺停止。末期ガン……だが細胞はまだ死んでいない。ならば極少量でいい)

……

.....

「あ…………あ…………ふ」

恋雪が息を吹き返す。生前とは違い、肥大化し浮き出た血管が白い肌に異様に映える。命を刈り取る為に伸びた爪。そして今は見えないが犬歯も伸びている。これで恋雪は完全に鬼となった。原作開始まで生きる。また巖勝の手によって運命が変わったのだ。それが吉と出るか凶と出るかは分からない。

巖勝は本来の姿を見せた。睦目の鬼が真正面から狛治を見据える。

「……………」

「狛治。私は鬼だ。人を喰らい、太陽を忌避する鬼だ。

そしてたつた今。お前の恋人も、鬼となった。人並みの幸せも望めんし、子を育むことすら儘ならない。鬼狩りは拳ってお前たちを追いかけ、刀を振るうだろう。

お前に歩めるか？ 人を殺し、弱者を踏みにじるような人生を」

「恋雪さんとなら、荊棘の道も俺は歩んでみせる」

恋雪の体は弱い。だが体の弱い存在は鬼化に耐えられない。本当の意味で病弱であれば剣道場の息子に鬼にされた時点で即死していた。恋雪を生き永らえさせた力。それは「生存力」に他ならない。あの父親と母親から生まれた恋雪の体が病弱なハズがないのだ。産まれた時からあつた恋雪の病魔は常人なら三日と経たずに死ぬほど強く、完治には恋雪の体でも耐えきれない。本能でそう判断した恋雪の体は、待つことを選んだ。体が病魔の殲滅に耐えきれ程の免疫力を得るまで、体の中で飼うことにしたのだ。ただ生死の一線は越えさせずに。

だからこそ、始祖よりも完全な鬼の血が入れば――

「あ」

「恋雪さん!!」

恋雪は意識を取り戻した。上体を起こし、きよろきよろと周りを見た。力無くへらりと笑っているが、血のように赤い瞳は愛する人を写した瞬間に一際輝いた。

狛治は信じられないものを見たように硬直していた。だが微笑みかけてくる愛する人を見て、恋雪……ではなく恋雪の膝の上の布団に突っ伏して泣いた。そうさせたのはひとえに勝手に人ならざる存在にした罪悪感。そして守ると言ったのに守りきれず、辛い思いをさせた自責の念。それらが恋雪に触れることを憚らせた。

「恋雪さん！ ……ああ……恋雪さん！ ……ごめん！ 俺が弱いばかりに沢山……辛い思いをさせてしまった!! 俺がもつと強ければ……こんな……ことには……!」

恋雪は慈愛の籠った目で狛治を見下ろした。そして抱きしめた。恋雪は狛治の葛藤を分かっている。もちろん沢山痛かったし、沢山泣き叫んだ。でも狛治が無事なら良い。それだけでいいのだ。

「狛治さんはしっかり守ってくれました。守ってくれたからこうして今、私は貴方を抱きしめることができます」

(……)

原作漫画で見た悲しい一コマ。狛治が口の端から血が溢れた恋雪を泣きながら抱きしめているそれ。恋雪は既に事切れており、狛治が己の無力さを呪ったであろう時。

今は違う。

恋雪は血の通った手で愛する狛治を抱きしめている。狛治は泣きながらも口元は幸せを噛み締めるように笑っていた。彼は己の手で鬼の手から恋人を守り抜き、己の心で恋雪とともに鬼として歩むことを決めた。

そして巖勝は驚愕していた。

（理性が……残っているのか。いや待て。可笑しい。恋雪と薫の条件はほぼ同じだ。弱った体に鬼の血を入れた。違うのは今回は私の血であり、薫のは無惨の血。竈門家の血を飲んでいる私の血は副作用が少ない。その時点で薫の方が負担が大きい。

肉体の強さは関係ない。薫の容態は、『透き通る世界』を持つ縁壺、治療も行う隠の筆頭であったうた、鬼の体に詳しい珠世。その三人が口を揃えて『危篤だ』と言っていたほどだ。もしかすると恋雪よりも酷い状態だったかもしれない。

ならば、記憶の混濁もなく……理性を失わず……食人衝動にも余り駆られなかった薫は………どれだけ………苦しかったのか)

「叱るに叱れんな」

薫と恋雪はどちらがより死に近かったとは判断しかねる。どちらも臨死だった。そして巖勝は妻に甘かった。



「体が軽い！ 肺が痛くない！ 立ち上がれる！！ 思いっきり走れる！！ 飛んで！ 跳ねて！ あはっ。あははは！！！」

「恋雪さん!? 動きすぎで……いや、動いてもいいのかわ？」

「あれ、狛治さん。目の色が青……黄色い？」

「っ……それは」

「……狛治、説明しておけ。私は少し用ができた」

「は、はい」

禍福は糾える縄の如し。彼らはもう沢山苦しんだ。太陽が照らさずとも月の光の下、彼らは生きていくのだ。

☆

（狛治と恋雪の物語はここで完結か）

巖勝は新たな種族となった二人を放置して夜闇に身を乗り出した。理由は夜風から

漂う血の匂い。まだ夜は終わっていない。剣道場の息子も死んだ。恋雪も狛治も生き  
ている。

血の香り漂う方向に向かって駆ける。香りの正体は鬼舞辻無惨と、その犠牲者であつ  
た。

「無惨様……」

「おお黒死牟。会えて嬉しいぞ」

「……光栄の極み」

「見ろ、こいつは十二鬼月になれるとは思わんか」

「……」

頭に無惨の腕が貫通している慶藏。恐怖一色に顔色を染めた彼の妻、春夏。巖勝の頭  
の中で、疑問がいくつつか浮かぶがその全てを押し込む。残ったのは結果だけ。

「男は既に……」

「む」

黒死牟と無惨が話しているうちに慶藏……いや、慶藏だったものは塵のように消えて  
いた。さらさらと灰のようになった細胞が風に乗って飛ばされる。血の着いた道着だ  
けがその場に残った。

「どうやら既に体細胞の大半が死滅していたようだ。ならばなぜあそこまで戦えたのか



斬。

刃を赫くせず、痛みをとまわらない死。鬼の体には赫い刃は壮絶な痛みを伴う。あえてそうしなかつた。日の呼吸には無い月の呼吸ならでは、静かに葬送する黒死の刃。因みに水の呼吸は呼吸法の中でもこの特徴を受け継ぐ唯一の呼吸である。

（何がおかしい。何が面白い。命をなんだと思っている。……等と縁壺のように言えた義理でもない。義憤に駆られようが……もはやこの身は悪鬼羅刹。

だが）

「……あの時……殺しておけば」

「なんのつもりだ」

「十二鬼月は……これより私が再編する……弱者は不要……貴方様の手を煩わせる訳にはいかない。それとも……私では不服であつたか……」

「ふむ」

無惨は少しの間逡巡した。

「まあなんだ。やはりお前に任せておけば安心というもの。頼りにしているぞ。お前の役に立つかと思つたが、この二人は雑魚だった。比べるのも烏滸がましい。熟不幸な奴

らだ。生まれて来てもなんの意味もなかったとはな」

「……」

二人の着物を踏みつけながら機嫌が良さそうに語る無惨。黒死牟は無意識に日輪刀に手をかけていた。鞘の中で刃は赫く灼熱を帯びている。無惨からは見えない。

(落ち着け……縁壺。こいつを殺せば薫も死ぬ。薫が死ねば、薫の中にいるうたも死ぬ。もう少しの辛抱だ。落ち着け)

無惨がずっと黙っていることに気がつく。

疑問に思つて無惨を見れば、酷く脅えていた。瞳孔は開き、無意識のうちに後ずさりをしてる。更には身体中に夥しい量の古い刀傷が浮かび上がっている。巖勝はそれに見覚えがあつた。巖勝が近づくと無惨は「ひっ!？」と情けない声を出して尻もちを着いた。

「無惨様?」

「……は……今……確かにお前があいつに……! ……」

「? ……なにを」

「……近寄るな!!」

「御意」

「あ」

無惨は捨てられた子供のような声を出した。彼にとって巖勝は命令に従順な下僕な筈だ。

自分は間違えない。だから自分の言うことを聞いているだけがいい。だが、目の前の男はそうか？　今まで鬼にしてきたのはどうしようもない屑で、社会の膿で、世間の掃き出し物。鬼狩りの柱一人葬れない雑魚。彼にとつて想像以上の結果を出してくれる存在は黒死牟しかない。

紛うことなき最強であるこの男に見放されれば――

――私は本当に限りなく完璧に近い生物か？

(違うのだ……私は)

鬼の首魁もまた、変わり始めていた。いい方向か悪い方向か、はたまた根底の残虐さは変わらないのか。赫い刃は消えない傷を体に刻んだ。対して冷たい月は無惨の心を

ゆつくり、じんわりと蝕んでいた。

★

慶蔵と春夏だったものの灰が煙のように立ち上っている。そこで巖勝は立ち尽くしていた。町の方が騒がしい。剣道場の惨劇が人の目に触れた事を暗示していた。巖勝は第一発見者を哀れに思った。あの凄惨な光景は普通の人間が見るにはあまりに目に毒である。

「粕治達には……否。全てを話すべきだ」

巖勝は片膝を着いて丁寧に慶蔵達の着物を拾い上げた。灰のこびりついた着物は重々しく――

――なぜ薫の血がついている

「流石に完全模倣は出来ないか」

鬼が一人。眩いばかりの金髪を波のように揺らして降り立った。世界が塗り替えられる。魔性の美は、武を纏う巖勝をして互角の存在感を放っていた。そしてこの世でただ一人にしか見せない万遍の笑みを浮かべ、巖勝を見つめた。

「鬼は私が作った偽物。ふふ、今のいままで気が付かなかったでしょう？ こほん。慶蔵さん達は、鬼を見た。その事実を無惨は知っている。そしてあいつは世間に鬼の存在が広まることを良しとしない。なら次にすることは決まってる、口封じしかない。」

それにこの町には隠が居たから、上司特権で適当に誤魔化しておかなきゃいけなかったからね」

「……本物は？」

「本物のお二人は医者家でぐつすり眠ってるよ。春夏さんの方はまだもう少し治らなわけだね。それにしても……ふふふ……あつはははは!! 滑稽だったね。まさか無惨が。鬼の始祖が！ 気が付かないだなんて!!」

けらけらと楽しそうに笑う薫に巖勝は確信を得ていた。薫が第二の無惨になること



に。彼女は無惨ほど馬鹿では無いし、頭も回る。その気になれば際限なく鬼を増やせるし、組織として纏まりをもつようにするだろう。

人間を超越した肉体を持つ鬼が統率の取れた動きで襲いかかってくる等悪夢そのものだ。

(かくなる上は……)

何れ自分達は選ぶ時が来る。薫達が完全に日光を克服して、用済みとなつた無惨を滅却したその時、鬼殺隊は第二の鬼の始祖になりうる薫に刃を向けるかもしれない。刃を向けられた薫はその力で以て世界そのものに牙をむくかもしれない。

そしてもしそうなつた時、巖勝は迷わず世界を切り捨てることを選ぶだろう。かつて鬼殺隊にそうしたように。巖勝という特異点が原作の流れを変えている。これから薫や紫明が物語の主要人物と大きな関わりを持つかもしれないし、四百年早く鬼殺隊に協力している珠世は自分達への恩があるとはいえそれこそ上弦に通用するような毒を生み出すかもしれない。

だからこそ、今は仲間を集める時だ。

「薫、助かった。お前が私の妻であることを、とても嬉しく思う」

「嬉しいのかあ……えへへ。喜んでくれたんだ……だつたら私も嬉しいなー!」

巖勝は、得意げに前を歩く薫の髪の一束を指で梳いた。月光を受け止めて太陽のよう

な煌めきを放つそれに、彼の口角は上がっていた。後ろに倒れ込んできた妻の首に手を回して、二人は歩く。

鬼を殺す鬼、佳宵の天満月と鬼殺隊で暗躍する金夜叉。彼らはそれ以前に唯の夫婦であつた。

(時代の流れも、数珠繋ぎとなつた人の想いも全てを斬り伏せよう。私には……否、私達にはそれが出来る)

## 猗窩座の章 エピローグ

麗らかな季節であり新たな門出の季節である四月。春風が桜を散らし、等しく人々を言祝ぐ。基本的に江戸時代の祝言は夜に行われる。朝は仕事がある為、用事は大抵日が落ちてから故に。

今宵は満月。狛治と恋雪の祝言である。

★

とは言ったものの、祝言をした理由は狛治と恋雪の晴れ着姿を見てみたいという慶蔵達の我儘から来るものである。さらに形式を重んじるような伝統も持ち合わせていない故に直ぐに家中は宴会へと様変わりした。大切なのは雰囲気である。あとはあんまり大切じゃないのだ。

「……泣いてんの？」

「泣いてねえっ……!」

「ぶっ……はっはっは!」

慶蔵と春夏。涙の止まらない慶蔵と、それを見て大笑いする春夏。そういう春夏の目

尻に現れた涙は笑い故か慶蔵と同じ故か。どの道幸せの涙に変わりない。二人とも身なりは整えているものの振る舞いは変わっていないかった。埃を被つてよれよれだった着物を押し入れから引つ張り出し、有り合わせの布で補修した。ここには見た目が問題でどうこう言うような存在は誰一人としていない。

「着物は重くないですか？」

「はい。嘘のように軽いです。ふふつ、そういう粕治さんは窮屈そうですね」

「まあ、俺には着慣れないものですから」

「大変似合っていますよ。ですが……やはり粕治さんは動きやすい服がいいですね」

道着は鬼にズタボロにされているし、血糊が酷かった。よつて即廃棄。粕治にとつては思い入れのある道着に違いなかつたが致し方なかつた。今粕治が所持している服は慶蔵のお古しかない。恋雪はなにかしてあげたいと思つていた。

「私、閃きました。粕治さんの服は私が作つてあげますからね」

「えっ!? こ、恋雪さんがですか!?!」

「はいっ! 任せてください。薫様から服の作り方は習つておりました。そうですね……髪の色と同じ桃色に似た服に致しましょう。なんだかやる気が湧いてきました。今部屋から糸を持つてきます!」

病によつて隠されていたが、本来思い立ったらすぐ行動に移す性格は親譲りの恋雪。

そう言って祝言の服のまま襖を開けつ放しにして自分の部屋へ行つた。呆氣にとられていても恋雪のやることなすことは一切止めない狛治。想い人の作る服を着る自分を想像して笑つた。自分は幸せ者だ。

「気合が入っているな」

「綺麗に飾り付けられたと思いますよ。華美過ぎず質素すぎず。予行練習だと思つて取り掛かりました」

この中では一番それらしい格好をしている巖勝と薫。素人が人目見ただけで一級と分かるような着物に身を包み、強靱な体幹で真っ直ぐ背筋を伸ばしている。英傑が跋扈した戦国時代で頂点に君臨していた継国家の長男と、鬼を骨肉残さず焼き尽くす技術を継承し続けてきた一族の異端児。礼儀作法など骨の髄まで心得ていた。二人して座布団の上に正座し、混沌と化した祝言を見守る。

「成程……予行練習とはな」

「本当に……いつになったら連れてきてくれるのかしら。」

……ねえ」

——  
紫明？

薫が座っている座布団は縁側に背を向けるようになっていた。そのすぐ真後ろ。背を向け合うようにして縁側の庭に足を投げ出した紫明がいた。無論、薫の呼び掛けに固まっていた。

父親と同じように腰まで届く長い黒髪。髪のはきは金色に染っている。母譲りの大きな瞳は血よりも赤く染め上げられていた。肩の露出した忍者のような着物と、花柄の上着。そして長い足を包む袴を着ている。

「なんでバレたの？」

「親子故です」

「説明になってないよ!? 父様にはバレなかったし、でしょ!？」

「……………ああ。一厘たりとも心配を感じ取れなかった。流石だ」

「ほらあー！」

「紫明も、誰かと結婚する時はこの何倍も豪華に祝福してあげましょうね」

「流されたし……つてか、うええ。いらぬいらぬ。母様達やこの人たちは人間の時に結婚するつて決めたり、好きあつていたのに。今や私は鬼で好きな人なんていないだよ？」

「分かりませんよ。鬼になつたからと言つて何か抜け落ちるものがある訳ではありません。ありのままの貴方が愛される日もくるでしょう」

「ふんっ。——んな化け物じみた肉体に興奮する男がいたらそれはそれで見てみたいかもねえ」

そう言つて紫明は片腕を翳した。途端、手が赤黒く染まり、植物の根のように枝分かれした。その先は人の顔、腕、背骨、髪の毛、人差し指など常人が見ればそれだけで吐き気を催す違ひない形へと変化した。

ほらほらー。とからかいながら凶腕を薫に巻き付けた紫明。薫は紫明の腕を愛おしそうに撫でた。

「逆に貴方が一目惚れするかもしれませんよ？」

「賭けてもいい。私に恋する人が現れることも、私が誰かに恋するなんてことはぜええ——つたいにないから。そんな私のことより、早く父様や母様を日光の下に出してあげ

たいなあ」

薫は知っている。

娘が狛治達の結婚式を羨望の目で見ていたことを知っている。それを必死に隠そうとしていたことも知っている。親思う心に勝る親心。薫は笑った。きつと現れる娘の伴侶を想像して。紫明が人の皮を被った化け物であることは否定しない。故に紫明に魅入ってしまう存在はどこかもしかしくは全てが人間として欠落しているような存在ではないのだろうか。

「母様？ 何で笑ってるの？」

「紫明、可愛らしい腕を戻しなさい。皆が怯える」

「はあーい。んー……なんとなくちよつと散歩してくるねー。狛治くんも恋雪ちゃんも結婚おめでとー」

「全くもう……あの子は」





鬼が突然乱入することも無く無事に祝言は終えられた。日付も既に変わっている。これより継国家は家に帰る。ただ、門にしているのは巖勝のみで見送りには慶蔵と春夏と狛治がいた。何故か恋雪はいなかった。

「これつきりだなあ旦那。すまねえ、散々迷惑かけて何一つ返せねえ」

「何を言う。貸し借りの絆ではあるまい、今度はいいい酒を持ってこよう」

「ほんとにあんたは……ありがとうなあ

んで、ありがとうついでだが……な」

「どうした」

慶蔵は頭を下げた。狛治は呆気にとられた。しかしさらに続く一言で狛治は狼狽えることになる。

「狛治を連れて行ってやってくれねえか？」

「えっ！」

「構わんが……いいのか？ 狛治」

「なあ、世界を見てこい狛治、あの鬼みたいに狭い世界ばかりみてちやだめだ。これから何百年、何千年と続く人生なんだからなあ。狛治だつて旅してみたいだろ？」

「……正直に言えば俺は願ったり叶ったりですが、恋雪さんは？」

「その事なんだが……恋雪は先に旦那の嫁さんと娘さんに連れていかれてしまつて

なあ」

「あの子は二つ返事で連れていかせたよ。恋雪はあんたんとこの娘さんと話せて楽しそうだったしね。あの様子だと当分帰ってこないと思うよ」

「……私が狛治を断つた時はどうしていた？」

「いや、旦那の嫁さんから、旦那が断るはずもないから先に連れていくだよ。というわけで狛治。」

お前は素流道場、免許皆伝。ここまで良く頑張った」

慶藏は狛治を抱きしめた。続けて春夏とも抱き合った。狛治は涙が止まらなかつた。あれだけ良くしてくれたから、これから一生を捧げて奉仕すると決めていた。だが、心の底では愛する人と旅を試してみたかったのだ。その程度のこと、父親と母親は見抜いていた。

「行つてまいります。父上、母上」

「つ……お前は……しまったなあ。狛治は泣いても俺は泣かないようにしていたのに……こんなに泣く日はもう二度と来ないなあ」

「体に気をつけるんだよ。恋雪をお願いね、あの子体力が戻ってからかなり危なっかし

くなってるから……頼んだよ息子」

「っ……はい!!」



「……行っちゃったね」

「……ああ、そうだなあ」

「跡継ぎもないし……どうするよ、道場。あたしはもう前みたいに動けないしねえ」

「……」

憂いを帯びた春夏の表情。足を見て諦念を隠しきれていなかった。唯一の門下生である狛治が出ていった今、素流道場には慶蔵と春夏の二人だけ。剣道場の嫌がらせが無くなったので多少は門下生になりたいという者が増えていくことはあるだろう。しかし、二人で切り盛りしていた道場なので、春夏の足が悪くなったのは致命的であったのだ。

慶蔵はあの夜を思い出した。月すら出ていなかった夜。慶蔵が巖勝のことを鬼だと知った日。夜風が気持ちよく、晩酌にちょうど良かった。一杯目を飲み干した時、侍が

ふらりと現れたのだった。

.....

「旦那も飲むかあ？」

「頂こう」

静かにそう言いながら酔いも覚めそうなくらい綺麗な正座で座ったものだから吹き出してしまったのを覚えていた。それに怪訝な顔をする侍も面白くてさらに笑ってしまっていた。毒気を抜かれた侍も、口が軽くなっていったので、話題は幼少期の小話や、娘を持つ父親の愚痴へと変わっていった。

「慶蔵は……死よりも怖いものがあるか？」

「……死……かあ……どうだろうなあ、考えたこともなかったなあ。人間、死ぬ時は死ぬからなあ。怖いとか思ったこと無かったなあ」

「そうか……私は……ある」

「……」

「家族が私のせいで害されることだ。それが私にとっては酷く……つらい……耐えられない」

「永遠の課題だ。人は自然には勝てない。俺も肉体はいつか衰える。そうなったらもうそこらの子供に負けてしまうだろうなあ。」

「そうなったら、家族を守れやしないだろうなあ」

「肉体は衰えぬ……力不足故、手が届かずに家族が血の海に斃れる瞬間。想像するだけで私は筆舌に尽くし難い無力感に焦がされる。そうならないよう、私が守らなければならぬのだ」

さすがに慶蔵は察した。今の今までもヒントは沢山あった。日傘や色素の薄い肌、若くしてどこか老人を思わせる言葉の重み。

横で月を見上げている侍は鬼である。そしておそらくは家族も……

「いいんじゃないかあ？」

「いいとは？」

「……なんでだろうなあ……『いい』って言葉がふわっと出ちまった。旦那は美しいなあ。叩き上げた技術を家族のためだけに使うのは……卑怯つてもんだよ。誰にもできやしないからこそ。だれも旦那を否定できねえ。誰もが今を生きるのに必死なんだ。自分のことをやってから他人のこと。俺は旦那を手放して尊敬するよ」

「そうか……慶蔵はどうなんだ？」

「俺か？ 俺は欲まみれだなあ。娘を嫁に出したあとは……道場を大きくしたい。いつ

か素流に大勢弟子が来て、賑やかになって、狛治に道場を譲って……最期は、家族と弟子たちに看取ってもらいたいなあ……」

「お前のも……十分美しいとも。人間らしい望みだ」

「嬉しいことを言ってくれるなあ……次は俺が聞く番だ」

「ふっ……いいだろう」

「旦那はこの世に生を受けて何年になるんだあ？」

風が吹いた。

「……知らん。百を超えてからは数えてないな……」

「はははっ！ その台詞。一度は言ってみたいなあ。んじや続きの質問だ」

「なんだ、まだあるのか」

「これが最後だあ。旦那は、旦那よりも強い存在に出会ったことがあるかい？」

「……一人だけ、そうただ一人。刀を握る度に脳裏にちらつく。それ程までに焼き付いている者がいる。未だに超えられそうにない……あの輝きを……あの熱を……あの鮮烈さを」

「生きているかい？」

「死んだ。憎らしいほど満足そうに逝ったとも」

「なら……」

「そうだ。私が最強だ。あいつがいらない今、後にも先にも私より強い者はいない……私は勝ち続けることで、あいつが紛うことなき最強だと証明する。ただ……いや、野暮か、忘れろ」

「旦那は……そいつが強かったから覚えているのか？ そいつのようになりたかったのか？」

「……」

慶藏の問は答えでもある。少なくとも原作の黒死牟は死の間際にて、縁壺のようになりたかったと本音を漏らしていた。自らが欲するもの全てを持ち合わせている弟。縁壺が兄であれば結末は変わっていたのかもしれない。

巖勝は足を崩した。長い足をさらけ出した姿はいつもの侍ではなく、齡三十程で見た目相応の男であった。

「違うな……………あいつのようにならずとも、ありのままの私を受け入れてくれる存在が居る。月柱、上弦の壺、佳宵の天満月などではない。混ざりものの俺を」

……………

（なんで今になっておもいだしたんだらうなあ。あんな強そうな侍でも何かを抱えて、何かを捨てて生きてるんだ）

次に慶藏は狛治を思い出した。いつもの道着ではなく、着物と袴姿。いつもは道着しか着ていなかったからわからなかったが、狛治はかなり正装が似合う男だった。人は見かけによらない。いい鬼も悪人もいる。鬼も人なのだ。

突然、慶藏は春夏を車椅子から抱き上げた。

「道場なんてど——でもいいんだあ。取り壊して畑にして美味しい野菜沢山作ろう。そしたらまた狛治達が帰ってきた時に鍋ができる」

「はあ？　じゃああんたの夢はどうするんだい!!?　弟子は？　流派は？　夢を諦めるってのかい!?!」

「はっはっは。もしかすると俺たちには野菜づくりの才能があるかもしれないぞお?」  
「話を聞け!」



こうして、素流道場は畑へと様変わりした。この後、すっかり毎年お盆と正月に狛治と恋雪は帰ってくることになる。今生の別れみたいな別れ方をした狛治と慶蔵はしまりのない顔をしていた。帰らない年は一年としてなく、慶蔵達が歳をとって畑が続けられなくなったあとは狛治と恋雪が日傘をさしながら畑を育てた。慶蔵と春夏亡き後は畑を霊園として土地を町に寄付した。そこには毎年二人の命日に訪れる夫婦がいた。

「お墓も綺麗にしましたし、花も供えました」

「ありがとうございます。突然ですが狛治さん……子供、欲しいですよね？」

「は……そりゃ、欲しいですけど、俺たちはもう人間じゃないから」

「巖勝様の言葉覚えていらつしやいますか？」

「はい。あと何百年か後に産まれてくる娘が鬼を人の体質に戻す力を持っていて、その血があれば人に戻れるんですしたよね」

「はい。ですから待ちましよう狛治さん。待つて待つて待つて待ち続けて、失ったものを取り戻しましょう。きつと、浄土にいるお父様とお母様も孫の顔がみたいでしょう」

鬼夫婦。太陽が照らすその時まで。

## 童磨の章 プロローグ

? 素流殺法 破壊殺・羅針?

羅針の針は寸分違わず敵を示した。握り固めた拳が空気を唸らせて虚空を打つ。対象の動きを限界まで察知する羅針を使用して尚、当たらないのは思考が肉体に追いついていないからだ。

打ち出した拳は今までの狛治の体と比べても数倍の速さ。加速した身体を脳が処理できていない。脳機能は繊細で向上させようがないのだ。

? 素流殺法 破壊殺・空式?

「嘘だろ……」

拳を空気圧として飛ばせるのでは?

そう思い安牌な技名をつけて殴れば文字通り拳圧が放たれる。摩訶不思議な脳の指令すら肉体が再現するのだ。武芸者はもちろんのこと、何かを極める上ではうってつけの体と言えよう。

・ 暁の呼吸 肆ノ型 壊劫

相対するは薫。刀を片手に持ち替え、体を中心にして円を描くような四連撃で全てう

ち払った。遠心力を乗せることで一撃より二撃目、二撃より三撃目と威力は倍近く上がっている。

「狛治君、強くなりましたね」

「奥方、猗窩座と。そうおよびください」

「お断りします。夫はなんとという名前をつけたのか。意図が分かりません」

「不満に思つてはいません。この名は自分の本質をこの上なく突いている。加えて俺は眷属のようなもの。なんと呼ばれようと、何を言われようと受け入れるだけです。そこまですべて奥方達に有り余る恩は返しきれない」

「そうですか」

薫は刀を収めた。途端、湧き上がる力の奔流。伸びた爪、現れた二本の大角、唯我独尊の微笑み。鬼の女王としての彼女が顕現した。

「止めてすいません。続きを始めましょう」

再生し続ける肉体と災害に匹敵する膂力。朱金と蒼空が激突する。文字通り化け物同士の戦いが始まった。

★

「石だ」

「? ……はい。石ですね」

「握ってみろ」

狛治達とは塀を隔てて屋敷の縁側。そこには紫明と恋雪がいた。轟音や旋風や土煙が飛び交う塀の外とは違って穏やかな空気が流れている。それでもたまに余波が飛んでくるが。

頭の上に疑問符を浮かべながら恋雪は紫明に言われるままに石を握る。握ると言うよりはどちらかと言えば包み込むに近い握り方をした。形のない空気をそつと集めるようなふんわりとした手の動き。

ばぎん。と粉々に砕け散る石。欠片が数個、恋雪の頬に当たって落ちた。

「え、うええええ……!」

「ははは!! なんだその情けない声はっ!」

「こ、この石って」

「そこら辺の石。どうだすごいだろ、鬼の力は」

「はわわ……もう私、生き物に触れません」

「じき慣れる。それまでは旦那の手でも握っておくんだな」

狛治と恋雪は薫の血を定期的に摂取している。その度に肉体性能の向上は止まらな

い。しかし血を与えた母数が圧倒的に少ないので、重大な副作用があつてはならないとこうして血を与えたあとは動きの確認を欠かさないのだ。狛治は力仕事をよくするので試合で肩慣らし。恋雪は家にいることが多いので軽い運動のようなもので確かめる。「そそ、そうですね。狛治さんなら砕け散りませんよね!! ずっと握つておきましょう!」

「……どの時代も夫婦とは皆こうなのか?」

揶揄うような助言を真に受けたので仕掛けた方が面食らつた。

一時、江戸時代に流行つた娯楽物として『曾根崎心中』などの心中物がある。なんと心中が流行したのだ。

たまたまやってきたから気まぐれに行つたことのある紫明。流行りとかフル無視した個性の塊である組織鬼殺隊に一時期在籍していた為、流行りの重要性は理解している。しかし感想は胸糞悪いの一言である。

「それはそれとして。血鬼術はまだ無理か?」

「はい。毎日練習してるんですが……コツとかは」

「……………やりたいことを頭に浮かべて、それが実現する想像をするとか?」

「なんで疑問形なんですかあ」

「分かんものは分からん」



「羨ましいですか？」

「母様」

素山夫婦は帰ってしまったので何もすることの無い紫明はぼーつと庭の外を眺めていた。そこに薫が現れ、紫明の隣に正座した。対して紫明は胡座を崩したような座り方をしていた。戦闘の汚れがついたためか簡素な着物に着替えてきている。

紫明の父は太陽の香りがするとすれば、母は夜の香りがした。雨上がりの土から香るような、夜風が涼しさと共に運んでくる香りである。

「珠世さんの所へは行かなくていいのかしら？」

「なんか作ってる薬の効果が出るまで数十年かかるみたいで暇を出されたの」

「……暴れすぎて追い払われた訳ではなくて？」

「私は外では頼れる冷静な女だからね!？」

珠世が今作っているのは老化薬。無限の寿命を持つ鬼の細胞が数分のうちに何百年も衰えるような劇薬である。手始めに作ったものは数十年単位で老化の推移を見るものであり、力仕事は必要ないためしばらく紫明はお払い箱である。

「ふふ、それならよかった。さあおいで」

「……」

むすつとした顔をしながらも無言で紫明は薫に撓垂れ掛かる。ゆっくりと薫は紫明の頭を膝に乗せた。夜を溶かしこんだような漆黒の髪が床に広がった。

指が髪を梳く。形が纏まった時、頭の形をなぞるように撫でた。眠気が少しずつ湧き上がってくる。

「いいいいいい。あなたが小さかった頃はこうやってよしよししてあげたのよ？」

「……むう。もう百歳はこえてるんだけど」

「幾つになっても紫明は私の可愛い可愛い宝物よ」

一切隠されていない剥き出しの愛情表現に小恥ずかしくなるも、満更でもない紫明は相手を崩した。文字通りでろでろに甘やかされている。

「あなたがね。鬼にならなかつたら私は、私達は子供を見送らなければならなかつたのよ」

「……」

「いつも感謝してるわ。本当にありがとう。私達と生きてくれて」

薫は紫明の額にそつと口付けをした。鼻腔を擦る香りが紫明を落ち着かせた。

あの時二人は鬼であり、紫明は人だった。紫明にはその気持ちはわからないが、総じ

て子を看取る親の気持ちとは子が想像しても分からないものであろう。親思う心に勝る親心である。

「……………でもさ、生きるのに飽きる日っていつか来ると思うの……………私にも母様達にも」

「……………」

「そうなたら私は」

「ワタシを呼んだかしら!! ええそうよ他ならぬこの優美で至美で美人で可憐で絶佳で綺麗で秀美で高麗で優雅で端麗で美麗で麗美で玲瓏で耽美で美貌で佳絶で素敵で粹美で絶美で絢爛で艶美な美神のワタシよ!」

「天外」

少ししんみりとした空気が霧散する。紫明は少し助かった。きつとあの言葉の後に何を言おうと薫は悲しんだだろう。なにより話題が適切ではなかった。時間はたくさ



んあるからまた今度話せば良い話である。

「もうそろそろ限界よ。穀粉じゃ足りないわ」

「っ……了解」

(あの親共は……!)

紫明は恨み言を吐きそうになつたがすんでのところで止めた。だが刺すような怒りは蟠りとして心の底で燻っている。こうも近くに完璧な親がいるとどうしても比較してしまふのだ。あの毒親達と。

「私、母様が母様でよかつた」

「その気持ちは嬉しいわ。ありがとう。それで何の話かしら?」

「それと母様、離乳食ってどんなものがいいの?」

「」

「わーすごい顔だよ母様」

離乳食↓幼児↓誰の赤子↓紫明↓限界↓育児放棄

「離乳食」の一言が一瞬で薫の脳内で変換、否、誤変換され薫の脳が理解を拒否した。

「なんかね。神の子って呼ばれてる赤子がいるの」

「……なるほど、紫明の子供なのだから可愛すぎて神の子と呼ばれているってこと?」

「紫明！ ちゃんと説明するのよ！！」

## 第壹話 自己嫌悪（童磨視点）

物心ついた時から、オレの世界は灰色だった。

太陽の光すら届かない家の奥の奥。形だけの玉座に居座る子供がオレ。大層な服を着せられてしたくもない厚化粧もさせられて座ってる。少しでも動けば体温が上がり何重にも着込んだ衣装のせいで汗が気持ち悪い。

反抗はしない。というかしたら何されるか分からない。

「白橡の頭髮は無垢な証。この子は特別な子だ」

「虹色の瞳とは……きつと神の声が聞こえてるわ」

オレの両親がそんなことを言う。白い髪と虹色の瞳がさぞ物珍しいんだろう。普通の人間は黒髪で黒目だ。そして神の子と言われて崇められたりしない。

うーん。欠片も嬉しくない。こんなのじゃ足りない。もつと心の底から湧き上がるような……

「雪のようだな、其方の髪は。瞳も、虹彩とはよく言ったものだ」

まただ。ずっと臆気な誰かの面影を探している。寝ている時も、ふと夢に出てくれなしかと願って眠るんだ。起きている時も、目の前で臭い息を吐く可哀想な人の言葉を頭

ごなしに聴きながら記憶を辿っている。きつと誰もが無駄だと思ふよね。でも何か不思議な感じがするんだ。言葉じゃ説明が難しいんだけど。

もう少しで思い出せるはずなのにもどかしい。何の記憶だろう。赤子の時の記憶かな。声の主は母親だろうか。

そんなこんなにて月日が経ち、自分で服を着替えられるようになったオレは変わらぬ日常を無為に過ごしていた。歳は数えていないけどさすがに二桁はいったと思う。あとから知ったけど生まれた日は『誕生日』っていわれるらしい。今更だけどさ。

朝起きると豪華な衣装を着せられて大部屋に移動する。昼過ぎにはぞろぞろと信者が入ってきて、オレに身の上話をしてくる。オレはそれを聞くだけ。日が落ちる頃には信者は帰ってオレは寝る。信者のする話は一言一句全て覚えてる。だって薄っぺらいから。

それにしてもオレがみんなの前で話を聞いている中、父親は信者の女にご執心だ。お気に入り部屋に連れ込んで治療している。子供ってああやって作るんだと知ったけど、この調子だと母親にバレるのも時間の問題かな。

そんな父親がのっそりと前を歩く。何を考えてるんだろう。



ましい!! 申し訳ありません! 申し訳ありません! 申し訳ありません!

オレの髪を掴んで地面に引きずり倒す。ぶちぶちと髪の毛が抜ける音がした。将来禿げちやうかもな。

腹に一発。腹筋に力を入れて内臓への衝撃を極力減らそう。それでも相手は大人の男に対してオレは栄養不足の子供。吐瀉物が口の中を支配するが、飲み込む。胃酸で歯がとけた。

胸に一発。肋骨が軋んで肺が凹み、呼吸が著しく乱れる。運がいい。折れなかった。折れると普段通りの振る舞いが痛くてできなくなる。

殴る。蹴る。殴る。殴る。噛む。引つ掻く。蹴る。蹴る。殴る。それでもオレが笑うとさらに激しくなった。笑うのは不正解だった。でもオレは泣けないから笑うしかない。

「……………っ……………ぎ」

オレは間違えたのだ。どう考えてもオレが悪い。選択を誤った。

こいつに向かつて、父上呼びなど許してくれるはずもないというのに。今日はおかしい。いつもする選択を全部間違える。厄日決定。

「はっ!? わ、私はなんということを『教祖様』に向かつてなんと……………お、お怪我はごぎ

「いませんか!？」

「大……丈夫だよ。許してあげる。聞こえる。神様もそう言ってる……から」

「なんと……神がわたくしめに?」

「うん。気の迷いは誰にでもあるって」

「ありがとうございます! ありがとうございます! 神様! 私は許されたのですね!!」

とても嬉しそうな微笑みだ。オレの両手を大切そうに掴んで傳く。うつとりとした瞳はオレを見ていない。うわうわ。感極まって涙まで流しちやつて。オレは今まで流したことの無い雫。ほんとに涙つて出るんだ。

俺の親の頭の鈍さは絶望的だ。そうでなければ極楽教などというつまらない宗教作れないけど。可哀想に。俺が話を合わせてあげないと発狂して殴つてくるんだから。もうどうしようもないんだ、親の脳みそは。だと言うのにここまで信者を集めたんだからすごいよね。上には上がいるのなら、下にも下がいる。馬鹿は無下限らしい。

「いい子だ。いい子だよ。これからもうやっつて父上を救つてくれ」

「……えへへ」

オレを殴つた手で、オレの頭を撫でる。

間違っているのだ。論理の破綻を指摘したところで何も変わらない。

誰もオレを見ない。正確には子供のオレ自身を見ない。何故ならばオレは神の子であるのだから。神は悩みを持たない。神は万人を救う。神はそのためにある。それ以外はしない。してはならない。

そうだと。オレは神の子だ。幸か不幸か親は馬鹿だから、神の子でいれればいつかきつと愛してもらえる。子供は親に愛してもらうのが子供として正解なんだろう。

だけど問題がある。愛が分からない。なにせオレは親のことが好きじゃないからだ。愛されているのならオレが親のことを好きになるはずだ。愛とはそういうものだ。信者が言っていた。

愛するのなら愛さなきゃいけない。愛されたのなら愛しなければいけないと。……信者でも増やせば愛してくれるかな。

痛む腹と頭を気合いで我慢し、襖を開ける。

「教祖様！ 我らをお救い下さい！」

「教祖様！」

「お願い教祖様！」

「「「「教祖様！」」」」

「なんだい？ 俺が聞いてあげよう。俺が認めてあげよう。俺が救ってあげよう」

「っく！」



聞く。

認める。

救う。

上辺だけのオレの声に無言で頭を垂れる大人達。中にはすすり泣く声も聞こえてくる。可哀想に。自分が騙されているなんて知らないままただ見た目が珍しいだけの子供に哀れまれるなんて。

自分が何者でもないから何かになりたい。若しくは何者でもない自分を受け入れたい。そうして何かになるためには他者からの承認を求める。自分の話を聞いて、存在を認めて、自己嫌悪から救って欲しいんだ。

信仰って「肯定」されたいからだよね。

んー誰にしようかな。信者達にも序列があつて新顔を指名すると信者が怒り狂つて殺した例もあるから最初は常連さんにしよつと。

「じゃあ君。二回目だよね？」

「はい！ お、俺は酷い目にあつたんです」

「何があつたんだ？ 聞かせてくれよ」

「俺は何も悪くないんだ！ ただ、道を通つた女があまりに美しくて！ 気がついたら、へへ、付き人を殺して女を襲つちまつて……城主の姫だったなんてしらなかつたんです

！それで傷物にしたって侍に追いかけられたんだ！」

「そうなの！ それは大変だったね」

「俺はわるくないですよね!!? あんなに美しい女が、不意打ちで倒れる付き人が全部悪いんですよ!!」

口の端から唾を飛ばして必死だね。というか前も似たような話をした。前よりも誇張されているな。虚偽を述べてもこの男の人生はそれだけの質と量しかないんだ。自分がどんな存在かに気がつけばそうはならなかったけど、取らぬ狸の皮算用だ。

「平吉。君は間違っていない」

「お、おいらの名前を……覚えておいて下さった！ ……教祖様！」

「うん。聞いてるよ。大丈夫……」

あれ？ オレの名前って、なんだったつけ？ 親からはつけられてなかったな。かと言つてオレがつけるのもなんか違う気がするな。

“会うのは二回目だというのにもう私と識別できておるのか。赤子とはいえ随分賢い子よな。童のくせして、錬磨されておる”

くそ。あと少しで、もうすぐ思い出せるはずなんだ。靄がかかって見えない。なんでこんなに執着するんだ。ただの記憶だろ？ オレは何を記憶の誰とも知らない人間に求めているんだ？

——  
オレが、

——  
オレが、記憶の人にオレを

——  
認めて欲しいからじゃないか？

違う。

いや違う。

オレは認められている。信者にも……いやそれは『神の子』だ。オレじゃない。両親もだ。オレ『神の子』だと信じて疑わない。じゃあオレは何者なんだ。この世界には極楽も地獄もない。神もない。

『神の子』でないオレは何者なんだろう？

「あーくそ。なんだ。オレもこいつらと変わんねえじゃん」

「き、教祖様？」

「ん……？ あ、ああごめんね。ちよつとした考え事さ」

「もしや神の声が!？」

「そうだよ。神も祝福してくれている。君は間違っちゃいない」

「ありがとうございますだあ……!」

あつさりと嫌なことに気づいちゃったな。ほんとに厄日。まあ正解だからぐうの音も出ない。

だから認めて……だなんて贅沢。こんなに多くの人から施しを貰う代わりにオレは座っているだけでいい。うんそうだとも。親からの愛は期待しない。自分にも期待しない。

親が愛し、信者が信じたところでそれは神の子でありオレでは無い。そしてオレがオレ自身を認めることなどない。この中でオレしかオレが神の子でないと気づいていないから、本当のオレが認められることは無いんだよな。

地獄があるとすれば、オレにとってそれは現世だ。ここまでが地獄。そしてこれからも地獄なんだから。

## 第貳話 邂逅

彼は目覚めた。産まれてから今日まで同じような生活を続けているためか、眠気すらなかった。大きく伸びをして起き上がる。時刻は朝の五時頃。町民は三時に起きて朝の仕事を行うために信者との交流は必然的に日が昇ってからになる。

(なんだろう。この感じ)

見慣れた暗く湿った部屋でもどこか違和感があった。雰囲気がいっつもと違うのだ。空間そのものが拒絶しているようだと思った。ただ事じやないと思って飛び起きる。両親を呼びに廊下を歩いていると、錆びた鉄の香りが漂ってきた。誰かが出血している、それも夥しい程の量を。

彼の心臓がどくんと跳ねた。

両親の部屋の襖に手をかけると、手が震えた。それでも笑顔を貼り付ければ手の震えは止まる。噎せ返る鉄錆の香りに諦念を覚えていた。

思い切って襖を開ける。

「おはようっ」



両親がいるから。教祖ではなく、子供として彼を見る一面があつたからこそ手を上げることが許されていた。もし居なくなるのなら記憶の誰かを探しに行けるかもしれない。信者の話す城や町や花に出逢えるかもしれない。

彼は胸に一抹の希望を抱いた。

「あらおはよう。ごめんさいね」

母親が彼を見た。顔は笑っているのに目だけが上を刺している。もう少し裏返れば白目になるだろう。母親は子供をみていなかった。彼女は今、罪の意識から逃れようと助かる方法を必死に考えている。

謝罪の言葉は誰に対してなのか。

「ううん。大丈夫だよ」

（オレはもう、こいつを救えない）

人を殺した興奮に息が上がり、返り血に塗れていてもそこには母親がいた。手が震えている。彼女はもう精神的に限界だった。棄てられた子供のように情けない顔をし、処刑前の罪人のように媚びた声で子供に話しかける。

「ああ、教祖様、一緒に死んでくれませんか？ 人を殺した私は極楽には行けないけれど、教祖様とならきつと極楽にいけると思うの」

「……」



母親は信者の顔をした。頭を垂れてへりくだり、這いつくばって許しを乞う。目の前の息子に救いがあると信じて笑いかける。刃物は離さない。

継るように伸ばされた血だらけの手を、彼は払い除けた。

「オレ……まだ認めてもらってないんだ」

「あれ？ 教祖様は一緒に死んでくれるでしょ？ 教祖様なら極楽に連れて行って下さるでしょ？」

一步。一步。

躍り寄る母親。逆手に持った刃物が血の光沢に濡れている。目から溢れた涙は、上がった口角に吸い込まれていった。

一步。一步。

後ずさる子供。背を向ければ追いかけられる。逃げてもすぐに追いつかれて刺されるが関の山。身軽にするために少しずつ着物を脱いでいく。

「ねえ。どうして逃げようとするの？ 母さんよ？ ほら、おいで」

（可哀想な人。でもオレはまだ死ねない）

「あれ見て」

彼は母親の背後を指さす。首が振り向く瞬間に勢いよく走り出した。古典的な手である。稼げるのは数秒だ。それでも生まれて初めて彼は親に対して反抗した。文字通

り命懸けの反抗である。

(大丈夫。逃げ切れる。オレは認めてもらって幸せになるんだ)

彼は家の外までの道程を頭の中に描き出す。信者達と集まる場所から先は知らない。しかしこの家はそこまで広くない。玄関はそこからすぐに違いない。

「待つて、待つてよ。待て！」

大きく重い着物が渾身の力で引かれる。その勢いを利用して着物を脱ぎ捨てた。記憶の人物が着せてくれた白い着物だけが残り、母親が掴むのは教祖として振舞っていた時の着物。もちろん母親はその程度で満足しない。

彼は乱雑に襖を開けた。

「血の匂いがするから来てみれば……大丈夫か？ 怪我はないか？ 遅れてすまない。近づいてもいいだろうか？」

彼が襖を開くと人がいた。奇しくも彼と同時に開こうとして彼の方が早く開けたのだ。

(誰?)

疑問が鎌首を擡げる。同時に彼は見蕩れた。今にも母親の凶腕に捕まりそうでも足を止めてしまうほどに魅入られている。

艶やかな黒髪。抑揚の乏しい声。童磨一人を心配してしやがみ込まれた体軀。怪がないか確認のために伸ばされた細い手指。

何よりも、彼が今までに見た人たちとは違う、強い意志のこもった瞳。偶像を虚空に願う信者とは違う。他人を介在させずに生きていける理性が感じられた。

「大惨事だな。よもやここまで狂っていたとは」

「……」

(あつ……ああ。どうして、どうして今まで……忘れていたんだろう)

彼の背後の母親を見て話した言葉には嫌悪の棘が含まれていた。そんな彼女を見上げる彼の脳を狂わせる。現れた女神が人ではないことは既に看破していた。脳内に溢れ出る、彼女との交流。話す鳥に、太陽の香り。全て思い出す。

人並みの感情を持ち合わせていない彼。透明でもなく無色でもなく。純粹。そんな色を持たない彼の世界に彼女の色が一滴滴るだけで色を持つ。

「助けて。全部。まるごと。オレを助けて」

「任せろ」

彼の目が彼女の手のひらで覆われた。彼女にとっては惨劇を見せたくないという至極真つ当な理由。しかし彼は不満だった。再会の喜びが少し落ち着く程度には。

(こんなののために気を使わなくていいのに。死体なんて臭いだけでしょ。でも優しいなあ。オレを守ってくれているんだ)

「わ、わた、私のだ！ 返せクソ女あ!!!!」

「終わったぞ」

べた。人が倒れる音がした。彼は目を覆われているから分からなかったが、彼女は空いた手で手刀を首に落とし昏倒させた。後ろを振り向かせないように彼を部屋の外に出した。

「ねえ、名前はなんて言うの？」

「後にしよう。一先ずご遺体を移動させねば。母君も……どうしようか」

「意味ないよ。そんなことより、名前は？」

「し……夜叉」

「夜叉ちゃん。オレの家族になってよ」

「おうおう。落ち着こつか、餓鬼。…………………埋葬が先だ」

夜叉は心の底から動揺していた。憧れに似せた口調が崩れかけるほどに動揺してい

た。とんでもない家庭崩壊の現場を抑えて子供を救い出せたのは良かったが、その救った子供がとんでもなかった。

彼女は今まで生きてきて狂った子供は何人も見てきた。ここより酷い家庭環境も幾つかあった。しかし目の前の前の子供のように全てを受け入れて役に徹しながらも正気を保ち、さらに両親を欠片も愛していないのは初めてだった。叶うのならばさつさと寺に任せてしまいたいぐらいに面倒。

「いいよそんな。君の手を煩わせたくない」

「……埋葬は決定事項だ。だがお前の意見を尊重しよう。埋葬は発見した信者に任せる。そして、お前と家族にはならない。お前を寺に預け、私は帰る」

「そんなことしてオレを置いていったら、自殺するからね。オレ。さつき死んでたヤツら……世間体にいえば両親だね。そいつらから神の子と崇められてたんだ。これでもうやることも無いしオレは死ぬつもりだったよ」

「……」

「でも君が来てくれたから。オレは生きてもいいって気持ちになったんだ。君がオレを生きさせようとしたんだよ。君がいなかったらオレは母親に刺されて死んでいたしね」

心からの本心で夜叉を見つめる子供。本当に夜叉は救ったのか。鬼のような両親と引き離して正解には違いない。頭も悪くなさそうだからある程度の職に付けば食いつ

ばぐれることは無い。それでも人でない自分が将来有望な子供を連れ回していいのか。  
「……隣町にもうひとつ寺がある。そこにお前を預ける。それまでの道のりはかなり長い。気が変わることを期待しておけ。駄々を捏ねたら置いていく」  
「うん！ うんっ！」

彼は夜叉の足にしがみついた。二度と離さないように強く。強く。

血の飛び散った部屋。死人が一人。昏倒が一人。子供が一人。鬼が一匹。しかしながら一番人間らしいのは鬼であった。

「其方の名前を聞いていなかったな。なんと言うのだ」

「ないよ」

「は？」

「いや、オレの親はオレを神の子と崇めるだけで名前なんてつけてくれなかったからね。そうだ！ 夜叉ちゃんがつけてよ」

「……歳は？」

「知らない。二桁はこえてるんじゃない？ こえてないかも？」

「……」

(……前にこいつをどう表現したっけな)

夜叉は思い出す。言葉すら話せない赤子。しかし自分の顔を会って二回目で覚えられた。それに驚いたのを覚えている。次会った時には冠を被せられ、嫌がりもせず被っていた。また次の日にはずっと笑っていた。笑うことが相手を安心させると分かっているのだ。

何でも受け入れ、飲み干し、相手好みの自分を作る。

(子供のまま、磨かれて、磨かれて、消えてしまいたいそうだな)

「ああ、そうだ」

——名は童磨。童磨だ

「オレの名前……」

「おめでとう」

「え？」

「今日がお前の誕生日だ。何かと不便だからな」

「誕生日。オレの？」

「元服は……まだいいか」

そうこう話しているうちに二人は家の玄関へとたどり着く。少し広い玄関の見た目はただの家だった。童磨は少し拍子抜けした。

適当な草履を童磨に履かせ、童磨は産まれてから初めて外に出た。

「なに……これ」

太陽の光に目を細めた。直視しようとした彼を、目が痛むからと夜叉が止めた。己の足で弱々しいながらも大地を踏みしめるが、屋内生活で衰えた筋肉ではふらつきは抑えられない。血の香りも、香水の匂いもしない外の世界は言葉を失う。寒さも忘れて少しの間放心していた。

あたりは銀世界。季節は真冬。あらゆる生物が眠りにつく時期。

「これは雪だ。見てみる」

夜叉は雪を手のひらで掬って、童磨に見せた。

「結晶がみえるか？」

「掬わなくても見えるよ」

「ほう、目がいいな。お前は鷹司にでもなれるか」

「そんなのいいから傍において」

「……なるほど……なるほど……なるほど、虫眼鏡になりたいのか？」



夜叉は童磨を隣町まで連れていくことを後悔していた。主に重すぎる思いが理由で。道程は長いが、自分を諦めてくれることを期待することにした。

「はあ……行くぞ童磨」

「うん！ 夜叉ちゃん！」

## 第参話 萌芽

そんなこんなで旅をすることになった二人。数日かかる隣町の寺までに山あり谷ありの難所である。夜叉は飲まず食わずでも問題ないが、育ち盛りの子供一人連れていくのだから行程は休み休みでなければいけない。

童磨の着物は血に汚れていたのもあり、簡素なものに着替えた。そして子供が山を越えるためには準備が必要である。季節も真冬と来れば入念にしなければならぬ。

宿で一晩過ごし、ふたりが出会って初めての朝、それは起こった。

「夜叉ちゃん。はい……………よ」

襖を開ければ、胸と腰に簡素な服を着た夜叉が今から着物を着る直前だった。

因みにこれらの下着はかなり昔に巖勝が前世の知識から作り出したものである。もちろん製作過程で薫と一悶着あった。主に情報源について。

「……………む」

「……………」

童磨は頭をガツンと殴られた音がした。物理的なものに慣れてはいる。しかし精神的な衝撃は初めて。くらくらとよろける。今の今まで性的な興奮は知らずに生きてき

た。子供の作り方は知っているものの、何に興奮するのか童磨は理解不能。そうやって女で破滅する信者を哀れんでいた。もし自分が信者の立場なら欠片も揺らいだりしないし、手を出すのも以ての外。

(……つて思つてた過去の自分を殴りたくなつた)

浮き出た鎖骨。形がよく、決して小さくは無い膨らみを押し上げる下着。肩紐が張つている。薄く筋の入つた腹部は括れ、体の半分を占める足は傷一つなく伸びている。童磨の視線は自然に吸い込まれた。逸らそうとしても欲望が勝る。それは有り体に言えば、性癖の壊れる音。

「わ!? ごめ、こめんなさい!!」

「……別に見られても減るわけではないから構わ……なんだその顔は」

「んー? 夜叉ちゃんは所構わず裸を見せる露出狂か何かかな?」

「なんだと餓鬼」

「童磨だよ。忘れたのなら覚えて」

「わかつた餓鬼。黙つて襖を閉めろ。でなけりや目を潰す」

分かつてないじゃん……と、言う前に童磨は襖を閉める。旅をしていて嫌という程分かつたのは、不機嫌な時の夜叉は手に負えないこと。彼女はやると言つたらやる女である。

「……」

童磨は何事も無かったかのように笑って廊下を歩き……

……そしてへなへなとしやがみこむ。何せ心臓の鼓動と呼吸が合っていない。ぺたぺたと顔に触って高い体温に驚く。平静を装っている筈が、全く装えていない。脳裏に浮かんだ夜叉の下着姿が焼き付いて離れないのだ。忘れようと、記憶からかき消そうとするほど思い出してしまう。

「わ…………や…………」

恍惚とした笑みを手で覆い隠す。これではまるで変態。見てしまった罪悪感、見ることが出来た幸福感、見てはいけなかった背徳感。

(マズイ。あれは、あれはもはや毒だ)

「なんだ。私の体に興奮したのか」

「うわあああああああ!?!」

突如、童磨の顔のすぐ横にしやがみ込んだ夜叉が現れた。着替えも済んだようである。もの着物を着ていた。羞恥心に顔を手で覆った童磨。純粋な反応に夜叉は悪戯心を刺激される。

「いつの間に…………」

「外面は十程度とはいえ、内は立派な大人か。ませているな」

「あ、いや。ち、違う」

ここままで取り乱した童磨を見ることが出来て、夜叉は満足した。

「くくつ。まあいい」

「……つてか何その格好」

夜叉は傘を頭に紐付け、蓑を背負っている。ずんぐりむつくりな体型。そして童磨一人は入りそうな風呂敷を抱えていた。

「何も……ただの山登りだが」

夜叉がそう言い放った瞬間、ギシギシと雪の重みで屋根が軋む音がした。そして大勢の男達が二人のいる廊下を走り抜けていく。

「まずい。屋根の雪を下ろせ、潰れてしまうぞ」

「ええい、男を呼んでこい！ 十人じゃ足りん！」

「吹雪で外に出られません！」

忙しなく通過していく彼らを童磨は一頻り見送った。そして笑っている夜叉を見据え、嫌な予感から目をそらす様に踵を返した。先程の興奮は既に吹き飛んでいる。

「へえ、楽しんでね」

「おおなんと偶然か。喜べ、お前の分がある」

夜叉が掲げたのは一回り小さい傘と蓑。童磨に拒否権は初めからなかった。



童磨の胸ほどまで降り積もった雪。当然歩くのすら儘ならない。しかしここに人外あり。夜叉は脛で雪を押し分け、足裏で踏み固めて道を作りながら行進していた。そうすれば唯の道と変わらない。彼はその後をただ歩けばいいのだ。

休みながらもそうやって歩くこと一刻。

「はあ……はあ……」

童磨は膝に手を着いて乱れた呼吸を整える。対して息一つ切らしていない夜叉は雪道をすり足で歩いていたというのに余裕の表情。

「何？　なんでこんな所に連れてきたの？」

「お前の体力づくりというのもあるが……さあ、見てみる」

顔を上げれば、眼前に広がるは雄大な景色。幾つもの山嶺が天を突いて聳え立つ。隣の寺へは山が隔てているからこそ、ついでにと登ることにしたのだ。

天に星が流れている。紫に光る星。錆色に光る星。堕ちて輝きを失う星。自らを燃やして輝く粒は折り重なり、ひしめき合う。隙間は暗黒に塗られていた。満天の星空が煌めいている。

夜がその質量を以てのしかかる。誰もが言葉を失い、ただ魅入られるしかない絶景がそこにはあった。

「……きれいだろう。ここに来るのは数回目だが、何度観ても美しい」

夜叉は見蕩れていた。太陽を拝むことは叶わぬ身なれど、星影の抱擁が彼女の内を満たす。

対して童磨はというと、何も感じなかった。信者の話の中には星空もあつた。あつたのだが、いざ見てみればそうでも無い。変に期待した分落胆も大きい。彼にとつて絶景は唯の風景足りえない。

「……」

(……絶景ね。こんなもんか。なら城も、海も、果てはこの世界も全部……)

童磨はその辺の岩に座り込む。火照った体にはひんやりとした感触が心地よかつた。

「オレはここでちよつと寝るね」

「む……そうか。私は彼処で星を見ている。上着は？」

「暑いから置いてく。さっさと休みたいんだ」

「そうか……ならいい」

眉を少し下げて悲しそうな顔をする夜叉。彼女はもう少し童磨が何か感じてくれると思っていた。しかし夜叉の喜ぶように美辞麗句を並べ立てた口も、疲れて開かない。

今の童磨には罪悪感を感じる余裕すらない。もう星空はどうでもよかった。彼は達成感という、初めての高揚に浸りながら休むことにした。

「よいしょつと」

夜叉から少し離れて平らな岩に寝そべる。そうすると張っていた足にじんわりとした痛みが広がる。相当疲れていたようだ。えも言われぬ快感に童磨は少し口角を上げた。

確かに夜空は綺麗だろう。その輝きは父親が溜め込んでいた石に似ている。しかしそれだけ。

童磨は分からなかった。

あの父親はこの星空を見てもあの石ほどの価値は感じないだろう。夜叉はあの光る石を見ても眉一つ動かさないだろう。その違いはなんなのか。自分は父親にとって宝石だった。しかし自分は夜叉にとっての星空になりたい。

（オレには何が足りてない？ この星空にあつて宝石に無いもの……）

何かを示さなければならぬ。自分の存在理由となるなにかを。でなければ数日後に今生の別れとなってしまう。夜叉は金銭には無関心。男を宛てがうのは色んな意味で論外。

施されて生活し、対価として肯定する。そんな人生を歩んできた童磨だが、今回は真



逆。童磨は肯定された。しかし相手は何も求めない。

そうして考えていると体がふるりと震えた。いつの間にか時間が経っていたようだった。

起き上がる。考えるのはあと、風邪を患えば失望させてしまうかもしれない。旅の途中で置いていかれれば全て御破算。まだ体温が下がりきらないうちに山を降りた方がマシだとおもった。

上着を取りに、そして下山の意志を伝えるために夜叉の座る所へ向かう。

童磨が見つけた夜叉は長い足を投げ出し、後ろに手を着いて空を見ていた。夜叉らしからぬ子供のような座り方。童磨は少し呆気に取られた。

「ああ、本当に綺麗だな。うん。変わらない。夜は、月がいい。太陽と一緒に……暁もみればもつといいがな。

変わっていく世の中、変わらなければいけない世の中でも……変わらないものがあったもいい。そうは思わない？ 君も」

「っ……」

砕けた声。素なのだと童磨は思った。夜叉は口調が変わっていることを自覚していない。

童磨は見た。

目に焼き付けた。

山なんてどうでもいい。風景に高揚し、頬が染まっている夜叉の横顔から目が離れない。幾億の星が輝く夜空はただの背景に成り果てた。風の唸る音しかない世界、二人だけの世界。邪魔ひとつ入らない。心の底から永遠を願う。

「うん……すごく綺麗」

この瞬間、童磨は産声をあげた。

口の端から言葉がこぼれる。失望されないように、期待されるように考えてから話す癖のついた童磨が無意識に言葉を話す異常事態。

互いに視線も心も、奪われる先は違えど定められた色は同じ。

「ああそうだろう。そうだと……つと」

童磨は不意に夜叉に抱きしめられる。両手を掴まれ、目に布を巻かれた。

「ねえ」

「しつ……黙っている。私がいいと言うまで布は外すな」

人影が山の崖を登って現れる。痩せ細り干からびた皮膚を持つ鬼である。特徴的なのは頭部。蠅の頭を取ってつけたような二つの大きな複眼と百足を模した口。

「お。ちようどいいくらいにニンゲンがイルじゃねえか……キツキツ。こんなガキなら俺でも喰えるぜ」

口の端から涎が溢れる。常人なら目をそらす様なおぞましい姿。

「悪いが、こいつには指一本触れさせん。回れ右して元来た道から去れ。というか落ちろ」

「キツキツキ。同族か、引っ込んでイロ。腹が減って仕方ナイ。俺は手間をかけずに殺せる子供が好きだ。味もいい。そうやって楽して強くなればあの方から血を貰い出世デキル。豪雪で人の数が減ってイタからちようどいい。そいつを殺して下山スルとする」

夜叉に向かって躊躇り寄る鬼。なぜか鬼に向かって一歩踏み出す童磨。

彼女は手で制した。童磨はそれを無視して進む。外すなど言っていた布も解いて捨てた。夜叉の手に当たろうがお構い無し。鬼と夜叉との間に立って鬼を見据える。異形を見ても彼はおぞましいとは思わない。

彼は知っている。本当に怖いのは心の歪みだと身をもって知っているのだ。

「おい下がれ」

「んー？」

「下がるんだ」

「……オレには名前があるんだよ。知ってた？ だれがつけたんだっけ？ 怖くないよ

オレは」

「……童磨。後で覚えてろ。お前には危機管理能力が欠けてる」

——大丈夫

そういつて振り返れど、夜叉はいなかった。

二人のいる山は少し特徴的である。山道の方は緩やかだが、反対側は崖と見間違うほど急な斜面なのだ。更に鬼は崖の方から現れた為に崖を背にしている。

つまり、落としてくれと言っているようなもの。

目前に立つ童磨の延長線上に鬼がいる。彼が夜叉の方へ振り向く速度に合わせて背後に回り込みながら鬼に肉薄した。童磨には夜叉が突然消えたように見えた。童磨の目はかなりいい。但しそれは人基準で比べた時。

「崖登りお疲れ様」

放たれた鬼の膂力。

驚く鬼の顔面に拳を叩き込む。頭蓋が陥没し、首の骨が軋み、筋が連続して絶たれる音を聞きながら鬼は落ちていった。死にはしないが再生には時間がかかるだろう。

「ギャアアアアアアアアアアアアア!!!」

情けない叫び声が朝の山々に木霊する。夜叉が崖を見下ろすと血飛沫を迸らせながら鬼が落下していくのが見えた。途中で岩にぶつかり首がちぎれとんだ為、再生はより遅くなるだろう。

「気分爽快」

夜叉はぐつぐと大きく伸びをした。あの鬼は母を通じて鬼殺隊に報告することに決めた。好きな景色が汚されるのは彼女の望むところではない。

ふと、童磨が足にしがみついていた。衝撃で体が揺れる。彼は泣いていた。

「やっぱ怖かったな……」

「なあ、やめろ……見てるこっちが辛くなる」

「なんのこと……?」

「その嘘泣きだ。涙というものはな、心の底から感情が揺さぶられた時に流すものなんだ。笑って、悲しんで、苦しんで、怒って流すものだ。だがお前は心が揺れていない。気持ち微塵も揺らいでいない。だから。今すぐ。やめろ」

「へ?」

ひゅつと涙が引つ込んだ。夜叉の指摘は凶星。彼女の目にはおためごかしの百面相は効力を発揮しない。感情の昂りは肉体に影響を与える。脈拍の上昇はもちろんのこと、特定の血管も膨張と収縮を始めるのだ。

「オレの本心が分かるの?」

「生まれつき人の感情には敏感だ。特に血の流れにはな。だから無理して感情を作るな。それをするなら私以外……私とあと数人以外にしろ。少なくとも私の前では偽るな」

「はぁーい」

感情の偽りは夜叉には効かない。逆を言えば、先程童磨が夜叉を見て綺麗だと言ったのは偽りない本心だという証拠。紛うことなき感情の芽ばえ。しかし童磨は気が付かなかった。

「先程も言ったな。お前には危機管理能力が欠けていると。だが反省も後悔もしていない」

「うん。いいね、オレのこと分かってきたじゃん」

「はぁ……ならば、体を鍛えろ。歳若いうちに鍛えれば後々得をする。遥かに格上相手に怯まないのは豪胆で勇敢だ。誰にでもできることでは無い。但し格上過ぎれば蛮勇

となる。今みたいにな」

「ふーん。じゃあ夜叉ちゃんを守れるぐらいに強くなるね」

「……やってみろ。できるものならな」

童磨の言葉に夜叉は威圧を込めて答えた。彼女が追いかける背中はまだ遠くとも、追いつかせてやる気など毛頭ない。自らは月から生まれ、太陽に育てられた星。越えられるわけが無い、越えさせるわけが無い。

「つていうかさっきの生き物なんだったの」

「鬼だ」

「鬼？」

「人を食う、人間よりも欲望に忠実な生き物だ。寿命は無いから殺すしかない。殺すのもひと手間いるがな」

「ふーん」

夜叉は吐き捨てるように言った。彼女はああいう鬼を自分と同族とは思いたくない。自分はその屑鬼とは違うと自負していても、第三者からすれば同じ穴の貉だと言われても仕方ない。同族嫌悪とはよく言ったものだ。

童磨は興味無さそうだったが、夜叉は聞いてみることにした。

「……………お前は、どう思う？ あのような化け物が存在することを」

「……………鬼ってああいうのしか居ないの？」

「いや、鬼が生まれる理由は二つある。自分で鬼になったか、誰かに無理やり鬼にされたか」

「んー。無理やり鬼になったんなら、仕方ないんじゃない？ 誰かに引導を渡されるまでそういう生き方を決められたようなものだからね。って考えるとオレって鬼みたいだね」

童磨は茶化すように笑った。

「……………なら、自分から鬼になった人はどう思う？ 醜悪だと思うか？」

ひゆるりと風が吹いた。

童磨は夜叉が人では無い、つまり鬼だということに勘づいている。しかし夜叉は童磨



に正体を勘づかれていたとは知らない。

崖を見下ろす夜叉の表情は後に立つ童磨には分からない。心做しか声は微かに震えを帯びている。彼女はなにか言葉を欲している、これは童磨の得意分野だった。しかしそうでなくても答えていただろう。

「ううん。そうは思わない。結局決めるのは自分の心だからね。いい人が鬼になればいい鬼になるし、悪い人が鬼になれば悪い鬼になる。見た目が鬼か人かなんで案外どうでもいいんじゃない？」

すらすらと言葉が出てくるのは彼にとつて本心であるから。童磨の知る鬼は夜叉のみ。夜叉が悪い鬼とはどうしても思えなかった。

「そうか」

夜叉は鬼の血がついた拳を布で拭き、崖に捨てた。赤黒い染みが付いたの布は風に吹かれて鳥のように落ちていく。彼女はしばしそれを眺めていた。

「下山するぞ」

彼女はそう言うと山を下り始めた。童磨の返答に何を思ったか彼には分からなかった。それでも間違つてはいなかったと彼は思う。

心倣しか、上りよりも休憩は多かつた。

## 第肆話 子供達

「なんだ。こつち側には雪は積もっていないのか」

「オレとしては嬉しい限りだよ。身体中痛いからね、もう休みたいや」

体全体から疲れたオーラを撒き散らす童磨。夜叉は不意に彼の二の腕を触り、数回揉んだ。そして硬直した。あまりにも細すぎる。

「く、くすぐったいよ」

「そうか」

(体づくりも本格的に考えないと。つていうか人多いな)

見渡すばかり、人、人、人。争いの世が終わり、平和を享受する人々は活気ある町を作った。今や刀や槍ではなく、商品が世を回している。人という資源が減らされない戦いに明け暮れるもの達。全ては今日を生き抜くため。これを平和と呼ばずなんと呼ぶ。

二人が歩くは外様大名の城下町。厳寒を乗り越え、一足先に冬の終わりを感ずる一日に、人は浮き足立つ。朗らかな笑顔を全面に出し謳歌する。

「……」

そんな人々を童磨は睨みつける。浮き足立つのは人だけではないようで、跳んできた

蛙を童磨はわざと踏みつけた。それは草履が滑るほどの体液を溢れさせて死んだ。

嫌でも聞こえてくる笑い声が猿のようで童磨は嫌気がさした。元々人自体があまり好きでは無い彼は、静謐で満たされたあの星空の下に戻りたいと思ってしまう。

「やはり目立つな」

「夜叉ちゃんの方が目立ってるよ」

「それは当たり前だろう。女が刀を差しているからな」

刀を差す女。それだけで変な噂は流れる。討ち取られた夫の仇討ちだとか、当主の妻の付き人か。江戸時代の結婚は常に同格の家同士。恐らく武士の嫁と、似ても似つかない奇妙な子供。話題の種にはもってこいなのだ。

「ほう。眼福眼福」

「なんと。あれはどここの姫ぞ」

そして何より、女の容姿が優れている。無愛想な顔すら彼女を美しく引き立てるのだ。

童磨は不躰な男達を睨む。人が嫌いなのはもちろんのこと、夜叉が衆目に晒されることはもつと嫌いだつた。

（そういうことじゃない。そういうことじゃないんだよ）

童磨が燻った感情の置き場を探していると、頭に夜叉の手が乗せられた。

「私よりもお前の方が目立っているぞ。そこまで綺麗な髪と瞳を持っているのだ。堂々と胸を張って歩け」

「……」

童磨はキュツと頬を締めた。一言、たった一言で全て許しそうになる。我ながら安心だと彼は思った。既に堕ちきっている。まだ子供でこの執着。大人になる頃は想像に難くない。

「……どーせ、みんなにそんなこと言ってるんでしょ」

「なんの話だ。思ったことを口にしただけだ」

「っ……人たらし」

「褒めているのか？」

夜叉は通りに蕎麦屋の看板を見つけた。蕎麦が消化に悪いことは知っているが、とりあえず腹持えの必要がある。ただでさえ童磨は育ち盛りの子供。痩せているとなれば一日六食でも食べさせてやりたいのが彼女の本音。

「そばだ。食ってくぞ」

「好きなの？」

「知り合いの夫婦が蕎麦屋を営んでいる」

「ふーん。友達いたんだ」

「友達……か」

夜叉の脳裏に過ぎる二人の剣士。

理解しているつもりだったが、理解している気になっていただけ。自分は友達だと思っていたが、彼らはそうではなかった。

「どうしたの」

「なんでもない。友達というか仕事仲間だな。徒手空拳ならば私より強い」

（絶対なんでもないわけじゃないじゃん。でも仲間がいるんだ。オレが居なくても君は大丈夫だろうけど、君がいなくなったらオレは……）

（私以外の抛り所を見つげなくちゃ。うーん。私が助けたからこんなに懐いてくれてるんだよね。雪山ではあんなこと言ってくれたけど、所詮は泡沫の刻。すぐに忘れるよ）

夜叉は根本的に童磨を理解出来ていない。なぜなら彼女は生まれた時から世界にも親にも愛されていたから。子を愛さない親がいるのは知っている。子は親を選べないことも知っている。知識はあるが実感はない。

彼女は思う。もし自分が鬼だと、人を食うバケモノだと知られたらきつと童磨は拒絶するだろうと。だが万が一、雪山の言葉が心の底から思っているのなら。嘘ではないにしろ信じてみるのも……

（いや、どうせすぐにいなくなっちゃう。あーあ。童磨君はいい子だな。ちよつと思ひ

入れしちやったけど、情が湧く前に切り捨てるべきだったかな)

鎌首をもたげた希望は掻き消された。既に彼女は見切りをつけている。家族さえ無事であれば、それでいいのだ。失望は期待してこそ感じるもの。

根拠の無い期待は自らを傷つけるだけなのだ。

★

一時的に重苦しい空気にはなったものの蕎麦も食べ終わり、とうとう二人は目的地である寺まで着いてしまう。

童磨は子供なりにあらゆる手を打った。五体投地で暴れても引き摺られていくだけ。逃げ出そうにも起こりを潰される。泣いても嘘泣きとすぐにばれる。

つまり、詰み。そもそも、もとより詰んでいた。

石階段の先にある大きくも小さくもない山寺。腐食した柱には蔓が巻きついている。どこか物々しい雰囲気童磨は尻込みした。

夜叉にとつてそんなの何処吹く風。歩みを止めることなく進み続ける。

「……臭いな」

「え？ なんの香り？」

「ああ、すまん。こちらの話だ」

(藤の香。なぜ陽光の射す昼間に焚いている？ まあ耐えられる程度か)

本能が受け付けない香り。鬼にとっての藤の花の香りは常人にとっての刺激臭や腐臭に当る。しかし今回は悶絶する程の濃さではない。

夜叉は寺に上がり込み、声を張り上げた。

「住職はいるか！」

暫くすると足音が近づいてきた。

「ここに。私が五木寺の住職をしております。悲鳴嶼敏道でございます」

寺の奥から顔を出したのは、かなり小柄な住職であった。黒い法衣に茶色い数珠。丸めた頭に柔和な瞳。この時代の僧侶は有り体に言えば戸籍の管理者。死者を埋葬し、一帯の寺行事を請け負うまとめ役である。

「夜叉だ。独特な香りの香だな」

「……鬼避けでございます。太平の世とはいえ物騒でして、お気に召さなければ直ぐに消しますが……」

「構わん。嫌いでは無い」

夜叉と童磨は寺の中へと通される。敏道が童磨を見て少し驚いた顔をする。しかしすぐに素面へと戻した。彼は既に好奇の視線には慣れていた。

中へと通された二人。仏壇に鎮座する仏を見て、童磨は失望した。わけのわからない偶像に神を想像するのは自分の親と同じ。規模が違っててもやっていることは変わらない



い。みんな馬鹿で、可哀想で、救いようがないのだ。

(オレが神ならこんな世界焼き払ってるね。いや、凍りつかせているかな。熱いよりも寒い方がつらいからね)

そんな童磨の不機嫌を無視して夜叉は住職と話をすすめる。

「単刀直入に言う。この子供を寺で預かって欲しい」

「……あなた様の子ではないので？」

「そうだ」「違う」

二人の声が重なる。童磨の声は涙ぐんでいた。

「この人は<sup>みなしこ</sup>だ。オレを拾ってくれたんです」

「<sup>×</sup>では無い。家族に虐げられていたから救った。それだけだ。私とはなんの関わりもない」

「家族にしてくれるって言った！」

「言っていない」

「言つてない(た)」

不毛な応酬。住職が手の平を二人に向けると揃って二人は黙った。

「子の意志は尊ぶべきもの。今一度、お二人で考えられてはいかかでしょう。泣くほどあなたに情を向けられていらっしやる様子。無碍にするのは些か道理に反するでしょ

う

「……ああ、そうさせてもらおう」

「ふうふう」

★

二人は寺を去っていった。敏道は一礼して見送る。その姿が完全に見えなくなるまで頭を下げていた。恐る恐る頭を上げると既に二人の姿は無い。

「……小僧はいるか!」

「はい! 和尚様」

床を駆ける音と共に現れた小坊主。床すら抜ける勢いで音を鳴らし駆けつけた。

頭を丸め、炊事用の白い前掛けをかけたまま現れたのはこの寺で修行している子供である。修行とは名ばかりで、実態は小間使いや雑用と言った方が正しい。

「小僧、喋る鳥に鬼が現れたと文を持たせる。狼煙を上げよ」

「へ?」

鬼。その言葉に坊主の思考が一瞬停止する。なぜなら今は昼間。鬼が出る時間では無い。有りうるのはあの見目麗しい女。女性を見る機会がない坊主は事実、夜叉に見蕩れていた。そして隣の童磨と目が合い、逸らした。

「あの女は鬼よ」

「し、しかし香を放って尚あの女性は嫌がる素振りを見せませんでした」  
「だからこそだ」

困惑する坊主に対し、文を書く用意をしながら敏道が答える。

「夜は濃いものを使っておるが、昼間のあれは香を薄めておる。普通の鬼が耐えられる程度にな」

「なんと」

「鬼は皆、耐えられるのならば怪しまれまいとそう思うのだ。望み薄だったが、よもや昼間にすら鬼が出るとはな。前代未聞だろうて」

「ならば女の方は鬼だとして、あの奇妙な白い子供は人でしょうか、鬼でしょうか」  
「……」

坊主の疑問は最もであると敏道は思う。見た目でいえば子供の方が香に違和感を覚えていそうなのだ。第一、鬼は日光を嫌がるというのに女の方は無傷。

「わからん。だがあの女、恐らくただの鬼では無い。噂に聞く太陽の影響を受けにくい鬼かものう。一応最高戦力を要請するとするか」

「さ、最高戦力……」

「然り。柱と呼ばれる鬼殺しじゃ。あれは最早人の枠に収まらぬ暴力よ。表舞台に出て

いればこの国の歴史は変わっていたかも知ない」



翌日、適当な宿屋で二人は夜を明かした。特に会話もなく、詰められると覚悟していた童磨は拍子抜けした。

「ん……………」

童磨は肌を撫でる風と仄かな陽光に目を窄めた。形の整った臉がゆつくりと開かれ、虹を映した瞳を晒す。隣でとんでもない大きさの軒をかいていた夜叉はどうにおらず、あるのは丁寧に畳まれた布団だけ。

『この子供をこの寺で預かって欲しい』

「っ!？」

昨日のことを思い出し、勢いよく起き上がる。眠気はとうに覚めた。自らの足元が覚束無い。冷や汗か流れ、逆に体温が上がる。

端的に言えば、彼はパニックになっていた。

「アハハ」

早く気が付かなかつた己を叱咤する。この街に來た時点で夜叉の目的は果たしたやうなもの。例えここで童磨を置いていったところで、優しい誰かが寺に預けるだろう。もしやするとそういう手筈だったのかもしれないと童磨は思った。

もしやすると、既に遠くへ……

「はあつ。はあ……。どこ！ どこにいろの!？」

半ば過呼吸になりながら廊下を走る。夜叉と共に山を登つたのだから、体力が極端に低い訳では無い。動悸がするのは彼の被害妄想のせい。彼の本能が告げているのだ。彼女を失つてしまえば、自分は完全な伽藍堂となる。裏切られた恨みも探し出す気力も湧き上がらないやうな虚ろ。

まるで皮肉にも神のような存在。

時折すれ違ふ下女が声をかけてくるが、童磨は気が付かなかつた。彼女以外の生物は背景。彼女の言葉以外は雑音。彼女が映る景色以外は風景。

灰色がかつた世界が彼を包み込む。童磨のいない童磨の世界。

「いやつ。嫌だ！ 嫌嫌嫌嫌嫌」

「朝っぱらからうるさいぞ」

「…………え」

透き通る世界に彼が存在する。

自分の心音が聞こえ出す。世界に、生きてていいと肯定された気がした。彼はもう、夜叉なしでは自分を維持できなくなっている。魔性の魅了は確かに受け継がれている。

「夜叉ちゃん？」

「なんだ、幽霊でも見たような顔して。化け物でも出たか？」

「夜叉ちゃんあああん！——ぶっ」

まさか飛びかかってくるとは思わず、夜叉は反射的に平手打ちをしてしまった。喜劇のようにくるくると転がり、壁に衝突した。着ていた着物はちょうどよく緩衝材になり、打ち身すらなかつた。

「急なんだお前……………は」

「ごめ、ごめんなさい！　だから置いてかないで！　オレ、何でもするから！　めいっばい働かし、役に立つよ！　今はまだできることは少ないけど、掃除もする、料理も覚える、邪魔な時は部屋の外にいるから！」

「……………」

泣き腫らし、赤くなつた瞳。全く余裕の感じられない鼓動。

それは年相応の感情の発露。今までどこか達観していた童磨の等身大の感情を初め

て見た気がした。

夜叉は童磨にとつての自分がどれほど大きい存在だったかをこの時知った。自分にとつての父や母、いや彼の境遇からしてそれ以上だと理解したのだ。

(……馬鹿じゃん。私はこんな可哀想な子を一人にしようとしてたんだ)

夜叉は手を伸ばして童磨を抱きしめる。

「ああ……? う……えあああ」

殴り飛ばされた後に抱き締められ、とんでもない顔になっている童磨。悲しみと喜びが入り交じり、ただわけも分からずとりあえず夜叉の背中に手を回す。

「すまない。私が悪かった」

「離れない?」

「……今はな」

(いつかは別れの時が来る。その時がきたらきつと離れていくのは私じゃなく、童磨の方だよ)

でも、今の彼はただの夜叉を求めている。強くない夜叉を求めている。彼女の存在が彼の中で大半を占め、不可欠になっている。それだけで夜叉の心に仄暗い感情が生まれ  
てくる。

それはまるで底無し奈落を見つめているような……

「もう少しだけ、こうしておいてやる。だから泣きやめ」  
「う……ん」

優しい言葉を紡ぐ彼女の瞳は少し濁っていた。